
蓮 田 市

雅楽谷遺跡Ⅱ

独立行政法人国立病院機構東埼玉病院筋ジス病棟更新築整備事業関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

2 0 0 5

独立行政法人 国立病院機構
財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団



雅楽谷遺跡遠景（南から）



環状盛土遺構周辺（南から）



雅樂谷遺跡全景



雅樂谷遺跡出土土器



雅樂谷遺跡出土土器



雅樂谷遺跡出土土偶



雅樂谷遺跡出土土偶

序

独立行政法人国立病院機構東埼玉病院は蓮田市黒浜に所在し、長年にわたり結核・呼吸器疾患、筋ジストロフィー、神経難病、重症心身障害の専門施設として、また近年ではH I V感染症の拠点医療機関として、重要な役割を果たしてきました。

この病院敷地内には雅楽谷遺跡が存在し、縄文時代後半のものとしては県内屈指の大遺跡であることが以前から知られておりました。昭和50・51年度には埼玉県遺跡調査会が三次にわたる発掘調査を行い、そのときの出土遺物の一部は、その重要性から県の指定文化財となっております。

このたび病棟の更新築工事が実施されることとなり、事業用地内に存在する埋蔵文化財の取扱いについては、関係機関が慎重に協議してまいりましたが、やむを得ず記録保存の処置を講ずることとなりました。

発掘調査は、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課の調整により、当事業団が国立病院機構東埼玉病院の委託を受けて実施いたしました。

今回の調査では縄文時代の環状盛土と呼ばれる遺構のほか、竪穴住居跡や土壇などを検出し、多くの土器や石器、土偶・耳飾りなどが出土しました。

特に、環状盛土遺構は、広い面積に及ぶ土地造成工事の跡であり、近年ようやくその存在が知られるようになったもので、全国的にも貴重な発掘調査事例となりました。

本書は、これらの成果をまとめたものであります。埋蔵文化財の保護や学術研究の基礎資料として、また、普及・啓発の資料および各教育機関の参考資料として広く活用していただければ幸いです。

本書の刊行にあたり、発掘調査に関する諸調整に御尽力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、発掘調査から報告書刊行に至るまで御協力いただきました国立病院機構東埼玉病院、蓮田市教育委員会並びに地元関係各位に対し深く感謝申し上げます。

平成17年3月

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 福田陽充

例 言

1. 本書は埼玉県蓮田市に所在する雅楽谷遺跡の発掘調査報告書である。

雅楽谷遺跡については、平成2年に「事業団報告書第93集 雅楽谷遺跡」を刊行している。

本報告書は雅楽谷遺跡第4次調査の報告であり、雅楽谷遺跡の調査報告としては2冊目にあたる。また、今次発掘調査の概要については、「情報 25」(埼玉考古学会・2004)に発表済みであるが、本報告書の内容が優先する。
2. 遺跡の略号と代表地番および発掘調査届けに対する指示通知は以下のとおりである。

雅楽谷遺跡(略号:UTY 遺跡番号:056)
第4次調査
埼玉県蓮田市黒浜4147他
平成15年11月14日付け教文第2919号
3. 発掘調査は、独立行政法人国立病院機構東埼玉病院筋ジス病棟更新築整備事業に伴う記録保存のための事前調査であり、埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課が調整し、埼玉県の委託を受けて、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 本事業は、第I章-3に示す組織により実施した。本事業のうち、発掘調査については中山雅彦・渡辺清志が担当し、平成15年12月15日から平成16年3月24日まで実施した。
5. 遺跡の基準点測量と航空写真は、中央航業株式会社に委託した。
6. 掲載した遺構写真は各調査担当者が、遺物写真は渡辺・成田友紀子が撮影した。
7. 本報告書の出土品の整理・図版の作成は、石器については上野真由美が、土偶については小野美代子が、土偶以外の土製品と中近世遺物については成田が行い、それ以外を渡辺が行った。
8. 本書の執筆は渡辺が行い、第I章1を埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課、第IV章1(7)の石器については上野が、第IV章1(7)の土偶については小野が、第IV章1(7)の土製品と第IV章2の中近世遺物を成田が行った。
9. 本書の編集は上野があたった。
10. 本書にかかる資料は、平成17年度以降、埼玉県立埋蔵文化財センターが管理・保管する。
11. 発掘調査から報告書の刊行まで下記の方々に御教示・ご協力を賜った。記して謝意を表します。

秋田かな子 猪瀬美奈子 江原 英 奥野 麦生
鈴木 徳雄 鈴木 正博 鈴木加津子 高橋龍三郎
富田 眞
蓮田市教育委員会
県立蓮田養護学校
埼玉県立博物館(敬称略)

凡 例

1. 遺跡全体図におけるX・Yの数値は、国土標準平面直角座標第IX系（原点：北緯36度00分00秒、東経139度00分00秒）に基く各座標値を示す。

また、各挿図における方位表示は、すべて座標北をあらわす。

2. 本書で扱うグリッドは、座標値X = -45.0、Y = -14250.0を原点とし、南東方向に10m×10mを単位として設定されている。呼称は、包含の北西隅の杭名称を用い、原点のA1より東方向にアラビア数字、南方向にアルファベットで指数が増加する方法をとった。

3. 本書における遺構の略号は次のとおりである。

竪穴住居跡・・・S J
竪穴状遺構・・・竪状
土壌・・・・・・・・SK
土器埋設遺構・・・埋
炉跡・・・・・・・・SX

4. 本書では、発掘調査時点で命名した呼称を、以下のとおり一部変更している。

新	旧
第1号竪穴状遺構	S J 1
第1号竪穴住居跡	S J 2
第2号竪穴状遺構	S J 3
第2号竪穴住居跡	S J 4
第1号土器埋設遺構	P-12 No. 5
第2号土器埋設遺構	P-11 Pit 3
第3号土器埋設遺構	Q-10-1 No. 1
第4号土器埋設遺構	Q-10 No. 3
第5号土器埋設遺構	S K 9

5. 測量・遺物実測図の縮尺は原則として以下のとおりである。

遺構

竪穴住居跡・・・・・・・・1/60

竪穴状遺構・・・・・・・・1/60

土壌・・・・・・・・1/30・1/60

土器埋設遺構・・・・・・・・1/30

炉跡・・・・・・・・1/60

ピット群・・・・・・・・1/80

遺物

縄文土器実測図・・・1/4

縄文土器拓影図・・・1/3

縄文土製品・・・・・・・・1/2

縄文石器実測図・・・2/3・1/3

中近世の遺物・・・・・・・・1/2・1/3

その他、遺跡位置図、周辺地形図、遺跡全体図、概念図等は、その都度スケールや縮尺率を表示した。

6. 測量図内の各種網掛け部表示は以下のとおりである。

・・・地山

・・・焼土

・・・攪乱

また、土器実測正面図・土製品実測図中の網掛けは赤彩部分、土器実測展開図中の網掛けは、縄文など地文を施文された範囲を示す。

その他、位置図・概念図・全体図等上の個別の色分けや強調については、必要に応じ表示している。

7. 本書に掲載した地形図等は、以下のものを適宜縮小して使用した。

第2図・・・蓮田市遺跡分布地図1/2, 500

白岡町遺跡分布地図1/2, 500

岩槻市遺跡分布地図1 1/2, 500

第3図・・・蓮田市都市計画図8 1/10, 000

また、第4図の等高線図は、前回報告書（橋本 1990）第II章の第2図をもとに作成した。

8. 文中の参考文献は（著者 刊行年度）の順で表示し、巻末に引用参考文献一覧表として掲載した。

目次

目次	第8号土壙	43
口絵	第10号土壙	45
序	第11号土壙	45
例言	第12号土壙	45
凡例	第13号土壙	45
目次	第14号土壙	45
I 発掘調査の概要	第15号土壙	46
1 調査に至る経過	第16号土壙	47
2 発掘調査・報告書作成の経過	第17号土壙	47
3 発掘調査・整理・報告書刊行の組織	(4) 土器埋設遺構	59
II 遺跡の立地と環境	第1号土器埋設遺構	59
1 地理的環境	第2号土器埋設遺構	59
2 歴史的環境	第3号土器埋設遺構	59
III 遺跡の概要	第4号土器埋設遺構	61
IV 発見された遺構と遺物	第5号土器埋設遺構	63
1 縄文時代の遺構と遺物	(5) 炉跡	64
(1) 竪穴住居跡	第1号炉跡	64
第1号竪穴住居跡	第2号炉跡	64
第2号竪穴住居跡	(6) ピット群	64
(2) 竪穴状遺構	(7) 遺構外出土遺物	71
第1号竪穴状遺構	土器	71
第2号竪穴状遺構	土製品	159
(3) 土壙	石器	172
第1号土壙	2 中近世の遺構と遺物	204
第2号土壙	陶磁器類	204
第3号土壙	瓦	204
第4号土壙	V まとめ	
第5号土壙	引用文献	
第6号土壙	抄録	
第7号土壙		

挿 図 目 次

第1図	埼玉県の地形	4	第36図	土壙(4)	46
第2図	周辺の遺跡	6	第37図	第16号土壙遺物出土状況	47
第3図	雅楽谷遺跡と周辺の地形	8	第38図	土壙出土土器(1)	48
第4図	環状盛土遺構平面図	11	第39図	土壙出土土器(2)	50
第5図	環状盛土遺構概念図	13	第40図	土壙出土土器(3)	51
第6図	調査区内盛土平面概念図	14	第41図	土壙出土土器(4)	52
第7図	盛土断面図	15	第42図	土壙出土土器(5)	54
第8図	雅楽谷遺跡全体図	16	第43図	土壙出土土器(6)	55
第9図	ローム断面図	17	第44図	土壙出土土器(7)	57
第10図	第1号竪穴住居跡	19	第45図	土壙出土土製品	58
第11図	第1号竪穴住居跡遺物出土状況(1)	20	第46図	土壙出土石器	58
第12図	第1号竪穴住居跡遺物出土状況(2)	21	第47図	土器埋設遺構	60
第13図	第1号竪穴住居跡出土遺物(1)	22	第48図	土器埋設遺構出土土器(1)	61
第14図	第1号竪穴住居跡出土遺物(2)	23	第49図	土器埋設遺構出土土器(2)	62
第15図	第2号竪穴住居跡	25	第50図	炉跡	63
第16図	第2号竪穴住居跡出土土器(1)	26	第51図	炉跡出土土器	64
第17図	第2号竪穴住居跡出土土器(2)	26	第52図	ピット群(1)	65
第18図	第1号竪穴状遺構	27	第53図	ピット群(2)	66
第19図	第1号竪穴状遺構遺物出土状況(1)	27	第54図	ピット群(3)	67
第20図	第1号竪穴状遺構遺物出土状況(2)	28	第55図	ピット群(4)	68
第21図	第1号竪穴状遺構出土土器(1)	29	第56図	ピット群(5)	69
第22図	第1号竪穴状遺構出土土器(2)	30	第57図	グリッド出土土器(1)	72
第23図	第1号竪穴状遺構出土土器(3)	31	第58図	グリッド出土土器(2)	73
第24図	第1号竪穴状遺構出土土器(4)	32	第59図	グリッド出土土器(3)	75
第25図	第2号竪穴状遺構	34	第60図	グリッド出土土器(4)	76
第26図	第2号竪穴状遺構遺物出土状況	35	第61図	グリッド出土土器(5)	77
第27図	第2号竪穴状遺構出土土器	36	第62図	グリッド出土土器(6)	79
第28図	第2号竪穴状遺構出土石器	37	第63図	グリッド出土土器(7)	80
第29図	土壙(1)	38	第64図	グリッド出土土器(8)	82
第30図	第1・2号土壙遺物出土状況	39	第65図	グリッド出土土器(9)	83
第31図	土壙(2)	40	第66図	グリッド出土土器(10)	84
第32図	第3号土壙遺物出土状況	41	第67図	グリッド出土土器(11)	85
第33図	第4号土壙遺物出土状況	42	第68図	グリッド出土土器(12)	86
第34図	土壙(3)	43	第69図	グリッド出土土器(13)	88
第35図	第13号土壙遺物出土状況	44	第70図	グリッド出土土器(14)	90

第71図	グリッド出土土器 (15)	91	第108図	グリッド出土土器 (52)	136
第72図	グリッド出土土器 (16)	93	第109図	グリッド出土土器 (53)	137
第73図	グリッド出土土器 (17)	94	第110図	グリッド出土土器 (54)	139
第74図	グリッド出土土器 (18)	95	第111図	グリッド出土土器 (55)	140
第75図	グリッド出土土器 (19)	96	第112図	グリッド出土土器 (56)	141
第76図	グリッド出土土器 (20)	97	第113図	グリッド出土土器 (57)	142
第77図	グリッド出土土器 (21)	99	第114図	グリッド出土土器 (58)	143
第78図	グリッド出土土器 (22)	100	第115図	グリッド出土土器 (59)	144
第79図	グリッド出土土器 (23)	101	第116図	グリッド出土土器 (60)	145
第80図	グリッド出土土器 (24)	102	第117図	グリッド出土土器 (61)	147
第81図	グリッド出土土器 (25)	103	第118図	グリッド出土土器 (62)	148
第82図	グリッド出土土器 (26)	104	第119図	グリッド出土土器 (63)	149
第83図	グリッド出土土器 (27)	105	第120図	グリッド出土土器 (64)	150
第84図	グリッド出土土器 (28)	107	第121図	グリッド出土土器 (65)	151
第85図	グリッド出土土器 (29)	108	第122図	グリッド出土土器 (66)	152
第86図	グリッド出土土器 (30)	109	第123図	グリッド出土土器 (67)	153
第87図	グリッド出土土器 (31)	110	第124図	グリッド出土土器 (68)	154
第88図	グリッド出土土器 (32)	111	第125図	グリッド出土土器 (69)	155
第89図	グリッド出土土器 (33)	112	第126図	グリッド出土土器 (70)	156
第90図	グリッド出土土器 (34)	113	第127図	グリッド出土土器 (71)	157
第91図	グリッド出土土器 (35)	114	第128図	グリッド出土土器 (72)	158
第92図	グリッド出土土器 (36)	116	第129図	グリッド出土土偶・土製品 (1)	160
第93図	グリッド出土土器 (37)	118	第130図	グリッド出土土偶・土製品 (2)	161
第94図	グリッド出土土器 (38)	119	第131図	グリッド出土土偶・土製品 (3)	162
第95図	グリッド出土土器 (39)	121	第132図	グリッド出土土偶・土製品 (4)	163
第96図	グリッド出土土器 (40)	122	第133図	グリッド出土土偶・土製品 (5)	165
第97図	グリッド出土土器 (41)	123	第134図	グリッド出土土偶・土製品 (6)	167
第98図	グリッド出土土器 (42)	124	第135図	グリッド出土土偶・土製品 (7)	168
第99図	グリッド出土土器 (43)	125	第136図	グリッド出土土偶・土製品 (8)	169
第100図	グリッド出土土器 (44)	127	第137図	グリッド出土土偶・土製品 (9)	170
第101図	グリッド出土土器 (45)	128	第138図	グリッド出土土偶・土製品 (10)	171
第102図	グリッド出土土器 (46)	129	第139図	グリッド出土土偶・土製品 (11)	171
第103図	グリッド出土土器 (47)	130	第140図	グリッド出土石器 (1)	173
第104図	グリッド出土土器 (48)	131	第141図	グリッド出土石器 (2)	174
第105図	グリッド出土土器 (49)	132	第142図	グリッド出土石器 (3)	176
第106図	グリッド出土土器 (50)	133	第143図	グリッド出土石器 (4)	177
第107図	グリッド出土土器 (51)	135	第144図	グリッド出土石器 (5)	178

第145図	グリッド出土石器 (6)	180	第156図	グリッド出土石器 (17)	194
第146図	グリッド出土石器 (7)	181	第157図	グリッド出土石器 (18)	195
第147図	グリッド出土石器 (8)	183	第158図	グリッド出土石器 (19)	196
第148図	グリッド出土石器 (9)	184	第159図	グリッド出土石器 (20)	197
第149図	グリッド出土石器 (10)	185	第160図	グリッド出土石器 (21)	198
第150図	グリッド出土石器 (11)	186	第161図	中近世出土遺物	204
第151図	グリッド出土石器 (12)	188	第162図	雅楽谷遺跡集落変遷図	206
第152図	グリッド出土石器 (13)	189	第163図	土壙集成図	208
第153図	グリッド出土石器 (14)	190	第164図	雅楽谷遺跡出土土器 (抜粋)	211
第154図	グリッド出土石器 (15)	191	第165図	石神貝塚第13次調査包含層	212
第155図	グリッド出土石器 (16)	192			

目 次

第1表	周辺遺跡一覧表	5
第2表	第1号竪穴住居跡 柱穴計測表	18
第3表	第2号竪穴住居跡 柱穴計測表	24
第4表	第2号竪穴状遺構 柱穴計測表	34
第5表	ピット群計測表	70
第6表	グリッド出土石器計測表 (1)	199
第7表	グリッド出土石器計測表 (2)	200
第8表	グリッド出土石器計測表 (3)	201
第9表	グリッド出土石器計測表 (4)	202
第10表	グリッド出土石器計測表 (5)	203

写真図版目次

図版 1	環状盛土遺構全景	〇-10グリッド遺物出土状況
図版 2	雅楽谷遺跡遠景	〇-10グリッド遺物出土状況
	調査区全景	〇-10グリッド遺物出土状況
図版 3	盛土遺構表面露出状況	〇-10グリッド遺物出土状況
	盛土状遺構東西断面	図版11 〇-10グリッド遺物出土状況
	盛土状遺構南北断面	〇-11グリッド遺物出土状況
図版 4	第1号竪穴状遺構	〇-11グリッド遺物出土状況
	第1号竪穴状遺構検出状況	〇-12グリッド遺物出土状況
	第1号竪穴状遺構遺物出土状況	〇-12グリッド遺物出土状況
図版 5	第1号竪穴住居跡	〇-12グリッド遺物出土状況
	第1号竪穴住居跡炉跡	図版12 〇-12グリッド遺物出土状況
	第1号竪穴住居跡遺物出土状況	〇-12グリッド遺物出土状況
図版 6	第2号竪穴住居跡	〇-12グリッド遺物出土状況
	第1号土器埋設遺構(上面)	〇-12グリッド遺物出土状況
	第1号土器埋設遺構(下面)	〇-12グリッド遺物出土状況
図版 7	第2号土器埋設遺構	〇-12グリッド遺物出土状況
	第3・4号土器埋設遺構検出状況	図版13 〇-8グリッド遺物出土状況
	第3・4号土器埋設遺構断面	P-9グリッド遺物出土状況
	第3・4号土器埋設遺構掘方	P-9グリッド遺物出土状況
	第4号土器埋設遺構(上面)	P-10グリッド遺物出土状況
	第5号土器埋設遺構(下面)	P-10グリッド遺物出土状況
図版 8	第1号土壙	P-10グリッド遺物出土状況
	第2号土壙	図版14 P-10グリッド遺物出土状況
	第3号土壙	P-11グリッド遺物出土状況
	第4号土壙	P-11グリッド遺物出土状況
	第13号土壙	P-12グリッド遺物出土状況
	第13号土壙遺物出土状況	Q-7グリッド遺物出土状況
図版 9	第14号土壙	P・Qグリッド遺物出土状況
	第16号土壙	図版15 Q-7グリッド遺物出土状況
	第16号土壙遺物出土状況	Q-8グリッド遺物出土状況
	第17号土壙	Q-8グリッド遺物出土状況
	第18号土壙	Q-10グリッド遺物出土状況
	第1号炉跡	Q-10グリッド遺物出土状況
図版10	〇-10グリッド遺物出土状況	Q-12グリッド遺物出土状況
	〇-10グリッド遺物出土状況	図版16 第1号竪穴住居跡出土遺物(第13図1)

	第1号竪穴住居跡出土遺物 (第13図2)		グリッド出土土器 (第62図121)
	第1号竪穴住居跡出土遺物 (第13図3)		グリッド出土土器 (第62図122)
	第1号竪穴住居跡出土遺物 (第13図4)		グリッド出土土器 (第62図123)
	第2号竪穴住居跡出土遺物 (第16図1)		グリッド出土土器 (第62図124)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図1)	図版23	グリッド出土土器 (第62図125)
図版17	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図2)		グリッド出土土器 (第62図126)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図3)		グリッド出土土器 (第62図127)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図4)		グリッド出土土器 (第62図128)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図5)		グリッド出土土器 (第62図129)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第21図6)		グリッド出土土器 (第62図130)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第22図13)	図版24	グリッド出土土器 (第62図131)
図版18	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第22図14)		グリッド出土土器 (第62図132)
	第1号竪穴状遺構出土遺物 (第22図15)		グリッド出土土器 (第63図133)
	第3号土壙出土土器 (第38図1)		グリッド出土土器 (第63図134)
	第4号土壙出土土器 (第38図2)		グリッド出土土器 (第63図135)
	第4号土壙出土土器 (第38図3)		グリッド出土土器 (第63図136)
	第13号土壙出土土器 (第38図4)	図版25	グリッド出土土器 (第63図137)
図版19	第16号土壙出土土器 (第39図5)		グリッド出土土器 (第63図138)
	第16号土壙出土土器 (第39図6)		グリッド出土土器 (第63図139)
	第16号土壙出土土器 (第39図7)		グリッド出土土器 (第63図140)
	第16号土壙出土土器 (第39図8)		グリッド出土土器 (第63図141)
	土壙出土土製品 (第45図)		グリッド出土土器 (第63図142)
	土壙出土土製品 (第45図背面)	図版26	グリッド出土土器 (第63図143)
図版20	第1号土器埋設遺構出土土器 (第48図1)		グリッド出土土器 (第68図256)
	第2号土器埋設遺構出土土器 (第48図2)		グリッド出土土器 (第68図257)
	第4号土器埋設遺構出土土器 (第49図3)		グリッド出土土器 (第68図258)
	第3号土器埋設遺構出土土器 (第49図4)		グリッド出土土器 (第68図259)
	第5号土器埋設遺構出土土器 (第49図5)		グリッド出土土器 (第68図260)
	グリッド出土土器 (第57図32)	図版27	グリッド出土土器 (第68図261)
図版21	グリッド出土土器 (第58図33)		グリッド出土土器 (第68図262)
	グリッド出土土器 (第58図34)		グリッド出土土器 (第68図263)
	グリッド出土土器 (第58図35)		グリッド出土土器 (第68図264)
	グリッド出土土器 (第58図36)		グリッド出土土器 (第68図265)
	グリッド出土土器 (第58図37)		グリッド出土土器 (第68図266)
	グリッド出土土器 (第58図37)	図版28	グリッド出土土器 (第68図267)
図版22	グリッド出土土器 (第62図119)		グリッド出土土器 (第68図268)
	グリッド出土土器 (第62図120)		グリッド出土土器 (第69図269)

- | | | | |
|------|--------------------|------|--------------------|
| | グリッド出土土器 (第69図270) | | グリッド出土土器 (第79図439) |
| | グリッド出土土器 (第69図271) | | グリッド出土土器 (第79図440) |
| | グリッド出土土器 (第69図272) | | グリッド出土土器 (第79図441) |
| 図版29 | グリッド出土土器 (第69図273) | 図版35 | グリッド出土土器 (第79図442) |
| | グリッド出土土器 (第69図274) | | グリッド出土土器 (第79図443) |
| | グリッド出土土器 (第69図275) | | グリッド出土土器 (第80図444) |
| | グリッド出土土器 (第69図276) | | グリッド出土土器 (第80図445) |
| | グリッド出土土器 (第69図277) | | グリッド出土土器 (第80図446) |
| | グリッド出土土器 (第69図278) | 図版36 | グリッド出土土器 (第80図447) |
| 図版30 | グリッド出土土器 (第69図279) | | グリッド出土土器 (第80図448) |
| | グリッド出土土器 (第69図280) | | グリッド出土土器 (第80図449) |
| | グリッド出土土器 (第69図281) | | グリッド出土土器 (第80図450) |
| | グリッド出土土器 (第76図414) | | グリッド出土土器 (第80図451) |
| | グリッド出土土器 (第76図415) | | グリッド出土土器 (第80図452) |
| | グリッド出土土器 (第76図416) | 図版37 | グリッド出土土器 (第80図453) |
| 図版31 | グリッド出土土器 (第76図417) | | グリッド出土土器 (第80図454) |
| | グリッド出土土器 (第76図418) | | グリッド出土土器 (第81図455) |
| | グリッド出土土器 (第77図419) | | グリッド出土土器 (第81図456) |
| | グリッド出土土器 (第77図420) | | グリッド出土土器 (第81図457) |
| | グリッド出土土器 (第77図421) | | グリッド出土土器 (第81図458) |
| | グリッド出土土器 (第77図422) | 図版38 | グリッド出土土器 (第81図459) |
| 図版32 | グリッド出土土器 (第77図423) | | グリッド出土土器 (第81図460) |
| | グリッド出土土器 (第77図424) | | グリッド出土土器 (第81図461) |
| | グリッド出土土器 (第77図425) | | グリッド出土土器 (第81図462) |
| | グリッド出土土器 (第78図426) | | グリッド出土土器 (第81図463) |
| | グリッド出土土器 (第78図427) | | グリッド出土土器 (第81図464) |
| | グリッド出土土器 (第78図428) | 図版39 | グリッド出土土器 (第81図465) |
| 図版33 | グリッド出土土器 (第78図429) | | グリッド出土土器 (第81図466) |
| | グリッド出土土器 (第78図430) | | グリッド出土土器 (第81図467) |
| | グリッド出土土器 (第78図431) | | グリッド出土土器 (第90図570) |
| | グリッド出土土器 (第78図432) | | グリッド出土土器 (第90図571) |
| | グリッド出土土器 (第78図433) | | グリッド出土土器 (第90図572) |
| | グリッド出土土器 (第78図434) | 図版40 | グリッド出土土器 (第90図573) |
| 図版34 | グリッド出土土器 (第79図435) | | グリッド出土土器 (第90図574) |
| | グリッド出土土器 (第79図436) | | グリッド出土土器 (第90図576) |
| | グリッド出土土器 (第79図437) | | グリッド出土土器 (第90図577) |
| | グリッド出土土器 (第79図438) | | グリッド出土土器 (第90図578) |

- | | | | |
|------|----------------------|------|----------------------|
| | グリッド出土土器 (第96図653) | | グリッド出土土器 (第117図1022) |
| | グリッド出土土器 (第96図654) | | グリッド出土土器 (第117図1023) |
| | グリッド出土土器 (第106図832) | | グリッド出土土器 (第117図1024) |
| | グリッド出土土器 (第106図833) | | グリッド出土土器 (第117図1025) |
| | グリッド出土土器 (第106図834) | 図版60 | グリッド出土土器 (第117図1026) |
| 図版54 | グリッド出土土器 (第106図835) | | グリッド出土土器 (第117図1027) |
| | グリッド出土土器 (第106図835) | | グリッド出土土器 (第117図1028) |
| | グリッド出土土器 (第106図836) | | グリッド出土土器 (第118図1029) |
| | グリッド出土土器 (第106図837) | | グリッド出土土器 (第118図1030) |
| | グリッド出土土器 (第106図838) | | グリッド出土土器 (第118図1031) |
| | グリッド出土土器 (第106図839) | 図版61 | グリッド出土土器 (第118図1032) |
| 図版55 | グリッド出土土器 (第106図840) | | グリッド出土土器 (第118図1033) |
| | グリッド出土土器 (第106図841) | | グリッド出土土器 (第118図1034) |
| | グリッド出土土器 (第110図914) | | グリッド出土土器 (第118図1035) |
| | グリッド出土土器 (第110図915) | | グリッド出土土器 (第118図1036) |
| | グリッド出土土器 (第110図916) | | グリッド出土土器 (第118図1037) |
| | グリッド出土土器 (第110図917) | 図版62 | グリッド出土土器 (第118図1038) |
| 図版56 | グリッド出土土器 (第110図918) | | グリッド出土土器 (第118図1039) |
| | グリッド出土土器 (第110図920) | | グリッド出土土器 (第119図1040) |
| | グリッド出土土器 (第110図919) | | グリッド出土土器 (第119図1041) |
| | グリッド出土土器 (第110図919) | | グリッド出土土器 (第119図1042) |
| | グリッド出土土器 (第110図921) | | グリッド出土土器 (第119図1043) |
| | グリッド出土土器 (第110図922) | 図版63 | グリッド出土土器 (第119図1044) |
| 図版57 | グリッド出土土器 (第110図923) | | グリッド出土土器 (第119図1045) |
| | グリッド出土土器 (第111図924) | | グリッド出土土器 (第119図1046) |
| | グリッド出土土器 (第111図925) | | グリッド出土土器 (第119図1047) |
| | グリッド出土土器 (第111図926) | | グリッド出土土器 (第119図1048) |
| | グリッド出土土器 (第111図927) | | グリッド出土土器 (第119図1049) |
| | グリッド出土土器 (第111図928) | 図版64 | グリッド出土土器 (第119図1050) |
| 図版58 | グリッド出土土器 (第111図929) | | グリッド出土土器 (第119図1051) |
| | グリッド出土土器 (第111図930) | | グリッド出土土器 (第120図1052) |
| | グリッド出土土器 (第111図931) | | グリッド出土土器 (第120図1053) |
| | グリッド出土土器 (第117図1017) | | グリッド出土土器 (第120図1054) |
| | グリッド出土土器 (第117図1018) | | グリッド出土土器 (第120図1055) |
| | グリッド出土土器 (第117図1019) | 図版65 | グリッド出土土器 (第120図1056) |
| 図版59 | グリッド出土土器 (第117図1020) | | グリッド出土土器 (第120図1057) |
| | グリッド出土土器 (第117図1021) | | グリッド出土土器 (第120図1058) |

- グリッド出土土偶土製品 (第132図15背面)
- 図版78 グリッド出土土偶土製品 (第136図61)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図62俯瞰)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図63)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図62正面)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図64)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図65)
- 図版79 グリッド出土土偶土製品 (第136図66)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図67)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図68)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図69)
 グリッド出土土偶土製品 (第136図70)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図72)
- 図版80 グリッド出土土偶土製品 (第137図71正面)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図71俯瞰)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図73)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図74)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図75・76)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図79)
- 図版81 グリッド出土土偶土製品 (第137図77)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図78)
 グリッド出土土偶土製品 (第138図81)
 グリッド出土土偶土製品 (第137図80)
 グリッド出土土偶土製品 (第138図81背面)
 中・近世出土遺物 (第161図1)
- 図版82 第1号竪穴住居跡出土遺物 (第14図)
 第1号竪穴住居跡出土遺物 (第14図)
- 図版83 第2号竪穴住居跡出土遺物 (第17図)
 第2号竪穴住居跡出土遺物 (第17図)
- 図版84 第1号竪穴状遺構出土遺物 (第23図)
 第1号竪穴状遺構出土遺物 (第23図)
- 図版85 第1号竪穴状遺構出土遺物 (第24図)
 第2号竪穴状遺構出土遺物 (第27図)
- 図版86 第2号竪穴状遺構出土遺物 (第27図)
 土壙出土土器 (第40図)
- 図版87 土壙出土土器 (第41図)
 土壙出土土器 (第41図)
- 図版88 土壙出土土器 (第42図)
 土壙出土土器 (第42図)
- 図版89 土壙出土土器 (第43図)
 土壙出土土器 (第43図)
- 図版90 土壙出土土器 (第44図)
 土壙出土土器 (第44図)
- 図版91 炉跡出土土器 (第51図)
 グリッド出土土器 (第57図)
- 図版92 グリッド出土土器 (第57図13・14)
 グリッド出土土器 (第57図)
- 図版93 グリッド出土土器 (第59図)
 グリッド出土土器 (第59図)
- 図版94 グリッド出土土器 (第60図)
 グリッド出土土器 (第60図)
- 図版95 グリッド出土土器 (第61図)
 グリッド出土土器 (第61図)
- 図版96 グリッド出土土器 (第64図)
 グリッド出土土器 (第64図)
- 図版97 グリッド出土土器 (第65図)
 グリッド出土土器 (第65図179・181)
- 図版98 グリッド出土土器 (第65図)
 グリッド出土土器 (第66図)
- 図版99 グリッド出土土器 (第66図)
 グリッド出土土器 (第67図)
- 図版100 グリッド出土土器 (第67図)
 グリッド出土土器 (第70図)
- 図版101 グリッド出土土器 (第70図)
 グリッド出土土器 (第71図)
- 図版102 グリッド出土土器 (第71図)
 グリッド出土土器 (第72図)
- 図版103 グリッド出土土器 (第72図)
 グリッド出土土器 (第73図)
- 図版104 グリッド出土土器 (第73図)
 グリッド出土土器 (第74図)
- 図版105 グリッド出土土器 (第74図)
 グリッド出土土器 (第75図)
- 図版106 グリッド出土土器 (第75図)

- グリッド出土土器 (第82図)
- 図版107 グリッド出土土器 (第82図)
グリッド出土土器 (第83図)
- 図版108 グリッド出土土器 (第83図)
グリッド出土土器 (第83図)
- 図版109 グリッド出土土器 (第84図)
グリッド出土土器 (第84図)
- 図版110 グリッド出土土器 (第85図523・524)
グリッド出土土器 (第85図525～528)
- 図版111 グリッド出土土器 (第86図529～531)
グリッド出土土器 (第86図)
- 図版112 グリッド出土土器 (第87図)
グリッド出土土器 (第87図)
- 図版113 グリッド出土土器 (第88図)
グリッド出土土器 (第88図)
- 図版114 グリッド出土土器 (第89図)
グリッド出土土器 (第89図)
- 図版115 グリッド出土土器 (第90図575)
グリッド出土土器 (第98図)
- 図版116 グリッド出土土器 (第98図)
グリッド出土土器 (第99図)
- 図版117 グリッド出土土器 (第99図)
グリッド出土土器 (第100図)
- 図版118 グリッド出土土器 (第100図)
グリッド出土土器 (第101図)
- 図版119 グリッド出土土器 (第101図)
グリッド出土土器 (第102図)
- 図版120 グリッド出土土器 (第102図)
グリッド出土土器 (第103図)
- 図版121 グリッド出土土器 (第103図)
グリッド出土土器 (第104図)
- 図版122 グリッド出土土器 (第104図)
グリッド出土土器 (第105図)
- 図版123 グリッド出土土器 (第105図)
グリッド出土土器 (第107図)
- 図版124 グリッド出土土器 (第107図)
グリッド出土土器 (第108図)
- 図版125 グリッド出土土器 (第109図)
グリッド出土土器 (第109図)
- 図版126 グリッド出土土器 (第112図)
グリッド出土土器 (第112図)
- 図版127 グリッド出土土器 (第113図)
グリッド出土土器 (第113図)
- 図版128 グリッド出土土器 (第114図)
グリッド出土土器 (第114図)
- 図版129 グリッド出土土器 (第115図)
グリッド出土土器 (第116図)
- 図版130 グリッド出土土器 (第123図)
グリッド出土土器 (第123図)
- 図版131 グリッド出土土器 (第124図)
グリッド出土土器 (第124図)
- 図版132 グリッド出土土器 (第125図)
グリッド出土土器 (第125図)
- 図版133 グリッド出土土器 (第126図)
グリッド出土土器 (第126図)
- 図版134 グリッド出土土器 (第128図)
グリッド出土土器偶土製品 (第133図)
- 図版135 グリッド出土土器偶土製品 (第133図)
グリッド出土土器偶土製品 (第134図)
- 図版136 グリッド出土土器偶土製品 (第134図)
グリッド出土土器偶土製品 (第135図)
- 図版137 グリッド出土土器偶土製品 (第139図)
遺構内出土石器 (第21図・28図・46図)
- 図版138 遺構内出土石器
(第13図・21図・28図・46図)
グリッド出土石器 (第140図)
- 図版139 グリッド出土石器 (第140図・141図)
グリッド出土石器 (第141図)
- 図版140 グリッド出土石器 (第142図)
グリッド出土石器 (第143図)
- 図版141 グリッド出土石器 (第143・144図)
グリッド出土石器 (第144図)
- 図版142 グリッド出土石器 (第145図)
グリッド出土石器 (第145・146図)

図版143 グリッド出土石器 (第147図・148図)
グリッド出土石器 (第147図)
図版144 グリッド出土石器 (第148・149図)
グリッド出土石器 (第149・150図)
図版145 グリッド出土石器 (第151図)
グリッド出土石器 (第152・153図)
図版146 グリッド出土石器 (第153図)
グリッド出土石器 (第154図198)
図版147 グリッド出土石器 (第154図199・200)
グリッド出土石器
(第154図201・202第155図209)

図版148 グリッド出土石器 (第156図)
グリッド出土石器 (第157図226)
図版149 グリッド出土石器 (第157図228)
グリッド出土石器 (第157図229・230)
図版150 グリッド出土石器 (第158図)
グリッド出土石器 (第159図238・239)
図版151 グリッド出土石器 (第160図)
中近世出土遺物 (第161図)

I 発掘調査の概要

1. 調査に至る経過

雅楽谷遺跡は環状盛土遺構を中心とする縄文時代の集落跡であり、周知の埋蔵文化財包蔵地として埼玉県遺跡台帳に登録されている。遺跡に係る現在の県立蓮田養護学校は、校舎新設に先立って、昭和50～51年に県遺跡調査会による発掘調査が行われ、記録保存の措置がとられている。

今回発掘調査の対象となった地点は、蓮田市大字黒浜4147番地を中心とする2195㎡であり、独立行政法人国立病院機構東埼玉病院による筋ジス病棟更新築整備工事に伴うものである。

当工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについては、独立行政法人国立病院機構東埼玉病院長（当時の名称は国立療養所東埼玉病院）より、当該自治体である蓮田市教育委員会に対し、平成15年10月2日付けで埋蔵文化財の照会があった。

これに対して蓮田市教育委員会は当該工事が国の機関によるものであることから、直ちに埼玉県教育委員会と協議するとともに、平成15年10月3日に実施した。確認調査の結果、現地表下15cmから縄文時代の環状盛土遺構が確認されたため、蓮田市教育委員会では平成15年10月8日付け教社文第581号で埋蔵文化財の取扱いについて次のように回答した。

- 1 対象地番 蓮田市大字黒浜4147番地他
- 2 遺跡の名称等 雅楽谷遺跡 (No.82-056)
- 3 取扱い 発掘調査

工事に先立つ発掘調査では埼玉県教育委員会と事前協議を行う旨、回答した。平成15年10月15日から埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課と国立病院機構東埼玉病院との事前協議が開始され、発掘調査については財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施機関としてあたることとし、事業団、東埼玉病院、文化財保護課の三者により、調査方法、調査期間、経費等についての協議が行われた。その結果、平成15年12月1日から平成16年3月24日まで実施された。

なお、独立行政法人国立病院機構東埼玉病院長から文化財保護法第57条の3の規定による埋蔵文化財発掘通知が提出され、調査に先立ち、第57条1頁の規定による発掘調査届が財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から提出された。

発掘調査届に対する指示通知は、次のとおりである。

平成16年1月9日付け 教文第2-85号

(文化財保護課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は平成15年12月15日から平成16年3月24日まで実施した。

平成15年12月上旬、雅楽谷遺跡発掘調査に関わる事務手続きを開始した。

中旬には発掘調査事務所を設置し、発掘器材を搬入した。12月中旬、発掘区域内に存在する樹木の伐採・撤去ならびに表土除去作業を開始した。

12月下旬には全体の表土除去を完了し、測量のための基準点測量を行った。

この時点で盛土遺構上面の地形測量と、掘削開始前の全景写真撮影を行った。

年が明けて平成16年1月上旬、人力による盛土遺構の掘削作業を開始した。盛土遺構中からは連日多量の遺物が出土し、一日の遺物出土量が遺物収納用コンテナに10杯を超えることすらあった。

2月中旬、部分的に盛土の掘削が完了し、ローム層の上面が露出しはじめた。この時点で竪穴住居跡・土壇等多数の遺構が検出された。2月下旬、遺構調査を開始した。

3月14日、遺跡の重要性に鑑み、発掘調査の成果を周知し埋蔵文化財への理解を深めるための現地説明会が開催された。また、これに前後して蓮田養護学校からの依頼により、学校の生徒・児童を対象としたミニ現説や、出前授業等も実施した。

3月中旬、盛土の掘削を完了、全体の地形測量とローム層中の遺物の有無を確認するための試掘を行った。

3月下旬、遺構の調査を完了した。個別の遺構の測量・写真撮影を行った後、セスナ機による空中写真撮影を実施した。

その後危険回避のための部分的な埋戻し作業を行い、発掘事務所を撤去、3月末までに全ての事務処理を完了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書作成は、平成16年4月8日から平成17年3月24日まで実施した。

平成16年4月上旬から、出土遺物の水洗・註記を行い、土器の接合・復元作業を開始した。また、石器については分類と計測作業を行った。

これらと並行して、発掘調査時に測量した遺構実測図の整理と、第二原図の作成を行った。

5月上旬、接合・復元が終了した土器から順次、実測を開始した。遺構図は二次原図化できたものから、スキャナーで読み込んだデータをもとに、パソコンによるデジタルトレースを行い、遺構図版の作成を開始した。

6月上旬、分類・計測の終了した石器の中から図化するものを選び出し、実測を開始した。また、土器の破片資料の選別と採拓・断面を開始した。同下旬、遺物実測図のトレースを開始した。

8月上旬、遺構図版のデジタルトレースを完了し、本文執筆のための予備的データを作成した。また、発掘調査時に撮影した写真類の整理を行い、選別・紙焼き・トリミングを行い、割付けを作成した。

10月上旬、土器の復元作業を完了した。同下旬には土器の実測をほぼ完了し、トレースと並行して遺物図版の仮組み作業を開始した。

11月上旬、遺物図版のレイアウト等と並行して、各遺構に関する事実記載を開始した。同下旬、遺物写真を撮影し、現像・紙焼き・トリミングを行い、写真図版のレイアウトを開始した。

12月上旬、全体の割付けをほぼ完成し、遺物に関する事実記載を開始した。

平成17年1月中旬、すべての図版・写真・原稿の作成作業を継続・完了し、入稿した。また、遺物・図版・写真類の整理・梱包・収納作業を開始した。

2月から3月にかけて3回にわたる校正作業を終え、3月末までに報告書を印刷、刊行した。

3. 発掘調査・整理・報告書刊行の組織

主体者 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

(1) 発掘調査 (平成15年度)

理事長 桐川卓雄
副理事長 飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長 中村英樹

(管理部)

副部長 村田健二
主席 田中由夫
主任 江田和美
主任 長滝美智子
主任 福田昭美
主任 腰塚雄二
主任 菊池久

(調査部)

調査部長 宮崎朝雄
調査部副部長 坂野和信
主席調査員 (調査第一担当) 昼間孝志
主任調査員 中山雅彦
主任調査員 渡辺清志

(2) 整理・報告書刊行 (平成16年度)

理事長 福田陽充
副理事長 飯塚誠一郎
常務理事兼管理部長 中村英樹

(管理部)

副部長 村田健二
主席 田中由夫
主任 長滝美智子
主任 福田昭美
主任 菊池久
主任 石原良子
主任 海老名健

(調査部)

調査部長 宮崎朝雄
調査部副部長 坂野和信
主席調査員 (資料整理担当) 金子直行
主任調査員 上野真由美
主任調査員 渡辺清志

II 遺跡の立地と環境

大宮台地の東半部は、元荒川、芝川、綾瀬川、鴨川等の河川によって北西－南東方向に幾重にも開析され、指扇、大和田、片柳、蓮田、岩槻、黒浜、慈恩寺等のいくつかの支台へと分けられている。

これらのうち、(1) 雅楽谷遺跡が所在するのは白岡支台のほぼ中央部、南の元荒川筋から入込む谷の最奥部にあたっている。

雅楽谷遺跡の立地については次章で詳しく述べることとして、以下、雅楽谷遺跡周辺に所在する遺跡について、今次報告書と関わる縄文時代後晩期に限って記述していくこととする。

(17) 前田遺跡は白岡支台東縁に位置し、雅楽谷遺跡とは尾根を挟んで正反対に位置しており、距離的にも約700m程度しか離れていない。

前田遺跡は、日川筋から西の白岡支台へと入込む小谷の奥部北岸に所在し、その広がり低地部分ま

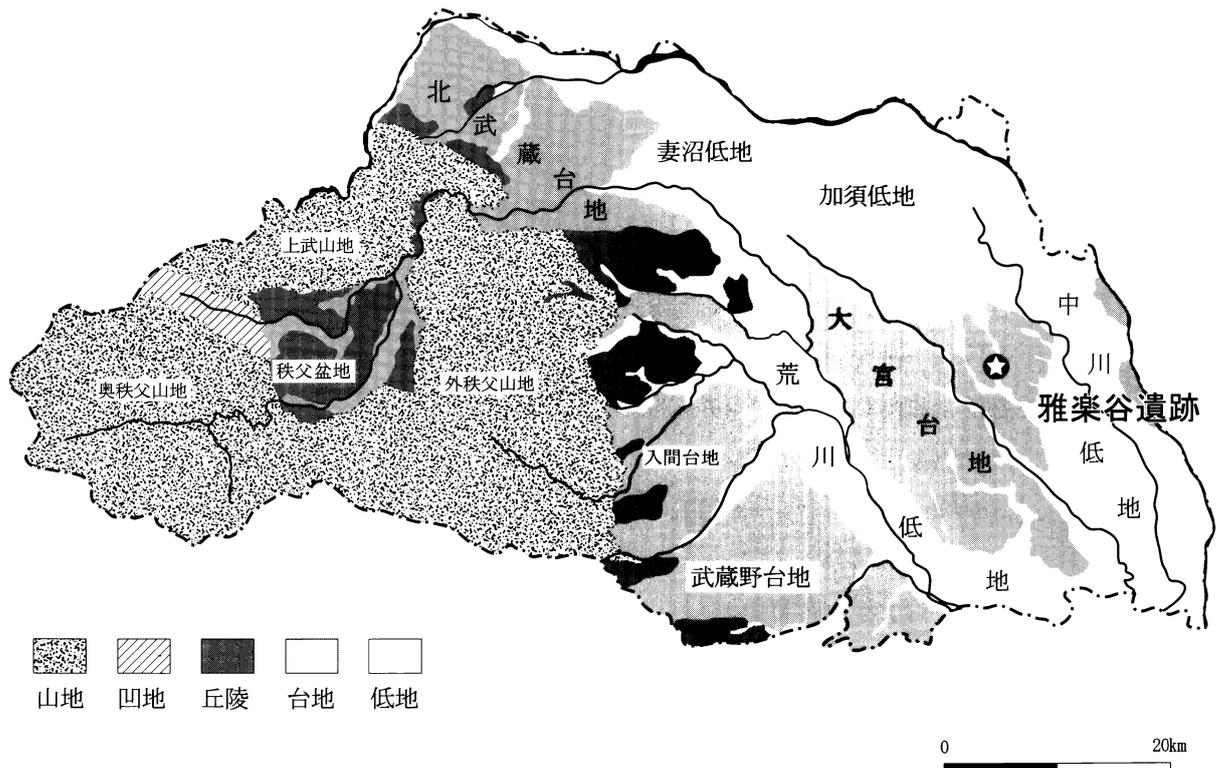
で含めると80,000㎡に及ぶと考えられている広大な遺跡である。

時期は縄文晩期中葉を主体とし、白岡町教育委員会による発掘調査では土壌群と盛土遺構の可能性のある遺物包含層の存在が明らかになっている。

前田遺跡から谷を挟んで約1.5km東の慈恩寺支台上には(20) 清左衛門遺跡が存在する。清左衛門遺跡は慈恩寺支台北部の最も細く括れた部分に位置し、日川筋から入込む小谷の奥に所在する。平成15年度の発掘調査では安行1～3a式期の集落と埋没谷が検出され、特に谷の埋没状況について人為的な関与が推定された。また、県内で類例の少ない石冠がまとまって出土したことが話題となった。

慈恩寺支台における後晩期の遺跡分布も台地奥部に偏る傾向がみられる。

清左衛門遺跡の所在する台地北縁部では、いくつ



第1図 埼玉県の地形

かの谷筋によって台地が東西に開析されている。これらの谷に沿って、小規模ながら該期の遺跡が分布している。

中でも(18)土橋山遺跡は、未調査ながらその遺物の多さから、後期前葉を中心とした拠点的な遺跡である可能性が指摘されている。

より南の台地中央部でも、南東側から深く台地を開析する谷の奥部に大規模な遺跡が形成される。

雅楽谷遺跡・前田遺跡の対岸には後期初頭～前葉の集落跡が調査された(21)裏慈恩寺東遺跡、後晩期の集落跡が調査され、谷部分に晩期の泥炭層の存在が明らかになった(22)裏慈恩寺遺跡が存在する。

雅楽谷・前田の両遺跡がある白岡支台は、東縁で日川低地をはさんで慈恩寺支台に向き合う一方、西縁で元荒川をはさんで蓮田・岩槻支台と対峙している。そしてこの支台における縄文時代の遺跡の立地は、東西で対照的なありかたを示している。

すなわち、日川筋の谷に面した該期の遺跡が、多く本流から分岐した谷の奥部に位置するのに対し、元荒川側の遺跡は谷の本流からさほど入込まない台地縁辺付近に占地する傾向が見て取れる。

白岡支台の最北部元荒川沿いには、やはり後晩期

の遺跡である(12)入郷地遺跡と(13)正福院貝塚が存在している。

同じ台地縁辺には縄文時代前期および後期の遺跡が集中しており、本流の谷からわずかに入込む小谷をとりまくようにして遺跡が分布しているようだ。

入郷地・正福院貝塚の両遺跡は本来一体の遺跡と考えることができ、両者にまたがる環状盛土遺構の存在が想定されている。

開発による地形の変更が激しいため規模や形状は明らかでないが、盛土が最も良く残存しているのは正福院の参道東側の植栽部分である。地表面に多量の遺物が露出し、土器塚の様相を呈している。散布する遺物の時期はいずれも縄文時代後期～晩期である。また、入郷地部分については昭和26年に國學院大學考古学会による学術調査が実施され、炉跡等が検出されている。

元荒川右岸の蓮田支台上にも縄文時代前期・後期を主体とする遺跡が多数存在している。

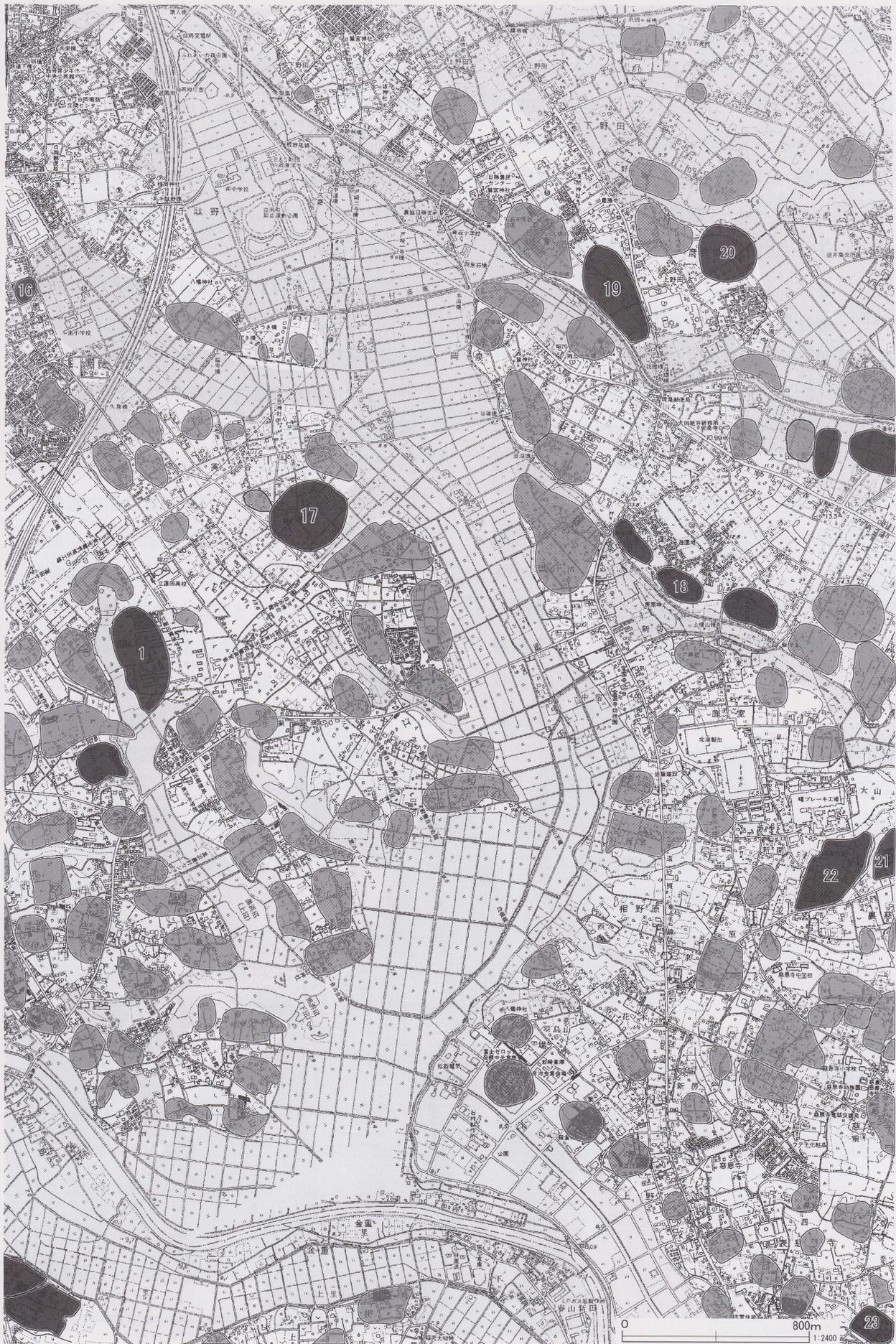
(2)久台遺跡は元荒川と見沼代用水の谷の間隔が最も狭まった部分の台地東縁辺に位置する。昭和57年度の調査では縄文時代後期初頭～前葉の大規模な集落跡が検出された。

第1表 周辺遺跡一覧表

	市町村	遺 跡 名	所 在	時 期
1	蓮 田	雅楽谷		
2	蓮 田	久台	蓮田市東二丁目	称名寺～安行3c
3	蓮 田	馬込八番	蓮田市大字馬込	堀之内1・2
4	蓮 田	根金大山	蓮田市大字根金字大山	堀之内1・2
5	蓮 田	八幡溜	蓮田市大字蓮田字桑原	堀之内1
6	蓮 田	宮ノ前	蓮田市御前橋一丁目	堀之内1・2
7	蓮 田	椿山	蓮田市大字黒浜字椿山	堀之内2
8	蓮 田	帆立山	蓮田市大字馬込字八番	堀之内2～加曾利B
9	蓮 田	黒浜拾九町	蓮田市大字黒浜字拾九町	加曾利B
10	蓮 田	ささらII	蓮田市東二丁目	加曾利B～大洞A
11	白 岡	新屋敷	白岡町白岡山	堀之内
12	白 岡	入郷地	白岡町白岡茶屋	後期～晩期前半
13	白 岡	正福院貝塚	白岡町白岡茶屋	早期～晩期
14	白 岡	白岡東	白岡町白岡東	早期・前期・後期前半
15	白 岡	七カマド	白岡町白岡東下谷	後期前半
16	白 岡	神辺	白岡町白岡東下谷	後期
17	白 岡	前田	夷ヶ谷前田・東・寺裏	安行3c主体
18	白 岡	土橋山	白岡町太田新井土橋山	堀之内
19	白 岡	清左衛門	白岡町彦兵衛清左衛門	後期前半～晩期終末
20	白 岡	下小笠原	白岡町彦兵衛下小笠原	加曾利E～堀之内
21	岩 槻	裏慈恩寺東遺跡	岩槻市大字裏慈恩寺字貝塚	中期～後期前半
22	岩 槻	裏慈恩寺	岩槻市大字裏慈恩寺字貝塚	加曾利B～安行3c
23	岩 槻	桜山貝塚	岩槻市大字裏慈恩寺字南	早期～後期
	蓮 田	井沼	蓮田市大字井沼字後塚	安行1～3b
	岩 槻	真福寺貝塚	岩槻市大字真福寺	後期～晩期
	岩 槻	黒谷田端前	岩槻市大字黒谷字田端前	中期～晩期



第2図 周辺の遺跡





第3図 雅楽谷遺跡と周辺の地形

その後蓮田市教育委員会および埼玉県埋文事業団の相次ぐ発掘調査によって遺跡東端部に後期後葉～晩期の集落の存在が明らかとなり、さらに盛土遺構の存在も指摘されている。

特に平成8～9年度に埼玉県埋文事業団による発掘調査で中空の動物形土製品が出土したのは記憶に新しい。

久台遺跡の南東には低地が半円形に入込んだ入り江状の地形が広がっている。

久台遺跡の乗る台地からこの入り江状地形に至る緩斜面上には(10) ささら遺跡が存在する。昭和55～56年度の調査では安行1式期の竪穴住居跡と、後晩期を主体とした遺物包含層が検出されている。

この遺物包含層は中期末葉から晩期にわたる広い時間幅の土器を出土しているが、とりわけ安行3c・3d式期のまとまった資料を出土している。

久台遺跡東縁の盛土遺構とこのささらⅡ遺跡とは、あるいは一連の遺跡と考えても良いかもしれない。

なお、この入り江地形の南縁には、後期前葉～中葉の集落跡が調査された(8) 帆立山遺跡が存在する。

蓮田支台の北縁では、元荒川は台地を巡ってほぼ東西に流れており、この部分の台地縁辺には井沼遺跡が存在する。昭和34年の埼玉県立文化会館による発掘調査では、包含層から安行3a式のまとまった資料が出土した。

東には国道122号線に沿って深く入込む谷が存在するが、遺跡はこの谷に面しておらず、むしろ本流側から入込む入り江状の地形を巡って展開しているものとみられる。

井沼遺跡から元荒川・隼人堀川・星川等の河川を挟んだ菖蒲町周辺には数多くの小河川が乱流する低地域が広がっているが、ここにも晩期中葉を主体とした地獄田遺跡が存在している。正式報告がなされ

ていないため詳細は不明であるが、自然堤防ないし埋没台地上の低湿地遺跡と考えられる。

綾瀬川の谷に面する蓮田・岩槻支台西縁には後晩期のめぼしい遺跡がみられない。

蓮田駅南方に入込む谷の両岸に、後期前葉の集落を検出した(5) 八幡溜・(6) 宮ノ前遺跡がある他は、関山貝塚で該期の遺物が出土している程度である。

蓮田支台から南に連続する岩槻支台は、岩槻市街付近で再び東西の広がりを増す。市街地南部で綾瀬川からの谷が北東方向へと深く入込んだ先端には、後期の貝塚と晩期の泥炭層の存在で学史的にも著名な真福寺貝塚が存在する。

また、岩槻支台の南の先端部は東西から無数の小支谷によって開析されるが、ここには黒谷田端前遺跡が存在している。

昭和49年岩槻市遺跡調査会による発掘調査では、後晩期の土壌群と同時期の遺物包含層が検出されているが、とりわけ、安行3b式～3d式期の資料がまとまっている。

以上、当該地域における縄文時代後晩期の遺跡について概観してきたが、後期中葉までの小規模分散の傾向に比べ、後期後葉～晩期中葉では大規模集約的なありかたを指摘することができる。

また、ある程度の規模をもった集落の多くが(環状)盛土遺構を伴っている点も明らかになりつつあり、今後資料の増加が予想される。

遺跡の立地については、台地を開析する谷奥部に大規模な集落が営まれる慈恩寺支台および白岡支台東縁に対し、元荒川に面した白岡支台西縁および蓮田支台東縁では、本流沿いの台地縁辺部や、本流に面した小規模な谷や入り江をとりまくような占地が目立つ。

Ⅲ 遺跡の概要

1 周辺の地形

大宮台地東縁に沿って流れる元荒川は、雅楽谷遺跡の所在する埼玉県蓮田市付近では、蓮田支台と白岡支台を分断して北から南へと流れ、岩槻支台に突き当たって東へと流れを変え、慈恩寺支台の西縁に沿って再び南へと流れ下っている。

一方、白岡支台と慈恩寺支台を隔てる日川筋の谷は、岩槻市金重付近で元荒川筋の谷から分岐し、黒浜支台東縁を緩やかなカーブを描いて廻り込み、北の久喜市街地方面へと抜けて、二つの台地を分断している。

元荒川筋・日川筋の二つの谷筋の分岐点からは、さらにいくつかの支谷が発達しており、白岡支台の南東縁を深く樹枝状に開析して変化に富んだ地形をつくりだしている。

それらの支谷のうち最も大きな谷筋は、二つの谷のほぼ中間から北西へと入込んでいる。

この谷は黒浜沼の下沼から上沼を経て黒浜中学校付近で北へと方向を変え、その先端は蓮田市営運動公園近辺にまで入り込んでいる。この谷の最奥部東岸に雅楽谷遺跡は位置している。

遺跡の範囲は東埼玉病院および県立蓮田養護学校の敷地までを覆う広大なものである。遺跡からは縄文時代前期から晩期にかけての遺物が出土するが、うち前述の谷に面した最も北西寄りの一角に、後晩期の環状盛土遺構を伴う集落跡が展開している。

谷の内部は数年前まで草地および水田となっており、遺跡の存在する面との標高差は最大約6mほどあったが、現在は周辺の宅地造成に伴って埋め立てられ、地形の改変が進んでいる。

谷内部における遺物・遺構の有無は不明だが、用水掘削時の出土遺物が『埼玉考古』誌上(1991橋本)に紹介されている。

復元品を含む土器の時間幅は縄文時代後期前葉か

ら晩期中葉に及び、台地上における発掘資料と共通の内容を持つもので、低地域への遺物包含層の広がり予想させる。

また、近隣住民の方の記憶では、「斜面部から低地面に飛び降りると、クッションの上に降りたような反動を感じた」とのことであり、遺跡と重なる時期の泥炭層が存在する可能性も考えられる。

東京都東村山市下宅部遺跡や川口市石神貝塚等の発掘調査で、集落に隣接する低地域の積極的な利用の実態が明らかになりつつある昨今、本遺跡における谷内部の沖積面にも同様の遺構・遺物の存在が考えられる。

2 これまでの発掘調査

盛土の存在する台地縁辺から多量の土器が出土することは比較的古くから知られ、「国立療養所内遺跡」として包蔵地指定されていたが、正式な発掘調査は長く行われなかった。

昭和50・51年度、県立蓮田養護学校建設に先立って、環状盛土遺構の北東の一部が南北25m・東西30mにかけて発掘調査された。調査の範囲は盛土部分をほぼ横断する状態で設定されたが、中央窪地部分は対象に入っていない。当時の調査主体者は埼玉県遺跡調査会である。

調査の結果、縄文時代後晩期の竪穴住居跡6軒、土壇33基等が検出され、遺物収納用コンテナ500箱という膨大な量の遺物が出土した。このとき土壇から一括出土した晩期初頭の土器群はその後県指定文化財となった。

当時は「環状盛土遺構」という概念が存在していなかったため、窪地を取り巻く一種の馬蹄形集落として報告されている。

しかし、報告書に掲載された当時の調査区北壁の土層断面図には、厚さ1mを超える遺物包含層が記録されている。異常な遺物の出土量からみても、盛



第4図 環状盛土遺構平面図

土遺構が存在したことは確実と言えるだろう。

3 環状盛土遺構

繰り返しになるが、雅楽谷遺跡の最大の特徴は、環状盛土遺構を伴っている点である。

詳細は第V章で述べるが、これは縄文時代後晩期の東日本一帯で特徴的に表われる現象で、集落跡に伴う遺物包含層がドーナツ状に盛り上がる環状盛土部分と、それに囲まれた中央部分が播鉢状に下がる中央窪地部分の二者によって構成される。

本遺跡の環状盛土遺構は、西を元荒川の支谷に面した台地縁辺に占地している。周辺の現状は東埼玉病院に付属する庭園であり、アスファルト舗装された遊歩道が巡り、水飲み場やあずまや等の施設が点在している。

盛土は北端の一部を運動公園の造成によって削平されたが、大半が庭園となっていたため大規模な開発を免れていた。

このため盛土の残存状況は良好で、第5図上の写真のように現状でも中央窪地を中心としたドーナツ状の地形を一望することができる。県内では稀有な遺跡となっている。

盛土遺構の平面形はN-19.5°-Wに長軸を有する楕円形で、長径約160m、短径約110mを測る。また、中央窪地部分は長径約45m、短径約40mを測り、窪地最低部と盛土最高部の比高差は約2.5～3mを測る。

また、盛土の中心からN-120°-W方向には、低地部に向かう開口部が存在している。このため、自然の谷地形を利用し、あるいは一部を改変して環状の地形を造成しているように見える。

第5図下はこの盛土の起伏を、第4図の等高線を元にして、垂直方向を強調して再現したものである。

また、第6図は今回調査した部分の盛土上面における起伏を実測値を元に再現したもので、やはり垂直方向を強調してある。

グリッドシステムの8～10ライン上で盛土がさ

らに南へと続いており、窪地を取り巻く環状の盛土以外に、台地の崖線に沿って伸びる盛土が存在する可能性がある。

第7図に掲げたのは、今回発掘調査した部分の盛土の断面図である。

1層とした暗褐色土層は表土直下の腐食土層であり、2層以下が盛土となっている。

2層は盛土の頂部を覆っている。ローム粒子を多く含む暗褐色土層で、人為的なローム層の掘り下げに関わる堆積物であると考えられる。安行3c・3d式の土器片はこの層から多く出土している。

3層は黒褐色土である。後期中葉に属する遺構はほとんどがこの層中から掘り込まれているものと考えられた。出土土器は後期中葉の加曾利B1・B2式を中心に、安行1式・2式がみられた。

4層はソフトロームへの漸移層であり、若干のロームブロックを含んでいる。後期中葉の土器埋設遺構はこの層の上面で確認された。出土土器は後期中葉が主体であった。

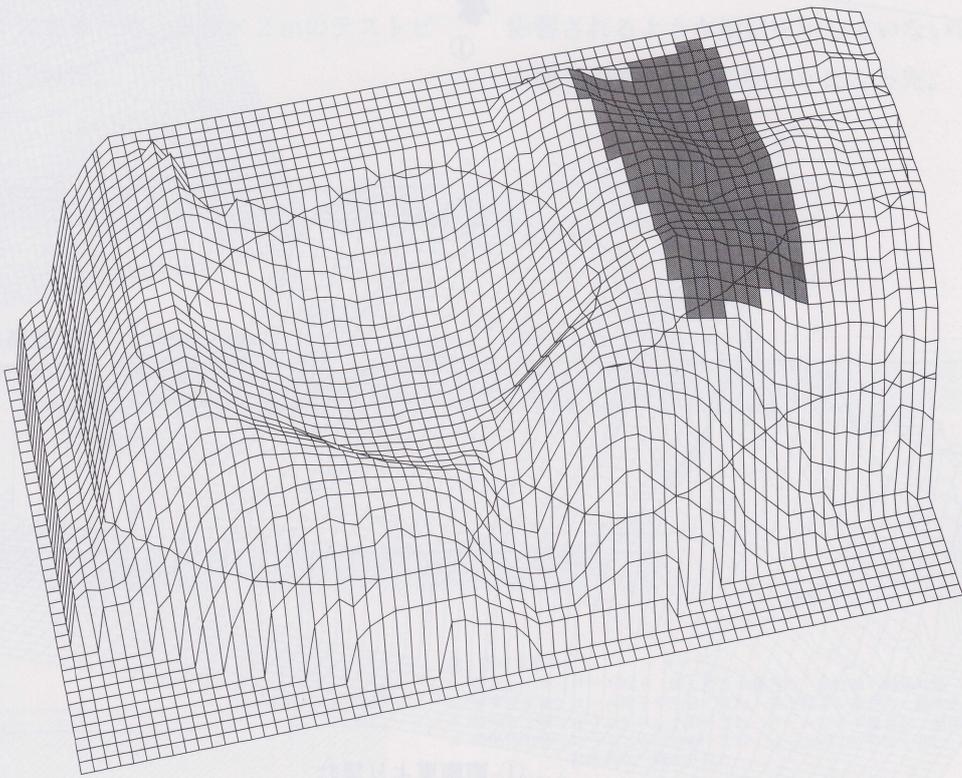
詳細は第V章で述べるが、今回調査した部分の盛土は後期中葉から後葉にかけて最も盛んに形成されており、一方で、寺野東遺跡にみられるような中央窪地におけるローム面の掘り下げが雅楽谷遺跡でも行われているとするならば、それは晩期中葉、盛土形成の最終段階において行われた可能性が高い。

今回の発掘調査は環状盛土遺構の外周部の調査であり、一方、盛土の中心部に鍬を入れた昭和55・56年度の調査時点では、盛土という概念自体が存在しなかった。

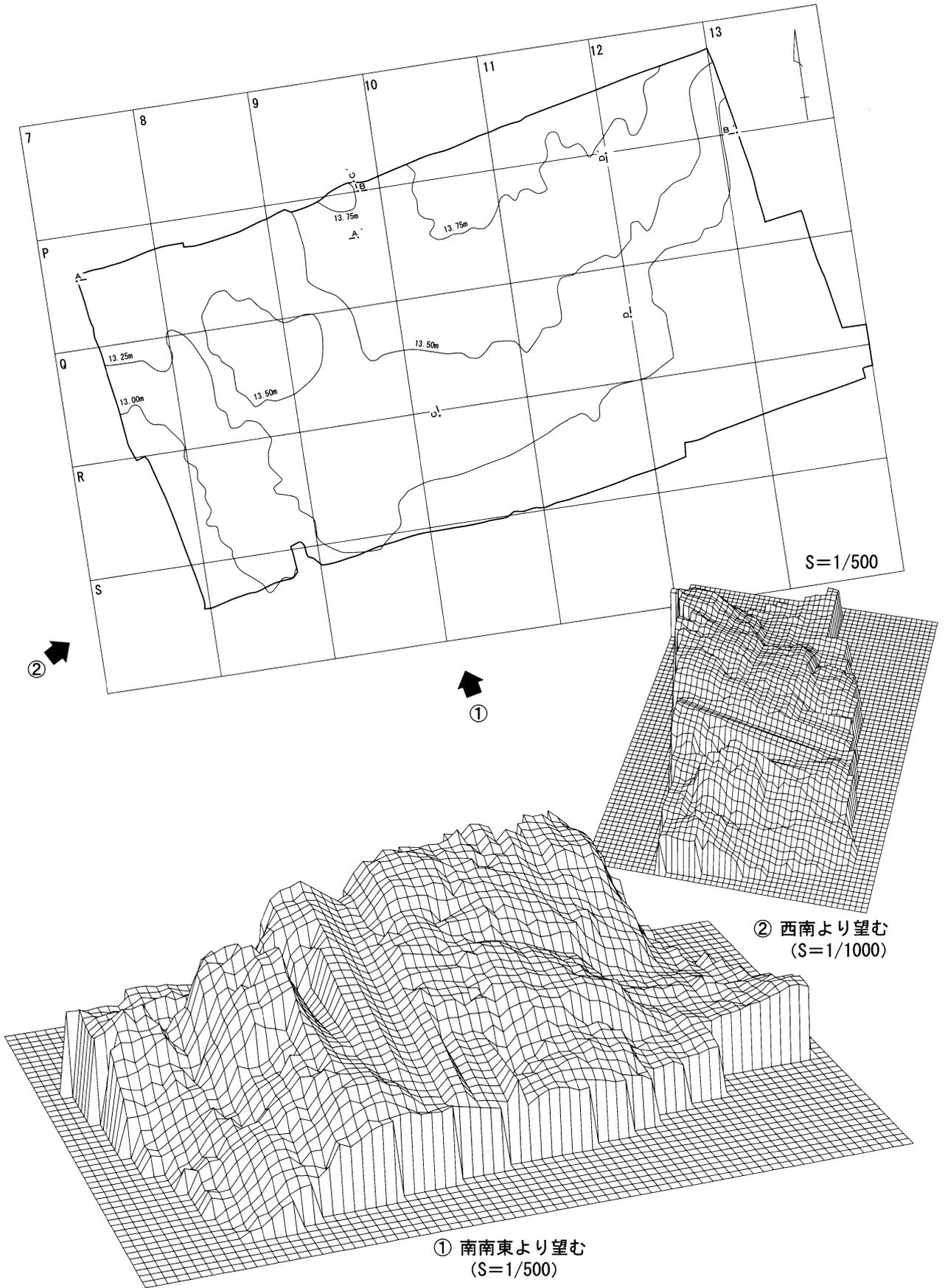
また、いずれの調査でも中央窪地にかかわる部分は対象になっておらず、今後この発掘調査が行われれば、環状盛土遺構の成立と変遷がより明らかになっていくものと思われる。

4 遺構と遺物の分布

第4図は、発掘調査以前に残されていた環状盛土遺構周辺の地形図に、これまで発見された遺構の平



第5図 環状盛土遺構概念図



第6図 調査区内盛土平面概念図

面図を重ね合わせたものである。

詳細は第V章の考察に委ねるが、後晩期の遺構が分布する範囲が現地表面に表われた盛土の範囲とほぼ重なっていることがわかる。

検出された遺構の時期は後期前葉から晩期初頭に及んでいるが、堀之内～加曾利B段階における遺構の分布は盛土の範囲のほぼ全体に拡散しているのに対し、安行段階におけるそれは台地縁辺部で薄く、盛土の東縁において濃密である。この時期の集落はいわゆる馬蹄状の配置ではなく、やや台地奥寄りの、環状盛土の東縁に沿って、南北に細長く分布しているように思える。

ごく限られた範囲の調査ではあるが、同じ環状盛土という集落景観の中であって、時期ごとに集落の形態が変化したことが想定される。

5 関東ローム層の調査

今回の発掘調査にあたって、ローム層中の遺物の有無を確認すると同時に、盛土構築以前の地形の成り立ちを明らかにするため、2m×2mのテストピットを計6箇所設けた。

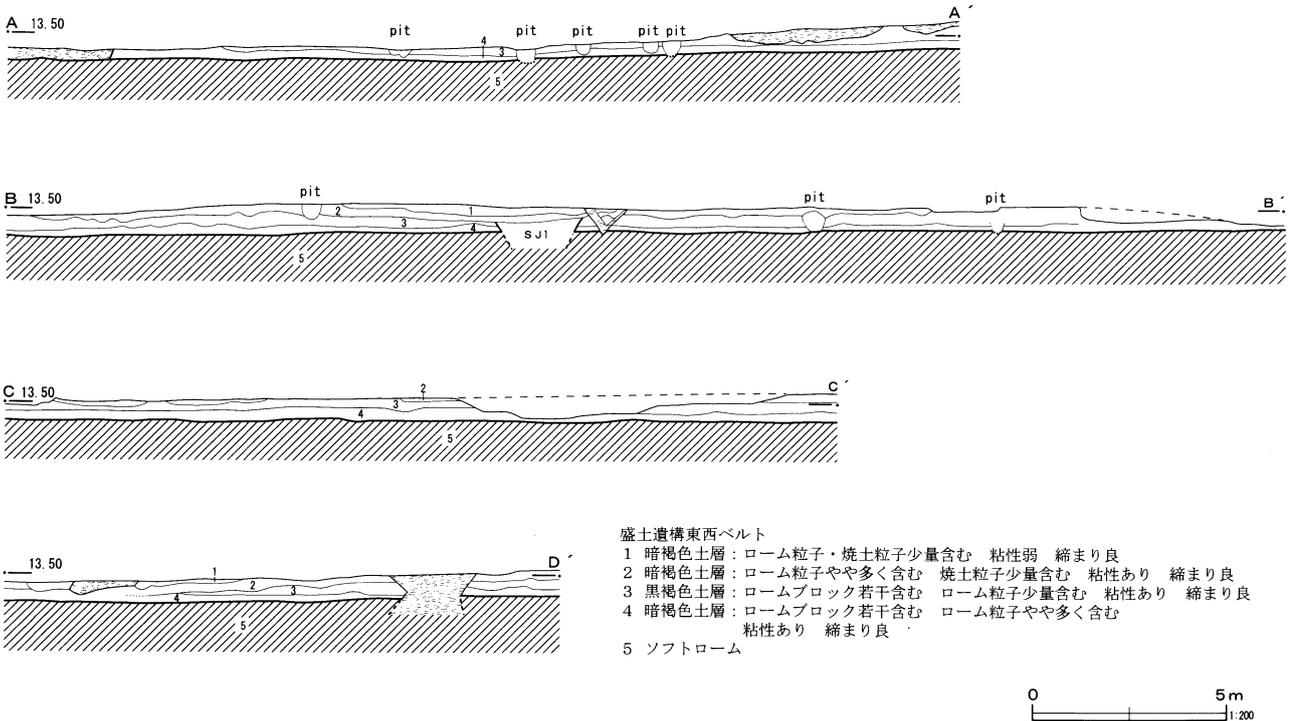
各テストピットとも、立川ロームX層相当まで掘り下げたが、旧石器時代の遺物は発見されなかった。土層断面はグリッド上のQのラインに沿って4ヶ所、8のラインに沿って3ヶ所設定され、うちQ-8グリッド北西隅における交点を共有とした。

第9図に各テストピットにおけるローム層の断面図と、それらの現地地形上での位置関係を示した。

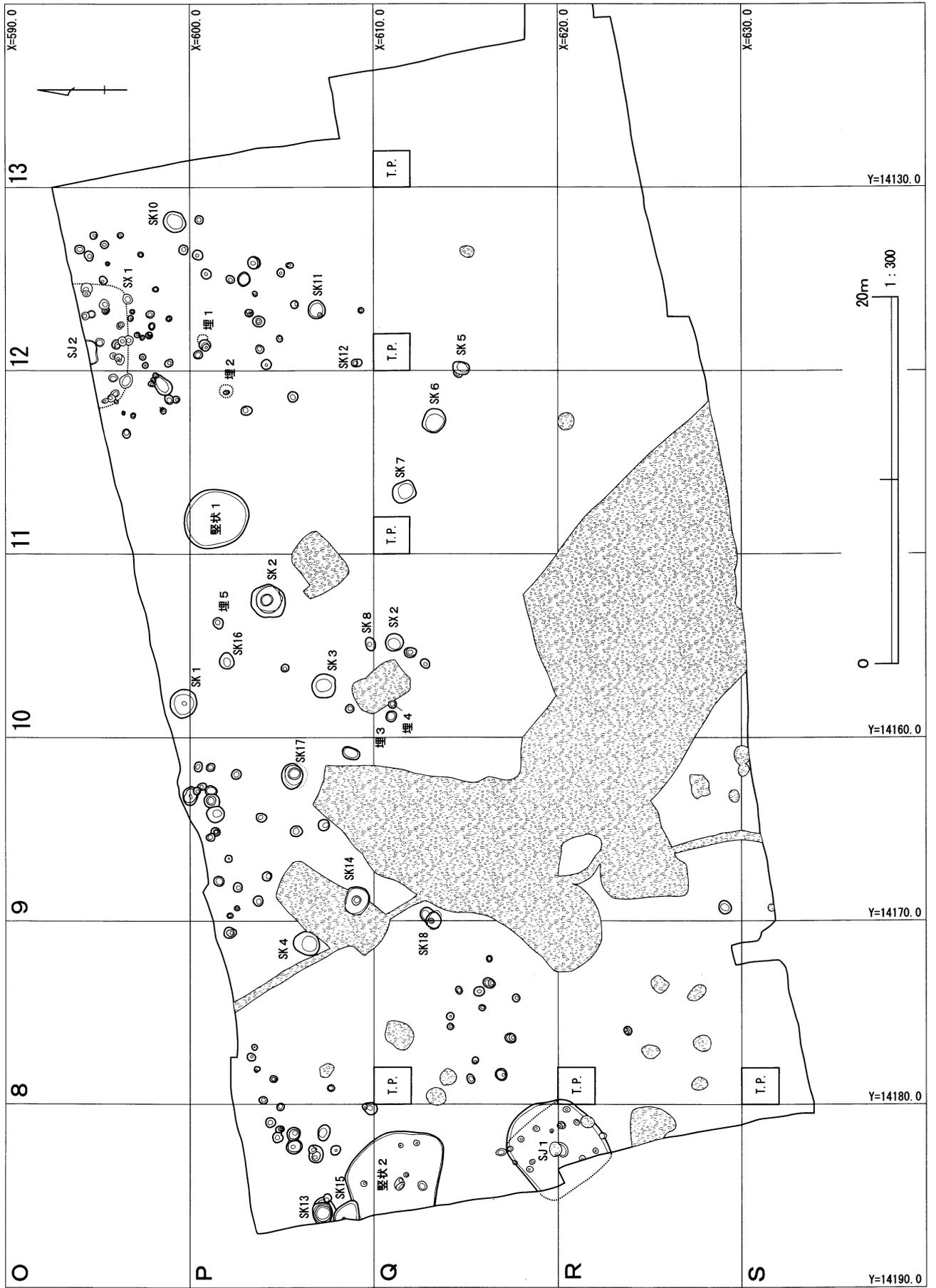
立川ローム層の堆積そのものは約1.5mと薄かったが、上面を縄文時代の盛土によって保護されていたため、ローム層全体の保存状態は良好であった。

ソフトローム上面および第二黒色帯上面で観察された旧地形は、概ね東の台地奥部に行くにつれ高く、特に調査区西半では崖線に近づくにつれ急速に低くなっている。また、南北断面では北から南への傾斜が明らかで、特に北端の盛土直下ではソフトロームの上面がいちじるしく高くなっている。

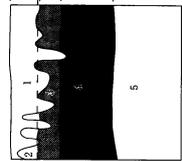
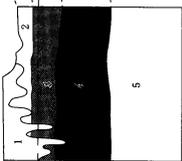
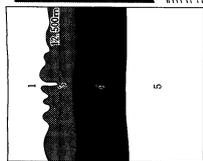
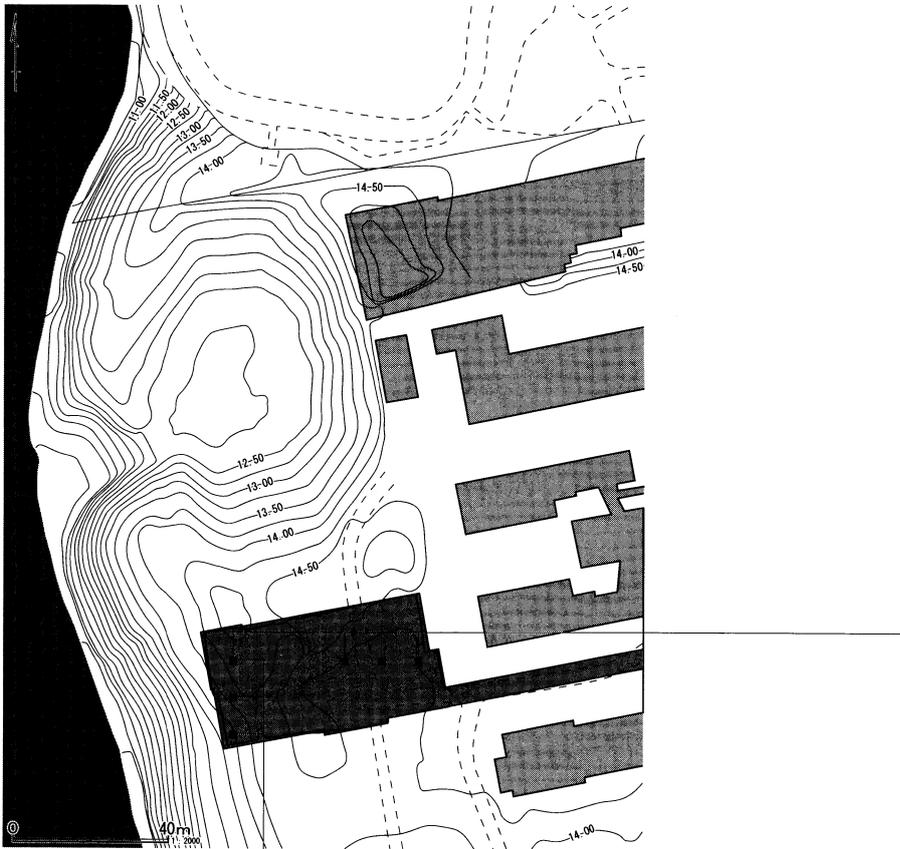
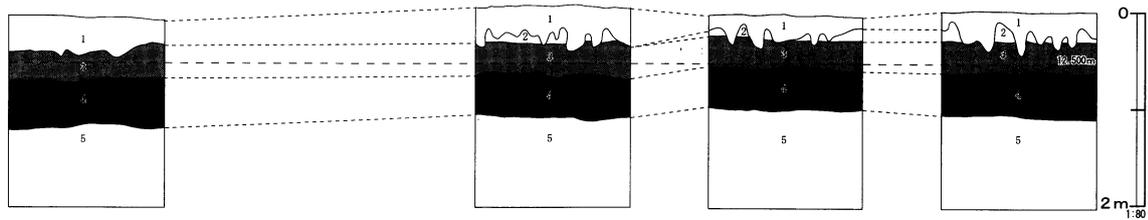
仮に盛土構築前に、中央窪地形成の足掛かりとなる谷や窪地等の自然地形が埋没していたとしても、少なくとも洪積世末段階における周辺地形はこれに影響されるような傾斜を示していないことが、ローム層の観察所見から明らかになった。



第7図 盛土断面図



第8図 雅楽谷遺跡全体図



- 1 暗黄褐色土 : ソフト化したローム層
- 2 黄褐色土 : ハードローム層 白色パミス含む
- 3 暗褐色土 : 第一黒色帯 白色パミス多く含む
- 4 極暗褐色土 : 第二黒色帯 赤色スコリア・黒色スコリア少量含む
- 5 黄褐色土 : 立川ロームX層相当 赤色スコリア・黒色スコリア少量含む

第9図 ローム断面図

IV 発見された遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡 (第10～12図)

Q・R-7・8区に所在する。

隅丸方形の竪穴住居跡と思われるが、南西壁が調査区外に存在し、正確な規模・平面形は不明である。北東壁が大きく張り出し、やや五角形に近く見えるが、樹木の根等による破壊とみられる。

計測可能部分の長径5.08m、短径4.66mを測る。床面はほぼ平坦で、壁はやや緩やかに立ち上がり、壁高は最大で14cmを測る。主軸方向はN-48°-Eを指す。

覆土はほぼ単層で、ややローム質である。ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子を含む。

中央に炉跡が検出された。炉跡は北壁部分を後世の攪乱により破壊されているが、住居跡本体とほぼ主軸方向を同じくする楕円形を呈すると思われる、長軸0.27m、短軸0.19m、深さ0.04mを測る。底面は被熱によりいちじるしく赤化していた。

炉跡覆土中からは、第12図18の深鉢口縁部が出土した。

床面上に13本のピットが検出された。個別のピットの規模は第2表に挙げた。ピットはP1・2・3・7・9・10・11等が支柱穴を構成し、ほぼ壁に沿って方形に巡るものと思われる。

出入り口施設は南西部分の調査区域外に存在するものか、今回の調査では確認できなかった。

遺物は縄文時代後期前葉から中葉の土器破片と若

干の石器が出土している。

土器の多くは時期判定不能の小破片であったが、文様を知りうるものについては加曾利B1式・B2式が主体である。

したがって本住居跡の所属時期も後期中葉と考えられる。

第1号竪穴住居跡出土遺物 (第13・14図)

土器

1は炉跡攪乱内部から出土したもので、加曾利B2式である。胴部中段に括れを持ち、水平口縁上に3単位の突起を配する深鉢形土器の胴部であろう。沈線による菱形のモチーフが描かれ、内部にLR単節の縄文が充填される。モチーフ中央には対弧状の単沈線が縦方向に重畳する。

復元最大径20.4cm、現存高7cmを測る。

2は注口土器の口縁部である。口縁直下に段が設けられ、口端上に形骸化した円盤状の小突起が配される。

胴部は中段が大きく張り出す球胴状で、細密な集合沈線により同心円文が描かれる。モチーフの交点にはS字状の単位文が配される。

胎土に多量の砂を含み、焼成は良好、器壁は黒褐色で光沢を帯びる。

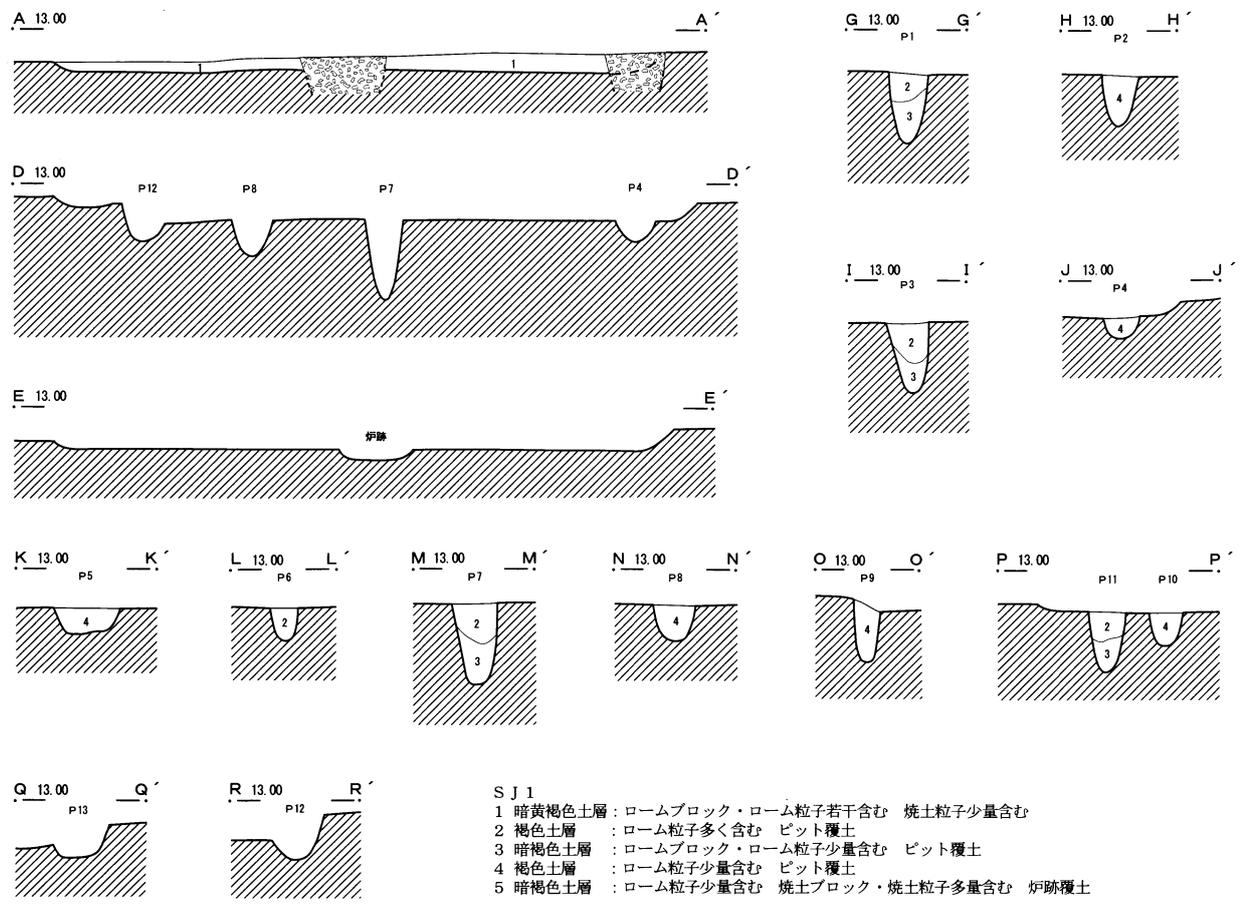
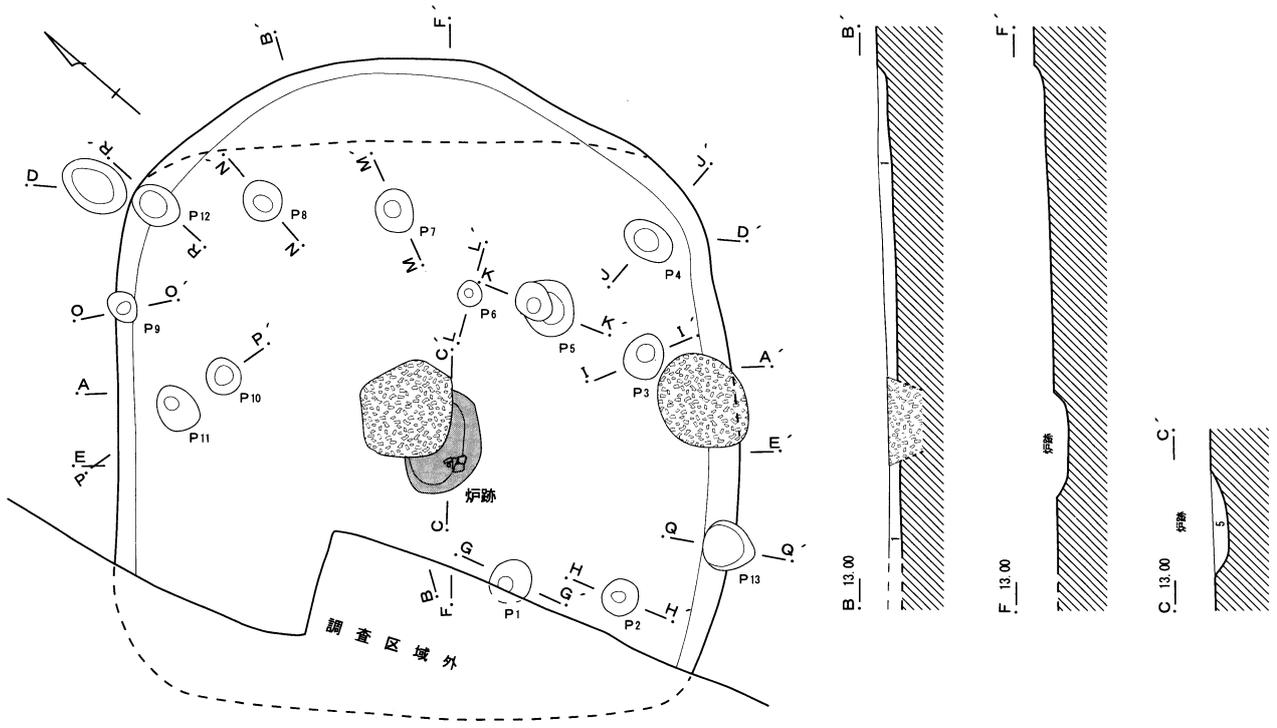
復元最大径16.5cm、現存高6.9cmを測る。

3は浅鉢で、口縁から底部にかけて残存する。背の低い円盤状の器形で、口縁がわずかに内湾する。底面は上げ底状を呈する。

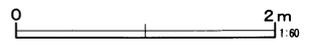
第2表 第1号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.34	0.30	0.56	Pit 8	0.32	0.30	0.31
Pit 2	0.18	0.16	0.38	Pit 9	0.24	0.22	0.52
Pit 3	0.36	0.30	0.55	Pit 10	0.30	0.16	0.25
Pit 4	0.42	0.28	0.18	Pit 11	0.38	0.30	0.45
Pit 5	(0.44)	0.40	0.17	Pit 12	0.38	0.30	0.24
Pit 6	0.32	0.26	0.21	Pit 13	0.42	0.40	0.22
Pit 7	0.34	0.32	0.63				

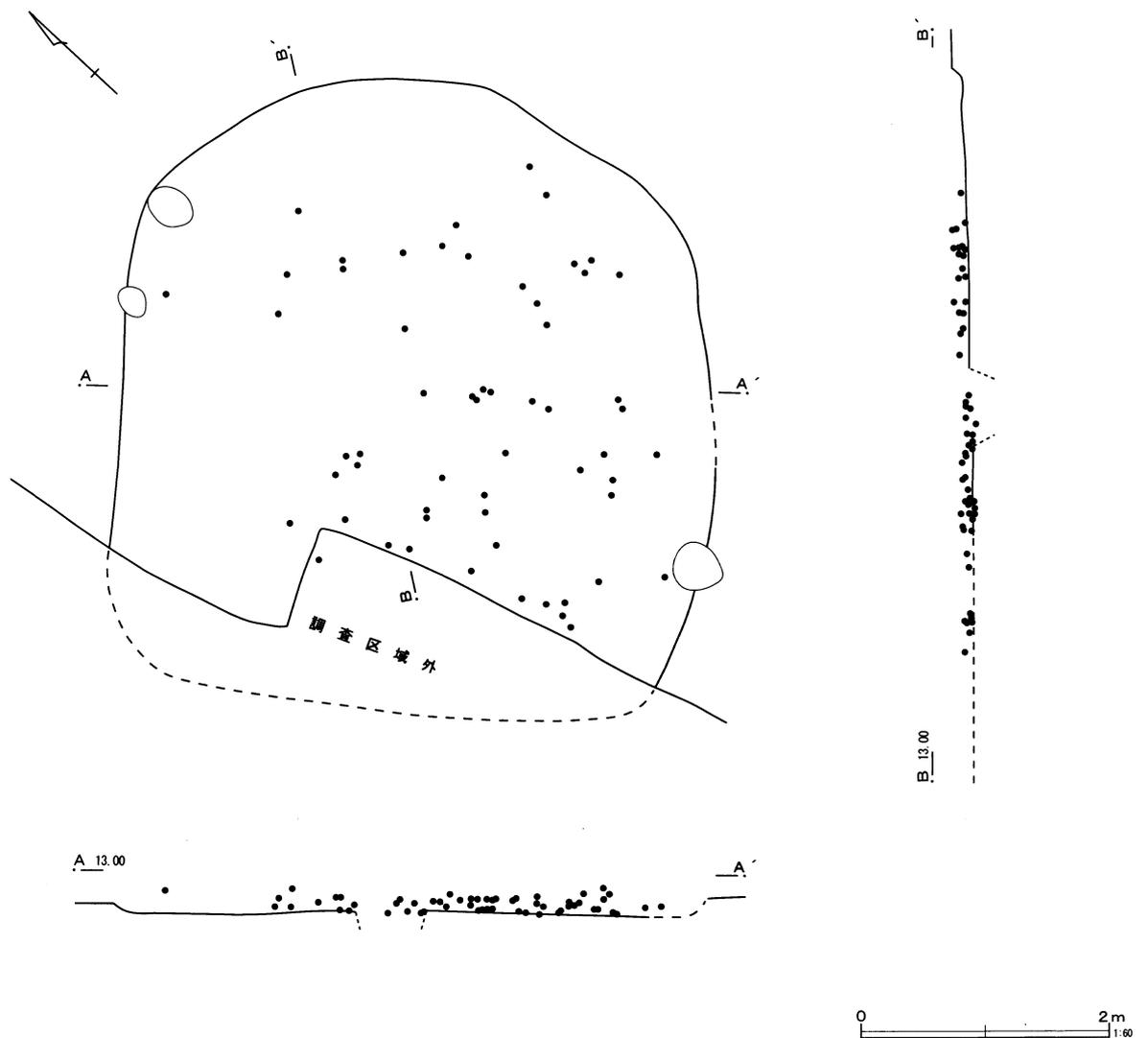
※括弧つき数字は切り合い等で計測不明なもの。



- S J 1
- 1 暗黄褐色土層：ロームブロック・ローム粒子若干含む 焼土粒子少量含む
 - 2 褐色土層：ローム粒子多く含む ビット覆土
 - 3 暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子少量含む ビット覆土
 - 4 褐色土層：ローム粒子少量含む ビット覆土
 - 5 暗褐色土層：ローム粒子少量含む 焼土ブロック・焼土粒子多量含む 炉跡覆土



第10図 第1号竖穴住居跡



第11図 第1号竖穴住居跡遺物出土状況(1)

単沈線で三角形や菱形等の磨消文様が描かれる。地文はLR単節の縄文である。文様帯の上下はそれぞれ一組の平行沈線によって区画される。平行沈線間には斜位の短沈線が巡る。

復元最大径16.2cm、現存高6.8cmを測る。

4は椀状の鉢ないし注口土器で、胴部中段から底部にかけて残存する。無文で、内外面にケロイド状の剥落がみられる。底面は上げ底状で、網代圧痕が残る。

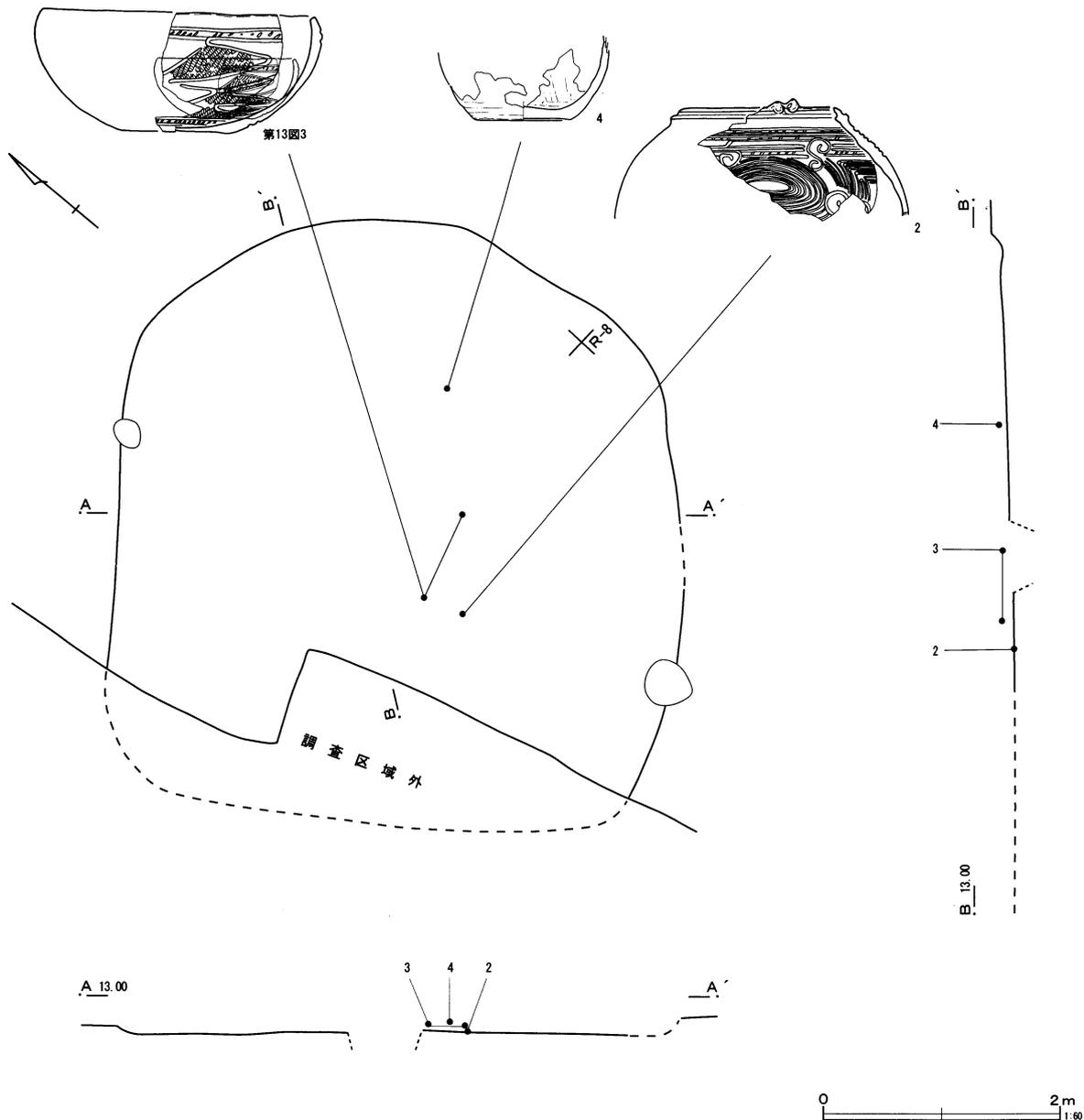
復元最大径9.6cm、現存高4.8cmを測る。

拓影図版の7~9は堀之内2式である。7は頸部と胴部の境が屈曲する鉢であろう。頸部の無文帯で、無文地に連鎖状の隆帯が斜行する。

8・9は精製深鉢の口縁部である。8は口縁下に隆帯を伴わず、帯縄文により文様帯上下を区画する。

9は平行沈線による三角形の区画内部に縄文が施文される。

10~12は鉢の口縁部、14は胴部である。いずれも胴部から口縁にかけてゆるやかなカーブを描いて立ち上がり、口端肥厚して外削ぎ状の面取り整形が



第12図 第1号竪穴住居跡遺物出土状況(2)

施される。

胴部の横位平行沈線間にLR単節の縄文が施文される。10は沈線間をクランク状に連繋する区切り文がみられ、文様帯の下端が棘状に張り出す。

13は浅鉢形土器である。外面は無文、内面に横位平行沈線文が描かれる。

口縁は「く」の字に内屈し、内面に隆帯を巡らせて段を形成する。段の内側には刺突列が巡る。

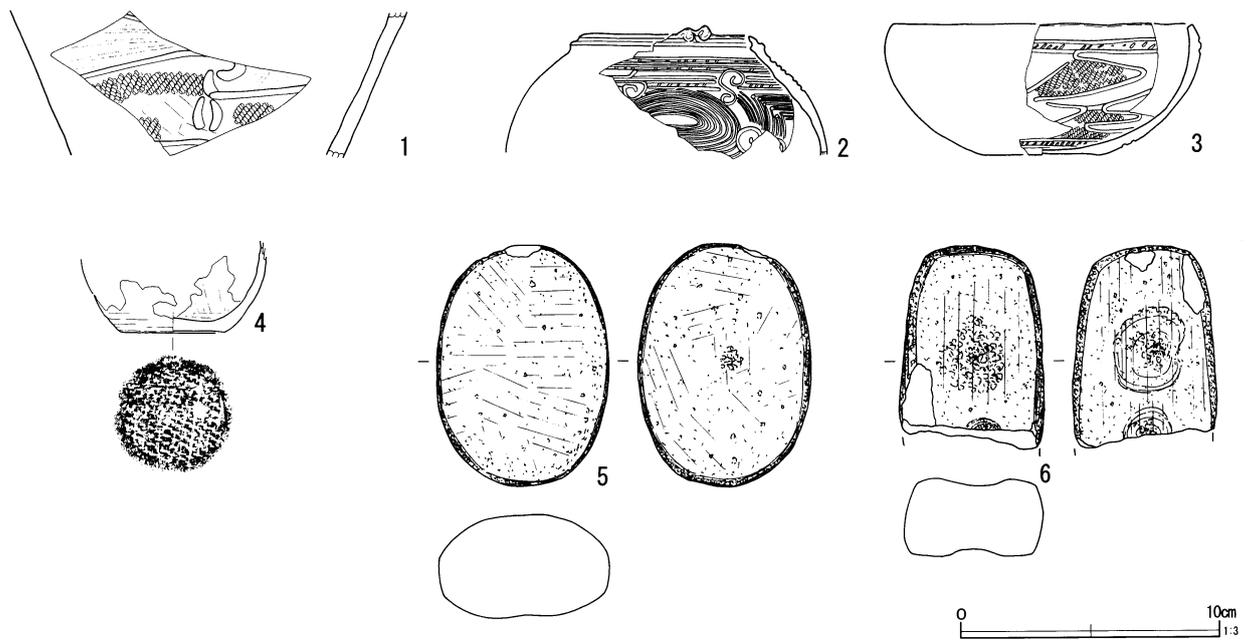
15は小型の深鉢胴部である。胴部と頸部の境が屈曲して、内面に稜をもつ。横位の平行沈線間が弧

線でループ状に連繋される。

16は3に類似の鉢の胴部とみられる。

17～20は半粗製の深鉢である。17・18は外面に指頭圧痕を伴う紐線文が巡り、内面に1条の沈線が巡る。17は全面にLR単節横位回転の縄文が施され、18は文様帯の間のみLR単節横位回転の縄文が充填される。

19は口縁直下に文様帯が配される。地文縄文上に横位平行沈線文が描かれ、1条の蛇行沈線が垂下する。地文はLR横位回転の縄文である。



第13図 第1号竪穴住居跡出土遺物（1）

21は口縁直下に指頭圧痕を伴う隆帯が巡り、半截竹管状工具による平行沈線で斜格子文を描く。22は同様の平行沈線で対弧状のモチーフを描く。

23～25は鋭利な工具の単沈線による斜格子文である。

26～28は縄文のみ施文される。29は櫛歯状工具による集合沈線で、注口土器等特殊な器形に伴うものとみられる。

31は地文縄文上に半截竹管状工具による沈線が垂下する。後期中葉であろうか。

30・32・33は無文で、30は斜位の研磨が徹底さ

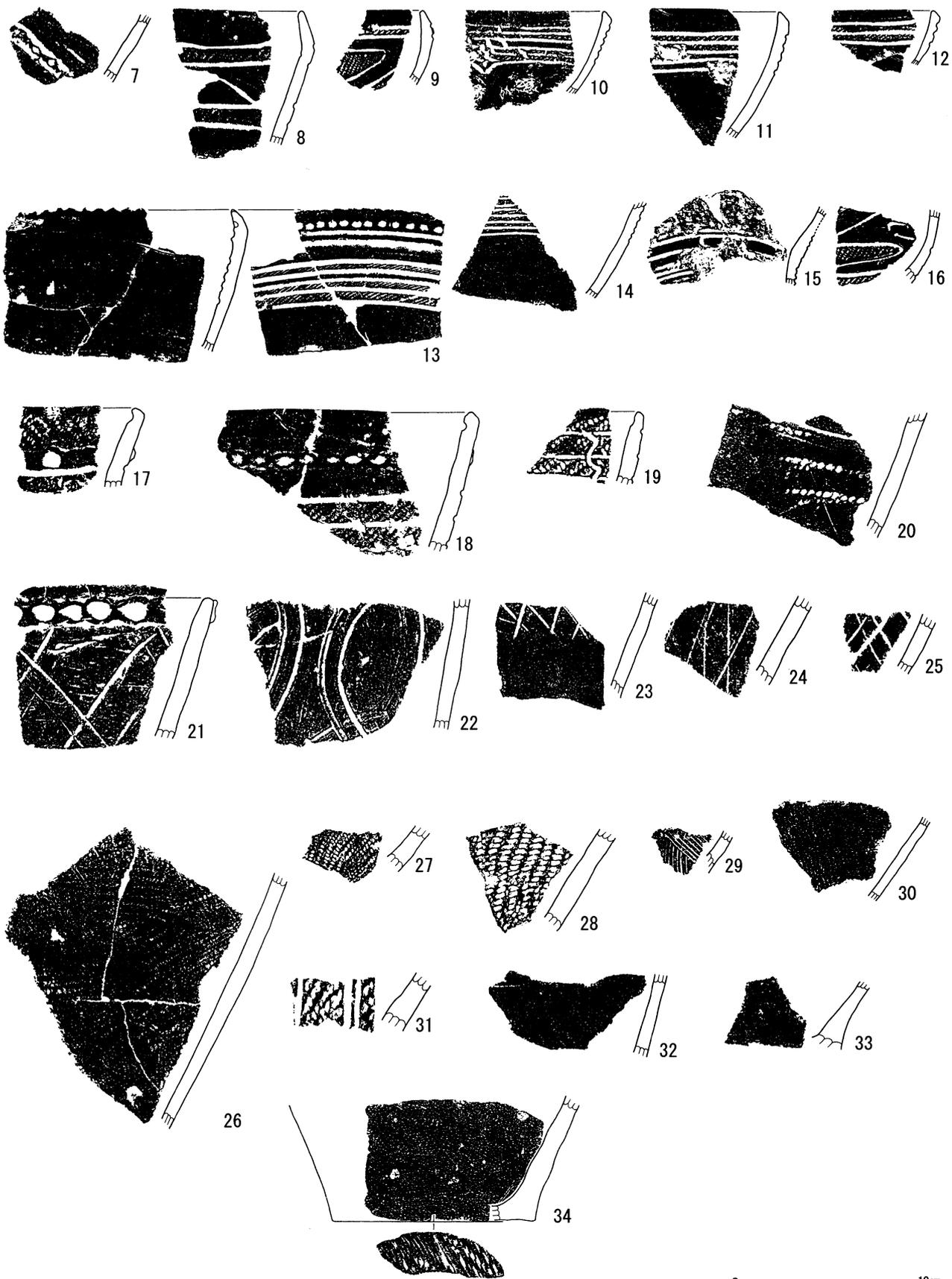
れる。34は無文の底部で、底面に網代圧痕が残る。

2点の磨石が出土した。

5は長軸9.4cm、短軸6.7cmの楕円形で、厚さ4.1cm、重さ379.1gである。安山岩を使用する。

6は長軸8.1cm、短軸5.6cmの胴張り長方形で、長軸側の一端が折損している。厚さ3.2cm、重さ179gである。安山岩を使用する。

いずれも両面使用され、片面ないし両面が凹石として転用されている。側面もきれいに面取りされているが、これが使用に伴うものか、あらかじめ整形されたものかは不明である。



第14图 第1号竖穴住居跡出土遺物(2)

第2号竪穴住居跡 (第15図)

O-11・12区に所在する。本住居跡はロームや上面で炉跡と柱穴が検出されたもので、北壁側1/2～2/3程度が調査区域外に存在する。

ほぼ南北に主軸を持つ隅丸長方形の竪穴住居であったと思われ、南縁に出入り口施設を構成するとみられるピット群が集中している。

調査区壁に現れた断面および柱穴配置から推定される主体部の規模は短軸6.8mの隅丸方形で、長軸は不明である。

炉跡は北半部が調査区域外に存在する。東西径1.35m、深さ0.15m、不整隅丸長方形を呈するとみられる大型の地床炉である。

出入り口施設は炉跡の南1mくらいから始まり、南壁外に向けて「ハ」の字状に開く2条の柱穴列で、壁外1.2mの地点から左右にほぼ直線的に展開するものとみられる。

本住居跡に伴うと推定される柱穴は45本存在した。個別の規模は第3表に提示した。

第3表 第2号竪穴住居跡 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit1	(0.70)	0.62	0.22	Pit24	0.28	0.26	0.17
Pit2	0.42	0.34	0.31	Pit25	0.30	0.26	0.33
Pit3	0.56	0.54	0.50	Pit26	0.42	0.40	0.15
Pit4	0.46	(0.42)	0.33	Pit27	0.40	0.32	0.20
Pit5	(0.36)	0.34	0.30	Pit28	0.22	0.20	0.18
Pit6	0.30	0.28	0.46	Pit29	0.36	0.36	0.15
Pit7	0.56	0.50	0.20	Pit30	0.32	0.30	0.23
Pit8	0.56	0.42	0.88	Pit31	0.24	0.22	0.13
Pit9	0.60	0.52	0.47	Pit32	0.48	0.38	0.42
Pit10	0.38	0.36	0.60	Pit33	(0.40)	0.36	0.15
Pit11	0.38	0.36	0.23	Pit34	0.50	0.48	0.15
Pit12	0.46	0.36	0.37	Pit35	(1.20)	0.76	0.22
Pit13	0.52	(0.48)	0.26	Pit36	0.28	0.26	0.25
Pit14	0.50	0.44	0.23	Pit37	0.26	0.24	0.28
Pit15	0.82	0.66	0.40	Pit38	0.34	0.30	0.21
Pit16	(0.46)	0.38	0.37	Pit39	0.34	0.32	0.11
Pit17	(0.30)	0.18	0.17	Pit40	0.34	0.34	0.05
Pit18	0.42	0.40	0.33	Pit41	0.36	0.32	0.15
Pit19	0.36	0.22	0.20	Pit42	(0.14)	(0.12)	0.26
Pit20	0.48	0.46	0.23	Pit43	0.28	0.26	0.31
Pit21	0.42	0.40	0.20	Pit44	0.52	0.42	0.40
Pit22	0.38	0.38	0.17	Pit45	0.20	0.18	0.20
Pit23	0.48	0.42	0.17				

※括弧つき数字は切り合い等で計測不明なもの。

遺物はローム上面ピット中から出土したもので、中期から後期にかけて各時期のものがみられるが、1の後期安行式が本住居跡の時期を示すものと思われる。

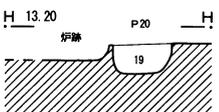
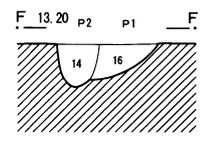
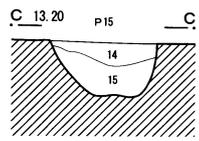
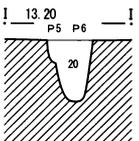
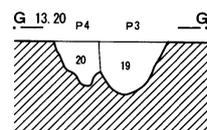
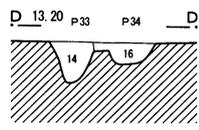
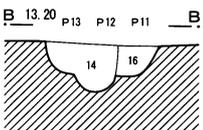
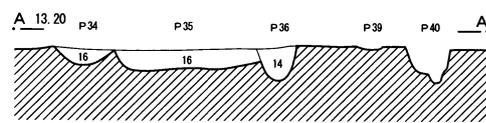
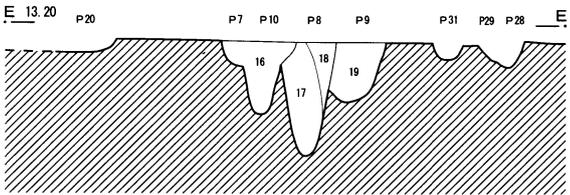
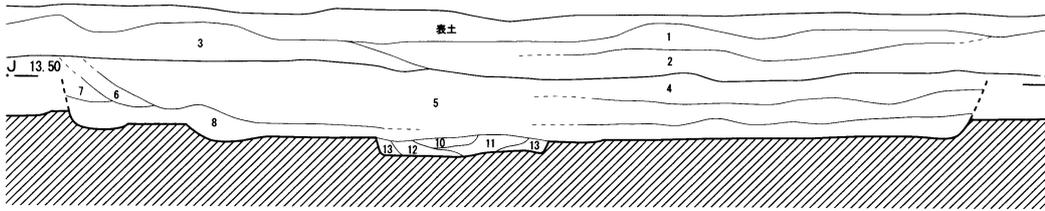
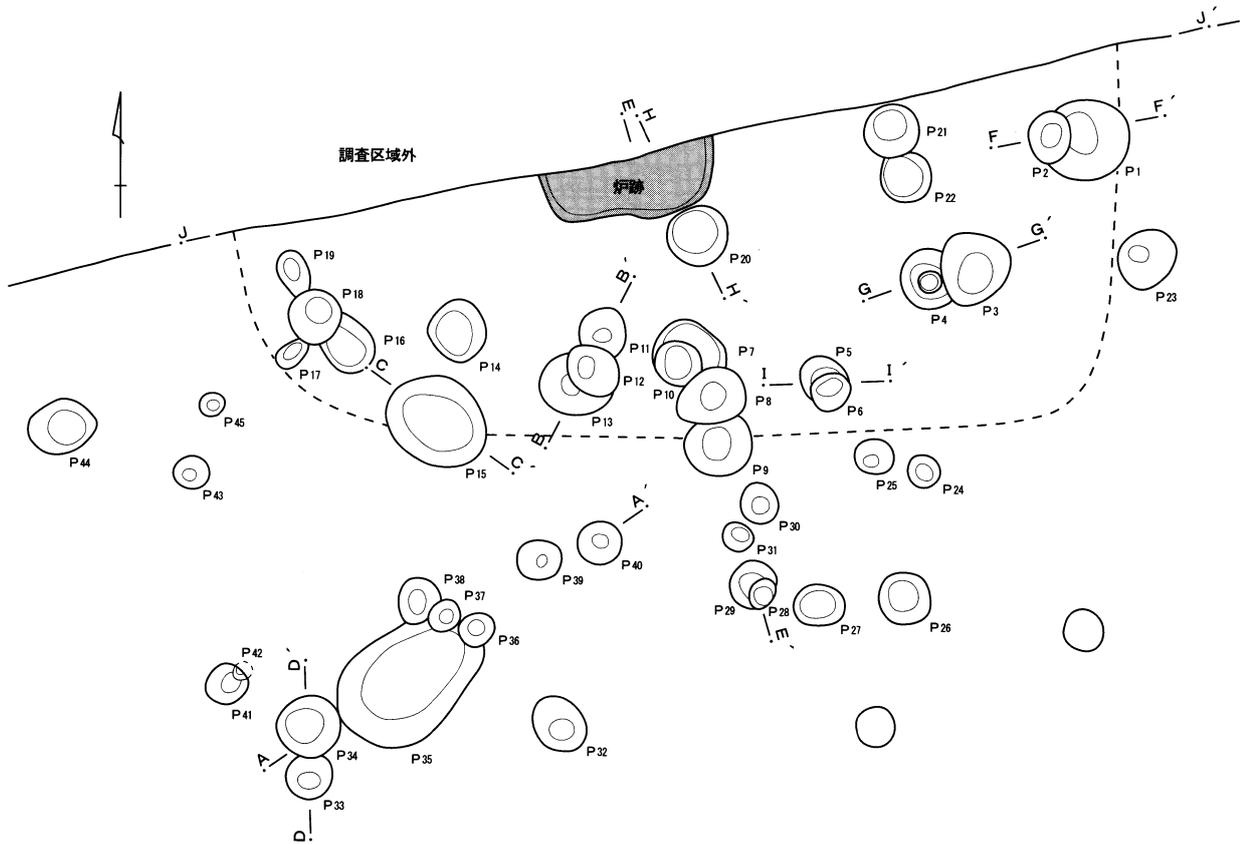
第2号竪穴住居跡出土遺物 (第16図)

1は砲弾型の半粗製深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁は緩やかに内湾する。口唇部はなはだしく肥厚し、口端上は平坦に整形されて断面逆三角形を呈する。

口縁下に棒状工具先端による刺突列が巡り、この刺突列の直下のみ横位～斜位の集合沈線がごく粗く施文される。胴部中段には2条の平行沈線による横位区画が巡るが、刺突は伴っていない。この区画から下にも斜位の集合沈線が施文されている。

復元最大径27.2cm、現存高12.5cm、胎土に多量の砂・シルトを含み、焼成は不良、暗灰黄褐色の脆弱な器壁である。

2は中期阿玉台式、3は加曾利EⅢ～Ⅳ式の口縁部である。4・5は堀之内Ⅰ式であろう。6は堀之



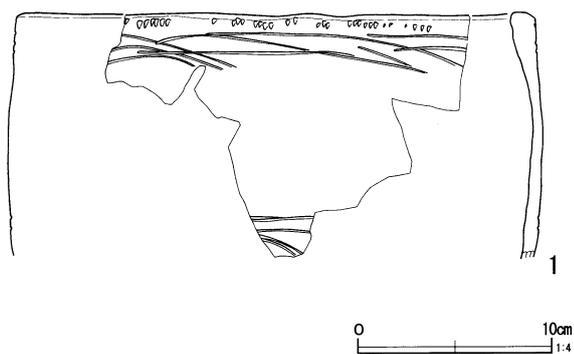
- S J 2
- 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む
 - 2 黒色土層 : ローム粒子・焼土粒子若干含む 安行Ⅱ～Ⅲ a・Ⅲb
 - 3 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く含む
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む
 - 5 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む 焼土粒子微量含む
 - 6 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 焼土粒子・炭化物若干含む
 - 7 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼土粒子・炭化物少量含む
 - 8 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む ローム粒子・焼土粒子・炭化物若干含む
 - 9 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子やや多く含む 炭化物若干含む
 - 10 暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック若干含む 焼土粒子やや多く含む
 - 11 黄褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子多く含む 焼土ブロック若干含む
 - 12 黄褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子極めて多く含む 焼土ブロックやや多く含む
 - 13 暗黄褐色土層 : ローム粒子多く含む 焼土粒子やや多く含む
 - 14 極暗褐色土層 : ロームブロック少量含む
 - 15 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む
 - 16 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子多く含む
 - 17 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子・焼土ブロック少量含む
 - 18 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む
 - 19 極暗褐色土層 : ロームブロック・焼土ブロック少量含む
 - 20 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む 焼土ブロック微量含む

第15図 第2号竪穴住居跡

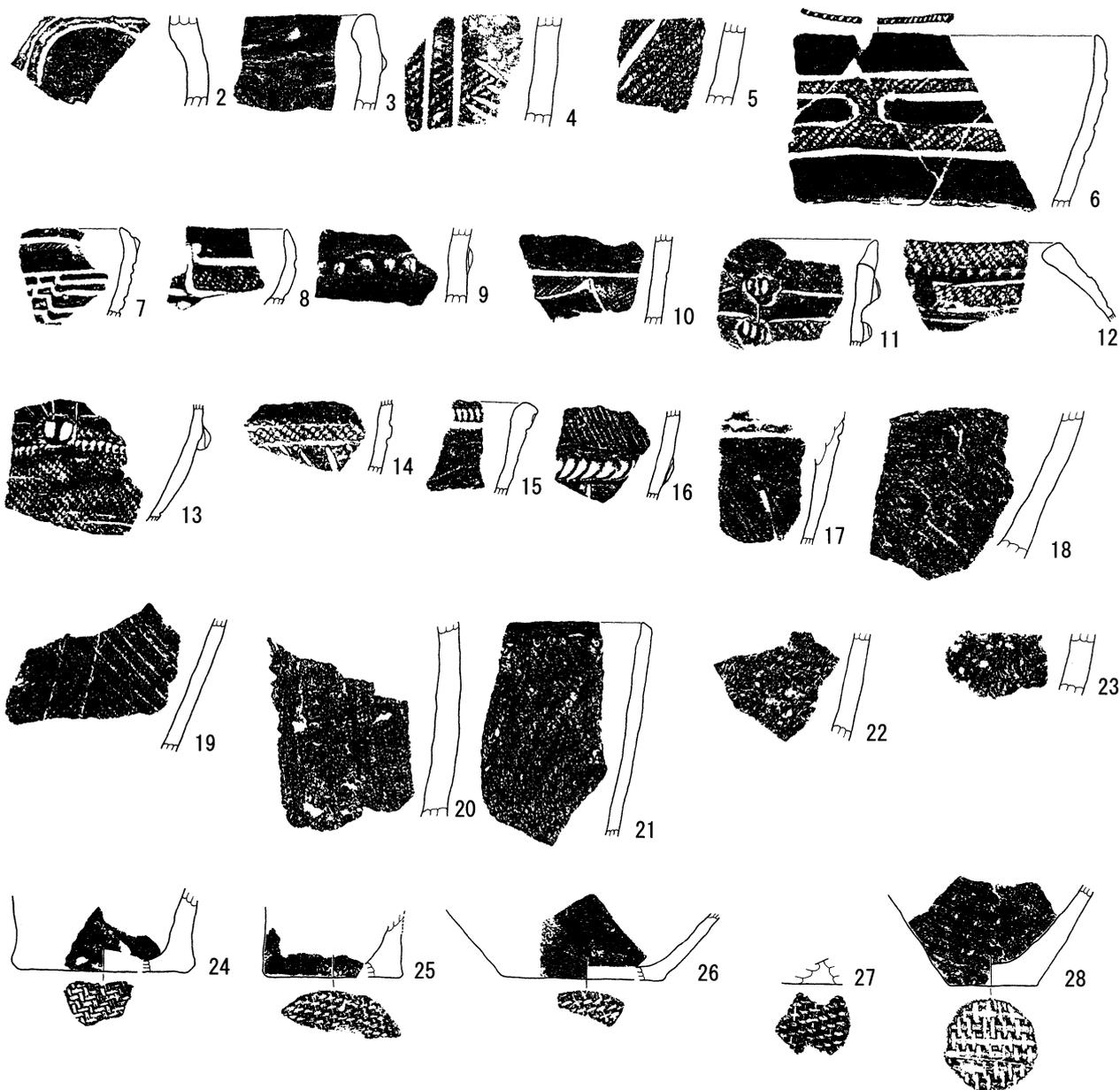
内2式の精製深鉢口縁部である。7～10は加曾利B式で、10はB2式、他はB1式であろう。

11～13は安行2式と思われ、11は水平口縁の深鉢で口端に半円形の突起が配される。12は瓢形の深鉢であろう。14～16は半粗製深鉢で、やはり安行2～3a式に伴うものとみられる。17～19・28は同種の深鉢の胴下半部である。

21は粗製土器および精製土器の無文部・底部である。21や24～26は加曾利B式に伴うものと思われる。



第16図 第2号竖穴住居跡出土土器(1)



第17図 第2号竖穴住居跡出土土器(2)

(2) 竪穴状遺構

第1号竪穴状遺構 (第18～20図)

O・P-11区に所在する。

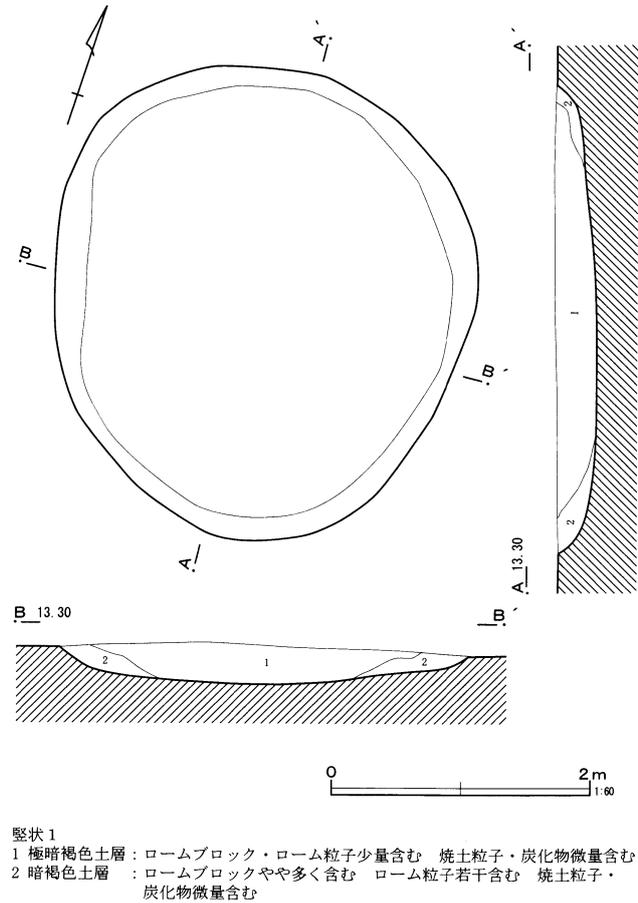
長径3.58 m、短径3.18 mの楕円形で、主軸方向はN-4°-Wを指す。壁高は最大で0.36 mを測る。

床面はほぼ平坦で、プランの中央が皿状にやや下がっている。炉跡・柱穴は発見できず、貼床や硬く踏み締められた部分も検出されなかった。壁の立ち上がりはなだらかで、壁溝もみとめられなかった。

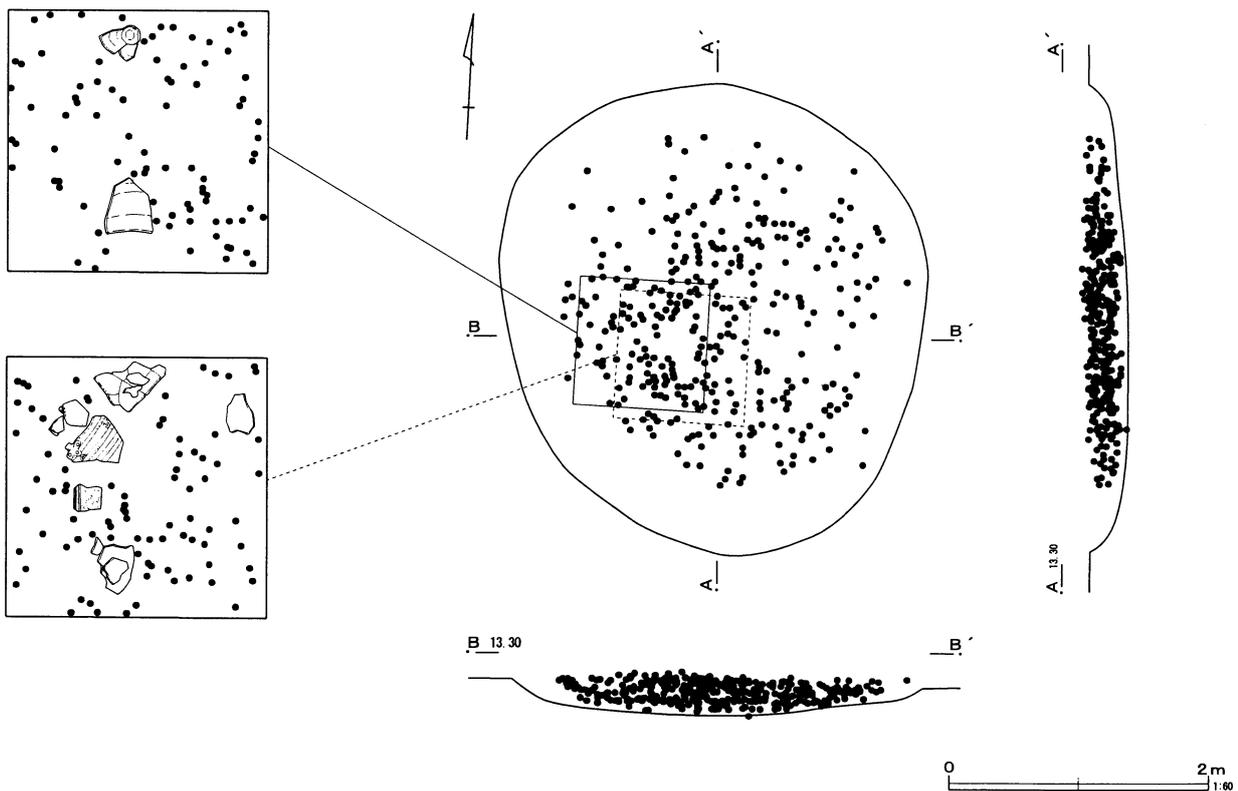
覆土中から多量の遺物が出土しており、特に床面直上では復元個体を含む土器のセットが出土した。

ローム層の上面でプランを検出したが、上層の盛土中からも多量の遺物が出土している。したがって本遺構は、環状盛土遺構の形成過程で、盛土を切って構築されたものと思われる。

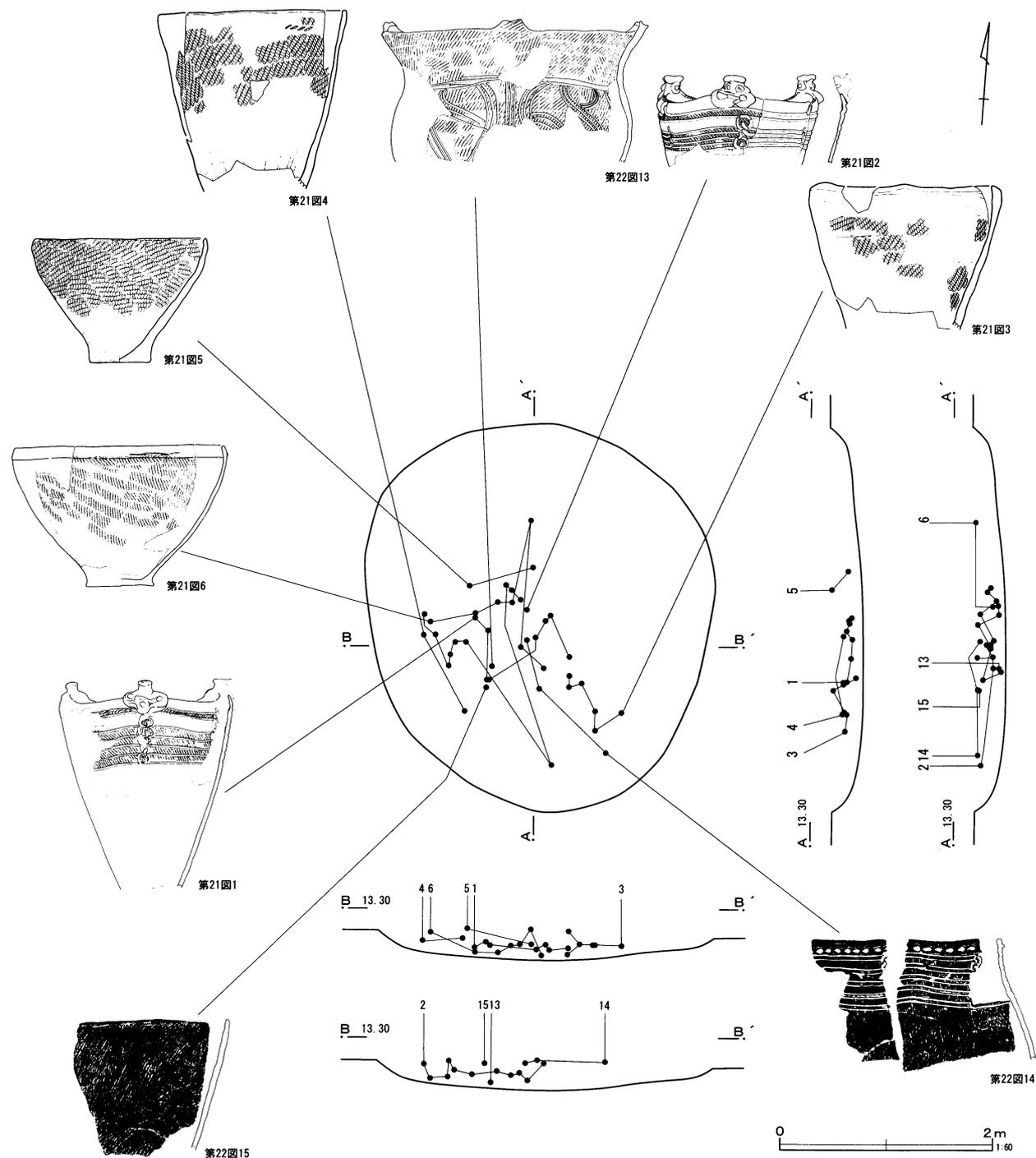
出土遺物は縄文時代後期中葉の加曽利B1～B2式期の土器が主体であり、竪穴状遺構の構築時期もこの時期に比定される。



第18図 第1号竪穴状遺構



第19図 第1号竪穴状遺構遺物出土状況(1)



第 20 図 第 1 号竖穴状遺構遺物出土状況 (2)

第 1 号竖穴状遺構出土遺物 (第 21 ~ 24 図)

土器

1 は大型の精製深鉢土器である。

やや内湾しつつ単調に立ち上がる器形で、口縁が「く」の字に内屈、内面に段を持つ。

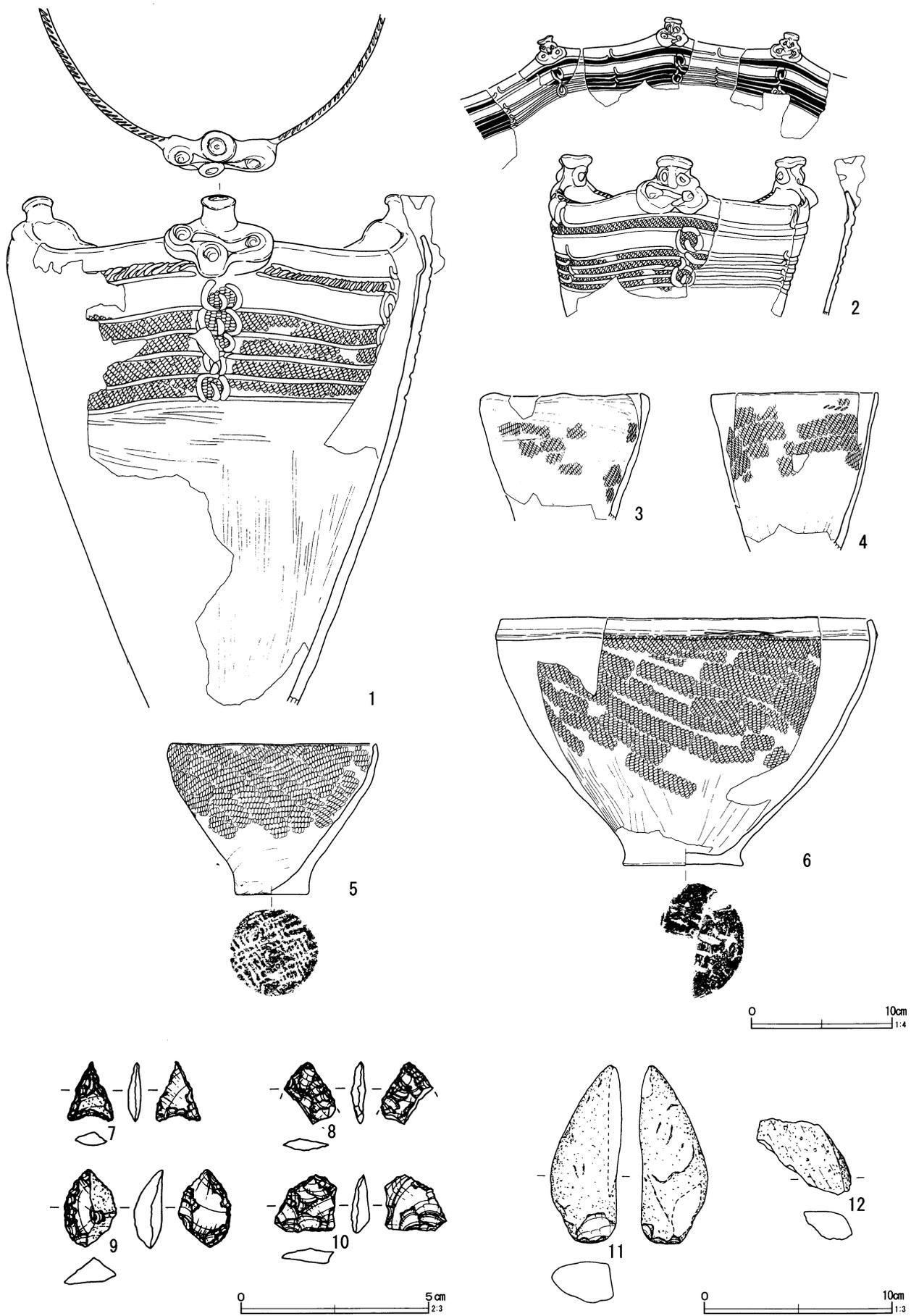
ゆるやかな 3 単位の波状口縁を呈し、波頂部に指頭圧痕を伴う円柱状の突起を配する。口縁下を斜位

の刻みを伴う平行沈線によって区画するが、隆帯は用いない。

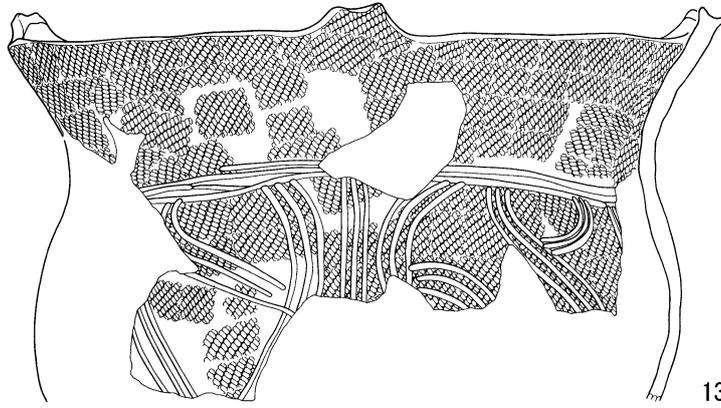
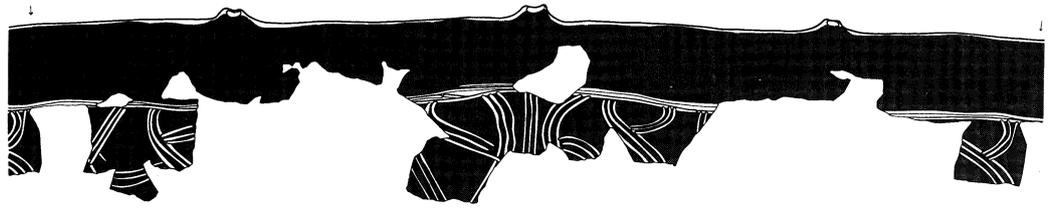
胴上半部に横位平行沈線文を持ち、内部に縄文が充填される。波頂部下の平行沈線間には「の」字状の単位文が施文される。

2 は 1 に似るが、やや小型の深鉢土器である。

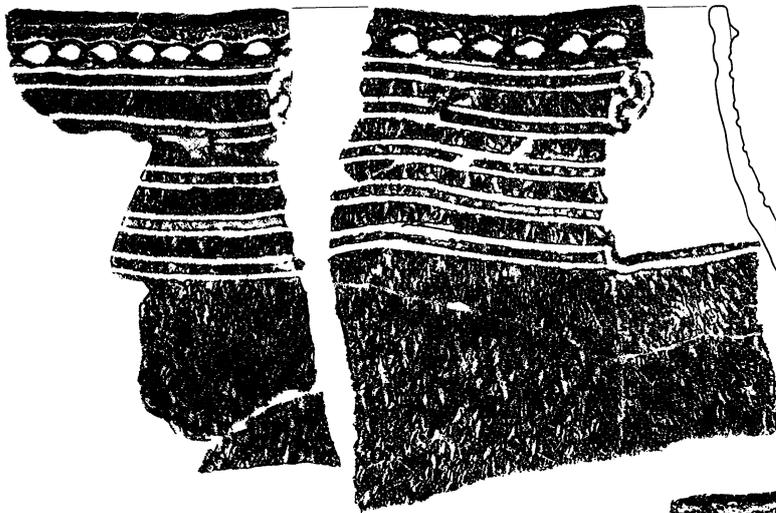
1 に比べやや直線的に立ち上がるコップ状の器形



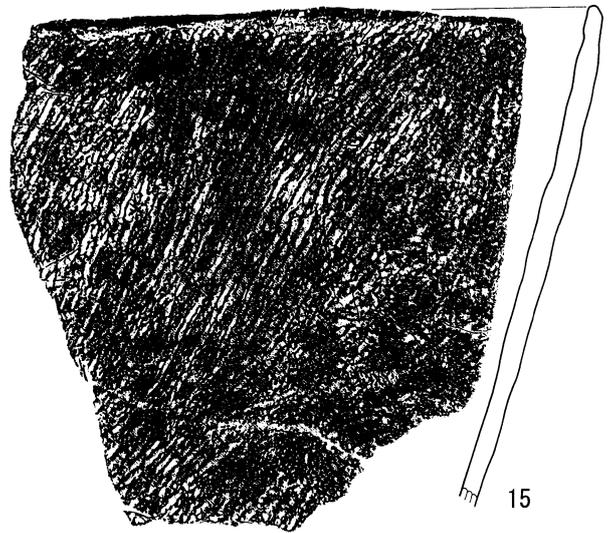
第 21 图 第 1 号竖穴状遺構出土土器 (1)



13

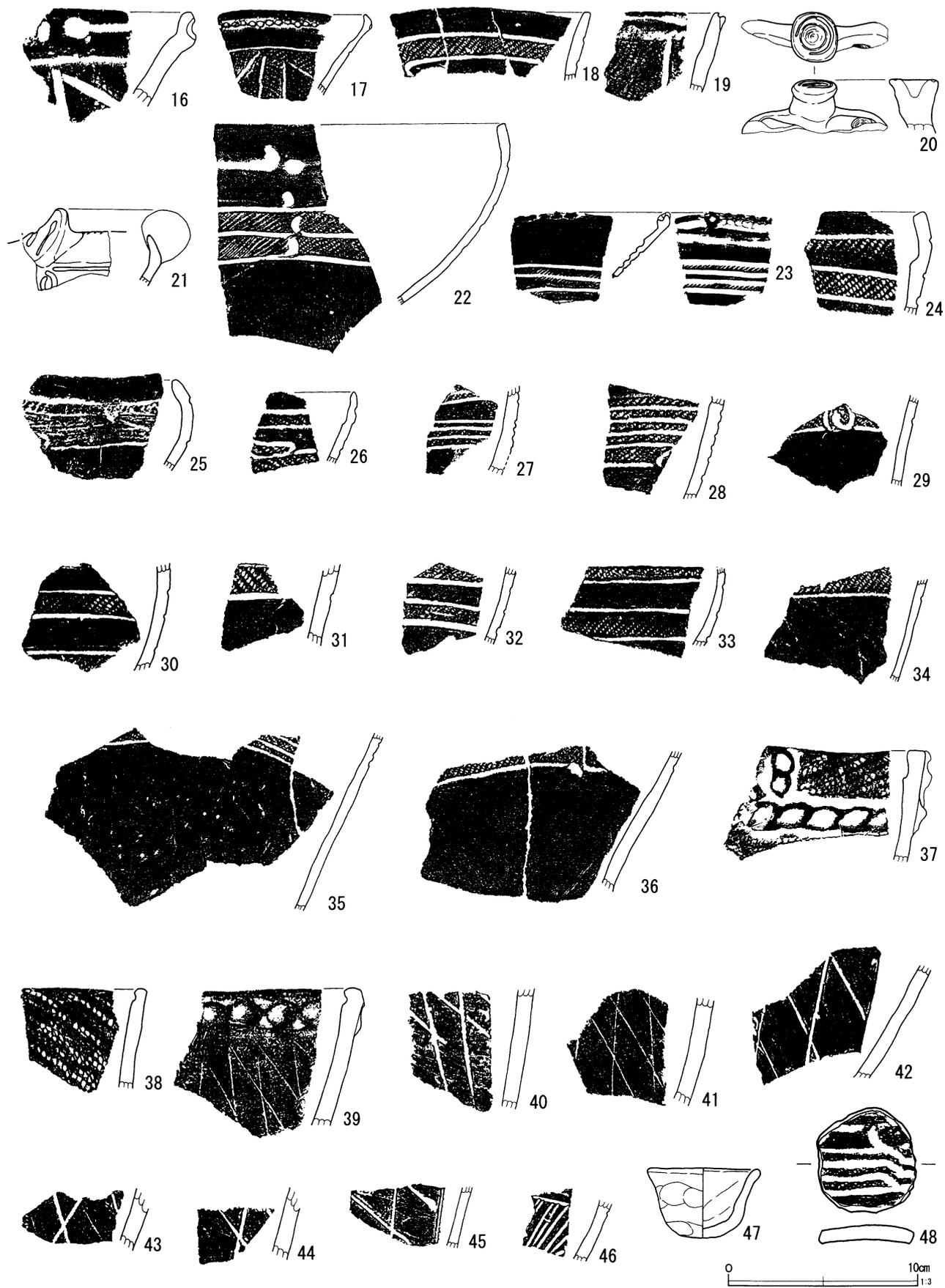


14

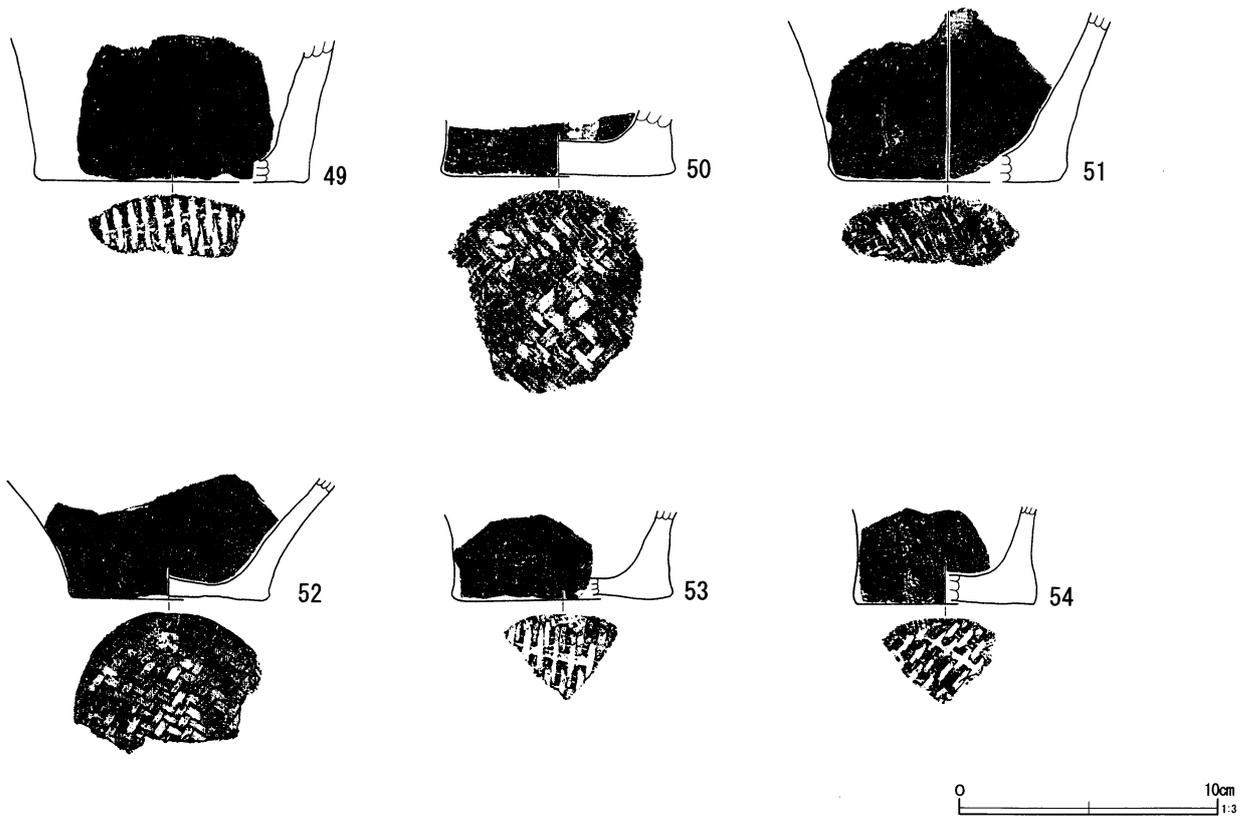


15

第 22 图 第 1 号竖穴状遺構出土土器 (2)



第23图 第1号竖穴状遺構出土土器(3)



第24図 第1号竖穴状遺構出土土器(4)

であると思われ、口縁が「く」の字に内屈し、内面に段を持つ。

ゆるやかな3単位の波状口縁を呈し、波頂部に刺突を伴う円柱状の突起を配する。口縁下を帯縄文で区画し、隆帯は用いない。

胴上半部に5条からなる横位平行沈線文を持ち、内部R L単節横位回転の縄文が充填される。波頂・波底部下では横L字の区切り文が交差し、特に波頂部下では「の」の字状の単位文が部分的にこれに代わっている。

焼成はやや良好で、シルト質の精緻な器壁である。

3はコップ形の小型粗製深鉢である。ほぼ直線的に開き、口端は肥厚して、外削ぎ状となる。

4も小型粗製深鉢である。口縁から胴下半部にかけて残存する。3に類似するがやや薄手で、口縁の肥厚も弱い。胴上半部を中心に縄文が施文される。

5は小型の鉢である。口縁から底部まで大部分が残存する。底部直上に括れを持ち、そこから口縁にかけてやや内湾しつつ立ち上がる。

口縁直下から胴部中段にかけて縄文が施され、胴下半部には斜位の研磨が施される。

6は半精製の鉢形土器である。底部直上に括れを持ち、そこから口縁にかけてやや内湾しつつ立ち上がる。口端はやや内屈し、断面内削ぎ状となる。

口縁直下を断面三角形の隆帯で区画し、区画より下に縄文が施文される。

13は半粗製の深鉢である。水平口縁で、台形の小突起を3単位配する。突起の状面には指頭による浅い圧痕が観察される。

頸部と胴部の境に括れを持つ断面S字状の器形で、括れの部分に平行沈線が巡り、文様はこの区画から下に施文される。

口縁の小突起に対応する部分に縦位の平行線が垂下し、器面を縦位に分割する。この縦位分割により生じたスペースには、やはり平行沈線による入組み状のモチーフが充填されている。

口縁以下ほぼ全面に縄文が施文される。

本資料は大半が検出面より上位の盛土層中から出

土した破片が接合したものであり、必ずしも第1号
竪穴状遺構に伴うものではない。

系統上は堀之内式期の鉢形土器の延長線上にある
ものといえるが、口縁の突起が3単位を構成する点
や、鉢形を逸脱した縦長の器形などに、加曾利B式
の半粗製土器との関連がうかがわれる興味深い資料
であるため、敢えて盛土中の一括資料とせず、遺構
との関連で図示することとした。

第23図以下は破片資料で、14～17は堀之内式で
ある。

20は1の個体にみられる円筒状の突起の断片で
ある。21は小型深鉢の口縁部で、円盤状の小突起
がみられる。口端に刻みが施され、胴部には対弧状
の区切り文が描かれる。

22～36は横位平行沈線文の口縁部および胴部で
ある。沈線間には横位回転の縄文が充填されるが、
29・31・32等では縄文充填部と無文部が重畳してい
る。

23は外文+内文をもつ口縁部で、浅鉢の可能性
がある。22・28は小弧状の区切り文が交差し、口
縁直下の区画線にも同様のモチーフがみられる。

36はクランク状の直線的な区切り文である。29
には「の」の字状の単位文がみられる。37は指頭
圧痕を伴う紐線文で口縁下を区画する半粗製の土
器である。38は縄文のみ施文する深鉢だが、口縁
内面に1条の沈線が巡る。

39～45は斜格子文である。39の口縁部は外面直
下に指頭圧痕ある隆帯を持ち、内面にも1条の沈線
が巡る。

46は細密な集合沈線がみられる。注口土器か、

あるいは堀之内2式の精製深鉢であるかもしれない。
49～54は深鉢底部である。いずれも裾が張り出し、
外面無文で底面には網代圧痕が残る。

47は手づくねのミニチュア土器、48は土製円盤
である。

石器

7・8は石鏃である。

7はほぼ完形の無茎凹基の石鏃で、腹面に広く最
終剥離面を残している。

石材は黒曜石を使用しており、長さ16.0mm・幅
12.5mm・厚さ3.5mm、重さ0.5gである。

8は無茎平基鏃と考えたが、基部から左脚部を広
く折損しており、有茎平基鏃の可能性もある。側縁
に整然とした交互剥離を残している。

石材は黒曜石を使用しており、長さ16.5mm・幅
14.0mm・厚さ4.0mm、重さ0.6gである。

9・10は石鏃未製品と思われる。

9は右側縁に自然面を残し、左側縁に交互剥離を
施している。

石材は黒曜石を使用しており、長さ20.5mm・幅
14.0mm・厚さ7.5mm、重さ1.5gである。

10は左側縁から脚部にかけて交互剥離がみら
れる。長さ15.5mm、幅16.5mm、厚さ5.0mm、重さ
1.1gである。

11は砂岩製の敲石である。紡錘形の礫の一端
を打面としており、長さ95mm、幅37.0mm、厚さ
31.0mm、重さ113.7gである。

12は砂岩製の磨石片である。一方の磨面と面取
りされた側縁部が残る。長さ24.0mm、幅20.5mm、
厚さ21.0mm、重さ10.8gである。

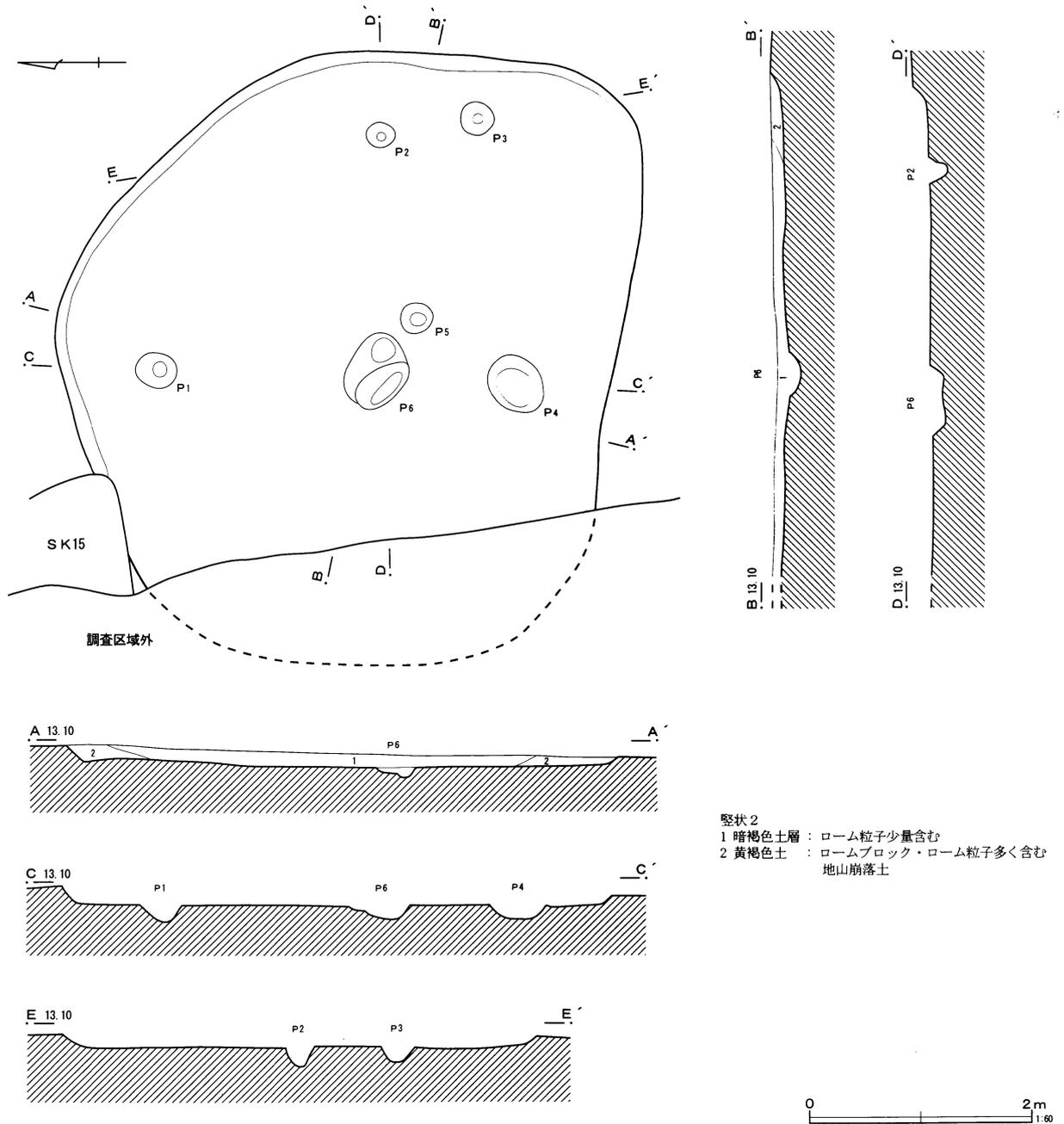
第2号竖穴状遺構 (第25・26図)

P・Q-7に所在する。西壁が調査区域外に存在する。

当初竖穴住居跡として調査を開始したが、炉跡が発見されなかったため、正確不明の竖穴状遺構として

提示することとした。

不整楕円形の竖穴状遺構で、主軸方向はN-47°-Wを指す。計測可能な部分の最大径6.1mを測る。壁高は最大0.18mで、立ち上がりは比較的緩やかである。



第25図 第2号竖穴状遺構

第4表 第2号竖穴状遺構 柱穴計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)
Pit 1	0.36	0.34	0.17	Pit 4	0.52	0.48	0.11
Pit 2	0.24	0.23	0.18	Pit 5	0.3	0.28	0.22
Pit 3	0.32	0.3	0.15	Pit 6	0.68	0.54	0.13

※括弧つき数字は切り合い等で計測不明なもの。



第26図 第2号竪穴状遺構遺物出土状況

炉跡は発見されなかった。P6としたピットが床面ほぼ中央に存在するが、内部から焼土は検出されなかった。また、貼り床状の踏み締めりも観察されなかった。

床面上から6本のピットが検出された。個別の規模は第4表に提示した。掘り込みは0.11m～0.22mといずれも比較的浅く、住居跡の支柱穴とは考えにくい。

覆土中からは遺物が多く出土したが、土器に関してはいずれも小破片であった。

縄文時代後期中葉の加曾利B2式が比較的まとまって出土しており、遺構の所属時期もこの時期に比定できよう。

第2号竪穴状遺構出土遺物 (第27・28図)

土器

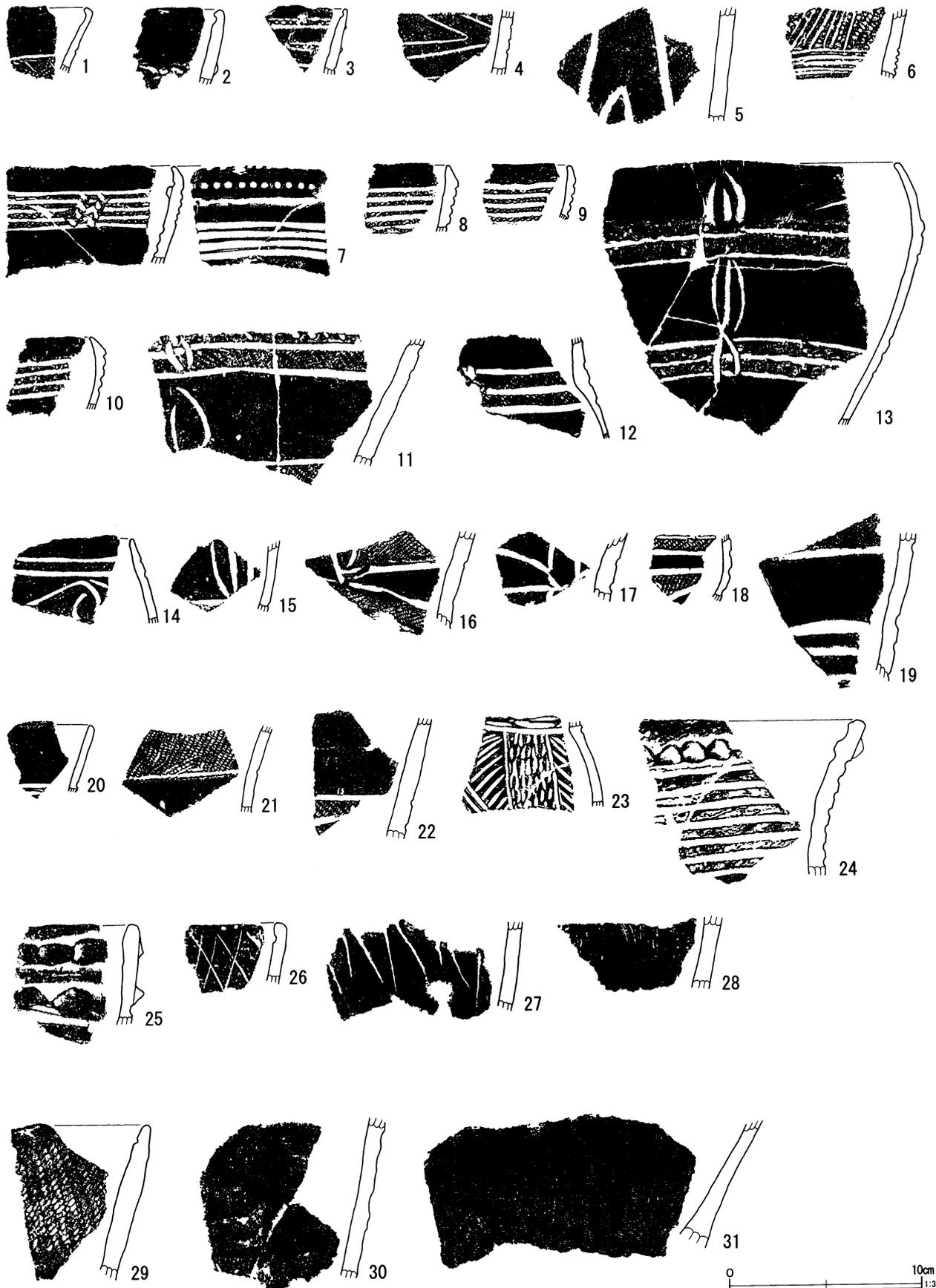
1～6は後期前葉の堀之内2式である。

1～3は小型精製深鉢の口縁部である。1は口縁下に隆帯による区画を持たず、口縁部無文帯が胴上半部の帯縄文に直に接している。

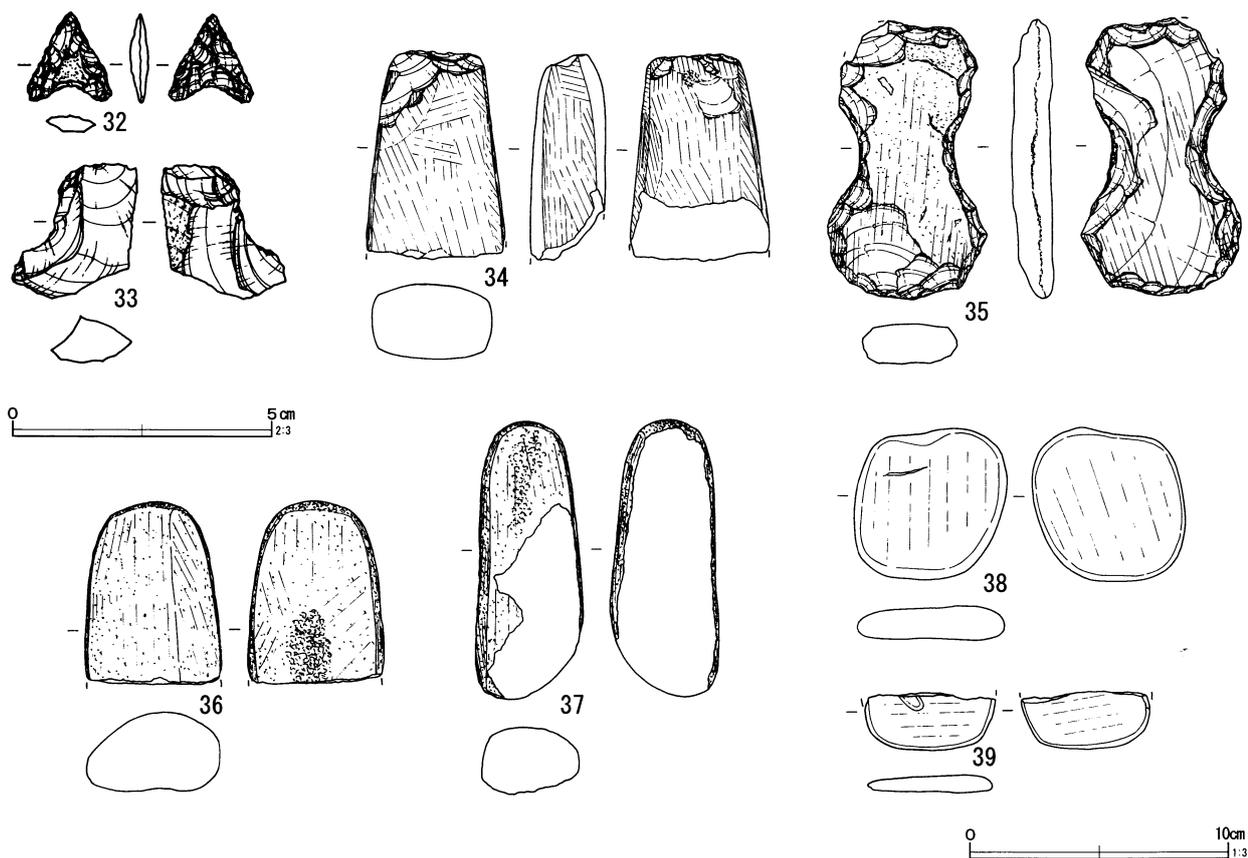
2は斜位の刻みを有する隆帯によって口縁下を区画する。口唇内面に1条の沈線を巡らせている。3は口縁下を2条の隆帯で区画し、内面に1条の沈線を巡らせる。

4は胴部破片で、三角形のパネル状の文様が描かれる。5は相当大型の個体とみられ、堀之内1式期の可能性もある。

7～10は加曾利B1式である。いずれも口縁部で、7は浅鉢、8以下は深鉢か、ボウル状の鉢の可能性



第 27 图 第 2 号竖穴状遺構出土土器



第28図 第2号竪穴状遺構出土石器

もある。7は内外両面、その他は外面のみ横位平行沈線文が描かれる。

11～22は加曾利B2式である。13は深鉢口縁部である。胴上半部に最大径を持ち、口縁が大きく内湾する。上下二段の横位平行沈線と、対弧状の単位文が描かれる。11・15等も類似の文様が描かれる胴部である。

16・17等は横位の弧線文と、対弧状の単位文の組み合わせである。14は斜行する沈線末端から吊鉤状の単位文が垂下する。

12は比較的小型の深鉢で、胴下半部が膨れ、胴部中段に括れを持つ。

23は注口土器か、小型の広口壺などの特殊な器形と思われる。直線的な区画の内部に集合沈線や列点文が充填される。

24・25は紐線文の深鉢口縁部、26・27は無文地

に単沈線による斜格子文が描かれるものである。28は櫛歯状工具による集合沈線が描かれる。いずれも加曾利B式に伴う半粗製の土器である。

29はR L単節横位回転の縄文のみ施文される口縁部であるが、口唇内面に1条の沈線が巡る。

30・31はいずれも無文の胴部で、篋状工具による研磨がみられる。

石器

32は石鏃である。33は刃部加工を持つ剥片か、石鏃の未製品とも考えられる。

34は定角型磨製石斧で、刃部を欠損している。35は分銅形の打製石斧である。背面に自然面、腹面に最終剥離面を広く残している。

36～39は磨石である。36・37は周縁が面取り加工され、38・39はほぼ自然礫の状態で使用されている。

(3) 土壌

盛土が最も厚みを増す調査区北縁部分を中心に17基が検出された。

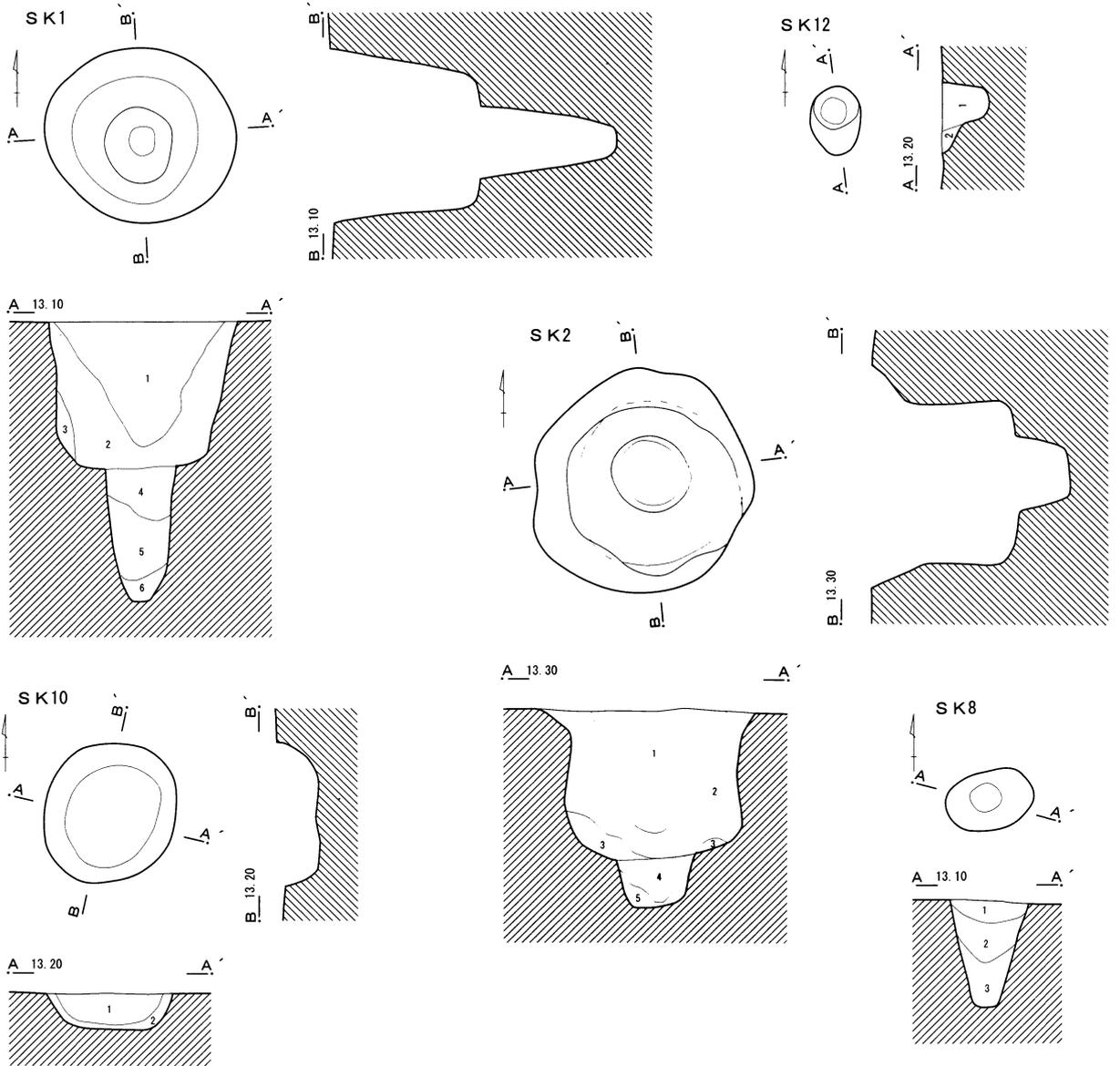
第1号土壌 (第29・30図)

O・P-10区に所在する。円形の土壌で、長軸1.6m・短軸1.48mを測り、主軸方向N-86°-E

を指す。壁は垂直に近く、底面平坦なビーカー状の土壌である。

底面中央に柱穴状のピットが検出された。ピットの平面形は南北に主軸を持つ長楕円形で、長軸0.65m、深さ1.15mを測る。

ピットの覆土は再堆積のロームブロック・ローム



SK 1

- 1 極暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 2 暗黄褐色土層：ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む
- 3 暗黄褐色土層：崩落したローム
- 4 暗黄褐色土層：ソフトロームを主体とする 縮まり弱い (ローム崩落土)
- 5 褐色土層：崩落したロームを多く含む 灰色粒粘土を少量含む 縮まり弱い
- 6 暗褐色土層：ローム粒子を微量含む 縮まり弱い

SK 2

- 1 極暗褐色土層：ロームブロックやや多く含む
- 2 暗黄褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 3 暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子若干含む
- 4 暗黄褐色土層：ロームブロック多く含む ローム粒子少量含む 縮まり弱い
- 5 暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子少量含む 縮まり弱い

SK 8

- 1 褐色土層：ローム粒子少量含む
- 2 褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
- 3 暗褐色土層：ローム粒子微量含む

SK 10

- 1 暗褐色土層：ローム粒子多く含む
- 2 黄褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む (崩落土)

SK 12

- 1 暗褐色土層：ローム粒子・炭化物粒子少量含む
- 2 黄褐色土層：ロームを主体とする (崩落土)

0 2m
1:60

第29図 土壌 (1)

粒子が満たしており、柱痕らしきものはみられなかった。遺物も出土していないため、このピットの性格は不明である。

ピットを除いた本体部分の深さ 1.26 m、ピットを含めた深さは 2.41 m を測る。

遺物は覆土上層でまとまって出土している。

大半が微細な土器破片で時期判別が困難だが、堀之内 2 式とみられるものが数点存在した。したがって本土壌の時期も後期前葉と考えられる。

覆土は下層を中心に多量のロームブロックを含んでおり、前述の遺物の出土状況を勘案しても、廃絶後ある程度まで人為的な埋め戻しが行なわれた可能性が高い。

第 2 号土壌 (第 29・30 図)

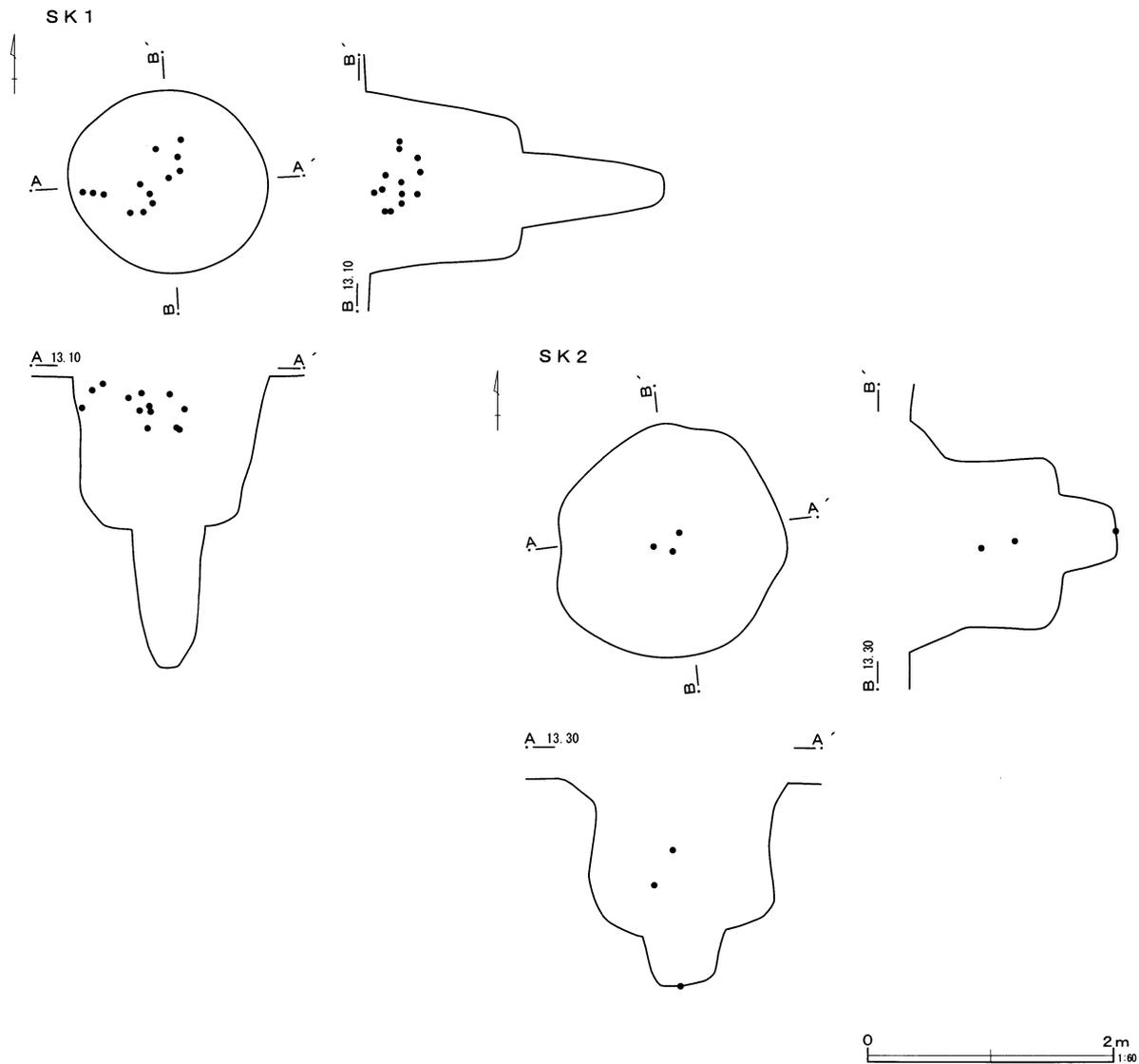
P-10 区に所在する。円形の土壌で、長径 1.9 m、短径 1.78 m を測る。主軸方向は N-64°-E を指す。

開口部は掘り鉢状に開くが、壁中段で「く」の字に屈曲し、底面付近では裾広がりとなる。袋状ないし弱いフラスコ状の土壌である。

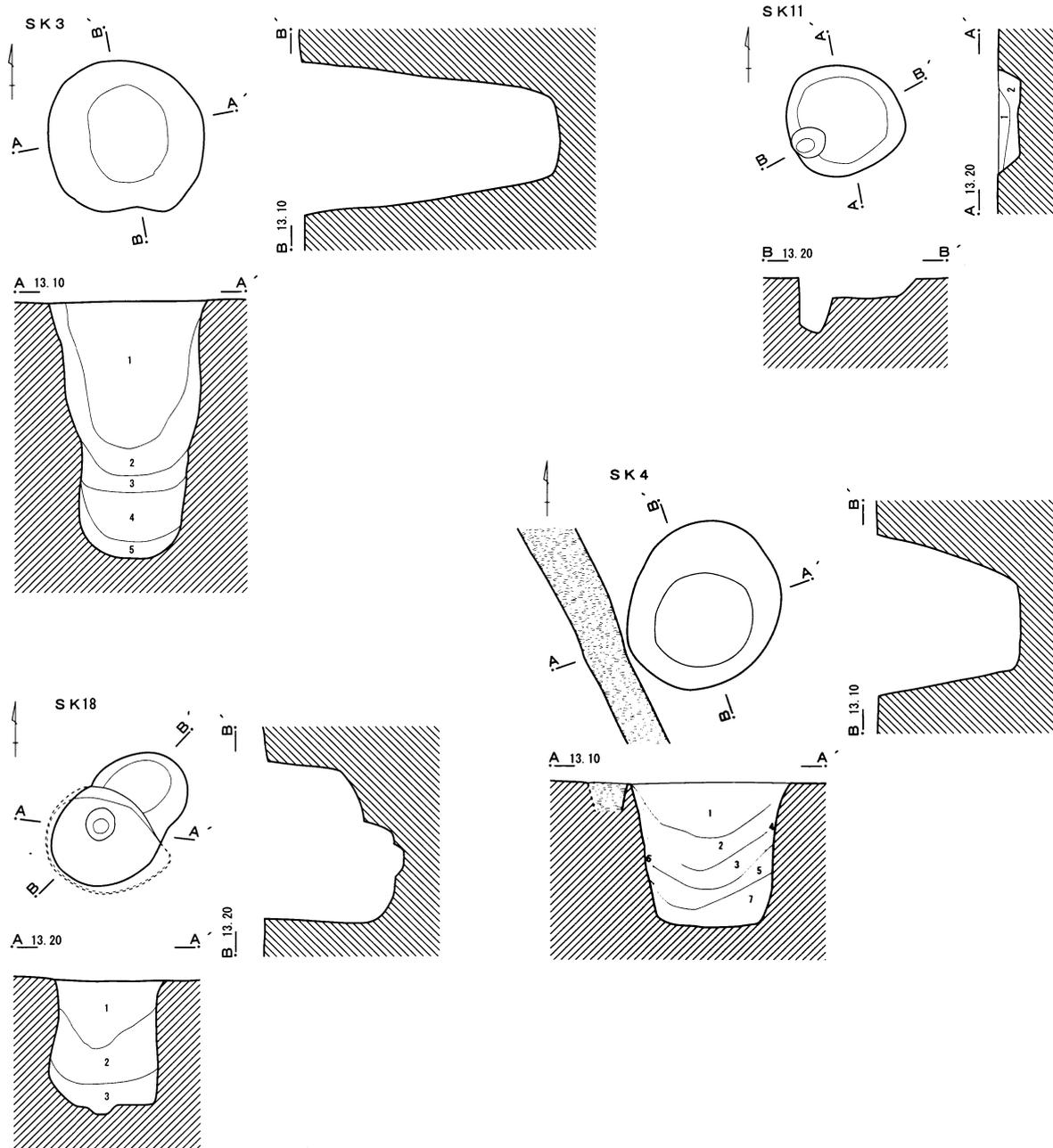
底面は平坦で、中央にピットが検出された。

ピットは主軸が N-45°-W を指す楕円形で、長軸 0.66 m、深さ 0.41 m を測る。第 1 号土壌の壙底ピットと比べると口径に比較して深度が浅く、柱穴状を呈していない。

ピットの覆土は上層を中心に再堆積のロームブロックが満たしており、柱痕らしきものはみられない。



第 30 図 第 1・2 号土壌遺物出土状況



SK 3

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子を多く含む 炭化物粒子を微量含む
- 2 淡黄褐色土層 : ロームブロックを多く含む ローム粒子を少量含む
- 3 暗褐色土層 : ローム粒子を少量含む
- 4 暗黄褐色土層 : 崩落ローム層
- 5 黒灰褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・白色粘土ブロック若干含む

SK 4

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 多量の遺物を包含
- 2 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子多く含む
- 4 暗黄褐色土層 : ローム粒子極めて多く含む
- 5 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子少量含む
- 6 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む
- 7 暗黄褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む

SK 11

- 1 褐色土層 : ローム粒子少量含む
- 2 黄褐色土層 : ロームを主体とする (崩落土)

SK 18

- 1 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量含む ローム粒子多く含む
- 2 暗黄褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子多く含む
- 3 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む



第 31 図 土 壌 (2)

底面近くで第40図11の土器片が出土したほか、特徴的な遺物の出土もなかったため、このピットの性格は不明である。

本体部分の深さ1.3m、ピットを含めた深さ1.71mを測る。

遺物は覆土全体からごく少量が出土している。

時期判別可能なものはいずれも後期前葉～中葉のもので、前述の墳底ピットの出土遺物からみても、本土墳の時期は後期中葉以前に比定し得る。

第3号土墳 (第31・32図)

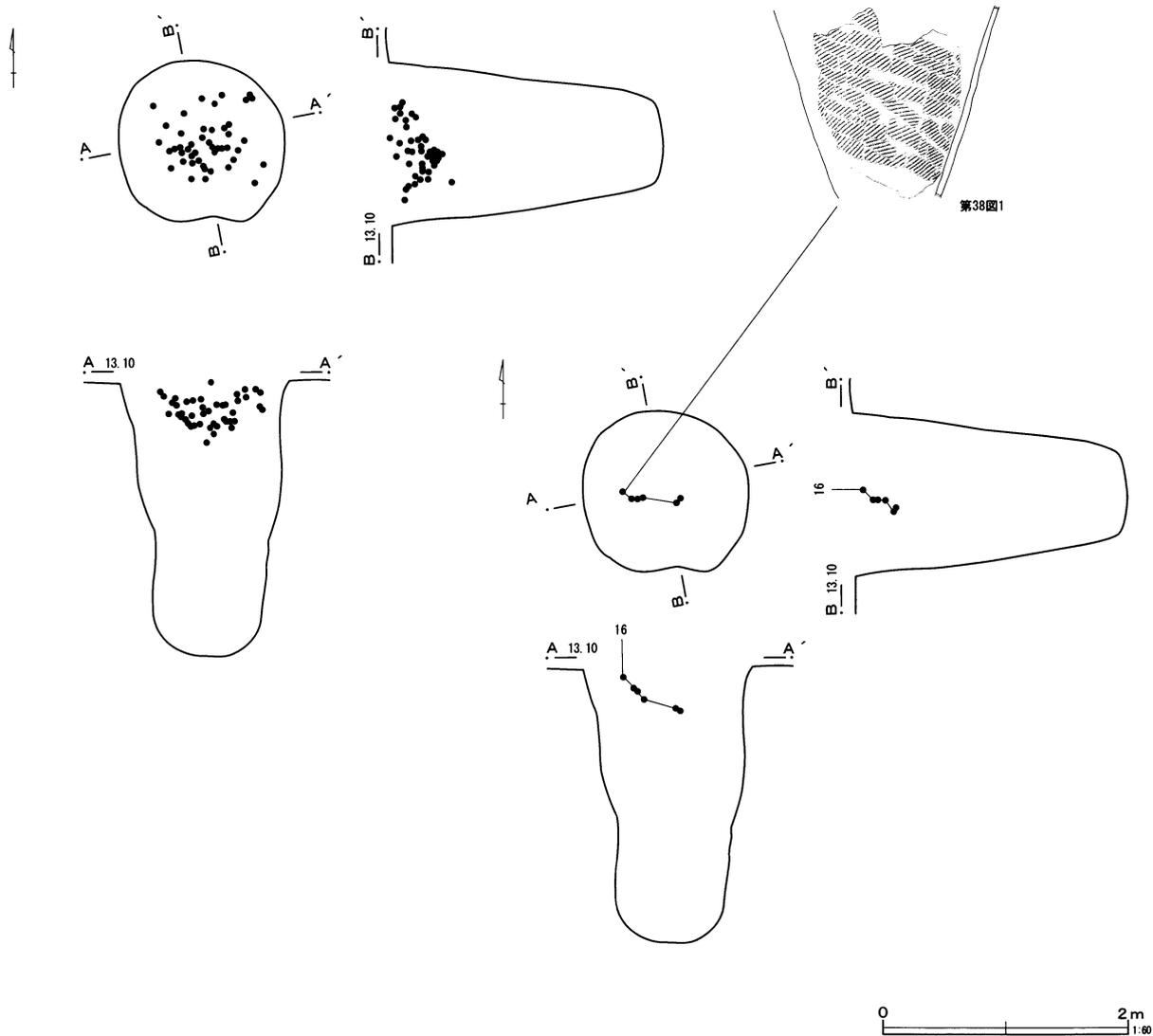
P-10区に所在する。円形の土墳で、長径1.34m、短径1.26m、主軸方向はN-78°-Eを指す。

壁はほぼ垂直に近い角度で立ち上がり、検出面か

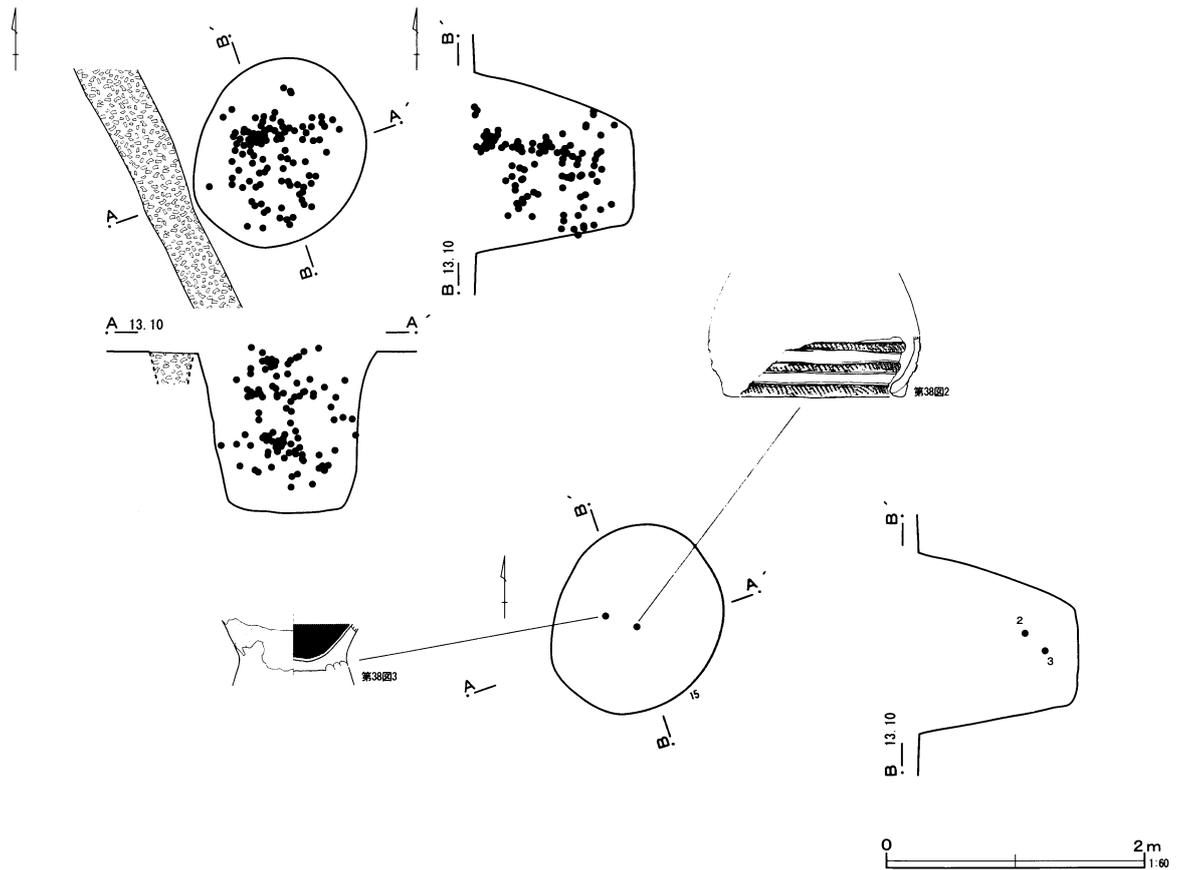
ら深さ1.3m前後でゆるい段を形成している。底面はやや丸底に近く、底面にピット等の施設は伴っていない。深さは2.27mを測る。

遺物は検出面から深さ0.8mまでの覆土上層でまわって出土している。主体をなすのは堀之内2式の土器破片であり、これに若干の加曾利B1式が混じる。したがって本土墳の所属時期も後期中葉以降に比定される。

覆土にロームブロック・ローム粒子を多く含んでおり、また、前述の遺物の出土状況からも、廃絶後ある程度まで人為的な埋め戻しが行なわれた可能性が高い。



第32図 第3号土墳遺物出土状況



第33図 第4号土壌遺物出土状況

第4号土壌 (第31・33図)

P-8区に所在する。円形の土壌で、長径1.50m、短径1.24m、主軸方向はN-18°-Eを指す。

壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面平坦なピッカー形の土壌である。底面にピット等の施設は検出されていない。

深さ1.25mを測る。

覆土は中層以下を中心にロームブロック・ローム粒子を多く含み、暗褐色土と暗黄褐色土が部分的に互層を成している。このため、廃絶後ある程度まで人為的に埋め戻しが行なわれた可能性が高い。

遺物は覆土全体からほぼまんべんなく出土している。時期は後期前葉から後期後葉まで幅広く出土しているが、第38図2の土器をはじめとして、新しい時期で安行1a式が比較的まとまっている。

したがって本土壌の時期も概ね後期後葉に比定さ

れる。

第5号土壌 (第34図)

Q-11・12区に所在する。円形の土壌で、長径0.94m、短径0.90m、深さ0.25mを測る。主軸方向はN-19°-Eを指す。

遺物は縄文時代後期中葉～末葉のものが出土しているが、縄文時代であることが確実な他の土壌とは覆土の状態が異なっており、より新しい時代のものである可能性もある。

第6号・第7号土壌と近接し、一直線上に並んでいるが、覆土中に柱痕らしきものはみられず、規模や形態からも柱穴とは考えられない。

第6号土壌 (第34図)

Q-11区に所在する。円形の土壌で、長径1.34m、短径1.14m、深さ0.78mを測る。主軸方向はN-66°-Wを指す。

遺物は縄文時代後期中葉～末葉のものが出土しているが、縄文時代であることが確実な他の土壌とは覆土の状態が異なっており、より新しい時代のものである可能性もある。

第5号・7号土壌と近接し、一直線上に並んでいるが、覆土中に柱痕らしきものはみられず、規模や形態からも柱穴とは考えられない。

第7号土壌 (第34図)

Q-11区に所在する。円形の土壌で、長径1.26m、短径1.10m、深さ0.58mを測る。主軸方向はN-18°-Wを指す。

遺物は縄文時代後期中葉～末葉のものが出土しているが、縄文時代であることが確実な他の土壌とは覆土の状態が異なっており、より新しい時代のものである可能性もある。

第5号・6号土壌と近接し、一直線上に並んでいるが、覆土中に柱痕らしきものはみられず、規模や形態からも柱穴とは考えられない。

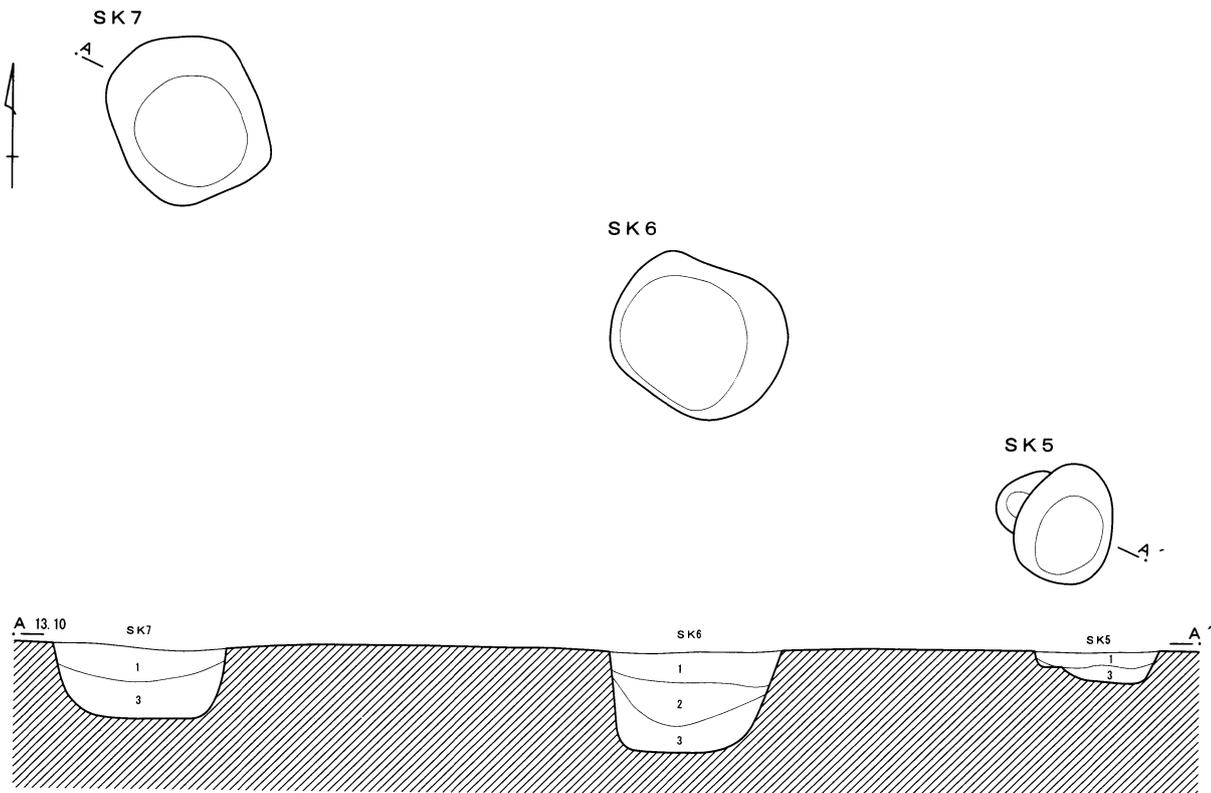
第8号土壌 (第29図)

P・Q-10区に所在する。楕円形の土壌で、長径0.74m、短径0.56mを測る。主軸方向はN-69°-Eを指す。

壁はやや外傾して挿り鉢状に立ち上がり、底面はほぼ平坦である。底面にピット等の施設は伴っていない。深さは0.92mを測る。

覆土は中層付近でロームブロックを多く含む。柱痕らしきものは観察されなかった。

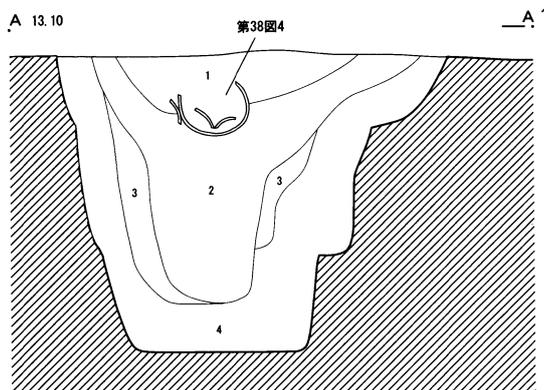
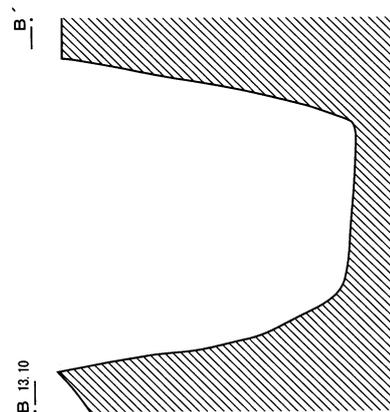
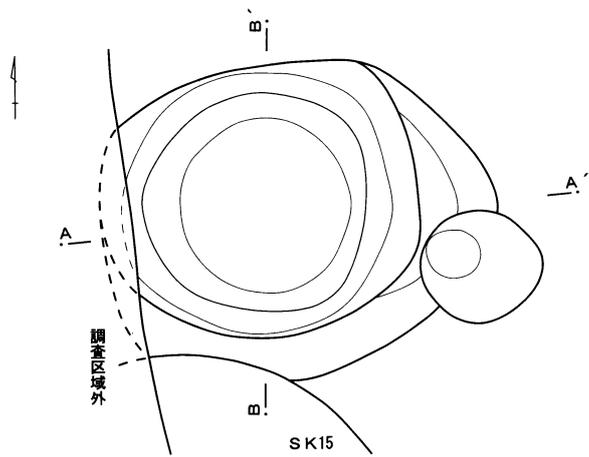
遺物は後期前葉から中葉にかけての土器片が若干出土しており、本土壌の時期もこの前後に比定される。



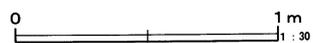
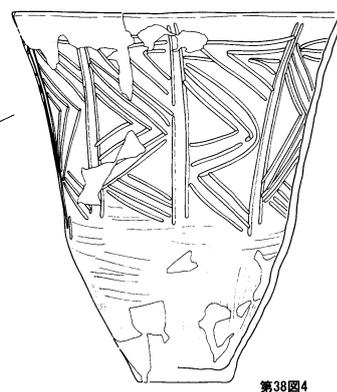
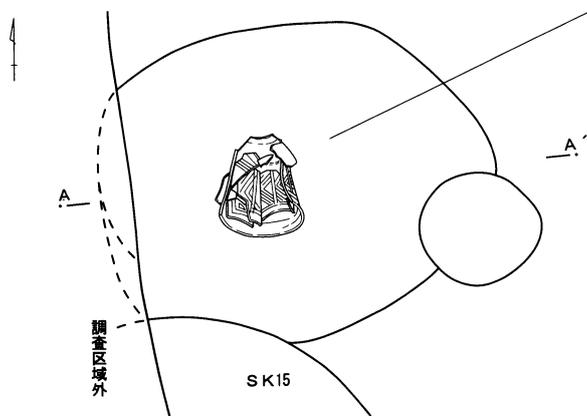
- SK 5～7
 1 淡褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
 2 暗褐色土層：ロームブロック多く含む
 3 黄褐色土層：ロームを主体とする

0 2m
1:50

第34図 土壌 (3)



- SK13
- 1 暗褐色土層：ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子微量含む
 - 2 褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
 - 3 褐色土層：ロームブロック少量含む ローム粒子やや多く含む
 - 4 黄褐色土層：ロームを主体とする（崩落土）



第35図 第13号土壌遺物出土状況

第10号土壙 (第29図)

O-12区に所在する。円形の土壙で、長径1.32 m、短径1.08 mを測り、主軸方向はN-15°-Eを指す。

壁は比較的ゆるやかに立ち上がり、底面は平坦で、ピット等の施設は伴っていない。深さ0.30 mを測る。

覆土はローム質で、遺物はほとんど出土していない。

第11号土壙 (第31図)

P-12区に所在する。円形の土壙で長径1.00 m、短径0.96 mを測る。主軸方向はN-60°-Eを指す。

壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面はほぼ平坦である。深さ0.18 mを測る。

南西壁際に小ピットを検出した。ピットは長軸0.3 mの楕円形で、壙底からの深さ0.3 mであった。土壙とピットの関係については明らかにし得なかったが、同様の柱穴状ピットは周辺にも多数存在するため、別時期の切り合いである可能性もある。

覆土はローム質で、遺物は縄文時代後期中葉とおもわれる土器片が少量出土した。

第12号土壙 (第29図)

P-12区に所在する。長径0.60 m、楕円形の土壙で短径0.44 m、主軸方向はN-9°-Wを指す。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、南壁にテラスを持つ。底面平坦で、ピット等の施設は伴っていない。深さ0.39 mを測る。

覆土に少量のロームを含み、遺物は出土していない。周辺の柱穴状ピットと同様のものである可能性もある。

第13号土壙 (第35図)

P-7区に所在する。楕円形の土壙で、長径1.50 m、短径1.23 m、ほぼ東西に主軸を持つ。

南壁部分で第15号土壙と切り合い関係にあるが、両者の新旧関係は不明である。また、西壁の一部が発掘調査区の壁に掛かるが、覆土はほぼ完掘することができた。

概ね3段階の掘り方を持つが、断面観察の結果、

同時期のものと判断された。開口部が掘り鉢状に開くほかは垂直に近い立ち上がりで、底面は平坦なピーカー状の土壙である。底面にピット等の施設は伴っていない。深さ1.11 mを測る。

開口部の南東壁にピットが検出されたが、本土壙とは別個の遺構である可能性もある。口径0.48 m、深さ0.39 mを測る。覆土中～下層に多量のロームブロック・ローム粒子を含む。

検出面から深さ0.2 mのところでは第38図4の深鉢がほぼ完形で出土した。これは1層としたあまりロームを含まない暗褐色土と、2層とした多量のロームブロック・ローム粒子を含む褐色土との境界で横位の状態で出土したものである。

こうした土層観察の所見から、土壙の廃絶後ある程度の埋め戻しが行なわれた後に、埋土の上面に生じた窪みに土器が廃棄ないし埋置されたものと考えられる。

遺物は覆土上層を中心に出土しており、主体をなすのは縄文時代後期前葉の堀之内2式である。したがって、本土壙の時期も後期前葉に比定される。

第14号土壙 (第36図)

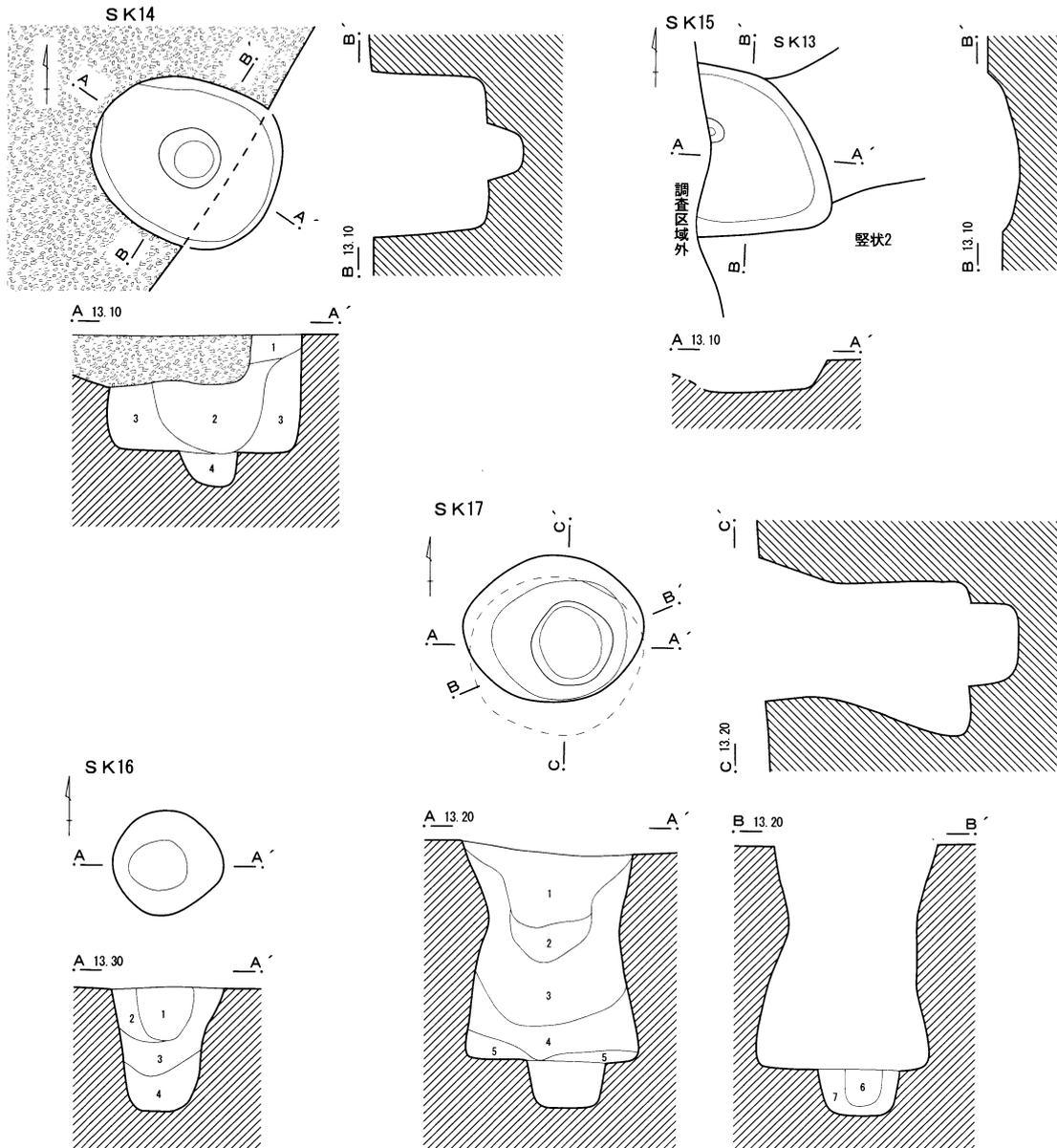
P-9区に所在する。円形の土壙で、南東縁の一部を除き、覆土上面のほとんどを近現代の攪乱により破壊されていた。長径1.54 m、短径1.32 m、主軸方向はN-57°-Wを指す。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面平坦なピーカー状の土壙である。深さ1.42 mを測る。

底面中央にピットを検出した。ほぼ円形のピットで、口径0.49 m、深さ0.25 mを測る。柱痕らしきものは観察されず、遺物も出土しなかったため、このピットの性格は不明である。

覆土は壁際の崩落土部分を除き、あまりロームを含まない。

遺物はいずれも土器の小破片で、後期前葉から後期後葉までのものが混在している。したがって本土壙の時期も、この時期幅のいずれかに比定されよう。



- SK14
- 1 褐色土層 : ローム粒子少量含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む 炭化物粒子を微量含む
 - 3 黄褐色土層 : ロームを主体とする (地山崩落土)
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子少量含む 締まり弱い

- SK16
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・焼骨粉若干含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む

- SK17
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子若干含む 炭化物少量含む
 - 2 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子少量含む 炭化物多く含む
 - 3 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む ローム粒子やや多く含む
 - 4 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子極めて多く含む
 - 5 暗灰黄褐色土層 : ロームブロック少量含む 灰褐色粘土ブロックやや多く含む 炭化物若干含む
 - 6 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む
 - 7 黒褐色土層 : ローム粒子・灰褐色粘土ブロック若干含む 炭化物少量含む

0 2m
1:60

第36図 土壌 (4)

第15号土壌 (第36図)

P-7区に所在する。南壁で第2号竪穴状遺構を切っている。また、北壁でも第13号土壌と重複関係にあるが、新旧関係は不明である。

プランの西半分が発掘調査区外にあるため、正確

な形状・規模は不明だが、N-60°-Wに主軸を持つ不整楕円形の土壌と思われる。計測可能部分の長径1.72m、短径1.38mを測る。

壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面は平坦な皿上の土壌で、深さ0.26mを測る。

当初、第13号土壌の一部として調査を開始したため、土層図が存在しないが、覆土は第13号土壌の第1層と類似していた。

遺物は後期前葉から後葉までの土器片が出土しているが、主体を占めるのは後期前葉の堀之内2式である。したがって本遺構の時期もこの前後に比定し得る。

第16号土壌 (第36図)

P-10区に所在する。不整形形の土壌で、長径0.90m、短径0.84mを測る。主軸方向はN-90°-Eを指す。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。ピット等の施設は検出されなかった。深さは0.98mを測る。

口径より深さが卓越する柱穴状の土壌であるが、土層断面上で柱痕らしきものは確認されなかった。

覆土は中・下層においてロームブロック・ローム

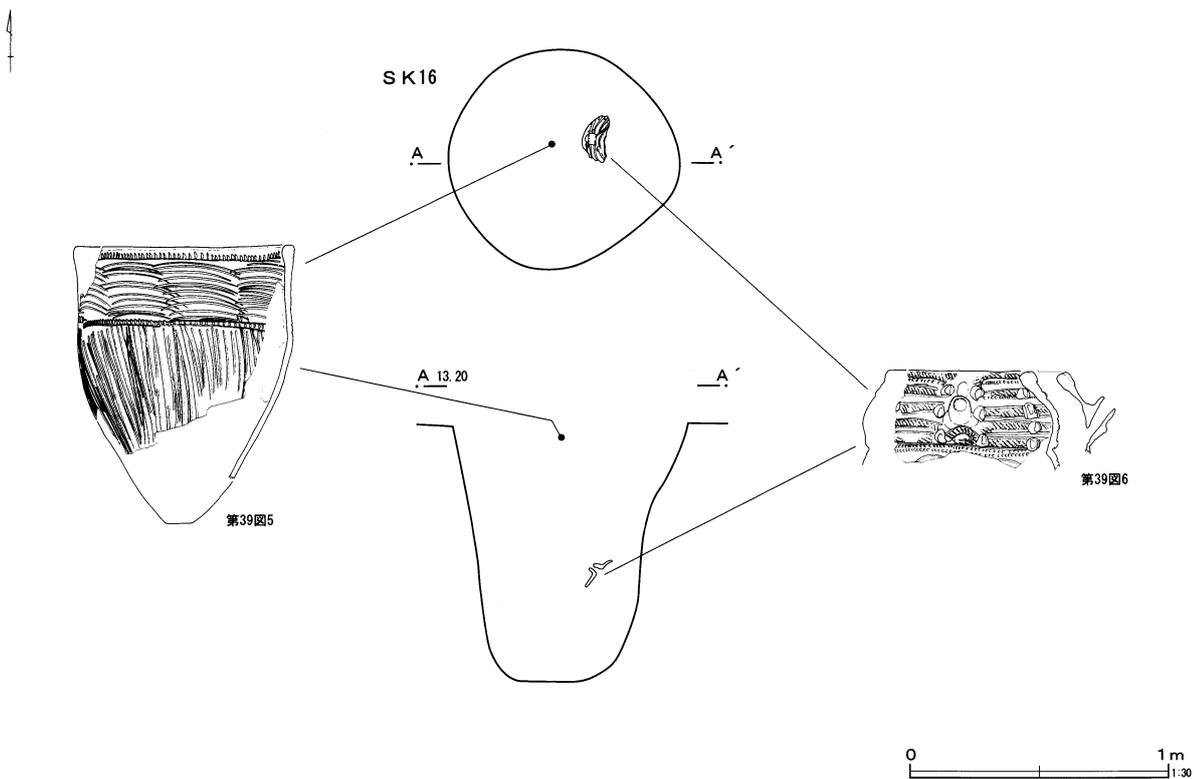
粒子を多く含み、廃絶後ある程度の埋め戻しが行われた可能性がある。

遺物は後期前葉～末葉の土器が出土しているが、第39図5の半粗製深鉢が覆土上層から、6の注口土器が下層から出土しており、いずれも後期末葉の安行2式であることから、本土壌の時期も後期末葉に比定される。

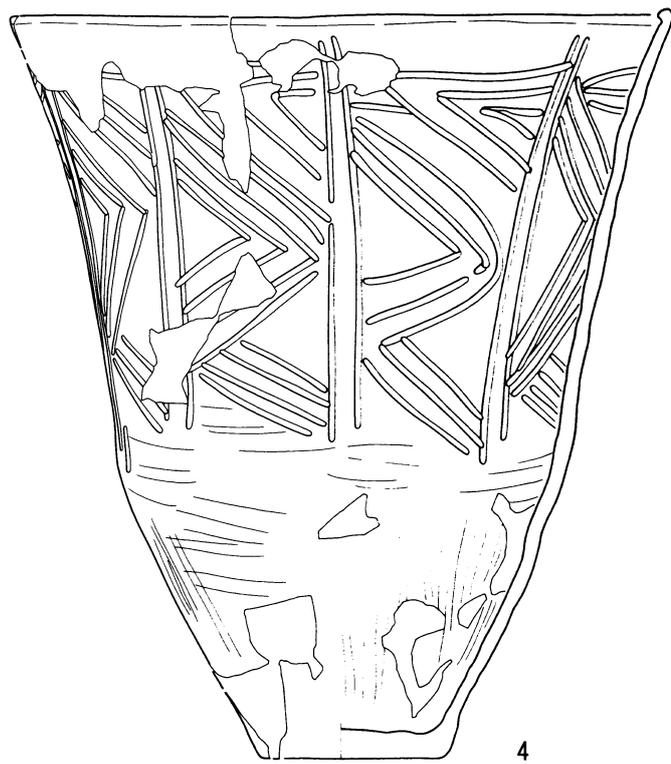
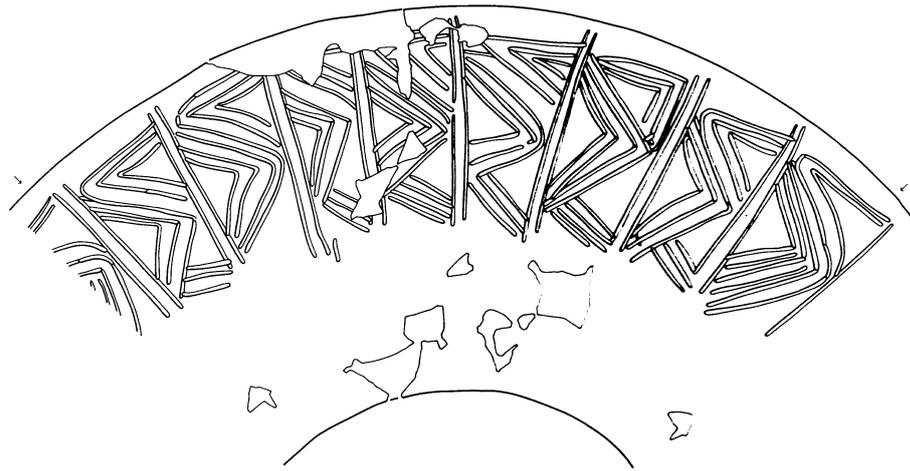
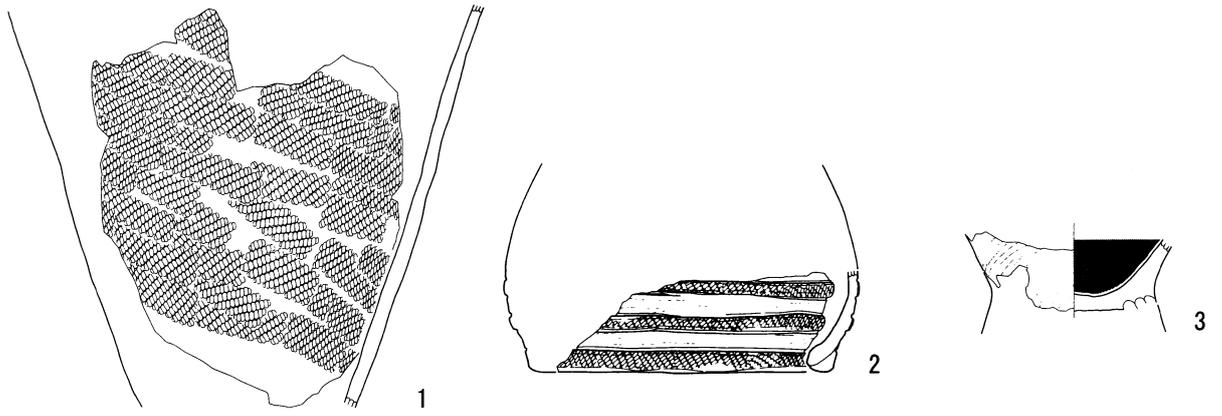
第17号土壌 (第36図)

P-9区に所在する。楕円形の土壌で、長径1.46m、短径1.16m、主軸方向はN-83°-Eを指す。中段に括れを持ち、底面にかけて裾広がりになるフラスコ状の土壌である。底面中央にピットを検出した。楕円形のピットで、長径0.67m、深さ0.37mを測る。本体と壙底ピット部分を合わせた深さは2.17mを測る。

遺物は覆土上層にまとまっており、縄文時代後期前葉の堀之内1式・2式が出土している。



第37図 第16号土壌遺物出土状況



第 38 图 土壤出土土器 (1)

土壌出土遺物（第38図～44図）

第1号土壌出土土器（第40図9・10）

9・10はいずれも精製深鉢土器の胴部である。9は縄文を伴う横位の隆帯である。10は三角形のパネル状の区画文が描かれる。

第2号土壌出土土器（第40図11～13）

11は深鉢の口縁部である。やや肥厚しつつ内湾する口縁で、扁平な隆帯が巡る。

12は無文の胴下半部で、縦位の研磨が施される。

13は厚手の胴部で、不規則な縄文が施文される。

第3号土壌出土土器（第38図1、第40図14～35）

1は粗製深鉢胴部で、口縁と底部を欠失する。復元最大径24.5cm、現存高20.7cmを測る。

14～19は後期前葉の堀之内2式で、いずれも口縁部付近の破片である。口縁に刻みを伴う隆帯が巡り、15・18では8の字状の貼付文が配される。

胴部文様帯は口縁下に集約されて一帯化し、平行沈線間に縄文のみが施文される。17は口縁直下の隆帯区画で、口端へと向かう縦位の隆帯と接続する。

20～24は同時期の胴部破片である。

25・26は加曾利B1式である。25は小円盤状の突起を配する口縁である。26は水平口縁で、ボウル状の鉢とみられる。口縁直下に刻みを伴う隆帯が巡り、集約された横位平行沈線文がみられる。

27～29は無文の口縁部であるが、28・29は口端上が平坦に整形され、内面に凹線が巡っており、後期前葉～中葉のものと考えられる。

30は地文縄文上に半裁竹管状工具による横位の集合沈線が施文される。31～33は縄文のみ施文される胴下半部である。34は無文の胴下半部で縦位の研磨が観察される。35は底部で、底面に網代圧痕がみられる。

第4号土壌出土土器（第38図2・3、41図）

2は台付鉢の脚台部である。

貼付文その他の装飾がみられないことから脚台部と判断したが、内面の調整が比較的精緻である点、脚台としては湾曲が強い点等から、小型の鉢である可

能性も考えられる。

中段がドーム状に強く張り出し、裾部がいちじるしく内湾する。3段の帯縄文が巡り、無文部には横位の研磨が施される。

復元最大径18.2cm、現存高5.3cmを測る。

3は台付き土器で、体部と脚台部の接合部分である。外面無文で縦位の研磨が観察される。内面には赤色の顔料が一面に付着している。

36～39は堀之内1式である。36は頸部屈曲する鉢形土器である。頸部を平行沈線で区画し、8の字状の貼付文が配される。この貼付文に対応して、胴部には単沈線の渦巻き文が縦位に連続して描かれ、これが主文様となる。

隣接する主文様の中間には縦位の平行沈線が垂下し、主文様との間は斜位の平行沈線で連繫され、一種の入組み文を構成する。

37・39も類似のモチーフを描くものとみられる。

40・41は堀之内2式で、いずれも口縁部である。

42～47は加曾利B1式である。42・43は精製深鉢の口縁部で、横位平行沈線間に弧状の区切り文が描かれる。44は半粗製的な土器で、口縁下に圧痕を伴う隆帯が巡る。

46は内外両面に文様を持つ胴部である。47は平行沈線間をクランク状に連繫する区切り文である。

48～52は加曾利B2式～B3式である。

45は後期中葉の半粗製土器で、口縁下に指頭圧痕を伴う2条の隆帯が巡る。

54～56は櫛歯状工具による集合沈線できざまなモチーフが描かれる土器で、やはり半粗製的な土器である。

57～71は後期安行式である。58・59は精製土器の口縁部で、帯状文が2段～3段重畳する。60～63は胴部破片で、61は瓢形土器の胴部中段の破片である。

64～69は後期安行式に伴う粗製土器である。

集合沈線を地文として、口縁直下および胴部中段に沈線+列点文が巡る。65の口縁は、沈線区画上

に横長の突起が配され、平行沈線が垂下する。

70以下は無文の底部である。70は後期中葉以前、71は後期後葉以降であろう。いずれも底面に網代圧痕が観察される。

第5号土壌出土土器 (第42図72～75)

72・73は無文地に鋭利な工具による沈線で斜格子文が描かれる。

74は後期安行式の粗製深鉢で、口縁下に斜位の刺突と1条の沈線が巡る。地文は横位の集合沈線である。

75は注口土器の注口部で、体部との接合部下端

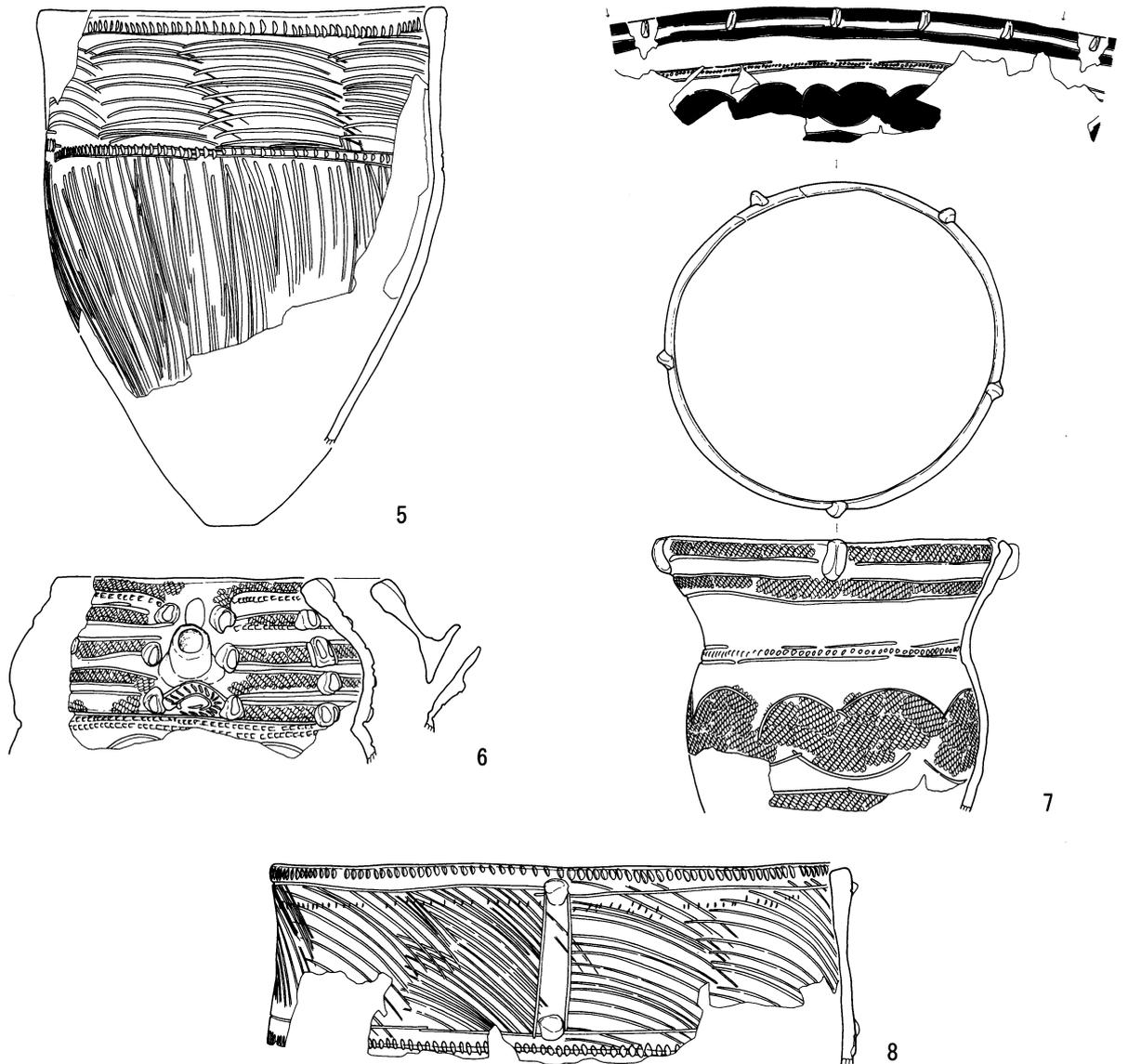
に横長の貼付文が付される。

第6号土壌出土土器 (第42図76～87、第45図1)

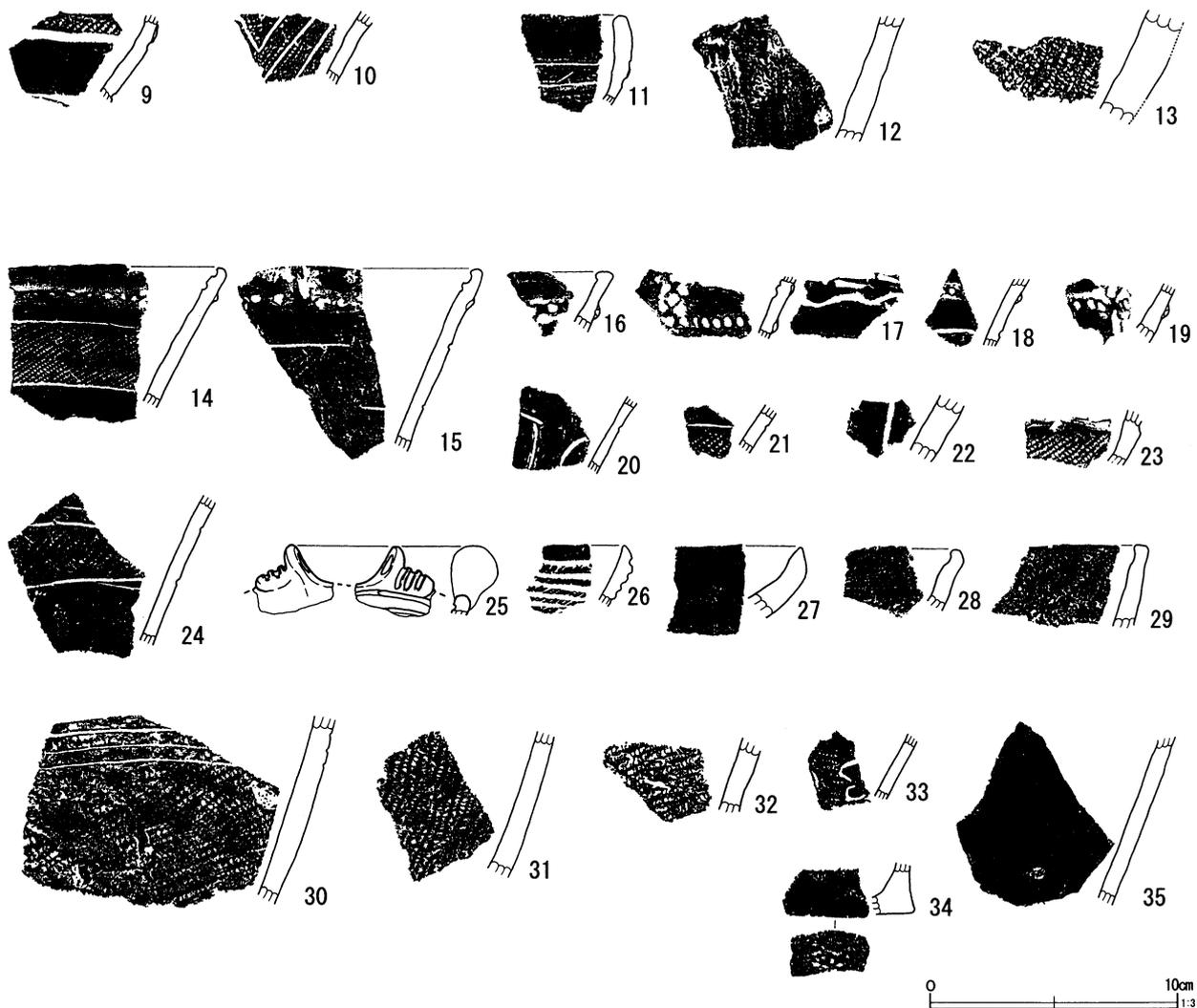
76は強く内湾する口縁部で、口唇直下に刻みが巡る。加曾利B3式の鉢と考えられる。

77～80は後期安行式である。77は砲弾形の深鉢で、口縁および頸部に縄文を持つ隆帯が巡り、円形刺突を伴うボタン状の貼付文が付される。79も同様の貼付文がみられる胴部である。80は安行2式の注口土器の胴部であろう。

81は区画内に細密な集合沈線を充填するもので、安行3bないし3c式であろう。



第39図 土壌出土土器 (2)



第40図 土壙出土土器(3)

82は晩期安行式に伴う砲弾型の半粗製土器で、口縁下に刻みを伴う隆帯が巡り、胴上半部に平行沈線による文様が展開する。84は三叉文が描かれる胴部で、安行3a式であろう。

85は加曾利B2～B3式に伴う半粗製土器で、口縁下に指頭圧痕を伴う隆帯が巡っていたものとみられるが、すべて剥落している。半裁竹管状工具による平行沈線で大柄の矢羽根状モチーフが描かれる。地文はLR単節の縄文とみられるが、極めて粗雑な施文である。86・87も同種の文様が描かれる胴部で、同一個体の可能性もある。

第7号土壙出土土器 (第42図88・89)

88は隆帯による区画をもつ水平口縁で、小型の鉢であろう。口縁上に山形の小突起を持つほか、区画の接点にも縦長の貼付文がみられる。89は豚鼻

状の貼付文である。いずれも後期安行式である。

第8号土壙出土土器 (第42図90～94)

90は堀之内2式に伴うぎぼうし状の突起である。

91は浅鉢の口縁部で、斜位の刻みを伴う隆帯が巡る。92は横位平行沈線間にクランク状の区切り文がみられる胴部で、いずれも加曾利B1式であろう。

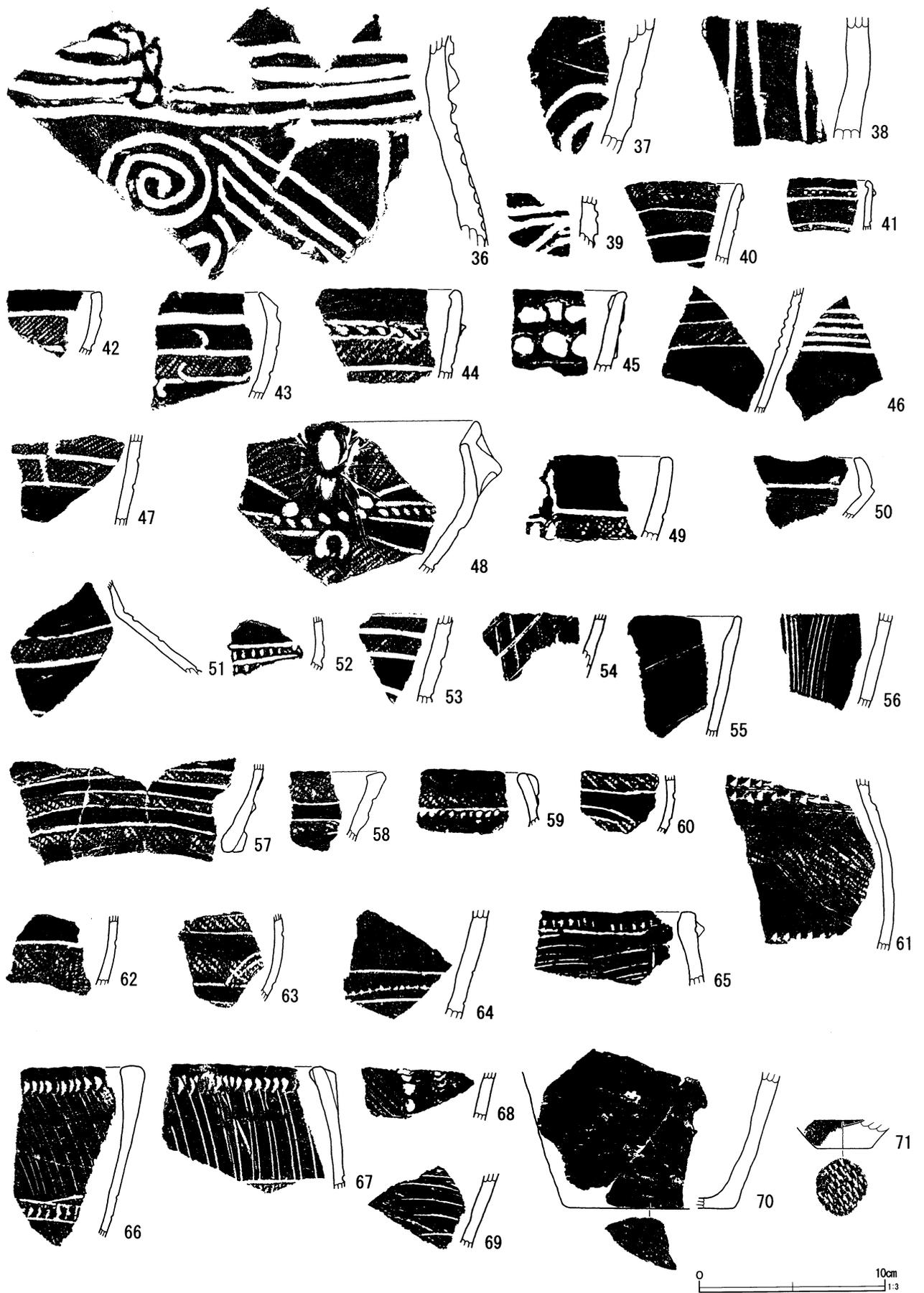
93は加曾利B2式で、精製深鉢胴部であろう。94はこれに伴う半粗製深鉢である。

第11号土壙出土土器 (第42図95～98)

95は堀之内2式であろう。96は縄文のみ施文される粗製深鉢胴部である。97・98は無文で、精製深鉢の胴下半部と考えられる。

第13号土壙出土土器 (第38図4、第43図99～111)

4は覆土上層から横位で出土した深鉢で、口縁の一部を欠失する以外はほぼ完形である。



第41图 土壤出土土器(4)

底部から直線的に開いた後、胴下半部で「く」の字に屈曲し、口縁にかけてゆるやかに外反する。

水平口縁で、口端が内屈し、内面に稜を形成する。

口縁下に無文帯を持つが、胴部との境に沈線や隆帯の区画がみられない。縦位の平行沈線により8分割することで縦長の区画を生成している。

区画内には3本～4本一組の平行沈線により鋸歯文が描かれ、三角形のパネル状の区画を構成する。

鋸歯文の上端がほぼ水平に揃うことによって文様帯の上限を意識させるが下端は区画を設けず開放している。

文様帯から下は無文で、篋状工具による研磨が施されるが、底部から胴下半部までが基本的に縦位の調整であるのに対し、文様帯の下端部では横位の調整となっており、ここにかろうじて分帯の意識を見て取ることができる。

口径34.2cm、現存高33.8cm、底径8.3cmを測る。

99は重圈文の描かれる口縁部で、中期後葉の曾利系の土器である。

101～107は堀之内2式の精製深鉢である。102の胴部は胴下半部が張り出す点が4の個体に類似する。109は後期安行式の胴下半部であろう。

110・111は無文の胴下半部および底部で、いずれも堀之内2式ないし加曾利B1式で、精製深鉢胴下半部の無文部分であろう。

第14号土壇出土土器 (第43図112～136)

112～118は堀之内1式である。

112は「く」の字に張り出す口縁部直下の破片である。1条の沈線が巡る。1条の沈線が巡り、これにそって縦位の刻みが施される。頸部の屈曲する深鉢ないし鉢に伴うものであろう。

114は口縁部に隆帯+沈線による幅狭の文様帯を持ち、胴部地文縄文上に磨消文様が描かれる。

115は頸部から胴部にかけての破片で、無文地に蕨手状の沈線文が描かれる。116・117は3本一組の沈線文である。縦位の沈線間に斜行ないし鋸歯のモチーフが描かれるものとみられる。

119は堀之内2式である。磨消状文による菱形の区画の中に多条沈線文が描かれる。

120・121は加曾利B2式で、口縁下に縄文を施文する扁平な隆帯が巡り、胴部に磨消縄文による弧状のモチーフが描かれる。122は横位の沈線区画内に矢羽根状の沈線文が施文される。

123～125は加曾利B式に伴う半粗製土器で、口縁下に指頭や棒状工具による圧痕を持った隆帯が巡る。125の胴部にはRL単節横位回転の縄文が施文される。

126は頸部屈曲する深鉢胴部で、加曾利B2式ないしB3式であろう。127は台付土器の胴下半部とみられる。

128～130は無文地に集合沈線文が描かれ、131・132は櫛歯状工具による条線である。

133・134は縄文のみ施文される胴部破片である。135は無文の底部である。136は後期安行式の粗製土器口縁部である。

第15号土壇出土土器 (第44図137～142)

137～139は堀之内2式である。137は口縁部で、刻みを伴う隆帯上に8の字状貼付文が配される。

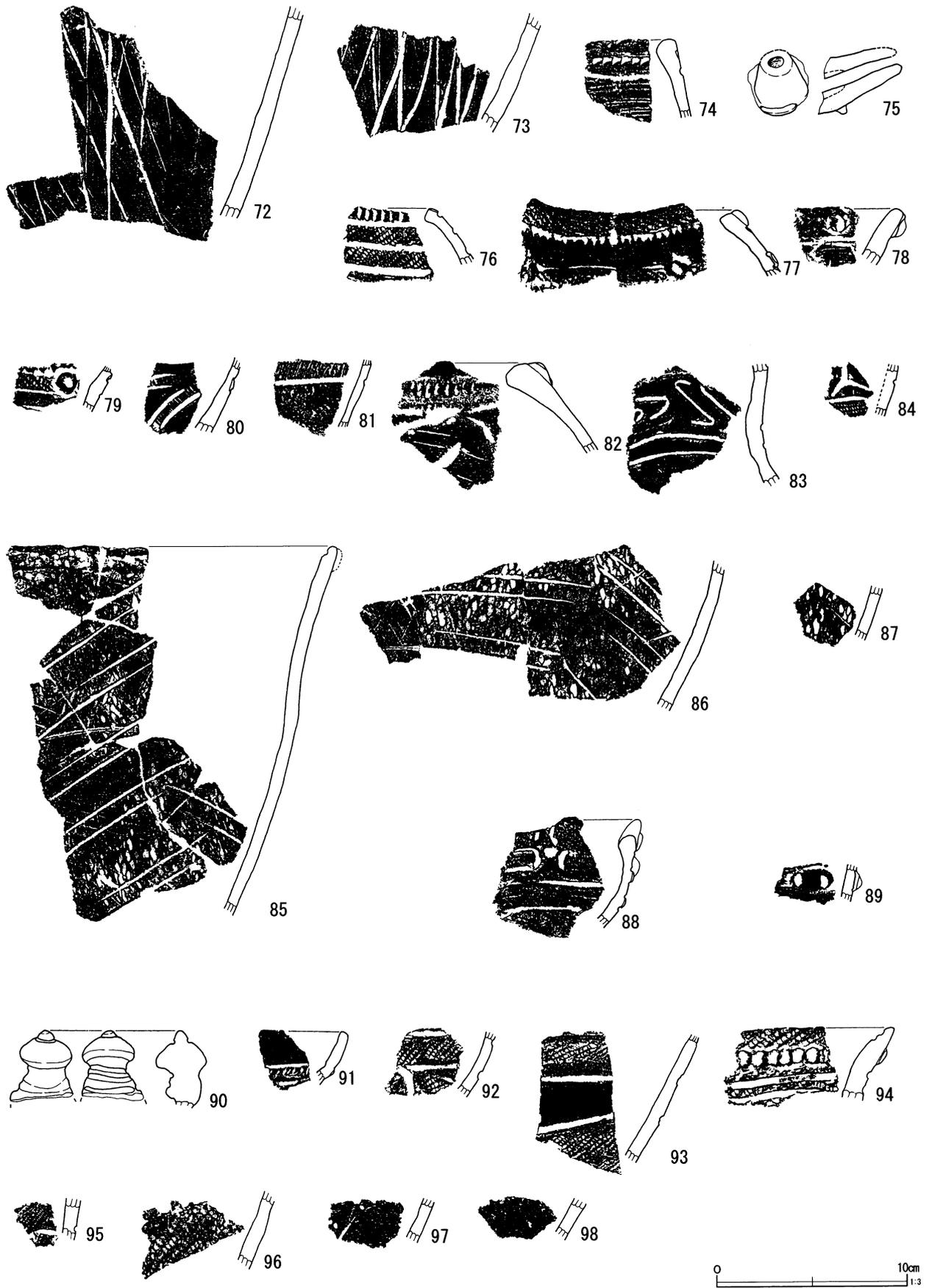
138は隆帯区画を持たない口縁である。

140は加曾利B1式である。外面は横位平行沈線文で縦位の単沈線による区切り文がみられ、LR単節縦位回転の縄文が充填される。口唇内面に隆帯+沈線による段を持つほか、3条の平行沈線による内文が描かれる。

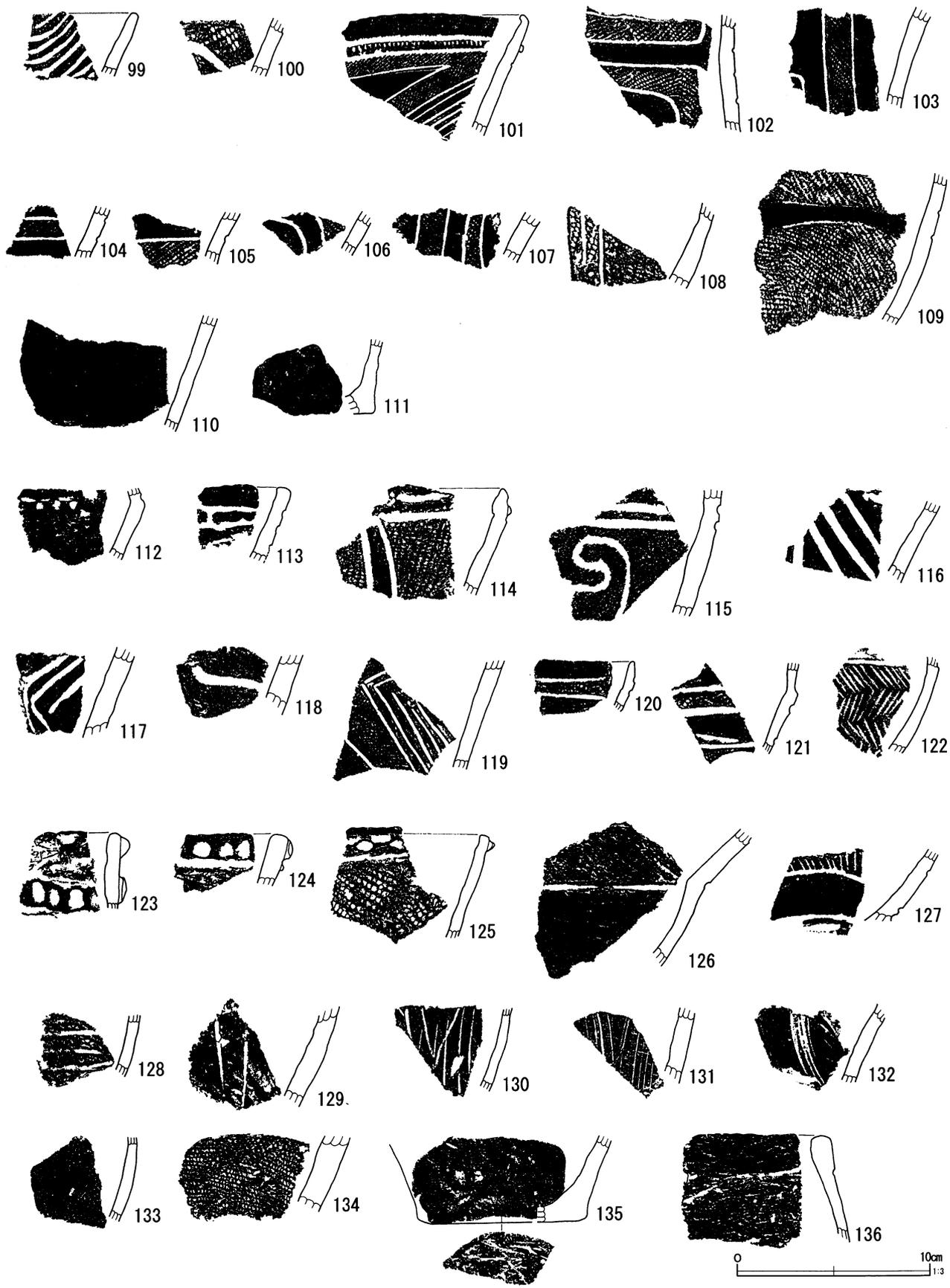
141は無文の口縁部で、口端が「く」の字に屈曲して内面に段を形成する。後期前葉ないし中葉であろう。142は安行1式の口縁部である。山形波状口縁の波頂部に1点のみ縦長の貼付文が付されたものとみられるが、剥落している。口縁下には3段からなる帯縄文が配される。

第16号土壇出土土器 (第39図5～8、第44図143～150)

5は覆土上層から出土したもので、後期安行式の粗製深鉢である。口縁から胴部中段にかけて、約1



第42图 土壤出土土器(5)



第43图 土壤出土土器(6)

／2程度が残存している。

胴張りで、頸部に括れを持ち、口縁がごく軽微に外反する。口唇は肥厚して内面に稜をなし、口端上面は平坦に整形されている。

口縁直下を1条の沈線で区画し、この上に篋状工具による縦の刻みが巡る。頸部と胴部の境には2条の平行沈線による区画が存在し、やはり篋状工具の刻みが巡る。

頸部には横位の弧状沈線が重畳し、胴部には縦位の集合沈線が垂下する。

最大径22.7cm、現存高24.4cmを測る。胎土に軽石とおぼしき白色粒子が混入する。器壁は暗褐色で、二次焼成による赤斑が多数みられる。

6は覆土下層から出土した注口土器で、安行2式である。口縁部から胴部中段にかけて、1／2～1／3が残存している。

胴部中段に括れを持ち、上下が張り出す瓢形を呈するものとみられ、注口部は胴上半部に存在する。口縁は肥厚して内湾し、二重口縁を形成する。

口縁下に4段からなる帯縄文が配され、縦刻みを伴う貼付文が配される。括れ部分には篋状工具先端の押し引き文が2段に巡り、胴下半部との境界をなしている。

最大径10.4cm、現存高10.3cmを測る。

7は土壌検出面より上層の、グリッド一括遺物中の土器と本土壙覆土内出土の破片とが接合したものである。大半がグリッド出土の破片で占められており、厳密には本土壙出土の土器とはいえないことを断ったうえで、周辺遺物として呈示する。

曾谷式～安行1式の深鉢で、口縁部がほぼ完存するほか、胴部中段にかけておよそ1／2が残存している。

胴部が球状に張り、頸部との境で一旦「く」の字状に括れた後、口縁に向かって直線的に開く。口唇はわずかに肥厚し、口端内屈して内面に稜を形成する。

口縁直下に2条の帯縄文による区画を形成し、こ

こに縦長～斜位の貼付文を5単位配するものと思われる。縄文は一部でこの突起の頂部にも施文されている。

頸部は無文帯となり、胴部との境は2条の平行沈線で区画して、棒状工具先端による斜位の刺突を巡らせる。

胴部には弧状の沈線を上下に対置することで入組み状のモチーフを描き、内部にLR単節の縄文を充填施文している。胴下半部は上端を単沈線で区画した縄文帯となる。

最大径20.4cm、現存高15.4cmを測る。

8も大半が検出面より上層の破片と接合したもので、本土壙周辺の資料である。

後期安行式に伴う半粗製の深鉢で、口縁から胴上半部にかけて、約1／2程度が残存する。

砲弾形の深鉢で、胴上半部に最大径を有し、頸部で一旦括れて、口縁わずかに外反する。口縁は肥厚して、口端状面は平坦でやや内削ぎ状となる。

口唇外面に篋状工具先端による縦位の刻みが巡り、直下を横位の単沈線で区画する。胴上半部には2条の平行沈線による区画が描かれ、縦位の刻みが巡る。上下の区画にそれぞれ横長の扁平な貼付文が対置され、間を2条の平行沈線で連結する。

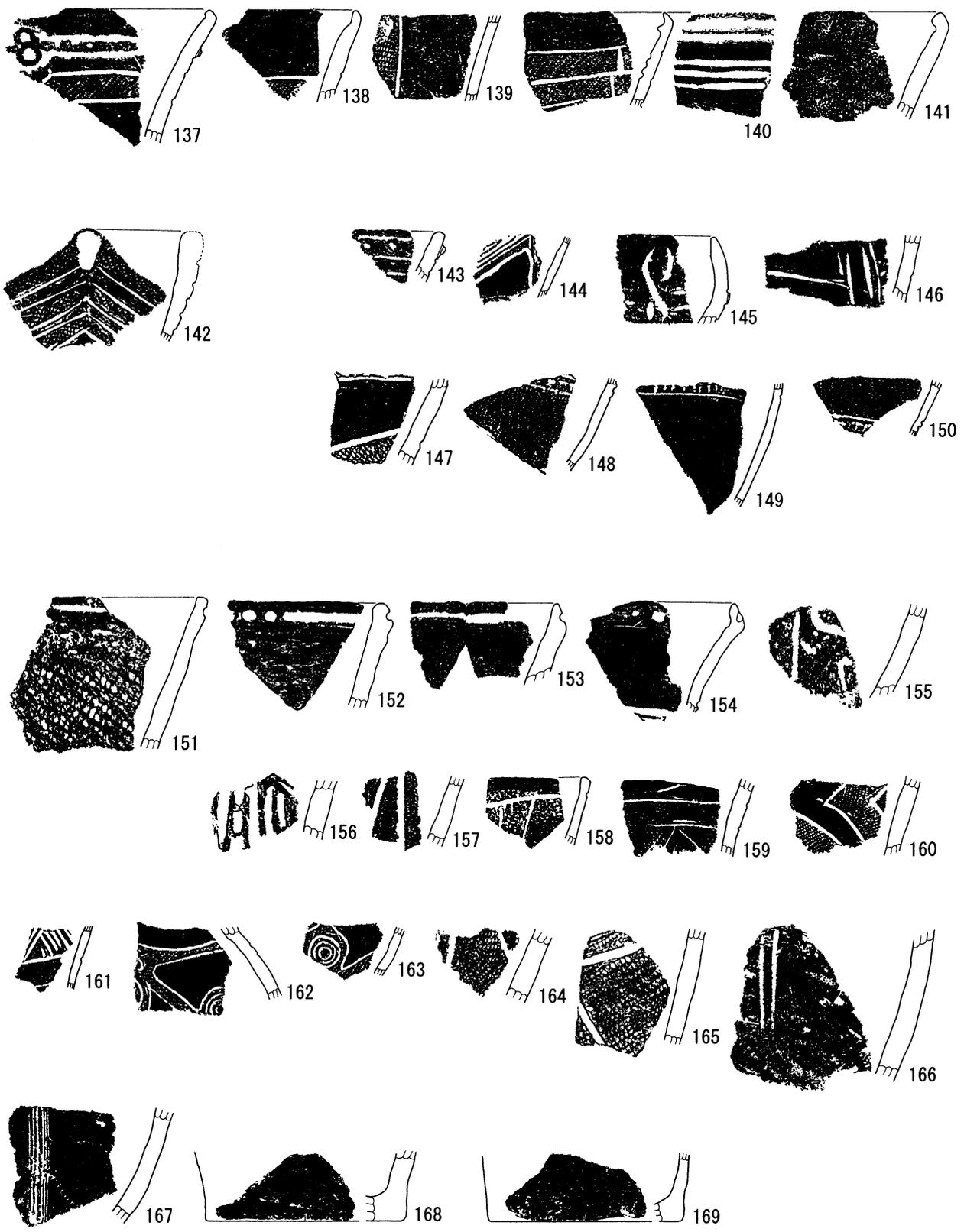
地文は斜位の集合沈線で、前述の縦横の区画は地文の上から描かれている。区画内部の地文は磨消されており、磨消縄文に類似の手法がとられている。

復元最大径32.5cm、現存高11.2cmを測る。

143は深鉢口縁部で、棒状工具の刺突を伴う隆帯を巡らせ、胴部に平行沈線文がみられる。堀之内2式ないし加曾利B1式であろう。144も同時期の注口土器の胴部破片とみられ、磨消縄文とこれに並行する集合沈線により直線的な区画が描かれる。

145は加曾利B2式の口縁部。146・147も同時期の胴部破片であろう。

148・150は後期安行式の胴部破片である。平行沈線による横位の区画内部に刺突や刻みが巡る。地文は縦位の集合沈線文である。



第 44 图 土壤出土土器 (7)

第17号土壌出土土器 (第44図 151～169)

151～157は堀之内1式である。151～154は、口縁下に沈線+隆帯による段を持ち、152・154は沈線の末端に盲孔が配される。

151は地文縄文、他は無文である。154は口縁が「く」の字に内屈し、頸部と胴部の境が沈線で区画される。

155～157は胴部で、155は蕨手文が描かれる。

156は縦位の平行沈線間に列点文が垂下する。

158～163は堀之内2式である。158～161は精製深鉢、162・163は注口土器の胴部で、同心円文が帯縄文によって連繫される。

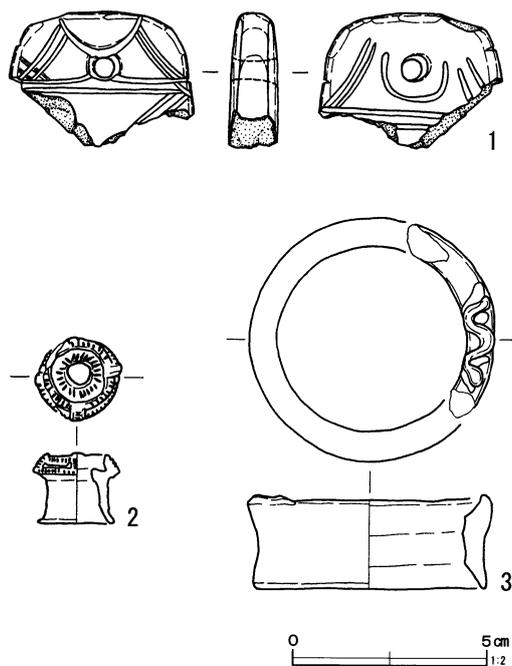
164～166は沈線文で、堀之内式であろう。167は櫛歯状工具による条線が垂下する。168・169は無文の底部である。

土壌出土土製品 (第45図)

1は土版で、第6号土壌から出土したものである。胴張りの隅丸長方形で一端に貫通孔を持ち、表裏に沈線文が描かれる。残存部分の長さ3.6cm、最大幅4.8cmを測る。

2は小型の土製耳飾りで、第14号土壌から出土したものである。中空・円柱状の造りで、一端に文様を持つ。直径2.2cm、高さ2.9cmを測る。

3は滑車形の耳飾りで、第7号土壌から出土したものである。一面のみ隆帯によるM字形の貼付文がみられる。直径6.4cm、高さ2.3cmを測る。



第45図 土壌出土土製品

土壌出土石器 (第46図)

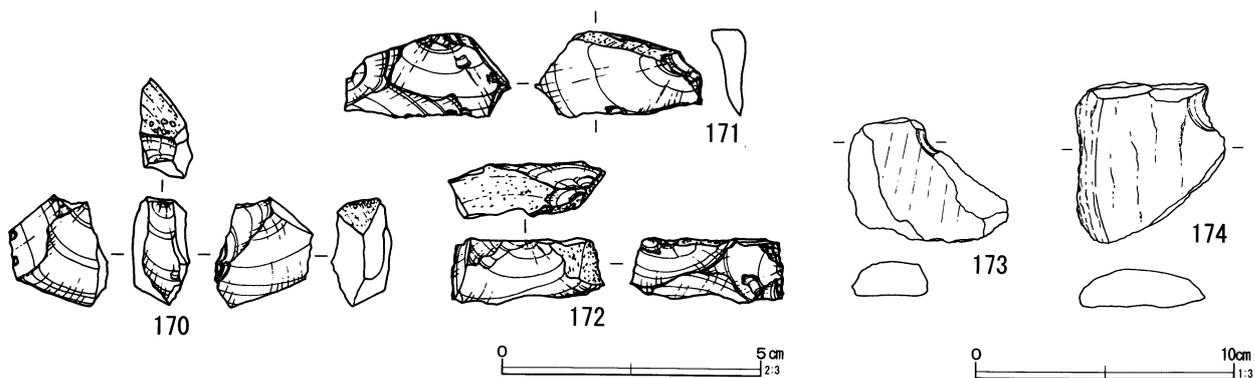
170は第1号土壌出土の黒曜石製石核である。

171は第14号土壌出土の剥片で、背面に片刃状の加工がみられる。石材は黒曜石である。

172は第16号土壌出土の黒曜石製石核である。

173は第3号土壌出土の石皿片で、磨り面のみ残存し、凹石に転用されている。緑泥片岩を使用する。

174は第4号土壌出土の石皿片で、凹石に転用されている。緑泥片岩を使用する。



第46図 土壌出土石器

(4) 土器埋設遺構

ピットや土壌内から完形またはこれに近い状態の土器が出土するもののうち、出土状況などから、土器を埋設することそれ自体を目的に遺構が掘られたと考えられるものである。

第1号土器埋設遺構 (第47図)

P-12区に所在する。盛土遺構下層の暗褐色土中で検出された。ほぼ完形の大型深鉢を正位の状態に埋置したものである。

掘り方は円形のほぼ土壌で、長径0.47m、短径0.46m、主軸方向はN-48°-Wを指す。底面は平坦で、遺構検出面からの深さは0.14mであったが、本来は土器全体が納まる規模を持っていたものであろう。

時期は後期中葉であろう。土器内部から遺物は出土しなかった。

第1号土器埋設遺構出土土器 (第48図)

大型の粗製深鉢土器で、口縁の一部を除きほぼ全体が完存する。

口径34.1cm、器高42.4cmを測る。わずかに内湾しつつ口縁に向けて単調に開くバケツ型の器形で、口唇がわずかに肥厚して内屈する。底部はやや裾広がり、胴部との境に括れを持つ。

口縁直下から胴部中段にかけて、R無節斜位～横位回転の縄文が粗く施文される。胴下半部では右下がりのなで調整の上から、縦位の研磨が施される。底部直上の括れ部分では斜位の密な研磨がみられる。

胎土に多量の砂・シルトを含む暗茶褐色の器壁で、焼成は悪くないが、胴下半部を中心に二次焼成による風化が観察される。

第2号土器埋設遺構 (第47図)

P-11区に所在する。当初、当該グリッド検出の柱穴状ピット、Pit 3として調査を開始したが、その後遺物の出土状況などを勘案した結果、土器埋設遺構として提示するものである。

ローム上面で掘り方を検出した。ピット中に鉢形土器を正位に埋置したもので、周囲に関連する施設

は発見できなかった。

土器を埋設した掘り方は平面不整円形で、長径0.42m、短径0.39m、主軸方向はN-33°-Eを指す。

底面やや丸底で、遺構検出面からの深さは0.31mを測るが、より上位の面から掘り込まれていた可能性が高い。

時期は後期後葉である。土器内部から遺物は出土しなかった。

第2号土器埋設遺構出土土器 (第48図)

小型丸底の鉢形土器で、口縁部の3/4程度を欠失しているが、胴部から底部にかけての残存状況は比較的良好である。

口径16.0cm、最大径18.4cm、器高13.8cmを測る。

胴部中段に最大径を持つボウル形の鉢である。口縁は内湾しつつ肥厚し、口端は面取りされて、内面に稜を持つ。底部は丸底で、裾が強く張り出して、胴部との境に明瞭な段を形成する。

口縁下に幅狭の無文帯を持ち、胴部との境を2条の平行沈線で区画する。平行沈線内部には棒状工具による刺突列を巡らせる。

区画直下から胴部中段にかけて、右下がりの集合沈線文が施文される。胴下半部には篋状工具による横位のなで調整が観察される。

底面には木片の小口部分もしくは櫛歯状工具によるとみられる条痕文が施文される。

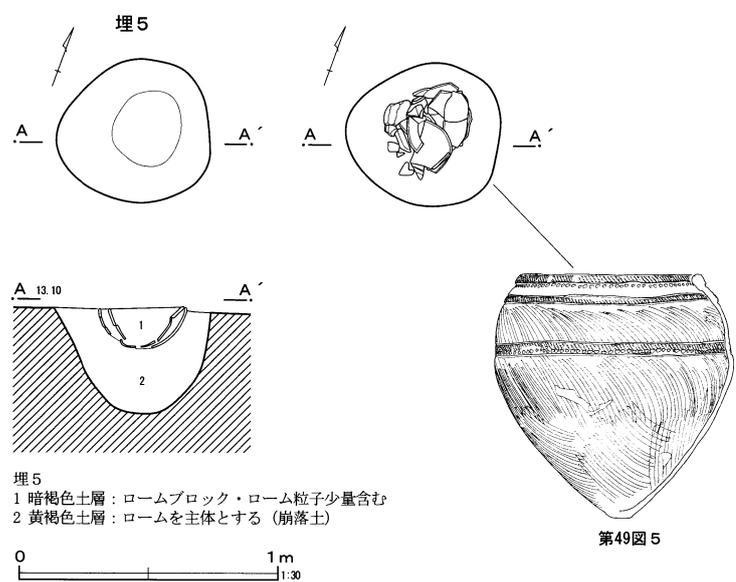
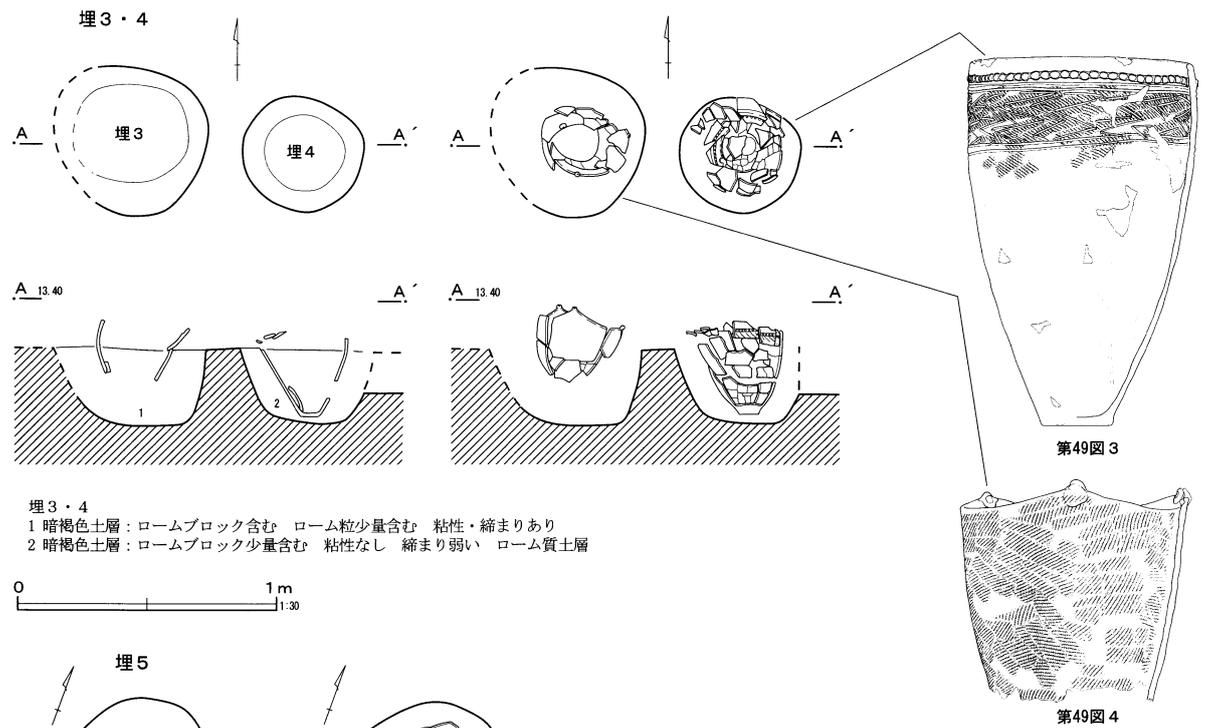
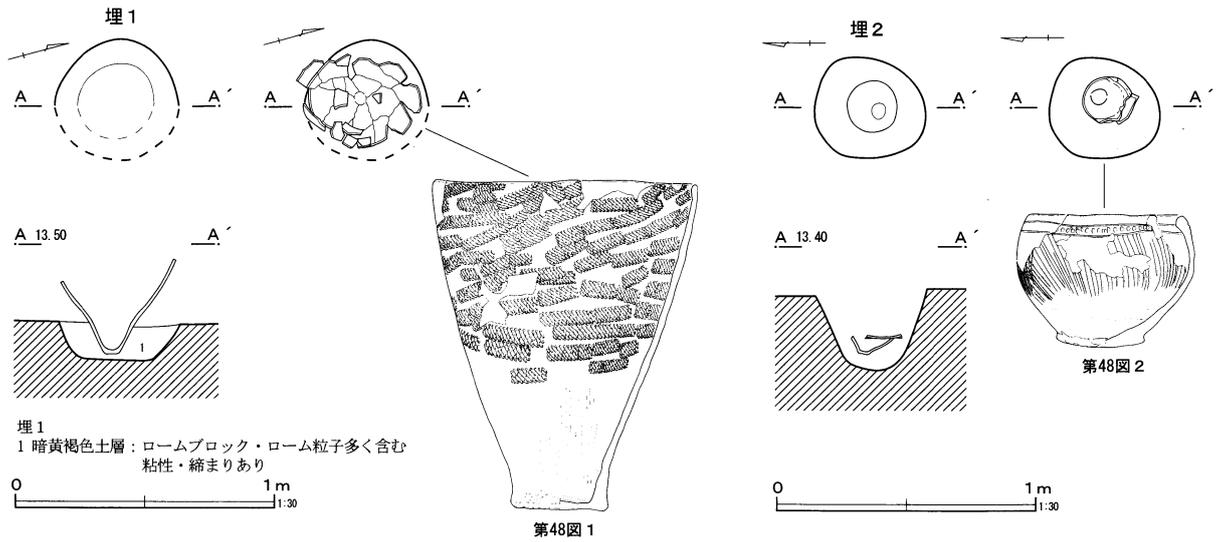
シルト質の胎土で、器壁は暗褐色を呈し、全体に二次焼成による風化・崩落がはなはだしい。

第3号土器埋設遺構 (第47図)

Q-10区に所在する。盛土中層の黒褐色土中で検出された。

胴下半部を欠失した深鉢土器を正位に埋置したものである。

本遺構は、第4号土器埋設遺構と隣り合って検出された。それぞれ別個の掘り方を持っているが、両者は検出面の高さや掘り方の規模・深さなど似通った点が多く、共時性を持った一連の遺構と考えるべ

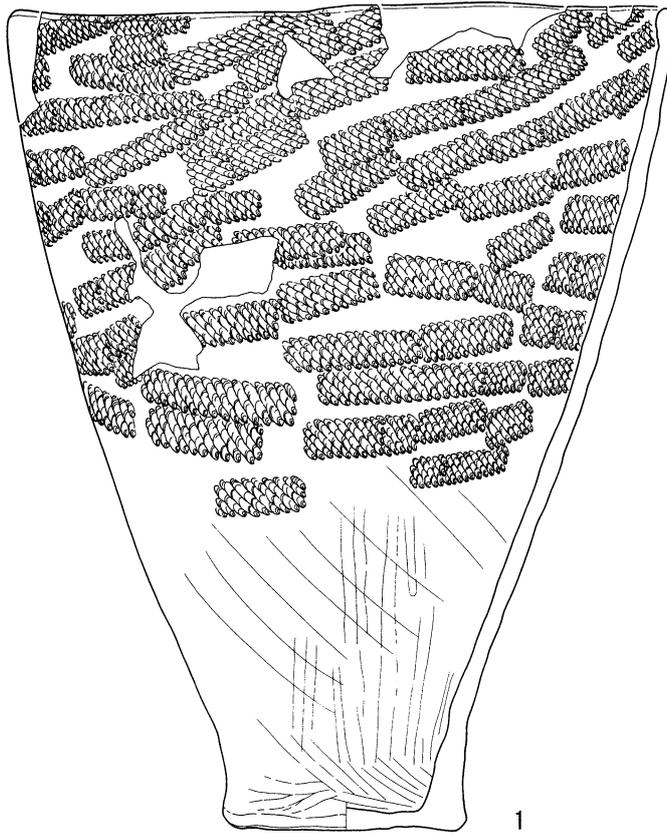


埋1
1 暗黄褐色土層：ロームブロック・ローム粒子多く含む
粘性・縮まりあり

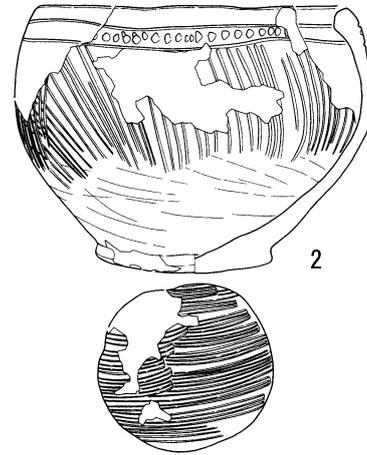
埋3・4
1 暗褐色土層：ロームブロック含む ローム粒少量含む 粘性・縮まりあり
2 暗褐色土層：ロームブロック少量含む 粘性なし 縮まり弱い ローム質土層

埋5
1 暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子少量含む
2 黄褐色土層：ロームを主体とする（崩落土）

第47図 土器埋設遺構



第1号土器埋設遺構



第2号土器埋設遺構



第48図 土器埋設遺構出土土器(1)

きであるかもしれない。

掘り方は不整円形で、長径0.6 m、短径0.56 mを測る。長軸方向はN-69°-Wを指す。壁は垂直に近い角度で立ち上がり、底面は平坦。検出面から深さは0.28 mを測るが、本来土器全体が納まる規模を持っていたものであろう。土器上端から掘り方底面までの深さは0.47 m、土器下端から掘り方底面までの深さは0.17 mを測る。

時期は後期中葉である。土器内部から遺物は出土しなかった。

第3号土器埋設遺構出土土器 (第49図)

大型の深鉢土器で、半粗製の土器である。口縁の一部と胴下半部を欠失する。口径29.8cm、現存高27.7cmを測る。

3単位の山形波状口縁を成す。口端は断面角棒頭状で、内面に1条の沈線を巡らせる。指頭圧痕を持つボタン状の突起を、波頂部の口端内面に配する。

器形は胴張りで、口縁がわずかに外反する。

口縁直下から胴下半部にかけて、LR単節の縄文が横位～右下がりに施文される。

胎土はシルト質で軽石らしき白色の粒子がみられる。器壁は暗橙色を呈する。

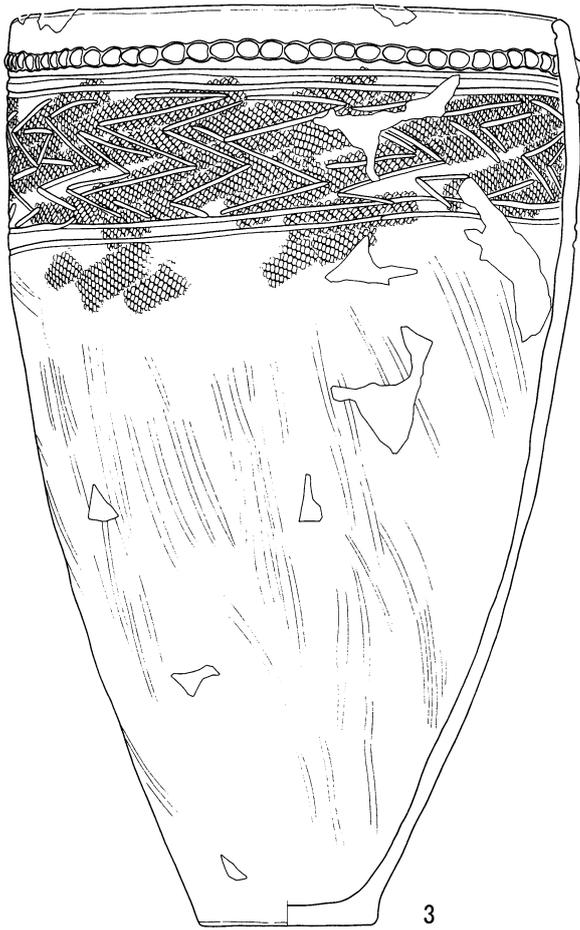
第4号土器埋設遺構 (第47図)

Q-10区に所在する。盛土中層の黒褐色土中で検出された。完形の深鉢土器を正位に埋置したものである。

前項で述べたように本遺構は、第3号土器埋設遺構と隣接しているほか共通点が多く、一連の遺構とも考えられるものである。

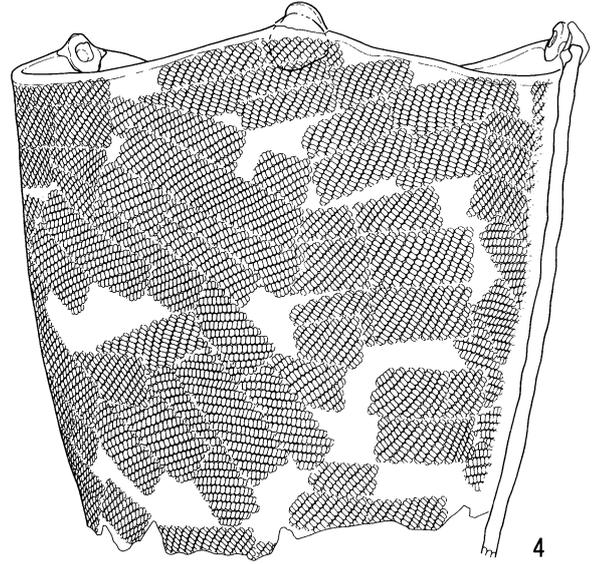
掘り方は不整円形のピットで、長径0.46 m、短径0.44 mを測り、主軸方向はN-69°-Wを指す。壁はほぼ垂直で、底面は平坦である。

検出面からの深さは0.28 mを測るが、本来は土器全体が納まる規模を持っていたものであろう。



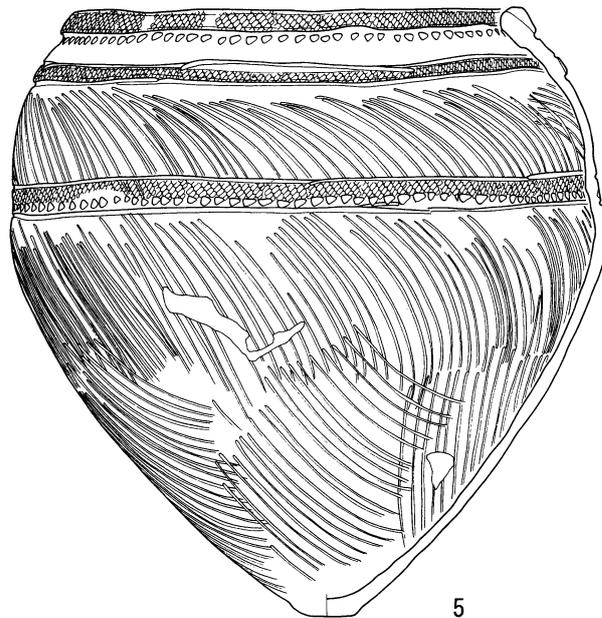
第4号土器埋設遺構

3



第3号土器埋設遺構

4



第5号土器埋設遺構

5



第49图 土器埋設遺構出土土器(2)

土器上端から掘り方底面までの深さは0.48mを測る。

時期は後期中葉である。土器内部から遺物は出土しなかった。

第4号土器埋設遺構出土土器 (第49図)

半粗製の大型深鉢土器で、ほぼ完形の個体である。口径28.7cm、最大径29.6cm、器高47.8cmを測る。

器形は胴張りで、口縁内湾し、胴上半部に最大径を持つ。底部は裾が若干張り出し、胴部との境に括れを持つ。

水平口縁で、口縁外面に指頭圧痕を伴う隆帯を巡らせ、内面に1条の沈線を巡らせる。

胴上半部に、上下をそれぞれ2条の平行沈線で区画された文様帯を持つ。内部にはR L単節の縄文が右上がりに施文され、棒状工具による横位の鋸歯文が描かれる。胴部中段以下は無文で、縦位の研磨が観察される。

胎土に白色軽石混じる砂・シルトを含み、器壁は暗褐色を呈する。

第5号土器埋設遺構 (第47図)

P-10区に所在する。ローム上面で検出された。

当初、第9号土壇として調査を開始したが、その後遺物の出土状況などを勘案した結果、土器埋設遺構として提示することとした。

土壇の覆土上層に、上下分割した瓢形の土器を入れ子の状態で埋置したものである。

掘り方は平面不整楕円形の土壇で、長径0.59m、短径0.55mを測る。主軸方向はN-61°-Eを指す。

壁は垂直に近く、底面は丸底を呈する。

検出面からの深さは0.4mを測るが、より深い掘り方を持っていた可能性が高い。土器底面から壇底までの深さは0.24mである。

土壇覆土は再堆積のロームで満たされており、人為的な埋め戻しの状態を示していた。

土器は胴部中段で、おそらくは人為的に分割され、口縁側を逆位で置いた上に底部側を正位で重ねた状態であった。内部は少量のロームを含む暗褐色土であった。

時期は後期後葉である。

第5号土壇出土土器 (第49図)

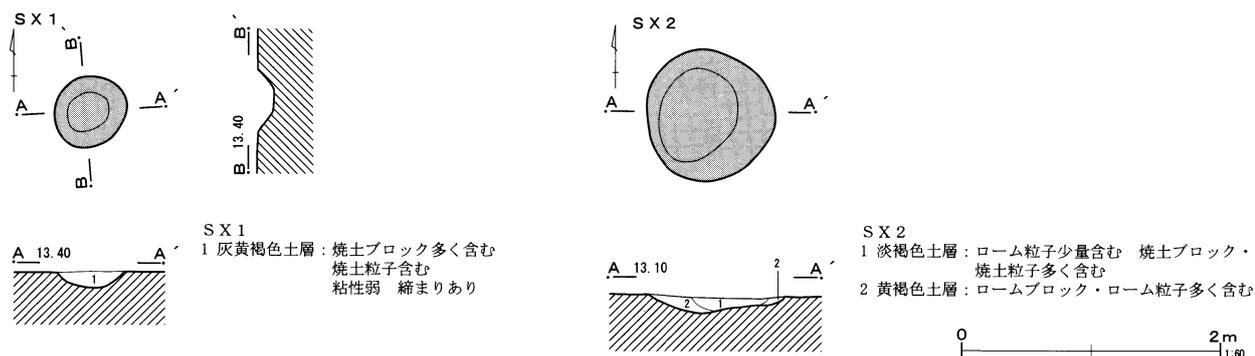
瓢形の深鉢土器で、ほぼ完形の土器である。胴部中段に最大径を持ち、口径23.2cm、最大径30.8cm、器高31.6cmを測る。

胴中段に括れを持ち、上下が張り出すいわゆる瓢型土器であり、括れの直下に最大径を持つ。胴上半部から口縁にかけてドーム状に内湾し、口縁は二重口縁となっていてちじむしく肥厚し、口端上はほぼ水平に面取りがなされている。

口縁直下および頸部に扁平な隆帯を巡らせて横位の区画を形成し、内部に棒状工具による斜位の刺突列を1条巡らせる。隆帯上にはR L単節横位回転の縄文を施文する。

胴部中段の括れ部分に2条の横位平行沈線による区画を巡らせ、内部にR L単節横位回転の縄文と、斜位の刺突列を施文する。

胴部の文様帯は、この区画によって上下に分帯され、それぞれ斜位の集合沈線文が施文される。



第50図 炉跡



第51図 炉跡出土土器

胎土は砂質で、比較的大粒の礫を含む。

(5) 炉跡

竪穴住居跡の床面で検出されたもの以外に、単独で検出された炉跡が2例あった。

周囲に竪穴の壁らしきものや柱穴の類は発見されなかったが、本来竪穴住居跡に伴うものであった可能性が高い。

第1号炉跡 (第50図)

O-12区に所在する。盛土中層の黒褐色土中から検出された。

不整形の炉跡で、長径0.58m、短径0.42mを測る。主軸方向はN-56°-Eを指す。

壁が緩やかに立ち上がる皿状の掘り方を持ち、深さ0.28mを測る。

覆土はローム粒子を主体とする灰黄褐色土で、多量の焼土ブロックを含む。黒褐色土中に掘り込まれているため、底面の被熱は明瞭ではなかった。

第1号炉跡出土土器 (第51図1)

1は無文の深鉢口縁部である。口端にむけてわずかに肥厚しつつ直線的に開く。胴部との境に沈線が巡る。後期中葉に比定される。

第2号炉跡 (第50図)

Q-10区に所在する。ローム直上の暗黄褐色土中で検出された。

不整形の炉跡で、長径1.00m、短径0.98mを測る。ほぼ東西を主軸に持つ。

壁が緩やかに立ち上がる皿状の掘り方を持ち、深

さ0.28mを測る。

覆土は焼土ブロック・粒子を多量に含み、底面は被熱による赤化がいちじるしい。

第2号炉跡出土土器 (第51図2・3)

2は無文の胴部で、横位の条線がみられる。後期前葉～中葉に比定される。

3は注口土器の肩部である。球胴状の器形から頸部が垂直に立ち上がるものとみられる。集合沈線による同心円文の一部がみられ、空隙に鳥状の単位文が配される。黒褐色の精緻な器壁である。

(6) ピット群

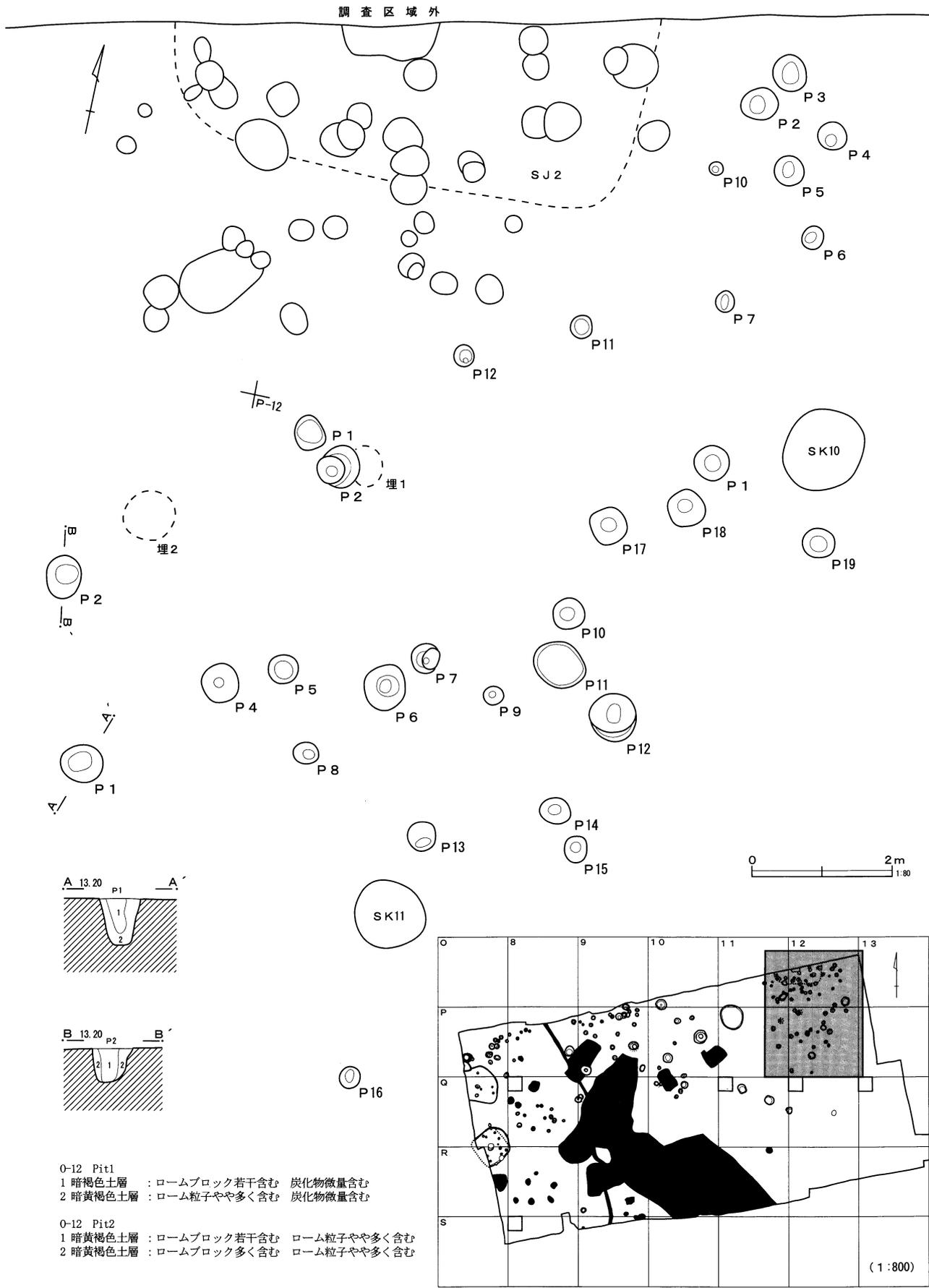
竪穴住居に関連するもの以外にも多数のピットが検出された。ほとんどがローム上面で検出されたものである。

出土地点は、環状盛土遺構の中心部に近い、調査区西部～北東部に集中する傾向にある。

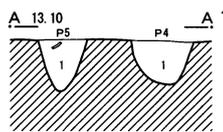
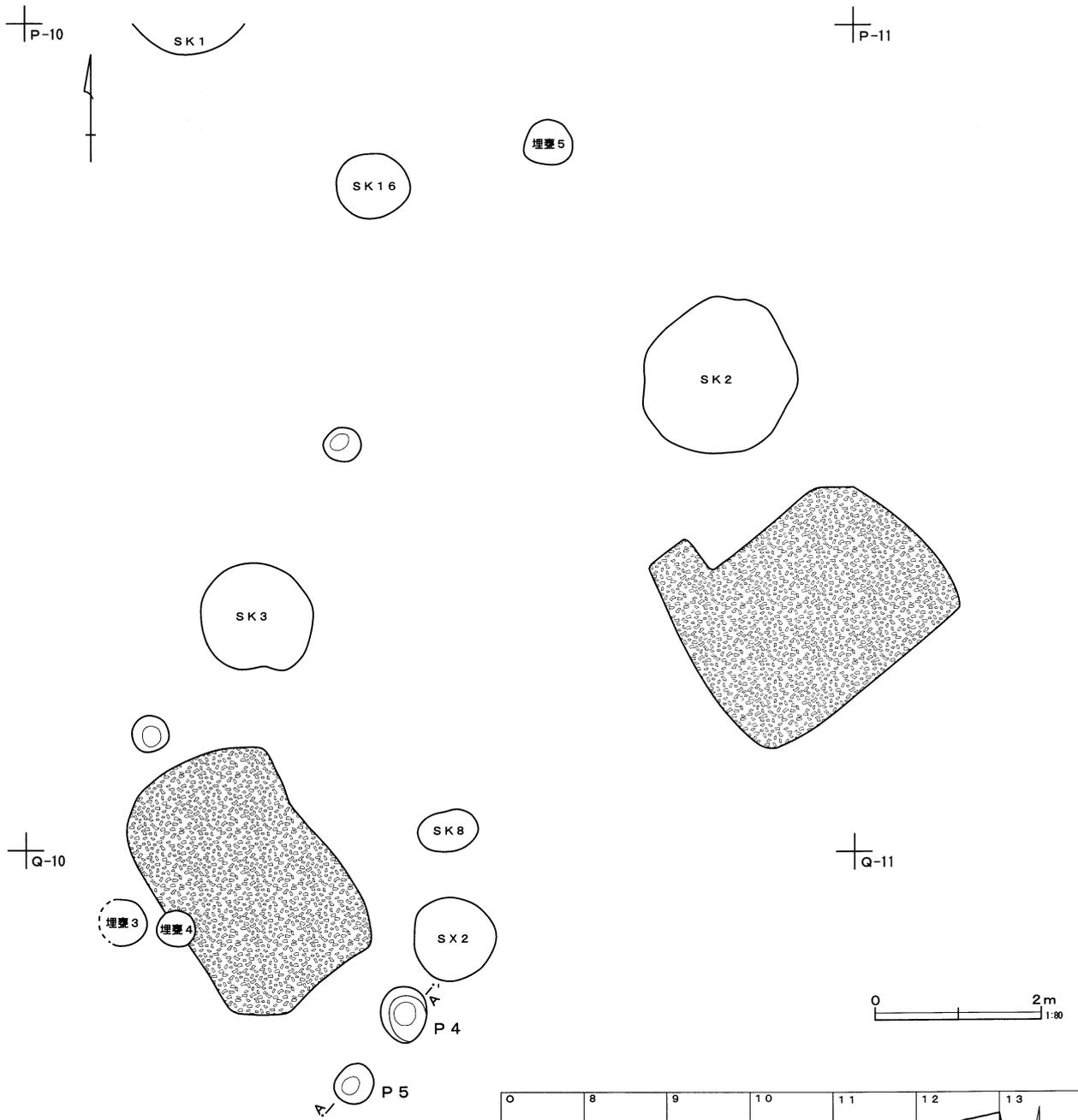
多くは竪穴住居や平地式の建物に付随する柱穴であったと考えられる。建物としての配列は明確ではないが、盛土中から掘り込まれて、必ずしもローム面まで達しないものが多数あったと考えるべきだろう。

時間的な制約からすべての土層断面を記録することはできなかったが、柱痕が明瞭に観察される例もあった。

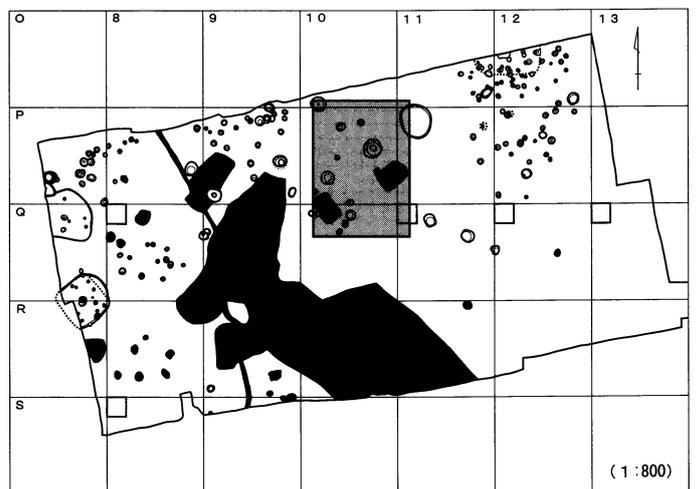
特にピットの集中がはなはだしい5地点について図示した。個別のピットの規模については表5を参照されたい。



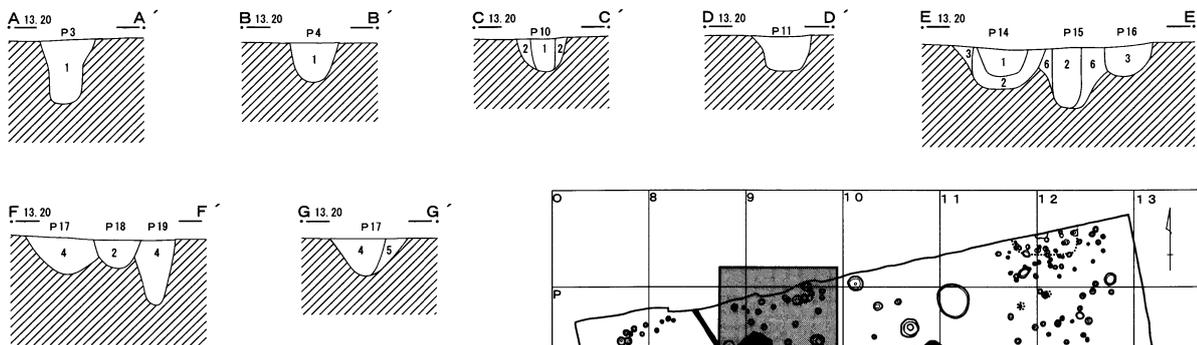
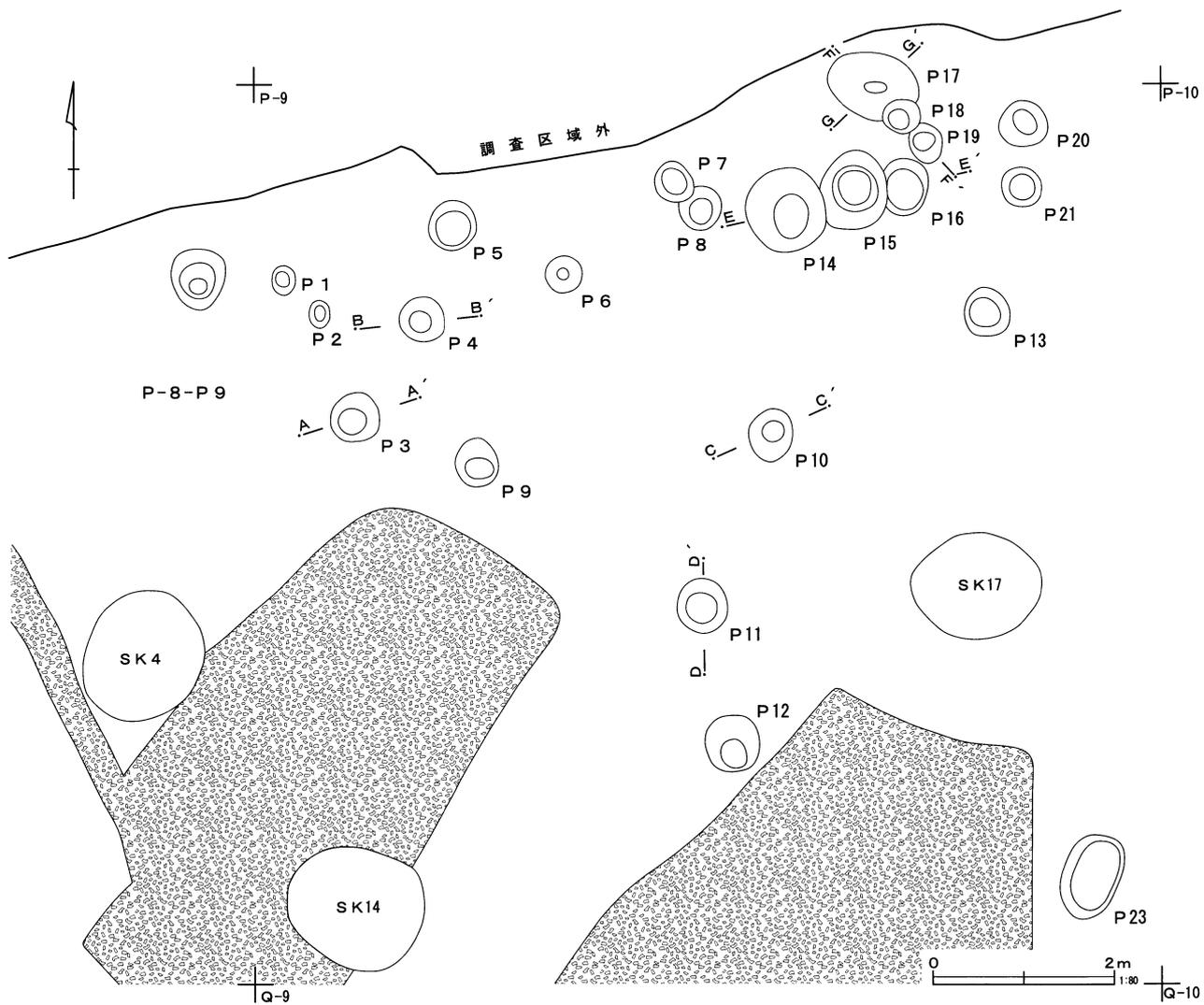
第52図 ピット群(1)



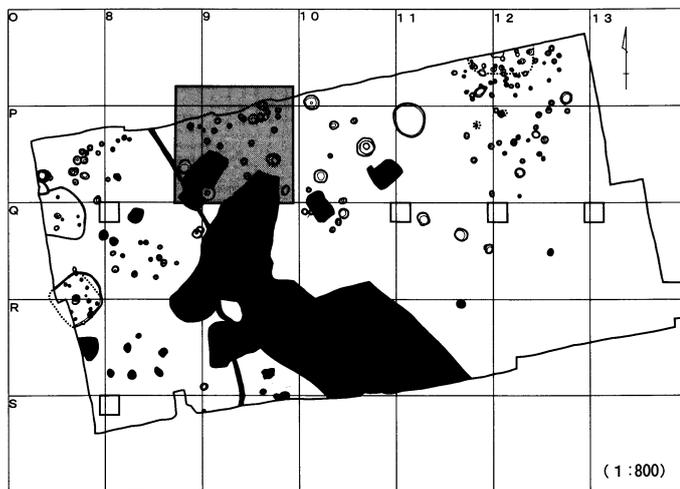
Q-10 Pit4・5
 1 暗褐色土層：ロームブロック・ローム粒子少量含む



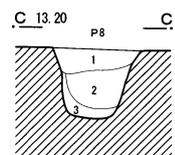
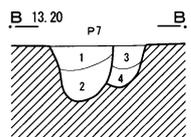
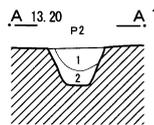
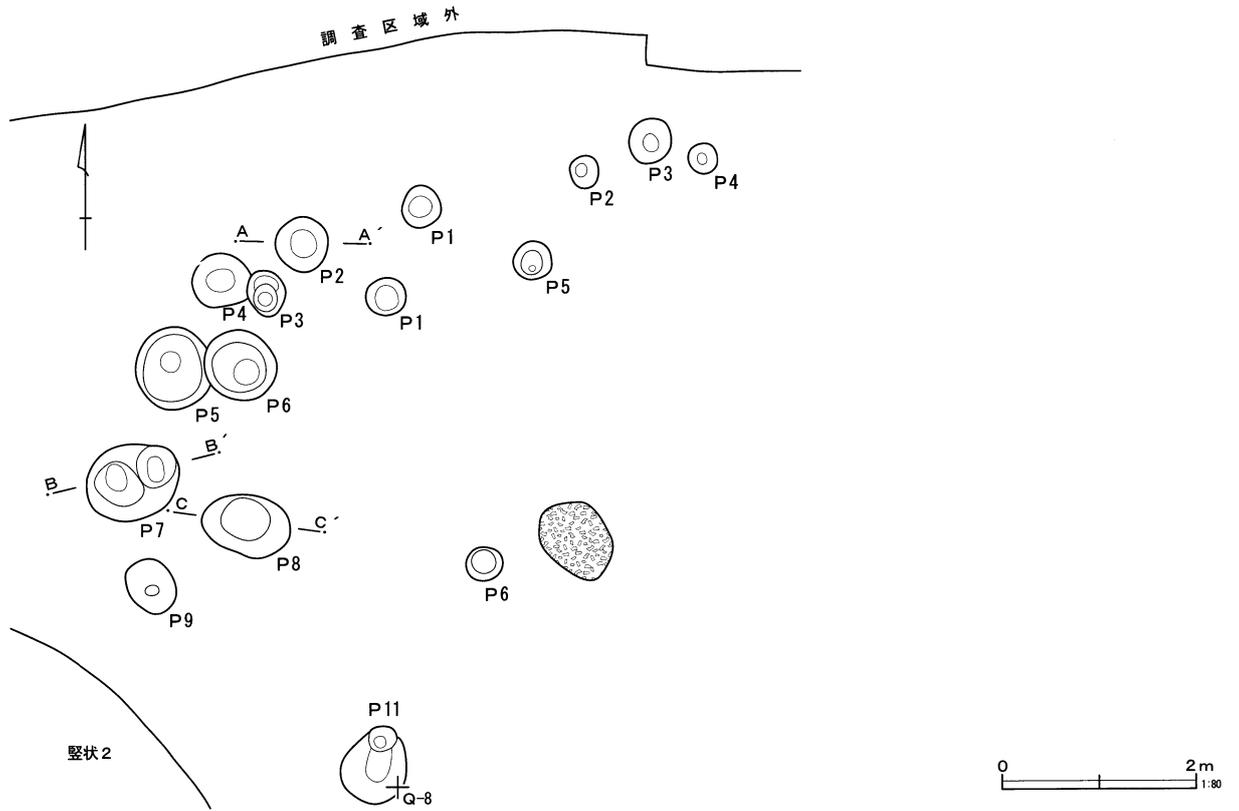
第53図 ピット群 (2)



- Pit3
 1 暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む
- Pit4
 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む
- Pit10
 1 暗褐色土層 : ローム粒子・焼土粒子少量含む
 2 暗褐色土層 : ローム粒子若干含む ローム粒子やや多く含む
- Pit14~16 Pit17 Pit18~19
 1 黒褐色土層 : ロームブロック少量含む 炭化物若干含む
 2 暗褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む
 3 暗黄褐色土層 : ロームブロック・炭化物少量含む ローム粒子やや多く含む
 4 極暗褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子・炭化物少量含む
 5 暗黄褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む
 6 暗黄褐色土層 : ロームブロック少量 ローム粒子やや多く含む 炭化物含む



第54図 ピット群(3)



P-7

Pit2

- 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む
- 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む

Pit7

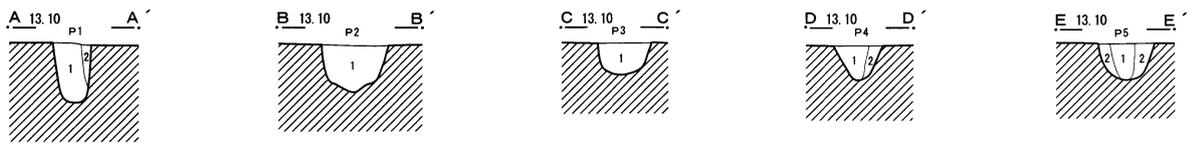
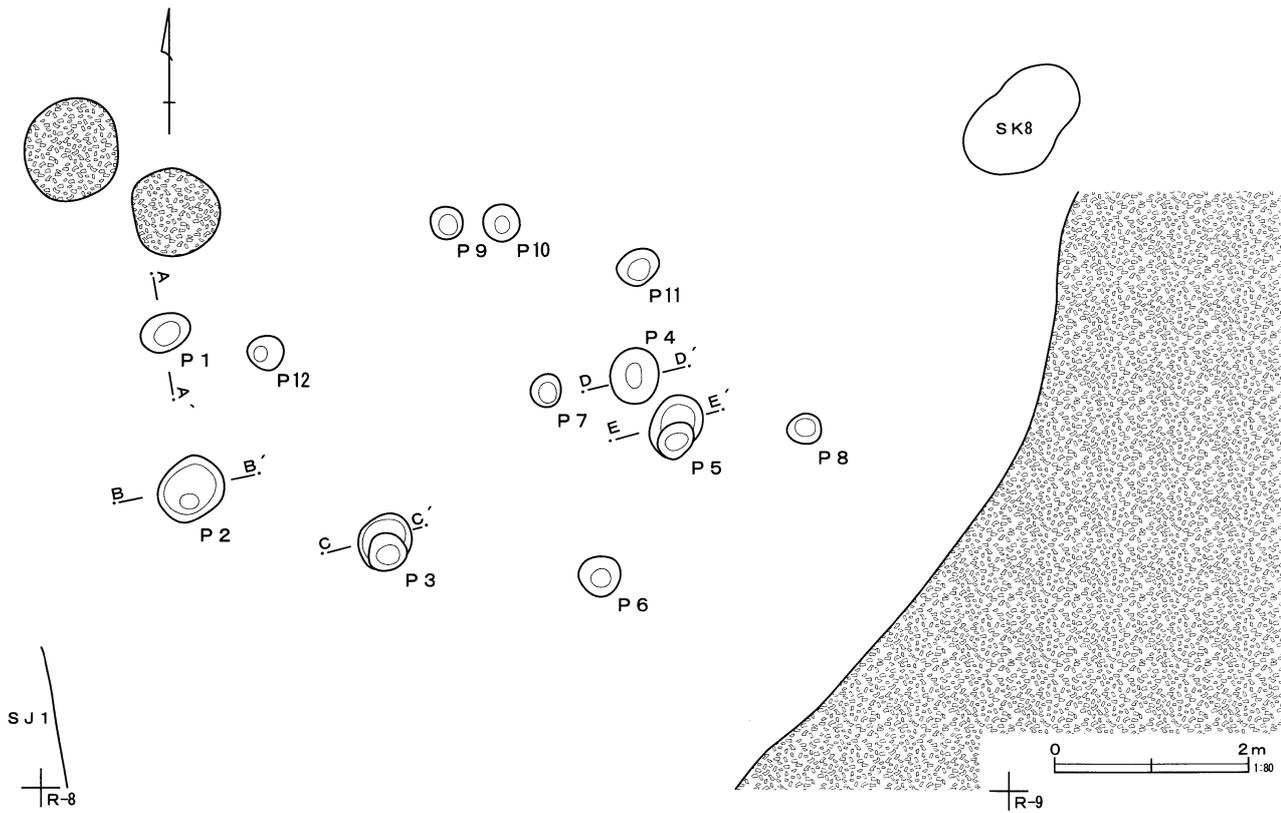
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む ローム粒子若干含む
- 2 暗褐色土層 : ロームブロックやや多く含む ローム粒子若干含む
- 3 暗褐色土層 : ロームブロック多く含む ローム粒子若干含む
- 4 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子多く含む

Pit8

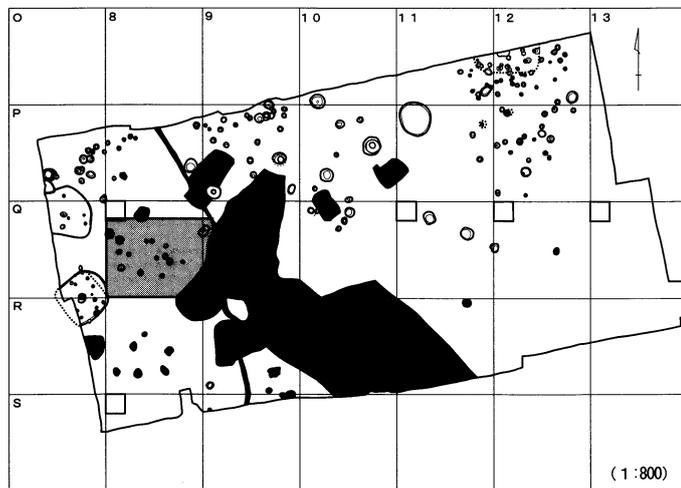
- 1 暗褐色土層 : ロームブロック少量含む ローム粒子若干含む
- 2 極暗褐色土層 : ロームブロック・焼土粒子少量含む 炭化物若干含む
- 3 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む



第55図 ピット群(4)



- Q-8 Pit1
 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む
 2 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む
- Q-8 Pit2
 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む
- Q-8 Pit3
 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む
- Q-8 Pit4
 1 暗褐色土層 : ローム粒子やや多く含む
 2 暗褐色土層 : ローム粒子多く含む
- Q-8 Pit5
 1 暗褐色土層 : ロームブロック若干含む ローム粒子やや多く含む
 2 暗黄褐色土層 : ロームブロック・ローム粒子多く含む



第56図 ピット群(5)

第5表 ピット群計測表

名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	図番	名称	長軸 (m)	短軸 (m)	深さ (m)	図番
O-12-P 1	0.51	0.50	0.36	1	P-9-P 17	(0.98)	0.76	0.41	3
O-12-P 2	0.52	0.46	0.72	1	P-9-P 18	0.38	0.38	0.33	3
O-12-P 3	0.50	0.49	0.16	1	P-9-P 19	(0.42)	0.36	0.72	3
O-12-P 4	0.42	0.41	0.46	1	P-9-P 20	0.53	0.48	0.42	3
O-12-P 5	0.42	0.42	0.24	1	P-9-P 21	0.43	0.42	0.35	3
O-12-P 6	0.34	0.31	0.14	1	P-11-P 1	0.61	0.53	0.67	1
O-12-P 7	0.30	0.76	0.18	1	P-11-P 2	0.61	0.50	0.48	1
P-7-P 1	0.40	0.38	0.18	4	P-12-P 1	0.50	0.46	0.22	1
P-7-P 2	0.56	0.56	0.41	4	P-12-P 2	0.64	0.60	0.33	1
P-7-P 3	0.48	0.30	0.51	4	P-12-P 4	0.58	0.54	0.43	1
P-7-P 4	0.60	0.54	0.35	4	P-12-P 6	0.70	0.60	0.96	1
P-7-P 5	0.85	0.76	0.47	4	P-12-P 7	0.43	0.39	0.39	1
P-7-P 6	0.74	0.74	0.29	4	P-12-P 8	0.36	0.33	0.29	1
P-7-P 7	1.00	0.83	0.60	4	P-12-P 9	0.28	0.27	0.22	1
P-7-P 8	0.90	0.63	0.72	4	P-12-P 10	0.46	0.46	0.26	1
P-7-P 9	0.58	0.48	0.22	4	P-12-P 11	0.78	0.66	0.12	1
P-7-P 11	0.82	0.68	-	4	P-12-P 12	0.70	0.68	0.67	1
P-8-P 1	0.43	0.41	0.17	4	P-12-P 13	0.43	0.42	0.93	1
P-8-P 2	0.33	0.31	0.21	4	P-12-P 14	0.46	0.39	0.49	1
P-8-P 3	0.46	0.44	0.25	4	P-12-P 15	0.40	0.32	0.68	1
P-8-P 4	0.32	0.30	0.26	4	P-12-P 16	0.37	0.31	0.15	1
P-8-P 5	0.39	0.38	0.25	4	P-12-P 17	0.55	0.55	0.61	1
P-8-P 6	0.37	0.36	0.20	4	P-12-P 18	0.55	0.54	0.95	1
P-8-P 9	0.67	0.57	0.49	3	P-12-P 19	0.49	0.42	0.21	1
P-9-P 1	0.32	0.26	0.20	3	Q-8-P 1	0.53	0.36	0.61	5
P-9-P 2	0.30	0.22	0.15	3	Q-8-P 2	0.68	0.67	0.47	5
P-9-P 3	0.57	0.53	0.66	3	Q-8-P 3	0.60	0.55	0.38	5
P-9-P 4	0.50	0.50	0.41	3	Q-8-P 4	0.58	0.51	0.38	5
P-9-P 5	0.55	0.54	0.23	3	Q-8-P 5	0.66	0.54	0.43	5
P-9-P 6	0.39	0.37	0.18	3	Q-8-P 6	0.44	0.42	0.38	5
P-9-P 7	0.46	0.40	0.67	3	Q-8-P 7	0.34	0.34	0.22	5
P-9-P 8	0.48	0.47	0.70	3	Q-8-P 8	0.33	0.32	0.21	5
P-9-P 9	0.54	0.48	0.32	3	Q-8-P 9	0.36	0.34	0.41	5
P-9-P 10	0.58	0.49	0.37	3	Q-8-P 10	0.40	0.38	0.77	5
P-9-P 11	0.60	0.56	0.32	3	Q-8-P 11	0.44	0.36	0.22	5
P-9-P 12	0.61	0.60	0.30	3	Q-8-P 12	0.38	0.36	0.97	5
P-9-P 13	0.54	0.50	0.37	3	Q-10-P 4	0.70	0.55	0.45	2
P-9-P 14	0.93	0.89	0.47	3	Q-10-P 5	0.50	0.46	0.57	2
P-9-P 15	0.86	(0.74)	0.66	3	R-8-P 1	0.46	0.42	1.08	
P-9-P 16	0.63	(0.50)	0.34	3	R-9-P 1	0.74	0.72	0.30	

※括弧つき数字は切り合い等で計測不明なもの。

(7) 遺構外出土遺物

土器 (第57図～128図)

竪穴住居跡や竪穴状遺構等の遺構以外から出土したものを一括した。

今次調査の発掘調査区は大半が環状盛土遺構の南縁に掛かっているため、これらの遺物のほぼ全てが環状盛土遺構に伴うものと考えてよい。

また、遺構の多くは盛土形成の途上で、盛土を切っけて構築されたものである。しかし時間的な制約などから、遺構の検出面は一律ローム上面とせざるを得なかった。

したがって、本来遺構出土とすべき遺物も多くは盛土中＝遺構外として取り上げられている。これらのうち、遺構内の遺物と接合したものについては極力当該遺構出土遺物として提示したが、当然これから漏れた遺物も相当数存在すると考えられる。

なお、分類の基準は以下のとおりである。

I群 後期初頭以前の土器群

II群 堀之内式

A 堀之内1式

B 堀之内2式

III群 加曾利B式

A 加曾利B1式

B 加曾利B2式

C 加曾利B3式

D 加曾利B式に伴う粗製土器・その他の土器群

IV群 後期安行式

A 曾谷式～安行1式

B 安行2式

C 異系統土器

V群 晩期安行式

A 安行3a・3b式

B 安行3c・3d式

C 異系統土器

VI群 安行式に伴う粗製土器・その他の土器群

I群 (第57図)

盛土構築に先立つ時代の土器を一括した。

1は前期前葉の繊維土器。2は半截竹管状工具の条線が横走するもので、諸磯b式であろう。

3～9は勝坂式初頭の角押文土器。10・11は阿玉台式である。

12～17は中峠式の突起である。16は三原田式類似の中空の突起で、深鉢頸部に付くものであろう。17は口縁上に立ち上がる箱状の突起で、加曾利E I式へと引き継がれる。

18は加曾利E I式、19は加曾利E II式の口縁部文様帯である。20は加曾利E III式の口縁、21・22は同時期の胴部であろう。

23～25は加曾利E II～E III式で、地文条線の胴部。26は加曾利E III式の広口壺ないし両耳壺で、竹管先端の刺突が地文となる。

29は地文縄文のみの破片、30は地文縄文上に平行沈線の懸垂文が垂下する。31は曾利系の小型深鉢であろう。32は中期末の台付き土器の脚台部である。

27・28は後期初頭の微隆起線文の土器である。

II群A類 (第58図33・34、第59図38～第60図79)

33は広口壺風の大型深鉢である。頸部の括れ部分に1条の沈線が巡り、これを境に口縁部無文帯と胴部文様帯が分離される。

39・43では胴部との境を区画する沈線がみられる。

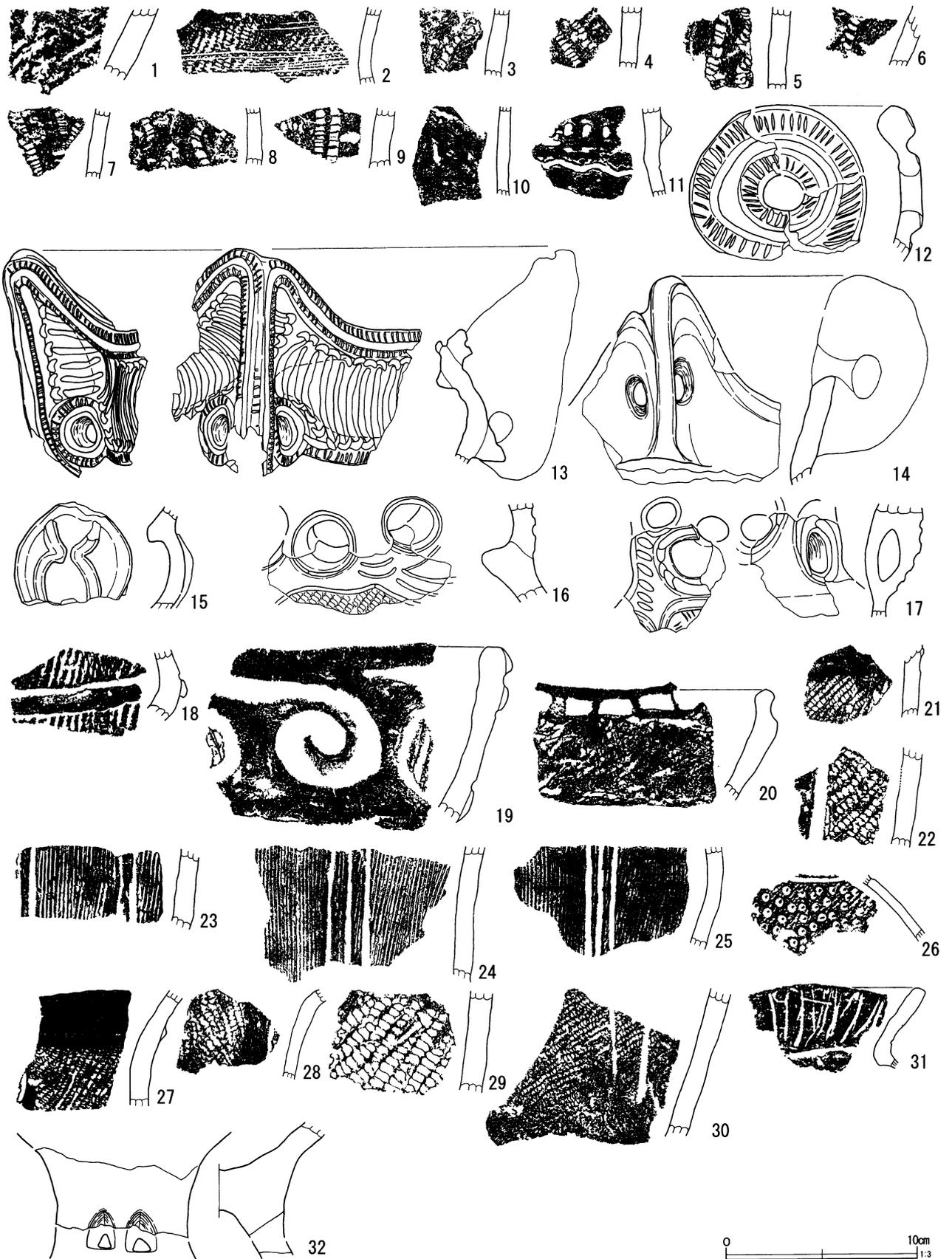
主文様は磨り消し縄文による蕨手状懸垂文で、左右に弧状に垂下する沈線を伴っている。主文様間には1条の列点文が垂下し、副文様となっている。

34は、33に類似の深鉢である。やはり頸部無文で胴部に文様帯を持つが、上端の区画が存在しない。主文様は蕨手状懸垂文で、4単位に施文されるものとみられる。副文様は存在しない。

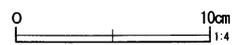
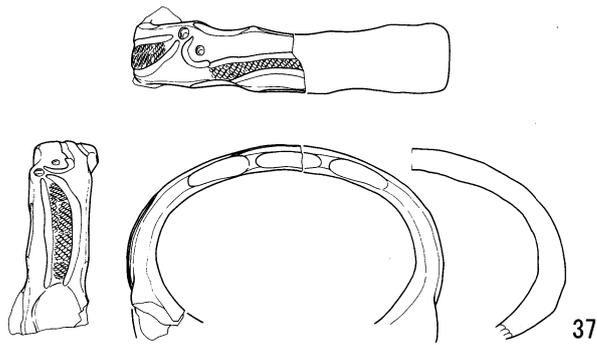
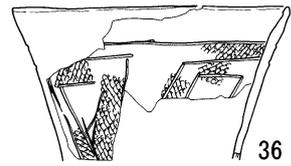
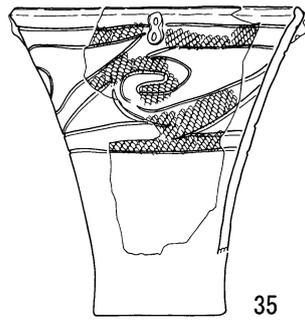
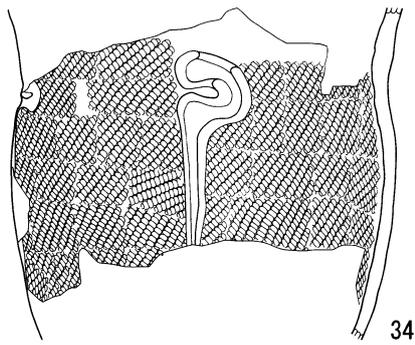
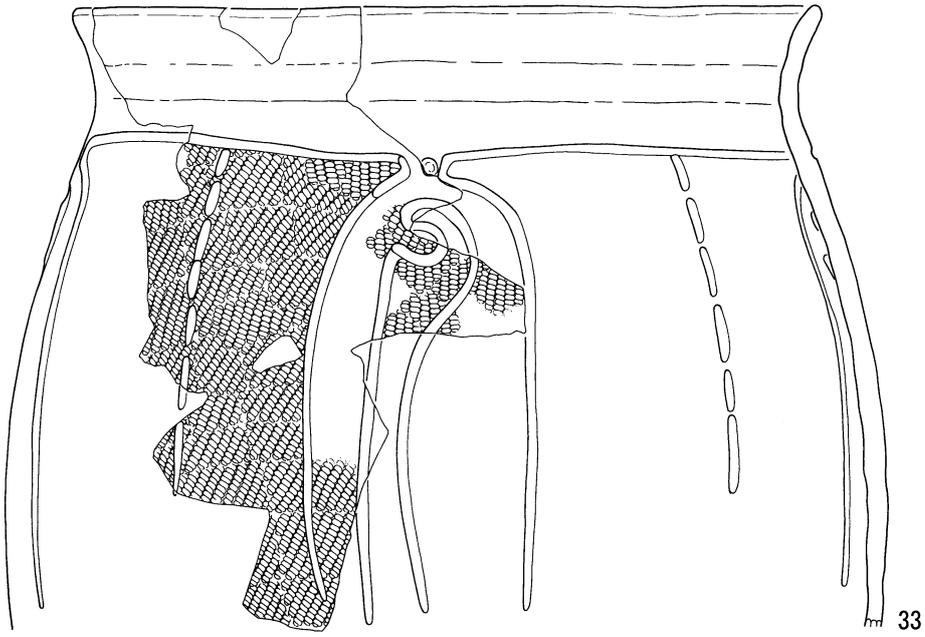
38は磨消縄文による蕨手モチーフの一部で、33に類似する。

39～60に口縁部を一括した。39～52は口縁直下に沈線+隆帯で段を形成するものである。

41は口縁直下から逆U字形の沈線が垂下する。



第57図 グリッド出土土器(1)



第58図 グリッド出土土器(2)

42は盲孔を中心にして、左右に楕円形の区画文が描かれる。

44～50は口縁上に複数の盲孔を伴う突起が配される。45は盲孔の1つが貫通孔となっている。44は突起を基点として頸部に1条の沈線が垂下し、45・48は刻みを伴う隆帯が垂下する。

51・52は朝顔形の小型精製深鉢で、堀之内1式終末期の土器である。51は突起を基点として胴部に2条の隆帯が垂下して器面を縦に分割する。52には100等の堀之内2式に引き継がれる、ひねりを加えた円盤状の突起がみられる。

54・55・58は単沈線のみ巡る扁平な口縁である。56・57は無文地に平行沈線で文様が描かれるもので、下北原式へと続く土器群であろう。

59は波状口縁の波頂部に数個の盲孔が配されるが、沈線は巡らない。60は無文の山形波状口縁で、キャリパー形の器形を呈する。

62～76は胴部破片である。

62は2単位の渦巻文が上下に重畳する。63・64も類似のモチーフを描くものであろう。

66は斜行する平行沈線で三角形の区画を描いた中に渦巻文が描き込まれる。

72～76は渦巻文と斜行する平行沈線で入組み状のモチーフを構成する。本来頸部が「く」の字に屈曲する鉢で、77のような口縁に接続するものであるが、72の口縁は屈曲部分から上を欠くボウル状の鉢になっている。

78は浅鉢の口縁突起で、左右および頂部に同心円文を描く。79は66等に類似の渦巻文を描く浅鉢である。

II群B類 (第58図35～37、第60図80～第61図118)

35・36は朝顔形の土器である。35は上下を横位の帯縄文で区画し、内部に波頭状のモチーフが連続して描かれる。36は三角形のパネル文様である。

ともに口縁部の隆帯区画は省略されて、文様帯上端の帯縄文で兼用され、35ではここに8の字状の貼付文が配される。

37は土器の釣手である。堀之内2式の注口土器に付随するものであろう。断面長方形の幅広の把手で、頂部左右に凹凸がつくり出されている。

土器本体に接続する末端が幅広になって外へとめくれ、口唇部の隆帯へと連続するものとみられる。背面に形骸化した入組み文が描かれる。

80～90・95～102等は小型精製深鉢の口縁部である。口縁下に刻みを伴う隆帯が1条ないし2条巡り、8の字状の貼付文が付される。多くは水平口縁であるが、80・81は波状口縁、82は半円形の小突起が付される。

90・100～102は口縁上の突起である。90・101はギボウシ状の突起、100・102はひねりを加えた円盤状の突起である。101は浅鉢の可能性もある。

98は地文縄文上に沈線文が描かれるもので、口縁下にボタン状の貼付文が付される。99は浅鉢の可能性もある。

84・91～94の半粗製土器は加曾利B1式の可能性もある。

103～109・116は精製深鉢胴部である。103・104は入組み文、105は直線的な釣鉤風のモチーフがみられ、108はJ字文である。109は文様帯下端の区画が省かれる。

110・111は頸部屈曲する深鉢胴部で、110では屈曲部分に3条の隆帯が巡る。頸部無文で口縁に向かって外反しつつ開くものと思われ、本来は鉢に伴う文様構成である。

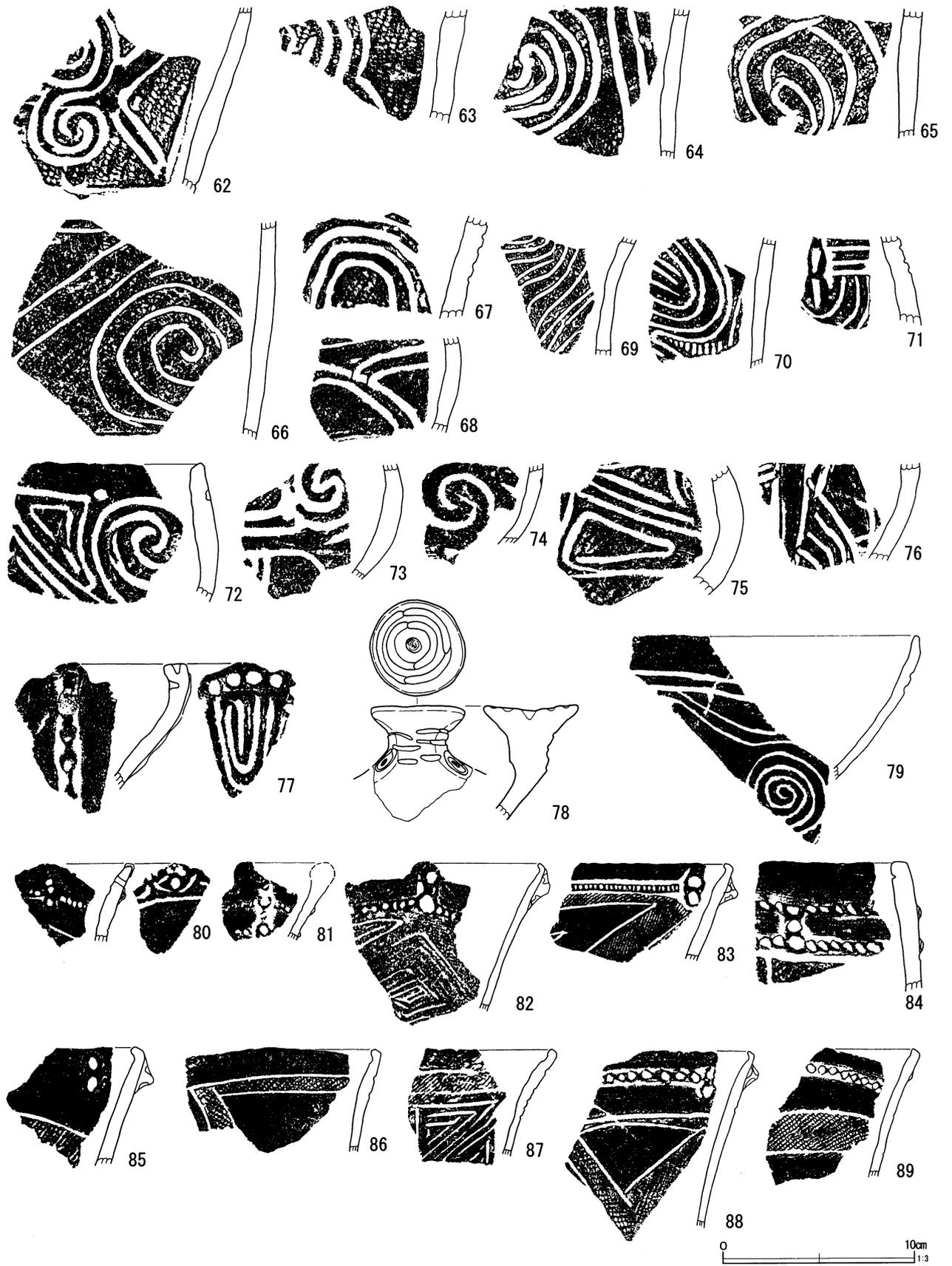
112は橋梁状把手の付く口縁で、注口土器に伴うものであろう。114も注口土器の胴部の可能性がある。

113は地文縄文上に粗雑な沈線文が描かれる。115は深鉢としては胴部の湾曲が強いため、鉢・浅鉢等特殊な器形に伴う可能性がある。

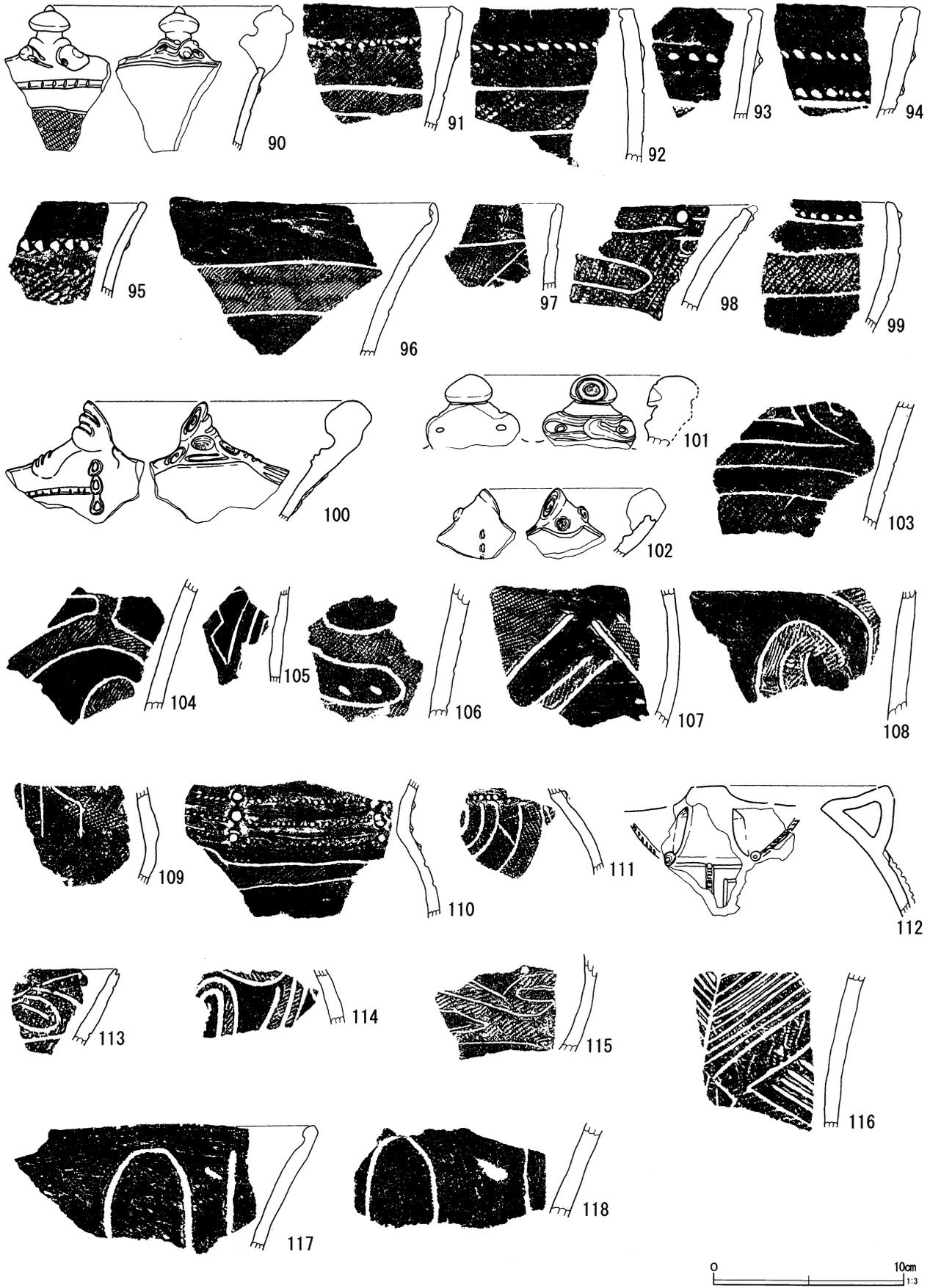
117・118は南西関東の下北原式である。無文地に単沈線でU字やH字などのモチーフが描かれる。



第59図 グリッド出土土器 (3)



第60図 グリッド出土土器(4)



第61図 グリッド出土土器(5)

Ⅲ群A類 (第62図～67図)

第62図は精製深鉢を一括した。胴部に横位平行沈線文が巡り、各種の区切り文が配される。121・122・124等には内文がみられる。

119・120はごく緩やかな波状口縁で、波頂部にひねりを加えた円盤状の突起が付される。

121～124は3単位の波状口縁である。123は波頂部に小突起が付されるが、これは前述の円盤状突起のバリエーションとみられる。口縁下に刻みを伴う平行沈線の区画が巡り、胴部文様帯との間に「の」の字状の単位文が介在する。

同様の単位文は124・125の個体にも区切り文のバリエーションとして用いられている。124では波状口縁の波頂部では「の」の字状単位文、波底部ではシンプルなL字状の区切り文と使い分けられている。

125の口縁部隆帯には堀之内2式からの系譜を見て取れる。両側に交互刺突を伴う断面三角形の隆帯が二段に巡り、横位の8の字状貼付文が配される。胴部文様帯は三段の構成が意識され、中段のみLR単節横位回転の縄文が施文され、上下の区画には雷文風の短沈線が充填されている。

126は文様帯中段の二区画のみ区切り文が施され、上下の区画は圧縮されてあたかも平行沈線による区画線そのもののように変化している。128にも類似の構成を見ることができる。

129～132には新しい要素がみられる。

129は横位平行沈線間に無文部を設けることで、視覚上、文様帯を上下に分帯している。131でも同様の手法がとられている。130は加曾利B2式で盛行する円柱状の突起が用いられている。

132は平行沈線間が極端に間伸びして、区切り文も省略されている。

これらに対応する破片資料を144～180に一括した。やはり、148・161・165等のように新しい要素を持つ土器が含まれている。

149はL字状の区切り文が波状口縁の波頂部下に対向して配され、「の」の字状単位文が上下に交差

する。156は波状口縁の波底部にねじり棒状の小突起が配される。これも加曾利B2式的な構成といえようか。

179・180は比較的大型の土器で、同時期の半粗製土器に近い。179はシンプルな横位平行沈線文だが、180は上下を平行沈線で区画した中に弧線文が上下対置される。

133～139は鉢である。ここでは、器高よりも口径が卓越しつつも、口縁を垂直に立ち上げる意図が強く、文様が外面に集約される傾向のみられるものを「浅鉢」とは別の「鉢」と分類した。

若干内湾しつつも底部から口縁まで直線的に開くもの(133・136・137)、より湾曲の強いボウル状のもの(134・138?・139)胴下半部が括れるキャリパー風の器形(135)等、いくつかのバリエーションが存在する。

口端は外削ぎ状に面取りされる断面台形のものが多く、この器種の特徴となっている。133～135は口縁下に刻みを持つ隆帯が巡るが、136～138は区画を持たず、口縁部無文帯と胴部文様帯が直に接している。

133は文様帯が上下に分帯する。134は、横位平行沈線文の文様帯下部が「し」の字状の単位文を介して横位の単沈線に接続し、やはり二段構成の文様帯を形成している。

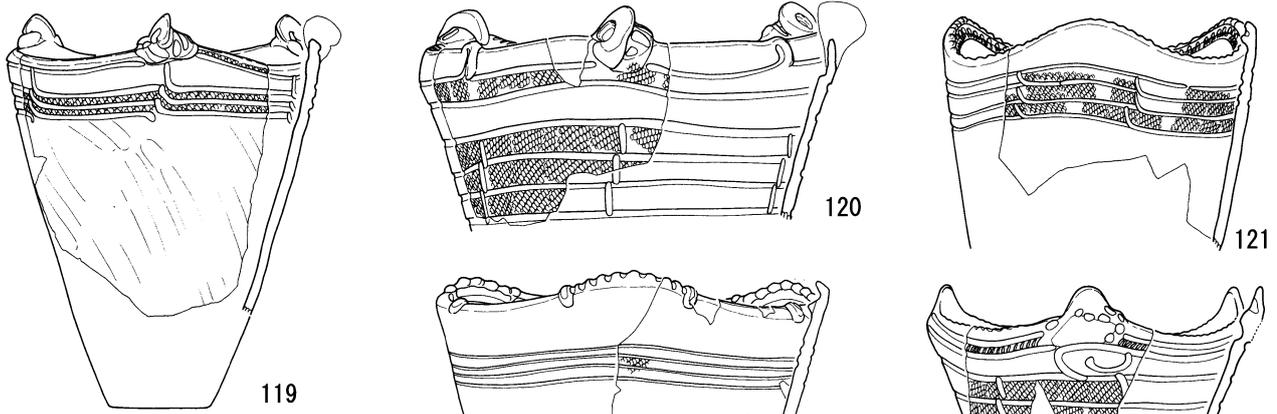
135は器形的にも文様のうえでも、鉢というよりもミニチュアの深鉢という印象が強い。

139は注口土器によくみられる長方形の区画文である。

181～216は同じく鉢に属する破片資料である。182～185、191～198等のように、やはり外削ぎ状の断面台形の口縁が卓越している。210は頸部が「く」の字に屈曲するやや特殊な器形である。

胴部文様は深鉢と同意匠の横位平行沈線文で、内文を持つものは少ない。

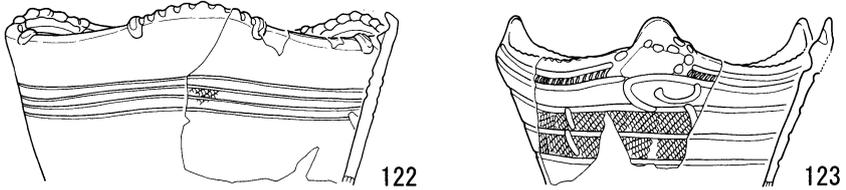
沈線間を連繋する区切り文は、単沈線によるもの(182・187・188等)、沈線末端が横L字状に切れ上



119

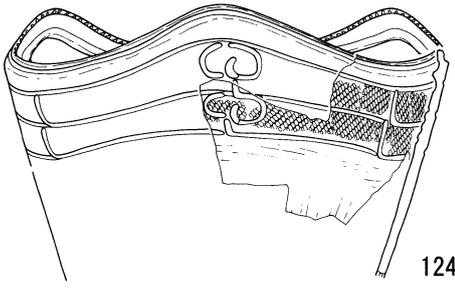
120

121

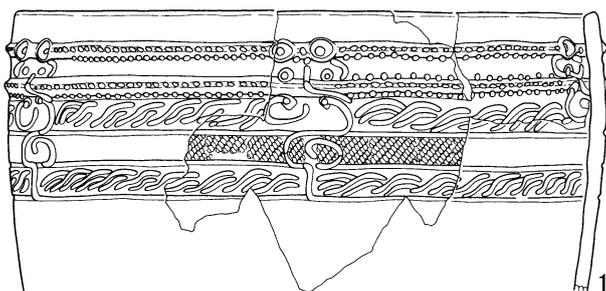


122

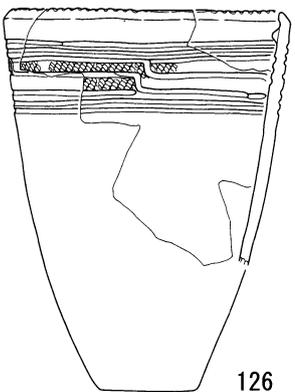
123



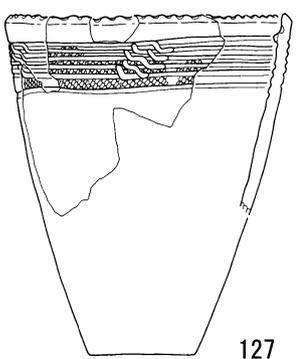
124



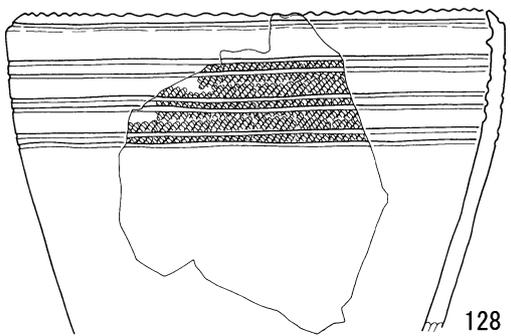
125



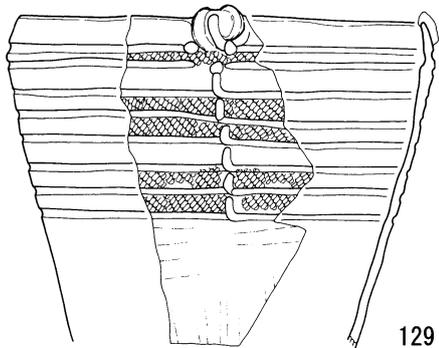
126



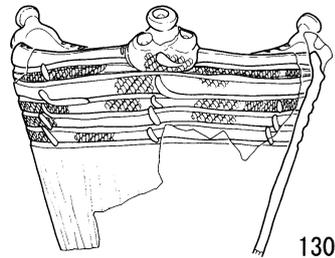
127



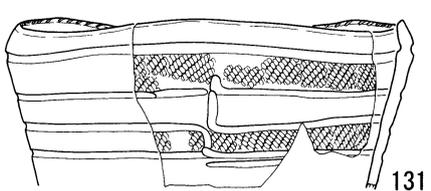
128



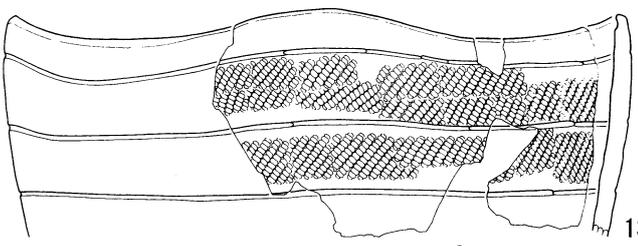
129



130



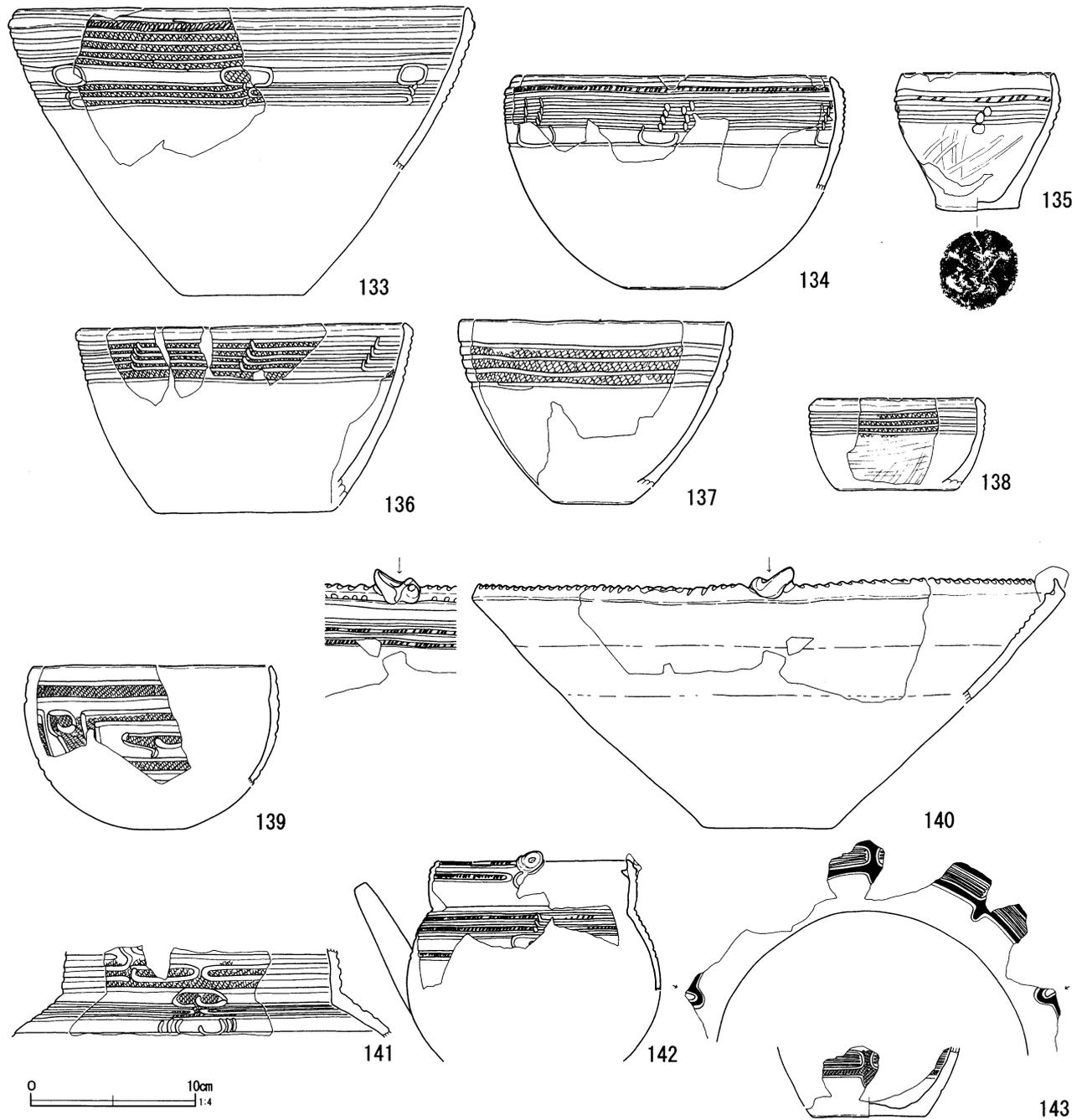
131



132



第62図 グリッド出土土器(6)



第63図 グリッド出土土器(7)

るもの(181・183・189・191等)、クランク状に連続して描かれるもの(195等)、クランクが多段化するもの(193)等、いくつかのバリエーションが存在する。

200～203では上端および下端の沈線が部分的に突出して島状の単位文を形成している。

202では平行沈線間が幅広の部分と幅狭の部分が交互にあらわれ、あたかも2～3条を単位とした平行沈線を用いて横帯の区画文様が描かれたようにみ

せている。

209は同様にして形成された幅広の区画内にあやくり状の沈線文が描かれており、本来文様そのものであった横位平行沈線間が、文様を配置するキャンパス＝区画として意識されはじめたことを表わしている。

181は胴部文様帯が二段に重畳し、間を単位文で繋いでいる。

同様の単位文は206・208・216等でも観察され、

やはり文様帯をいくつかに分帯する役割を果たしている。

140は浅鉢である。底部から口縁までストレートに開く器形で、口端内屈し、隆帯+沈線による段を形成している。口縁上に斜位の刻みが巡り、ひねりを加えた小円盤状の突起を配する。

外面無文で、内面に横位平行沈線による内文が描かれる。

217～226は浅鉢の破片資料である。

217・218は口縁上の突起である。217は144に類似の小円盤状突起であるが、側面に加曾利B2式期に盛行する円柱状の突起が出現している。突起直下の胴部には貫通孔がみられる。

218は周縁に刻みを施した半円形の突起で、中央に貫通孔を持つ。

219以下では胴部の文様を見ることができる。219・220は内外両面に文様を持つが、その他は基本的に外面無文である。区切り文や単位文のありかたについては深鉢や浅鉢と共通している。

大半が口縁上に刻みをもち、内面に隆帯+沈線の段を形成する。沈線部分にはしばしば棒状工具先端の列点文が巡る。

224は口唇内側が肥厚する折り返し口縁である。口唇の内外とも斜位の集合沈線文が描かれ、ボタン状の小突起が配される。

226は口縁部が「く」の字に内屈し、内外両面に段を形成する。内外とも無文で、丸底の浅鉢と考えられる。

141・142は注口土器である。141は口縁から肩部にかけて残存し、142は胴部中段までが残存する。

部位ごとのプロポーションの変化に応じ、文様帯は複数の多段構成となって文様帯の間は各種の単位

文によって連繋される。文様帯部分は地文縄文や斜位の刻みが充填されるが、それ以外の部分は無文となっている。

142の口端上には、ひねりを加えた小円盤状の突起が配される。142は、突起そのものは欠失しているが、突起に連続する沈線末端の切れあがりが見られる。同様の突起を持つ可能性が高い。

143は注口土器の胴部と考えたが、138のような小型の鉢の可能性もある。胴部には210の鉢に類似の区画文様が描かれている。

227～255は注口土器の破片資料である。これらのうち234までは把手および吊り手である。

把手は縦位の橋梁状把手であり、口縁部に一対配されるものである。

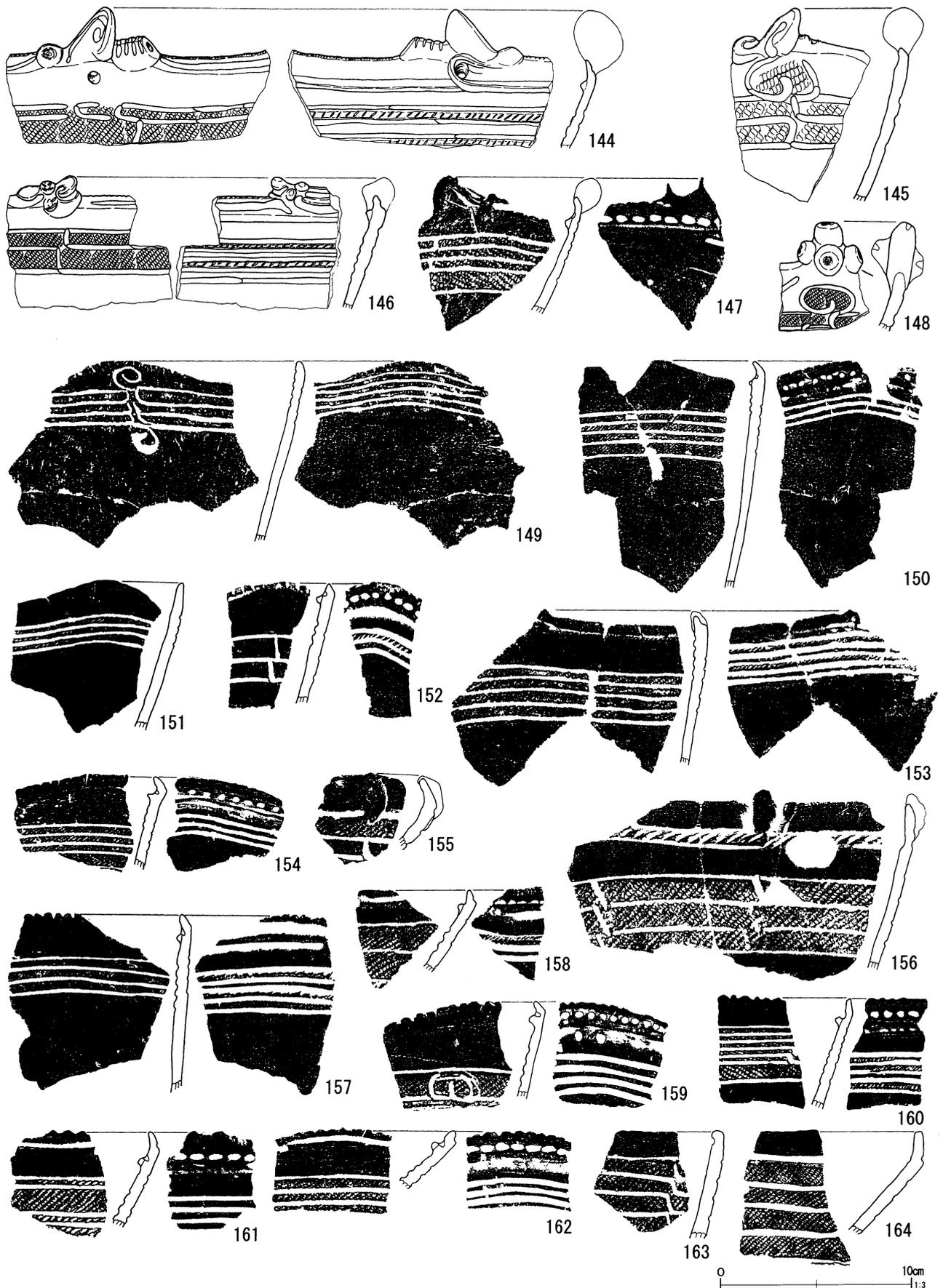
中央に盲孔を持つ小円盤状の突起は、深鉢口縁部のひねりを加えた小円盤状突起から取り込まれたものであろう。227では突起上面に2個が非対称に組み合わされ、228では1個のみ背面に、233では頂部に配される。

小渦巻状の単位文は胴部の文様帯から取り込まれたものであろう。227・231・232等でみることができる。

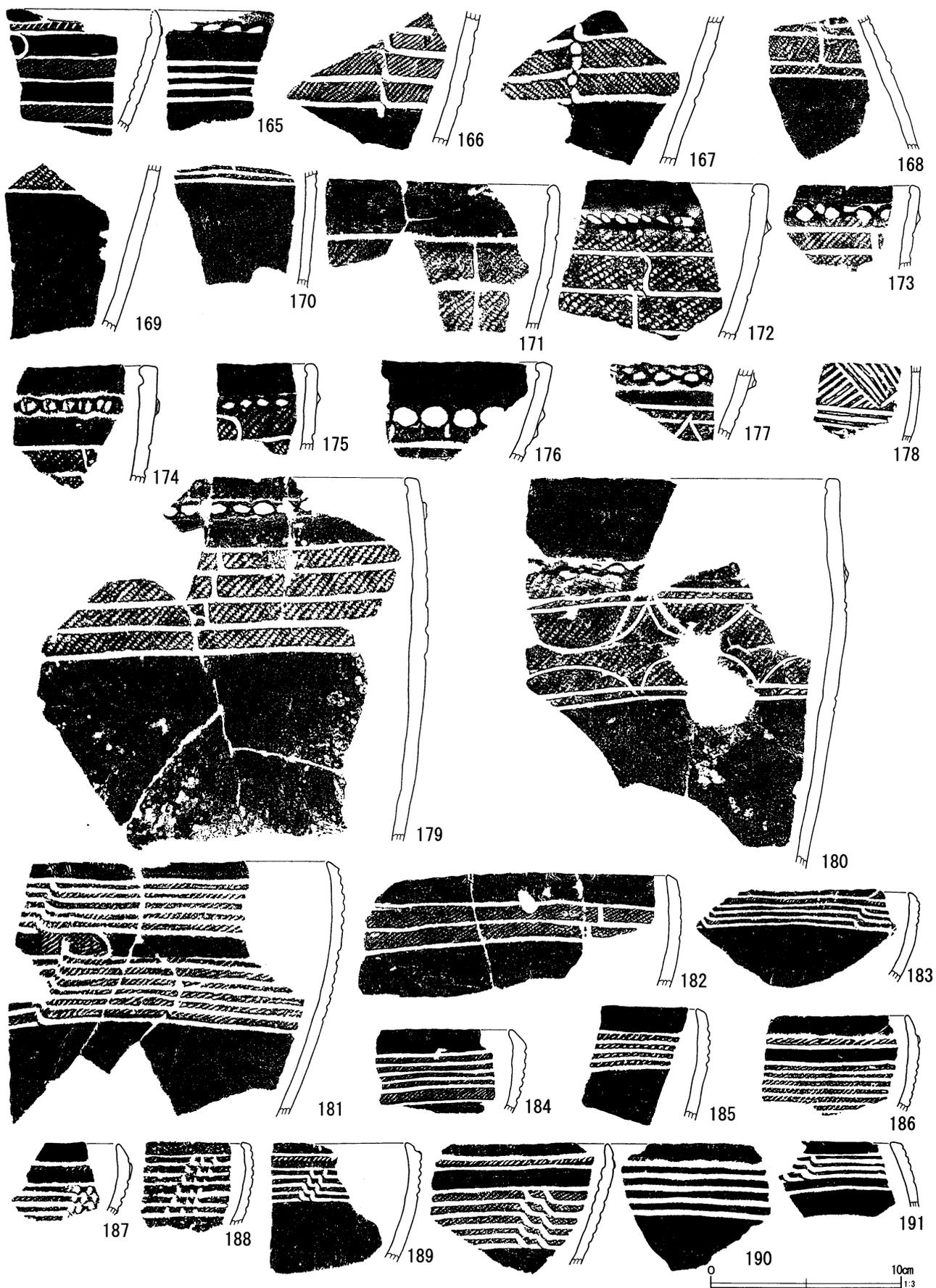
235・236・240・247・253・254等は多段化しつつも基本的には深鉢胴部の横位平行沈線文の延長状にある文様構成である。237・255は珍しく内文を持つ口縁であるが、特に237はごく粗雑な施文となっている。口径が小さい器形上の制約のためか。

240は深鉢や鉢の可能性もあるが、内面に強い段を持つ点やわずかながら内傾する器形から注口土器と考えた。241は鉢の可能性もある。

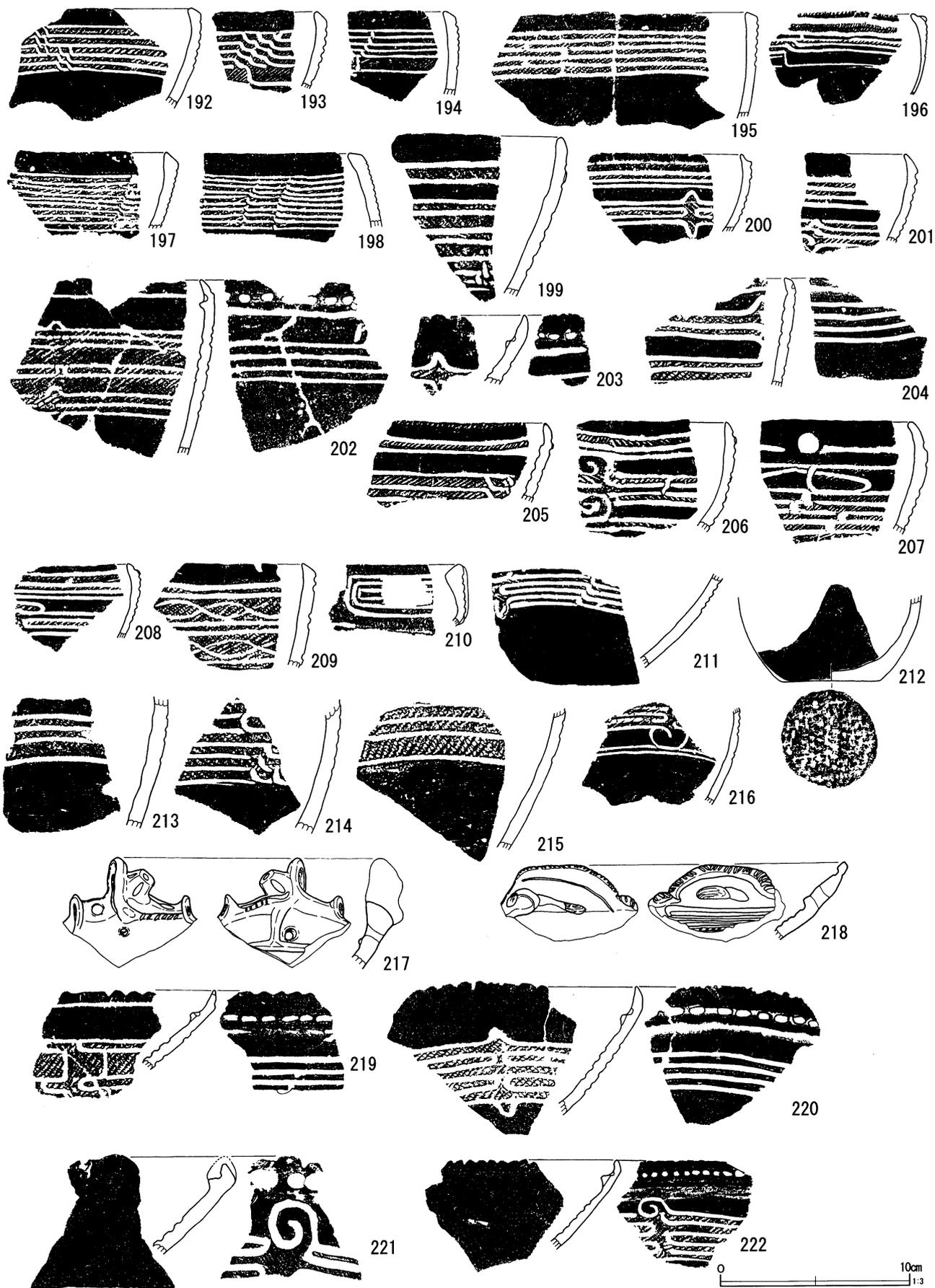
242～246、250～252は注口土器に特有の文様手法で、細密な集合沈線によって文様が描かれる。



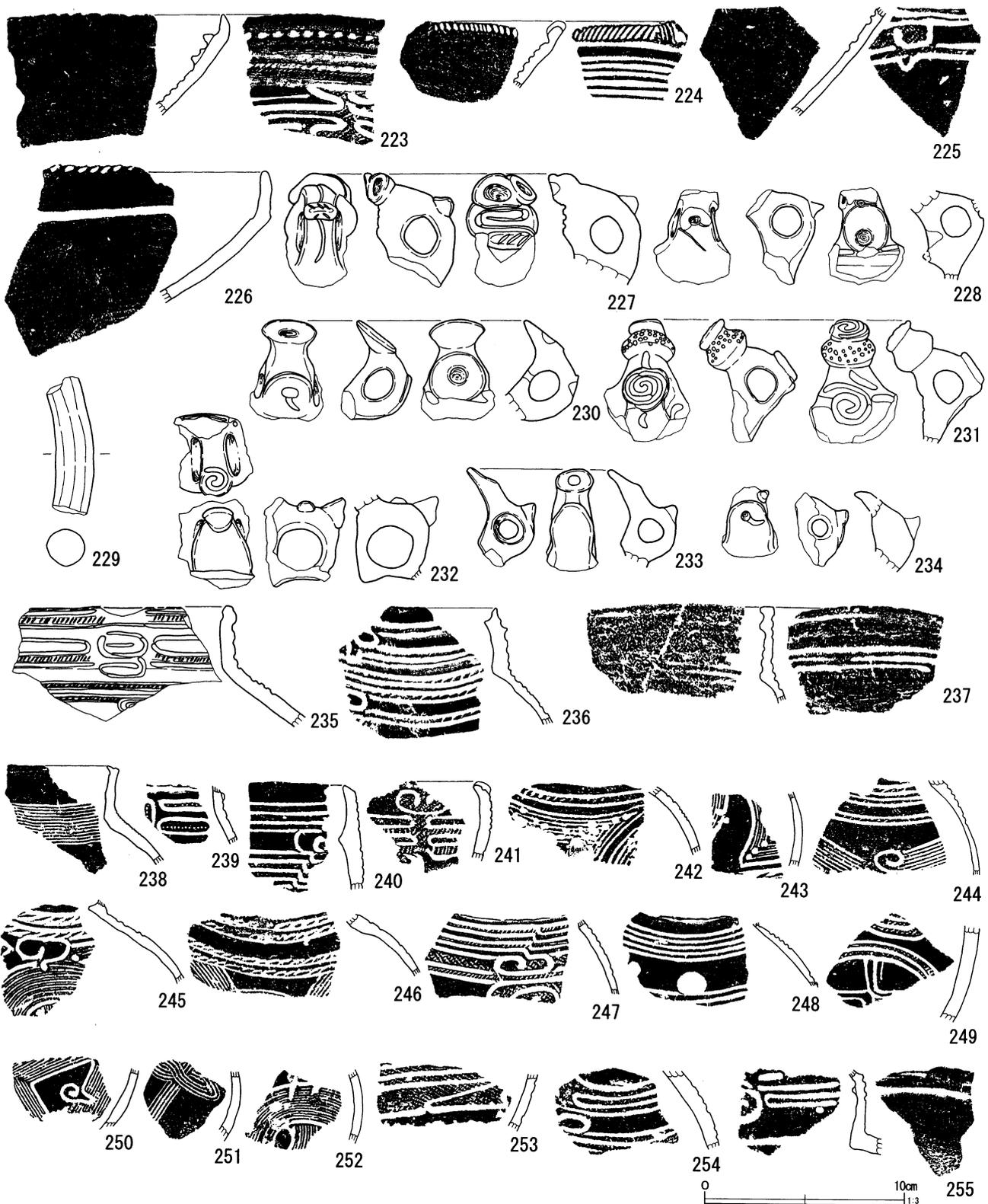
第64図 グリッド出土土器(8)



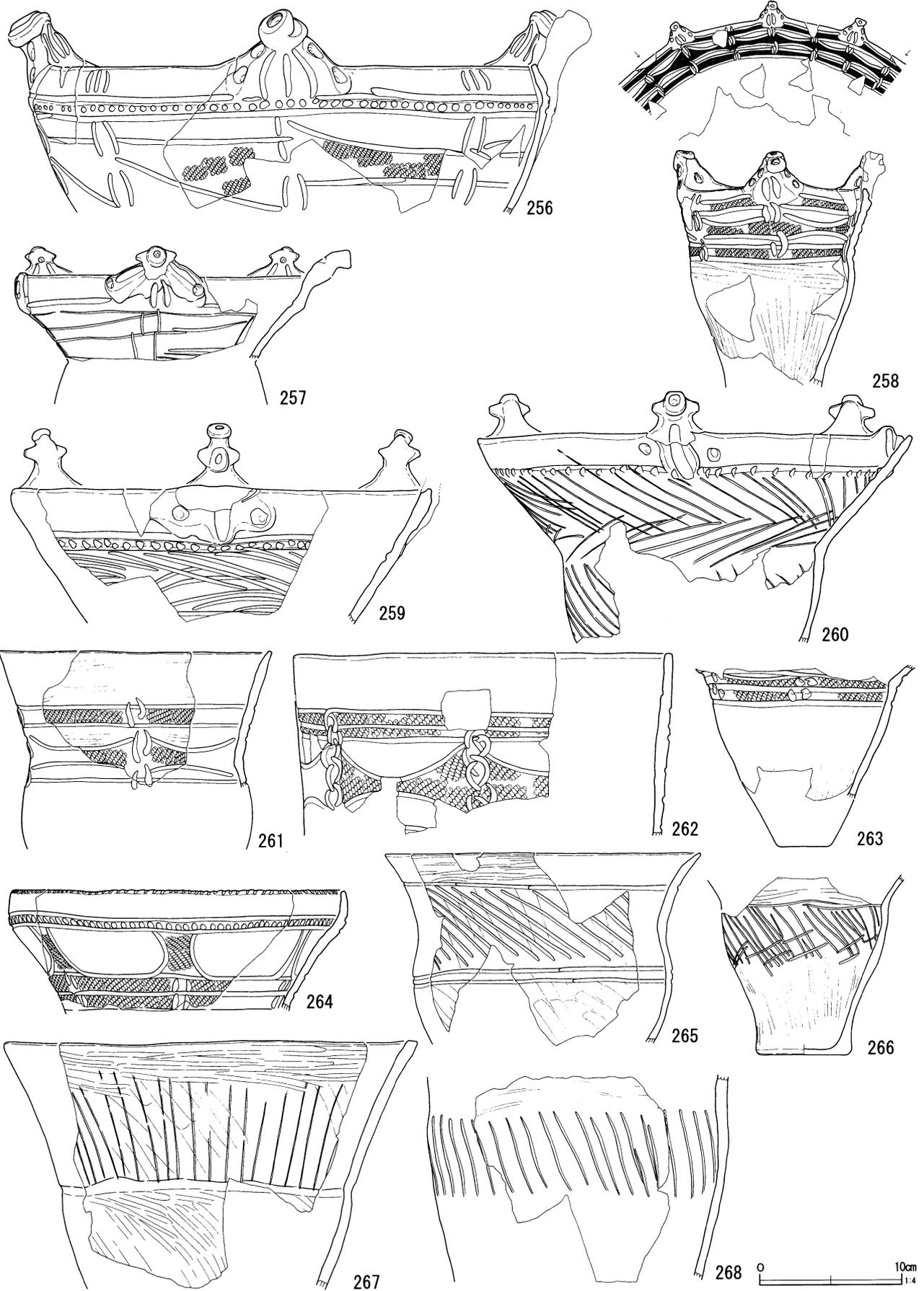
第65図 グリッド出土土器 (9)



第66図 グリッド出土土器 (10)



第 67 図 グリッド出土土器 (11)



第68図 グリッド出土土器 (12)

Ⅲ群B類 (第 68 図～75 図 409)

256～260 は 3 単位突起を持ち、頸部が「く」の字に屈曲する精製深鉢である。加曾利 B 2 式期に出現するが、熊谷市諏訪木遺跡 C 地点では B 3 式期においても盛んに制作された可能性が指摘されている。

258 はほぼ全容を知り得る資料である。胴部中段に括れを持ち、頸部が直線的に開いて口縁が「く」の字に内屈する。水平口縁上に 3 単位の山形突起が配され、盲孔や区切り文が施される。胴上半部には弧線文が重畳し、突起の下部には対弧状の区切り文が並ぶ。胴下半部は無文で、縦位の研磨が施される。

256 はこれよりやや大型の精製深鉢で、口縁部から胴上半部にかけて全体の 1/3 程度が残存する。

胴部文様帯の弧線文が、258 ではほぼ左右対称に展開していたが、本資料では右から左へと開く片流れの構成になっている点が相違している。口縁の段の部分の区画には、縄文ではなく円形の刺突文が並ぶ。

257 の胴部文様帯はさらに崩れを見せており、連続する弧線文は粗雑な平行沈線文となり、対弧状の区切り文も単なる一對の短沈線へと姿を変える。また、地文がまったく施文されない。口縁上の突起は左右に短い腕を伸ばす十字状の突起となっている。

259・260 では胴部の文様帯は矢羽根状の集合沈線文に置き換えられている。口縁上の突起はいずれも十字状突起で、260 では文様帯が胴下半部にまで拡大している。

257 以下の 3 例については、加曾利 B 3 式期のものと考えべきであるかもしれない。

261・262 は 258 と共通の胴部文様をもつ小型深鉢だが、突起や口縁の屈曲を持たない。262 では多段の弧線文が 1 帯に集約され、対弧状の区切り文のみが多段化して重畳している。261 は胴部中段に屈曲を持つが、262 はほぼ寸胴になると思われる。

263・264 は、加曾利 B 1 式の系譜をひく横位平行沈線文である。胴部中段に圧縮された平行沈線間に対弧状の区切り文が配される。いずれも器形的に

は前述の 3 単位突起の土器と共通するものとみられるが、264 では水平口縁上に突起がみられず、前段階の名残を示す斜位の刻みが巡る。口縁下を区画する平行沈線と胴部文様帯との間には対弧状の沈線による帯縄文で連結される。

265～268 は集合沈線を地文とする深鉢である。

265 は上端を単沈線、下端を平行沈線で区画した文様帯内部に斜位の集合沈線が施文される。胴部中段の屈曲からゆるやかに外反しつつ開く器形は他の深鉢とはやや異質な印象を与える。

266・267 の器形は基本的に 3 単位突起の土器と共通するものである。266 は 260 等と同様、矢羽根状の集合沈線を地文とするが、文様帯が胴部中段の屈曲から下に集約される点が異なっている。

267 は鋭利な工具を用いた縦位の平行沈線が上半部の文様帯を埋めている。文様帯上下に区画は設けられないが、横方向の研磨で沈線の上下端を磨消しており、あきらかな区画の意図を示している。

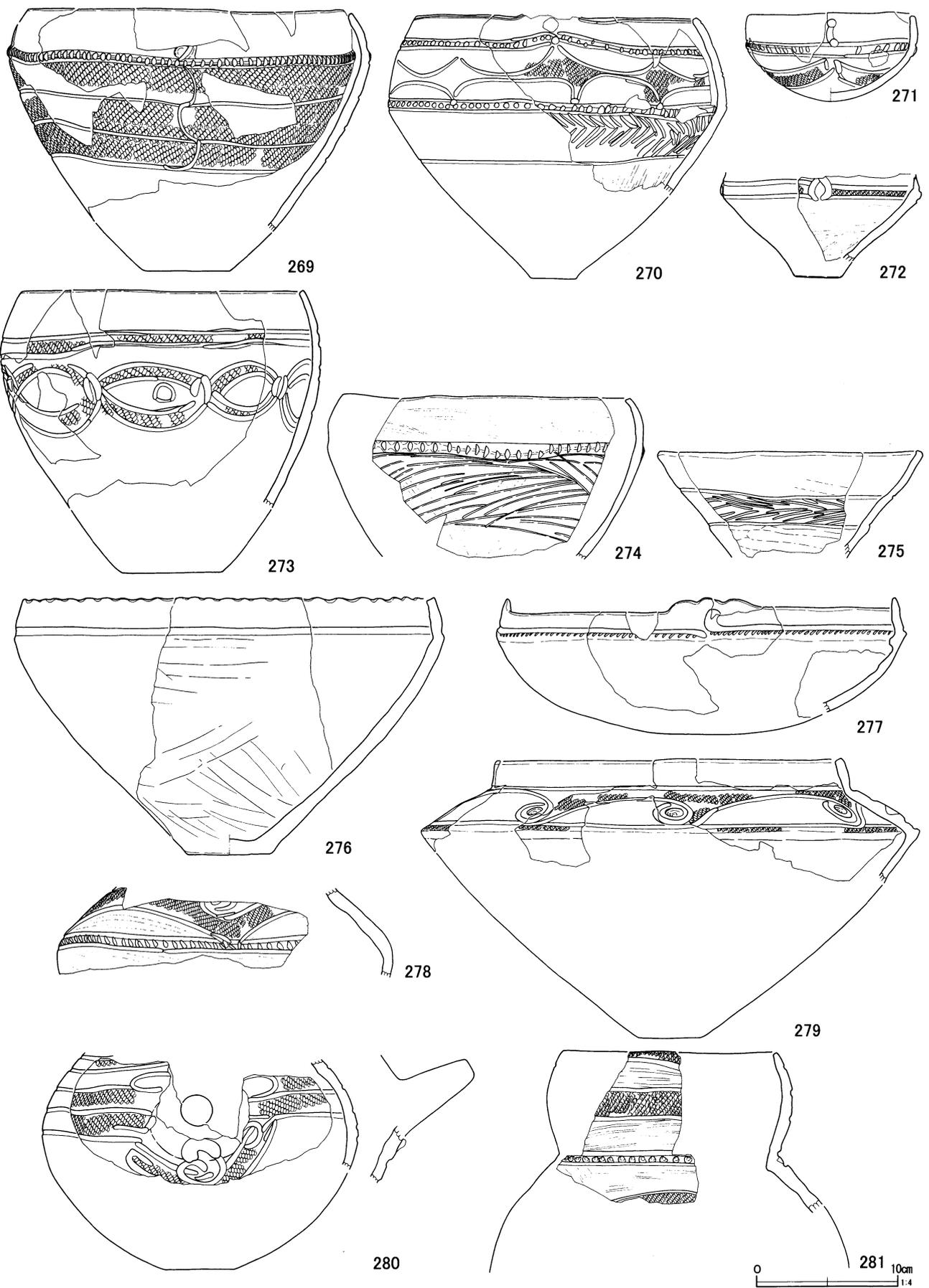
268 は胴部中段に斜方向の平行沈線文が巡る。上下の区画の意図はいつそう弱まり、中段の屈曲も緩んで単調な器形となっている。

269～277 は鉢ないし浅鉢である。

269～274・276 は前段階にもみられた胴張りの鉢である。底部から胴部にかけて緩やかに内湾しつつ立ち上がった後、口縁で「く」の字に内屈するもの(269・274・276)、胴部中段に屈曲を持ち、口端にむけて緩やかに内湾するもの(270)、単調な内湾により樽形の器形をなすもの(273)などが存在する。

269 では加曾利 B 1 以来の横位平行沈線文上に蛇行懸垂文化した区切り文がみられる。270 は同時代の 3 単位突起の土器にみられた弧線文と矢羽根状沈線の文様帯が重畳している。273 には曾利式等に共通するあやくり状の帯縄文がみられるが、モチーフの交点に配される対弧状の沈線や、研磨の行き届いた器面調整の特徴から、この時期に属するものと判断した。

274 は粗い矢羽根状沈線が描かれる。276 は無文で、



第69図 グリッド出土土器 (13)

頸部に段を持ち、小波状口縁となっている。

271・277は丸底の浅鉢である。271の胴部には深鉢に共通の文様が描かれるが、277は口縁以外無文となっている。

272は小型壺であるかもしれない。外反する胴下半部から「く」の字の屈曲を経て、胴部が垂直に近い角度で立ち上がっている。275は直線的に開く浅鉢で、胴部中段に矢羽根状沈線の文様帯をもち、上下を沈線および段によって区画している。

278は内面整形の特徴から壺ないし注口土器の肩部と考えた。胴部中段に最大径を持ち、この部分に刻みを伴う平行沈線による区画が巡り、胴上半部には弧線文による磨消モチーフが描かれる。

279はソロバン玉状の胴部から無文の頸部が垂直に立ち上がる。胴部中段の屈曲から下が無文であることから、ここでは浅鉢として復元したが、深鉢の可能性もある。胴上半部には弧線文と渦巻文が組み合わせられた入組み状のモチーフが描かれる。

280は注口土器である。269同様、幅広の横位平行沈線文が描かれ、大柄な弧状の区切り文が描かれる。剥落した注口部の直下には末端蕨手状の沈線が交錯し、中央に「の」の字状の単位文が配される。

全体に、前段階では注口土器からは排除されていた精製深鉢における文様モチーフが、深鉢本体においては衰退していくことにより規制が失われ、注口土器の文様として取り入れられていったものと理解することができるだろう。

281は注口土器であろう。胴部中段に括れを持ち、上下が球胴状に張り出す瓢形の器形を呈する。

括れ部分に刺突を伴う平行沈線が巡り、これを境に文様帯が上下に分帯される。胴上半部には幅広の帯縄文が巡り、口縁下に279類似の弧線文が描かれる。

第70図282～75図409はこの時期に属する破片資料である。

282～312には突起・把手類を一括した。

282～289は前段階の流れを汲む、ひねりを加え

た小円盤状の突起である。287までは一側にドーム状の小突起を伴う比較的オーソドックスな突起だが、288では一端が開口する3個の小円盤が巴状に組み合わせられ、289では上向きの逆円錐状の突起となっている。

290は上記の小円盤状突起の延長線上にあるもので、扁平な鱗状の突起がいくつか組み合わせられ、浅い指頭圧痕が配されるものである。290・291は4個の刺突が十字状に配される。292～295では横並びの眼鏡状の突起となっており、浅鉢とおぼしき294では貫通孔となっている。

297は同種の突起が内文化したもので、加曽利B1式の可能性もある。

298～312は3単位突起の深鉢に付される山形や十字型の突起である。

前面には対弧状区切り文や、そのバリエーションとしての短沈線文、盲孔や貫通孔が配され、側面や頂部にも盲孔が配される。

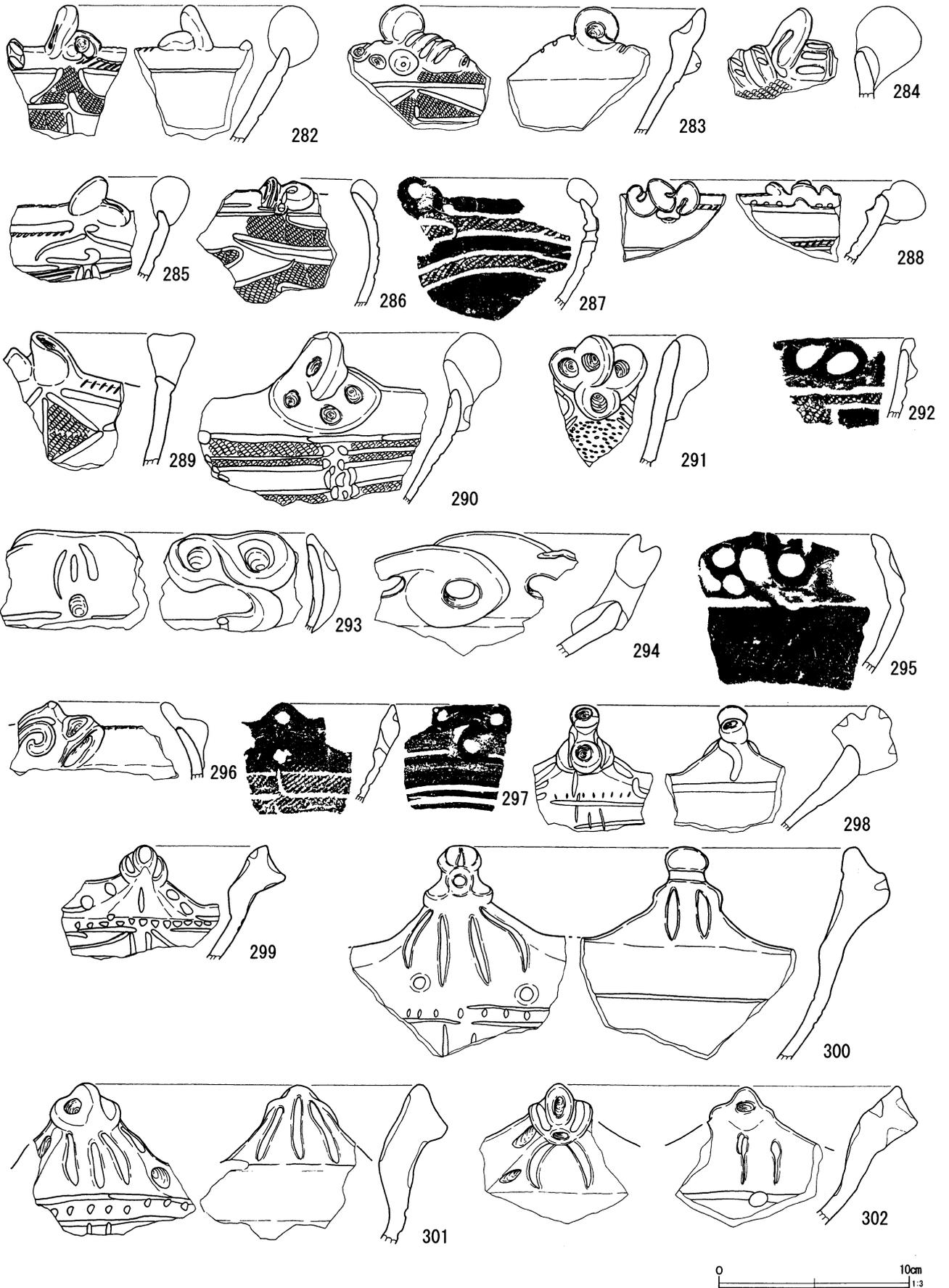
299～306は両側に小翼を伴う十字状の突起である。307～310は頂部扁平で一对の盲孔が並ぶ。311は球状の頭部の根元に円形の罈（つば）を持ち、表裏に盲孔を伴っている。312も周囲に罈を伴う突起である。

313～324は口縁内湾する深鉢で、横位平行沈線文が描かれる。一部前段階の加曽利B1式に含まれる可能性があるが、突起や区切り文の特徴、重畳する平行沈線の一部を磨消して視覚上多段化する傾向などから、大半はB2式に伴うものと考えた。

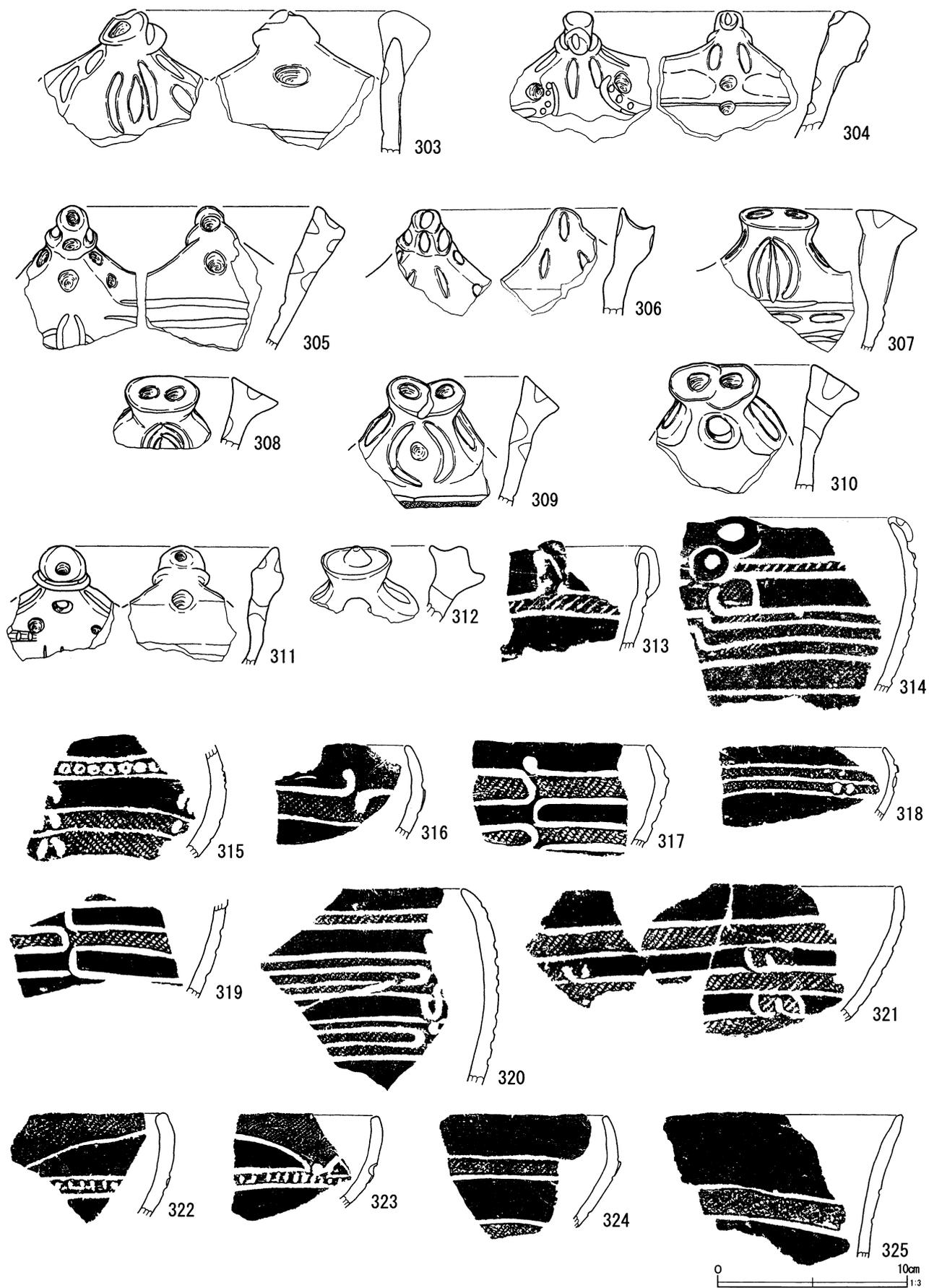
325～328は外反する口縁の下に幅広の無文帯を持つ。261・262等に類似の器形で、やはり横位平行沈線文を基調とする。329～331は同文様が描かれる胴部である。

332～375は横位の弧線文や斜行する沈線によって区画が描かれ、内部に縄文が充填される。器形は各種あるが、基本的に258に類似の3単位波状口縁深鉢に伴う文様である。

沈線の交点には、平行沈線から独立して単位化を



第70図 グリッド出土土器 (14)



第71図 グリッド出土土器 (15)

果たした対弧文が配され、334では斜行沈線と合流して入組み状のモチーフを描いている。342では沈線の末端が噛み合って巴状の入組み文を形成している。359では対弧文内部の区画が強く意識され、あたかも磨消球抱き文のようなモチーフを形成している。

370・371は対弧文が連鎖しつつ垂下する。374では1条の蛇行沈線に代替されている。

地文は大半がLR単節横位回転の縄文であるが、359・362等RLも少数ながら存在する。また、373・375では地文が列点文に置き換わり、352・353は本来地文充填する区画内部のみ篋撫でされ、砂粒の移動を伴う擦痕を残している。

器形は332～353は258のようなキャリパー形、354～358は胴部中段に括れを持ちつつも口縁は外反しつつ直行する。

322・323・376は内湾する口縁直下に弧線文が配され、頸部の区画との間に半円形のネガ文様を描き出すものである。弧線文の交点には盲孔が配される。

377～381はソロバン球状の胴部に短い無文の口縁が付されるもので、279のような浅鉢か、キャリパー形の深鉢になるものと思われる。

文様は弧線文と上下の区画により半円形のネガ文様を描くもので、沈線の交点には盲孔や対弧文が配される。381では沈線の交点が入組んで中央に盲孔が配される。

382は口縁直下に帯縄文による楕円形の区画が形成され、区画の接点に盲孔+短沈線によるアクセントが配される。

383は261類似の直行する口縁部に半円形のネガ文様が上下対置されるものである。

384～401は胴部中段が球胴状に張る深鉢と考えられる。口縁部形態は外反(384・389)・内湾(385～388)などいくつかのバリエーションが存在するが、387・388・393等山形大波状口縁が特徴的に見られる。

392は口唇部に、388・390は頸部と胴部の境に刻みを有する隆帯が出現している。

387は波頂部の直下と頸部の屈曲部分にそれぞれ盲孔が配され、両者を沈線で連繋している。

385～390は、胴部文様に横位平行沈線文が採り入れられるもので、385は対弧状の区切り文、388は上下の沈線間をループする弧状の区切り文がみられ、387・390では蛇行懸垂文に変化している。

384・391は弧線文による菱形の区画を描くもので、384では対弧状の単位文が球抱き状のモチーフへと変化している。

394～401は胴部文様に各種の集合沈線文が用いられるものである。394では頸部の屈曲が失われている。401も胴部の張り出しが弱く、かつ扁平になっており、浅鉢形の可能性もある。

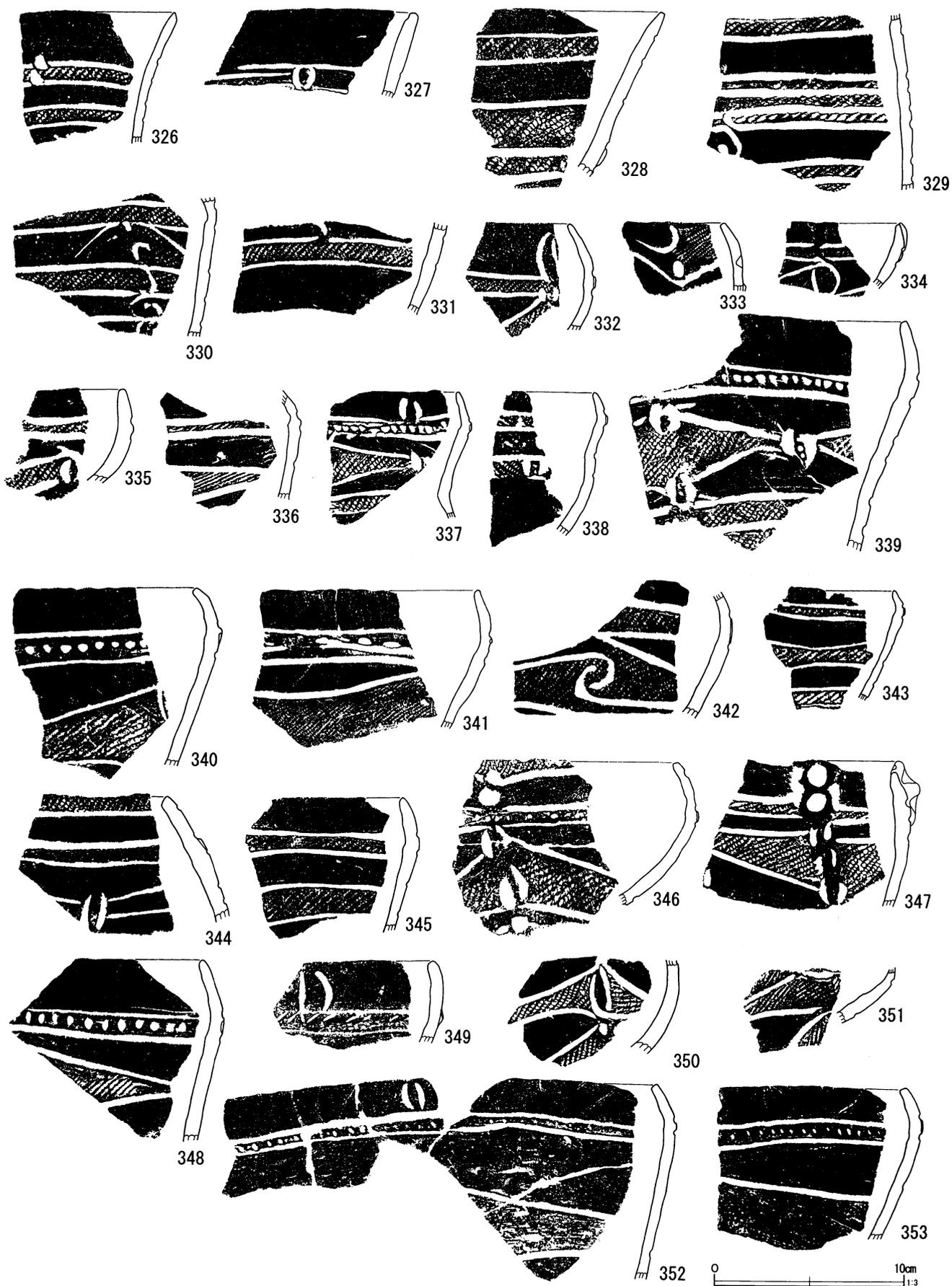
402・403は幅広の帯縄文で直線的なモチーフが描かれるもので、402では沈線の交点に円形の刺突が施される。

404はキャリパー形深鉢の胴上半部とみられる。加曾利EIV式に似るが、口縁波頂部の内外面に盲孔を持つ点、扁平な口端の形状などに相違点があり、本類に含めた。

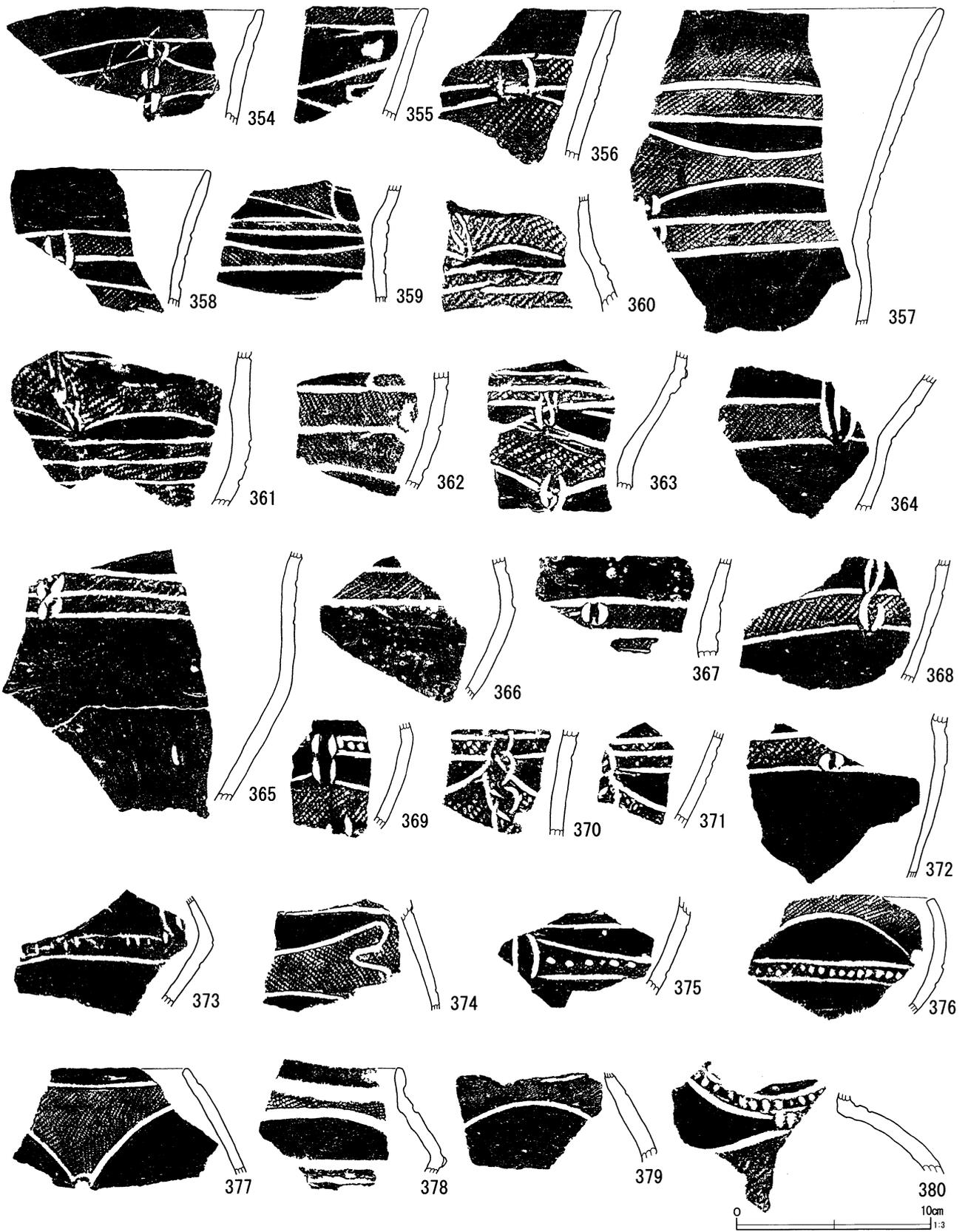
405は直行して「く」の字に内屈する口縁で、口唇に刻みを持ち、胴部に曲線的な磨消モチーフを描く。406・407は浅鉢とみられる。胴部は無文で篋状工具による粗い撫で調整が残され、頸部は屈曲して段を成し、刻みが施される。

408は球胴状の鉢とみられる。口縁内湾して頸部に刻みを持つ隆帯が巡り、胴部には弧線文が描かれる。

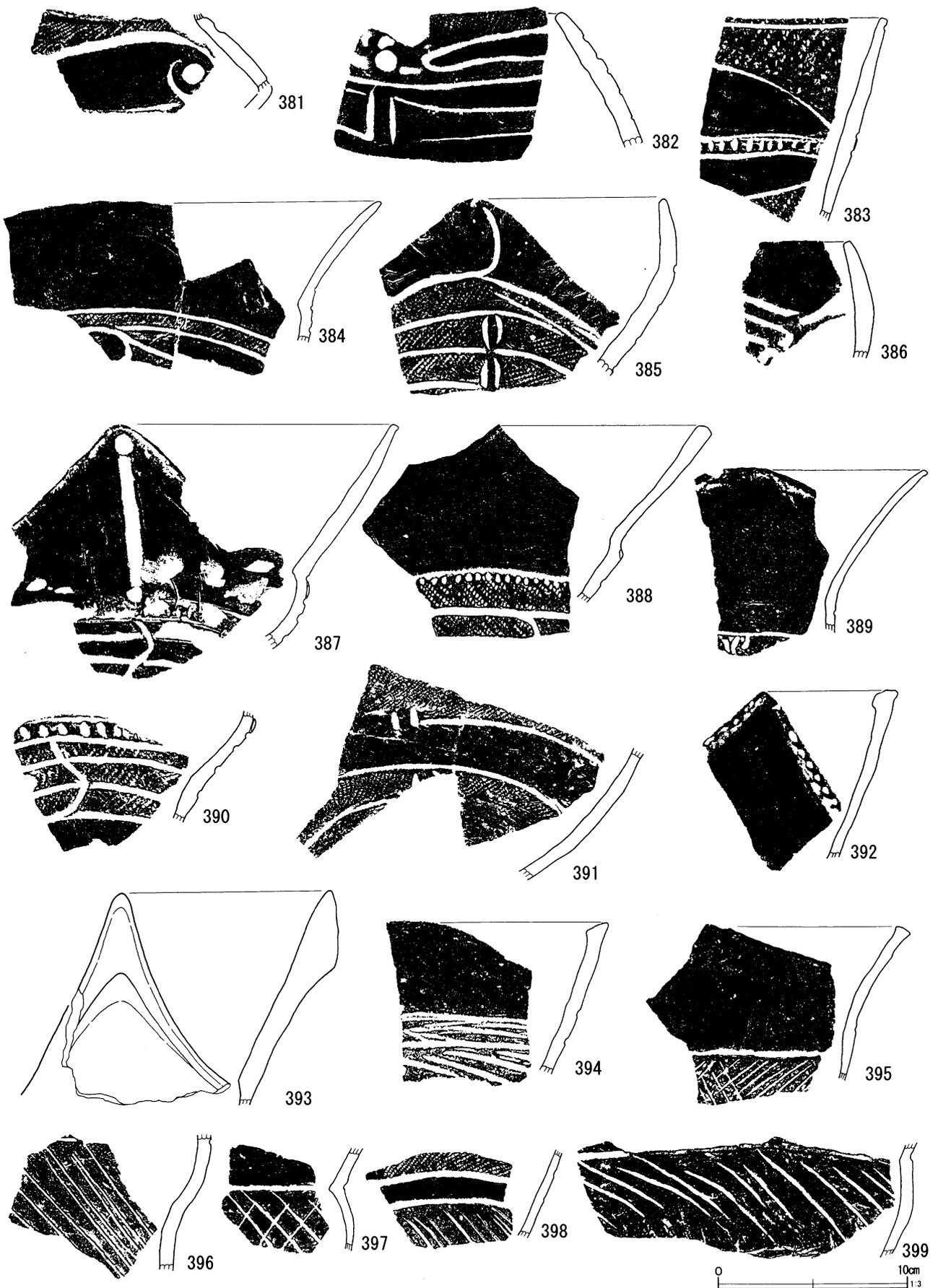
409は皿と考えたが、別の器種に伴う蓋の可能性もある。口縁は肥厚しつつ直線的に開き、口縁下に2条の沈線が巡る。



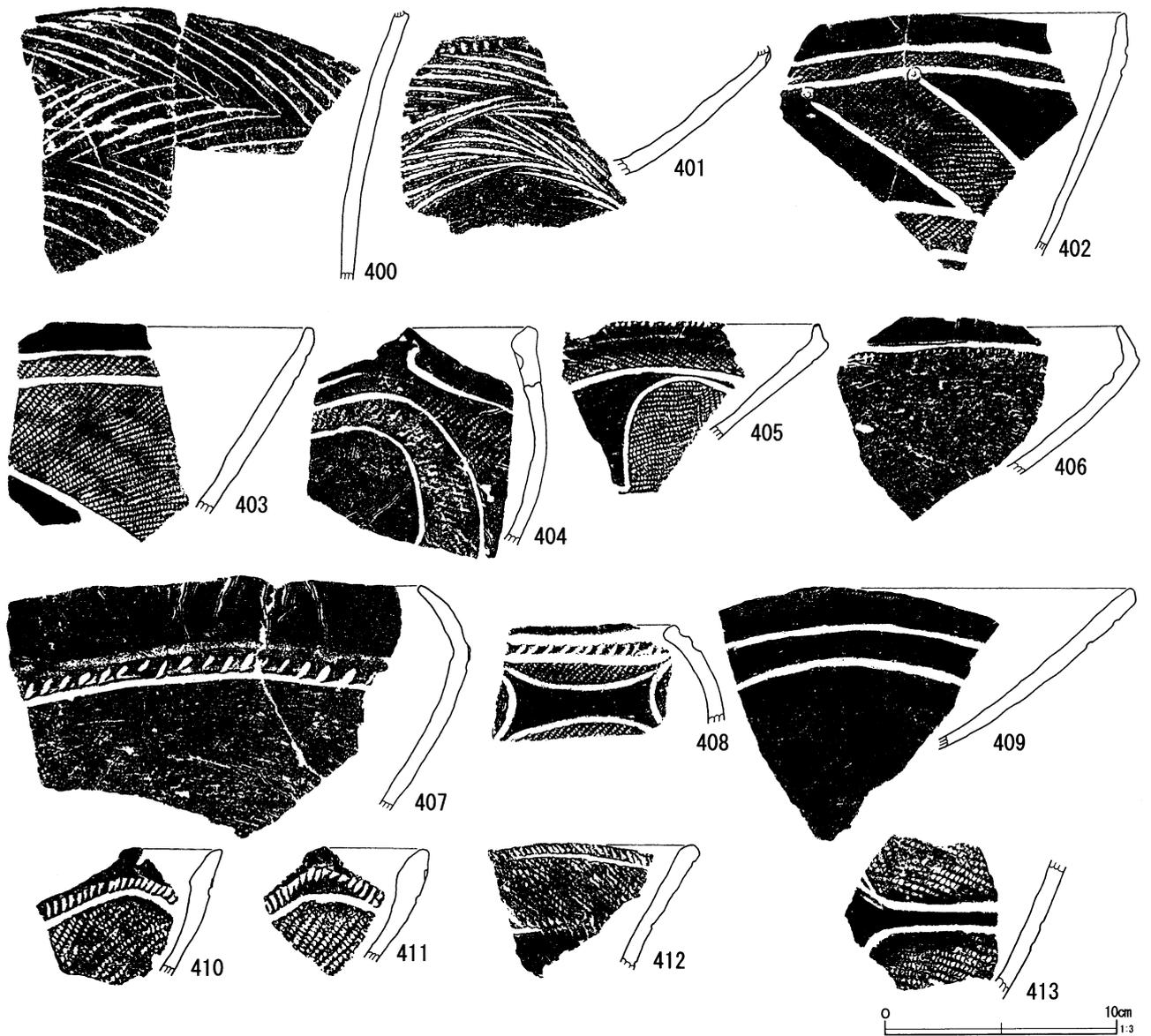
第72図 グリッド出土土器 (16)



第73図 グリッド出土土器 (17)



第74図 グリッド出土土器 (18)



第75図 グリッド出土土器 (19)

III群C類 (第75図410～76図)

414は5単位山形波状口縁の深鉢である。口縁～胴部中段にかけて約1/3残存している。

胴上半部に括れをもつキャリパー形で、口縁は5単位の波状口縁を成す。口唇に棒状工具側面による刻みが巡り、直下を1条の沈線で区画する。頸部の中段にも沈線が巡り、両者の間が縄文帯となる。

胴部と頸部との境に平行沈線が巡り、この部分にも刻みが施される。胴部には逆C字状の磨消モチーフが並ぶが、モチーフ中段を横切る平行沈線の末端部分が上下連繫せず開放している。

地文はRL単節横位回転の縄文である。

415も同様の山形波状口縁深鉢であるが、より内湾の度合いが強い。口縁部から頸部にかけて残存している。

口縁下に棒状工具側面による刻みを伴う点は共通しているが、頸部はまったくの無文となっている。

416は小型の深鉢である。口縁～頸部にかけて残存している。水平口縁で、単位は不明ながら、山形の小突起を伴っている。口縁直下に刻みを伴う点は前出の2者と同様である。頸部は無文で、中段に横位の沈線が巡る。

417は樽形の深鉢、ないし広口壺である。胴上半部が球胴状に張り出し、この部分に最大径を持つ。

口縁は断面先細りで緩やかに内湾しており、口端直下に1条の沈線が巡る。

胴上半部に文様帯を持ち、上下をそれぞれ帯縄文で区画する。区画内部には横位の楕円文を2条の平行沈線で上下に分割した曾谷式的なモチーフが描かれ、内部にLR単節の縄文が充填施文される。モチーフ接点には上下一対の円形刺突文が並ぶ。

この分割された楕円文は、414のような逆C字のモチーフの延長線上にあるとみることができる。

胴下半部には横位～斜位回転の縄文が疎らに施文される。

418はやや大振りの浅鉢である。胴上半部が強く張り出し、頸部で「く」の字に外反する。口縁は無文の水平口縁で、軽微に外反する。

頸部の括れ部分に2条の平行沈線が巡り、篋状工具先端の刻みが施される。胴部中段に1条の沈線が巡り、頸部の平行沈線との間が文様帯となっており、

内部にLR単節横位回転の縄文が施文される。胴下半部は無文である。

410～413に同時期の破片資料を一括した。

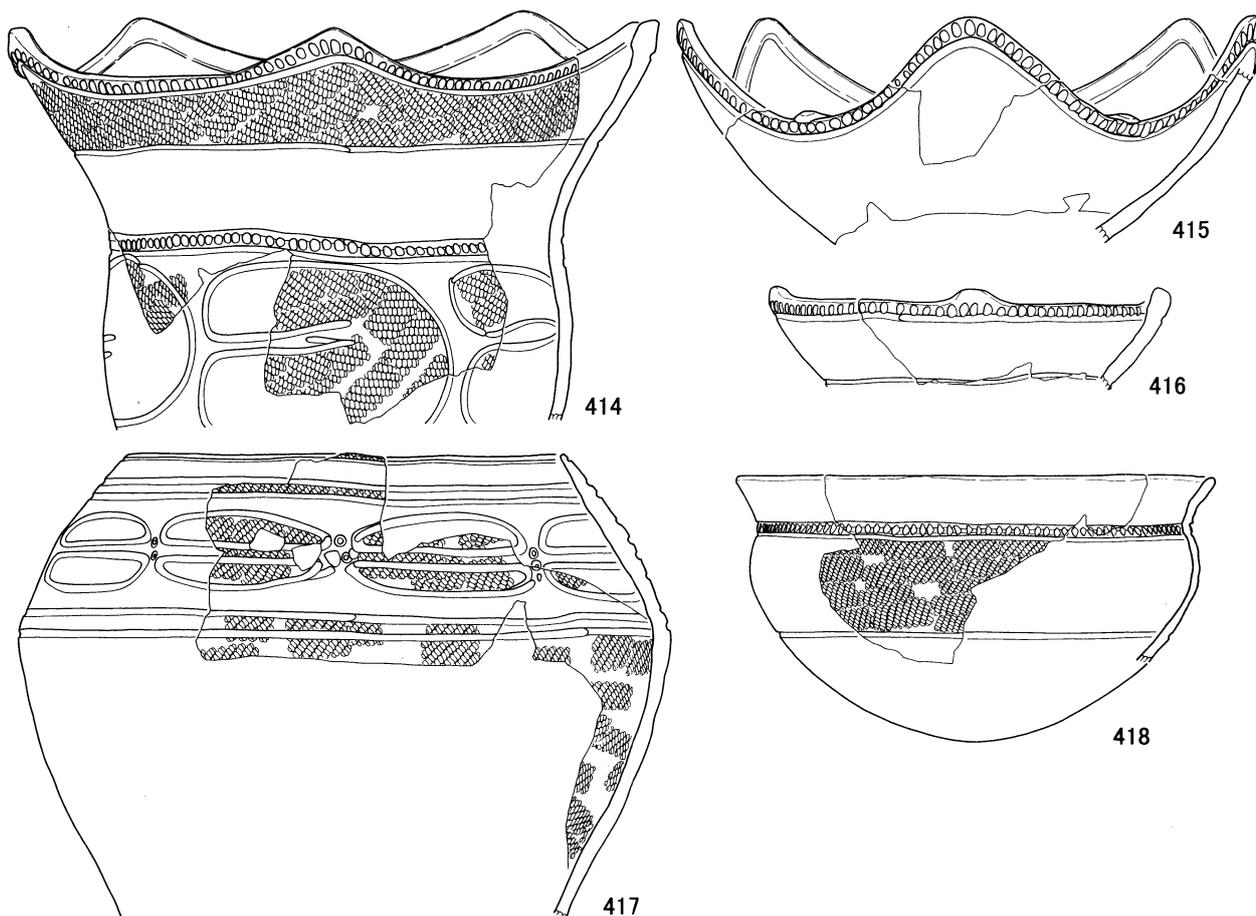
410・411はいずれも山形波状口縁の波頂部に小突起を伴っており、同一個体の可能性がある。

口縁直下に篋状工具先端を用いた斜位の刺突が巡り、1条の沈線で頸部の縄文帯との間を区画している。地文はLR単節横位回転の縄文である。

412は水平口縁ないしゆるやかな波状口縁とみられる。外反しつつ直線的に立ち上がる。

頸部中段に1条の沈線が巡り、ここから口端までが縄文帯となり、RL単節横位回転の縄文が施文される。口縁直下に篋状工具先端を用いた斜位の刺突が巡り、1条の沈線が巡る。

413は414の胴部に類似の逆C字モチーフの一部である。



第76図 グリッド出土土器(20)

Ⅲ群D類 (第77図～89図)

419・420はやや胴張りで内湾する水平口縁の深鉢である。いずれも指頭圧痕をもつ隆帯が口縁下を巡り、胴上半部に文様帯を持つ。

419は横位平行沈線文が施文される。区切り文はみられない。地文はLR単節横位回転の縄文が施文される。胴下半部は無文である。

420の胴部文様は幅広の縄文帯で、LR単節横位回転の縄文が施文される。堀之内2式最新段階とされる要素であるが、本例は器形の特徴から加曾利B1式と考えるべきか。

421～423は山形波状口縁の深鉢である。いずれも胴部中段が張り、胴上半部に括れを持って、口縁外反する。文様は地文縄文上に横位平行沈線文が描かれる。

421はごく緩やかな4単位波状口縁で、波頂部に左右非対称な双頭状の突起が配される。

口縁下に指頭圧痕を伴う隆帯が巡り、胴上半部に半截竹管状工具による横位平行沈線文が施文される。区切り文は同一工具による蛇行懸垂文に取って代わられる。

422は3単位の山形波状口縁で、波頂部の内面に円形の突起が付される。

口縁下に隆帯の区画を持たないが、421同様半截竹管状工具による横位平行沈線文が描かれ、同一工具の蛇行懸垂文が垂下する。

423は緩やかな3単位の波状口縁で、波頂部内面に3個1単位の鋸歯状の小突起が配される。

やはり口縁下に隆帯の区画を持たず、半截竹管状工具による横位平行沈線文が描かれる。区切り文は同一工具によるコンパス状沈線の懸垂文である。

424は胴上半部に強い括れを持つ水平口縁の深鉢で、胴部中段に最大径を持つ広口壺的な器形を成すものとみられる。

地文縄文で、指頭圧痕を伴う隆帯により器面を縦横に分割して長方形の区画を形成し、斜行する隆帯によって区画内部をさらに2つの三角形区画へと分

割する。

三角形区画内部には、部分的に矢羽根状の集合沈線が充填される。

425は419等に共通の胴張り水平口縁の深鉢である。

口縁直下に指頭圧痕を伴う2条一組の隆帯を巡らせる。胴上半部に、上下を3条の平行沈線で区画する文様帯を持つ。内部は2本一組の平行沈線によって鋸歯状に分割され、半円状のモチーフが上下交互に描き入れられる。

426～429は水平口縁で、弧状の集合沈線文が描かれる深鉢で、曾谷式～安行式の粗製土器へと引き継がれる要素を持っている。

426は424に類似した器形の深鉢である。

口縁直下ならびに胴部中段の括れ部分に、指頭圧痕を伴う断面三角形の隆帯が巡る。隆帯の間の区画には弧状の集合沈線が施文される。

427・428は胴部中段に括れを持つが、最大径は口縁部に存在し、いずれも口縁直下に指頭圧痕を伴う断面三角形の隆帯が巡る。

427は地文縄文で、半截竹管状工具による弧状の平行沈線が全面に描かれる。428は無文地に棒状工具を用いた斜位の集合沈線が施文される。

429は胴張りで口縁がほぼ直立する。口端からやや下ったところに指頭圧痕の隆帯を巡らせ、胴部は地文縄文上に半截竹管状工具の集合沈線を施文する。

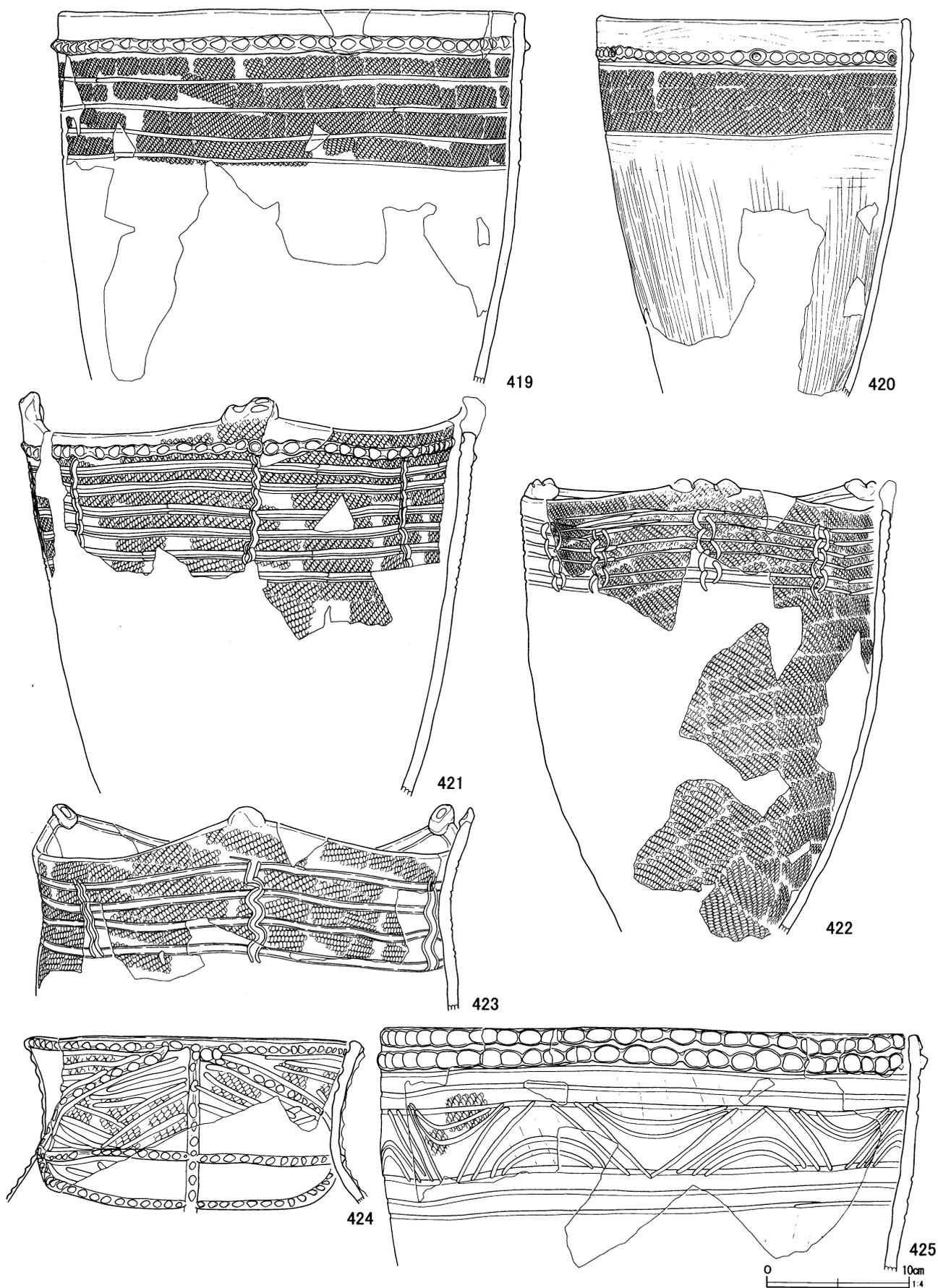
430～433は櫛歯状工具による集合沈線文が施文される土器である。

431は「ハ」の字状に直線的に開く深鉢である。口縁直下に指頭圧痕の隆帯を巡らせ、胴部には櫛歯状工具の集合沈線による対弧状のモチーフが巡る。

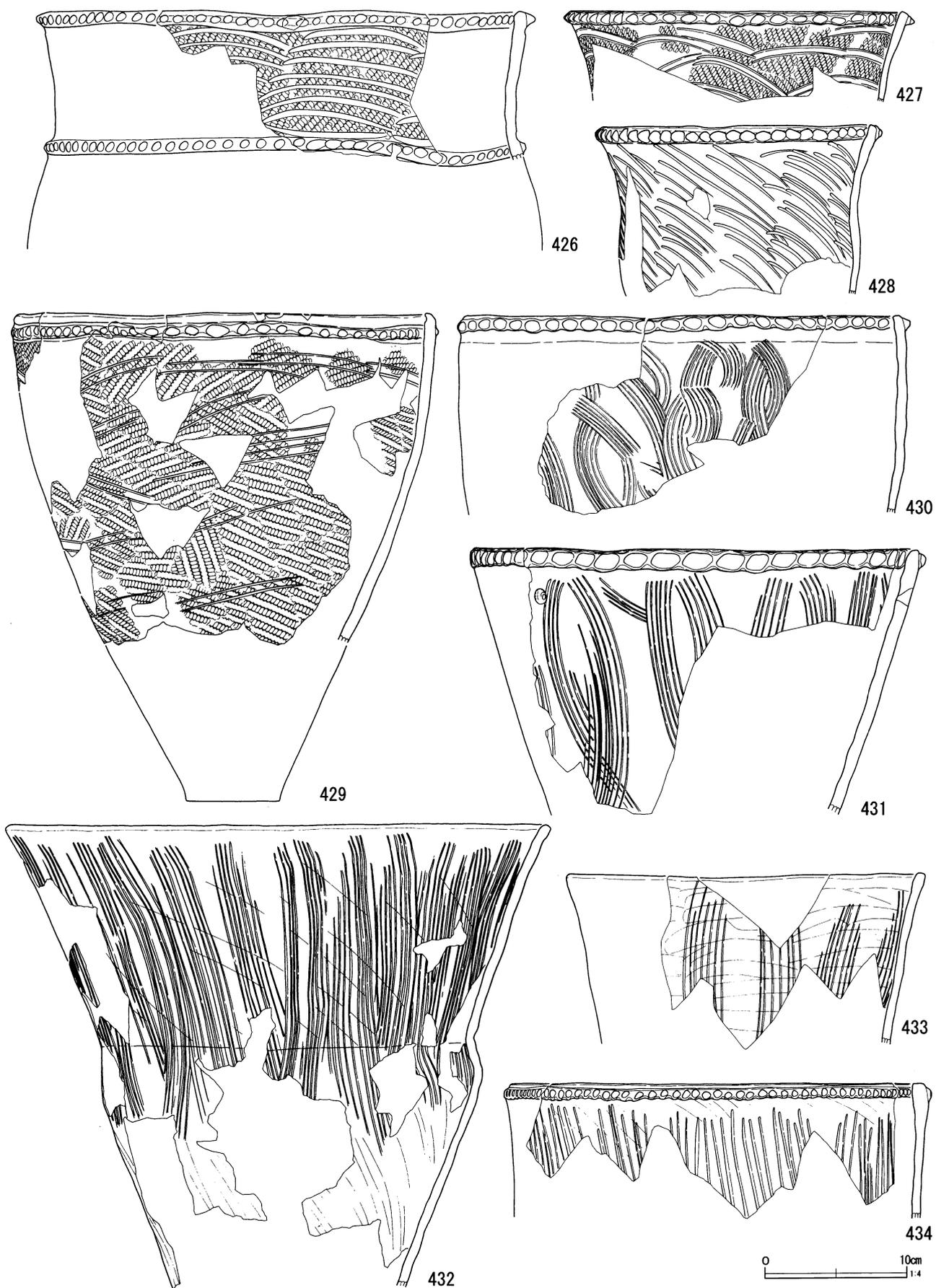
432は口縁に隆帯を伴わない。胴下半部が「く」の字に張り出した後胴部中段でいったん括れ、口縁に向けて直線的に開く。

集合沈線はやはり対弧状のモチーフを描く。

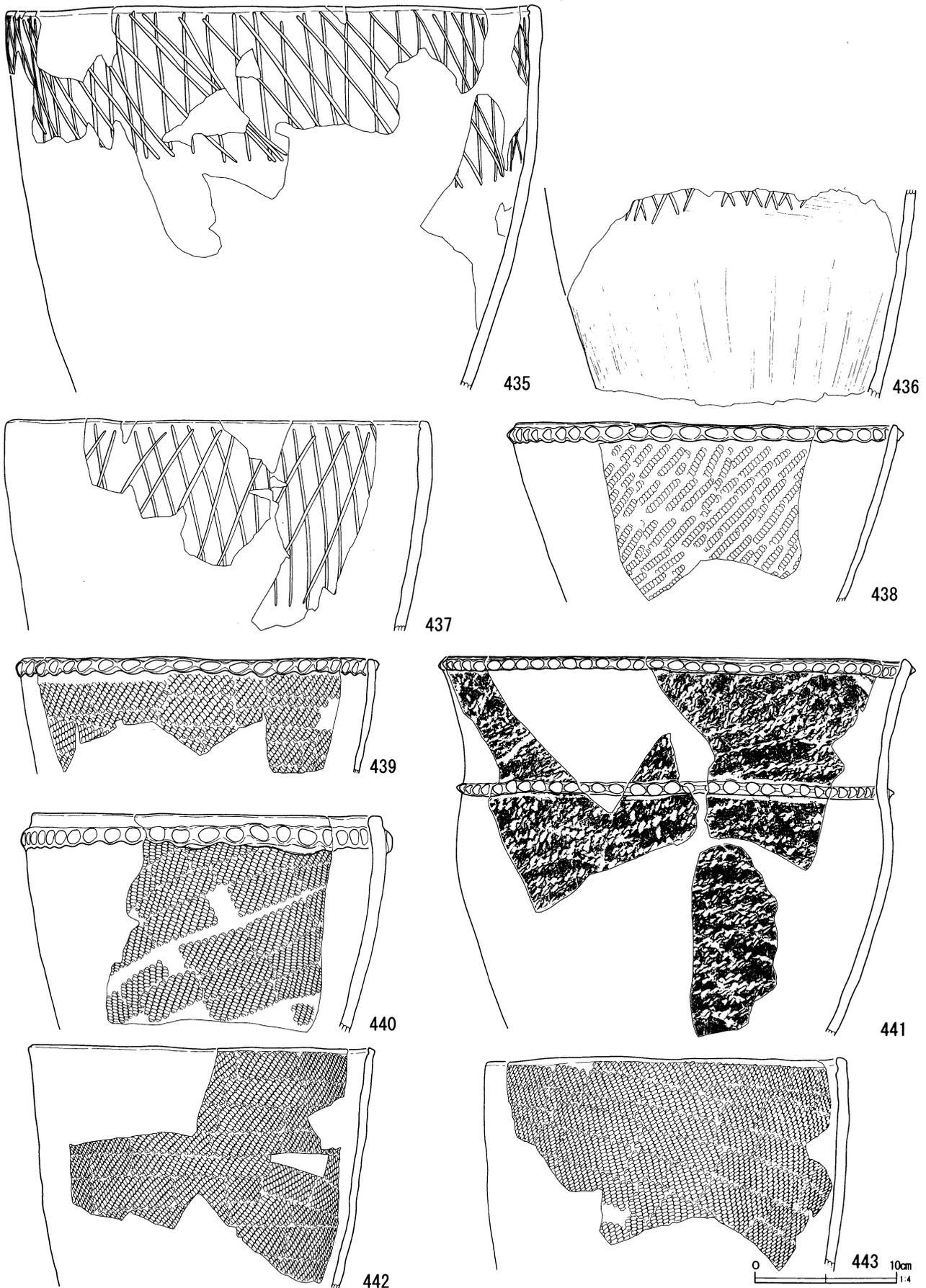
433も口縁下に隆帯を伴わない。僅かに外反しつつ直線的に開く器形で、集合沈線はほぼ等間隔で単



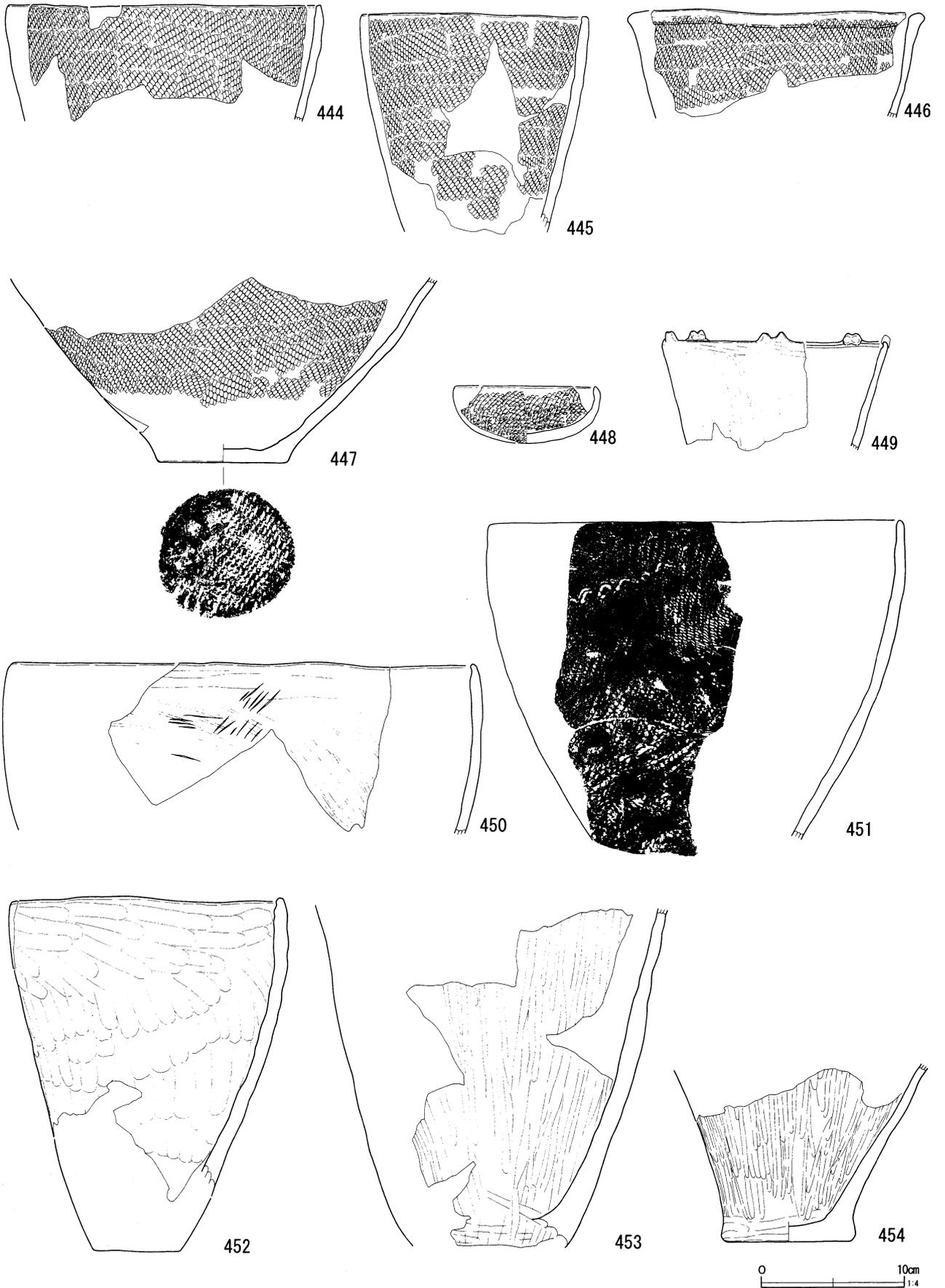
第77図 グリッド出土土器 (21)



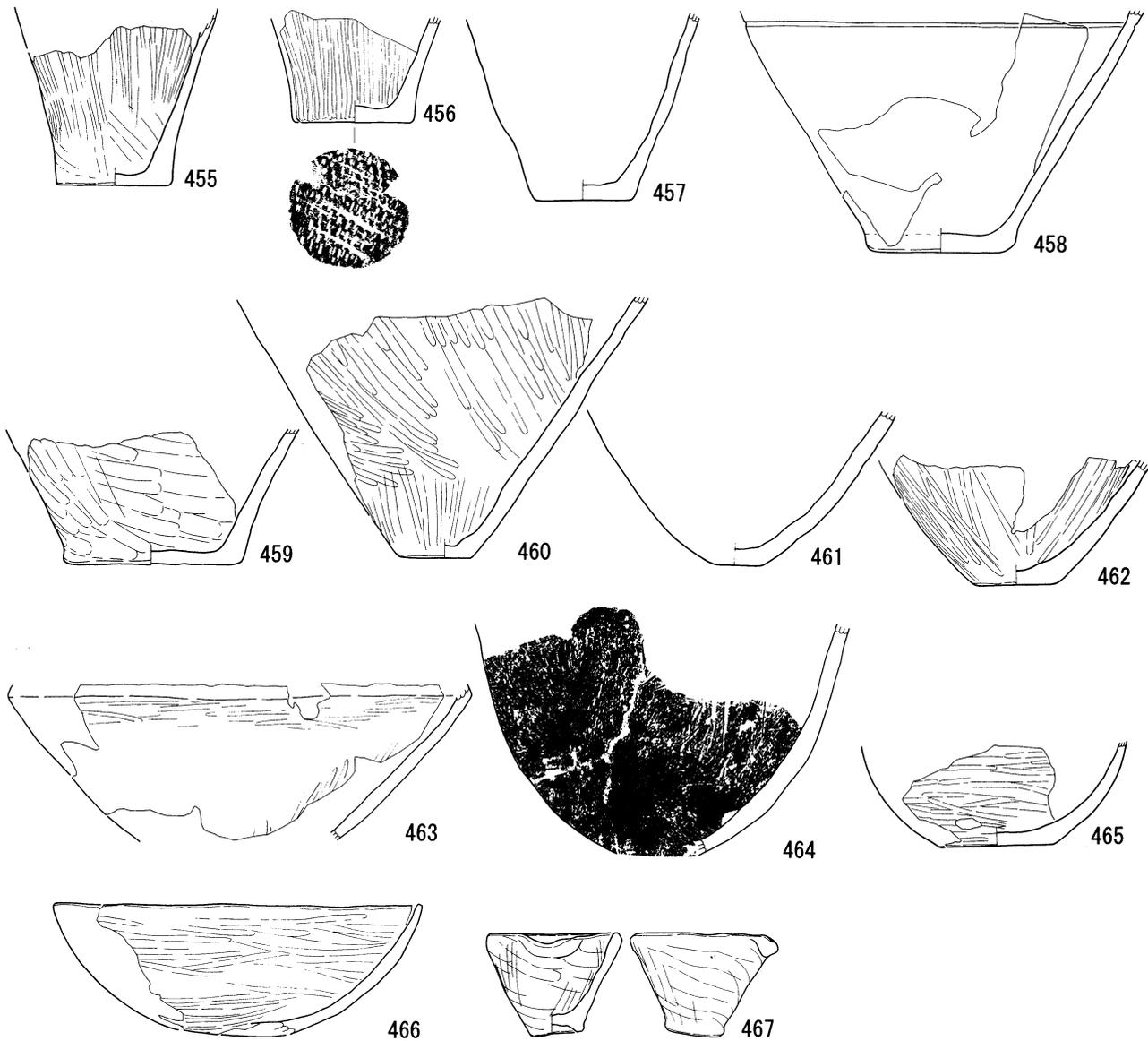
第78図 グリッド出土土器 (22)



第79図 グリッド出土土器 (23)



第80図 グリッド出土土器 (24)



第81図 グリッド出土土器 (25)

調に垂下する。

434は既に曾谷式～安行1式に近いかもしれない。口唇肥厚し、口縁直下に棒状工具による刻みを伴った隆帯が巡る。胴部には棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。

435～437は無文地に斜格子状の沈線が描かれる土器である。いずれも胴張りで内湾する水平口縁の深鉢で、文様は胴上半部に限定される。

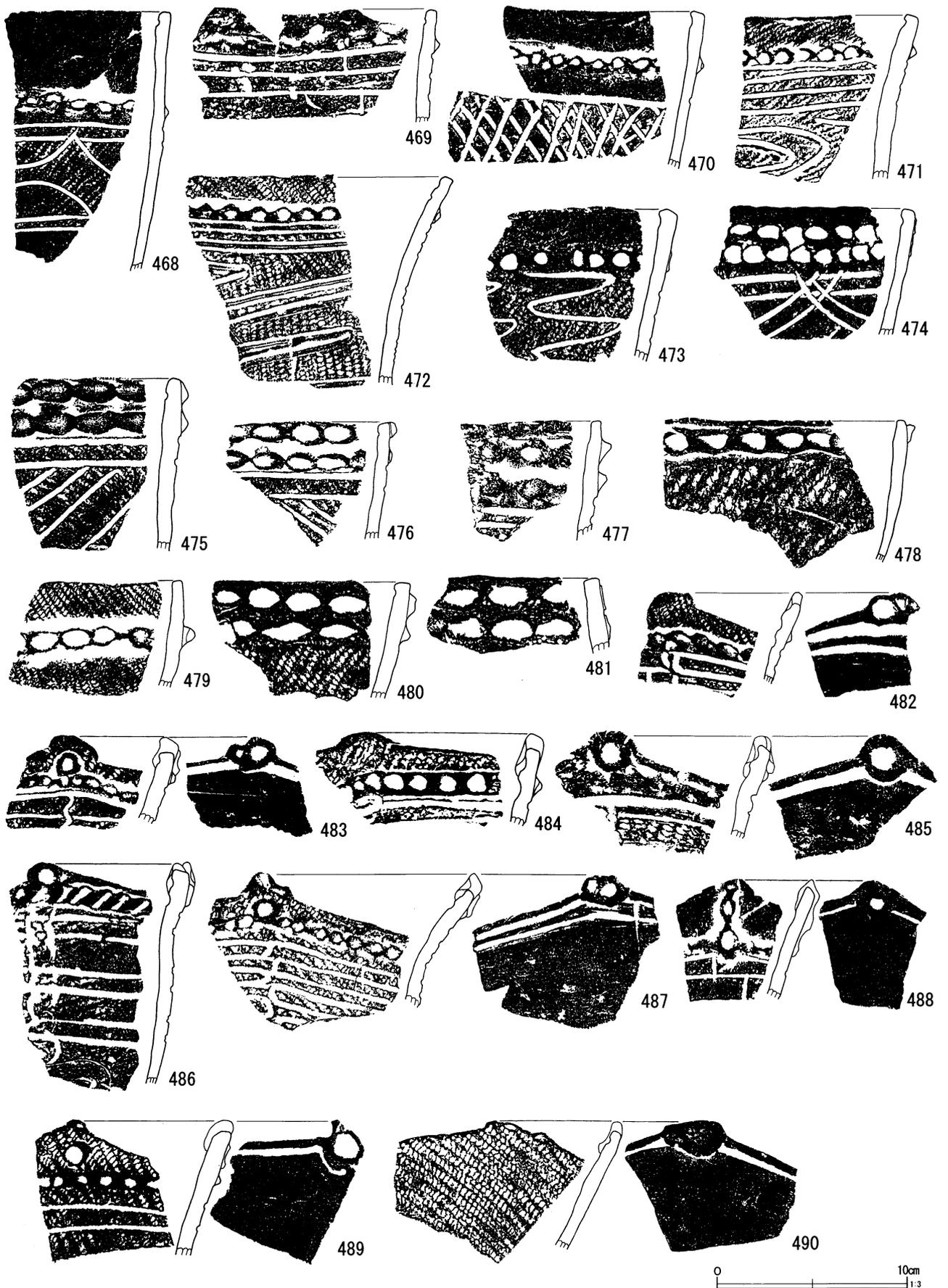
438～441は指頭圧痕を持つ隆帯と地文縄文のみの深鉢である。440は胴部中段に括れを持ち、口縁および胴部に2段の隆帯を巡らせる。その他は内湾

しつつ単調に開く器形である。438・439では隆帯が口縁直下に存在するが、441では口縁下に若干の無文帯が存在する。

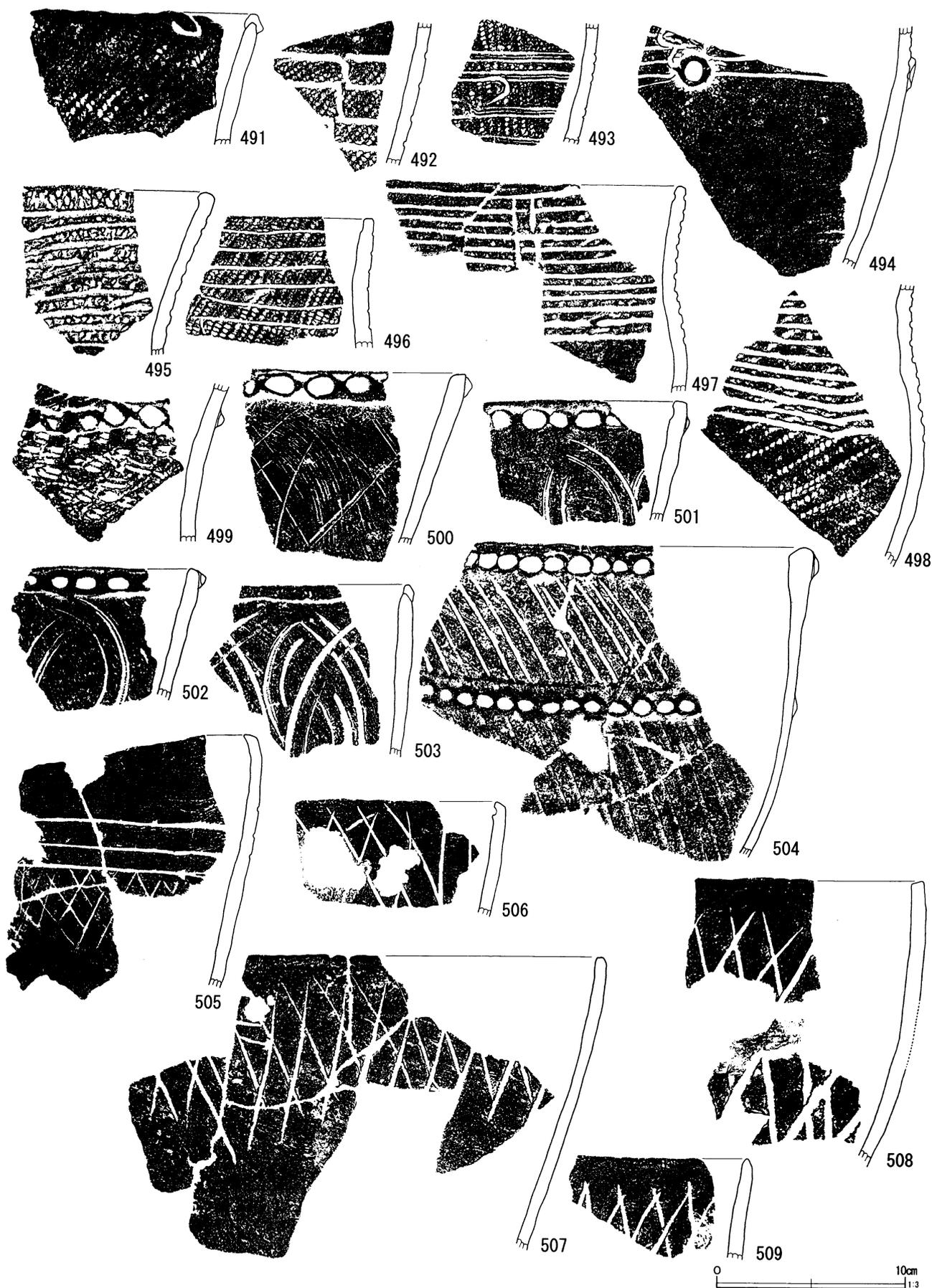
442～448は縄文のみ施文される土器である。442・443では口縁内側に1条の沈線が巡る。446は折り返し口縁で、口唇断面肥厚し、外面に段を形成する。447は浅鉢の可能性はある。

448は椀状の小型浅鉢である。丸底で、底面に至る全体に縄文が施文される。

449～462は無文の深鉢である。後代のものと比較すると器面が良く研磨される傾向がみられ、特に



第82図 グリッド出土土器 (26)



第83図 グリッド出土土器 (27)

胴下半部では縦位の研磨が徹底される。452のように、篋状工具による幅広の撫で調整が観察される例もある。

449は口縁内面1条の沈線が巡り、双頭状の小突起が5単位配されるものとみられる。加曾利B1式期の小型精製深鉢に共通する、口縁にむけて直線的に開く器形である。

450～452は比較的厚手の器壁で、胴上半部に最大径を持つ胴張りの深鉢である。

450・452では口縁内面に段を持ち、449のような内面沈線との共通性が伺われる。

453以下は胴部～底部の破片である。454～456のように底部直上が括れて裾が張り出すものは精製深鉢の胴下半部である可能性が高い。458～462は浅鉢底部の可能性もある。

463～466は無文の浅鉢である。463は胴部が直線的に開き、口縁が「く」の字に内屈する。464・466は丸底になる可能性がある。465は134のような胴張りの鉢である可能性が高い。

467はやや特殊な器形で、片口を持つ小型の深鉢であり、底部は上げ底となっている。

第82図～第89図は破片資料である。

468～477は口縁に指頭や棒状工具の圧痕を伴う隆帯が巡り、胴上半部に文様帯を持つ水平口縁の深鉢である。隆帯は474～477で2条、それ以外は1条のみ巡らされる。

469は横位平行沈線文を描き、縦位の短沈線の区切り文がみられる。

468・474～477は、文様帯上下を平行沈線で区画し、内部に上下対向する弧線文等が描かれる。470は単沈線の区画内に斜格子文が描かれる。473は幅広の蛇行懸垂文が並ぶ。472は半截竹管状工具の平行沈線文で文様が描かれる。

478～481は水平口縁の深鉢で、口縁下に圧痕を伴う隆帯が巡り、胴部は縄文のみ施文されるものである。

482～491は山形波状口縁の深鉢で、波頂部内面

には盲孔を伴う各種の小突起が配され、1条ないし2条の沈線が巡る。

482～489等、胴部文様帯を持つものについてはすべて横位平行沈線文が施文される。

482・488はオーソドックスな短沈線や弧線の区切り文であるが、483では蛇行懸垂文、484・486では半截竹管文によるコンパス状沈線の懸垂文である。

491は波頂部にねじり棒状の小突起が横位で貼り付けられる。

492～494は横位平行沈線文のみられる胴部破片である。492は磨消縄文で、クランク状の区切り文がみられる精製土器に近い文様であるが、493は半截竹管状工具の平行沈線で文様が描かれる。494はコンパス状沈線が垂下し、文様帯下端にボタン状の貼付文が配される。

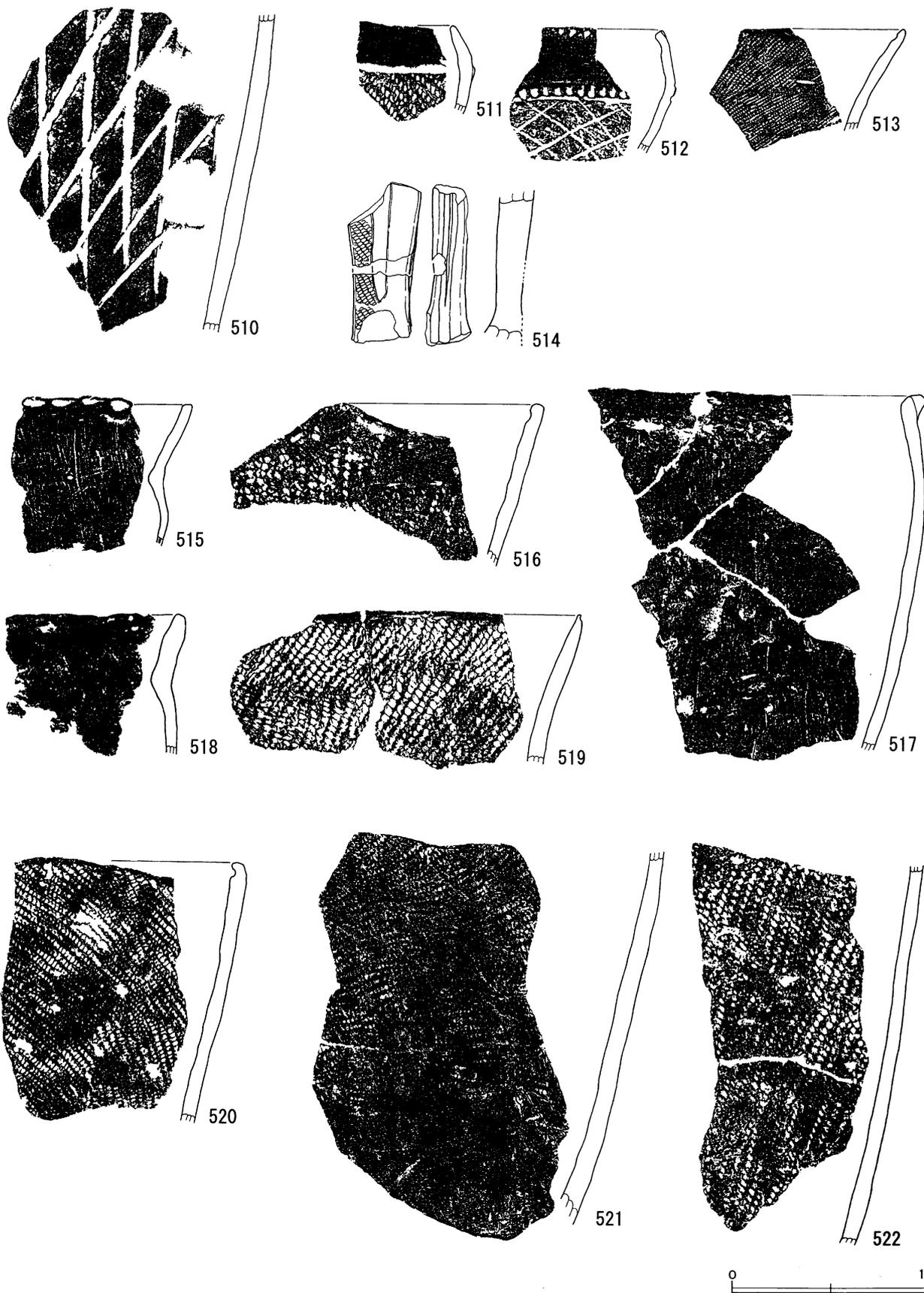
495～498は口縁下に密集した横位平行沈線が描かれる土器で、495は口縁外反する深鉢だが、それ以外は胴部中段に最大径を持つ広口壺的な器形を呈するものと考えられる。

500～503は半截竹管文による対弧モチーフの描かれる土器である。504は口縁と胴部に隆帯が巡り、斜位の集合沈線が描かれるもので、口縁肥厚する砲弾形の器形であり、曾谷式に近い時期のものとも考えられる。

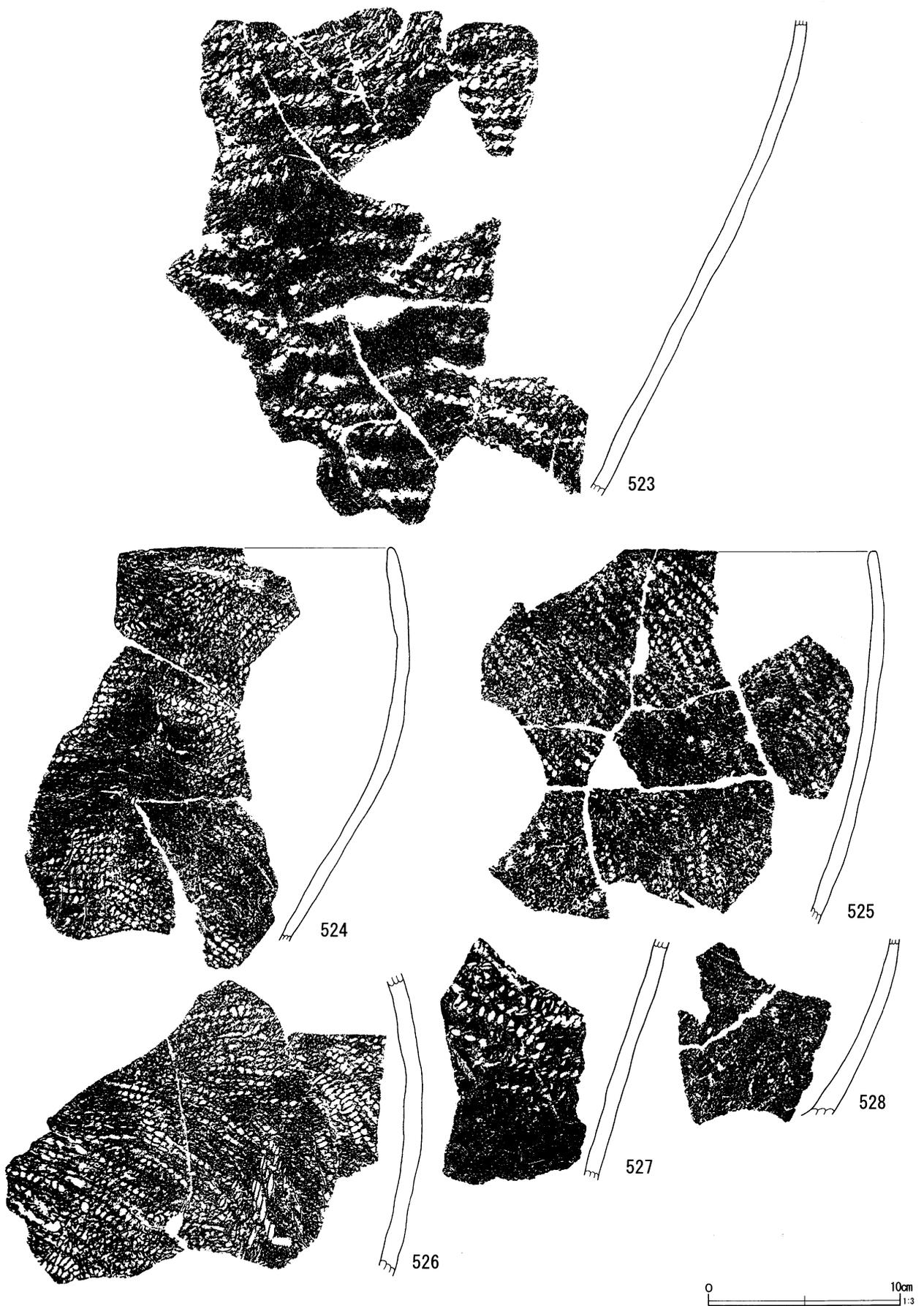
505～510は鋭利な工具による斜格子文がみられる土器である。505が文様帯上端を平行沈線で区画する他は、すべて文様帯の上下が開放している。また、505は緩やかな波状口縁を成すものとみられる。506では口縁内面に1条の沈線が巡る。511・512は口縁下に無文帯を持ち、胴部との境を隆帯によって区画する。513は精緻な縄文の施文される口縁部である。

514は釣手とみられるが、背面に磨消文様が見られる他、両側面にも沈線によるなぞりが加えられて断面H字状を呈する。

515は頸部屈曲する小型の深鉢で、口端上に指頭圧痕が巡る。516は422等に類似の山形波状口縁、



第 84 図 グリッド出土土器 (28)



第 85 図 グリッド出土土器 (29)

517は胴張りの深鉢で、口端が外屈する。

519～531は縄文のみ施文される胴部である。施文原体はLRの縄が多く、横位ないし斜位に回転されるが、523・527・531等は撚り・施文とも甚だ粗雑である。

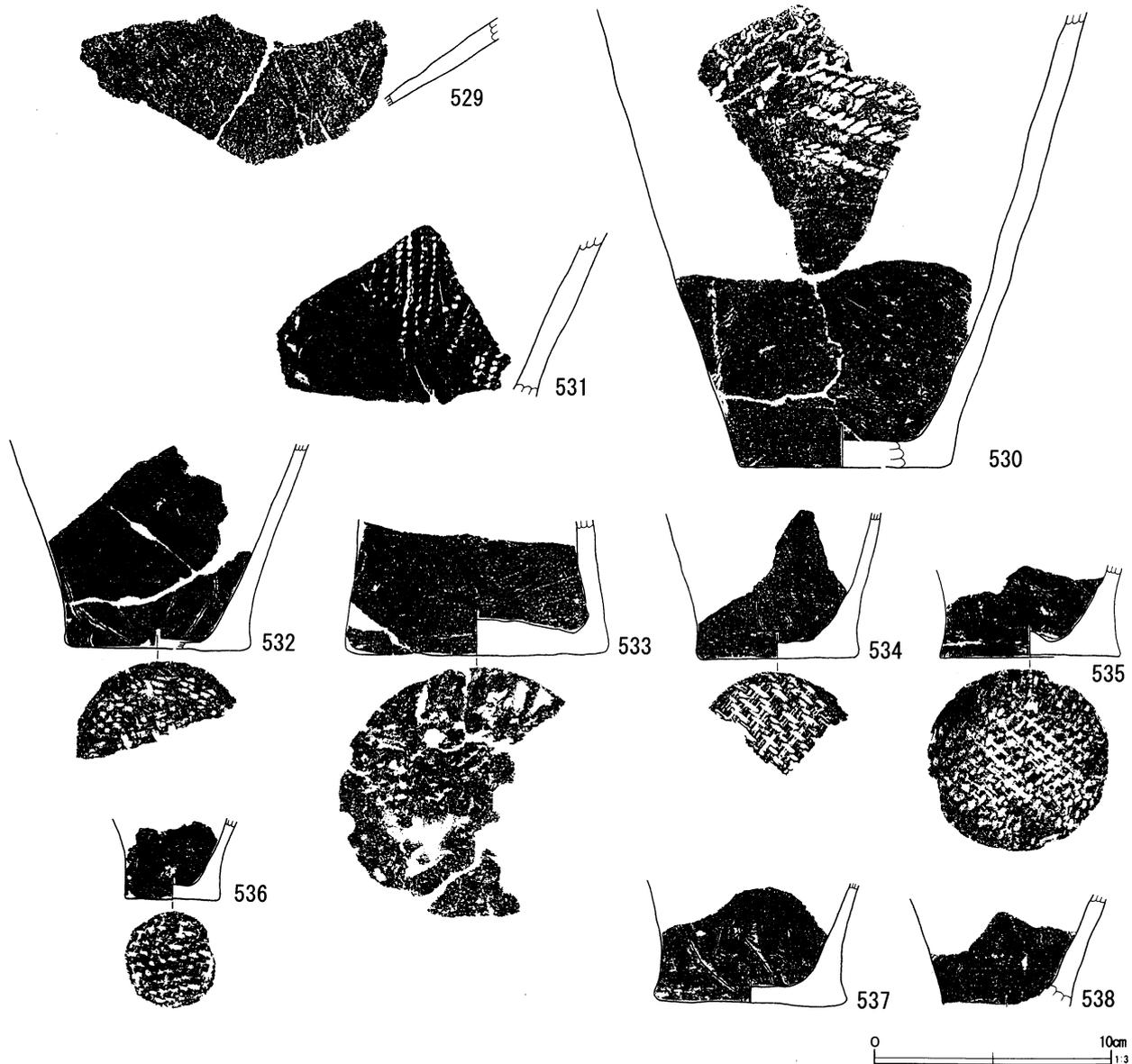
532～557は底部およびその周辺の破片である。大半が深鉢とみられるが557は浅鉢であるかもしれない。底部直上に括れを持ち、裾が張り出す器形が特徴的に見られる。550等、精製深鉢の底部と考えられるものも混じっている。

大半は底面に網代の圧痕が残されている。553で

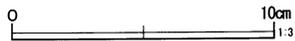
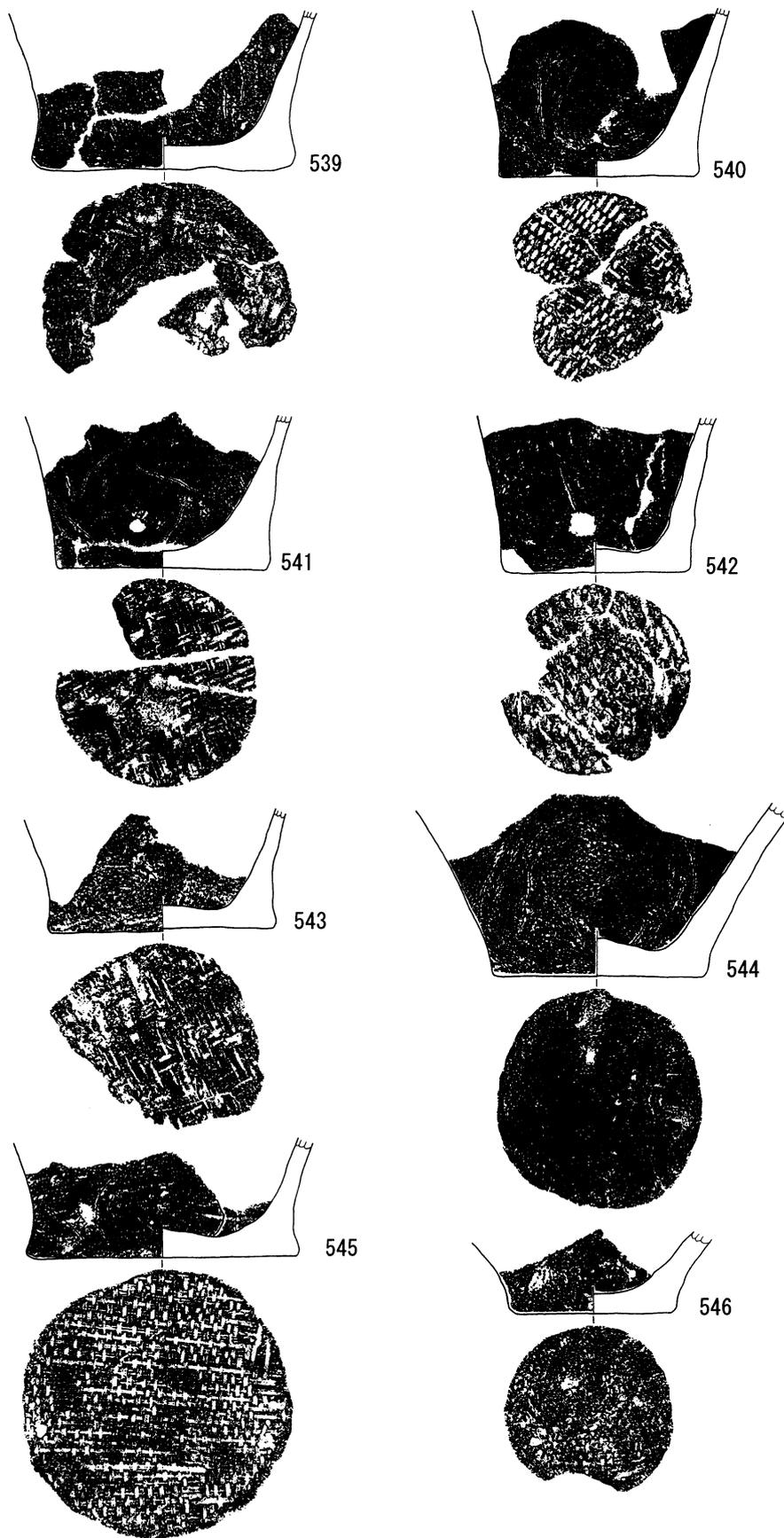
は底面に沈線で円が描かれており、製作時につけられた何らかの記号と考えられる。

558・559は無文丸底の浅鉢である。底部から口縁にかけてゆるやかなカーブを描いて立ち上がる椀形の鉢で、器壁は比較的薄手で半精製のなつくりになっている。560～563は浅鉢底部である。134等の精製浅鉢に伴うものとみられる。563は底部が極端に小さく、皿状の器形になる可能性がある。

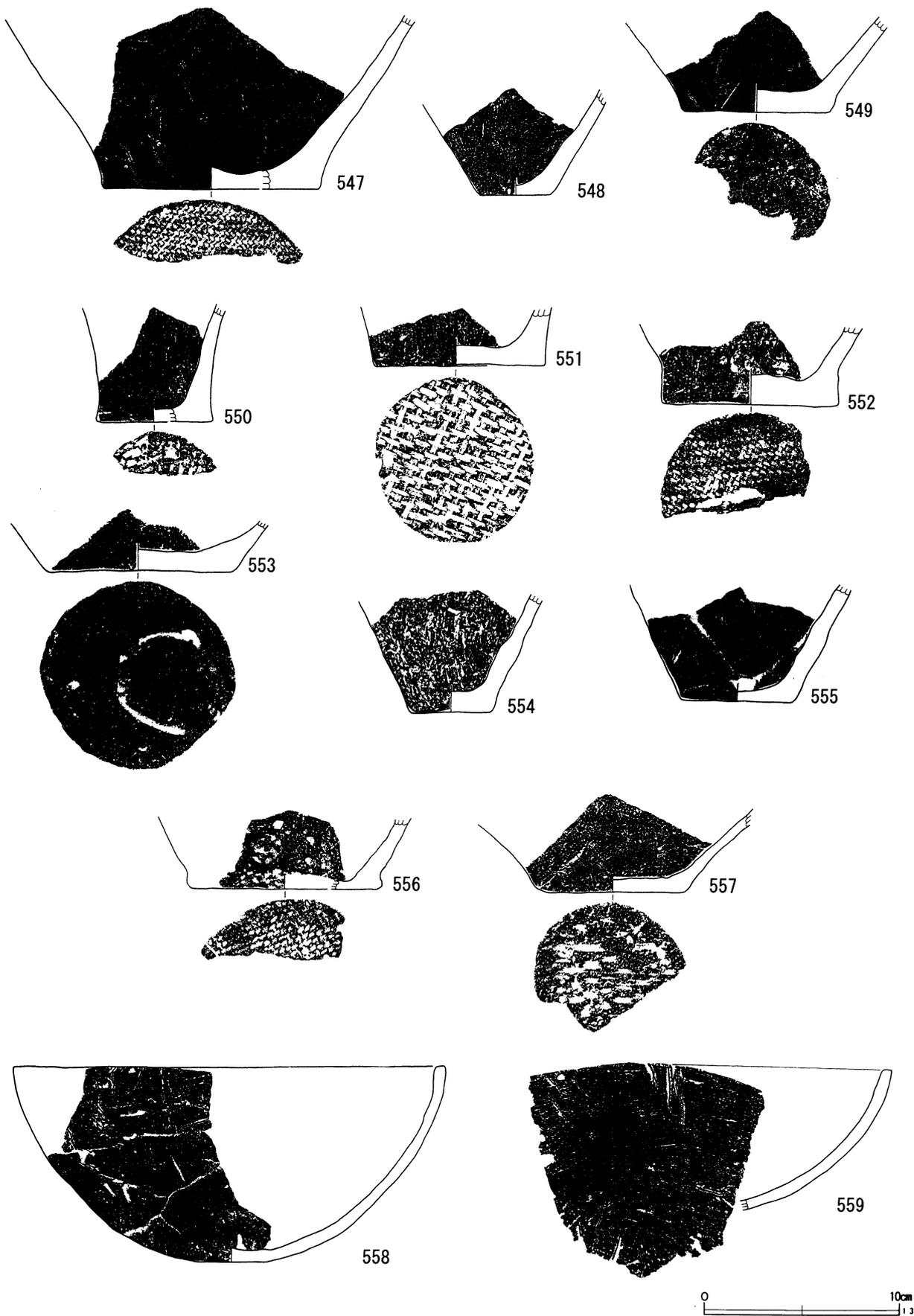
564以下には注口部を一括した。565は接続部下面に小突起を伴う。



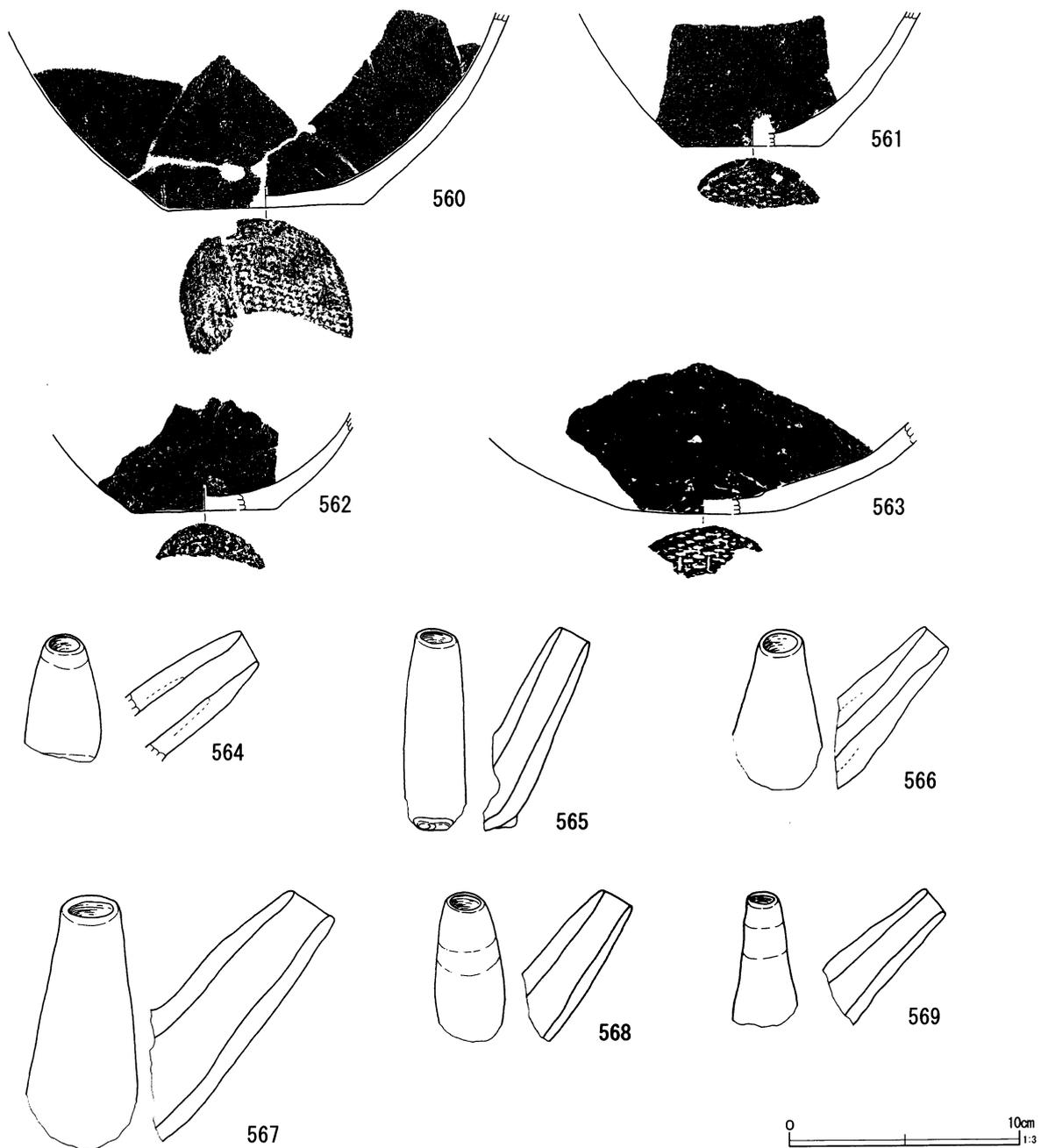
第 86 図 グリッド出土土器 (30)



第 87 図 グリッド出土土器 (31)



第 88 図 グリッド出土土器 (32)



第 89 図 グリッド出土土器 (33)

IV群A類 (第 90 図～ 92 図・第 94 図 612・615～617・第 95 図・第 96 図 634・636・637・648・第 98 図 655～第 101 図 726・第 103 図 770～791・第 104 図 799～807)

570～574 は曾谷式から安行 1 式にかけて存在する 4 単位大波状口縁の土器である。

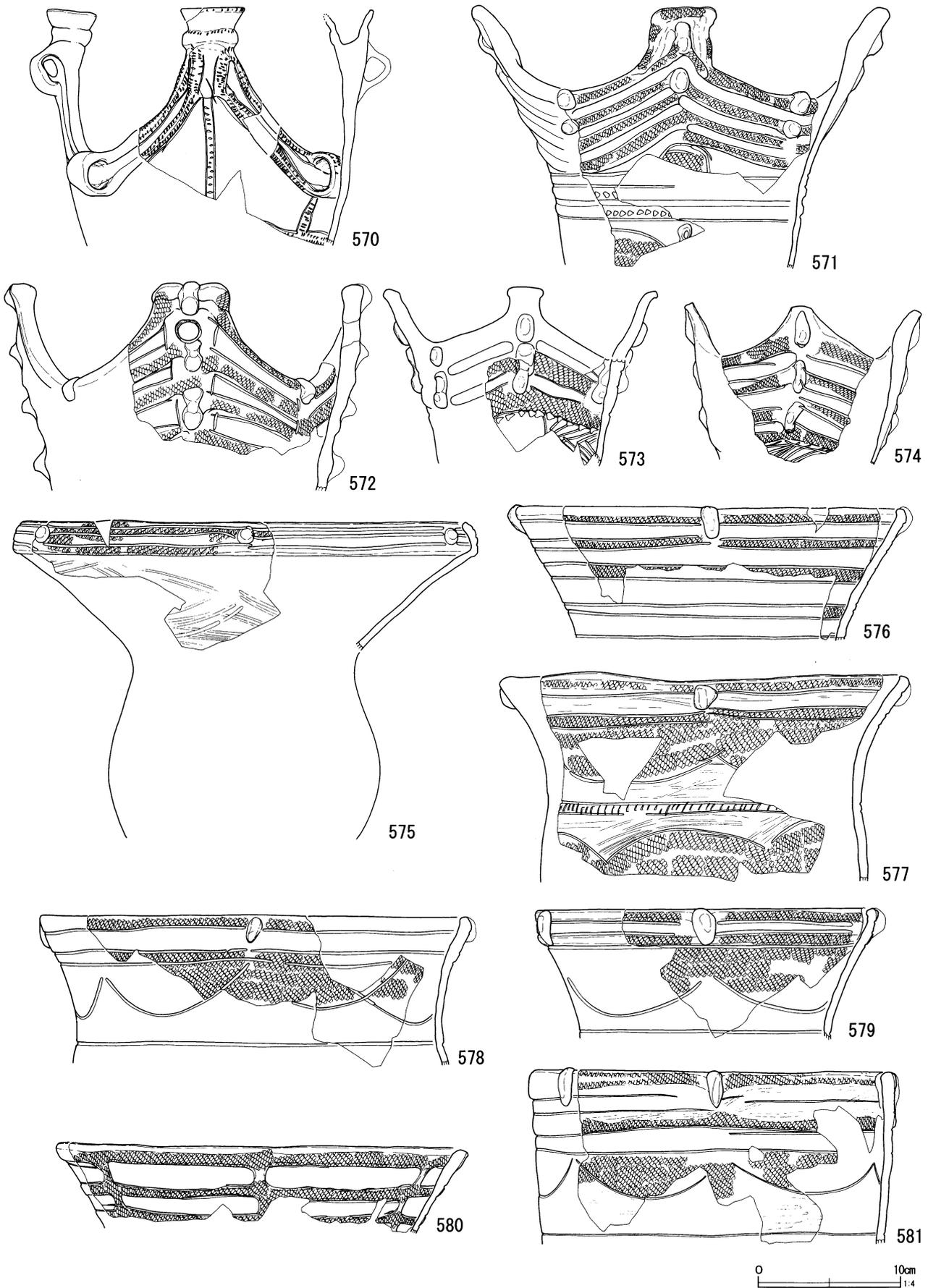
570 は波頂部に盃形の突起が配される。口縁下には刻みを伴う隆帯により横長の区画が構成され、橋梁状の把手が波頂部と波底部に対応して配される。

頸部は無文帯となり、前述の橋梁状把手を基点として平行沈線が垂下し、胴部文様帯に接続する。

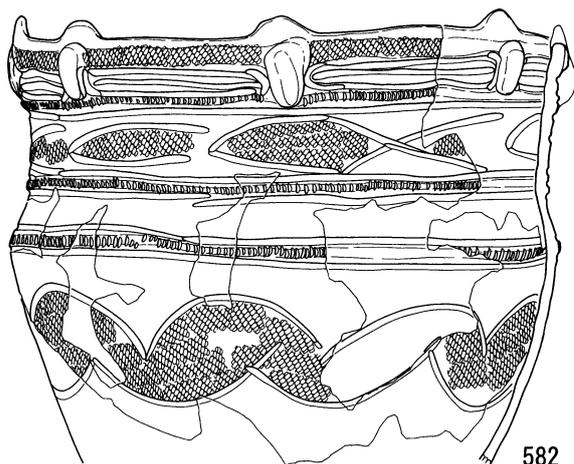
571 は山形波状口縁の土器である。

やや強く外反する器形で、口唇断面がいちじりしく肥厚して内面に稜を形成する。口縁下には 4 段からなる帯縄文が巡り、波状口縁波頂部と胴部中段に刺突列を伴う平行沈線が 2 段に巡り、文様を分帯している。上段には波頂部に対応して半円形の磨消モチーフが、下段には磨消縄文による対弧状モチーフが描かれるものとみられる。

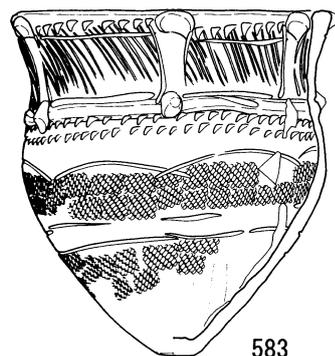
572 も同様の深鉢だが、口縁はやや内湾しつつ立ち上がる。



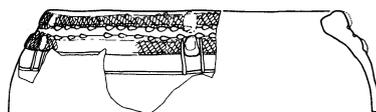
第90図 グリッド出土土器 (34)



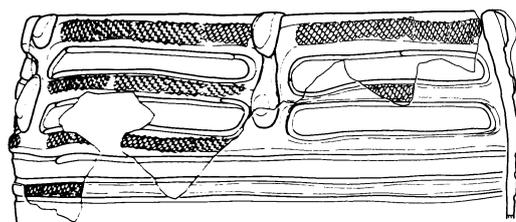
582



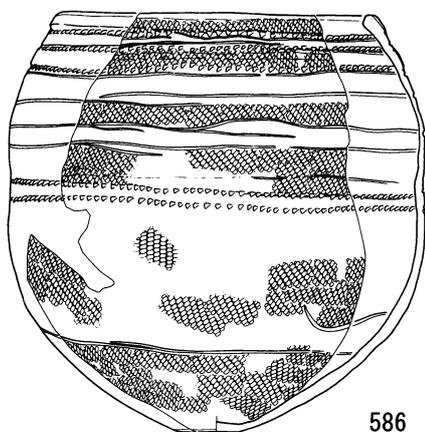
583



584



585



586



587



第91図 グリッド出土土器 (35)

口縁下に4段からなる帯縄文が巡り、波状口縁波頂部と波底部に対応して縦長の貼付文が重畳する。また、波頂部の直下に円形の貫通孔を持つ。

帯状文および貼付文によって形成する区画内には、さらに単沈線による長方形の区画文が描かれる。

573はやや小型の深鉢で、口縁を欠失する。

口縁下に帯縄文が巡り、縦長の貼付文が配される。帯縄文と胴部との境界には斜位の刺突列が巡り、波頂部に対応して平行沈線が垂下、左右には矢羽根状の集合沈線が描かれる。

574も小型の深鉢である。波状口縁波頂部に横位

の隆帯の貼付を伴わないやや簡素なつくりで、口縁下に4段からなる帯縄文が巡り、沈線のなぞりが加えられる。波状口縁波頂部に対応して縦長の貼付文が重畳する。胴上半部には矢羽根状の集合沈線が描かれるものとみられる。

575～582は水平口縁の深鉢である。口縁下に帯縄文と貼付文による区画を形成する点は波状口縁の土器と共通しているが、この構成が多段化することが比較的少ない点が相違している。大半は安行I式期と考えるが、一部曾谷式に伴うものも存在するであろう。

575は頸部が強く外反し、口縁が「く」の字に内屈するキャリパー形の深鉢である。上下を帯縄文に区画された区画が巡り、ボタン状の貼付文が5ないし4単位配される。頸部は無文帯となり、不規則な斜位の研磨が観察される。曾谷式期に属するものであろう。

576は頸部外反し、口端がわずかに内屈する。口縁から頸部にかけて4段の帯縄文が巡り、最上段の区画のみ縦長の貼付文が配される。

577は頸部が括れ、口縁外反して、口端が僅かに内屈する。口縁下に2段の帯縄文が巡り、縦長突起を配して区画文を形成する。

頸部と胴部との境には、貼付文直下を基点とする弧線文が左右に展開して、帯縄文との間が縄文施文部となっている。

胴部中段に刻みを伴う平行沈線が巡って文様を上下に分帯し、下段には上下対向する弧線文が描かれるものとみられる。

578は口縁から胴上半部までが残存する。口径はやや大きいものの文様構成のうえでは577に類似しているが、口縁下に配される縦長貼付文は小さく、やや斜位にとりつけられている。

579もほぼ同構成の土器であるが、575～578が沈線による帯縄文であるのに対し、明確な隆帯+沈線による帯縄文である点は相違する。

580は口端内屈せず、外反してほぼ直行する口縁で、帯縄文が多段化している。上下の帯縄文間に外向きの対弧状モチーフが加わることで横楕円形の区画を構成している。貼付文はみられない。

581は頸部に括れを持たない寸胴の深鉢である。

口縁下に2段の帯縄文が巡り、縦長の貼付文が5単位ないし4単位配される。

下段の帯縄文から若干の無文部をはさんで1条の沈線が巡り、胴上半部の弧線文との間が縄文施文部となっている。胴部中段にも1条の沈線が巡っている。

582は胴下半部が張り出した後、頸部で一端括れ、

口縁がごく軽微に外反して直線的に立ち上がる。

水平口縁上に7単位の小突起が配され、突起直下には縦長の貼付文が配される。口縁下の区画は上を帯縄文、下を刻みを伴う隆帯で区画され、さらに沈線による楕円形区画が描かれる。

頸部と胴部の間は刻みを伴う隆帯によって区画され、頸部には矢羽根状モチーフから転化したとみられる横V字の磨消モチーフが巡る。

胴部中段にも刻みを伴う隆帯が巡って上下分帯し、上段は無文、下段には上下対向する横位に連続する弧線文が描かれて、内部に縄文が充填される。

583は水平口縁の小型深鉢である。胴部中段が張り、頸部が括れて、口縁は肥厚しつつ外反する。

頸部に沈線による長方形の区画が巡り、内部に縦位の集合沈線が充填される。区画の接点には上下一対の扁平な貼付文が6単位配される。

口縁と区画文の間には篋状工具先端を用いた斜位の刺突が単列で巡る。区画の下には同様の刺突が複列で巡って、胴部との境を成している。

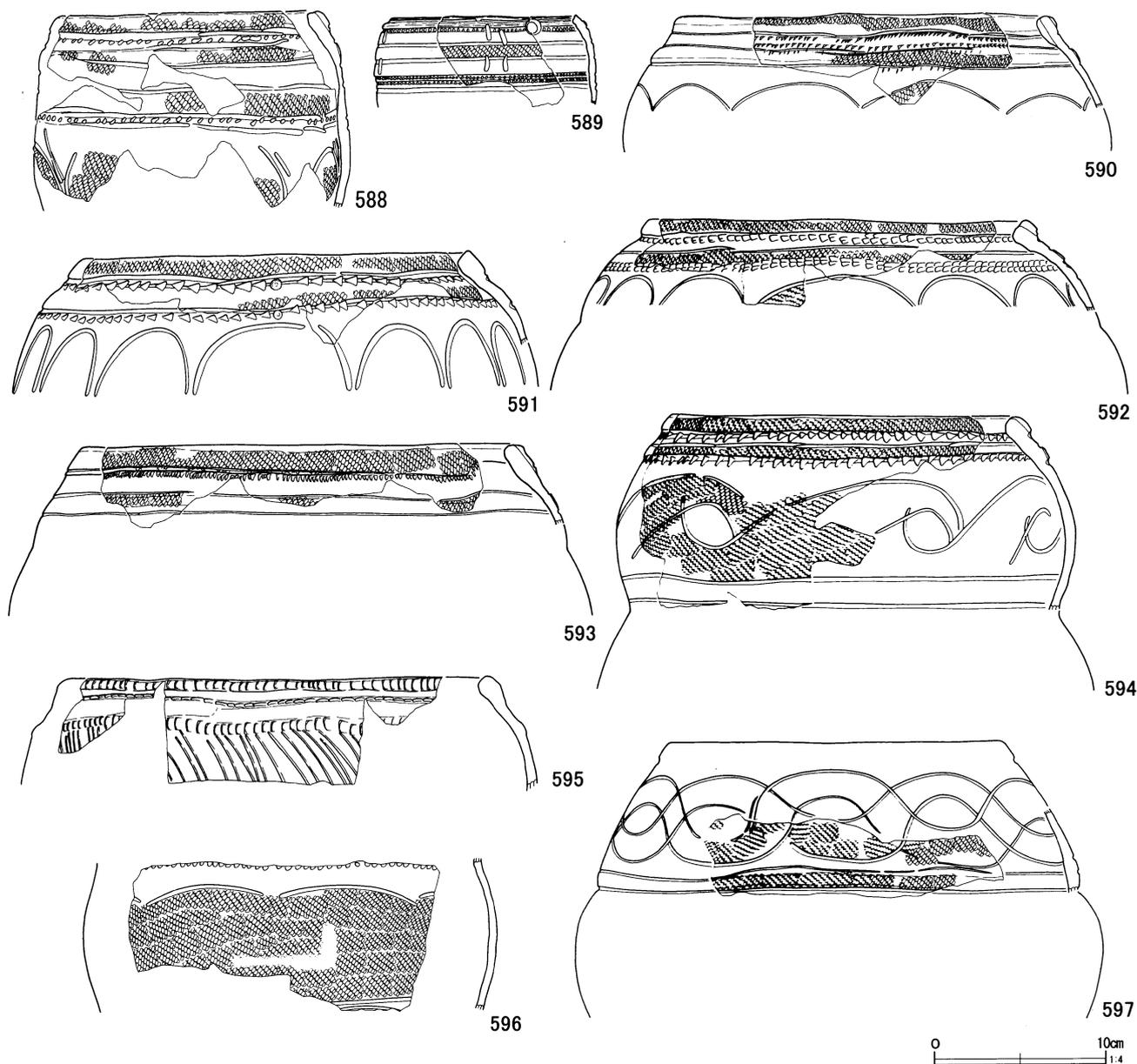
胴部中段には横位に連続する弧線文が描かれ、下端を区画する断続的な沈線との間に縄文が施文されている。胴下半部は縄文施文部となり、上限を単沈線で区画している。

585は砲弾形の深鉢とみられる。胴上半部に最大径を持ち、口縁は肥厚しつつ内湾する。口縁下に3段からなる帯縄文が巡り、縦長の貼付文が上下2段に重畳する。区画内部には、さらに沈線による楕円形の区画文が描かれる。頸部は無文で、胴部との境には1段の帯縄文が巡る。

584～597は、胴部中段に括れを持って、上下が球胴状に張り出す、いわゆる瓢形の深鉢である。

584はやや小型の器体で、口縁下に2段の帯縄文が巡り、これに沿って棒状工具先端による斜位の刺突列が巡る。

上下の区画上に小さく縦長の貼付文が一对6単位配されるものとみられるが、ほとんどが剥落している。頸部無文で、胴部との境を1条の沈線で区画し、



第92図 グリッド出土土器 (36)

両者の間を縦位の平行沈線で連結する。

全体に二次焼成にともなうケロイド状の風化がはなはだしく、胴部の文様は不明瞭である。

586は口縁下に2段の帯縄文が巡り、これに沿って斜位の刺突列が巡る。貼付文はみられない。頸部は無文で、胴上半部は2段の帯縄文が巡る。

胴部中段には斜位の刺突列が2段巡り、胴下半部は縄文帯となって、上端を沈線で区画する。刺突列と縄文帯との間には粗雑な対向弧線文がみられる。

587はやや大振りの瓢形土器である。

口縁下に帯縄文の区画を持つ点は前述2者と同様

である。胴上半部には崩れた横位の対向弧線のモチーフが描かれ、縄文が充填施文される。胴部中段の括れ部分に斜位の刺突列が2段巡る。

胴下半部にも崩れて平坦かつ幅広となった横位の対向弧線モチーフが巡り、縄文が充填される。

588・589は小型の瓢形深鉢である。588は体部に粗雑な対向弧線文がみられる。589は口縁に円孔を持ち、帯縄文間を縦位の平行沈線で連結する。

590～593・595は瓢形土器の口縁部である。口縁下に2段の帯縄文による区画が巡り、いずれも胴上半部には対向弧線文が描かれ、内部に縄文が施文さ

れる。帯縄文に沿って棒状工具先端による斜位の刺突文が巡る点も共通している。

595 は帯縄文が篋状工具による斜位の刻みへと置き換わり、区画に沿って巡る刺突列も、小波状を成す結節沈線へと置き換わっている。集合沈線を地文としている。胴上半部には棒状工具による縦位の集合沈線が施文される。

597 は胴部中段のみ残存する。胴上半部には蛇行する2条の帯縄文を組み合わせたあやくり状のモチーフが描かれる。胴部中段の括れ部分は1段の帯縄文で区画される。594 の胴部文様も一種のあやくりモチーフだが、下端を直線的に閉塞している。

596 は胴部中段の破片である。括れに沿って刺突列が巡り、胴部下段に上を連続する弧線、下端を直線で区画する幅広の縄文帯が存在する。

612・615～622・624～626 は台付鉢の体部である。

大型のものは胴部中段が「く」の字に張り出し、外反する口縁に縦位の集合沈線が描かれる長頸型(618～620)と、短く無文の頸部がほぼ垂直に立ち上がり、口端が肥厚して外屈する短頸型(612・615・617)の二者が存在する他、身の浅い杯型の体部で、口縁および胴部に刻みを伴う隆帯を巡らせる小型品が定型的に存在している。

612 は短頸型で、胴部文様帯下端の隆帯区画まで残存する。3段に巡る隆帯上に単独の刻みを伴う円形の貼付文が重畳するほか、文様帯上端と頸部無文体を区画する隆帯上に、深鉢の583にみられるような扁平な貼付文が副次的に配され、斜位の平行沈線によって上下連繫されている。地文は横位の矢羽根状沈線で、貼付文間を連繫する平行沈線間は無文となっている。

615 もほぼ同じモチーフの短頸型台付鉢だが、隆帯上の刻みは篋状工具による斜位の圧痕となっている。617 は貼付文間を連繫する平行沈線文が省略される。

618 は長頸型で、3段に廻る隆帯上に、上位に単独、下位に2個一対の貼付文が配され、対弧状の平

行沈線で上下連繫される。隆帯間のごく狭い区画となり、地文等は充填されない。胴下半部は弧状の集合沈線が描かれる。

620 も同様の貼付文がみられるが、弧状の平行沈線が省略されている。貼付文胴下半部無文で、横位の爪形文列が廻る。

622 の胴下半部は斜位の集合沈線が施文される。

626 は貼付文が省略され、隆帯間に弧状の平行沈線だけが描かれる。

627～631 は台付土器の脚台部である。深鉢の体部に似るが、しばしば器面に透かしが設けられ、内面に輪積み痕やごく粗い調整が残される等、体部と異なる特徴をもつ。

ドーム状に膨れるものと円錐状に立ち上がるものが存在する。安行2式期のものが含まれる可能性があるが、加飾が乏しいため、弁別は困難である。

627 は円錐型の脚台である。器面を幅広の帯縄文で分帯し、上位の無文部に十字型の透かしが配され、下位の無文部には円形の透かしが上下交互に配される。最上部の帯縄文には蛇行懸垂文がみられる。

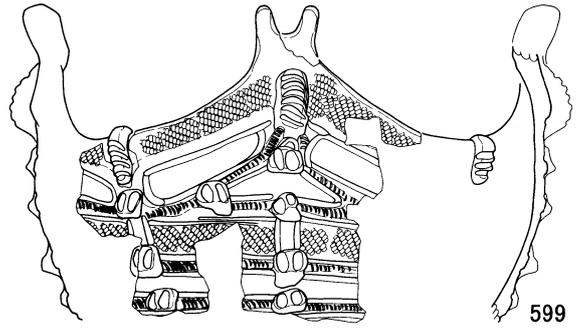
628・629 は小型の脚台で、いずれもドーム型である。628 は上半部が縄文帯となり、下半部は刻みを伴う隆帯が3段に巡る。629 は幅広の帯縄文が2段巡る。

630 は大型の台付鉢で、脚台部はドーム型を呈する。体部の下端から脚台部までが残存する。体部には弧状の集合沈線が施文される。脚台部は上半が縄文帯、中段以下には帯縄文が3段に巡る。

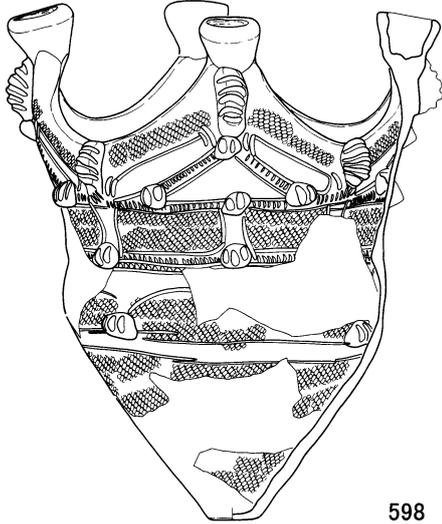
631 もドーム型の脚台だが、帯縄文間の無文部に円形の透かしが2段交互に配される。632 は上半部に横連続の弧線文による半円のモチーフが描かれ、下半には3段の帯縄文が配される。本例は内面の調整が比較的丁寧で、体部である可能性もある。

633・634・636・637 は丸底の鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口縁は肥厚しつつ内湾する。

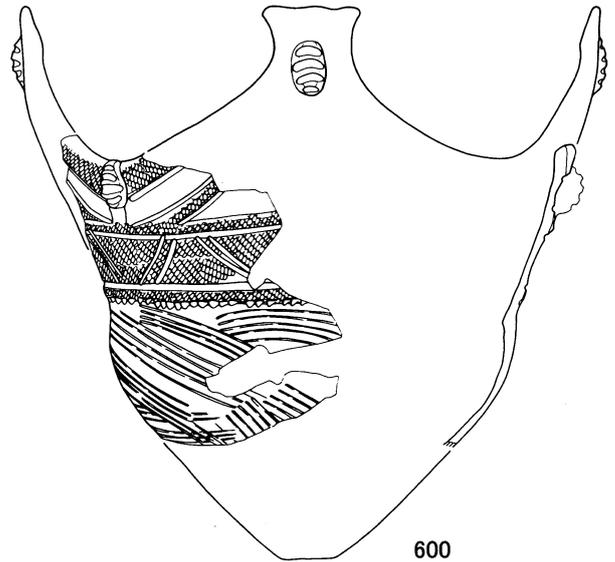
633 は水平口縁上に6単位の小突起を配し、直下に逆U字状の貼付文が配される。口縁下に篋状工具



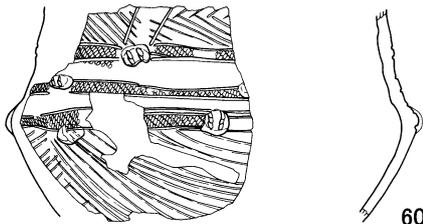
599



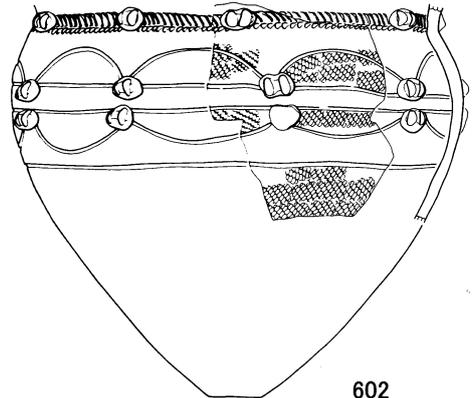
598



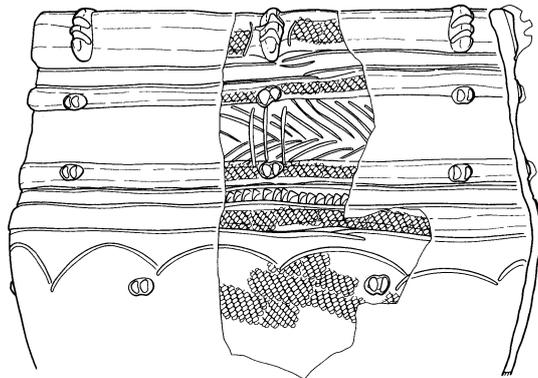
600



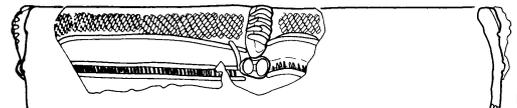
601



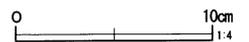
602



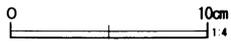
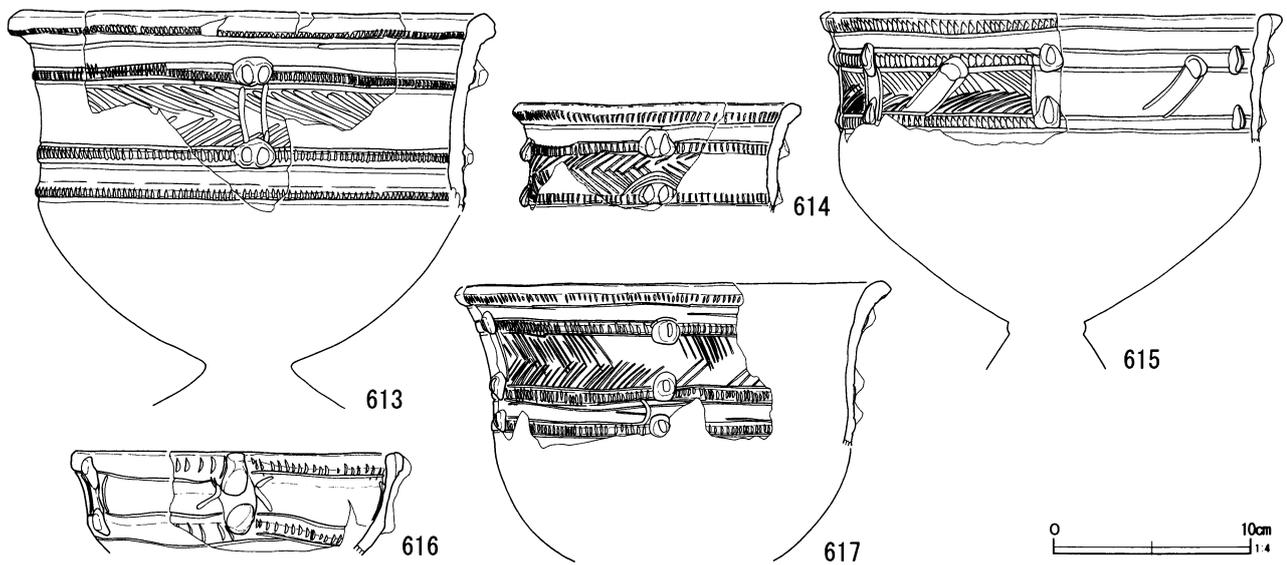
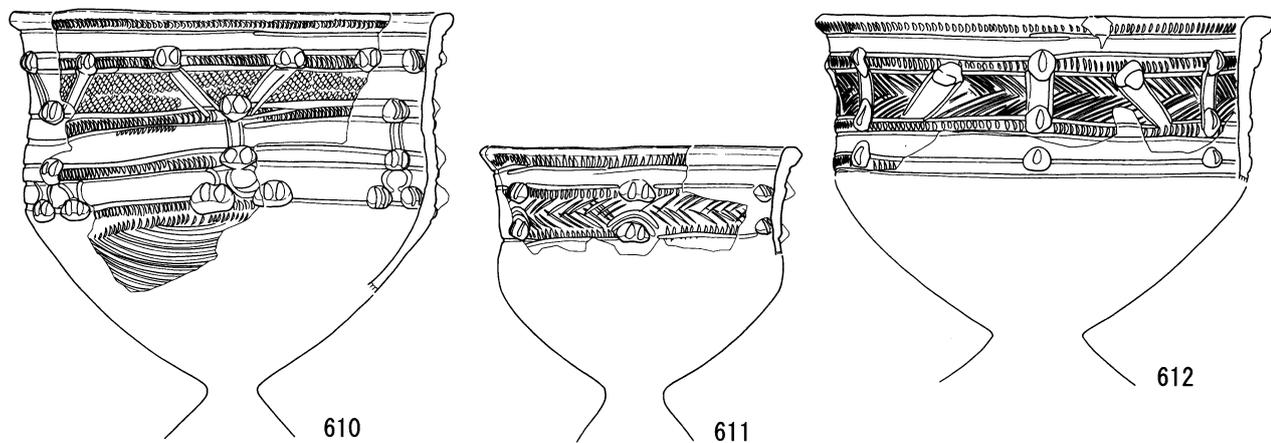
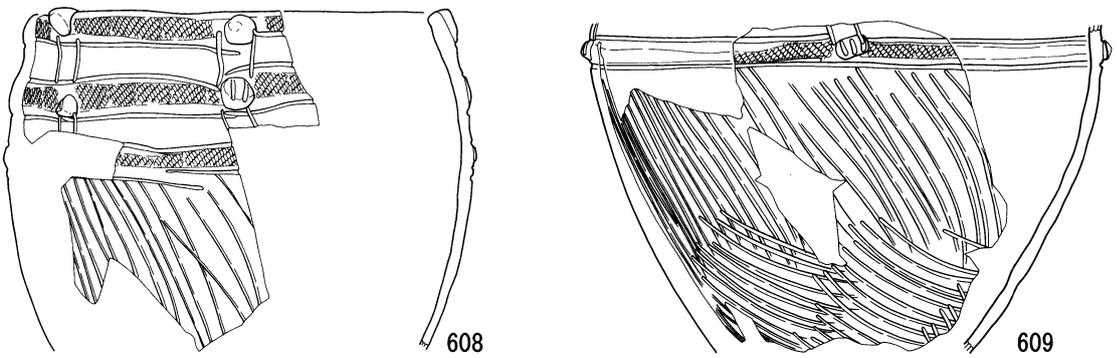
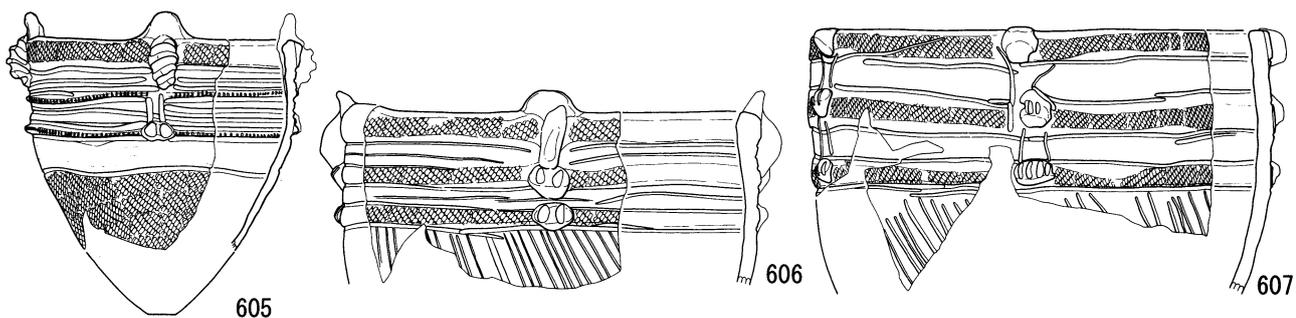
603



604



第93図 グリッド出土土器 (37)



第94図 グリッド出土土器 (38)

による幅広の刻みを伴う隆帯が巡り、また前述の貼付文を基点として左右に弧状の隆帯が展開し、半円形の区画を形成する。

胴部中段が刻みを伴う平行沈線で区画され、以下に斜位の集合沈線が施文される。底部周辺に段を持ち、底面は丸底である。

634 は口縁下に刻みを伴う隆帯により横楕円形の区画を形成し、交点に横長の貼付文を配する。胴下半部には粗雑な斜格子文が描かれる。

636 は口縁上に 2 個 1 対の縦長の貼付文を配し、直下に逆 U 字状の貼付文を配する。胴上半部には刻みを伴う隆帯が 3 段に巡り、胴下半部には斜位の集合沈線が描かれる。

637 は口縁下に縦長の貼付文が 2 列 2 段配される。胴上半部には帯縄文が 3 段巡る。

639・640 は同種の鉢の底部で、安行 2 式の可能性もある。

648 は円口方底土器。詳細は V 章で述べる。

第 98 図以下は同時期の破片資料を一括した。

655～661 は曾谷式・高井東式である。655～659 は 4 単位大波状口縁深鉢の口縁部である。655 は双頭状の突起が付され、656・657 は盃状の突起で、656 には橋梁状の把手が伴う。658・659 は山形波状口縁で、波頂部に貼付文が付される。660 は水平口縁ないし波状口縁の波底部である。小さな縦長の貼付文が付され、鋸歯状の沈線が垂下する。661 は 575 類似の器形である。

662～674 は安行 1 式の 4 単位大波状口縁である。662～672 は波頂部で、3 段ないし 4 段の帯縄文が巡り、縦長の貼付文が重畳する。662～667 は円孔が穿たれる。673～677 は同種の器形の波底部である。

678 は 574 に類似の山形波状口縁、679 は水平口縁上に配される小突起で、582 に類似の器形を呈するものと考えられる。680 は胴部破片で、帯縄文下端に生じた三角形の区画内部に矢羽根状の集合沈線が施文される。

682～687 は 577 類似の器形で、口縁下に帯縄文で 1 段の区画が描かれる。頸部には縄文が施文され、686 では縄文帯の下端を横位の連続弧線文で区画する。

688～704 は水平口縁の深鉢で、口縁下に帯縄文が巡り、縦長の貼付文が付される。大半が内湾口縁で、砲弾型ないし瓢形の深鉢と考えられるものである。704 は U 字形の貼付文である。

705～710 は貼付文を持たない水平口縁である。

711～718 は帯状文に沿って棒状工具先端による斜位の刺突列が巡る。714～718 は瓢形深鉢とみられ、胴上半部に対向弧線文が描かれる。

719～726 は帯状文に代わって刻みを伴う隆帯が巡るものである。

770～788 は瓢形深鉢胴部である。胴部中段の括れ部分に刺突列や帯状文が巡り、上下に対抗弧線文が配される。

789～792 は台付鉢の口縁部である。

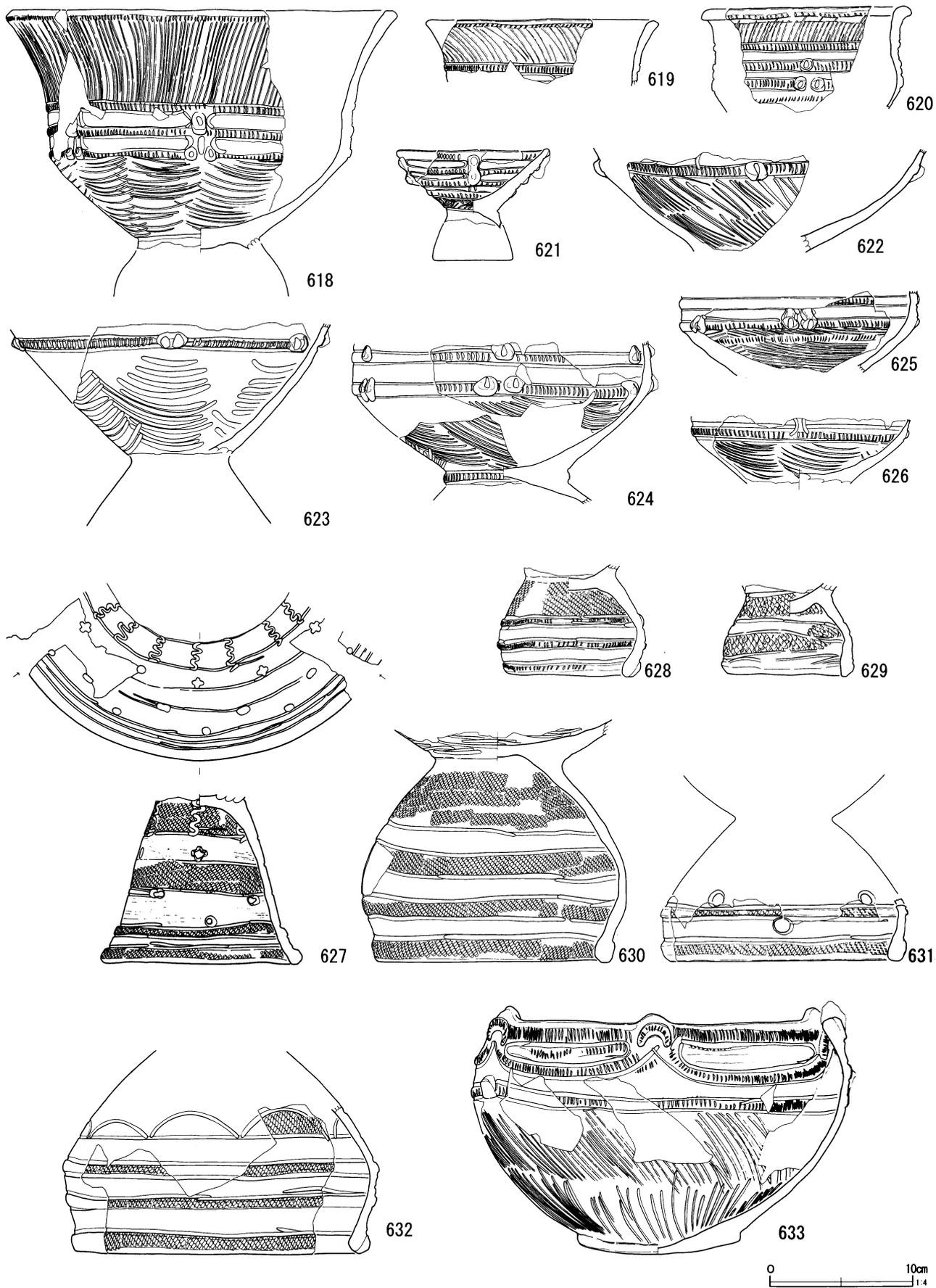
789 は長頸型の口縁部である。790 は大柄な杯型である。791・792 は短頸型で、791 は区画上に扁平な貼付文が付されて、縦位の平行沈線により連繋される。792 は対弧状の沈線だけが描かれる。

796～798 は台付鉢の胴下半部、799～807 は脚台部である。貼付文等の加飾に乏しいため、新しい時期のものが含まれる可能性がある。

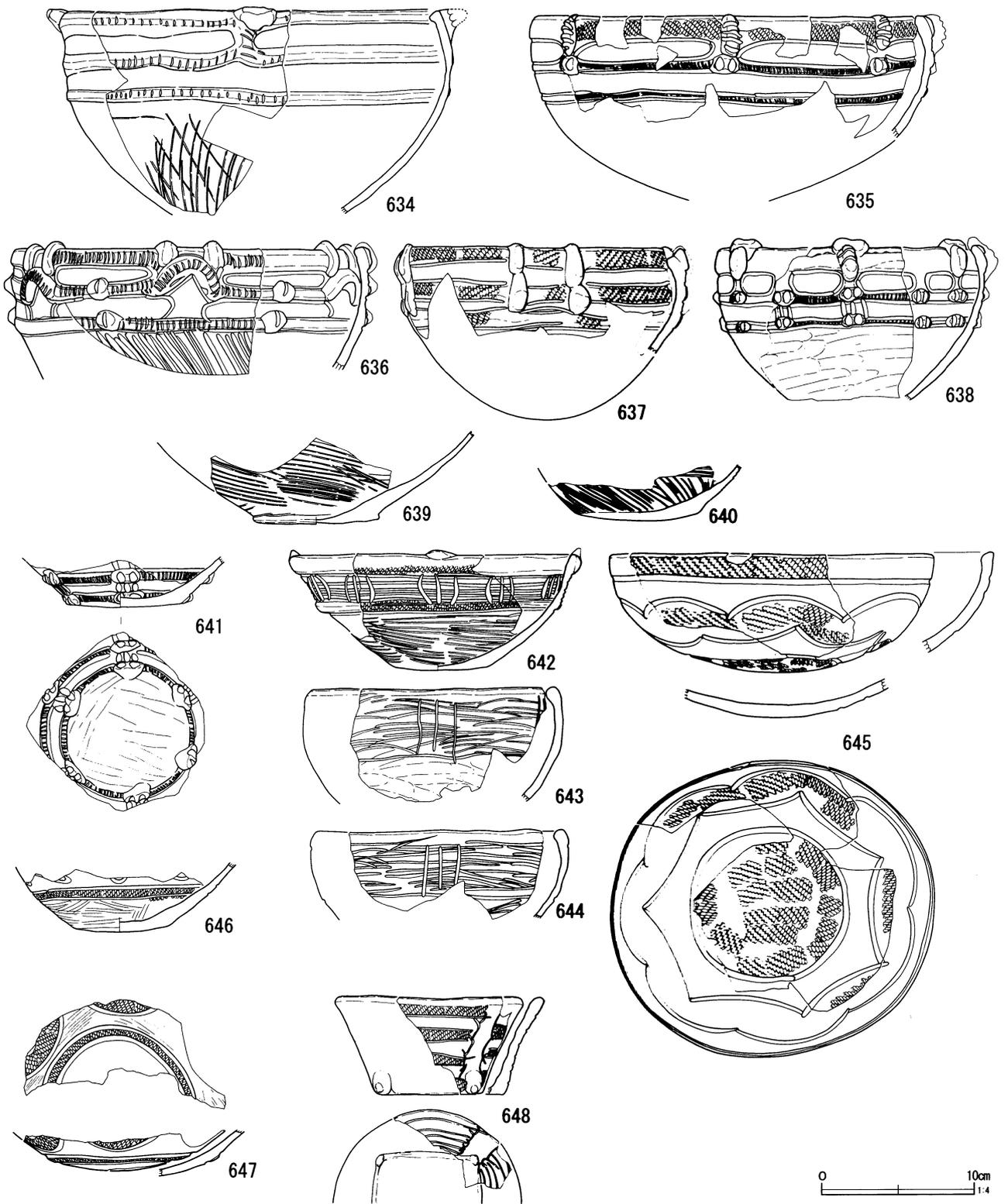
胴下半部は弧状の集合沈線を地文とし、上端を隆帯で区画する。

脚台は円錐型 (803・805～807) とドーム型 (800・801・804) があり、801 等体部の文様を踏襲するもの以外に、806・807 のように縦位の集合沈線のみ施文されるものが存在する。

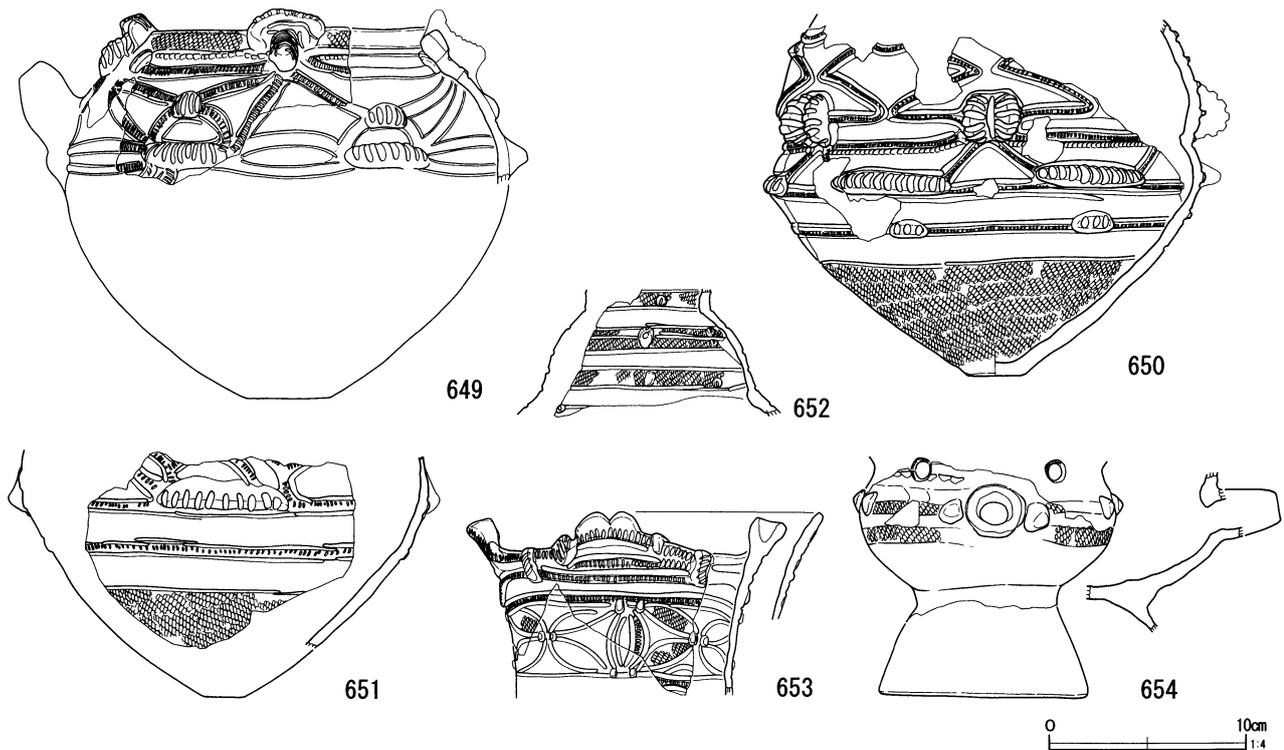
802 は体部と脚台部の接合部分である。



第95図 グリッド出土土器 (39)



第96図 グリッド出土土器 (40)



第97図 グリッド出土土器(41)

IV群B類(第93図・第94図605～611・613・614・第95図623・第96図635・638・641～647・第97図649～651・第101図727～第103図769・第104図793～795・第105図)

598～600は4単位波状口縁の深鉢である。

598はやや小型の深鉢で、ほぼ全容を知ることができる資料である。

波状口縁の波頂部に杯形の突起を配し、直下に横位の刻みを伴う縦長の貼付文が付される。胴部には豚鼻状の貼付文が付され、刻みを伴う隆帯で縦横に連繋される。

胴下半部は縄文帯となり、上限を単独の沈線によって区画している。

599は波頂部に双頭の突起を配する他は598とほぼ同構成をとる。600は胴部中段を2条の隆帯で区画し、内部を縄文帯として、平行沈線による鋸歯状モチーフを描く。胴下半部には櫛歯状工具による集合沈線文が施文される。

601は胴部中段に矢羽根状の集合沈線文、胴下半部に斜位の集合沈線文が施文される。

602は胴下半部で、横位の沈線と弧線文によって形成された半円形のモチーフが上下対向し、豚鼻状の貼付文が配される。胴下半部は縄文帯となる。

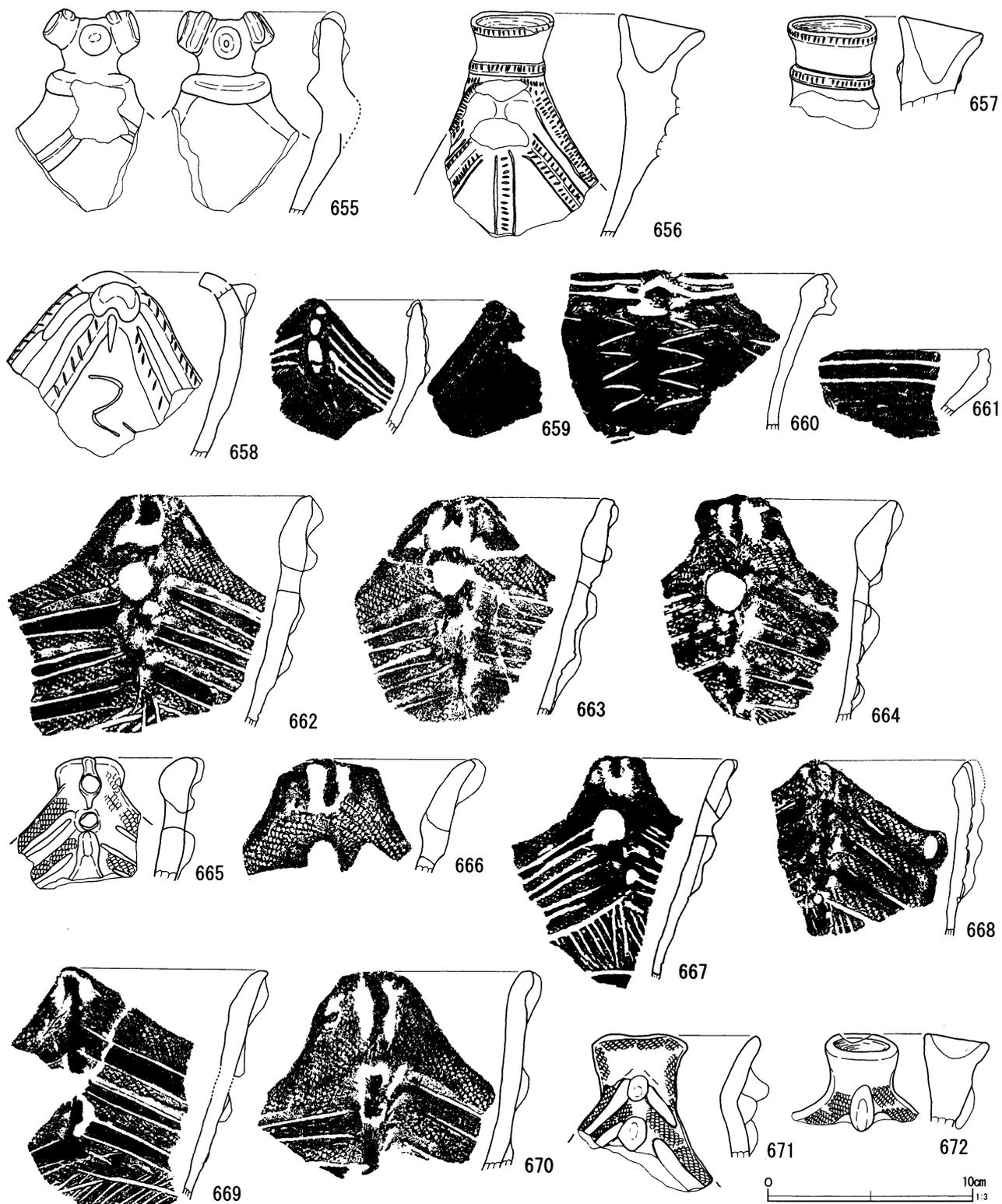
603は水平口縁の深鉢である。口縁部の帯縄文上に縦長の貼付文が付される。胴部中段には横位の矢羽根状沈線が施文されて上下を縄文施文の隆帯で区画する。胴下半部は縄文帯となり、上限は横位の弧線文で区画される。

604も類似の水平口縁深鉢である。口縁下の帯縄文は下端を弧線によって区画され、頸部の隆帯との間に半円形の区画を構成する。

605～609は砲弾形の精製深鉢である。

605は水平口縁上に山形の小突起が配され、直下に縦長の貼付文が付される。胴上半部には刻みを伴う2条の隆帯が巡り、間隙に横位の集合沈線が施文される。胴下半部は縄文帯となり、上限は1条の沈線で区画されて、前述の文様帯との間に若干の無文帯を形成する。

606も水平口縁上に山形の小突起を持つ。突起の直下には刻みを持たない縦長突起と配し、以下豚鼻



第98図 グリッド出土土器 (42)

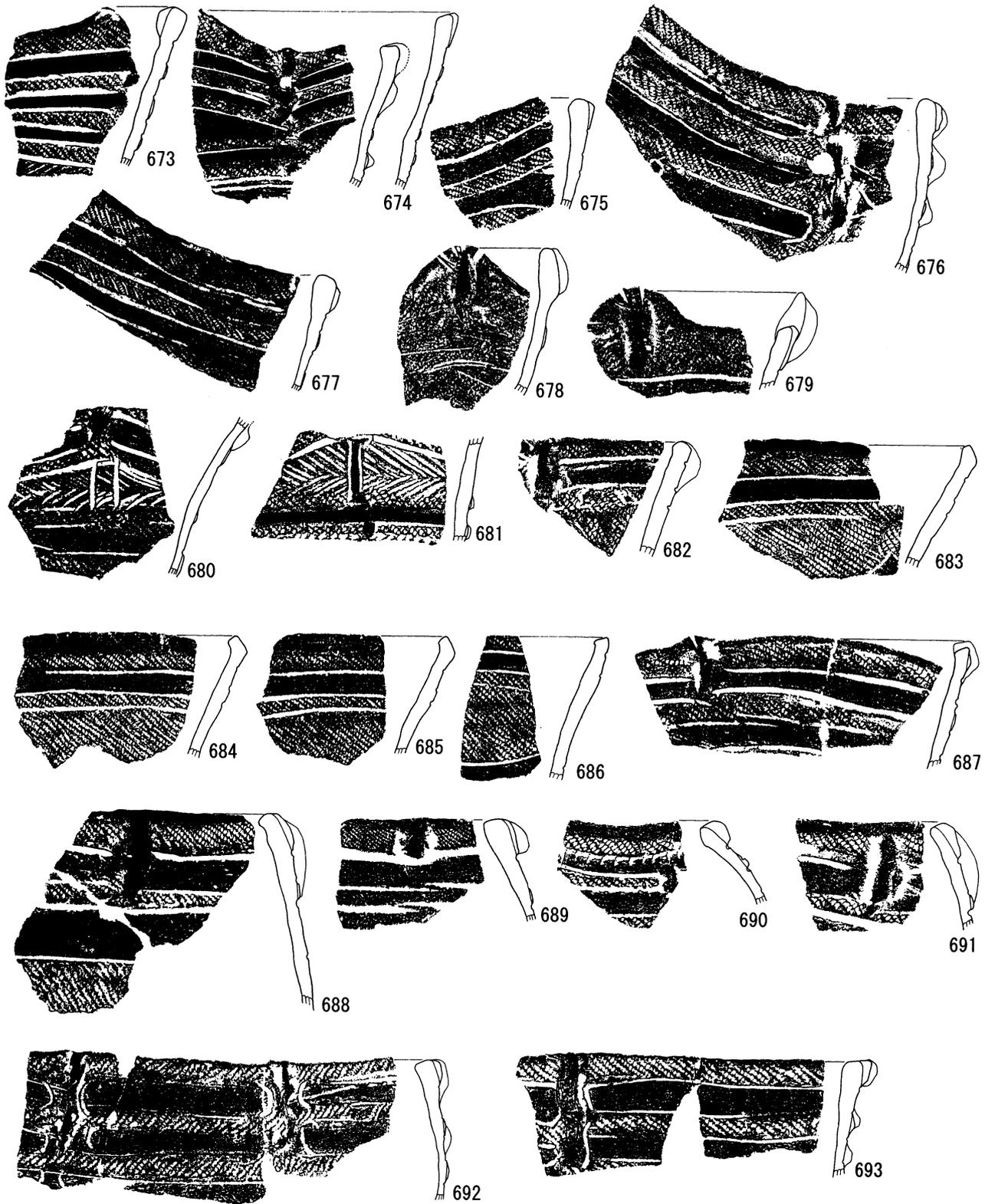
状の貼付文が重畳する。

胴上半部には3段の帯縄文が巡り、胴部中段以下には縦位の集合沈線文が施文される。

607・608は606とほぼ同構成だが、口縁上に突起を持たない。609も集合沈線文を地文とする胴下半

部である。610・611・613・614は台付鉢の体部で、前段階の短頸型の器形を引き継いでいる。

胴部を区画する隆帯上に豚鼻状の貼付文を配するが、610ではこの貼付文が三角構成をとっており、波状口縁深鉢の胴部文様が採り入れられたものと考



第99図 グリッド出土土器 (43)

えられる。623は同器種で、直線的に開く胴下半部である。地文は前段階に比べ太い棒状工具による弧状の集合沈線文である。

635・638は丸底の鉢である。基本的に前述の水

平口縁深鉢の口縁～同上半部と共通のモチーフが描かれる。638は口縁の縦長突起の左右に横楕円形の区画が構成され、胴下半部が無文となる。

641も丸底の鉢だが、刻みを伴う隆帯の区画が胴

下半部にまで及んでいる。

642～644は水平口縁の小型浅鉢である。642は口端上に小突起を持つ。口縁と同上半部を帯縄文で区画し、内部に横位の集合沈線を巡らせたうえで、3本一組の沈線により単位文を描いている。胴下半部には横位の集合沈線文が施文される。

643・644はより簡素な施文で、胴上半部のみ横位の集合沈線が施文され、3本沈線の単位文が配される。

645～647は皿形土器である。

645は唯一全体を知り得る資料である。丸底で、口縁まで内湾しつつ単調に立ち上がる器形で、口端は内削ぎ状に整形されている。

口縁下に帯縄文が巡り、胴部に対向弧線文が巡る。底部には縄文が施文され、1条の沈線で上限が区画される。

646・647は胴上半部から上を欠失する。いずれも胴部中段に帯縄文を巡らせ、底部は無文である。胴上半部には磨消縄文による逆V字(646)・U字(647)等のアルファベット状モチーフが描かれるものとみられる。

649～651は注口土器である。

649は胴部砲弾形を呈する。折り返し口縁外面に縄文が施文される。口縁上に扇形の突起を4単位配し、直下に縦長の貼付文が付される。胴部には刻みを伴う横長の貼付文が配され、刻みを伴う隆帯によって連繋されている。

650は瓢型の胴部で、口縁と注口部を欠いている。胴部中段の括れ部分に縦長の貼付文が一对6単位で配され、括れの直下の最も張り出す部分にも横長の貼付文が6単位配される。貼付文は刻みを伴う隆帯で相互に連繋される。

胴下半部は縄文帯となり、上限を1条の沈線で区画している。

651はこれとほぼ同構成の同下半部で、やはり瓢形の注口土器と考えられる。

第101図以下は同時期の破片資料である。

727～738は大波状口縁深鉢の波頂部である。大半は突起の直下に縦長の貼付文を伴っている。

727・728は矮小化した杯形突起で、727は周囲にドーナツ状の鏝をともなっている。729・734～737は扇状の突起、730～733は双頭状の突起である。738は単純な山型波状口縁である。

744・745は同様の器形で、波底部から胴部中段にかけての大破片である。

744の波底部には半ば融合した上下一対の貼付文を持つ。745の波底部には刻みを伴う縦長の貼付文が配される。胴部には豚鼻状の貼付文が付される。

746～750は波底部を中心とした口縁部破片である。746は横長の貼付文が付される。

739～743は水平口縁上に山形の小突起を配するもので、突起の直下には縦長の貼付文を伴っている。739は605に類似の簡素な砲弾型の深鉢とみられ、口縁下に3条の帯状文が巡り、豚鼻状の貼付文が重畳する。胴下半部には縦位の集合沈線が施文される。

751～757は砲弾形深鉢の口縁部であろう。いずれも口縁内湾する。755は僅かに外傾しており、波状口縁の波底部の可能性はある。

758～765は中段に屈曲を持つ深鉢胴部である。多段の帯状文上に豚鼻状貼付文が重畳し、鋸歯文や横位連続弧線文が描かれ、沈線の交点やモチーフの接点にも貼付文が付される。

766・793～795は台付き土器の口縁である。

767～769は口縁下に横位の集合沈線が巡り、胴部との境に貼付文を持つ。胴部には縦位や斜位の集合沈線が描かれる。半粗製の土器であるかもしれない。

808～825は注口土器である。注口部については、819・820が接続部下面に突起を持つ以外加飾に乏しく、前後の時期に伴うものもあるかもしれない。

827・828は異形台付土器である。827は胴部側面に付される突起、828は口縁部で、円形の透かしを持っている。

829～831は円口方底土器で、829は口縁部、830・

831 は底部のコーナー部分である。

IV群C類 (第97図652～654・第128図1191～1201)

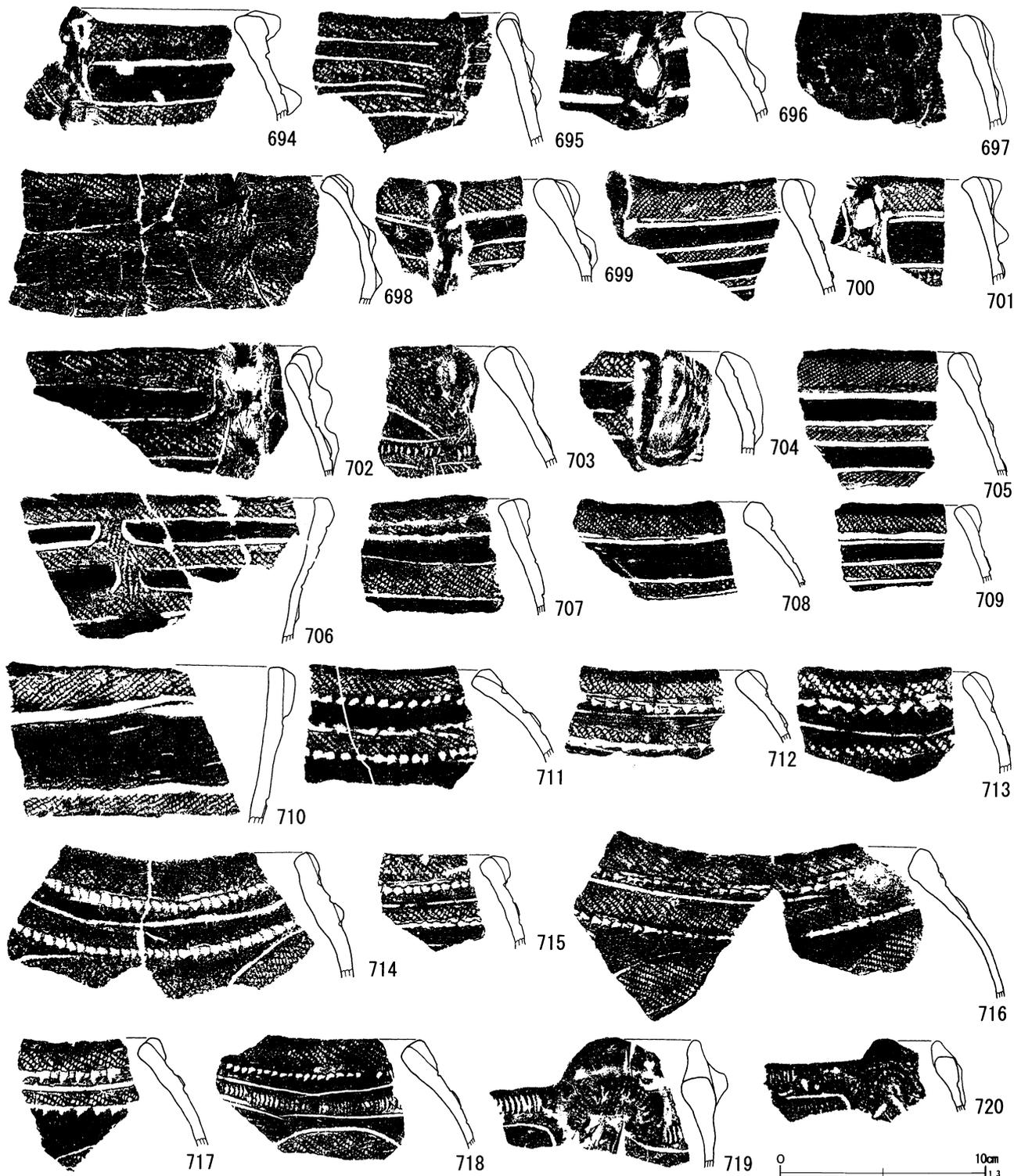
東北系の瘤付土器が出土している。

652は壺ないし注口土器である。球胴状の体部から立ちあがる釣鐘形の胴上半部で、さらに径の小さな筒状の頸部へと接続する。多段の帯状文がみられ、刺突を伴う単独の貼瘤が重畳しつつ、6単位ないし

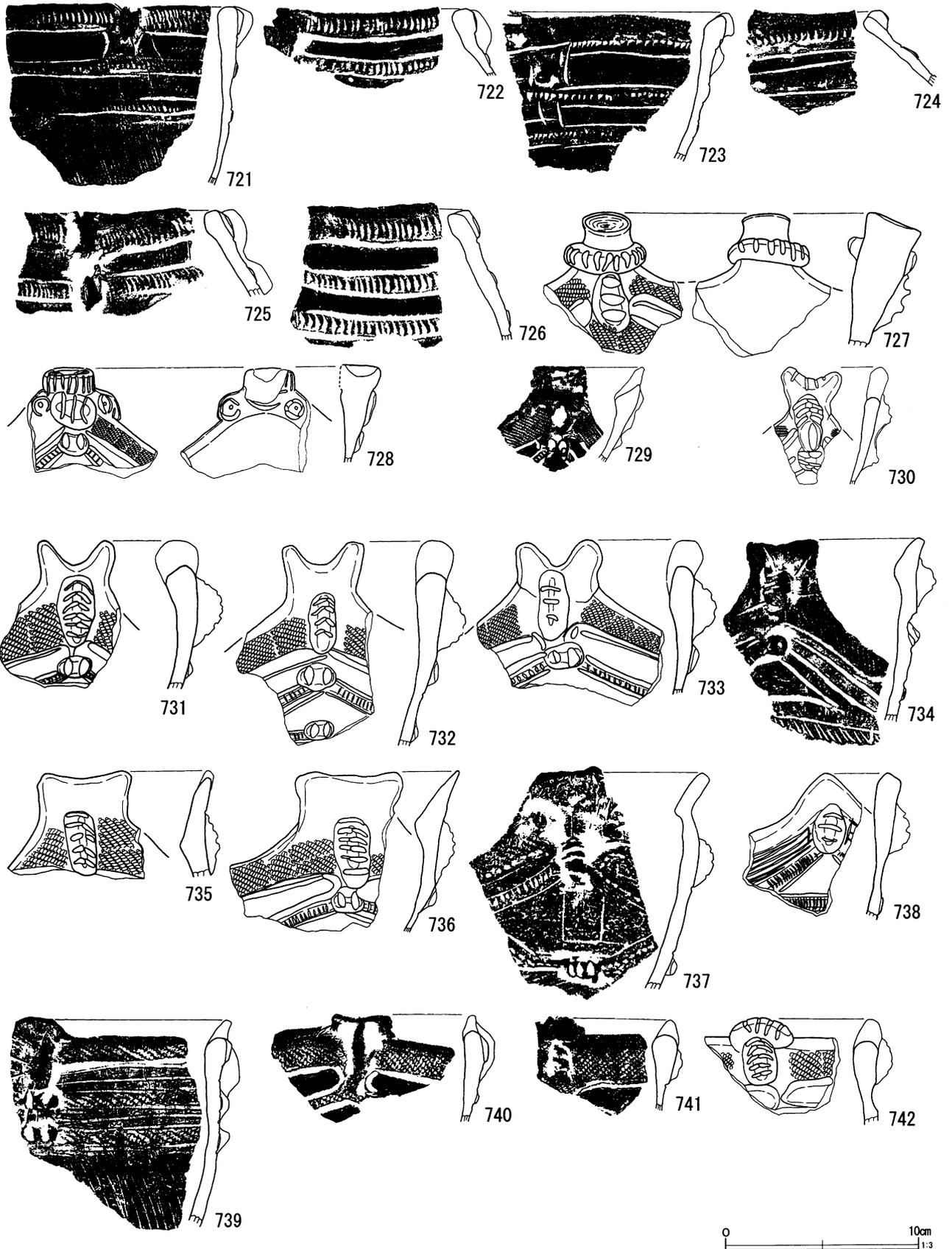
8単位に配されるものと思われる。

653は小型の深鉢である。円筒状の器形で、口縁外反する。4単位の波状口縁で、波頂部には杯状の突起と、双頭山型の突起が交互に配される。波底部には縦長の突起が配され、斜位の刻みが施される。

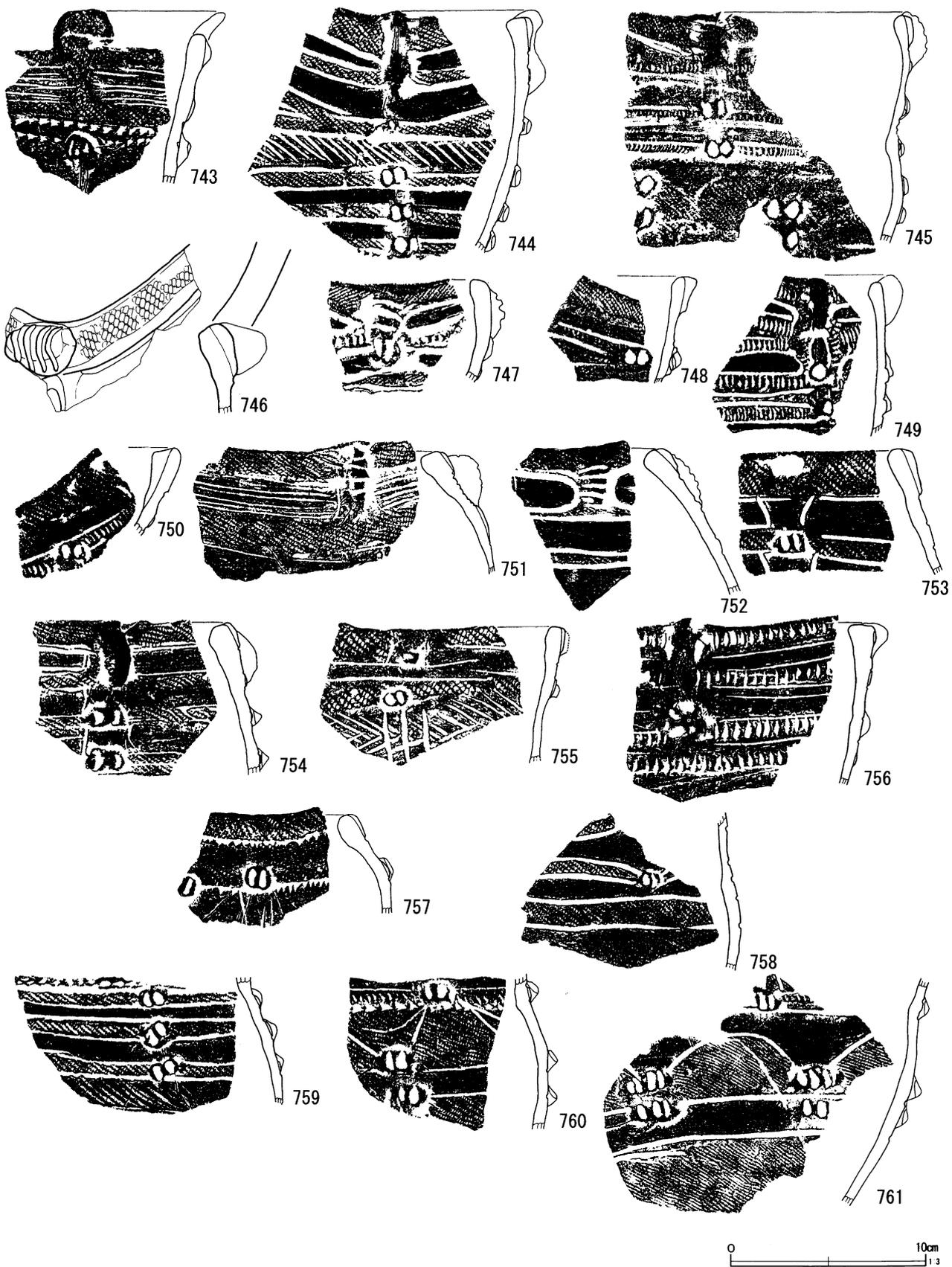
頸部には刻みを伴う隆帯が2段に巡り、内部が磨り消される。胴部には2個一対の貼瘤が配され、対



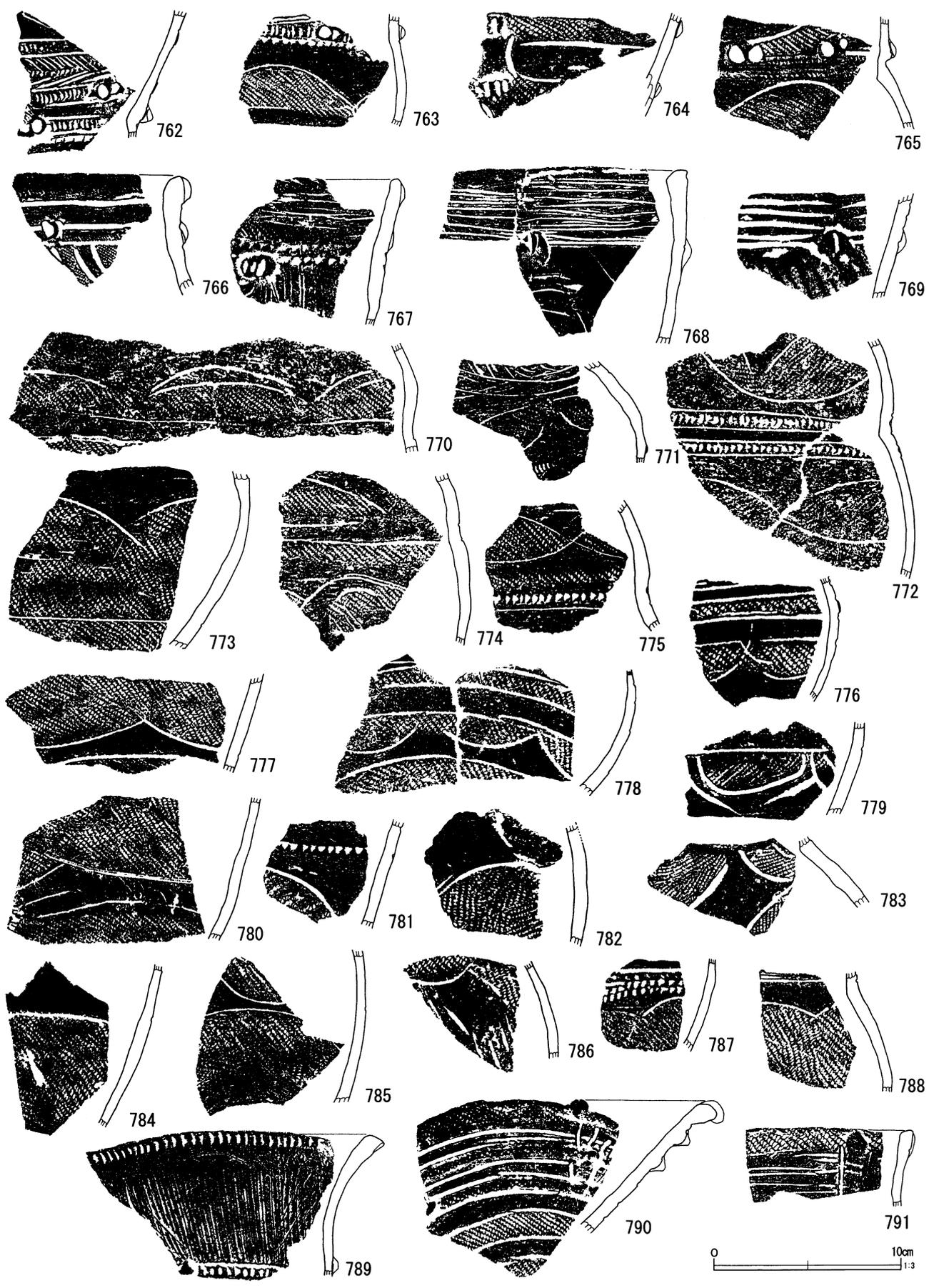
第100図 グリッド出土土器 (44)



第101図 グリッド出土土器 (45)



第102図 グリッド出土土器 (46)



第103図 グリッド出土土器 (47)

弧の内部に縄文を充填した紡錘状のモチーフで連繋される。

654 は台付の注口土器である。やや扁平な球胴状で、胴部中段に2条の帯縄文が巡り、ここに注口が付される。また、上位の帯縄文に2個1単位の貼瘤が配され、注口の両側にも1つずつの貼瘤を伴っている。頸部は括れを持ち、円孔が穿たれている。

1191～1202 は破片資料である。

1191・1192 は653 に類似の深鉢口縁部である。1191 は双頭状の突起の両側に貼瘤が配される。1192 は先端が2重となる山形の突起である。

1193 は浅鉢の口縁部とみられ、隣り合う楕円形の区画の接点に一对の貼瘤が配され、直下の胴部にも単独の貼瘤がみられる。

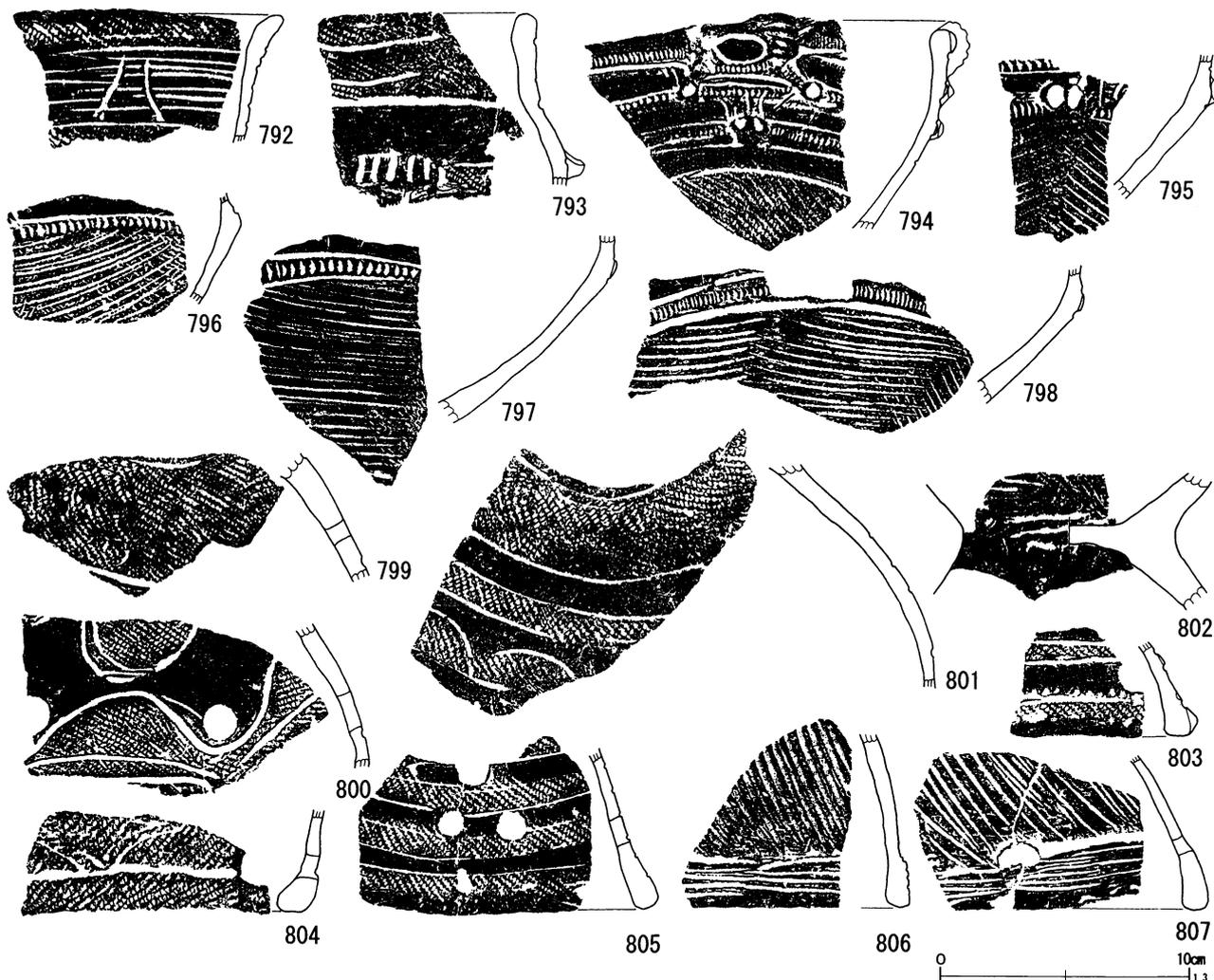
1194 は屈曲を持つ深鉢胴部で、刻みを伴う隆帯が3段巡った上に貼瘤が重畳する。

1195～1199 は弧線連結文の施文される深鉢である。新旧のものが含まれるとみられる。

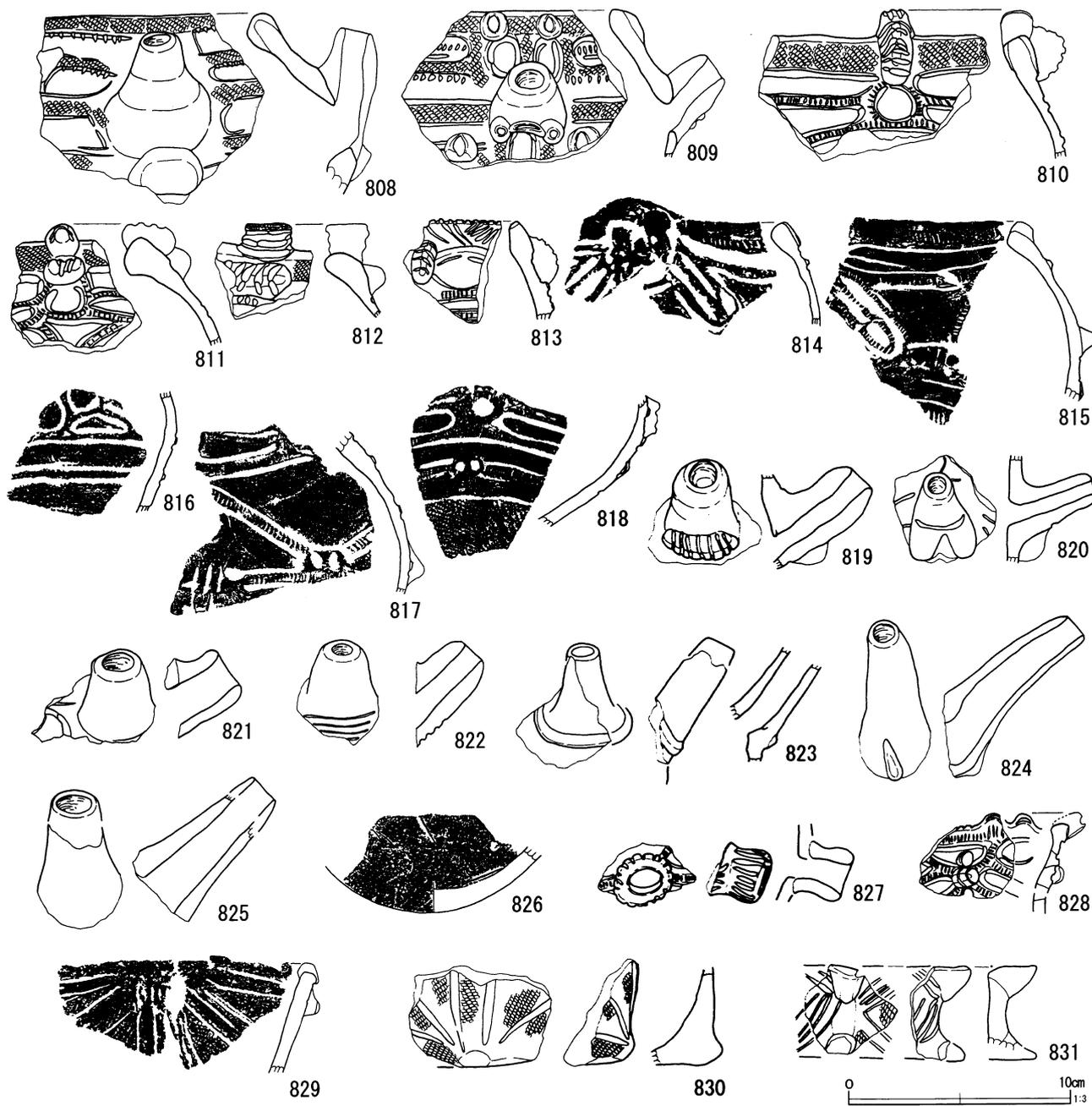
1195 は口縁部である。口縁下に1条の沈線が巡り、以下に弧線連結文が展開する。1196 はモチーフの接点に蛇行沈線が垂下する。1199 は地文縄文が縦位の刻みに代替される。

1200 は壺の胴部であろう。同心円文上に2個1単位の貼瘤が配され、周囲に弧線文が巡る。

1201 は注口土器の注口部である。中段に帯縄文が巡り、刻みを伴う貼瘤が付される。また、体部との接続部下面にも一对の貼瘤が配される。



第104図 グリッド出土土器 (48)



第105図 グリッド出土土器(49)

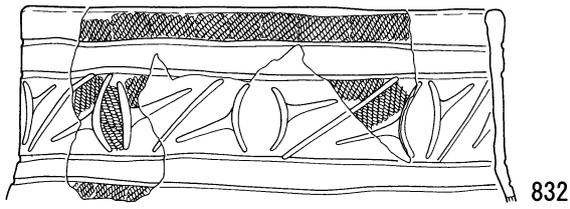
V群A類(第106図~109図)

832は深鉢口縁部である。胴下半部に最大径を持ち、頸部との境が屈曲して、円筒状の頸部が垂直に立ち上がる。

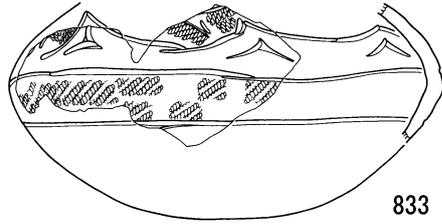
口縁部に縄文帯を持ち、若干の無文部をはさんで頸部の文様帯に接続する。頸部の文様帯は上下を単沈線で区画した内部を斜行沈線によって平行四辺形に分割し、対向する三叉文を描くものである。縄文はこれらの沈線モチーフに沿って充填施文されている。

833は壺形土器の胴部である。扁平な円盤状の器形で、胴部中段のもっとも張り出す部分に帯縄文が巡り、胴上半部には横位の弧線文が巡る。このことで弧線と帯縄文との間に三角形の余白が生じ、これを三叉文によって埋めている。

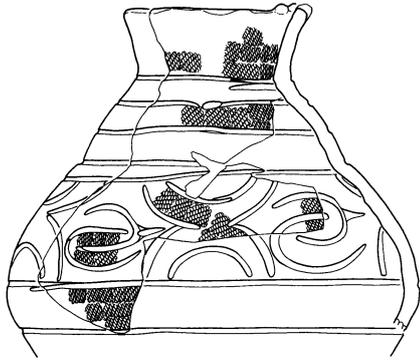
834も壺形土器で、口縁から胴部中段までが残存している。胴下半部および上半部がそれぞれドーム状に張る瓢形の壺で、頸部が「く」の字に屈曲して、口縁は短く外反する。口端には2個一組の小突起が配される。



832



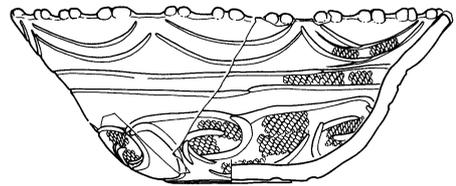
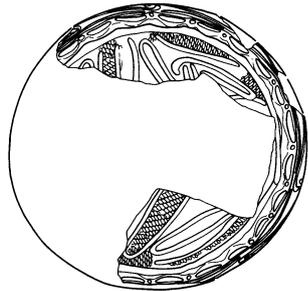
833



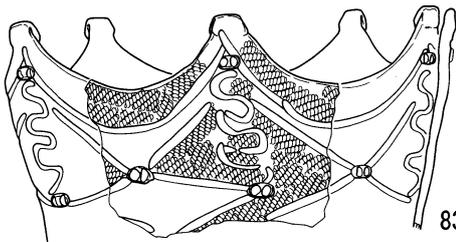
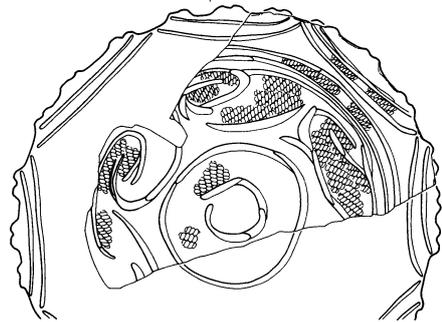
834



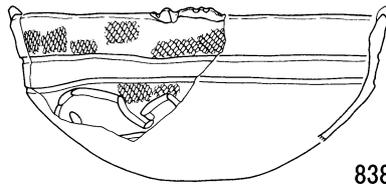
835



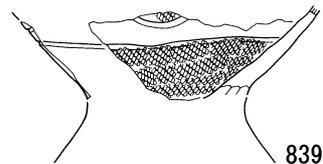
836



837



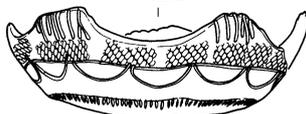
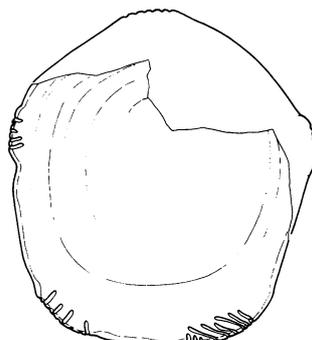
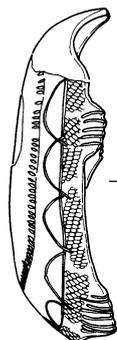
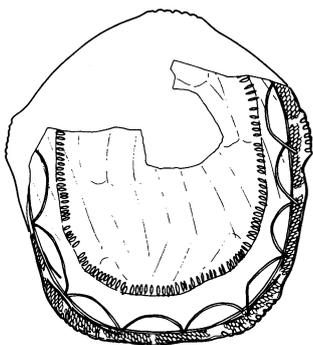
838



839



840



841



第106図 グリッド出土土器 (50)

胴部中段に、上下を沈線で区画した文様帯が置かれ、X字状の帯縄文と、対抗する三叉文による入組み状のモチーフが描かれる。地文縄文で、モチーフに沿って充填施文されている。

胴上半部には1段の帯縄文が巡り、頸部および胴下半部は縄文帯となる。

835は坏形の浅鉢である。丸底で、口縁が肥厚して内湾する。腰の部分に、単沈線と円形刺突を交互に配した連鎖状の隆帯が巡って器面を上下分帯する。

口縁下に弧線文が巡り、これに沿って単沈線の入組みモチーフが描かれる。底面にもヘアピン状の沈線文様が描かれ、地文縄文はモチーフに沿って充填施文される。

836は浅鉢である。水平口縁で、口端上に2個1単位の小突起を持ち、これらが三組を1単位として頸部の平行弧線文に括られる。波状口縁のイメージを水平口縁上に取り込んだ構成とみることができよう。胴部には大柄な入組み文が描かれ、頸部との境を1段の帯縄文で区画する。

837は姥山Ⅱ式である。5単位の波状口縁を成し、波頂部に扁平な突起を付す。口縁下には帯縄文が巡る。波頂部の直下には菱形の大区画が描かれて、蛇行懸垂文が垂下する。モチーフの接点には豚鼻状の貼付文が配されている。

838は浅鉢である。波状口縁上に刻みを伴う半円形の突起が配される。頸部は縄文帯となり、胴部には小波頭状のモチーフが描かれる。

839は台付土器である。胴下半部が縄文帯となつて、上限を単沈線で区画し、胴部中段の無文部に磨消文様が描かれる。

840は注口土器の底部と思われる。無文で、丸底を呈し、中央にごく小さな円座状の高台が付される。

841は前回の調査でも出土している異形の皿形土器である。丸底で、緩やかな5単位の波状口縁を成す。波頂部には扁平な山形突起が付され、内外面に縦位の集合沈線が描かれる。

口縁下に縄文帯を持って、下限を単沈線で区画し、

弧線文を巡らせて半円形の区画を構成している。胴下半部に爪形文が巡り、底面は無文である。

5単位の突起の位置関係が頭と四肢を想起させ、なんらかの動物をイメージした器形と考えられる。蓮田市久台遺跡等で出土した動物形土製品とも時期的に近く、関連が伺われる。

第107図以下は破片資料である。

842～847は大波状口縁の深鉢である。

前段階の文様構成を踏襲するが、器形豚鼻状の貼付文は扁平となり、貼付文間を連繋する隆帯は帯縄文に代替される。

842～845は波頂部で、豚鼻状の貼付文が多段化する。846・847は波底部で、846は刻みを伴う横長の貼付文が、847は装飾をもたない単独の貼付文が配される。

848・849は水平口縁で、刻みを伴う小突起が配され、直下に豚鼻状貼付文が重畳する。

850・851は胴上半部で、帯縄文の接点に豚鼻状貼付文が並ぶ。

852～855は砲弾形深鉢の口縁部であろう。口縁内湾して、刻みを伴う縦長の貼付文が付される。

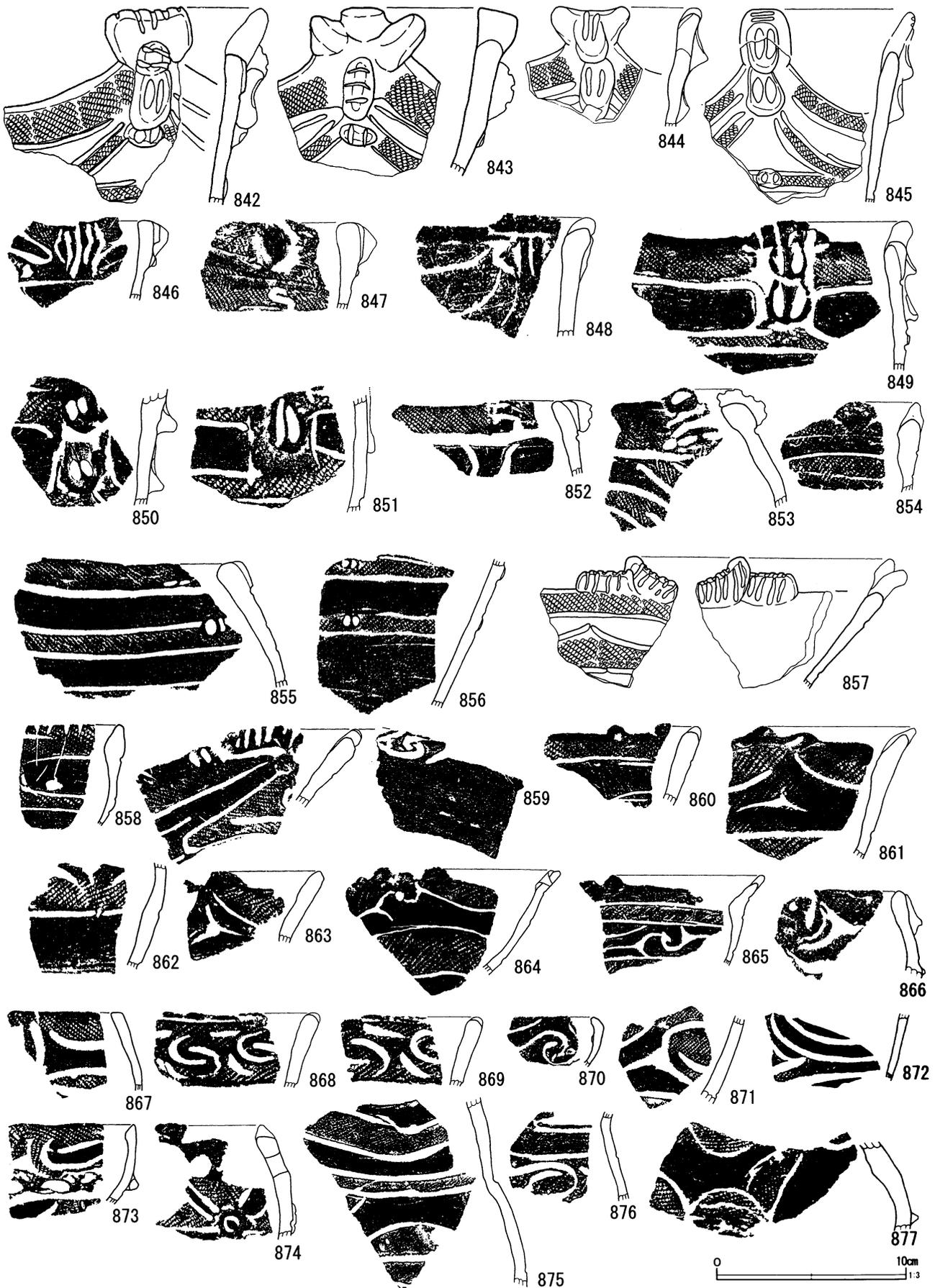
853の頸部には三叉文が描かれる。855の頸部には帯縄文が重畳する。

857は水平口縁状に集合沈線を伴う鱗状の突起が交差して配される。口縁直下は帯縄文で、直下に弧線文が巡って、半円形の区画を構成する。

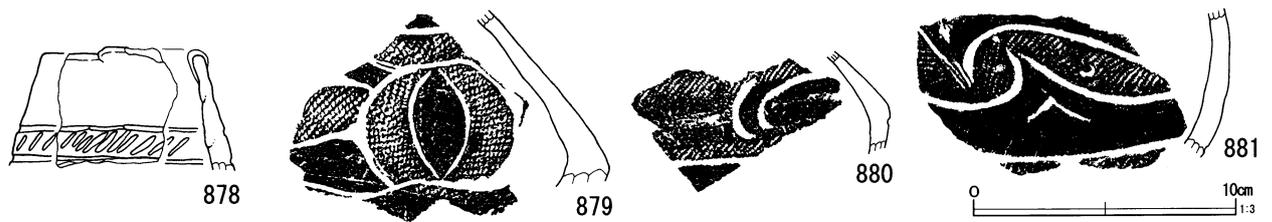
858・859にも類似の突起がみられる。858の頸部には横楕円形の区画が描かれる。859は浅鉢とみられ、突起の直下に三角形の区画が構成され、内部に入組み文が描かれる。

860～865は口端上に2個1単位の小突起が配される。861・863の口縁直下には弧線文が巡り、三叉文が描かれる。864は浅鉢とみられる。突起の下で、左右から伸びた三叉文が入組み、中央に貫通孔が穿たれて魚眼三叉文を構成する。

865の胴部にも入組み三叉文が描かれる。866は豚鼻状貼付文の左右に三叉文が配される。



第107図 グリッド出土土器 (51)



第108図 グリッド出土土器 (52)

868・869は浅鉢口縁部とみられる。口縁直下に入組み文が並び、空隙を短沈線で埋めている。

870・873は835に類似の浅鉢口縁部である。870では口縁直下に弧線文と入組み文がみられる。873は腰の部分に連鎖状の隆帯が巡り、上下にそれぞれ磨消文様が展開する。

874は注口土器の口縁部とみられる。口端上に鱗状突起を配し、口縁直下に円孔が穿たれる。

875～881は壺形土器とみられる。878は口縁部である。先細りしつつ内傾し、口端上に小突起が配される。中段には斜位の刻みを伴う平行沈線が巡る。

875は瓢形の胴部である。胴部中段に屈曲を持ち、ここに帯縄文が巡って文様を上下に分帯する。胴上半部には帯縄文が巡り、胴下半部には上下対向する弧線文が描かれる。

877は直線と弧線による紡錘や半円形のモチーフが交錯し、交点に鱗状の貼付文が付される。

879は「く」の字に張り出す胴部で、対向する三叉文の間に対弧状の沈線文が介在して魚眼三叉文を構成する。881は入組み文上下の余白を三叉文で埋めている。

882は波状口縁の波頂部に粘土紐を巻きつけた小突起が配される。この突起を基点として胴部に平行沈線が垂下し、左右に展開する沈線との間に三角形の区画を構成する。885は波状口縁波頂部の直下に貼瘤状の小突起を持ち、これを基点として左右に複列の列点文が展開する。

888・889は2個一組の小突起を配する水平口縁で、888は平行沈線、889は単沈線による波頭状モチーフが描かれる。891の口縁は841に類似しており、

同種の皿形土器の可能性もある。口縁下の区画内は縄文帯にはならず、横位の集合沈線によって埋められている。口端上の突起には、内面のみ縦位の集合沈線文が施文される。

892は口端上に並ぶ3個1単位の小突起を、幅広の平行弧線文によって括っており、836に類似の構成をとっている。893・894は入組み文内部を条線で埋めて、磨消縄文風の効果を生んでいる。

897は米粒状の刺突を地文として、やはり磨消風のモチーフを描いている。

898は口縁から垂下する平行沈線の両側に、左右対称の弧状モチーフを配している。地文は894と同様の条線である。901も同種の文様と考えられ、地文は矢羽根状の条線となっている。

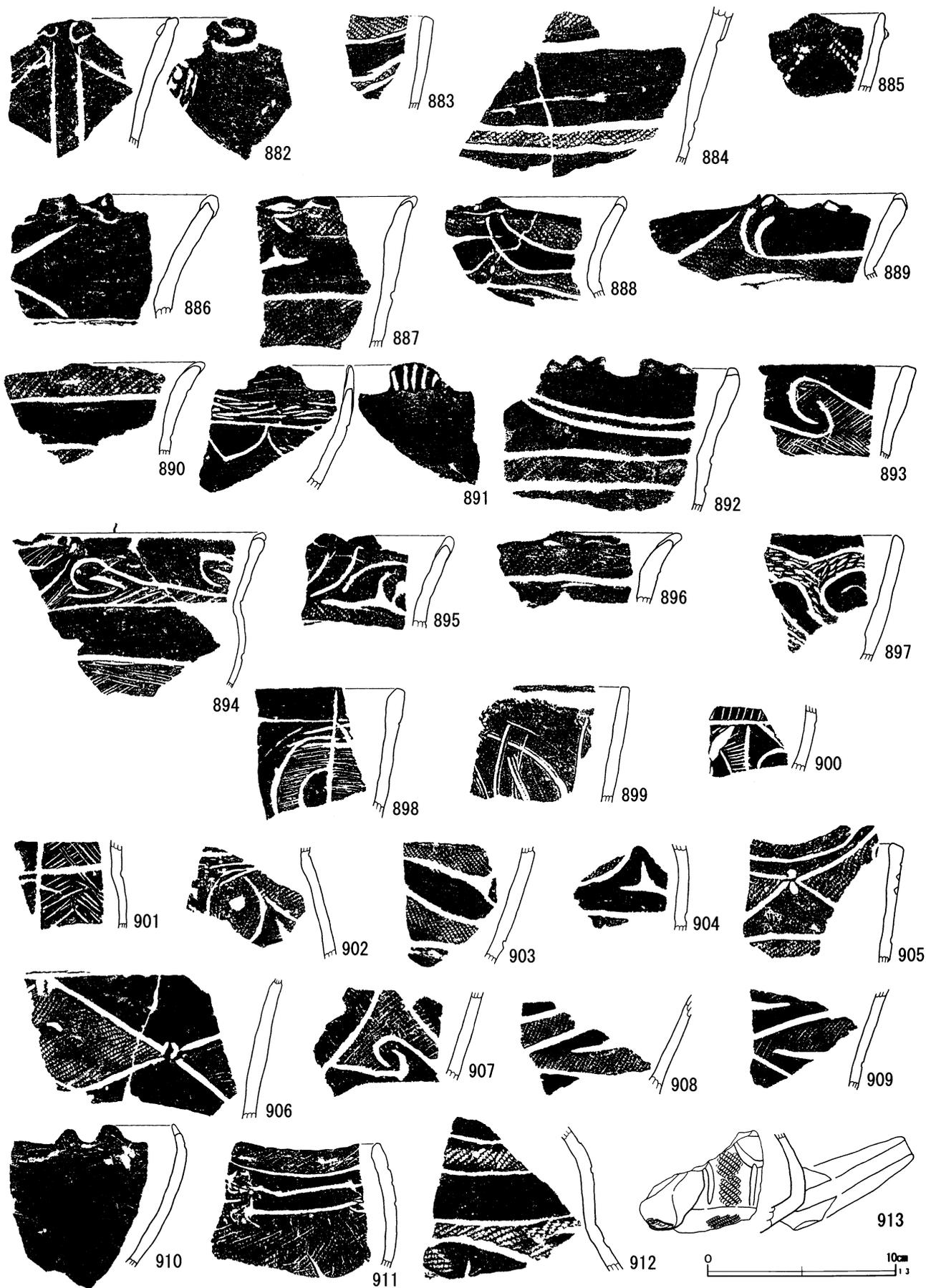
902は入組み状の弧線文の中央に盲孔を配している。

905～909は姥山Ⅱ式の深鉢である。波状口縁の波頂部直下に菱形の区画を配し、内部に入組み文や蛇行懸垂文を描いている。地文は多く縄文を用いるが、907は条線地文である。

910は無文の浅鉢とみられ、水平口縁上に2個1単位の突起が配される。

912は瓢形の壺の胴部と思われ、上段は帯縄文、下段に波頭状のモチーフが描かれる。

913は注口土器である。腰の部分が屈曲して張り出し、注口の基部下面には盲孔を持つ。



第109図 グリッド出土土器 (53)

V群B類 (第110図～116図)

第110図～115図が安行3c式、第116図が3d式段階のものと考えた。

914・915は姥山Ⅱ式の系譜を引く土器である。

914は5単位の波状口縁を成し、波頂部下に独立した菱形の区画が描かれ、中央に「の」の字状の単位文が描かれる。胴部中段には弧線文が巡って半円形の区画を構成する。

地文は米粒状の列点文が用いられる。モチーフの交点には貼付文から転化した円文が配される。

915は斜格して交錯する沈線により菱形の区画が構成され、区画中央および交点に、中央刺突を伴う円文が配される。

胴上半部の文様帯は地文を持たないが、胴部中段を巡る平行沈線間には列点文が施文される。

916は5単位の大波状口縁の深鉢である。波頂部に双頭状の突起を配し、ここを基点にして左右展開した平行沈線文が、波底部において入組み文を構成する。沈線間には地文として複列の米粒状列点文が充填される。モチーフの余白は三叉文で埋められている。

文様帯下端は、やはり複列の列点文を伴う平行沈線で区画される。胴下半部には逆U字状の沈線文が巡る。

917～921は水平口縁の深鉢である。

917は砲弾形の深鉢である。胴上半部から中段にかけて文様帯を持ち、上限は単沈線、下端は平行沈線によって区画する。

文様帯は1条の沈線によってさらに上下に分帯され、縦位の平行沈線をはさんで対置される弧線文を主文様として、間隙には背中合わせの弧線文が上下に対置される。

上下の文様帯はほぼ同一のモチーフが交互に配置される。地文は単列の列点文で、縦位の平行沈線間のみごく弱い条線が観察される。

918は胴部中段に最大径を持ち、頸部との境が「く」の字に屈曲して、そのまま口縁にかけて、軽微に外

傾しつつ直線的に立ち上がる。

屈曲部分から下の胴上半部に幅広の平行沈線が巡り、内部に米粒状の列点文が充填される。頸部には平行沈線による弧状のモチーフが描かれて、やはり米粒状の列点文が複列～三列施文される。

919は胴上半部に最大径を持ち、頸部は短く外反する。胴部中段に平行沈線を巡らせ、胴下半部に単沈線による波頭文を描く。地文はみられず、篋状工具による斜位の粗い撫で調整が観察される。

920は口縁上に複数の刻みがつけられ、部分的に小波状を呈する。胴部中段が張り出し、頸部から口縁にかけてゆるやかなS字を描いて外反する。頸部に平行沈線を巡らせ、胴上半部に平行沈線による粗雑な波頭文を描いて、文様帯下端を単沈線で区画する。地文はみられない。

921は胴張りで頸部屈曲し、口縁は内湾しつつ立ち上がる。頸部に平行沈線を巡らせ、胴上半部には平行沈線の弧線文が斜めに対向する。地文は施文されず、篋状工具の撫で調整がみられる。

922～926は台付土器である。

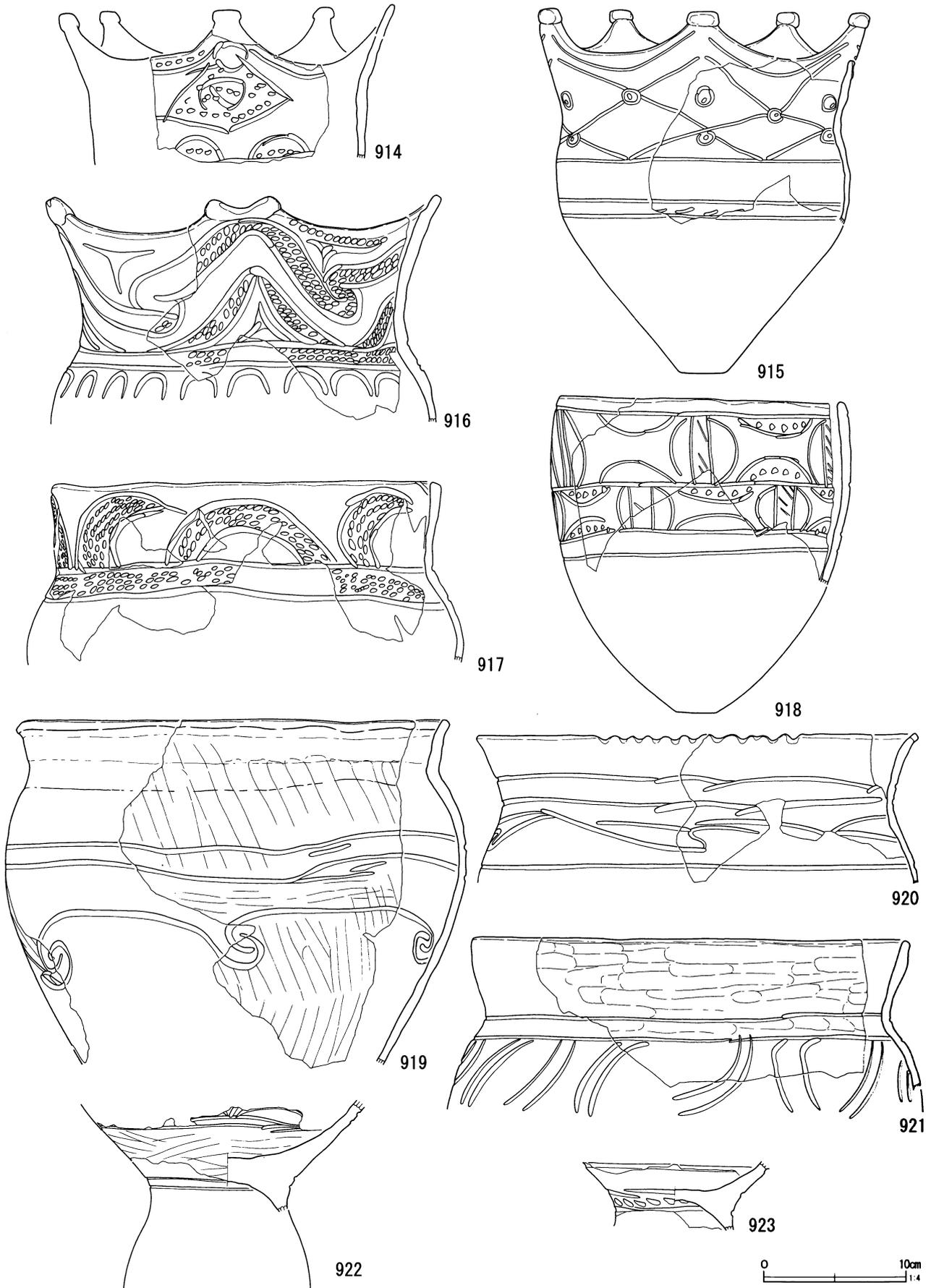
922は体部と脚台部の接合部周辺である。胴下半部に平行沈線を巡らせて文様帯下端を区画し、接合部にも平行沈線を巡らせる。地文は施文されない。923も同構成だが、平行沈線間に列点文が施文される。

924は接合部から胴上半部にかけて盃状に開く。胴部中段に横C字状のモチーフを描き、余白を入組み状の三叉文で埋める。文様帯下端は横位の平行沈線で区画する。

地文は米粒状の列点文で、単列ないし複列で施文する。胴下半部は無文で、横位の研磨が観察される。

925はボウル状に内湾する胴下半部である。胴部中段に斜位の刺突を伴う平行沈線が巡り、文様帯下端を区画するものとみられる。区画から下は無文で横位の研磨が観察され、接合部には粘土の圧着に伴う縦位の撫で調整がみられる。

926は中段が樽状に膨れる脚台である。中央に貫



第110図 グリッド出土土器 (54)

通孔を伴う円文が3単位配される。裾部は直上で屈曲して短く「ハ」の字状に開き、列点文を伴う平行沈線が巡る。

927は小形の広口壺である。胴部中段が「く」の字に張り出し、頸部は屈曲して口縁がほぼ垂直に立ち上がる。

頸部に平行沈線を巡らせ、内部には円形の刺突と短沈線を交互に施文する。胴上半部には入組み文と対向三叉文の複合モチーフを描く。

929は異形の皿形土器で、前段階841の系譜に連なるものであろう。

平面形は隅丸五角形を呈し、うち一つの頂点が長く張り出している。丸底で、緩やかな波状口縁を成

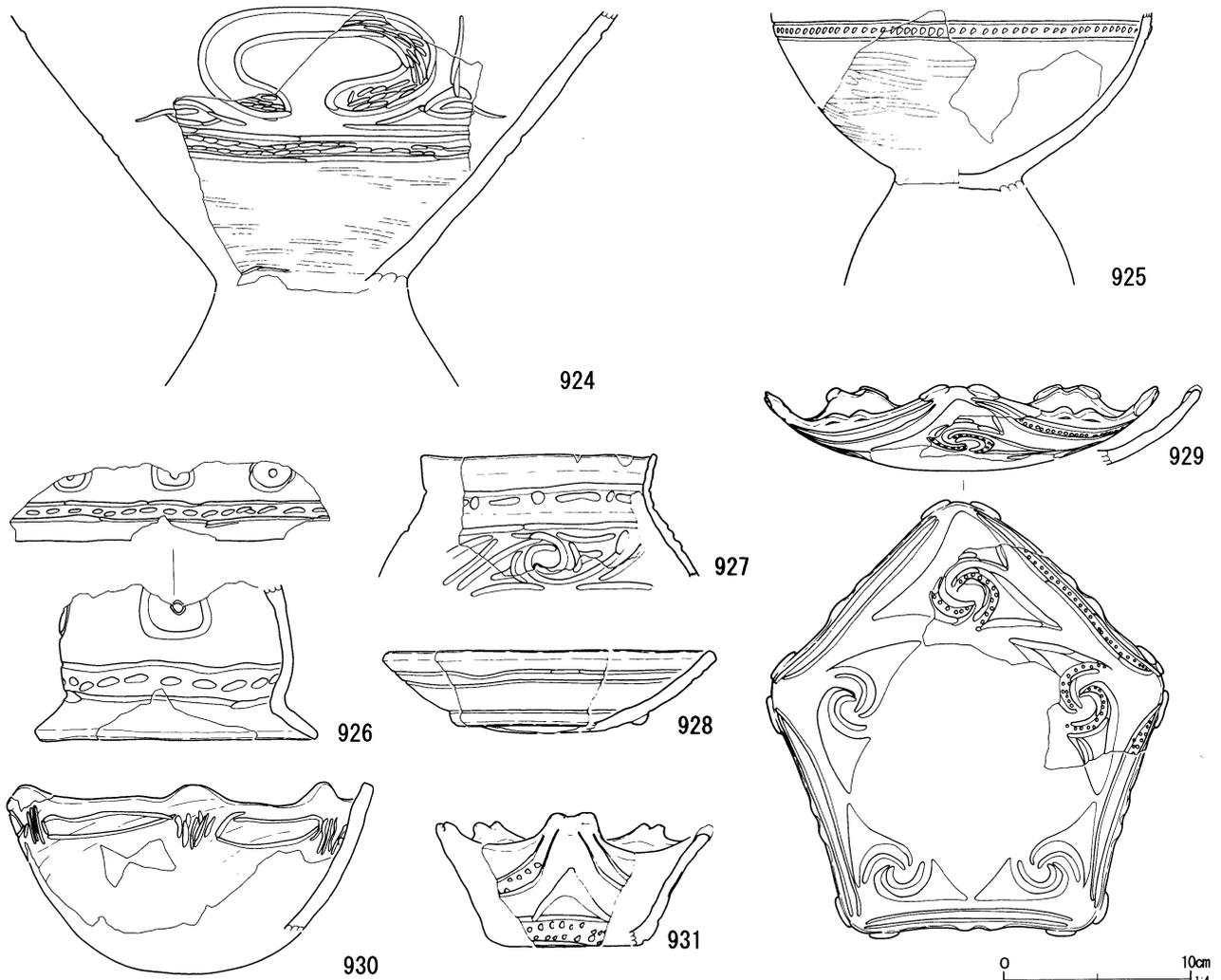
す。波頂部および波底部には2個1単位の貼付文を配する。

波頂部を除く口縁直下には平行沈線が巡り、内部に円形竹管状工具による列点文が施文される。

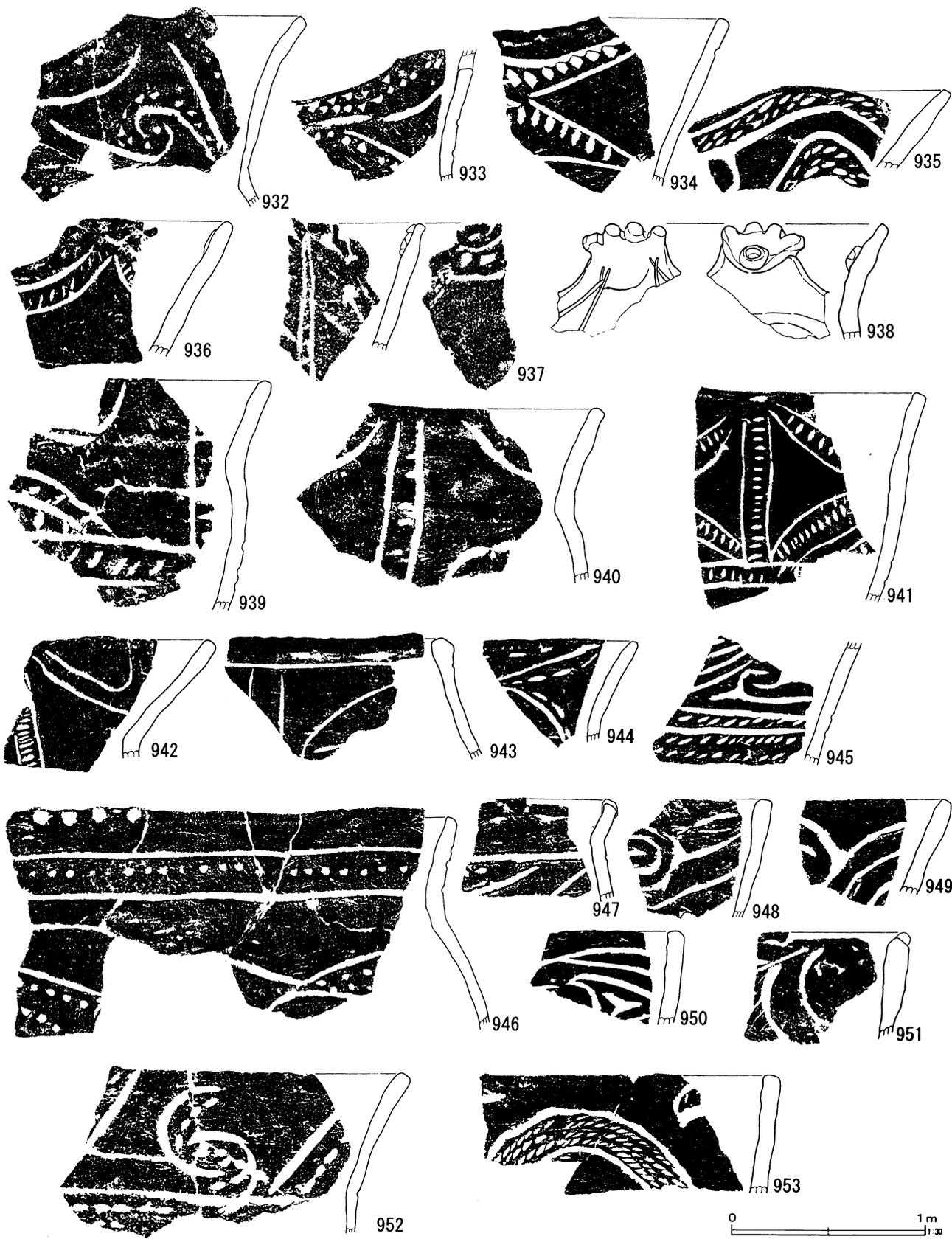
五角形の各頂点の下には入組み状の沈線文と三角陰刻文を組み合わせた入組み三叉文風のモチーフが配される。沈線と陰刻文の間には列点文が施文される。

第112図以降は破片資料である。

932～936は波状口縁深鉢で、姥山Ⅱ式的な文様を描くものである。波状口縁の波頂部を中心として菱形の区画を構成し、中央に入組み文を配する。地文は棒状工具による斜位の刺突文で、モチーフに沿



第111図 グリッド出土土器 (55)



第112図 グリッド出土土器 (56)

って充填される。

932の波頂部はやや中央の下がった台形で、双頭状の突起からの変移と考えられる。936は富士山形の波頂部の両側に小突起を伴っている。

937は波状口縁の波頂部内側に粘土紐が巻きつけられ、列点文が施文される。表側は波頂部から頸部へと刻みを伴う平行沈線が垂下する。

938は波頂部に扇状の突起が配され、先端が刻まれて4個の小突起を形成する。内面には盲孔を伴うボタン状の貼付文が付される。

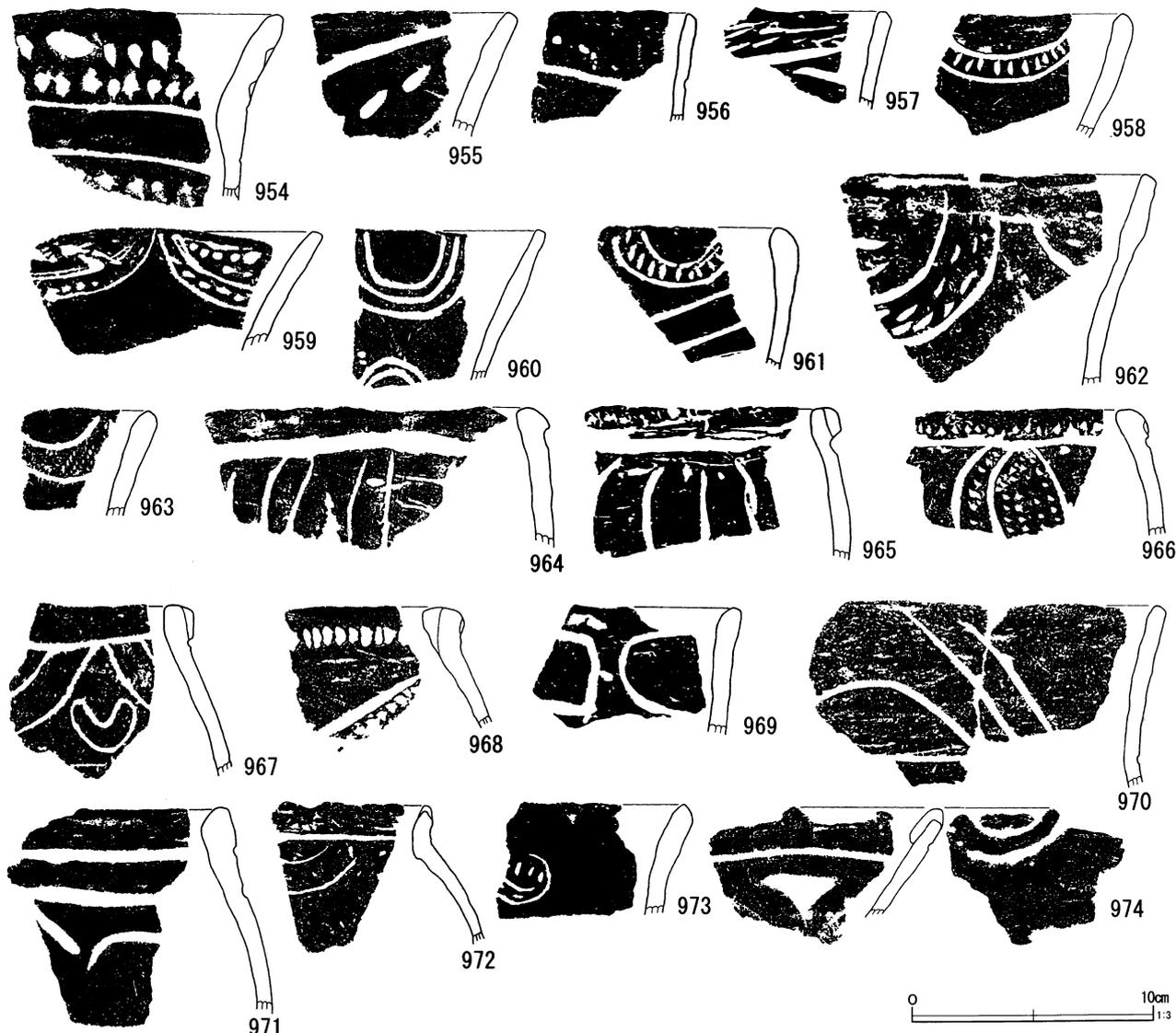
939～969は頸部外反する水平口縁の深鉢である。939～942は口縁から頸部に平行沈線が垂下し、左右に上下対向する平行沈線文が配される。文様帯下

端は平行沈線によって区画される。平行沈線間には地文として米粒状の列点文が施文される。

943は口縁直下に1条の沈線が巡り、頸部に平行沈線が垂下して、左右に単独の弧線文が配される。

944は上下対向する弧線文の一部で、右方に菱形の区画を形成するかもしれない。

946は口端に4個1単位の刻みを持ち、頸部に斜位の刺突を伴う平行沈線が巡る。胴上半部には平行沈線による紡錘状のモチーフが描かれ、列点文が充填される。948・949は単沈線により入組み三叉文が描かれる。952は口縁下に斜位の平行沈線を配して平行四辺形の区画を形成し、中央に入組み文を配する。頸部には2条の列点文を伴う平行沈線が巡っ



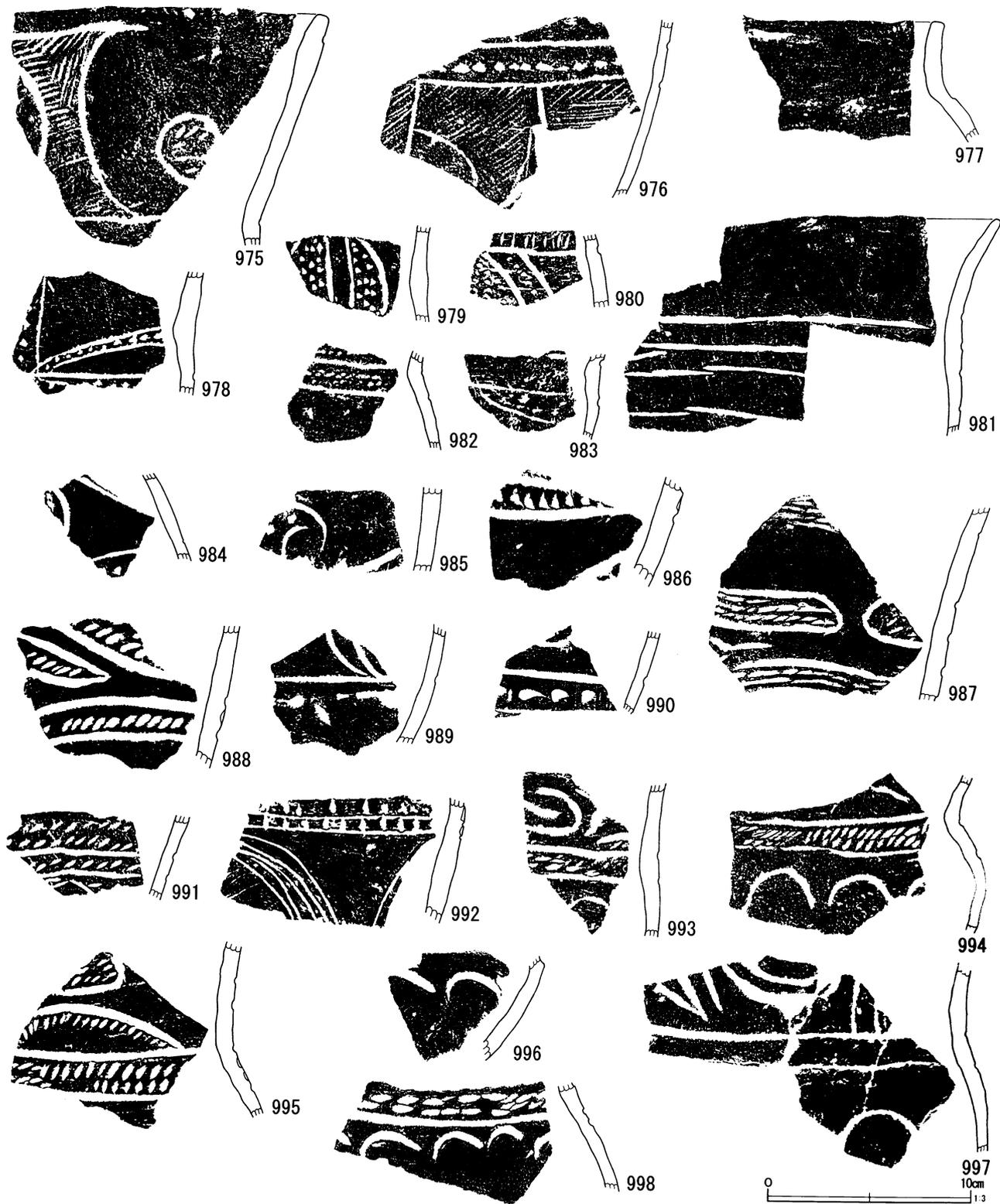
第113図 グリッド出土土器 (57)

て、文様帯下端を区画する。

953は924に類似の横C字形モチーフと考えられる。958・959は口縁直下に平行沈線の弧状モチーフが巡って半円形の区画を形成し、列点文が充填される。960は三本沈線による弧状モチーフである。

962は半円形区画内部になんらかの独立文様が配される。963は平行沈線間に縄文が施文されている。

964～968は砲弾形深鉢である。胴上半部に最大径を持ち、口唇が著しく肥厚して、口縁直下に凹線を伴う段を持つ。口縁直下から胴上半部にかけて文



第114図 グリッド出土土器 (58)

様帯を持つ。

964・965 は段の下に縦位の弧状モチーフを配する。966 は対向する弧状モチーフにより紡錘形の区画を形成し、内部に三角形の刺突を充填する。

967 は凹線の下に横位の弧状モチーフを巡らせ、隙間にU字文を充填して、下端を沈線で閉塞する。

968 は口縁下に棒状工具先端による斜位の刺突列が巡り、胴上半部には刺突列を伴う平行沈線の弧線モチーフが描かれる。

971・972 も砲弾形の深鉢であるが、口唇は肥厚せず、また、口縁直下に圧縮された文様帯を持つ。

971 は口縁下に2条の沈線が巡り、単沈線の逆U字モチーフが巡る。972 は胴張りで短い口縁が直立する甕風の器形である。小波状口縁で頸部に1条の沈線が巡り、平行沈線による弧状モチーフが巡って半円形の区画を描く。

974 は浅鉢の可能性もある。水平口縁上に、粘土紐を巻きつけた小突起を配している。口縁下に1条の沈線を巡らせ、三角形の陰刻文を描いている。

975 は水平口縁の深鉢で、頸部が「く」の字に屈曲して、口縁直行しつつ外反する。口縁に同心円状の文様を描き、中央に米粒状の列点文を充填する。

口縁下に1条の沈線が巡って、モチーフの外形線と融合しており、文様のネガ部分には矢羽根状の条線が充填される。

977 は胴張りで、頸部が直立する無文の口縁部である。981 は先細りしつつゆるやかに外反する口縁部で、胴上半部には4条の平行沈線が巡り、920 類似の波頭文を描くものとみられる。

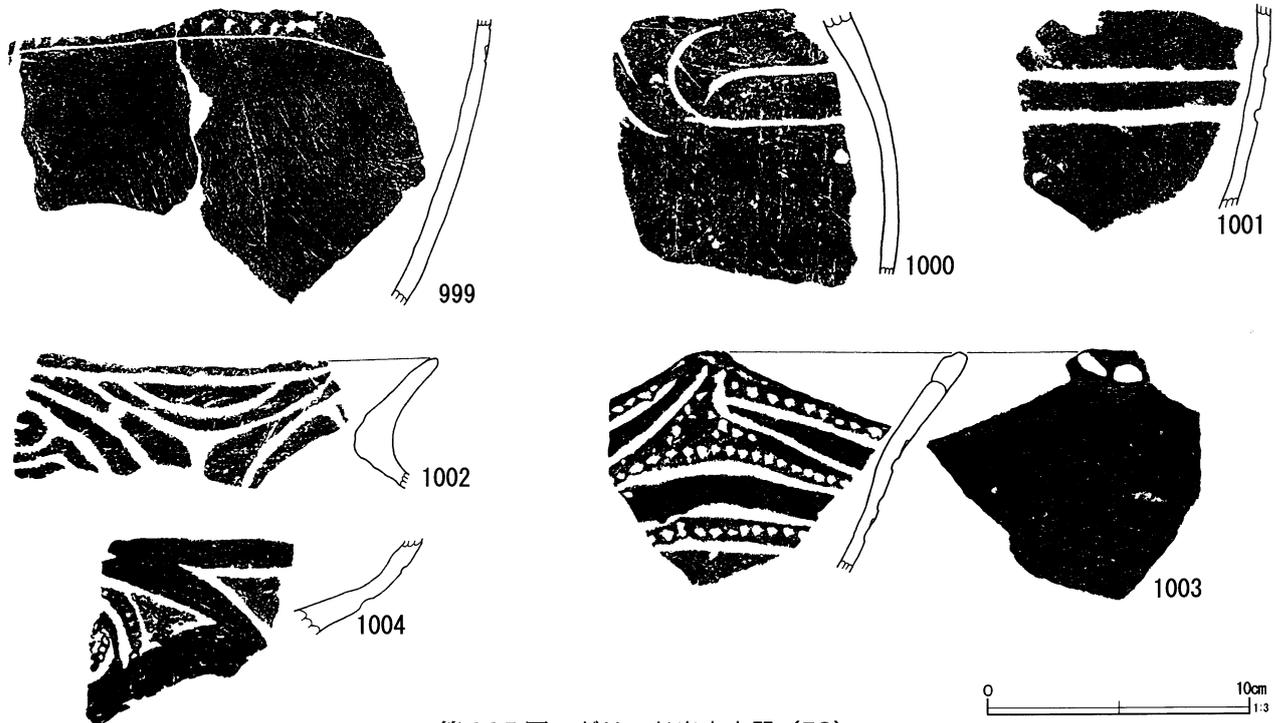
976 は胴張りの深鉢である。モチーフ的には917 に類似し、縦位の平行沈線によって分割された対弧状のモチーフが上下二段に描かれるものと思われる。地文は細密な条線である。上下の文様帯は列点文を伴う平行沈線によって分帯される。

978～980・982～1001 は深鉢胴部である。

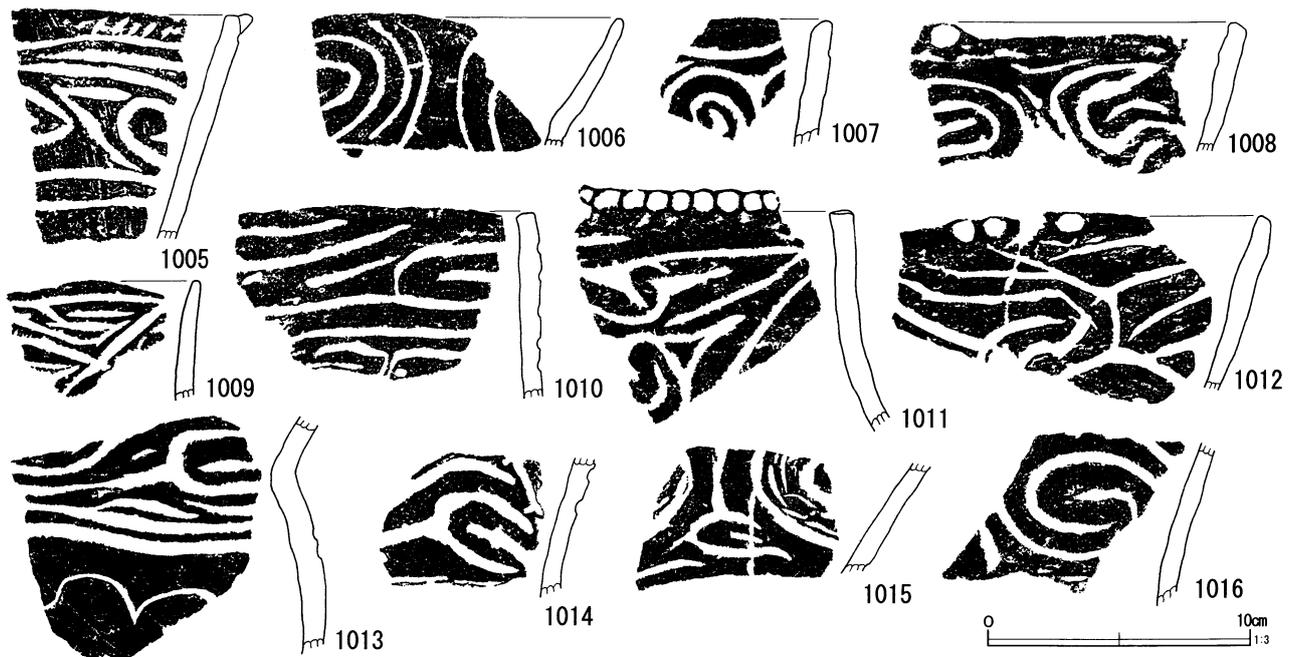
979 は縦位の区画と上下に対向する対弧モチーフで、939 等に共通の文様であろう。

979・980 は縦位の平行沈線に分割される対弧状モチーフで、内部に三角形の刺突が充填される。984・985 は菱形の区画中央に入組み文が描かれ、914・932 等に類似する。

987 は924 に類似の横C字モチーフの一部と考えられる。余白に入組み三叉文が充填される点も共通しており、同一個体の可能性もある。



第115図 グリッド出土土器 (59)



第116図 グリッド出土土器 (60)

988～990は文様帯下端を区画する平行沈線で、内部に列点文を伴っている。991・993～997は同様の区画帯で、下部に単沈線の逆U字モチーフが巡る。997は列点文を伴わない平行沈線の区画帯である。

992は刻みを伴う2段の平行沈線で文様帯を上下分帯し、集合沈線によって波状文が描かれて、内部に細密な条線が充填される。

999は砲弾形深鉢の胴部と考えられる。三角形の刺突列を伴う平行沈線で文様帯下端を区画し、胴下半部には鋭利な工具による弧状の集合沈線がごく浅く施文される。

1002は極端な「く」の字に屈曲して外反する頸部～口縁部で、屈曲部分の器厚が極端に増している。文様は単沈線の弧線文と三叉文が複合しており、比較的新しい様相を呈している。

1003は浅鉢と考えられる。山形波状口縁の波頂部に粘土紐を巻きつけた小突起を配している。

口縁下に斜位の刺突列と1条の沈線が巡る。胴上半部が文様帯となり、波状口縁波頂部を頂点とする三角形の区画が描かれる。

胴部中段には刺突列を伴う平行沈線が巡って、文

様帯の下端を区画している。

1004は929に類似し、同一個体の可能性もある。丸底の皿と考えられ、単沈線の入組み文と三角陰刻文が複合して入組み三叉文風の文様が描かれる。沈線と陰刻文の間隙には円形竹管状工具による刺突列が施文される。

1005以下は幅広の沈線による入組み三叉文が特徴的にみられるもので、大半が安行3d式に比定される。

1005は口縁外反して直行し、口端が外屈する。口縁直下に斜位の列点文が巡る。胴上半部に入組み三叉文を描き、上下を平行沈線で区画する。

1006は口縁部直下に文様帯を持つ。平行沈線による重圏モチーフを描き、下端を沈線で区画する。

1008は口端上に指頭圧痕を伴う単独の突起が配される。1011は広口壺形の器形で口端上に指頭圧痕が巡り、1012は4個1単位の指頭圧痕が配される。

1009は斜め交差する沈線により菱形の区画が描かれ、内部に入組み三叉文が描かれる。

1013は文様帯下端を1条の沈線で区画し、胴下半部には逆U字の沈線モチーフが巡る。

V群C類 (127 図・128 図 1202～1204)

主として大洞系の土器が出土している。半肉彫風の磨消文様に特徴がある。

1183 は浅鉢の口縁部とみられる。口縁直下に刻みを伴う平行沈線が巡り、胴部にはK字状の磨消モチーフが描かれる。口縁内面に1条の沈線が巡る。

1184 も浅鉢で、口縁を欠いている。丸底で、胴部中段に強い括れを持つ。胴上半部に扁平なX字状の磨消モチーフを描き、上下に刻みを伴う平行沈線で区画する。胴下半部には横位の縄文が施文される。

1185 は椀形の浅鉢である。水平口縁上に所謂B突起を配する。胴部には雲形文が描かれ、無文部は肉彫風に刻まれて、入念な研磨が施される。

1186 も浅鉢と考えられる。底面が円形に掘り窪められて、胴部との間に段を形成する。

胴部中段が「く」の字に張り出し、2条の平行沈線が巡って文様帯下端を区画する。区画の直上にはモチーフの余白を埋める羊歯状文の一部をみることができる。

1187 も浅鉢である。扁平で、胴が丸く張り出し、口縁が括れて、口縁が外反して直線的に開く金魚鉢風の器形である。

胴部は縄文地文で、単沈線の入組み文に剣先状のモチーフが組み合わされる。余白には小波頭状のネガ文様が配される。文様帯の上弦は頸部の括れ部分で、単沈線によって区画される。口縁部は無文である。

1188 は壺形土器の胴部である。胴部中段に帯縄文が巡り、ここから上が文様帯となっており、S字状の磨消モチーフが並ぶ。文様帯の下端は帯縄文に乗り上げて融合している。胴下半部は無文で、横位の研磨が観察される。

1189 は異形台付土器の体部ないし台付土器の脚台の一部と考えられる。

中段のソロバン玉状に張り出す部分に羊歯状文が巡り、部分的に円形の透かしが配される。

遮光器土偶の頭部に似た造りであるが、顔面の表

現がないため、土器の一部と判断した。内面には輪積み痕が残される。

1190 は深鉢である。水平口縁で、胴下半部から口縁にかけて単調に内湾しつつ立ち上がる。

口唇直下に指頭圧痕を伴う隆帯が巡り、胴上半部に平行沈線が巡らせた後に、篋状工具先端を用いた縦位の刺突が施される。縄文は施文されない。

1202～1204 は破片資料である。

1202 は1187 類似の浅鉢と考えられる。緩やかな波状口縁で、波頂部に2個1単位の小突起が配される。折り返し口縁上に縄文が施文され、頸部に無文帯を持つ。

1203 は注口土器ないし浅鉢の口縁部であろう。

水平口縁上にいわゆる「B突起」がみられる。頸部に1条の沈線が巡り、円形の貼付文が配される。胴上半部に文様帯を持ち、モチーフの間隙を埋める羊歯状文がみられる。

1204 は注口土器の肩部であろう。平行沈線間にクランク状の肉彫文様が描かれ、上端に羊歯状文がみられる。内面に輪積み痕と、篋状工具による粗い調整痕を残している。

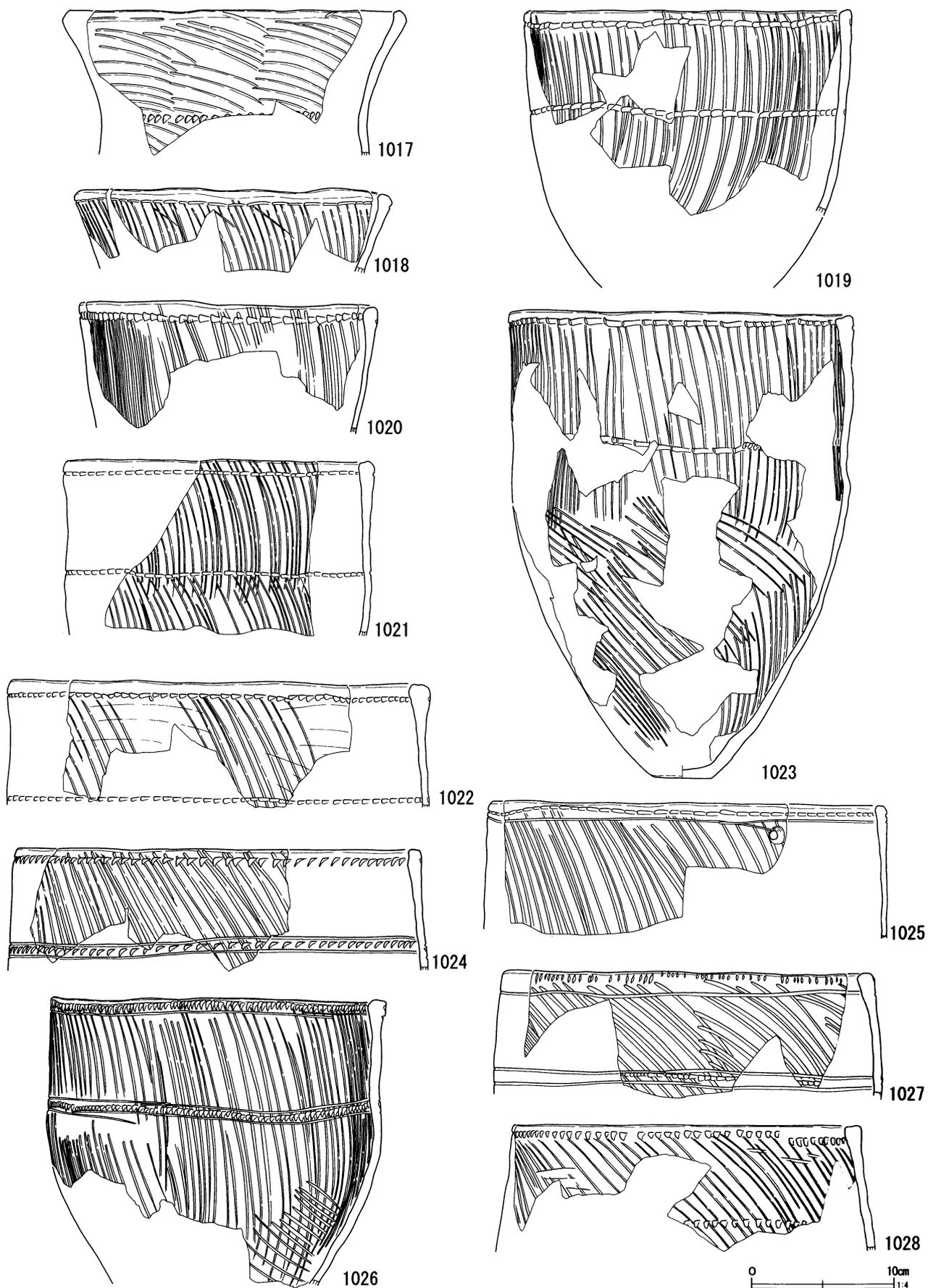
VI群 (第117 図～126 図)

1017 は胴部中段が括れて、口縁が強く外反する。括れ部分に棒状工具先端の斜位の刺突が巡り、地文は斜位の集合沈線である。加曾利B式期の半粗製土器の伝統を強く残した土器といえる。

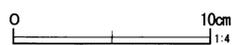
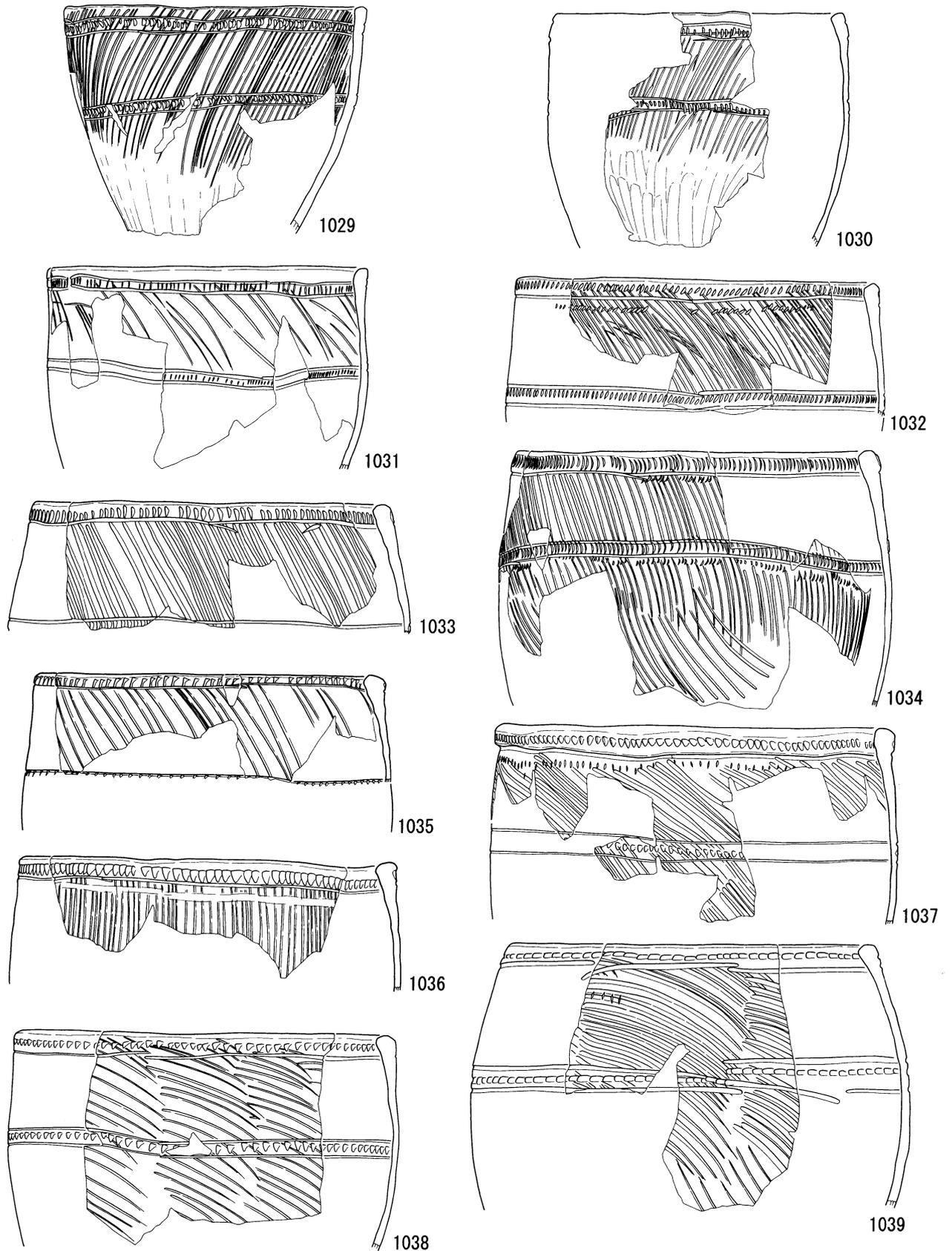
1018～1023 は口縁直下と胴部中段に押し引き状の列点文による区画が巡り、縦位の条線を地文とする砲弾形の深鉢である。1022 を別にすれば口唇の肥厚は弱く、口縁はやや外反するか直立するものが多い。1023 では地文の集合沈線が胴下半部で斜位の施文となっているが、列点文を境に明確な使い分けはなされていない。

1028 はこれに類似するが、区画は棒状工具先端による斜位の刺突列となり、口縁は肥厚して内湾している。

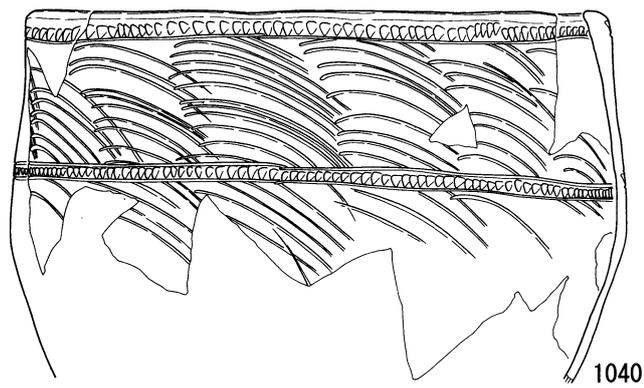
1024 は区画が篋状工具先端を用いた斜位の刺突



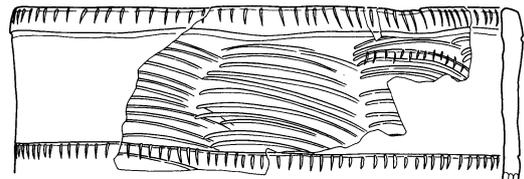
第117図 グリッド出土土器 (61)



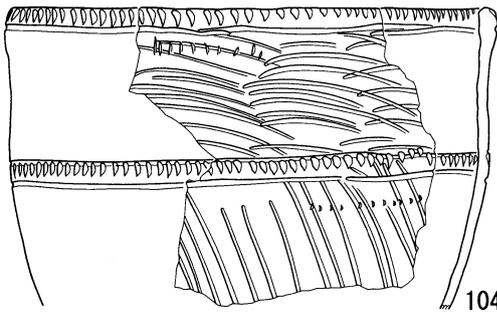
第118図 グリッド出土土器 (62)



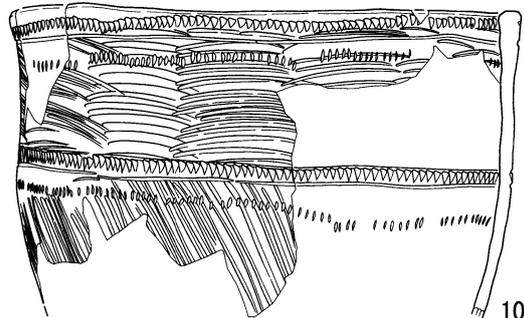
1040



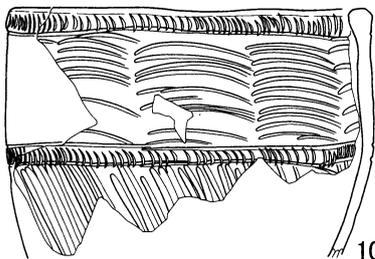
1041



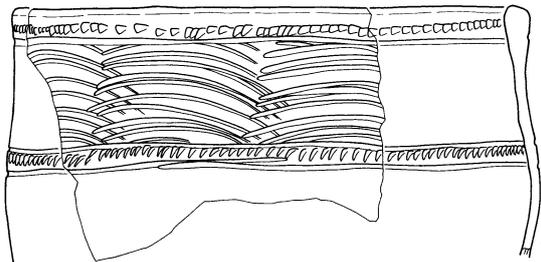
1043



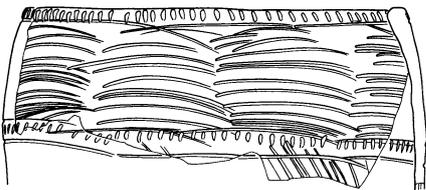
1042



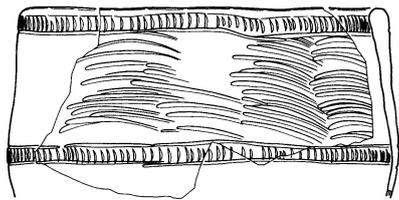
1044



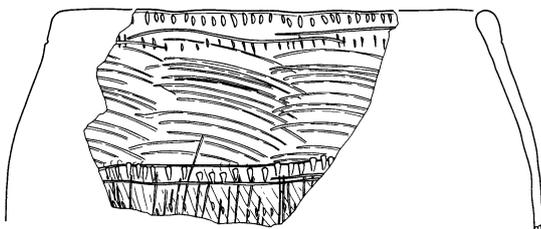
1045



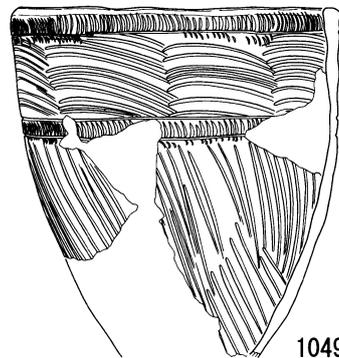
1046



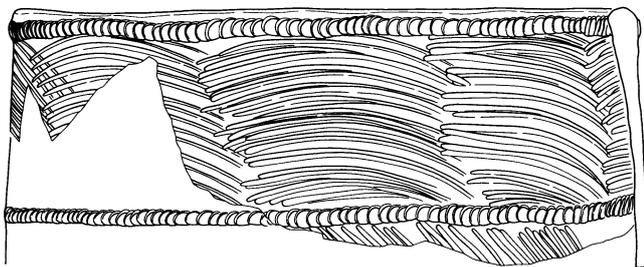
1047



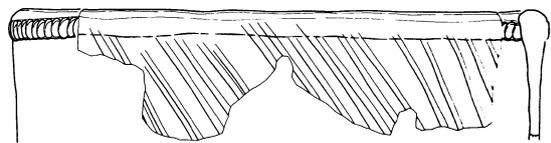
1048



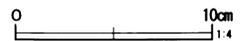
1049



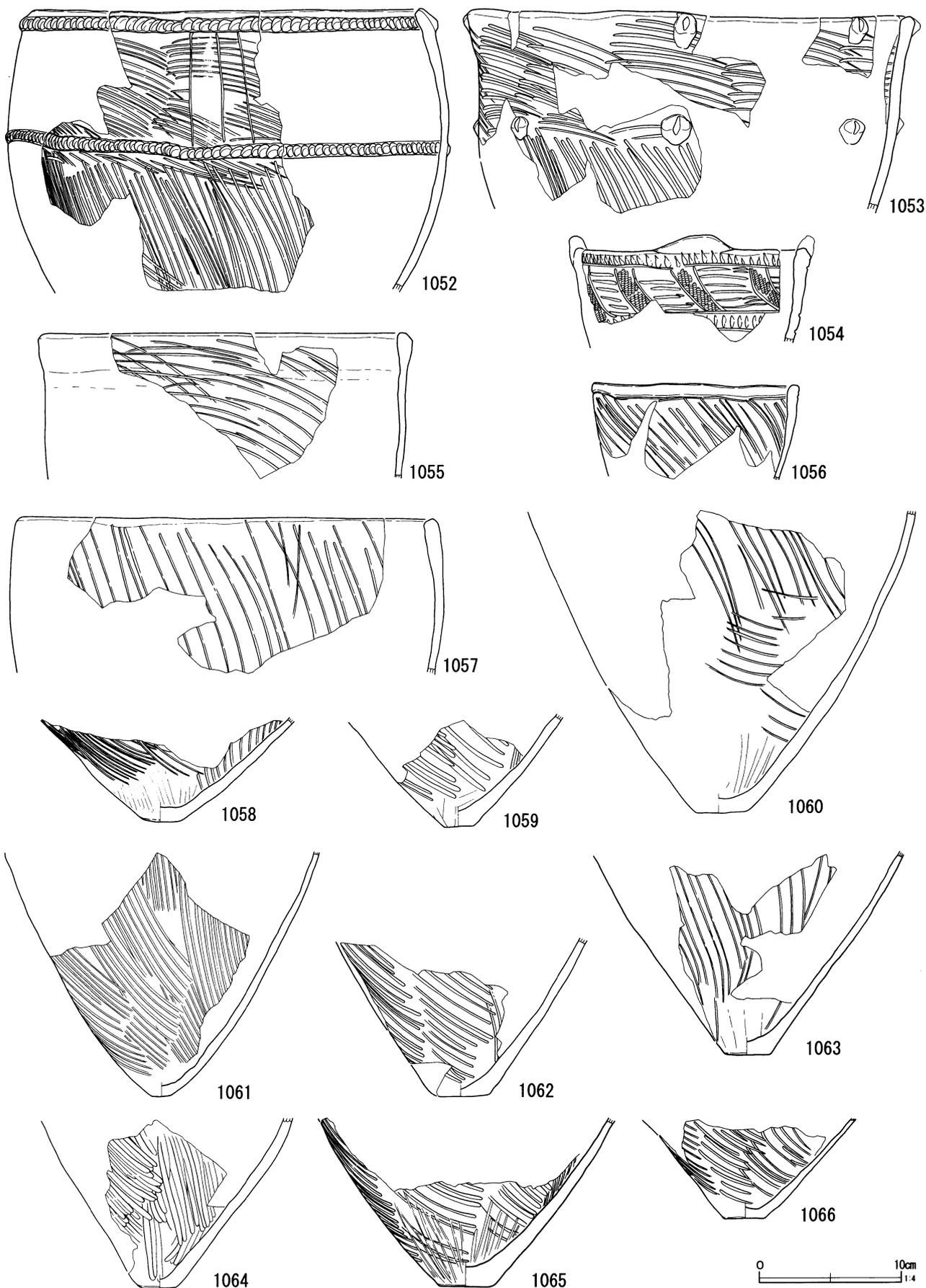
1050



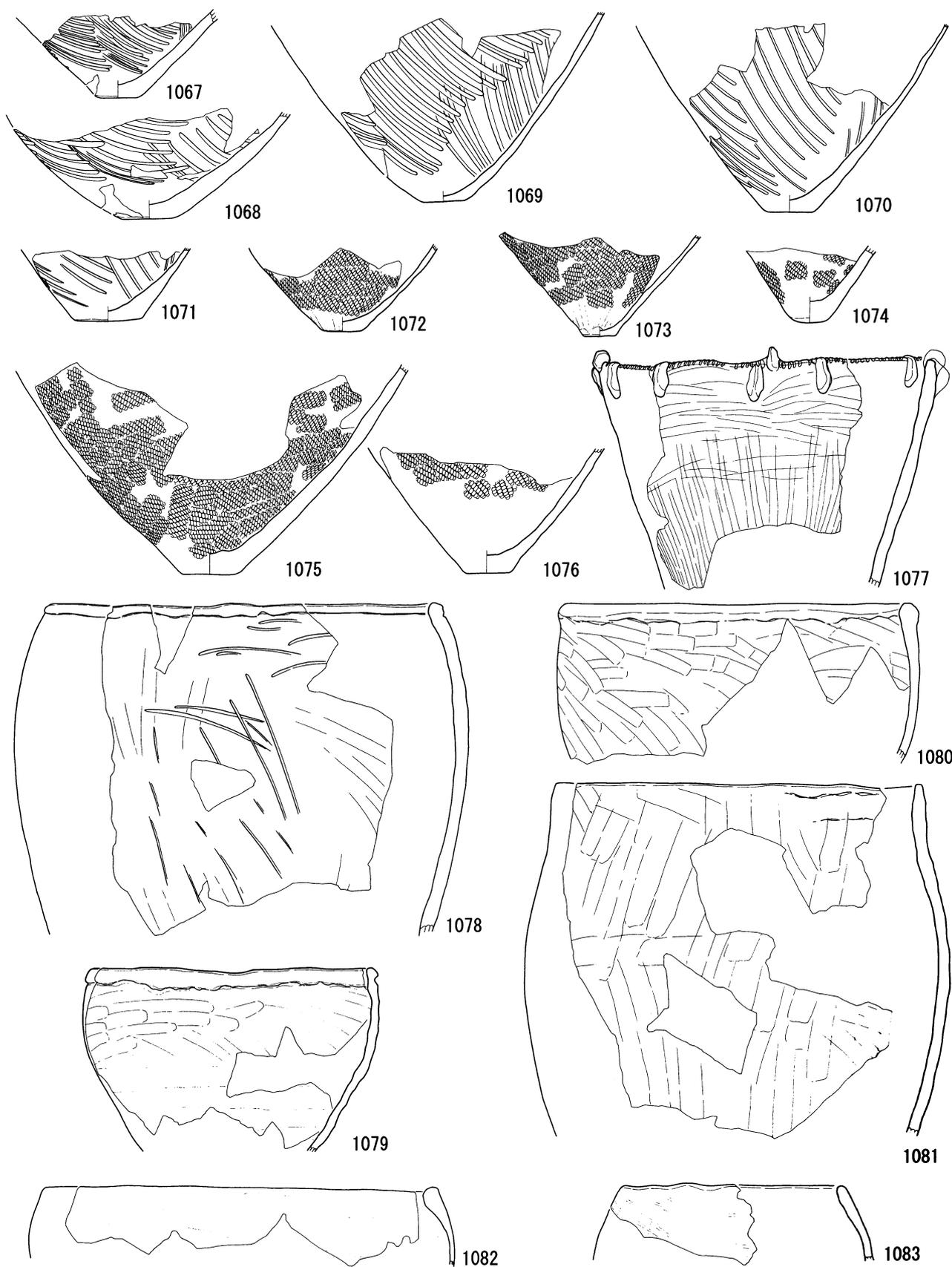
1051



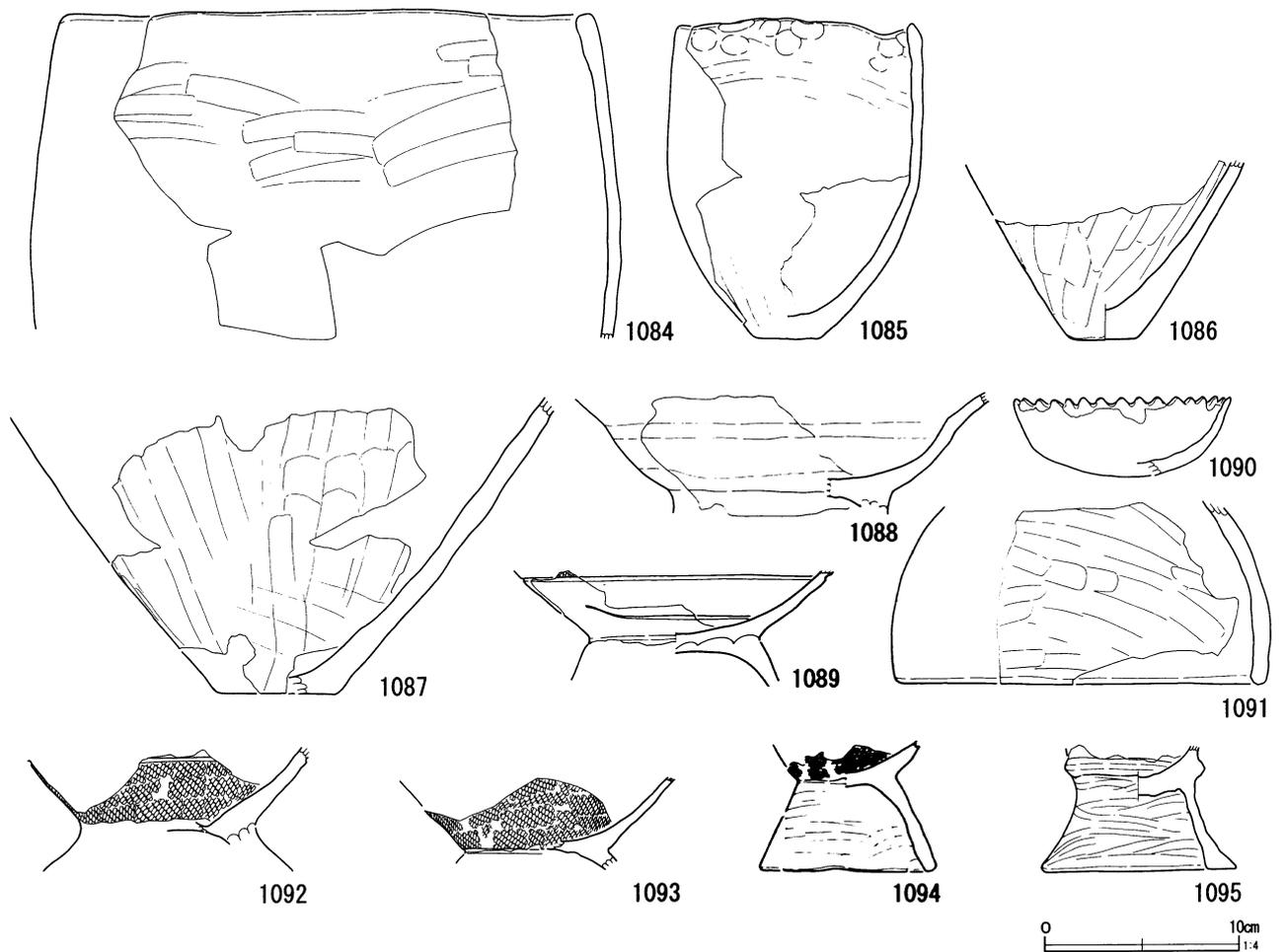
第119図 グリッド出土土器 (63)



第120図 グリッド出土土器 (64)



第121図 グリッド出土土器 (65)



第122図 グリッド出土土器 (66)

列へと変化しており、また、胴部中段の刺突列は上下に平行沈線を伴っている。

1025～1027は口縁直下の区画の下方に単沈線、胴部中段の区画の上下に一对の平行沈線が伴っている。1027では、口縁下の区画は縦位の刻み、胴部中段の区画は押し引き状の列点文と使い分けられている。

1029～1031は口縁下・胴部中段とも、区画の上下に一对の平行沈線を伴っている。また、地文が胴上半部に集約され、胴下半部では縦位の粗い撫で調整が施される。

1033～1041は口唇がいちじるしく肥厚し、最大径を胴部中段に持つ典型的な砲弾形の器形を完成させている。地文は縦位ないし斜位の集合沈線で、部位による使い分けは明確には行われていない。

1042～1049は胴部中段の区画を境に地文である集合沈線文の施文方向を明確に使い分けている。胴上半部には横位、胴下半部は縦位ないし斜位の施文

となっており、1045では胴下半部が無文化している。

刺突列や刻みなどの区画の上下両方ないし下方のみに沈線を伴い、さらには1041～1043のように沈線の外側にも縦位の刻み列を巡らせる。

1050は区画部分に粘土紐を貼り付けた上から、篋状工具によるひだ状の押圧を施している。地文の集合沈線は、やはり胴部中段の区画をはさんで集合沈線の施文方向を変えている。

1051も同様の隆帯区画を持っていたものとみられるが、すべて剥落して痕跡のみ残している。

1052は同様の隆帯区画で、胴上半部の区画に縦位で3本一組の平行沈線を配している。沈線間の地文が部分的に磨消されている。

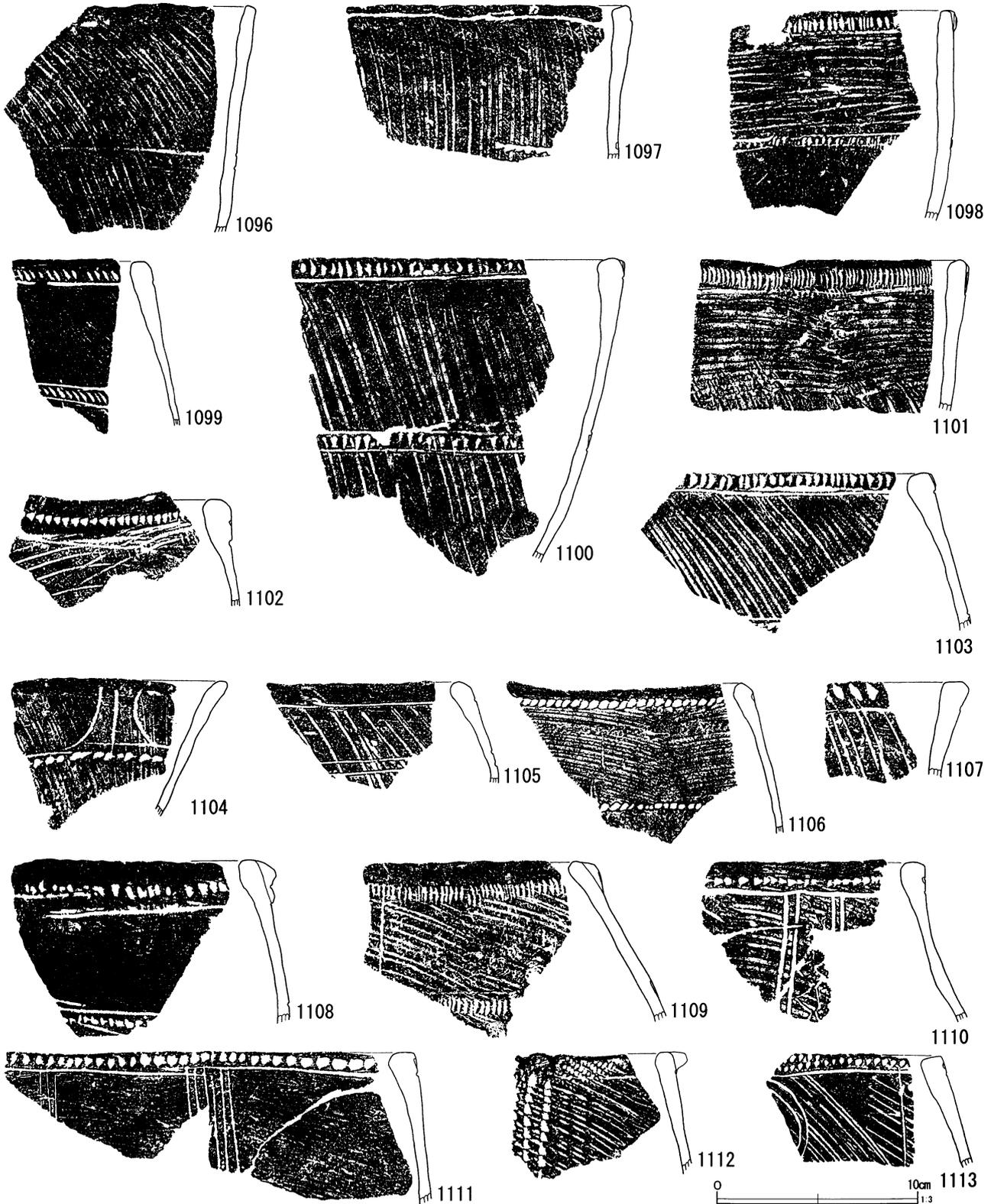
1053は口縁部・胴部中段とも区画を設けず、ただ集合沈線の施文方向を使い分けることで文様帯の意識を表している。また、本来区画の存在する部分に、篋状工具先端による縦位の押圧を伴うボタン状

の貼り付け文を8単位配している。

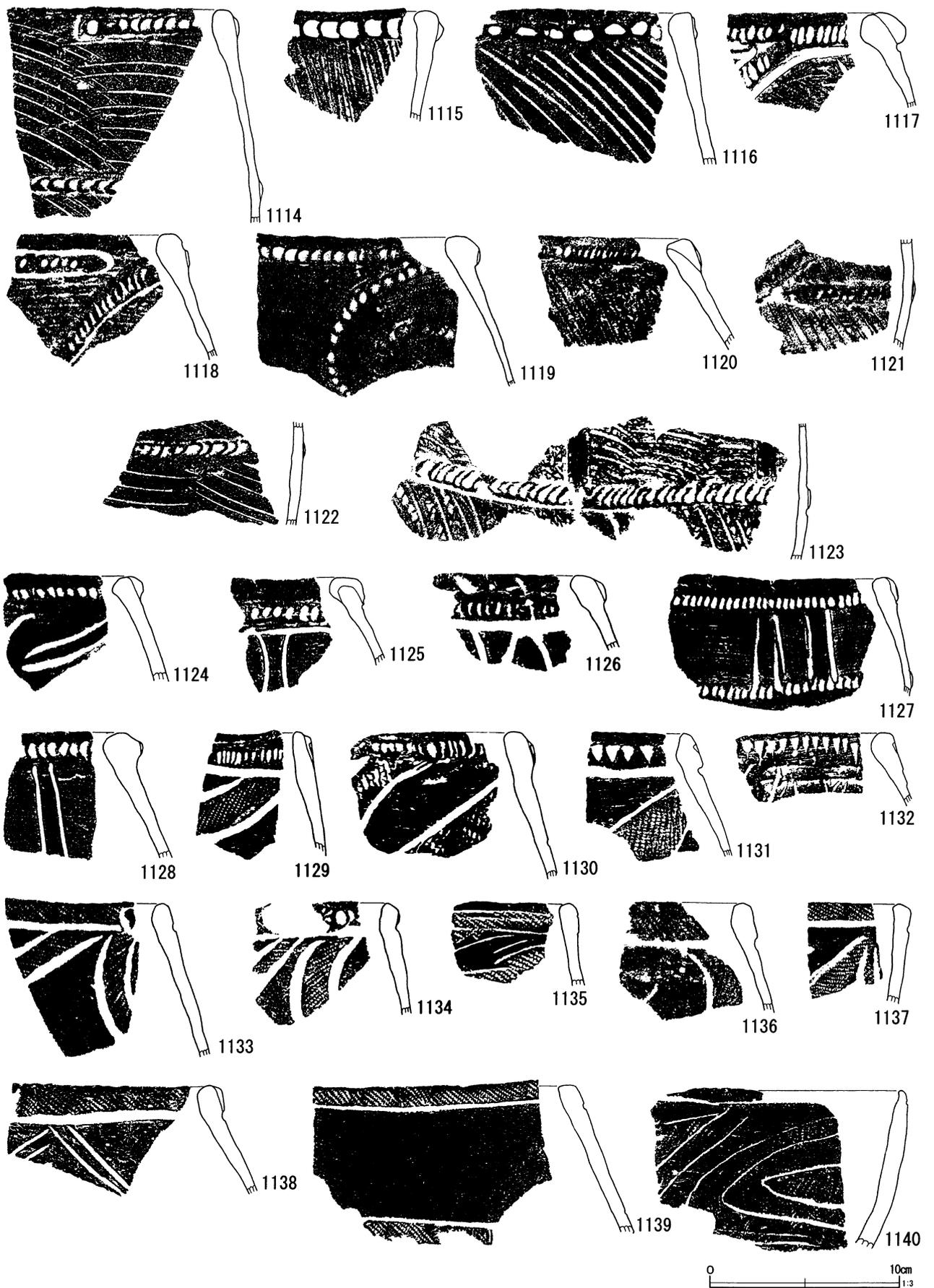
1054は小形の砲弾形深鉢である。水平口縁上に山形の小突起を4単位配する。口縁下および胴部中段には沈線を伴う縦位の刻みを巡らせている。胴上半部の区画内には斜位の平行沈線を配し、沈線間に

は充填状文、地の部分には横位の集合沈線を施文している。

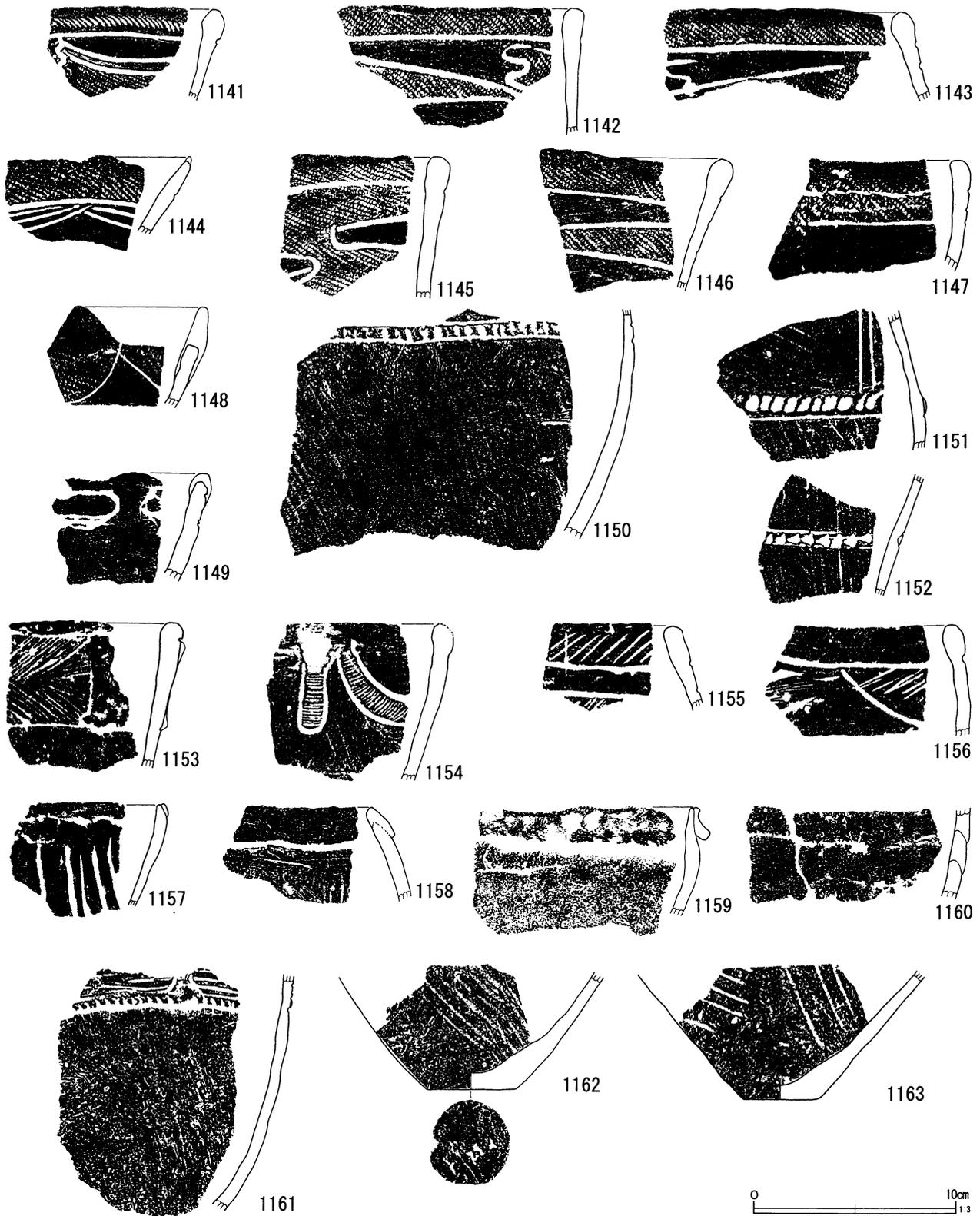
1055～1057は区画を持たず、集合沈線のみ施文される土器である。1056は口縁下のみ粗雑な単沈線を巡らせる。



第123図 グリッド出土土器 (67)



第124図 グリッド出土土器 (68)



第125図 グリッド出土土器 (69)

1058～1071は集合沈線の施文される底部～胴下半部である。集合沈線は斜位ないし縦位に施文され、部位によって何段階かに施文方向を変えているものも存在する。

1072～1076は地文縄文の底部～胴下半部で、曾谷～安行式の精製深鉢に伴うものと考えられる。1077は無文の深鉢である。口縁肥厚せず、胴下半部から口縁部にかけて直線的に開き、口端が僅かに

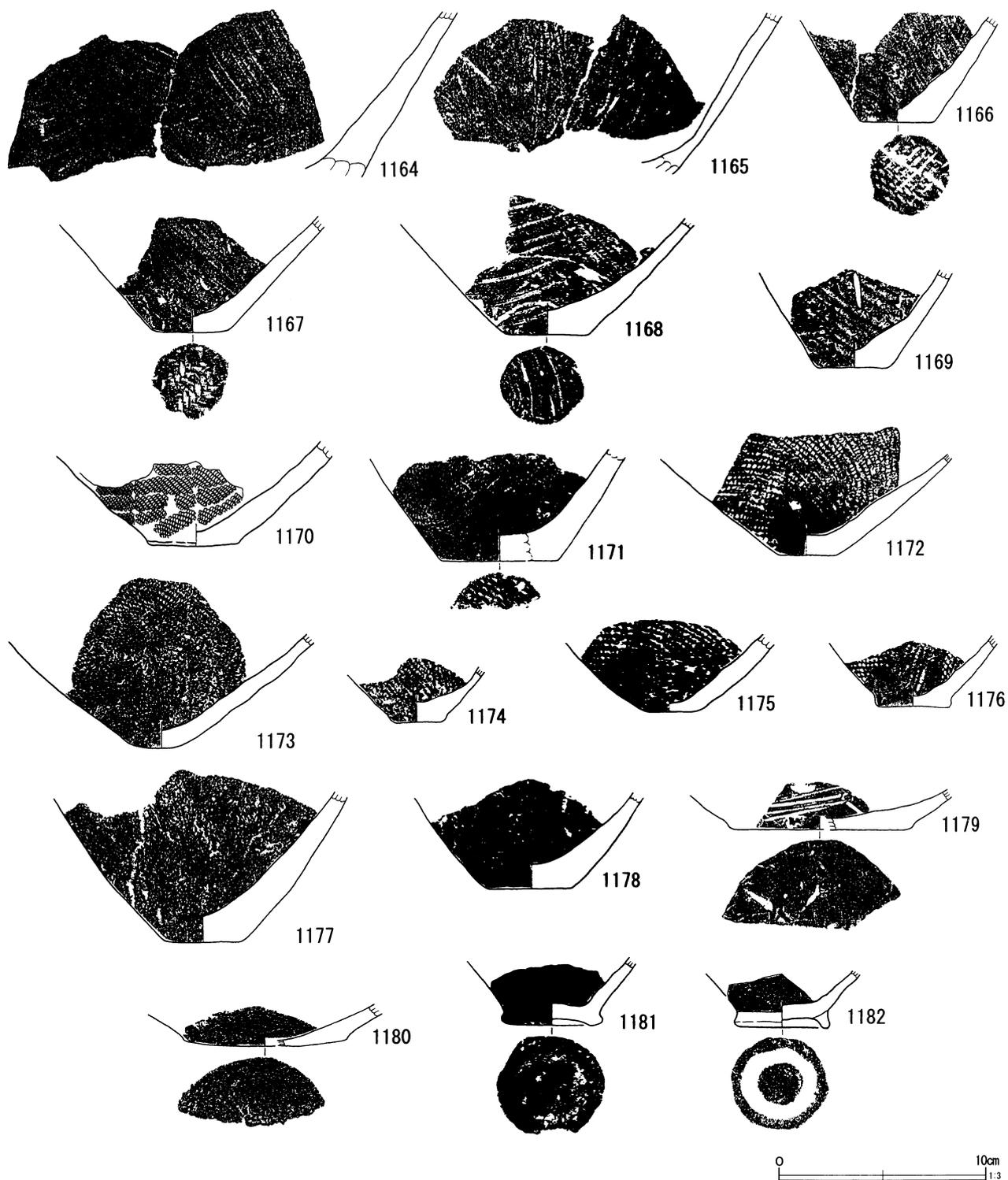
内湾する。

口端上に刻みが巡り、円盤状の小突起を配する。また、口縁直下に縦長の貼り付け文が配される。胴上半部では横位、胴部中段以下では縦位の研磨が観察される。

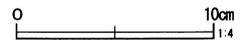
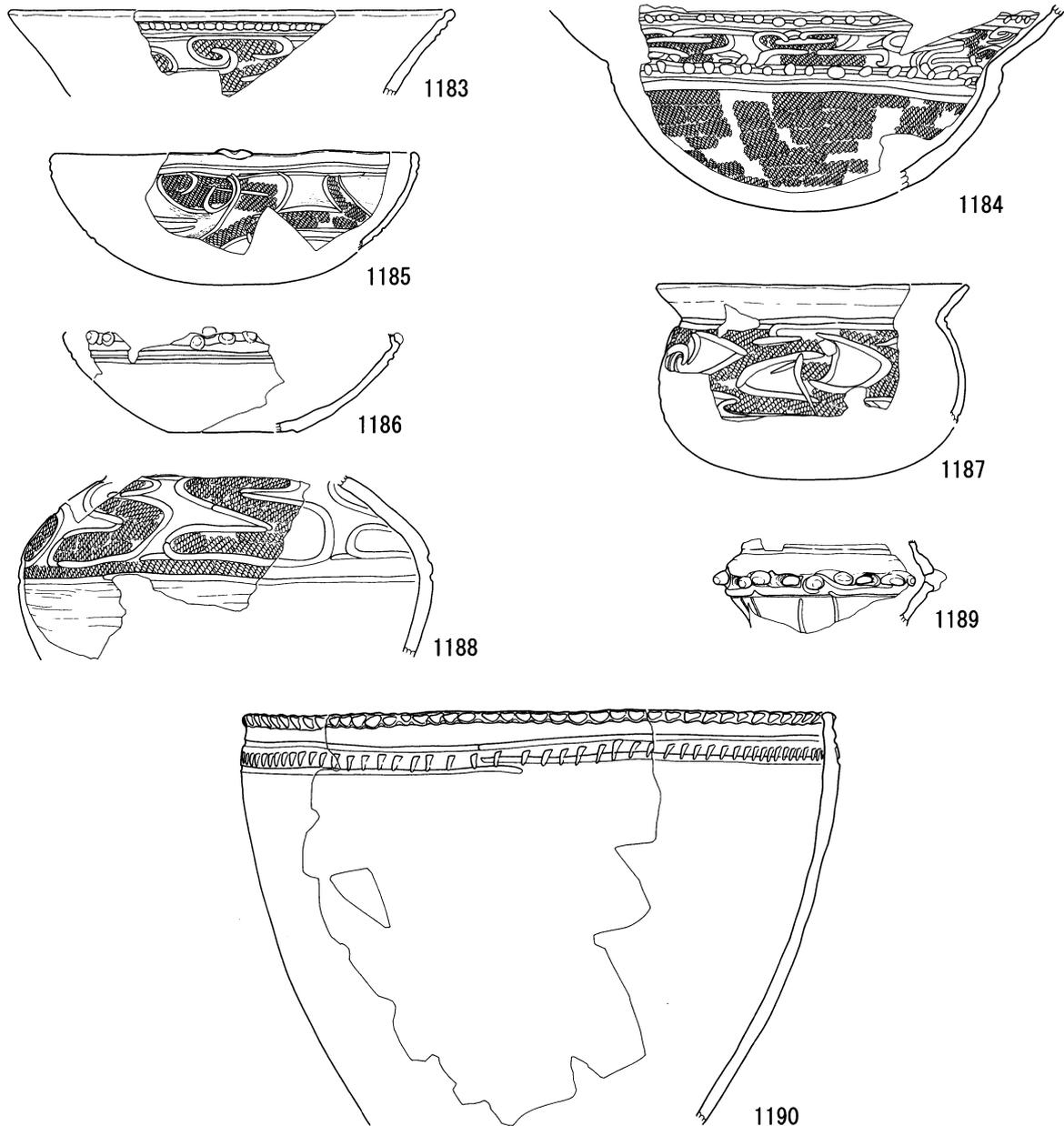
1078～1087は無文の深鉢である。いずれも水平

口縁で、口縁内湾する砲弾形の器形がほとんどであるが、1081は頸部が括れて、口縁がほぼ直立する。また、1080は折返口縁を成している。1085は唯一全体を知り得るやや小形の深鉢で、口縁部に成形時における指頭の圧痕が残存する。

1088・1089・1091～1095は台付土器の脚台部で



第126図 グリッド出土土器(70)



第 127 図 グリッド出土土器 (71)

ある。1092～1094 は体部のみ縄文が施文され、他は無文である。

1090 は椀形の浅鉢である。水平口縁で胴部中段に軽微な屈曲を持つ。底面は丸底となるものと思われる。口端上に鋸歯状の突起を伴う他は無文である。

第 123 図以下は破片資料である。

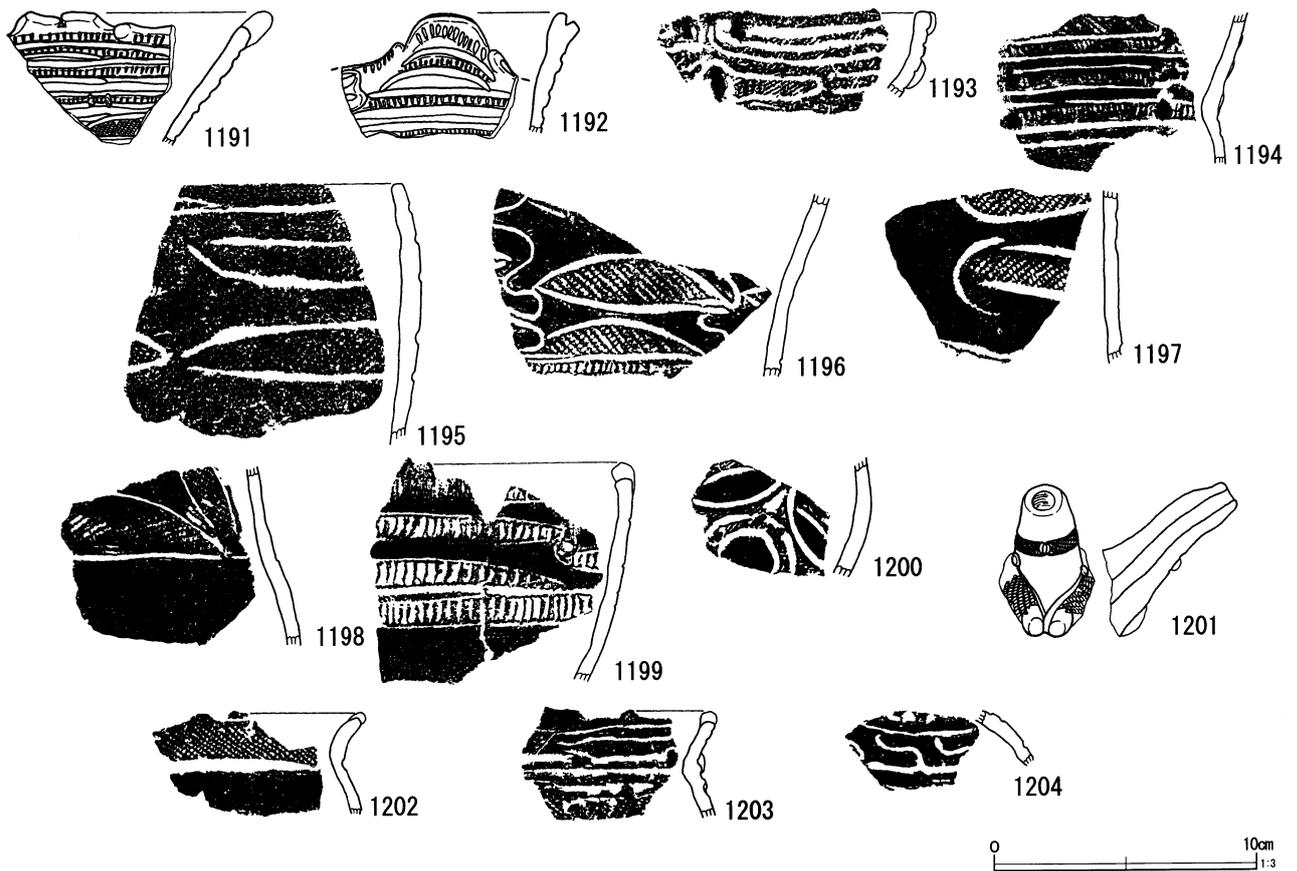
1096 は胴部中段のみ平行沈線の区画を持つ。1097 は押し引き状の列点文が口縁および胴部中段に巡る。1099～1103 は刻みや刺突列に沈線を伴う区画が口縁および胴部中段に巡る。1098・1100 は粘

土紐を貼り付けた上から刺突や刻みを施している。1101 は口縁のみ縦位の刻みが巡る。胴部中段には区画を設けないが、地文の施文方向を変えている。1102 は折返し口縁を成している。

1109～1111 は胴上半部に縦位の平行沈線を描く。

1114～1123 は口縁および胴部中段にひだ状の押圧を伴う隆帯が巡り、胴上半部に同じ隆帯による曲線文様が展開する。

1124～1138 は胴上半部に文様帯を持つ。1127・1128 は平行沈線が垂下して、沈線間の地文が磨り



第128図 グリッド出土土器 (72)

消される。1129～1137は帯縄文による弧状のモチーフが描かれる。1133・1134は口縁下に豚鼻状の貼り付け文が配される。

1142は磨消縄文により扁平な波頭状モチーフが描かれる。1145・1146等も類似の意匠を描くものである。

1148は水平口縁上に三角形の突起を配するもので、口縁下に弧状の沈線を巡らせて縄文を充填し、連続する半円形のモチーフを描いている。

1141・1144は平行沈線による弧線文が巡り、1141では交点から波状の沈線が垂下している。1144ではこの部分の口端上に小突起を配する。

1153は上下一対の貼付文と、これを連繋する平行沈線によって583に類似の長方形区画を構成し、内部に矢羽根状の集合沈線を描く。1161もこれに似た意匠をもつものとみられる。上下一対の貼付文間を対弧状の沈線で連繋して楕円形の区画を構成し、内部に横位の集合沈線を施文する。胴下半部は無文

で、間延びした釣鐘形のプロポーションを呈する。

1159・1160は無文の深鉢で、輪積み痕および成形時の指頭圧痕を全面に残している。

1162～1169は集合沈線文の深鉢底部～胴下半部である。1166・1167は底面に網代圧痕を残す。1168は底面にも集合沈線を施文する。

1170～1176は地文状文の深鉢底部である。精製深鉢の底部と考えられ、1174・1176は底部直上に括れを持つ。

1177・1178は無文の底部で、安行3c・3d式に伴うものであろう。縦位の粗い撫で調整が観察される。

1179・1180は633のような鉢の底部と考えられ、胴部に横位の集合沈線が施文される。底部の直上が括れて、胴部との境に段を形成する。1180の底面はやや丸底状を呈する。

1181・1182は高台を持つ底部である。注口土器等特殊な器形に伴うものであろう。

土製品

土偶（第129図～第131図）

今回の調査では、14個体の土偶が出土している。いずれもグリッドからの出土で、遺構に伴うものは見られなかった。時期的には、後期中葉から後期中葉の範囲におさまると考えられる。接合例は一例のみであった。

以下に、個々の土偶について説明を加える。

第129図1は山形土偶の右胸から右肩の破片で、P-9-18区より出土している。肩の接合面で壊れて出土したが、同一地点もしくは近距離からの出土と考えられる。現存高は5.5cm、現存の最大幅は6.5cm、最大厚は2.7cmになる。完形であれば20cmを超える土偶になると考えられる。乳房は抉られたような状況で剥落し、背面には併走する沈線と円形刺突による文様が施される。割れ口の観察から、胴部の芯になる粘土は前後に貼り合わせて成形されたことが分かる。また、腕や乳房は、胴部とは別に成形され、仕上げ粘土で整形する際に接合されたと考えられる。胎土に砂粒を多く含むが、焼成はしっかりしている。後期中葉の土偶と考えられる。

第129図2は山形土偶の左脚で、O-12-22区より出土している。胴部と脚部の接合面で壊れており、つま先を欠損している。現存高は6.8cm、最大幅3.5cm、最大厚は2.7cmになる。完形であれば20数cmになると考えられる。脚の付け根と膝の部分に横走する細い沈線が巡る。脚の上端には、山形土偶の腰まわりに施される鋸歯状の沈線の一部が観察できる。胎土は精製され、焼きもしっかりしている。加曾利B3式期の山形土偶と考えられる。

第129図3は左腕で、P-9-8区より出土している。粗製土偶で、棒状の粘土を簡単に整形したものであり、胴部との接合状況は不明である。現存高は2.8cm、厚さは1.7cmになる。形状から後期中葉末の土偶の腕と考えられる。

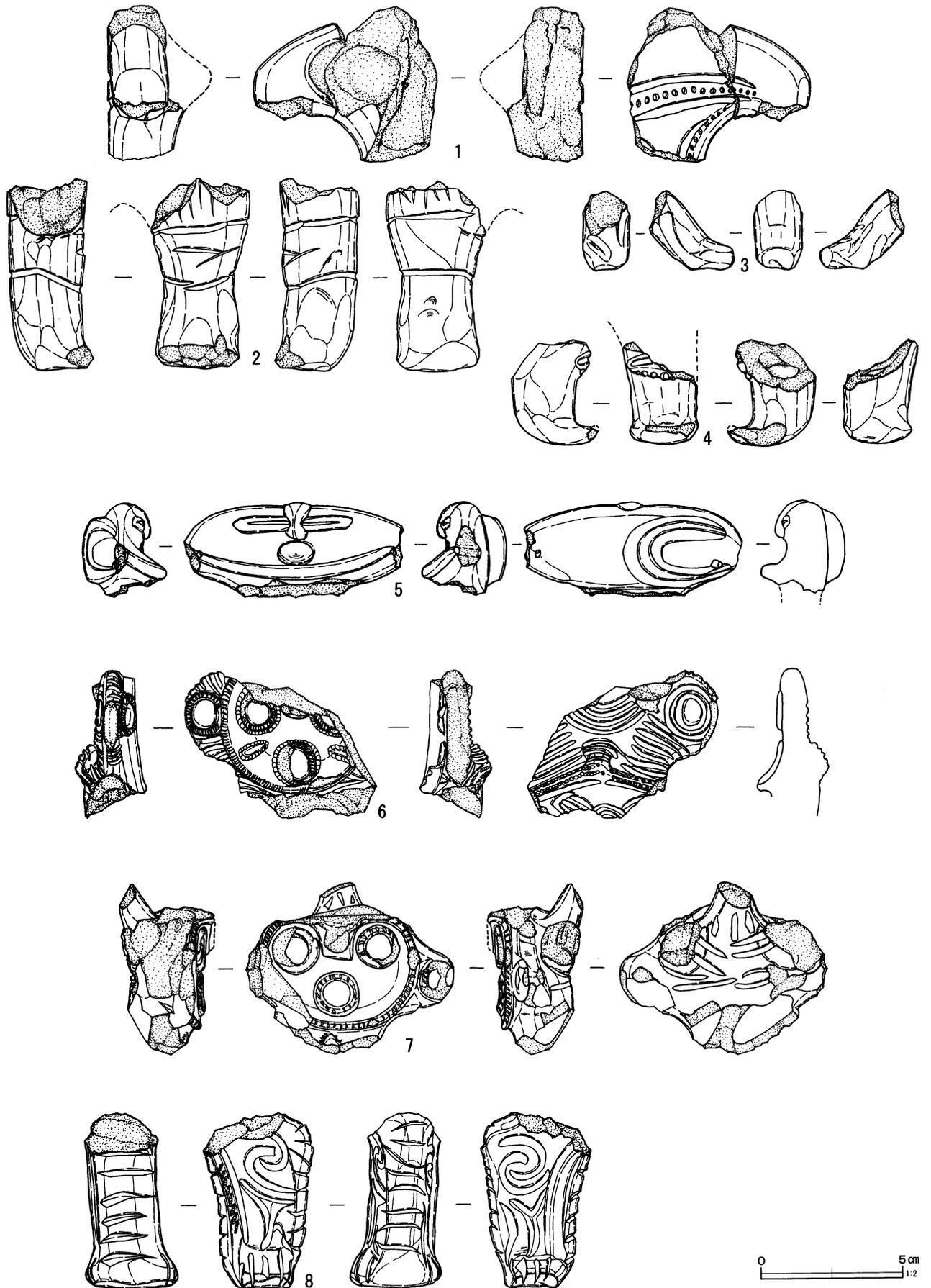
第129図4は左脚で、P-10-5区より出土している。粘土板を丸めて成形しており、中心には一

部空洞が残る。膝には隆帯が貼付けられ、膝の中心には沈線が、下辺には円形の刺突文が施される。現存高3.7cm、脚部の最大厚は2.3cmになる。加曾利B3式末か曾谷式の土偶と考えられ、推定の大きさは20cm前後になると考えられる。

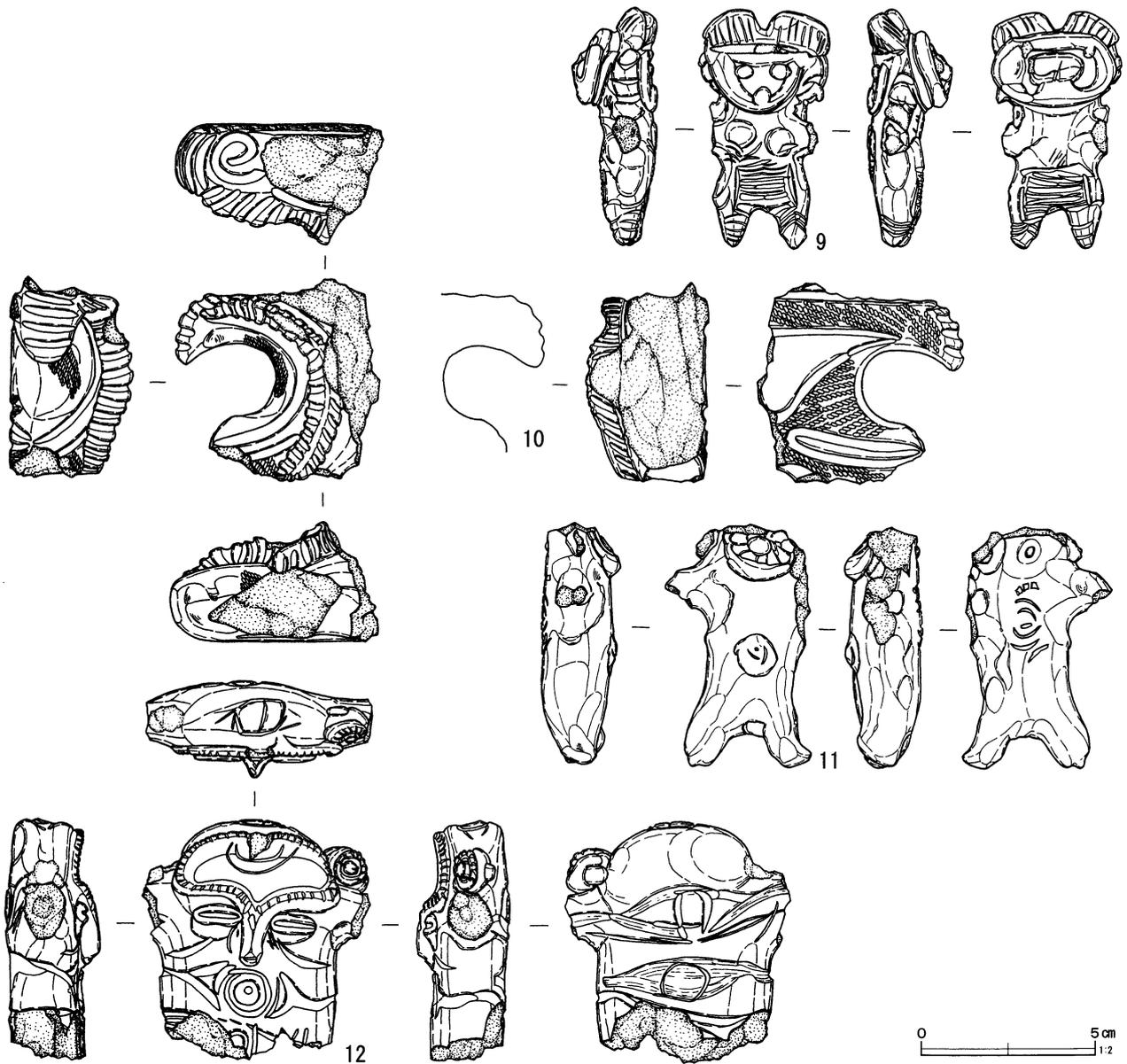
第129図5は土偶の頭部で、P-11区より出土している。形態的には山形土偶系統の最終末に位置する土偶と思われ、寸詰まりで横広がり頭部になる。現存高3.3cm、最大幅7.8cm、最大厚は3.0cmになる。両耳は小孔が貫通し、耳から顎にかけては、隆帯を厚めに貼付け顔の輪郭を表現している。眼は隆帯上に細沈線で、鼻は頭頂部から眼の隆帯を超えるかたちで貼付けられ、口は円形の凹みで表現される。右後頭部には、この時期に特徴的な三ヶ月状の隆帯が貼付けられる。胎土の粒子は細かく、焼成もしっかりしている。完形であれば13cm～15cmの土偶になると思われる。曾谷式期の土偶である。

第129図6は木菟土偶の頭部で、R-9-23区の攪乱内からの出土である。頭頂部から顔面の左側にかけて欠損している。現存高5.25cm、最大幅6.8cm、本体部分の厚さが0.8cmになる。完形ならば、20cmを超える比較的大型の土偶になると思われる。顔の輪郭は円形の隆帯で表現され、隆帯上には細微な刻みが入る。眼と口は中心を凹ませて円形の粘土を貼付け、粘土の外周を細い竹管による刺突が一周し、夫々の輪郭の上面にも、顔の輪郭と同じ細微な刻みが施される。耳も、正面は円形の粘土を貼り付けて耳飾りを装着した状態が表現されており、輪郭には眼や口と同様の装飾が施される。背面には同心円状の沈線で耳の位置が示されている。後頭部は並走する沈線で結髪状の表現がされ、背面頸部の隆帯には細かい刺突が2条に施される。沈線の各所に赤彩の痕跡が残っており、全体に赤彩が施されていたことがわかる。後期安行式に伴う土偶である。

第129図7は木菟土偶の頭部で、P-11-5区より出土している。頭頂部と顔面右側の一部を欠く。現存高6.1cm、最大幅7.3cm、厚さ3.2cmになる。



第129図 グリッド出土土偶・土製品(1)

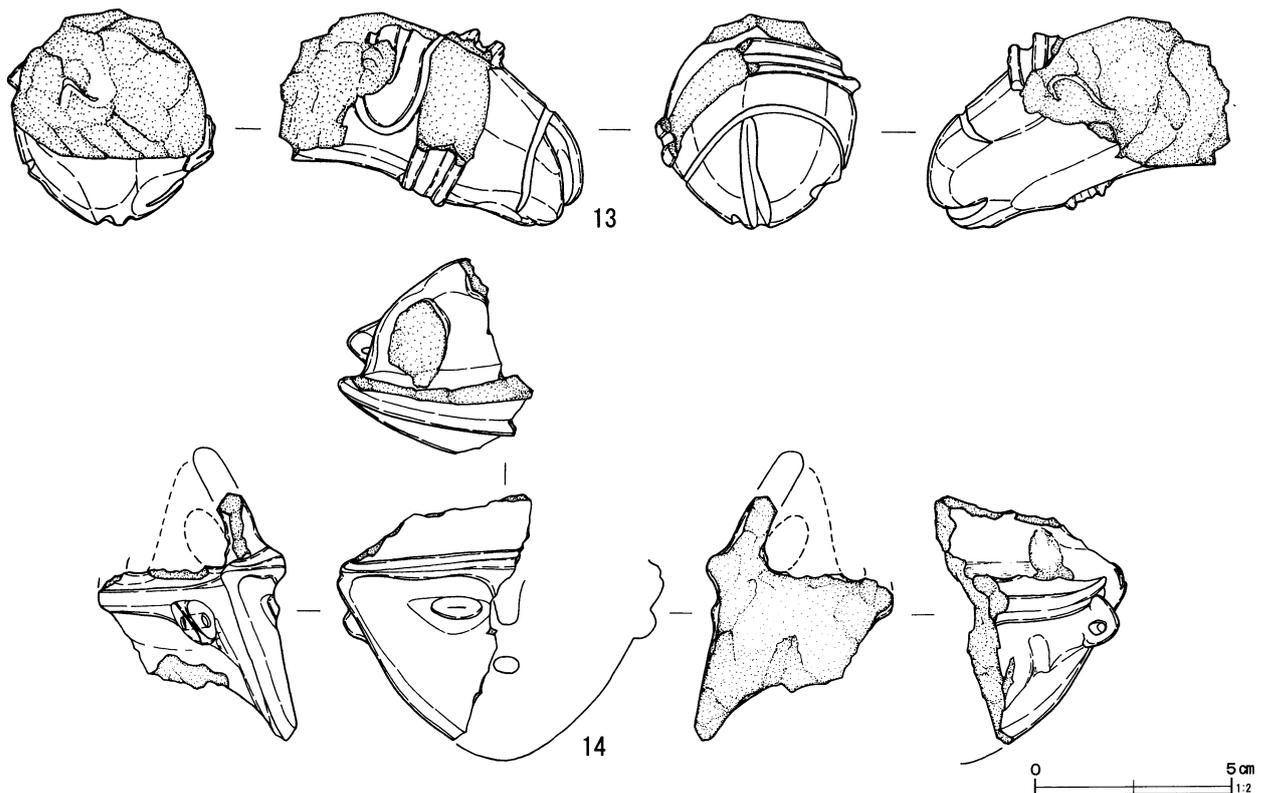


第130図 グリッド出土土偶・土製品(2)

完形ならば20 cm前後の土偶になるとと思われる。顔の輪郭と鼻は、楕円形に近いハート形の隆帯で表現され、隆帯の上には刻みが施される。眼・口・耳は、円形の粘土を貼付けて中心を凹ませ、輪郭の上には刻みを施しているが、耕作等による磨耗が激しく、口と左目及び耳の一部にその痕跡が残るのみである。後頭部中央の突起は先端が欠けており、その左右の突起は完全に剥落している。また、結髪表現らしき沈線も施されている。赤彩の痕跡は確認できなかった。後期安行式に伴う土偶と考えられる。

第129図8は、木菟土偶の左脚で、P-10区より出土している。現存高は6.3 cm、最大幅3.9 cm、

最大厚2.6 cmになる。推定の大きさは20 cmを超える土偶になるとと思われる。脚部の正面および背面に、内股を取り囲むように足首のところまで隆帯が巡らされ、正面の隆帯上にはR Lの縄文が施されている。背面の隆帯上には、文様はない。このような隆帯は、正面にのみ付けられるのが通常であり、正背面ともに付けられるのは珍しい例といえる。また、つま先とかかと双方に、指を表現したと思われる沈線も施されており、正背面ともに顔面を有する土偶であった可能性が強い。なお、沈線の各所には赤彩の痕跡が残っており、全体に赤彩されていたことがわかる。晩期安行式に伴う土偶と考えられる。



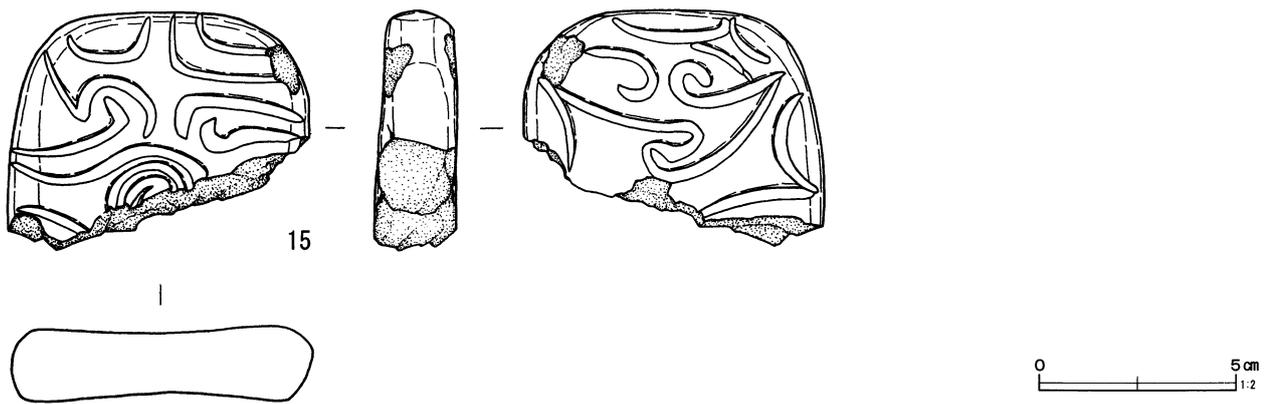
第 131 図 グリッド出土土偶・土製品 (3)

第 130 図 9 は、省略タイプの木菟土偶で、全体に作りは粗雑である。O-12-11 区より出土している。右腕を欠くがほぼ完形である。左腕の先端は、きちんと整形されていないが、表面の状態から破損ではないと考えられる。最大高は 6.9 cm、最大幅は 3.8 cm、厚さは頭部で 2.5 cm、胴部で 1.7 cm になる。顔の輪郭は、外側を細い沈線で区画された隆帯で、眼と口は円形の粘土を貼付けて表現される。耳の表現は明瞭ではない。頭頂部には二つに分かれた鬚状の表現がなされ、額との境目は細い隆帯で装飾される。後頭部には中心に突起を持つ楕円状の隆帯が施されており、結髪を表現したものと考えられる。乳房は微かな膨らみで表現され、乳房の外周は細沈線で区画される。腰部には、沈線でパンツ状の表現が施され、脚部にも数条の沈線が巡る。赤褐色を呈しているが、赤彩の痕跡は観察できない。後期安行式末の土偶と考えられる。

第 130 図 10 は、木菟土偶の胴部で、左半身を欠損している。表面採集資料である。現存の最大高は 5.8 cm、最大幅は 5.9 cm、隆帯部分を含む厚さは

3.5 cm、胴部中央の最大厚は 2.6 cm になる。頸部から腰部のサイズが短く、胴部は寸詰りで厚みをもつ。完形ならば高さ 14~15 cm、幅 11 cm 前後の横広がり土偶になると思われる。腕の前面から腹部まで連続する隆帯が付けられ、隆帯上には浅く短い沈線が施される。このタイプの土偶の乳房は、通常この隆帯上に表現されるが、本例は、ちょうど乳房のあたりが剥落している。隆帯の外側には浅い沈線が施され、腰部の下方と腋下には R L の縄文が施される。背面は、肩部を横走る縄文帯が施され、背中から腰部にかけては、沈線および磨消縄文で施文される。縄文はすべて R L である。肩部の上面には渦巻き文が施される。背面の沈線内に微かに赤彩の痕跡が残っており、全体に赤彩があったことがうかがえる。安行 3 a 式期の木菟土偶と考えられる。

第 130 図 11 は、手づくねの小型土偶で、O-12-16 区より出土している。全体に作りは粗雑である。頭頂部および左腕と右腕の先端を欠損している。現存高は 7.0 cm で完形であっても 8 cm に満たないと思われる。最大幅は 4.1 cm、厚さは 2.1 cm である。顔



第 132 図 グリッド出土土偶・土製品（4）

面輪郭と口の部分のみが表現され、輪郭の内側に竹管による粗い刺突が入る。乳房の表現はなく、臍もしくは単に腹部を表現したと思われる箇所は、わずかに膨らんだ円形の貼り付けで表現される。また、股の正面部分には性器を表現したような浅い凹みが付けられている。後頭部には、径 2～3 mm の微少な粘土が貼り付けられ、その周囲は僅かに凹んでいる。いわゆる背中の部分に、刺突と沈線で不規則な文様が施される以外は無文である。赤褐色を呈するが、赤彩の痕跡は見られない。顔面の表現から木菟土偶の省略土偶と思われるが、時期的には後期末から晩期前半のいずれかに属するものと考えられる。

第 130 図 12 は、人面が表現される土版との中間形態の土偶と考えられる。P-11 区より出土している。現存高は 6.9 cm、最大幅は 6.5 cm、胴部の厚さは 2.1 cm と比較的平たく、厚さもほぼ均一である。両腕と下半身を欠損している。完形ならば 11 cm 前後の土偶になると思われる。破損面から粘土板を前後に二枚重ねて成形していることがわかる。顔面は、完全に両腕よりも下部に表現される。本来の顔面の位置には、木菟土偶の顔面の輪郭に観られるような、刻みが入る隆帯が一周し、隆帯下端の中央から下方に伸びた粘土で鼻を表現している。眼は鼻の両側に粘土を貼り付け、口は鼻の真下に漏斗状の凹みで表現される。口の両側には三叉状の沈線が施されている。耳は、肩の上部、頭部の横に貼り付けられているが、右側は剥落している。耳飾りを装着したよう

な表現がなされている。頭頂部及び背面には、三叉文のくずれたものが施文されている。特に背面の文様は、科本科植物の茎を用いて描いたような沈線が多用されている。赤彩の痕跡は見られない。時期的には、晩期前半のものと思われる。

第 131 図 13 は、大型土偶の左腕で、Q-13 区より出土している。正位置に据えた時の現存高は 5.5 cm、前後の厚さは 5.1 cm、上下の厚さは約 4.0 cm、腕の現存長は約 8 cm になる。黒褐色で胎土は粗く、粘土の中心部は完全に火が通っていない状況が観察でき、一部には空洞の部分もみられる。完全ならば 30 cm 以上の大型土偶になると思われる。肩部には併行する隆帯による肩章状の文様が入り、腕の先端のスリットや手首(?)を 4 分の 3 周する沈線の状況などから遮光器系土偶の左腕と考えられる。縄文時代晩期中葉の土偶である。

第 131 図 14 は、大型土偶の頭部である。R-12-6 区より出土しており、遺構が集中する地点からは離れている。現存高は 6.3 cm、現存幅 5.0 cm、現存厚は 5.0 cm になる。完形であれば 30 cm 近い土偶になると思われる。頭部の右半分を残しほぼ真二つに割れており、割れ口は比較的平滑である。顔面を前に突き出した、菱形状の頭部になると考えられる。顔面は、前頭部との境を横走する隆帯(眉)で区画され逆三角形になる。鼻は、この眉の中央から下垂すると考えられるが、眉中央の下端のカーブから僅かにそれが覗えるのみである。眼は、微量の粘土を

貼り付けて表現されており、小さく突起も低い。眼の周囲は微かに凹んでいる。口の部分は残っていなかった。耳は、顔面部よりも後ろの位置に付いており、耳孔は貫通している。前頭部の厚さは約7mmで、上端は破損しているが、形状は山形になると考えられる。後頭部はかなり後ろにせり出し、外縁を隆帯状の装飾が半周する。この隆帯の内縁には、橋状の粘土が剥がれた痕跡が残り、遮光器系土偶の頭頂部と同様の橋状装飾があったと考えられる。眼の表現等は退化しているが、晩期中葉以降の遮光器系土偶の一例と考えて差し支えないであろう。

以上の14例の土偶をまとめると、大きく四類に分類することができる。

第1類：加曾利B3式から曾谷式期（山形土偶およびその系統の土偶）の範疇に入るもの

第129図1～5

第2類：後期安行式（木菟土偶）の範疇に入るもの

第129図6・7、第130図9・11

第3類：晩期安行式（木菟土偶）の範疇に入るもの

第129図8、第130図10・12

第4類：晩期中葉以降（遮光器系土偶）の範疇に入るもの

第131図13・14

これらを出土グリッドで観ていくと、第2類と第3類が、ある程度まとまった出土傾向を示している。第1類もバラつきはあるが調査区の北側半分に分布し、表採資料を除く第1類から第3類までの各類の出土は、遺構の分布範囲と重なっていることがわかる。これに反して第4類は、遺構の分布範囲からは外れて出土している。

土版（第132図15）

隅丸の長方形で約1/2強を欠く。色調は、淡い褐色で、砂粒を多く含む。現存長は6.1cm、現存最大幅7.7cmである。周縁部の厚さは1.9cm、中央部で1.6cmの厚さになり中心が微かに凹む。推定長は10.5～11cmになると考えられる。P-10-7区か

らの出土である。晩期中葉のものと考えられる。

耳飾り（第133図16～第135図60）

遺構外から出土した45点の耳飾りの全てを図示した。これらが無文系と有文系に大別、さらに大中小の別、断面形状、胎土・焼成から観察した。

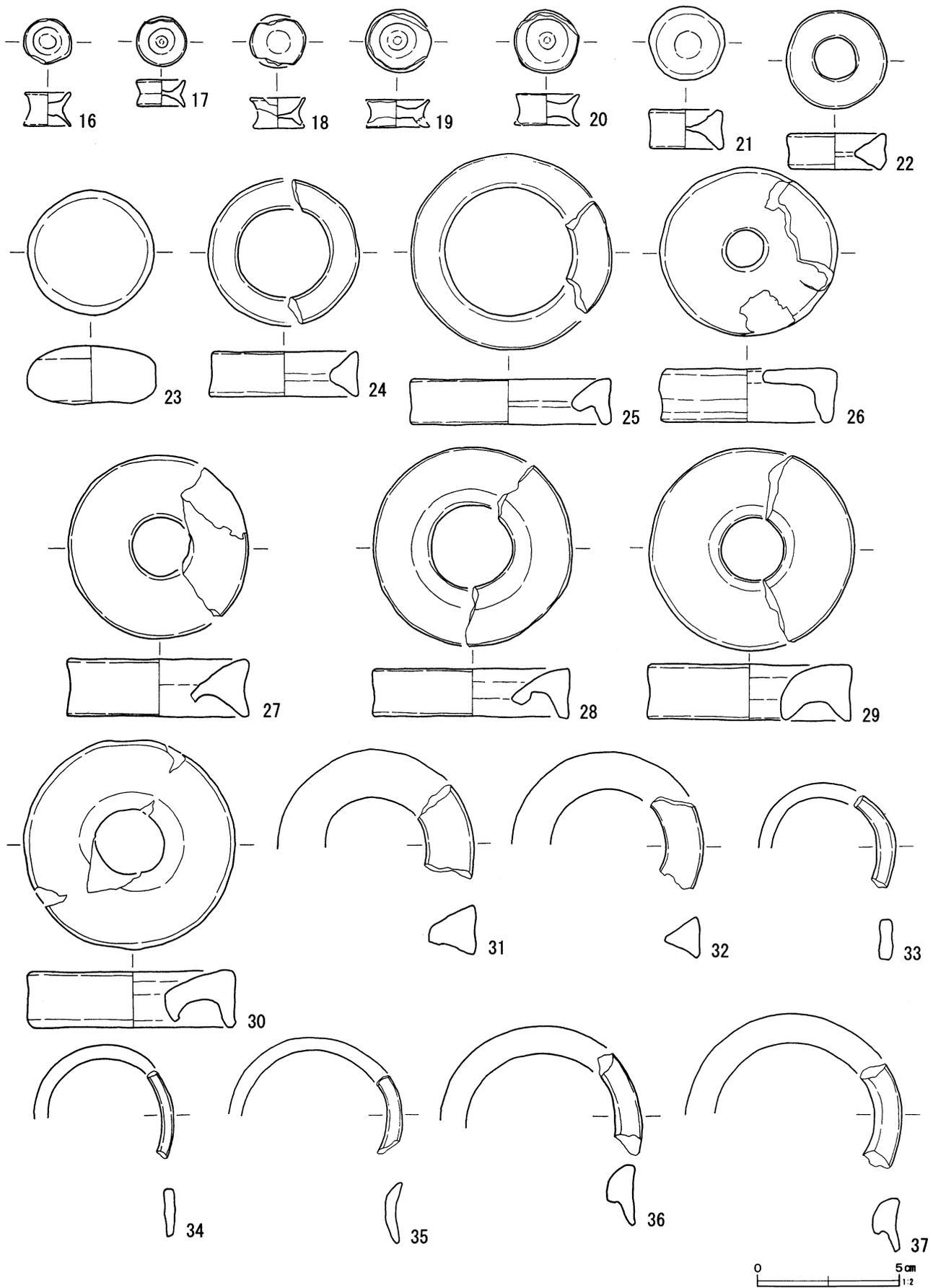
文様	有文	無文
サイズ	小型（2.5cm未満）	中型（2.5cm以上6.5cm未満） 大型（6.5cm以上）
形状	臼形 環状 盤状	円柱形 ボタン形
断面形状	（貫通孔無し）	方形 きのこ形 楕円形 H字形 （貫通孔有り） 三角形 L字形 P字形 釣針形 長方形
整形	良・普通・不良	
胎土	良質・それ以外	
焼成	良・普通・不良	

なお、計測値の括弧つき数字は推定値である。

無文系

第133図16～20までは小型で臼形断面H字形の形状ものを集めた。

16～18は器厚が薄く、胎土が良質である。16は臼形の中でも器高が高く、外面中央の括れが深い。裏面には成形時の工具割り貫き痕が残る。直径1.6cm、高さ1.2cmである。17は裏面に放射状の赤色顔料が、表面・外面には赤色顔料の一部が見られる。全面に赤彩が施されていたのであろう。直径1.7cm、高さ0.9cmである。18は全面に黒色顔料が施されたものである。上面下面とも成形時の工具割り貫き痕が残る。直径1.9cm、残存高1.0cmである。19～



第133図 グリッド出土土偶・土製品(5)

20は器厚がやや厚く16～18のものより焼成が悪い。19は直径2.2cm、残存高0.8cmである。20は完形での出土で直径2.2cm、高さ1.1cmである。

21～24、26・27は中型で、臼形断面三角形であるが焼成も粗く造りも雑である。21は完形での出土で直径2.6cm、高さ1.4cmである。22は環状としては小型、完形での出土で直径3.5cm、高さ1.3cmである。23は貫通孔・裏削りのないもので、この種の耳飾りとしては大型で重量感がある。完形での出土で直径4.4cm、高さ2.0cm。

24・31・32は中型で環状断面三角形のものである。24は粗製品で、胎土・焼成とも不良である。直径5.3cm、高さ1.6cmである。25は直径(7.1)cmと大きく環状で、断面形状は三角形の裏側を削りぬぎ釣針形にしている。上面は比較的丁寧に磨かれている。高さは1.6cmである。26は中型のもので盤状断面L形である。焼成が悪い。直径6.2cm、高さ1.9cmである。

27～30は大型で環状断面釣針形のものである。上面は篋磨きで整形、裏面・外面は篋削りで整形されている。27は直径(6.4)cm、高さ2.0cmである。28は中央に向かい深く落ち込むが、29・30は落ち込み方が緩やかで山なりの弓形を描いている。28は直径7.1cm、高さ1.7cm、29は直径7.2cm、高さ2.0cm、30は直径7.4cm、高さ2.0cmである。

31以降は残存率の低いものを集めた。31は環状を呈するが断面三角形と釣針形の間形態のものと思われ、裏面の削りぬきが見られる。直径(7.4)cm、高さ2.0cm。32も同様に環状で断面三角形と釣針形との中間形態である。上面・裏面・側面とも篋削りで整形されるのみである。直径(7.0)cm、高さ1.7cm。33・34は環状断面長方形のものである。共に作りは篋削りのみで整形されている。33は直径(7.0)cm、高さ1.4cm。34は直径(5.0)cm、高さ1.4cmである。

35は環状断面三角形、器厚も薄い。胎土も良質である。胎土および整形は48と類似している。直径(6.1)cm、高さ1.7cmである。36・37は環状断面

P字形で外面とも丁寧に磨かれている。裏面は篋削りされ、底面は直角に整えられている。胎土も良質で断面および整形は48と類似する。36の直径は(7.0)cm、高さは2.1cm、37の直径は(7.6)cm、高さ2.2cmである。

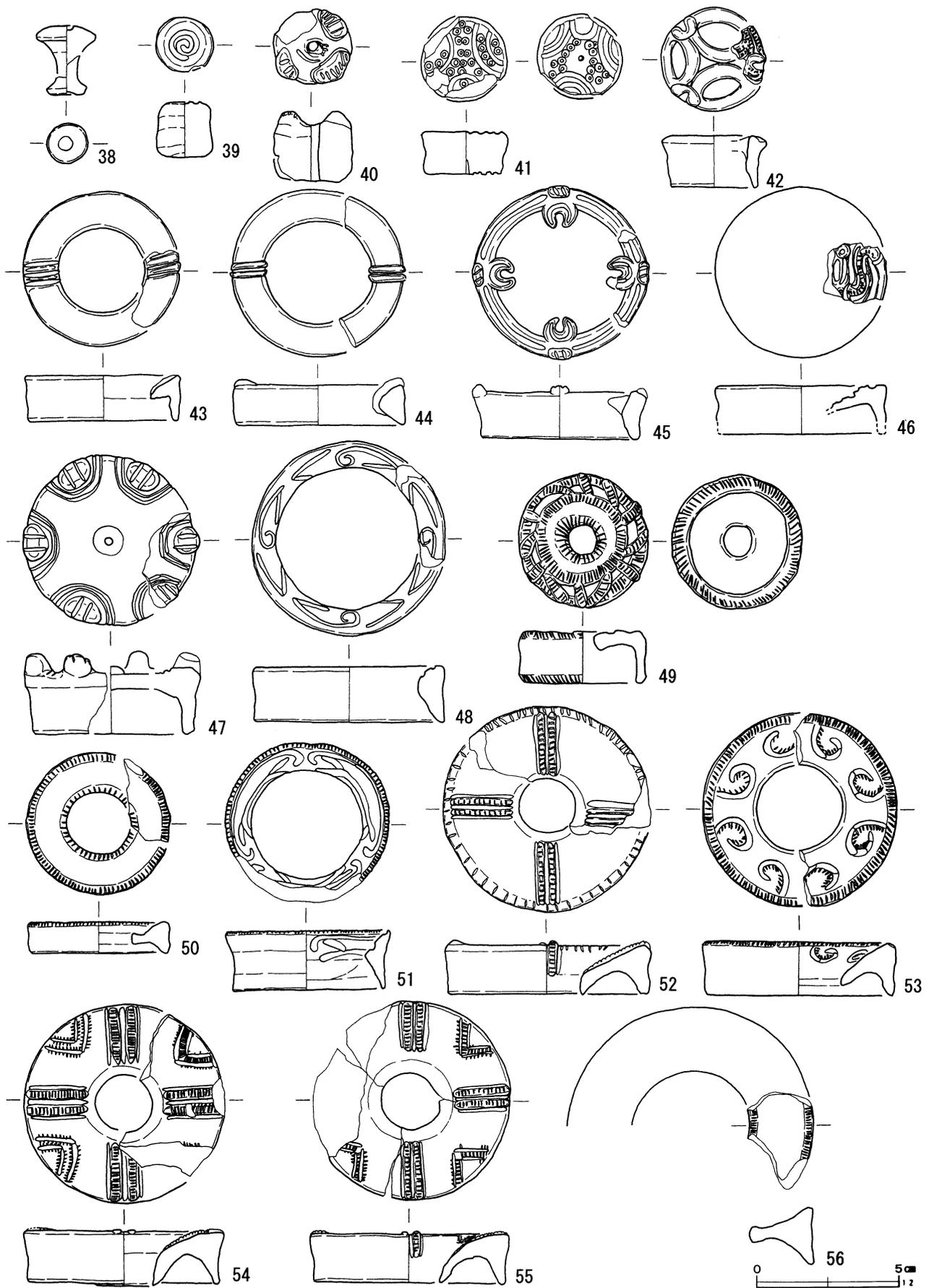
有文系

第134・135図は有文系耳飾りである。

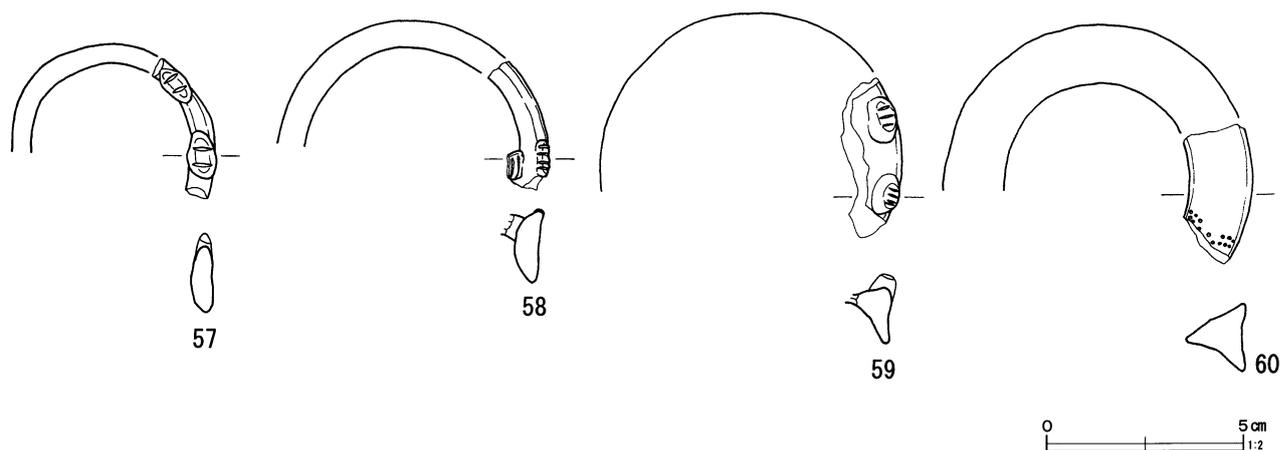
38はいわゆるボタン形の小型耳飾りで、断面きのこ形であったと思われるが、下部のみの出土であった。全体に黒色に処理され、丁寧に作られている。胎土も良質である。直径は1.4cm、残存高(1.4)cmである。39は小型柱状断面方形で指頭圧痕の残る手づくねで、上面に沈線で渦巻き文が描かれている。完形での出土で直径2.0cm、高さ2.0cmである。40は小型柱状断面長方形で4単位の刻みを持つ瘤のついたものである。安行2式に比定される。作りは粗く、手づくねである。貫通孔の周辺に不完全ながら沈線が巡り、その内側に沈線が放射状に刻まれている。胎土・焼成とも不良である。直径2.8cm、高さ2.5cmである。

41は沈線と刺突によって描かれた、いわゆる三原田系列の耳飾りであろう。小型柱状断面方形である。底面からの貫通孔は上面まで通じていない。上面は刺突を施してから沈線を施文しているが、下面は沈線の後に刺突を施している。直径3.0cm、高さ1.5cm。42は3本ブリッジを持つものであろう。小型環状断面長方形で、先回の雅楽谷遺跡の調査時にも類似するものが出土している。胎土も緻密で作りも丁寧に作られている。直径3.7cm、高さ1.8cm。43は中型環状断面釣針形、軽微に隆起した部分に刻みを持つ。安行2式に比定される。直径(5.5)cm、高さ1.6cmである。

44は中型環状断面三角形である。二本の隆帯をもつ。直径6.0cm、高さ1.6cmである。45は中型環状断面長方形でC字状の内面突起を持つもので、2単位もしくは4単位になると思われる。内面突起に対応する位置に安行2式の刻みのある貼付文が配



第134図 グリッド出土土偶・土製品(6)



第135図 グリッド出土土偶・土製品(7)

されている。直径6.0 cm、高さ1.2 cm。46は中型盤状のもので陽刻された雲形状文が施されている。直径5.9 cm、残存高1.2 cm。47は中型盤状断面L字形で刻みを持つ貼付文を6単位配する。安行2式に比定される。直径6.1 cm、残存高2.8 cm。48は大型環状断面三角形。渦巻文を取り囲む菱形区画が4ないし1単位配される。胎土も良質で、整形も丁寧である。直径6.8 cm、高さ1.9 cmである。

49は中型盤状断面L字形のもので、刻みを伴う浮線で描かれる。完形で出土した。直径4.5 cm、高さ1.8 cmである。50は中型環状で断面は中央部が盛り上がった釣針形、内周・外周に刻みが巡る。直径(5.0) cm、高さ1.1 cmである。51は中型環状断面三角形で、両端蕨手状の沈線が3単位配される。比較的丁寧な作りである。直径4.5 cm、高さ1.8 cmである。52は大型環状断面釣針形のもので、2本一組の刻みのある隆帯を4単位持つ。直径7.2 cm、高さ1.8 cmである。53は大型環状断面釣針形である。対向する蕨手文が4組配され、内周・外周に刻みが巡る。直径6.8 cm、高さ1.9 cm。

54・55は大型環状断面釣針形のもので、刻みのある隆帯と刻みのある沈線の組み合わせの文様である。同様の径・文様から一対を成すと思われる。対を成すと思われるのはこの二点のみである。54は直径7.0 cm、高さ1.8 cm、55は直径7.0 cm、高さ1.8 cmである。56～60は小片のものを集めた。56

は大型環状で内部にテラス状の張り出しを持つものである。直径7.0 cm、高さ2.0 cmを測る。

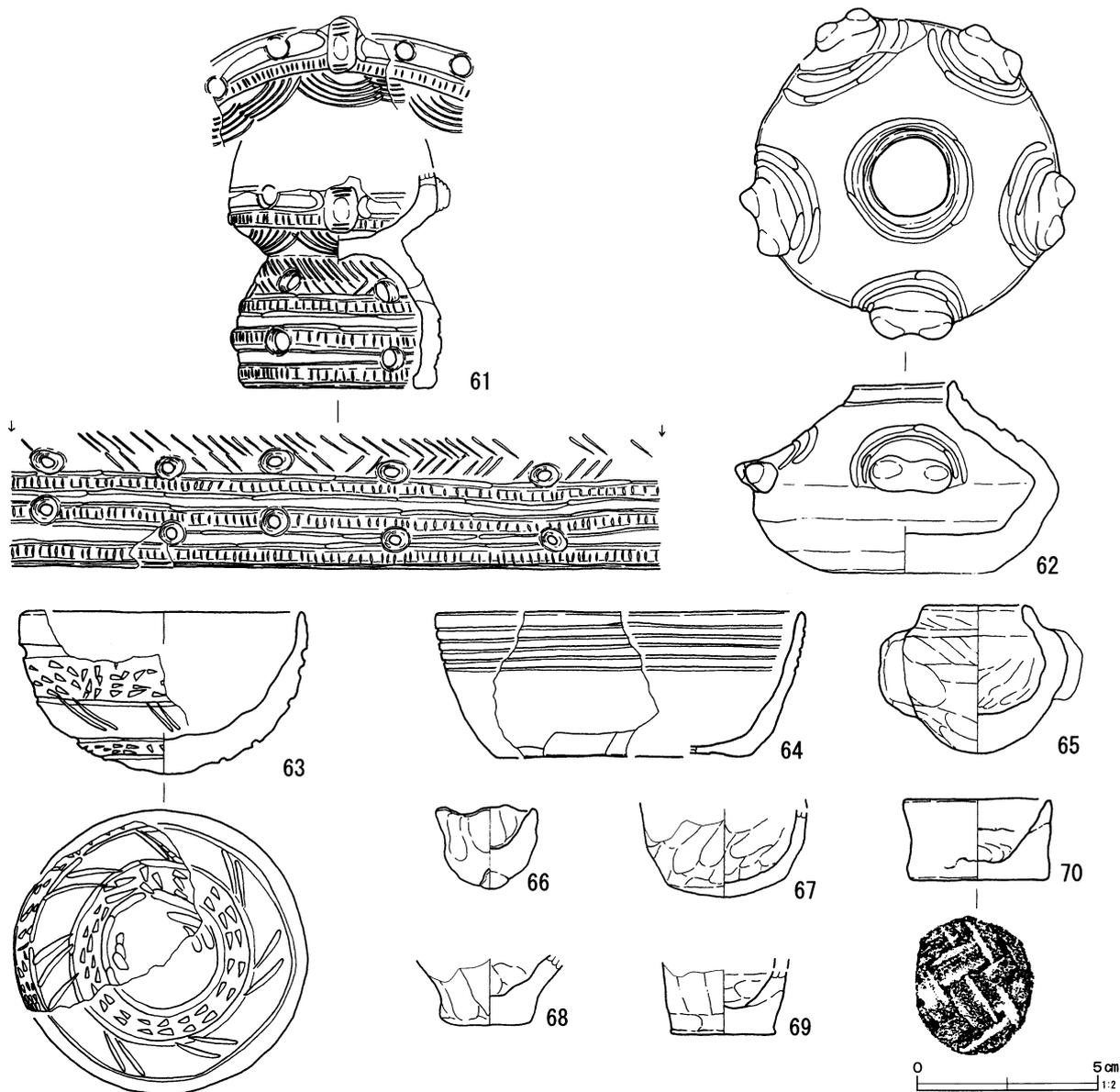
第135図57は中型環状断面長方形で刻みのある瘤を持つものである。直径5.2 cm、高さは1.8 cm。58は大型環状断面三角形で、刻みのある瘤と内面に突起を持つ。直径6.9 cm、高さ1.9 cm。59は大型盤状を呈すると思われ、刻みのある瘤を持つ。内面にテラス状を持ち、直径7.6 cm、高さ1.8 cmである。

57～59は安行2式に比定されよう。60は中型断面三角形で、やや隆起した部分に刺突が施されている。直径7.8 cm、高さ1.7 cmである。

本調査地点出土の耳飾りは総点数60点と前回調査より少量だが、大きく粗製と精製に分けられよう。おおまかな傾向として小型臼形のものと同断面形状P状のものに良質の胎土が使われ丁寧に作られている傾向が見て取れる。臼形のものに関しては、小型のものほど精巧に作られている傾向があるといえよう。

ミニチュア土器(第136図61～70)

第136図61は異形台付土器である。体部下段に「く」の字の屈曲を持ち、この部分に刻みを持つ縦長の貼付文を配する。貼付文の左右には刻みを伴う隆帯および沈線により、楕円形の横帯区画を構成する。区画から下には弧状の集合沈線が施文される。脚台部は中段に最大径を持つドーム形である。中段から下段にかけて、刻みを伴う3条の隆帯が巡り、体部と



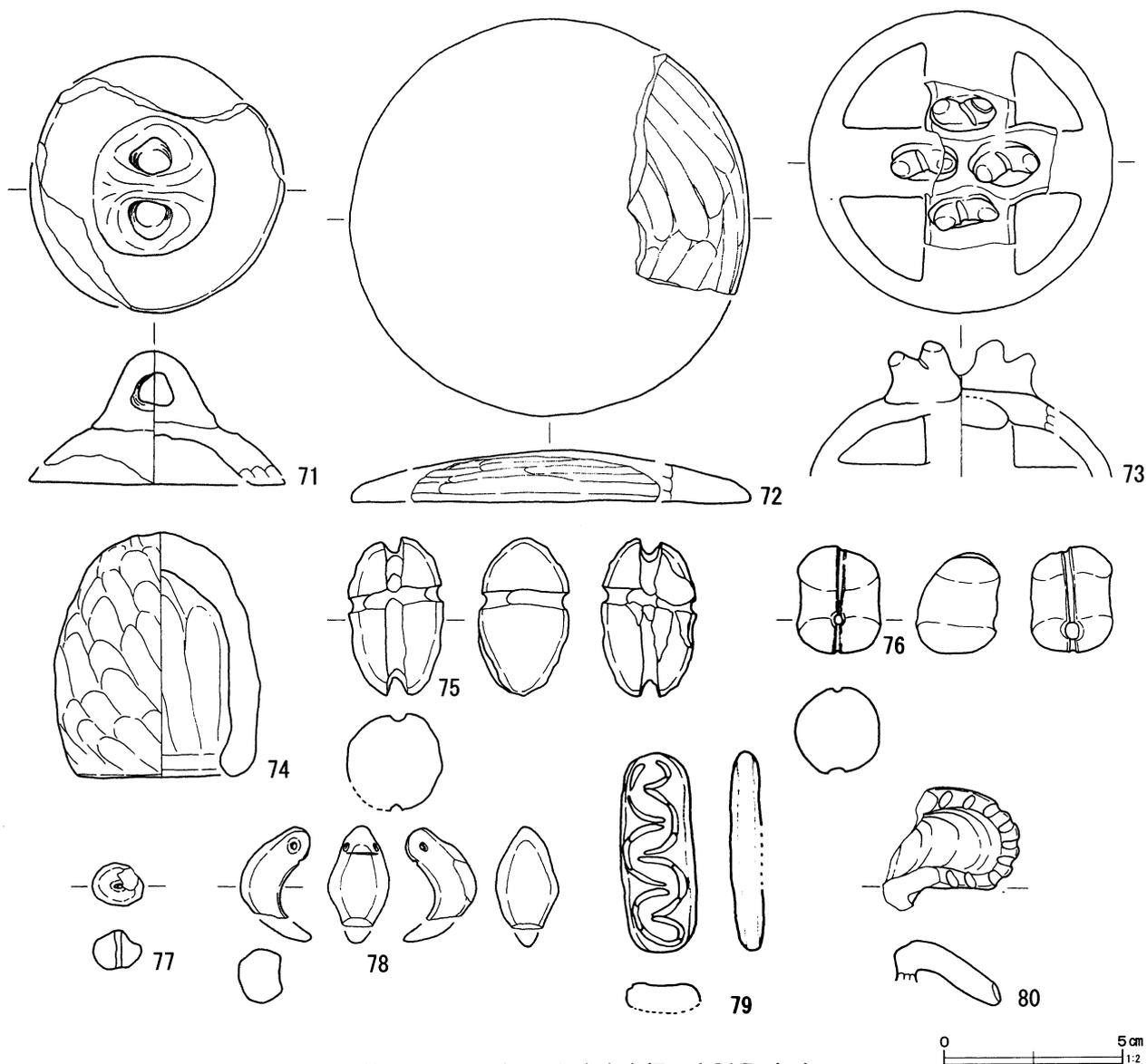
第 136 図 グリッド出土土偶・土製品 (8)

の間には斜位の集合沈線が施文される。体部・脚台部ともに円形の透かしが穿たれる。安行 1~2 式期のものと考えられる。

62 は壺形土器である。扁平かつ平底で、胴部中段が「く」の字に張り出すソロバン玉形の器形であり、頸部はごく短く直立する。中段の屈曲部分に 2 個一組の所謂 B 突起を 5 単位配し、これを囲むように弧状の平行沈線文が描かれる。体部と頸部の境には 1 条の沈線が巡って、段を形成する。胴下半部には篋状工具による横位の撫で調整が観察される。安行 3 b ないし 3 c 式期のものであろうか。

63 は椀状の浅鉢である。丸底で器高と半径がほ

ぼ等しい半球状の器形である。胴部中段および下段に平行沈線による区画が巡り、三角形の刺突文がランダムに充填される。上下区画の間は斜位の平行沈線によって連繋される。安行 3 b 式期に比定される。64 は器高に比較して底径の大きい盤状の浅鉢である。底面やや上げ底状で、底部から口縁にかけて軽微に内湾しつつ直線的に開く。胴上半部に横位平行沈線文がみられるが、区切り文はみられず、縄文も施文されない。胴下半部は無文で、底部周辺に横位の削り調整がみられる。加曾利 B 1 式期のものであろう。65 は広口壺である。丸底で胴上半部に最大径を持ち、肩部が屈曲して段を形成し、口縁はやや内湾する。



第137図 グリッド出土土偶・土製品(9)

肩部から胴部中段にかけて縦長の貼付文が一对配される他、一切加飾されない。器表面に篋状工具による撫で調整が観察される。安行1式期のものと考えられる。

66は手づくねの粗製品で、表裏に指頭の圧痕を残している。67は丸底で、胴部と底部の境に稜を持つ。表裏に指頭の圧痕を残す。68は深鉢底部である。底部直上に括れを持ち、また表面に指頭による縦位の撫で調整がみられる。

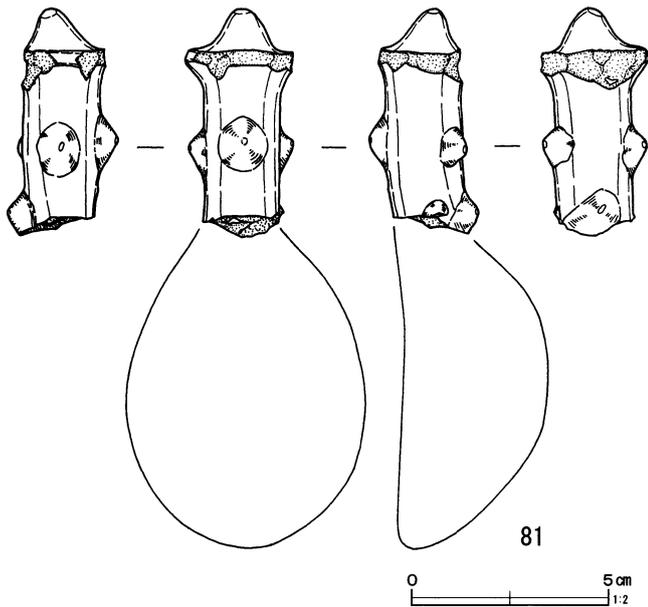
69も深鉢底部で、底径が大きく、胴部はほぼ垂直に立ち上がる円筒形を呈する。底部直上に括れを持ち、篋状工具による横位の撫で調整が施される。

胴部には縦位の撫で調整が観察される。

70は器高に比較して底径の大きい盤状の浅鉢である。底部から口縁にかけて直立し、中段にゆるい括れを持つ滑車形の器形である。胴部無文で、底面に2本越え・2本潜り・1本送りの網代痕が残る。

第137図71は土製の蓋である。単独の橋梁状把手が付される。体部は半球状である。直径7.1cm、器高4.0cm。72は盤状の蓋である。篋状工具での撫で整形が見られる。直径は推定11.2cmである。

73は異形台付土器の頂部の装飾である。所謂B突起を4個配される。扁平な粘土帯2本を十字に組み合わせ成形している。74は鐸形土製品である。



第138図 グリッド出土土偶・土製品 (10)

内面外面とも指頭による撫で調整が施される。

75・76は土錘である。75は十字に溝が切られ、76は縦方向の溝が切られている。

77は土玉である。78は土製勾玉で、末端が欠損している。79は土器の突起の一部と思われる。板状で胴張り長方形を呈し、腹面中央に剥離痕が観察される。背面にはコンパス状の平行沈線文がみられる。

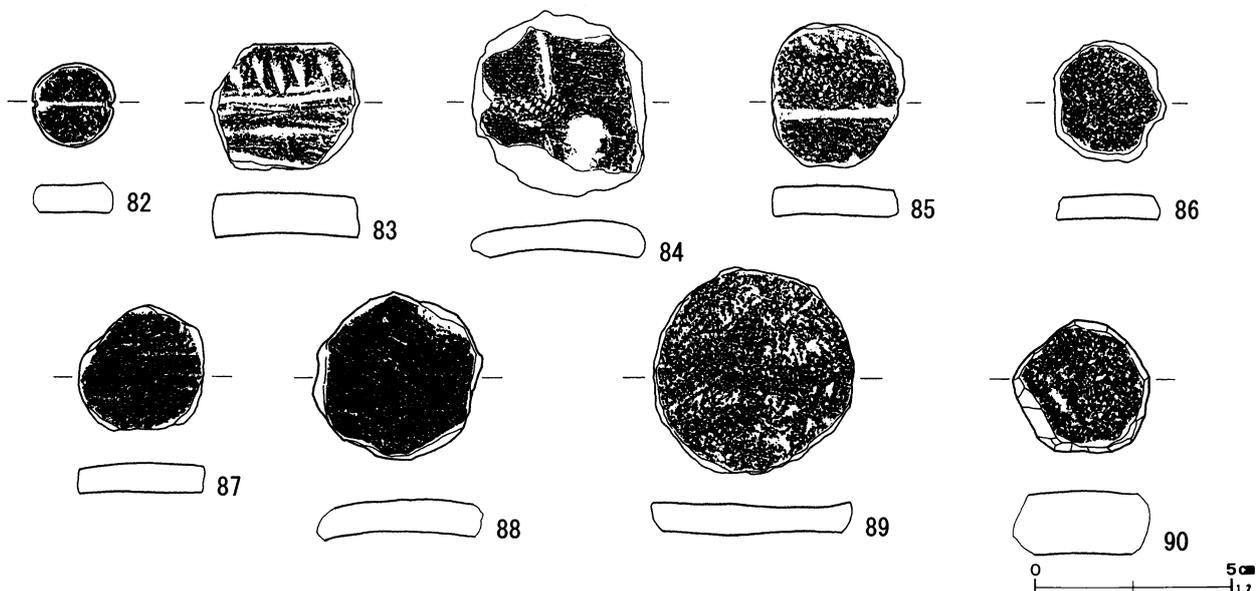
80は土器の突起の一部である。ひねりを加えた受け口状の突起で、一部に赤色顔料が残っている。

スプーン状土製品 (第138図81)

現存長5.8 cm、軸部の径が約1.95 cmの棒状の土製品で、当初「不明土製品」として扱っていたが、軸の一部にス状の物質が付着した痕跡が見られること、残存部分の先端がきちんと成形され、その下部に鏢状の装飾が一周していた痕跡が残ること、軸の部分に瘤状の突起が複数個付くことなどの特徴が観察できる。東北地方を中心に報告されている土製スプーンに同様のものが存在することもあり、本例も土製スプーンの柄の部分である可能性が強い。この視点で観察すると、ス状の物質が付着している箇所は、スプーンとしての使用時には下面になっていたと考えられ、使用状況とも符合する。時期は、他の例などから後期後半から晩期前半のいずれかに属するものと考えられる。

土製円盤 (第139図82～90)

第139図82～90は土製円盤である。82は溝が切られる。83は後期安行式の粗製土器の口縁部破片を使用している。84は扁平な隆帯上に縄文が施文される。85は横走る沈線がみられる。86～89は無文・粗製の土器破片を使用している。90は周辺を打ち欠いただけの未製品である。



第139図 グリッド出土土偶・土製品 (11)

石器

今回の調査区からは、剥片なども合わせると、多量の石器が出土している。ここでは、グリッドから出土した石器を一括し、それぞれ機種ごとに分類した。また石器の出土位置や、計測値については計測表にまとめた。

尖頭器 (第140図1～4)

1は柳葉状のもので、比較的大形である。両面ともに自然面は残存していない。2、3は基部が円基状となるものである。2は裏面に1次剥離面を大きく残すもので、調整は側縁部から最低限行われるものである。3は肉厚なもので、細かな調整はほとんど行われていない。4はメノウ製のもので、他にこの石材を使用した石器は今回の調査からは出土していない。基部を欠損するため全体の形状は不明であるが、欠損した基部側に調整が施されており、再加工を行おうとしていたものと考えられる。

石鏃 (第140図5～33・第141図34～41)

今回の調査区からは未製品や、細かな破損品を含め36点の石鏃が出土している。ここでは出土した石鏃のうち、残存状態の良好なものを中心に図示し、基部の形状によって、分類を行った。

基部の分類は大きく、無茎のものと有茎のものに2分されるが、出土した無茎の石鏃は比較的小形のものが多く、石材は黒曜石を多用している。有茎の石鏃に関しては、石材としてはチャートの使用が多くなっている。

a 無茎で基部が外湾するもの (5・6)

基部が円弧状のため外湾するもので、出土した石鏃に占める割合はごく少ない。5は裏面に1次剥離面を大きく残すもので、調整は最低限に施されている。6は肉厚なもので、調整は側縁部から丁寧になされている。

b 無茎で基部が平坦なもの (7～9)

3点ともに1次剥離面を大きく残すもので、素材である剥片の形状を利用しており、調整は最低限施されている。9はごく小形のものである。

c 無茎で基部に抉りがはいるもの (10～30)

10～17はごく浅い抉りが基部に施されるもので、いずれも比較的小形のものである。10は肉厚なもので、調整も粗雑である。12は表面の中央部に自然面を残す。15は1次剥離面を大きく残すもので、調整は最低限施されている。

18～20、22～28丸みを帯びた抉りが施されている。27と28は逆U字状に深く抉りの入るもので、比較的大形のものである。22は長さよりも幅が広い寸詰まりなもので、今回の調査で出土した、形状が明らかな石鏃の中で、このような形状のものはこの1点のみであった。23は側縁部の中央が外湾するもので、長さに比べ幅が狭くなっている。1次剥離面を大きく残し、調整は最低限施されている。

21、29・30は抉り逆V字状に入るものである。29、30は比較的に深く抉りが入る。29は薄手で、調整は丁寧に施されている。

d 有茎のもので基部が突出するもの (31～36、38・39)

有茎部分が三角形状に突出するもので、平面形が菱形状となるものである。

31は肉厚なもので、有茎部は直線的に端部に至るものである。32は1次剥離面が大きく残るもので、有茎部はやや外湾している。

33～36、38・39は有茎部分に浅い抉りが入るものである。33は側縁部が緩やかに外湾するもので、肉厚な作りとなっている。34は裏面に風化面が残るもので、薄手で形状の整った作りとなっている。

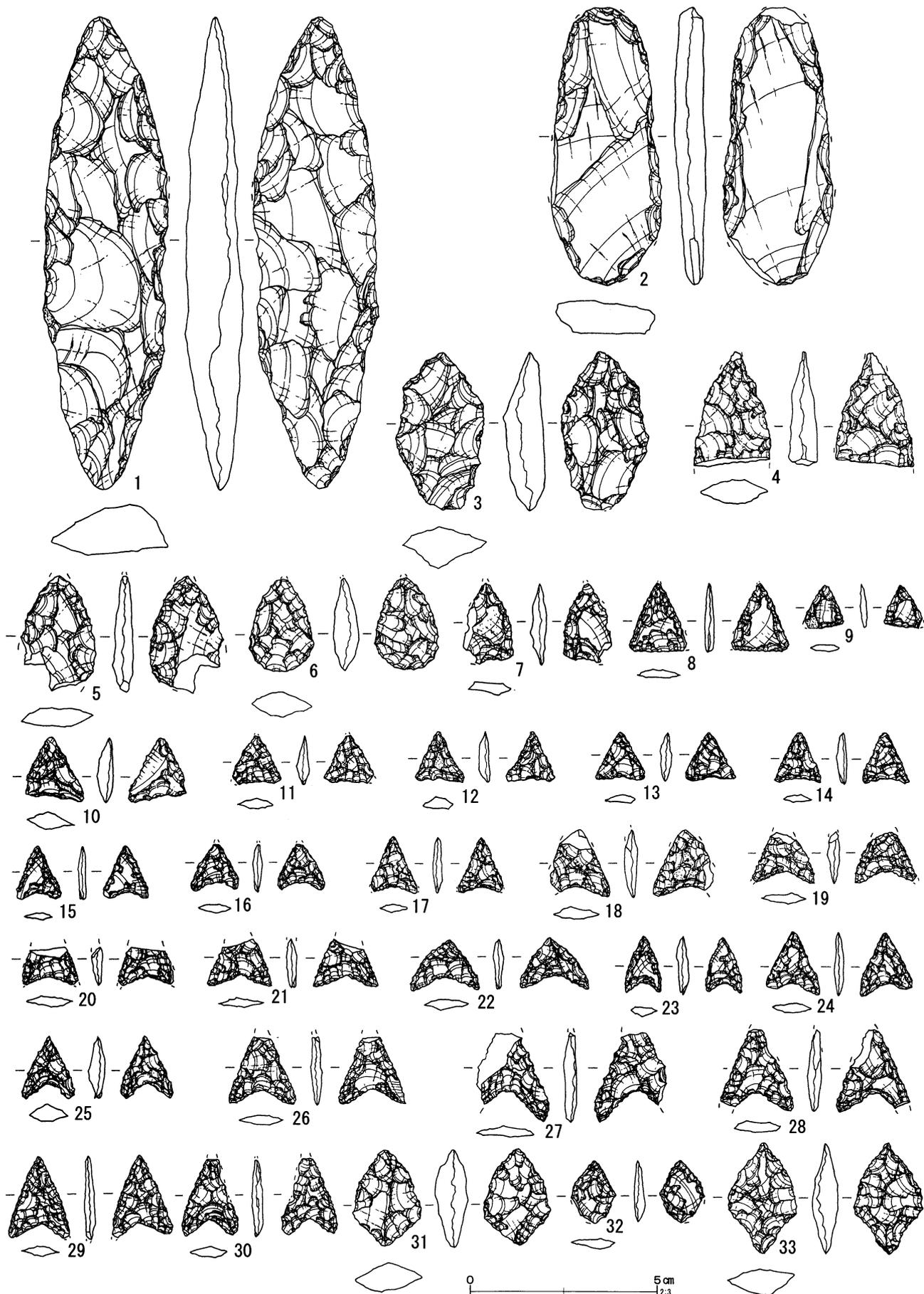
e 有茎のもので基部が平坦なもの (37)

1点のみであった。他に基部に抉りが入り、逆刺状となっているものは今回の調査においては出土していない。

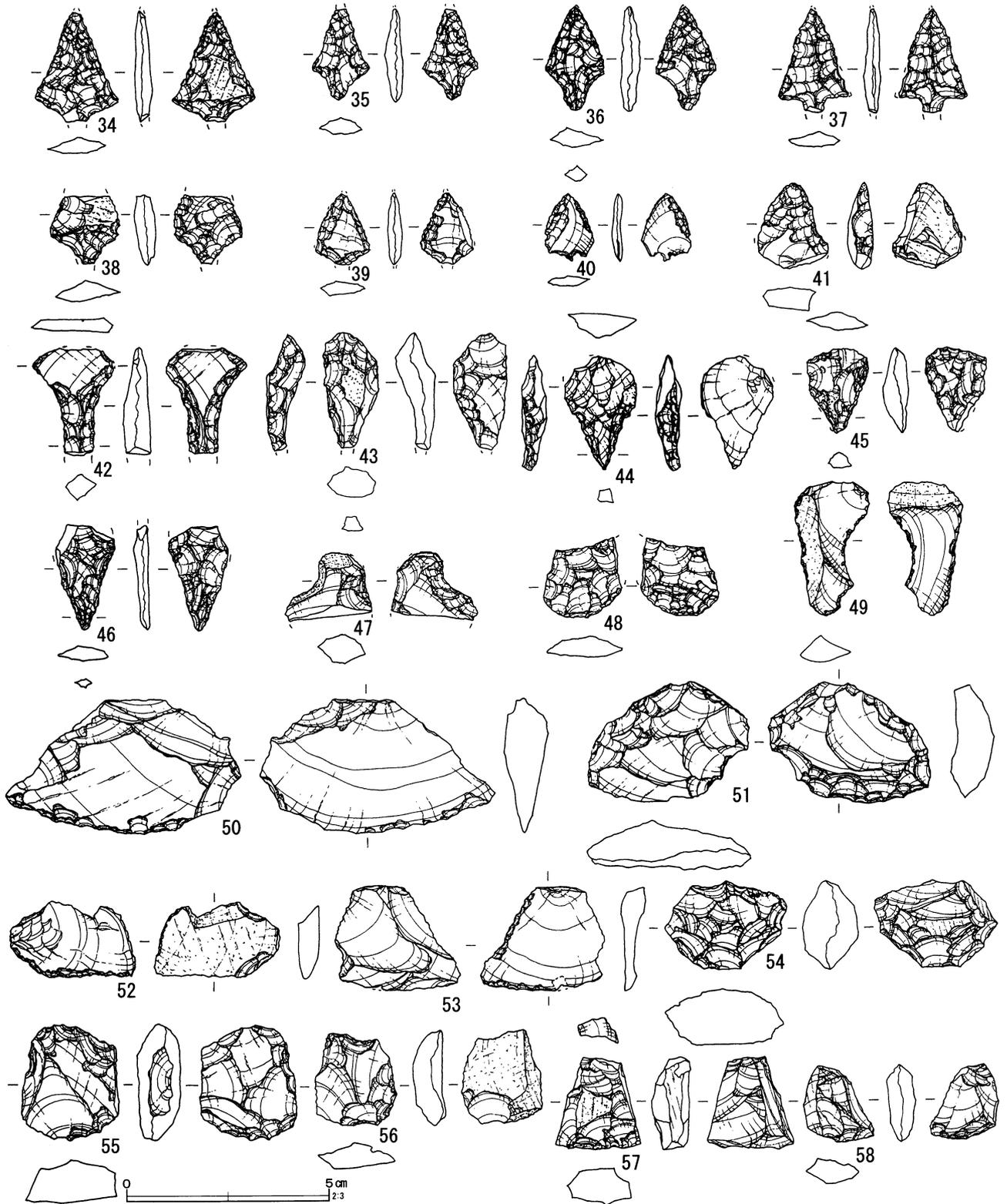
37は側縁部が鋸歯状となるもので、丁寧な調整が施されている。

f 未製品 (40・41)

未製品と考えられるものである。40は小剥片の縁辺部分に調整を行っている段階のもので、基部の



第140図 グリッド出土石器(1)



第141図 グリッド出土石器(2)

形状は不明である。41は裏面に風化面が大きく残存している。

石錐 (第141図42～46)

42～44は先端部の横断面形が、菱形状となるものである。42は先端部分が、両側縁が平行して棒

状に細く長く作り出されるもので、先端部は丁寧に加工され、このような形状のものはこの1点のみであった。43は先端部の加工を左側縁部から施しており、右側縁部にはほとんど調整を施していない。44は先端部の加工は両側から行っている。また裏

面にはほとんど調整を施していない。

45・46は先端部の横断面形が三角形状となるものである。45は刃部の先端部分を欠損するものである。基部は扁平に作り出されている。46は薄手のもので、基部を欠損する。

スクレイパー (第141図47～53)

小形のスクレイパーである。47、48、51はある程度調整を施して、形状を整えているものである。47はつまみ部分で、側縁部に抉りを施して作りだしている。欠損のため、刃部の形状は不明である。48は両面ともに丁寧に調整を施している。つまみ部分を欠損するものである。51は刃部の調整は裏面の片側のみ施されるもので、48と比較するとやや粗雑な作りとなっている。

49、50、52、53は剥片素材の鋭い縁辺部を、ほとんど加工せずに、そのまま刃部として使用するものである。49は両面に風化面が残存するもので、右側縁部を使用している。50は横長剥片の端部を刃部として使用するもので、調整はほとんどなされていない。52は裏面に風化面を残す縦長剥片で、剥片の鋭い縁辺を刃部として使用している。53は三角形状である剥片の縁辺部を2辺、刃部として使用しているものである。

今回の調査においては、多量の剥片が出土しており、その中にはスクレイパーとして簡便に利用し、痕跡がほとんど残らないまま廃棄されたものも、大量に含まれると考えられる。

くさび形石器 (第141図54～58)

上下両端からの、剥離が認められるものである。54はやや横長のもので、両端部の縁辺は潰れている。55～58は平面形が方形状となっている。56は裏面に大きく風化面が残存している。57は表面に自然面が残存している。

磨製石斧 (第142図59～68、第143図69～73)

a 側縁に面をもつもの (59～67)

横断面形が方形状となるもので、いわゆる定角式とされるものである。側縁部の基部から刃部に向け

て、全体に面をもっている。59、60は小形のもので、59は基部の先端は欠損するものの、丁寧に研磨されており平刃に近い刃部は丁寧に作り出されている。60も丁寧に研磨されるもので、側縁の面も直角に近く作り出されている。刃部は丸刃で、やや刃こぼれ状となっている。

61～67は中形のもので、61は刃部片と、基部から胴部の破片が接合したものである。丁寧に研磨され、敲打痕もほとんど残存していない。62は丁寧に研磨されるが、部分的に研磨の下に敲打痕が確認できる。刃部は丸刃である。61などと比較すると、63は側縁に明瞭な面は作り出されていないが、敲打による面取りの痕跡や研磨の痕跡からここに含めた。刃部は丸刃である。64と65は刃部を欠損するもので、丁寧に研磨が施されている。66の形状は不定形である。基部、刃部の欠損ののち再加工のための、剥離が確認できる。67は面取りされた側縁などに、敲打痕が確認できる。基部と刃部を欠損する。

b 横断面が棒状または楕円形状となるもの (69～71)

いわゆる乳棒状とされるものである。a類と比較すると、大形となっている。69、70は棒状となるもので、69の刃部は欠損後、再加工を施している。刃部付近の側縁は、敲打による面取りがなされている。70は基部のみが残存するもので、器面は丁寧に研磨が施されている。71は横断面が楕円形状となるもので、器面には敲打痕が残る。

c その他 (68、72・73)

68、72は破片のため分類はできなかったが、残存部から、b類であると考えられる。

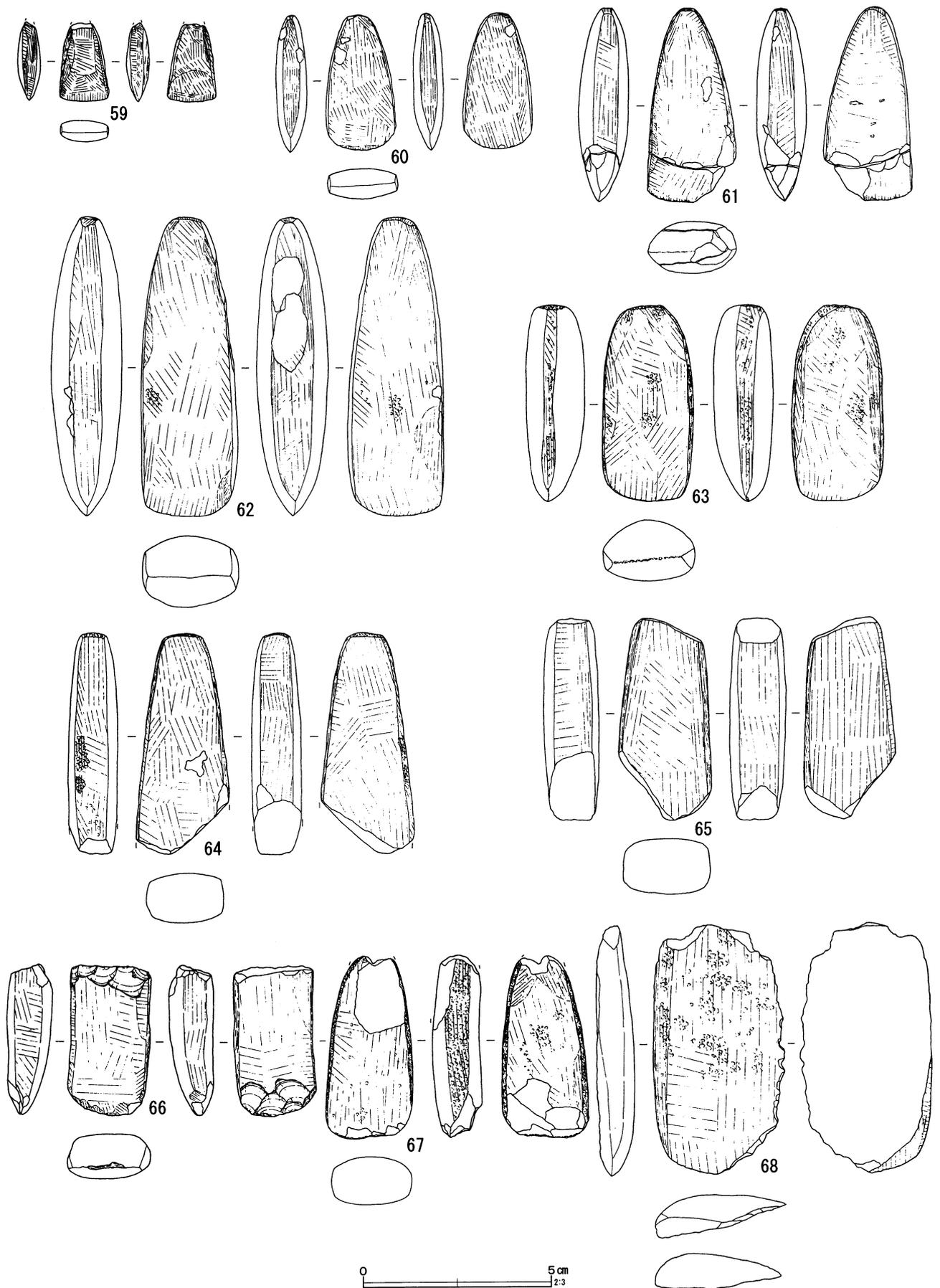
73は未製品である。表面と裏面の二面に研磨が施され、周縁には剥離がなされている。

打製石斧 (第143図74～76、第144図77～87、第145図88～96、第146図97～106)

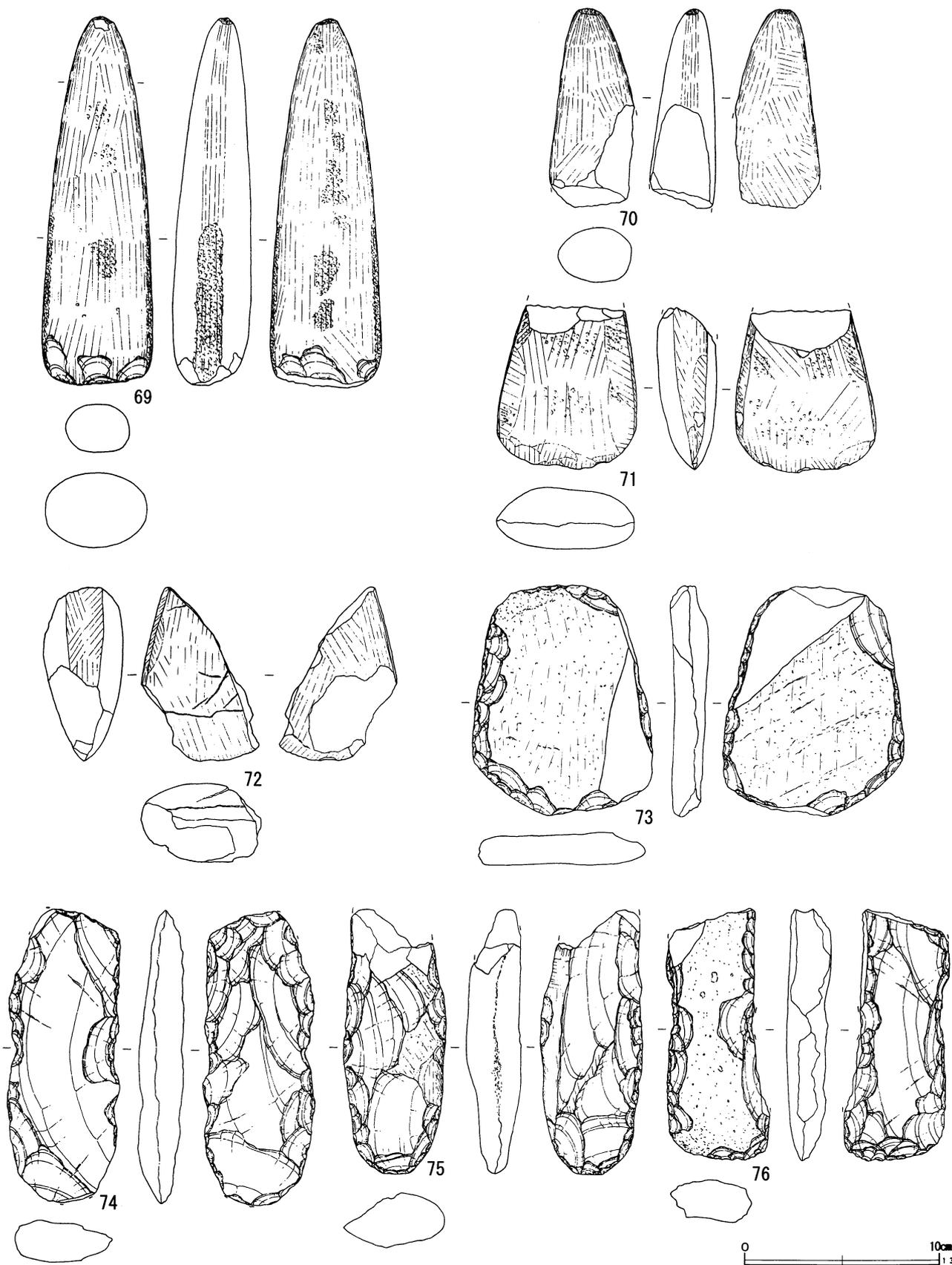
a 側縁部が平行して刃部にいたるもの (74～76)

いわゆる短冊形とされるもので、今回の調査において、このa類の出土量が一番少なかった。

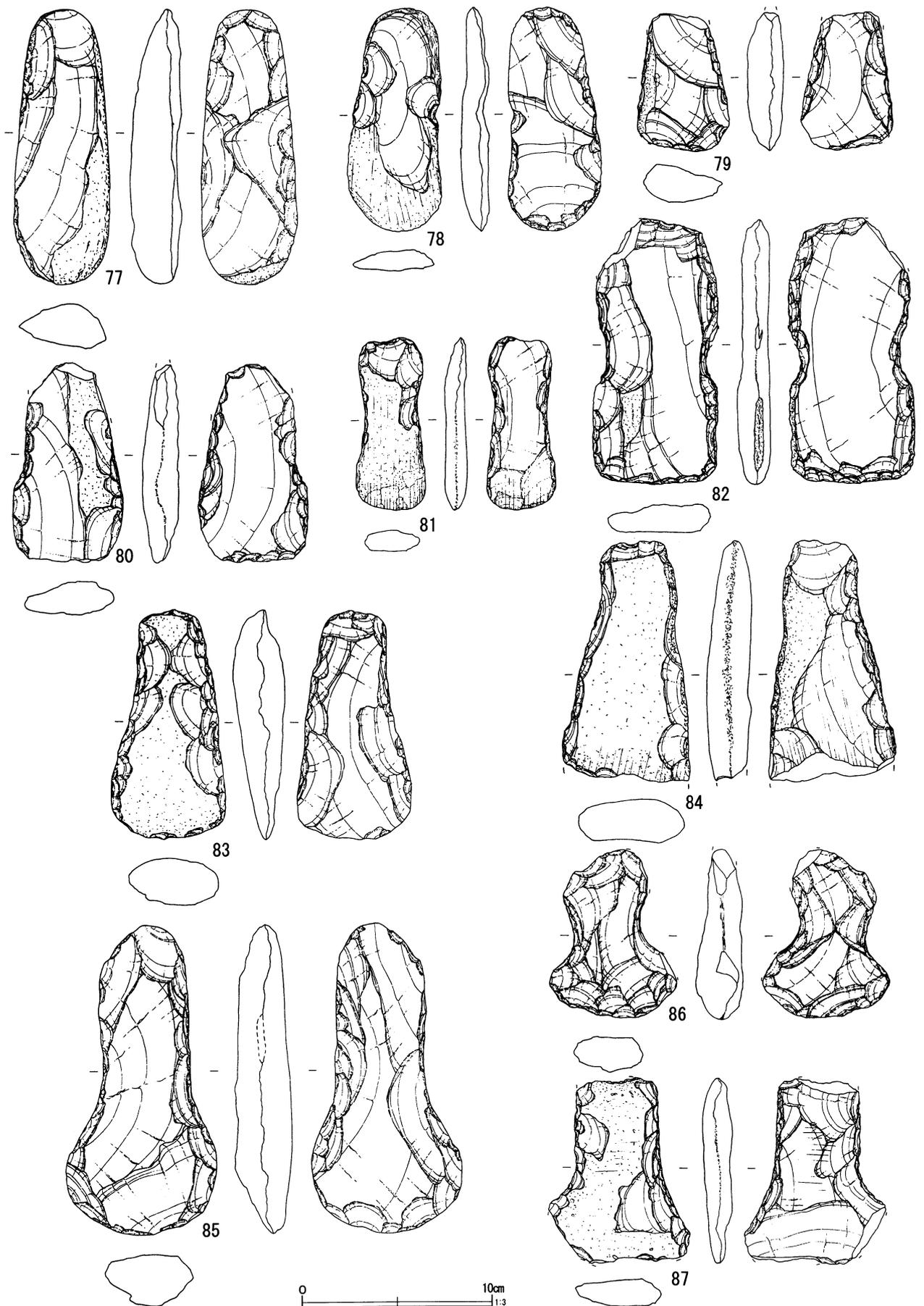
74と75は側縁部がやや外湾するもので、刃部は



第 142 図 グリッド出土石器 (3)



第143図 グリッド出土石器(4)



第144図 グリッド出土石器(5)

丸刃である。74は両面に自然面が残存する。76は側縁部がやや内湾するもので、表面に大きく自然面が残存している。

b 刃部に最大幅があるもの (77～87)

いわゆる撥形とされるものである。

77と78は側縁部が外湾するもので、刃部は丸刃である。表面に自然面を残し、裏面には1次剥離面が大きく残存する。いずれも風化が著しい。79は側縁部が直線的なもので、刃部は偏刃である。81、82は側縁部が浅く内湾するものである。82は調整が最低限なされるのみのもので、刃部は平刃となっている。80、83、84は片側のみの側縁部上方に、抉りが入るもので、平面形は片側に偏る形状となっている。刃部の形状は、80が平刃、83は丸刃である。84は欠損のため不明である。いずれも表面に自然面が残存している。

85～87は形状が逆T字状となるものである。85は刃部全体が丸みを帯びている。基部部分は細長く作り出されている。86は側縁部の抉りが深く入るものである。刃部は丸刃である。風化が著しい。87は表面に大きく自然面を残すもので、薄手である。基部と刃部を欠損する。

c 両側縁部に抉りの入るもの (88～106)

側縁部の中央付近に比較的大きく抉りをいれるもので、いわゆる分銅形とされるものである。このc類とされるものが、今回の調査において最も出土量が多かったものである。

88～90は両側縁部の中央付近に入る抉りの深さが、左右非対称のため平面形が偏っているものである。いずれも刃部は丸刃である。88と90は表面に大きく自然面を残している。

91～98は側縁部の中央部に大きく抉りを入れていたもので、刃部はいずれも丸刃である。91は大形のもので、調整は粗雑で、表面には大きく自然面を残している。92は両面に大きく自然面を残すもので、調整は側縁から最低限度施すのみである。93は1次剥離面を大きく残すもので、表面には自然面が残存

している。刃部の一部は欠損している。風化が著しいものである。94は比較的丁寧に調整が施されている。抉り部分は刃潰し状となっている。基部は平坦に作り出され、刃部は丸刃となっている。95は特に深い抉りを、側縁部に施しているものである。刃部は丸刃となっている。風化が著しいものであるが、調整は粗雑である。96は風化が著しいもので、調整は粗雑である。刃部は丸刃である。

97は素材となる剥片の形状を利用して、調整を最低限施すものである。薄手のもので、刃部は丸刃である。98は肉厚のもので、調整は丁寧に施し形状を整えている。表面には自然面が残存している。

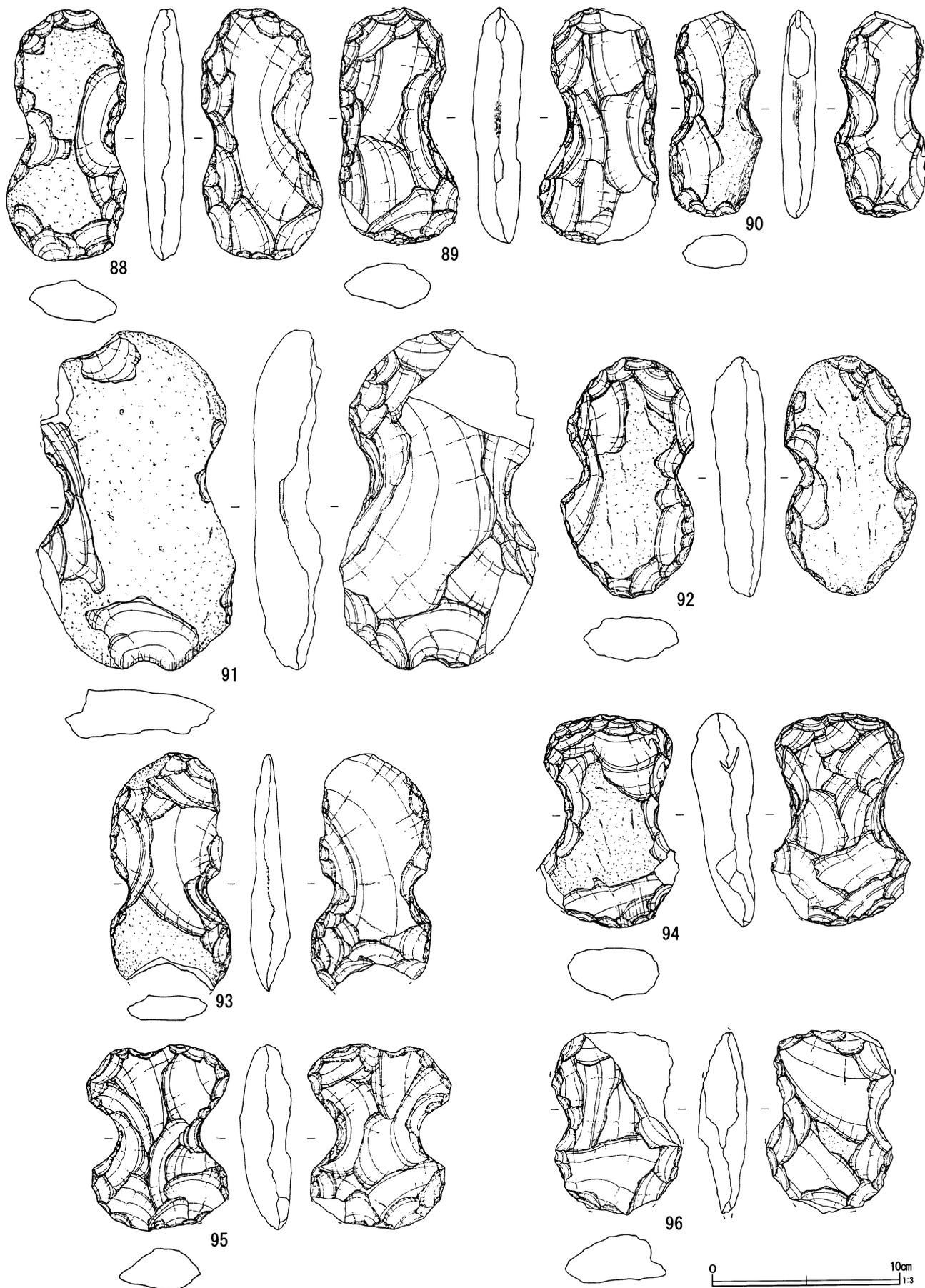
99は刃部が平刃となるものである。表面には自然面を大きく残すもので、調整は最小限度施されている。側縁部の抉り部分は磨耗のため、剥離が消え研磨されたように、滑らかとなっている。裏面中央部も磨耗され、滑らかとなっている。

100と101は刃部を欠損するため、形状は不明である。100の側縁部中央には、深い抉りを施している。表面には自然面が残存している。101は基部も欠損している。表面には自然面が残存している。

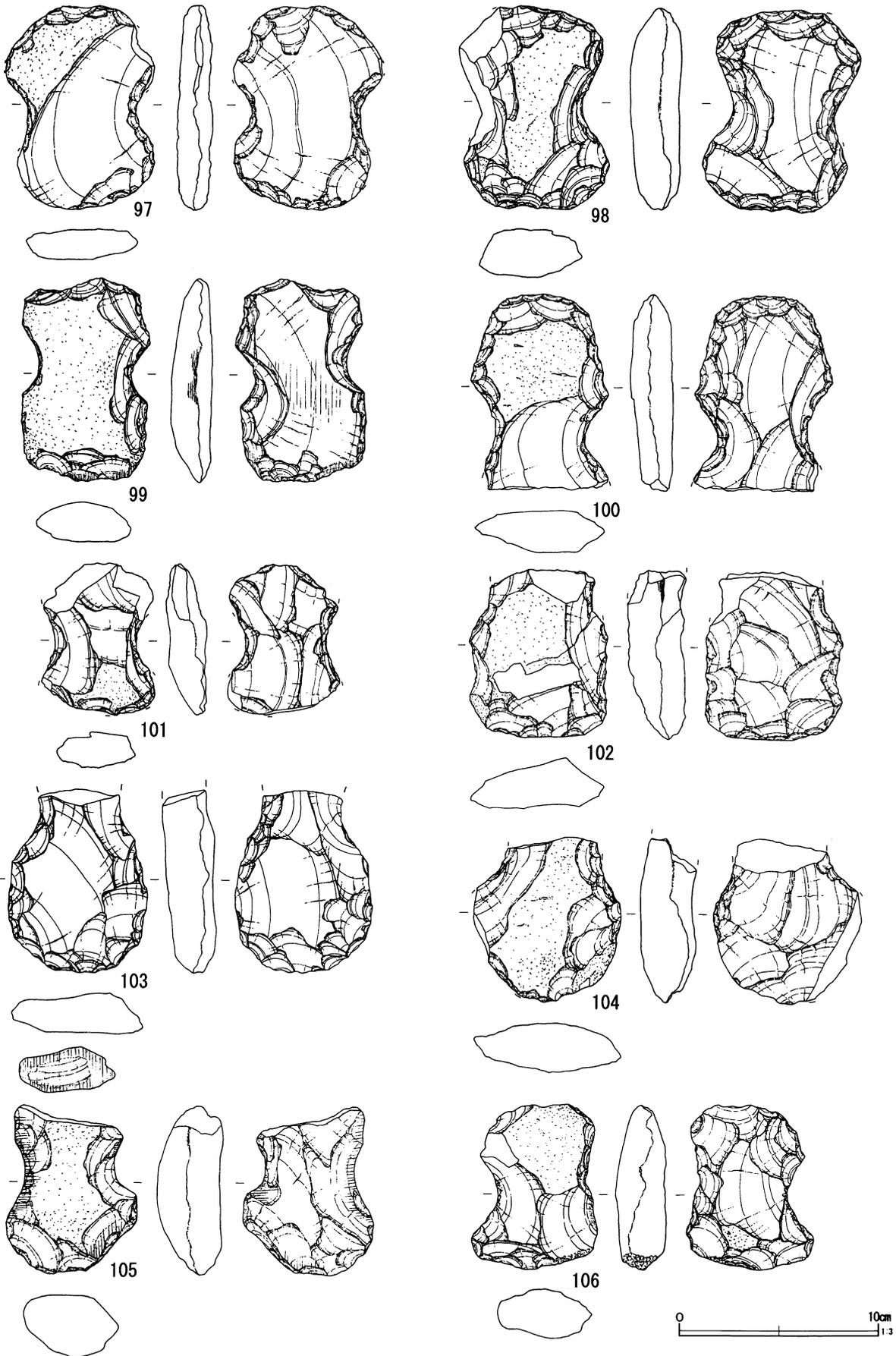
102～104は基部を欠損するものである。102は刃部が平刃となるもので、99と同様の形状のものであったと考えられる。風化が著しいものである。103、104は刃部の形状が丸刃のもので、残存部から側縁部には深い抉りが入っていたと考えられる。103は比較的形状が調整により、整えられているものである。やや風化している。104は表面に自然面を大きく残すもので、調整は粗雑で形状は整えられていない。器面は風化が著しい。

105は磨耗が著しいもので、99と同様に抉り部分は剥離が消え、研磨状となっている。また基部の割れ口部分も磨耗しており、基部破損後も使用していたと考えられる。

106は左側縁部の抉り部分と、刃部に敲打痕が確認できるもので、敲石としても利用した可能性も考えられる。



第 145 図 グリッド出土石器 (6)



第146図 グリッド出土石器(7)

砥石 (第 147 図 107～122、第 148 図 123～129)

a 有溝のもの (107～122)

器面に溝状の窪みを有するものである。

107～118、120 は小形で薄手に作り出されるものである。107 は表面に縦方向の溝が残る。中央部分には孔が穿たれているが、孔の使用目的については不明である。縁辺は鋭角となっている。108 は側縁のすべてに、半円状の抉りが残されている。109 は側縁部に抉りを加えて、形状を作り出している。両面に 1 条ずつ溝が残存する。110 は平形が楕円状になるもので、縁辺は鋭角である。溝は表面に 3 条、裏面に 1 条残存している。111 は方形状に作り出されたと考えられるもので、縁辺は鋭角となっている。113 の裏面には擦痕状の溝が残存している。縁辺は鋭角になっている。112・113 は縦長のもので、縁辺は鋭角となっている。両面に溝が残存している。115 は楕円状のもので、両面に複数の溝が残存している。縁辺は鋭角となっている。116 は裏面に長軸方向から、斜め方向に幅の狭い溝が残存しているものである。縁辺は鋭角となっている。117 は小形で薄手に作り出されるものであるが、縁辺は丸みをおびたままである。表面に幅広のごく浅い溝が残されている。118 は表面に幅広の浅い溝が残存しているもので、縁辺は鋭角となっている。120 は表面に 1 条の幅が広い溝が残っている。縁辺は鋭角となっている。

119、121 は中形のもので、やや厚手のものである。縁辺は丸みをおびたままで、使用はなされていないものである。119 は表面に複数の溝が残されている。裏面は割れた面をそのまま使用している。121 の表面は使用のため、窪んでいる。裏面には方向が一定しない溝が、複数残存している。

122 は比較的大形のもので、上部、下部を欠損するものである。表裏面ともに良く使用されている。表面には溝が 1 条残されている。

b 無溝のもの (123～129)

器面に溝状の窪みを有さないものである。いずれも小形で薄手のものである。

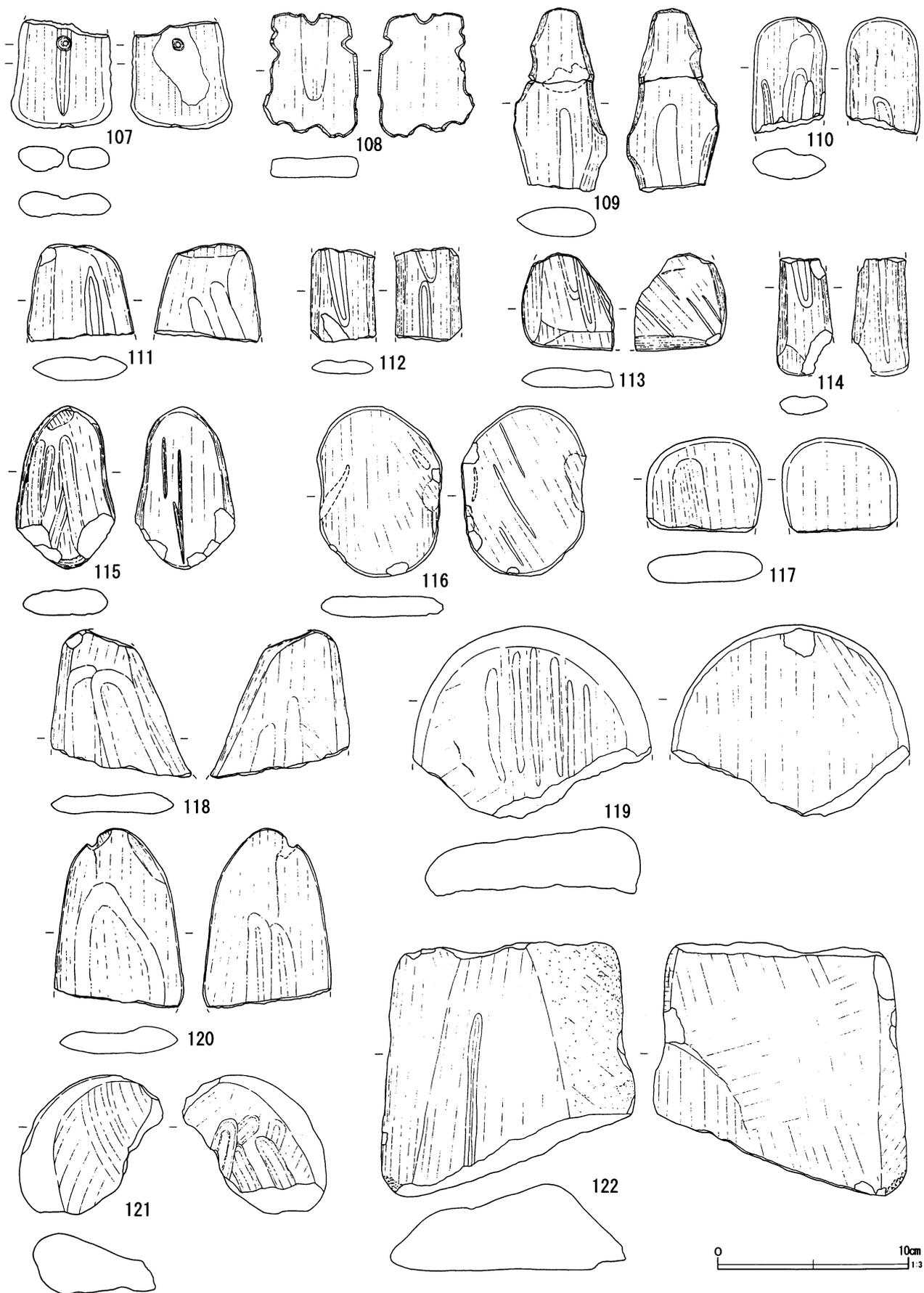
123 は使用による面が残存しているもので、縁辺は鋭角となっている。124 は破片であるが、楕円形状となると考えられるものである。縁辺は鋭角となっている。125 は縦長に作り出されるもので、縁辺は鋭角となっている。126 は両面を使用するもので、縁辺は丸みをおびている。127 は不定形である。128 は縁辺に部分的に半円状の抉りが残るものである。129 も 128 と同様に縁辺に半円状の抉りが残されているものである。

敲石 (第 148 図 130～138、第 149 図 139～151、第 150 図 152～162、第 151 図 163～169)

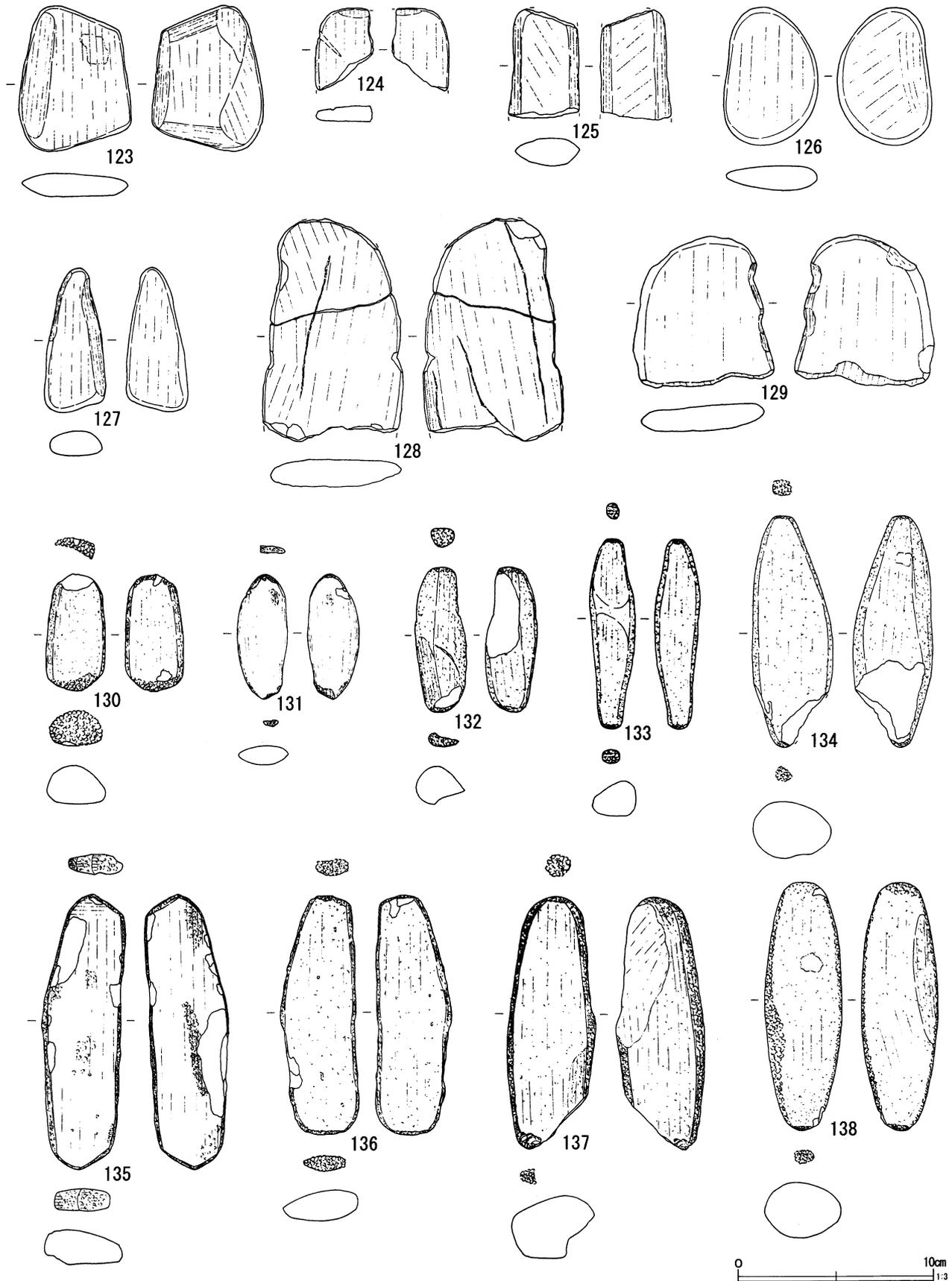
敲石としたものは、磨面を持つものがほとんどで、磨石としての機能も併せ持っていたと考えられる。そのため大きくは、磨石類として分類すべきであるかもしれないが、ここでは上下端部、側縁部に敲打面が明瞭に認められたものを敲石として分類することとした。また敲打面も磨れているものがほとんどであるが、敲打によって擦れているのか磨面として磨っているのかは明確ではない。

130～142 は棒状のものである。130～134 は上端と下端に敲打面が残存するものである。素材となる礫の形状をそのまま利用するものである。上端、下端面はともに敲打のため平坦になっている。135～142 は側縁部にも敲打面が認められるものである。135、136 は薄手のものである。135 は上端に斜め方向に 2 面の敲打面を持つものである。側縁も敲打によって、面取りがなされている。また表面にも敲打痕が残存する。両面ともに磨面を持っている。136 は両側縁に敲打面を持ち、両面に磨面を持っている。137～142 は肉厚なものである。側縁部は敲打によって、面取りがなされている。またいずれも、両面が磨面として丁寧に使用されている。137 は下端の敲打によって、一部が破損するものである。139 は左側縁が破損している。

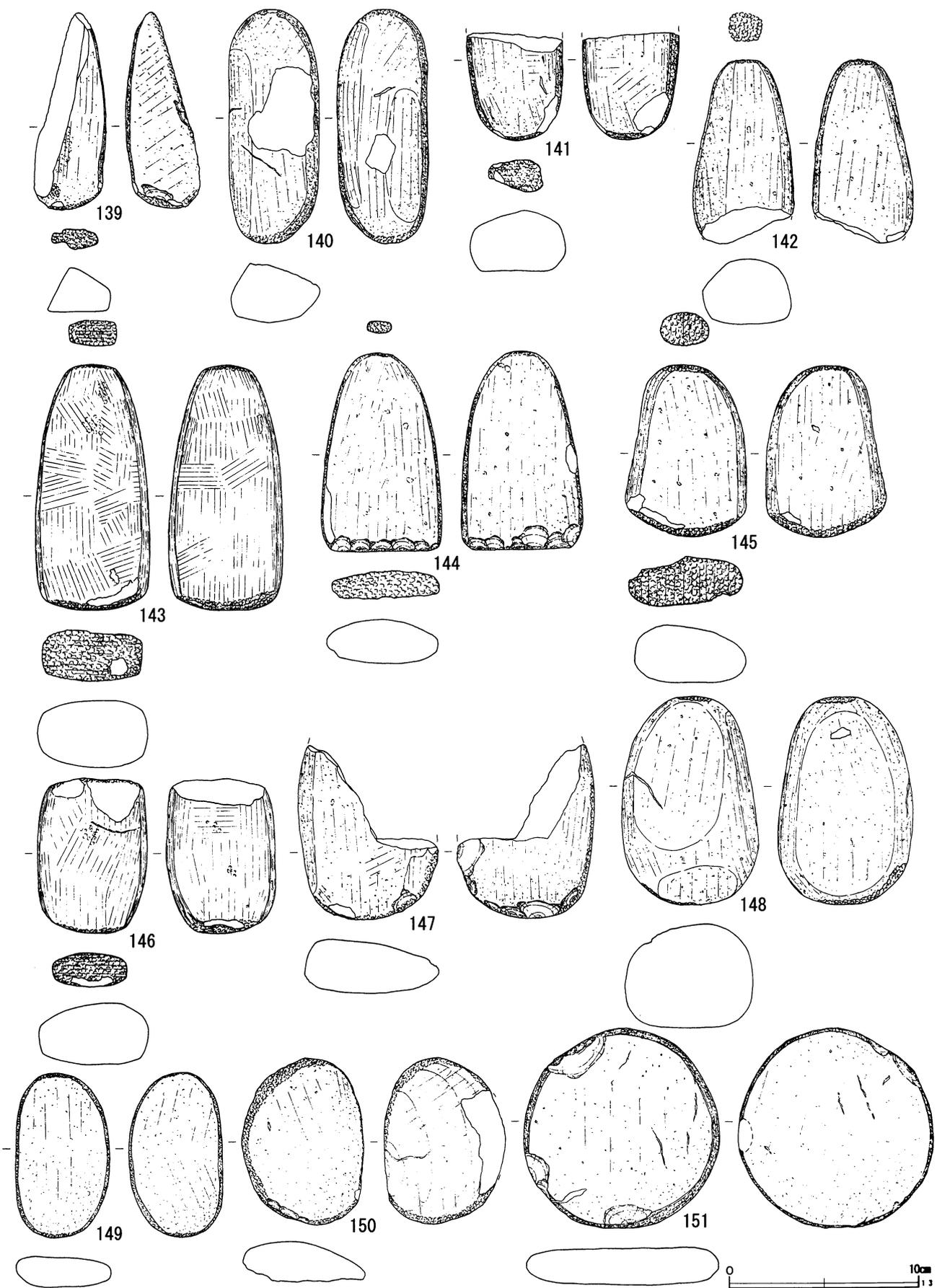
143～148 は下端がやや平坦となる台形状のものである。143 は上端と下端を敲打面として使用するものであるが、器面には丁寧に研磨がなされており、



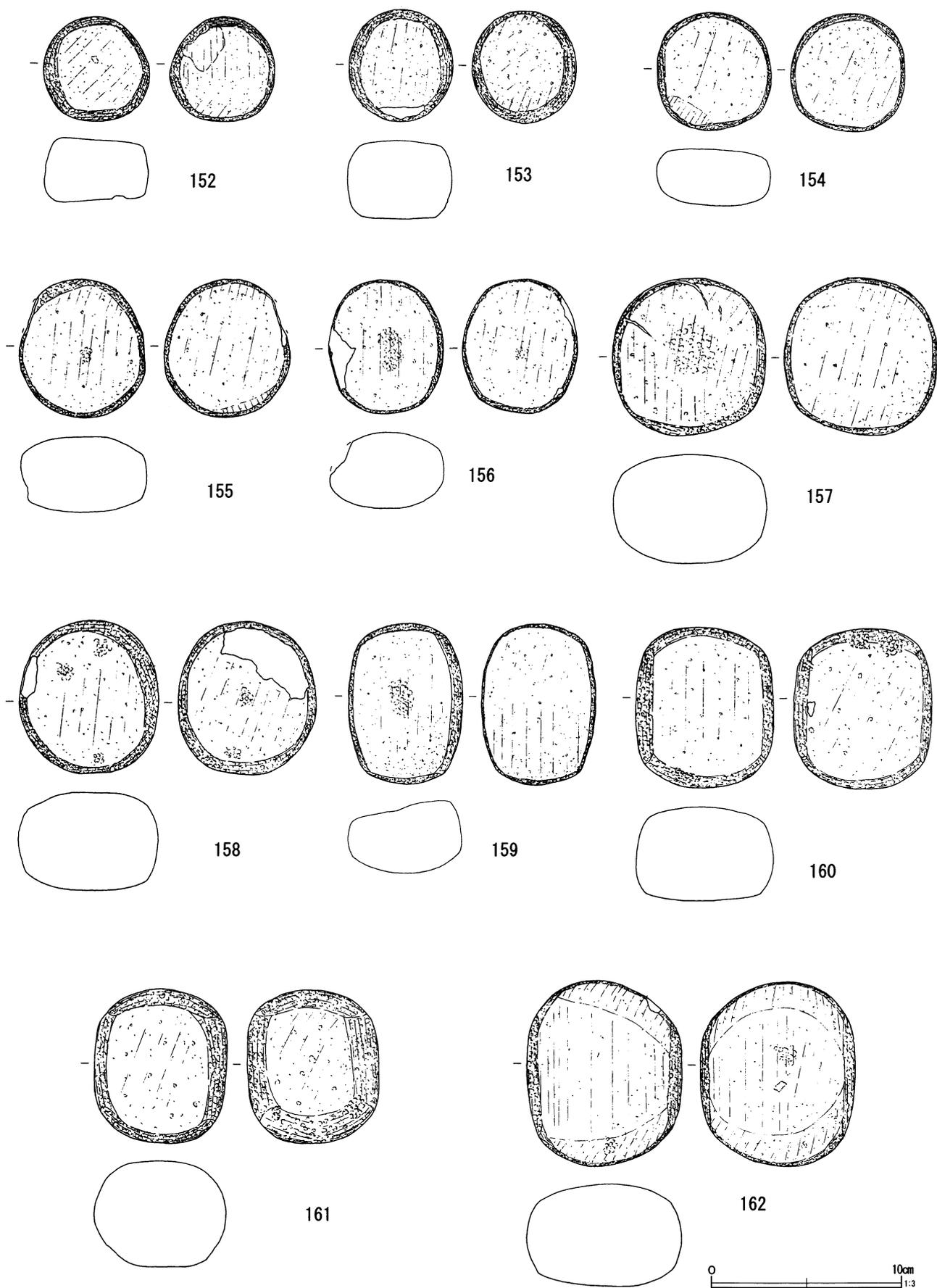
第 147 図 グリッド出土石器 (8)



第148図 グリッド出土石器(9)



第 149 図 グリッド出土石器 (10)



第 150 図 グリッド出土石器 (11)

磨製石斧を敲石として、再利用したものであると考えられる。144・145は上端と下端を敲打面として使用するものである。144には下端面を作り出すための、剥離が認められる。146は上端が破損するものである。148は表裏面と両側面が磨面としても使用されている。

149～151は楕円形で、扁平な礫を素材として使用するものである。周縁全体に敲打痕が認められる。

152～167、169は肉厚な礫を素材として使用したもので、周縁全体に敲打痕が認められ、周縁部は敲打によって、面取りがなされているものである。表裏面はいずれも磨面として良く使用がなされており、光沢を持つほど滑らかとなっているものである。また器面上に敲打痕が認められるものも多い。152～156は小形のもので、楕円形状のものである。157・158は球状に近いものである。156と157の表面には敲打痕が多く残されている。159～164は敲打によって、方形状に作り出されたものである。160の上端は特に敲打が顕著に加えられ、磨った痕跡は認められなかった。162は表裏面の磨面に、面取りが認められる。163は両面に敲打痕が認められるものである。165～167、169は楕円形状のものである。周縁全体に形状に合わせて、敲打面が作り出されている。

168は不定形な礫を素材としたもので、周縁全体を敲打されている。表面中央にも敲打痕が認められる。また裏面には溝状の窪みが1条認められ、砥石としても使用されていたと考えられる。

凹石（第152図170～181、第153図182・183）

凹石としたものには、そのすべてに磨面が認められ、また敲打面をもつものが多く、磨石にも敲石にも分類できるものである。しかしながら、ここでは凹部が器面に認められるものを、すべて凹石としてここに含めた。

170～173は片面にのみ凹部や、敲打痕が認められるものである。171は片面に2箇所、他は1箇所凹部が認められる。側縁にはいずれも敲打が認められ、171は面取りがなされている。172は右側縁に

磨面を持っている。他は表裏面に磨面を持っている。173は裏面が欠損しているため、あるいはなんらかの使用があった可能性もある。

174～177は表面に1箇所の凹部、裏面には敲打痕が認められるものである。側縁はいずれも敲打によって面取りがなされている。凹部、敲打痕ともに器面の中央付近に認められる。表裏面は磨面が認められる。177は表面にも敲打痕が認められる。

178～180は両面に凹部が認められるものである。側縁は敲打によって、面取りがなされている。磨面は表裏面に認められる。178は表裏面に、1箇所ずつ凹部が認められる。179は表面に1箇所、裏面に2箇所凹部が認められる。180は表裏面に2箇所ずつ凹部が認められるものである。

181と182は表裏面以外にも凹部が認められるものである。181は表裏面と下端面に1箇所ずつ、右側面に2箇所の凹部が認められる。磨面も両面と周縁に認められる。182は表裏面に2箇所ずつ、左側面に3箇所凹部が認められる。側面には敲打によって、面取りがなされている。

183は大形のもので、球状の礫に表面に2箇所、裏面に1箇所の凹部が認められる。表裏面とも敲打痕が残り、また磨面としても使用している。周縁に敲打は認められなかった。

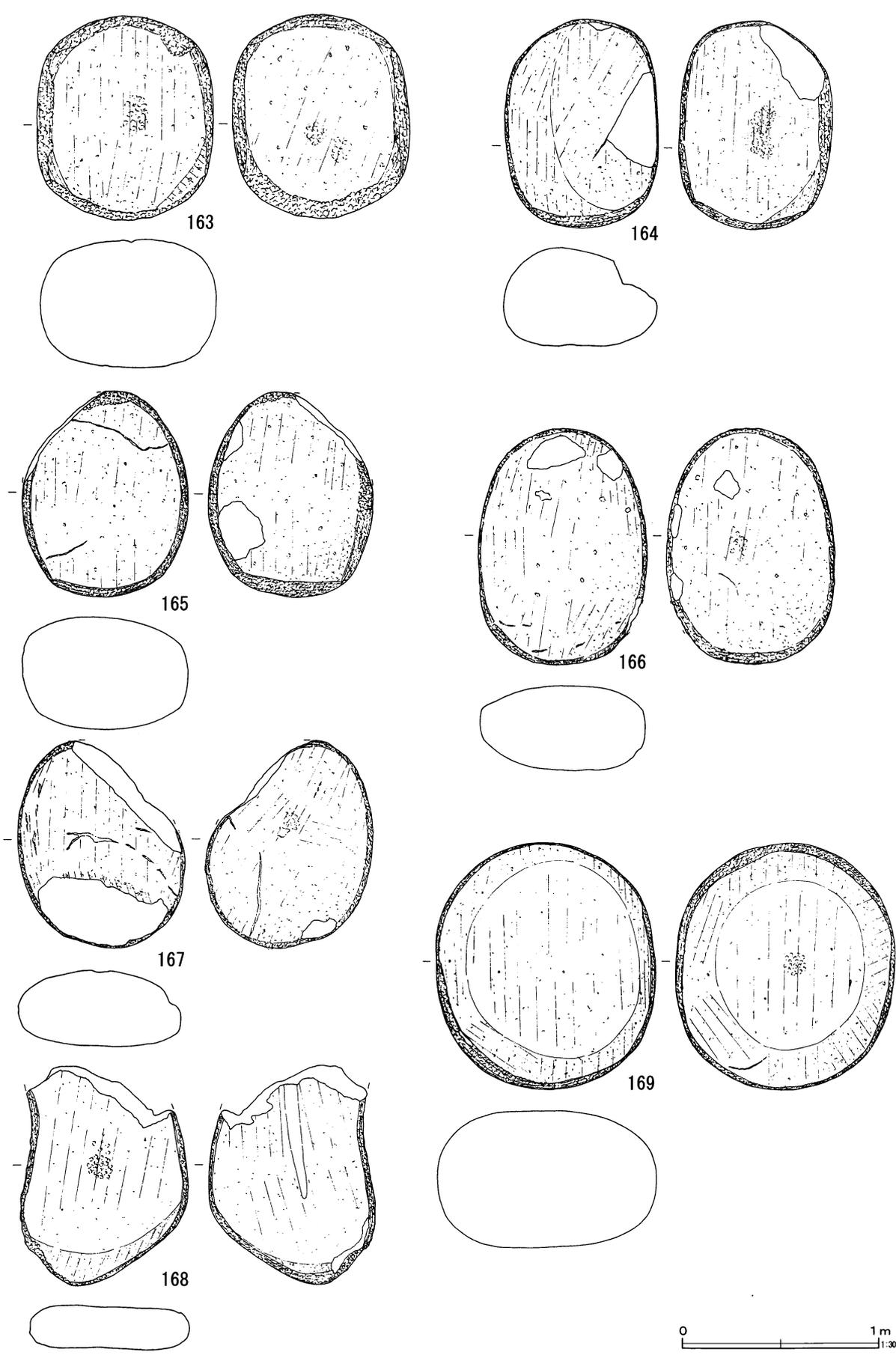
磨石（第153図184～195）

磨石のみが認められるもののみを、磨石としてここに分類した。

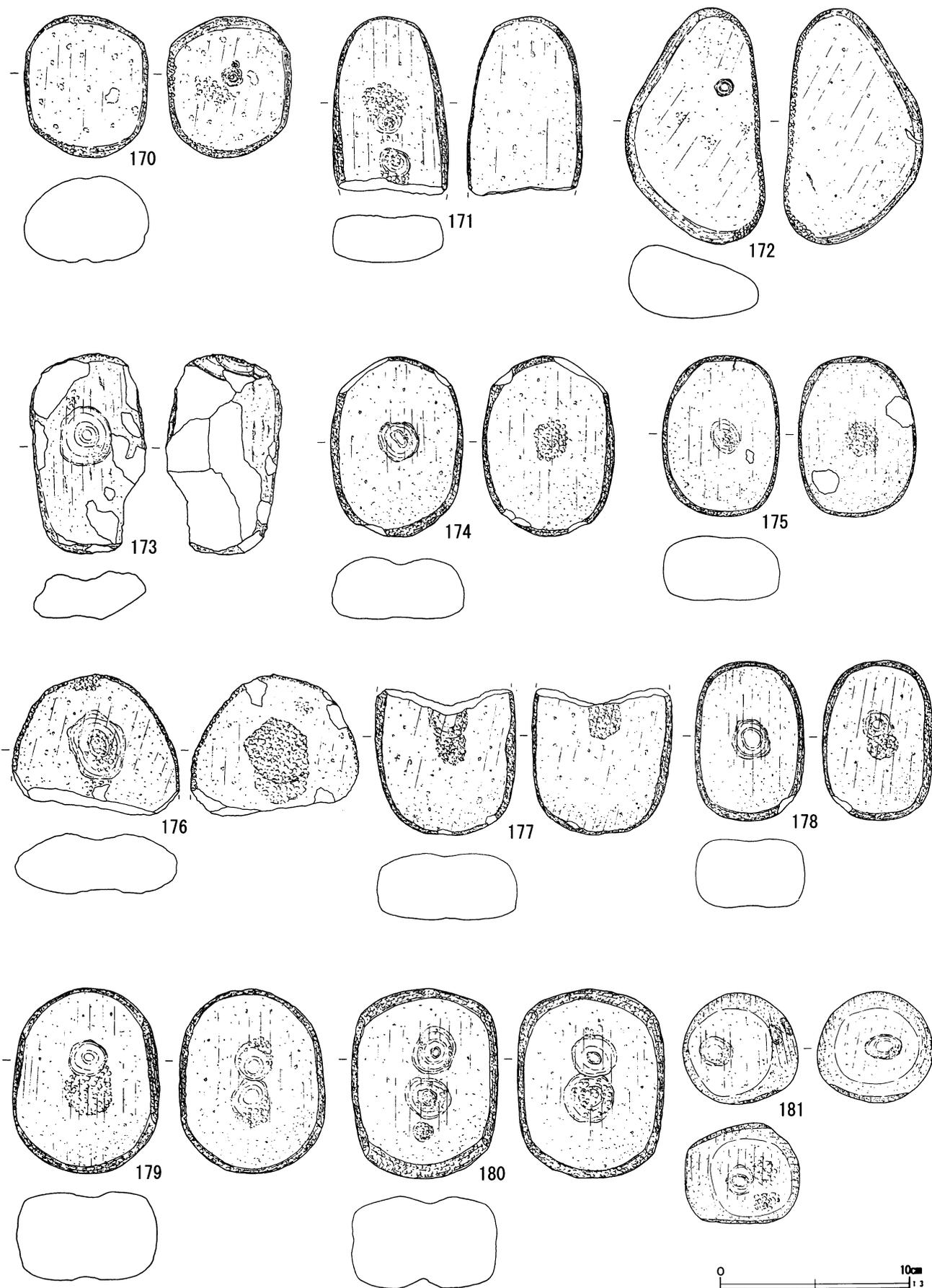
184と185は棒状のもので、いずれも横断面形が三角形となるものである。表裏面に磨面が認められる。

186～188は軽石製のものである。表裏面と周縁を使用している。

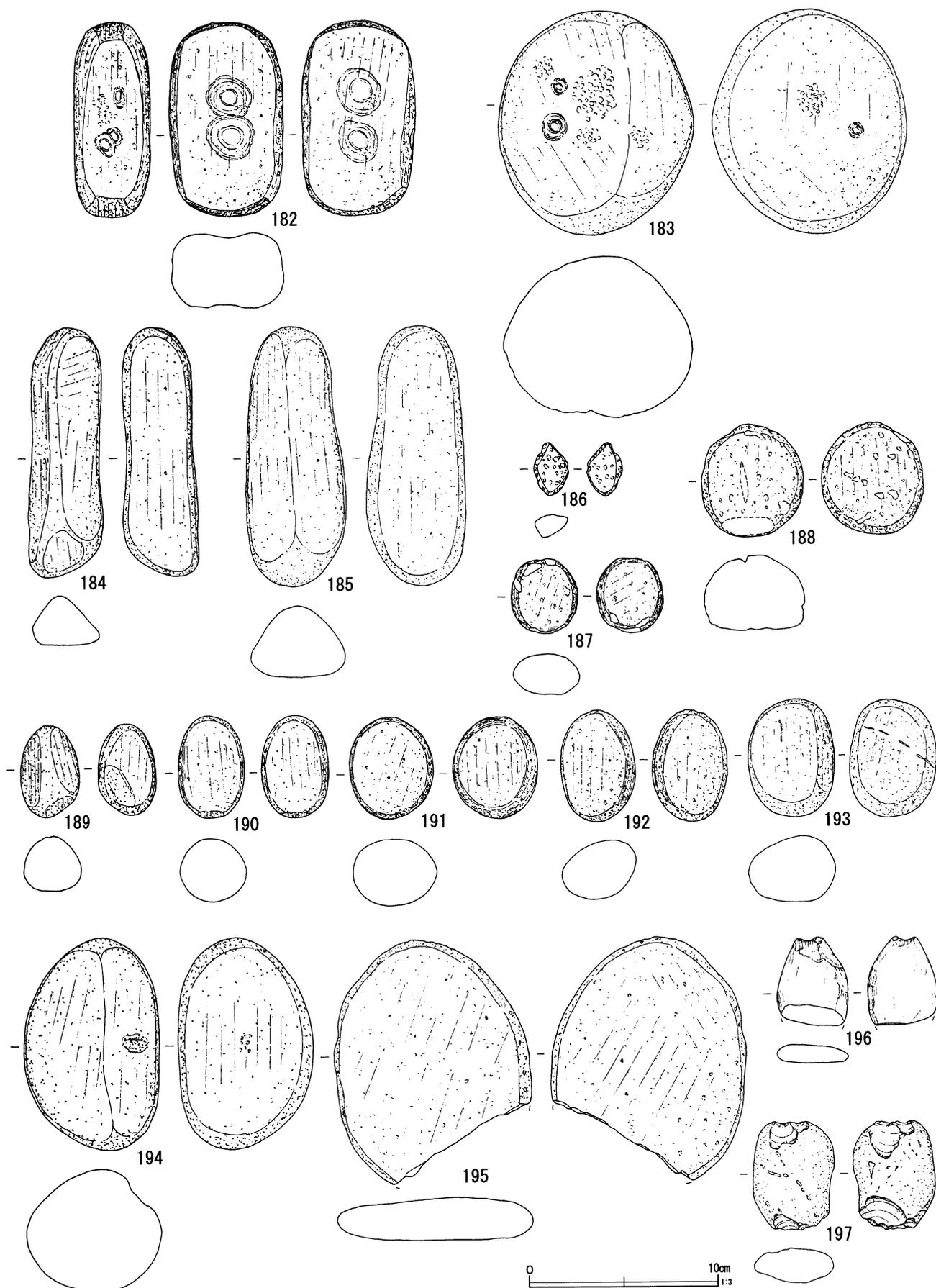
189～193は小形の礫を使用しているもので、いずれも厚手のものである。189は横断面形が三角形となるもので、表裏面と下端面を磨面としている。190は表裏面と両側面、下端面を磨面としているものである。191は表裏面と周縁をすべて磨面として



第151図 グリッド出土石器 (12)



第152図 グリッド出土石器 (13)



第153図 グリッド出土石器 (14)



第 154 図 グリッド出土石器 (15)



第155図 グリッド出土石器(16)

使用している。192・193は表裏面と右側面を磨面として使用している。

194と195は比較的大形のもので、194は肉厚な礫を、195は扁平な礫を使用し、磨面は両面である。

石錘(第153図196・197)

2点のみが出土している。

196は下部が欠損するものである。上端には刻みを剥離によって作り出した後に、全体に丁寧に研磨がなされている。

197は自然礫の上下端に刻みが入っているもので、研磨などはなされていない。

石皿(第154図198～202、第155図203～209)

ほとんどが破片の状態出土しているため、全体の形状が明確なもの少ない。

198は石棒を転用して、石皿として再加工しているものである。表面は平坦面を作り出した後に、窪みを作り出しており、そのための敲打痕が残存している。裏面も平坦面に加工し、中央部分に縦方向に並ぶように、凹部が複数認められる。

200は自然礫をそのまま石皿としているもので、両面を使用している。また器面中央には両面ともに、敲打痕と凹部が認められる。

199、201～208は礫を加工し、石皿としているものである。199は数少ない完形のもので、両面に窪みを作り出しており、両面ともに使用しているものである。両面の器面の中央には、凹部が1箇所ずつ認められる。201は両面に窪みを作り出して、使用しているものである。表面の縁部分には凹部が2箇所残存している。表面の窪み中央部分には、敲打痕が認められる。裏面の平坦部分にも使用が認められるものである。

202～207は表面に窪みを作り出しているものである。いずれも破片である。楕円形状のものであったと考えられるもので、202は表面の縁部分と、裏面に複数の凹部が認められる。203・204、206は裏面に凹部が認められる。203は薄手のものとなっている。204の裏面には凹部の他に敲打痕も残存している。205と207は両面と側縁に凹部が認められる。205は表面の窪んでいる部分に、凹部が複数残存しているものである。

208の表面は平坦であるが、破片であるため本来は窪みがあった可能性も考えられる。残存部分については、板状に作り出され、手前方向にゆるやかに傾斜している。凹部などは認められない。

209は窪みが表面に作り出され、裏面には凹部が複数認められる。破損された両側面は磨面としてしようされ、右側面には溝が残存しており、破損後に砥石として使用された可能性も考えられる。

石棒 (第156図210・211、215、220～222、第157図228)

横断面形が円形に近いものを石棒としてここに含めた。

210・211は頭部の破片で、丁寧に研磨がなされているものである。210の頭部は上下幅が狭く、その中に弧状の沈線を刻み、その中には円文を刻んでいる。また頭頂部は平坦に作りだされ、その中央に円文を1箇所刻んでいる。211は頸部が2段に加工されているもので、頭部には方形状の区画文や2条の沈線などが刻まれている。頭部の下端や頸部の2段

目部分には斜めに沈線が細かく刻まれている。頸部の括れ部分には、敲打痕が残存している。

215、220～222は胴部または下端部の破片である。215、220、221は丁寧に研磨されるものである。215は赤化しており、なんらかの熱が加わったと考えられる。220の下端は平坦面を作り出している。221は下端が尖頭状に作り出されているものである。222は他と比較し、研磨が粗雑なもので器面上と、下端面に敲打痕が残存するものである。

228は石棒の未製品と考えられるものである。素材となる礫の形状がほとんど残っているものである。剥離と敲打痕が残存し、加工の途中であったと考えられる。

石剣 (第156図212～214、216～219、223～225、第157図226・227)

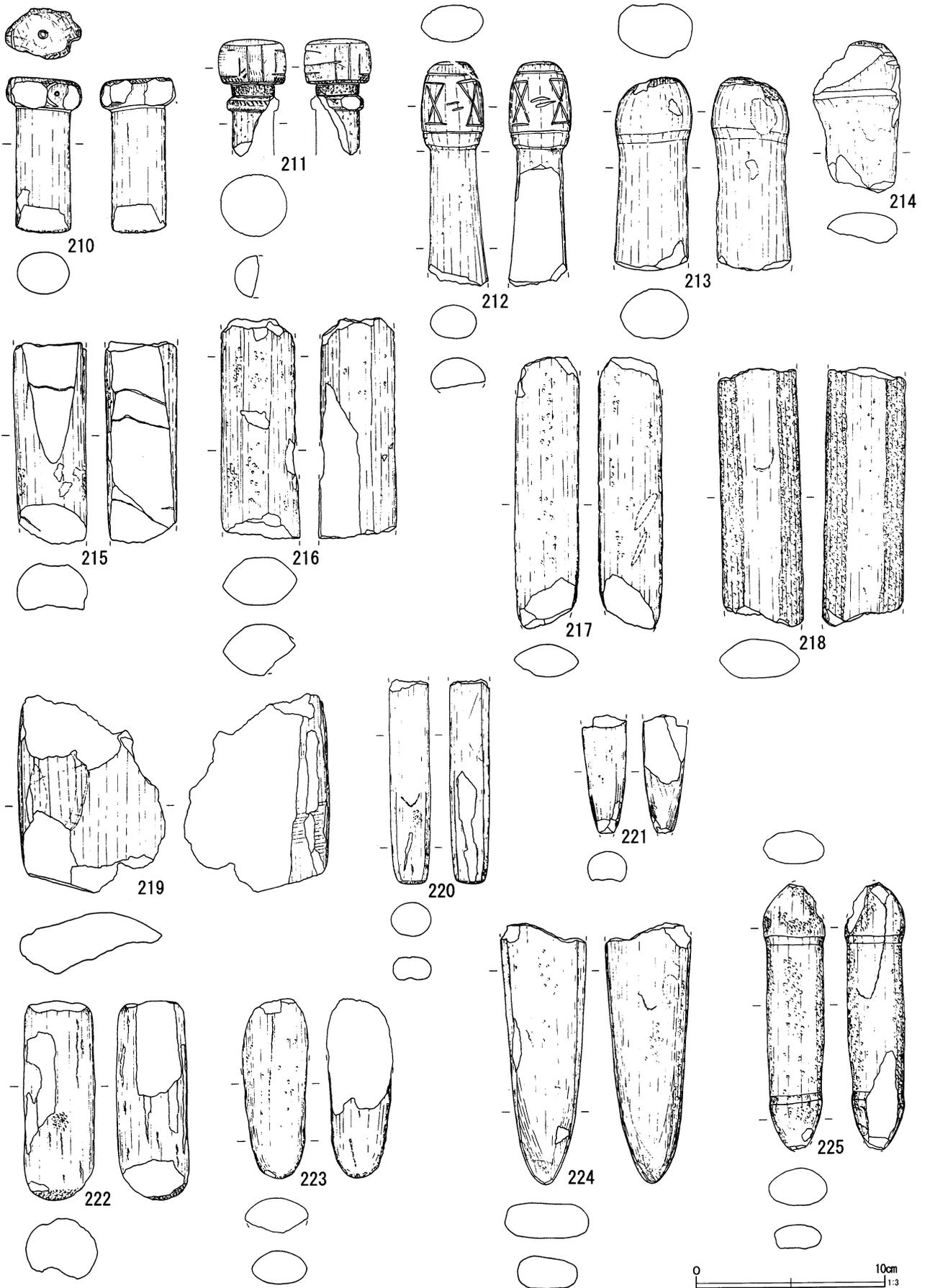
横断面形が扁平なものや、稜を有しているものを石剣としてここに含めた。

212～214は頭部の破片である。212は頭部に文様を刻むものである。頭部の上端と下端には沈線を巡らす。2本の沈線の内側には表裏面に同じ文様を刻む。文様は上下を沈線で閉じたx字状文を2箇所刻み、間に2条の沈線を刻む。213は無文で、頸部には括れを作り出している。214は破片であるが、頭部の上端に2条の沈線を巡らし、下端には1条の沈線を巡らす。頸部には浅い括れが入っている。

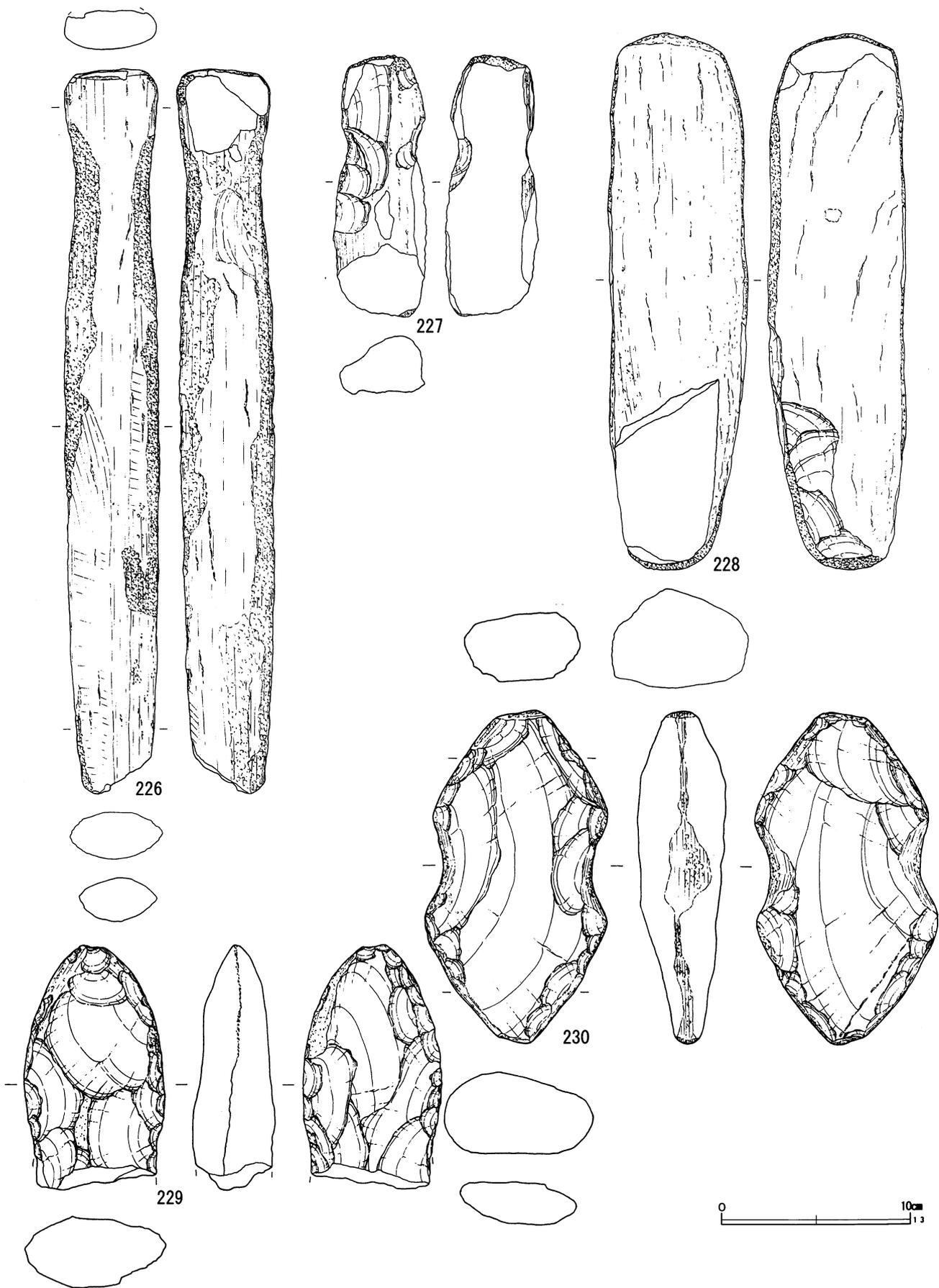
216～219、223・224は胴部または下端部の破片である。223は横断面形が方形状となるもので、他は側縁が鋭角となって、稜を持つものである。218は縁辺を鋭角に加工するための、敲打痕が残存している。219は破片ではあるが、大形のものと考えられる。

225は両頭のもので、断面形から石剣に含めた。それぞれの頸部には、浅い括れが入っている。また器面には敲打痕が認められ、研磨の途中であった可能性も考えられる。

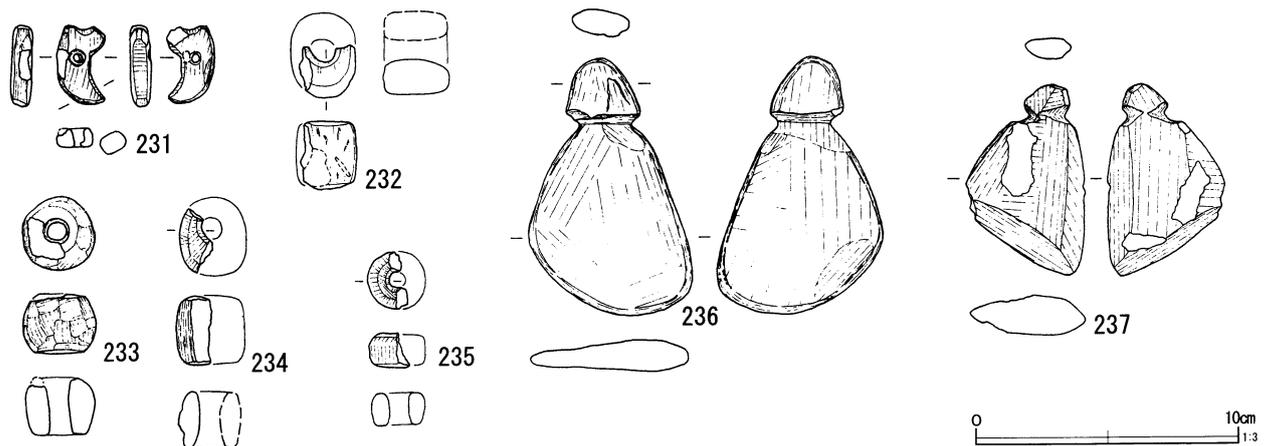
226・227は未製品と考えられるものである。226の形状は整っているが、敲打痕や剥離痕が残存して



第156図 グリッド出土石器(17)



第157図 グリッド出土石器 (18)



第158図 グリッド出土石器(19)

おり、研磨中の未製品と考えられるものである。

227は頭部の破片で、頸部の括れを作り出すための剥離が認められる。

独鈷石(第157図229・230)

独鈷石の未製品と考えられるものが、2点出土している。229は下部を破損するものである。扁平な礫を使用したもので、両面に自然面が残存している。剥離によって、上端部を尖頭状とし、中央部には括れを作り出している。敲打や研磨の痕跡は認められなかった。230は剥離によって形状を作り出した後、側縁部分と上下端部に敲打を加え、さらに研磨を施しているものである。

垂飾品(第158図231～237)

231は勾玉状のもので、頭部には円孔が穿たれている。全体を丁寧に研磨している。

232～235は玉状のものである。いずれも円形のものである。232は破片であるが、残存部からやや縦長なもので、中央には円孔が穿たれている。233は完形のもので、加工は面を取りながら研磨を加えていった痕跡が認められる。中央には円孔が穿たれている。234はやや縦長の玉の破片である。中央には円孔が穿たれている。235は上下に短いもので、破片である。

236・237は小形のスクレイパーの模造品と考えられるものである。ともにつまみ部分と考えられる括れを頭部に有している。全体の形状は研磨によ

り、丁寧に作り出されている。特に237は縁辺が鋭角に加工されている。

石核・原石(第159図238・239、第160図240～250)

今回の調査で特筆すべきなのは、黒曜石製の石核や原石が数多く出土したことである。またチャート製の石核も多量に出土している。それに伴って、今回図示はしなかったが、黒曜石の剥片、破片、チャート製の剥片、破片も多量に出土している。

a 石核(240～247)

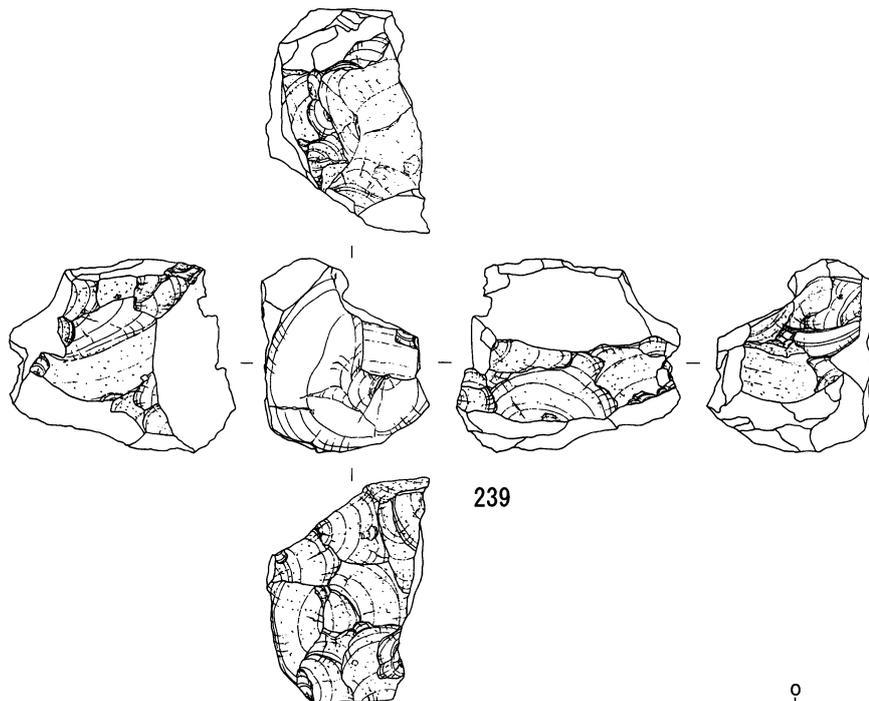
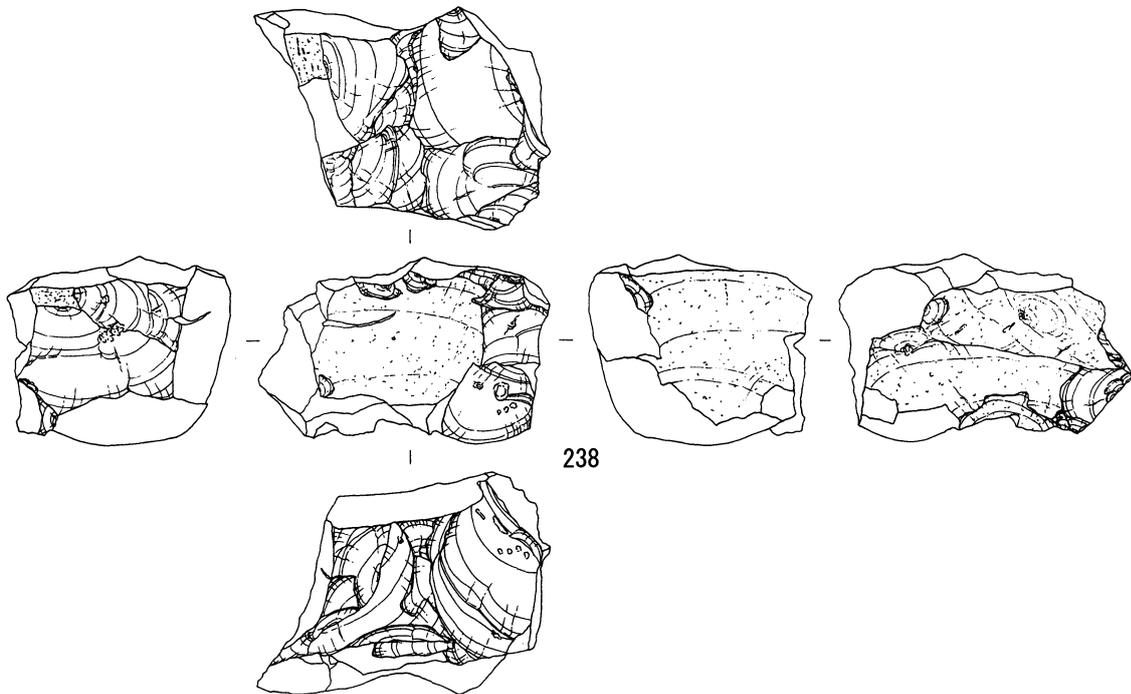
出土した石核のうち、ごく一部を図示した。

240～242は黒曜石製である。240は上端に礫面が残存するもので、他は剥離がなされている。241は上端と裏面に風化した礫面が残存するものである。242は表面に剥離がなされるのみのもので、他は風化面となっている。

243～247はチャート製である。243は比較的薄手となるもので両面等も剥離面のみが残存する。244は裏面に礫面が大きく残存する。245・246は角状のもので、1面に礫面が残存する。247は前面に剥離がなされるものである。

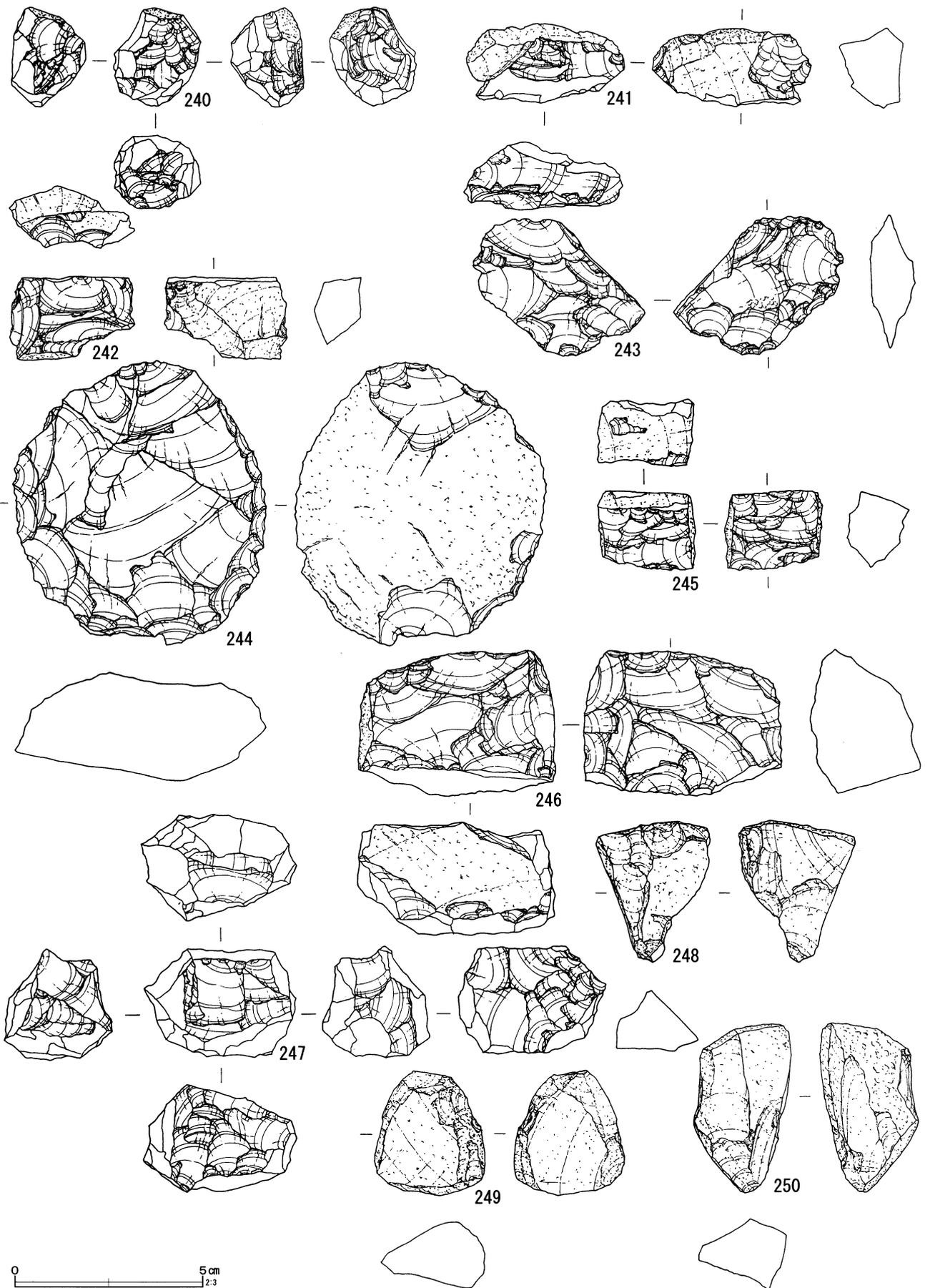
b 原石(238・239、248～250)

黒曜石製のものを図示した。238・239は大形のもので同時期の周辺の遺跡でも、このような大形の原石の出土例はない。また248～250のように小形のものも多く出土した。石核の大きさからも、小形の原石でも充分に使用可能であったと考えられる。



0 10cm
1:3

第 159 図 グリッド出土石器 (20)



第160図 グリッド出土石器 (21)

第6表 グリッド出土石器計測表(1)

図版	番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	備考
第140図	1	尖頭器	Q-8-19	12.8	3.4	1.6	60.8	黒色頁岩	
第140図	2	尖頭器	O-11-13・-110cm	7.5	3.0	1.0	24.3	凝灰岩	
第140図	3	尖頭器	O-10-23	4.3	2.4	1.2	9.4	チャート	
第140図	4	尖頭器	Q-10-17	3.1	2.1	0.8	4.1	めのう	
第140図	5	石鏃	P-11-7・-130cm	3.1	2.0	0.6	3.0	チャート	
第140図	6	石鏃	P-9-5・-100cm	2.5	1.8	0.7	2.7	チャート	
第140図	7	石鏃	P-10-10・-110cm	2.1	1.3	0.5	1.0	黒曜石	
第140図	8	石鏃	P-11-5・-100cm	1.9	1.55	0.3	0.5	黒曜石	
第140図	9	石鏃	P-12 No.5	1.2	1.1	0.2	0.1	黒曜石	
第140図	10	石鏃	O-11-22・-80cm	1.7	1.5	0.5	0.8	黒曜石	
第140図	11	石鏃	Q-11-22・-120cm	1.3	1.3	0.4	0.4	黒曜石	
第140図	12	石鏃	P-10-18・-100cm	1.4	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
第140図	13	石鏃	P-12-8・-120cm	1.3	1.3	0.3	0.2	黒曜石	
第140図	14	石鏃	P-10-7・-110cm	1.4	1.3	0.3	0.2	黒曜石	
第140図	15	石鏃	Q-8-13	1.4	1.2	0.3	0.2	黒曜石	
第140図	16	石鏃	P-10-2・-120cm	1.2	1.3	0.3	0.3	黒曜石	
第140図	17	石鏃	O-10-21	1.5	1.2	0.3	0.2	黒曜石	
第140図	18	石鏃	O-11-23・-90cm	1.8	1.6	0.4	0.7	黒曜石	
第140図	19	石鏃	P-10-15・-110cm	1.4	1.7	0.3	0.5	黒曜石	
第140図	20	石鏃	P-10-1・-100cm	1.0	1.5	0.3	0.4	黒曜石	
第140図	21	石鏃	Q-7-4	1.3	1.7	0.3	0.4	黒曜石	
第140図	22	石鏃	Q-8-22	1.4	1.9	0.3	0.6	黒曜石	
第140図	23	石鏃	P-10-19・-110cm	1.5	1.0	0.4	0.3	黒曜石	
第140図	24	石鏃	O-11-16・-90cm	1.7	1.4	0.3	0.4	黒曜石	
第140図	25	石鏃	P-10-18・-120cm	1.7	1.4	0.5	0.6	黒曜石	
第140図	26	石鏃	P-10-7・-110cm	1.8	1.8	0.3	0.7	黒曜石	
第140図	27	石鏃	P-11-20・-130cm	2.4	2.0	0.3	0.9	黒曜石	
第140図	28	石鏃	P-10-6 R直上	2.2	2.0	0.4	1.1	黒曜石	
第140図	29	石鏃	P-7-10・-130cm	2.2	1.6	0.3	0.7	黒曜石	
第140図	30	石鏃	Q-11-16・-120cm	2.1	1.5	0.3	1.4	黒曜石	
第140図	31	石鏃	P-11-6・-120cm	2.7	1.8	0.9	3.0	チャート	
第140図	32	石鏃	P-12・-100cm	1.7	1.2	0.3	0.5	黒曜石	
第140図	33	石鏃	P-10-8・-110cm	3.0	1.9	0.7	3.0	チャート	
第141図	34	石鏃	P-8-20 R直上	2.8	2.0	0.5	1.7	黒曜石	
第141図	35	石鏃	P-10-18・-110cm	2.3	1.5	0.5	1.0	チャート	
第141図	36	石鏃	O-12-16	2.6	1.35	0.5	1.4	チャート	
第141図	37	石鏃	P-10-8・-100cm	2.6	1.7	0.4	1.3	チャート	
第141図	38	石鏃	O-11-14・-90cm	1.8	1.6	0.6	1.2	黒曜石	
第141図	39	石鏃	O-10-23	1.8	1.4	0.4	0.8	チャート	
第141図	40	石鏃	O-12-24・-110cm	1.8	1.2	0.3	0.5	黒曜石	
第141図	41	石鏃	P-9-7・-90cm	2.1	1.7	0.7	2.1	黒曜石	
第141図	42	石錐	Q-10-14	2.7	2.0	0.8	2.3	黒色頁岩	
第141図	43	石錐	P-9-11・-130cm	2.9	1.4	1.1	3.0	チャート	
第141図	44	石錐	P-11-21・-100cm	2.9	1.8	0.7	2.7	チャート	
第141図	45	石錐	P-10・-110cm	2.1	1.5	0.6	1.5	黒曜石	
第141図	46	石錐	P-11-18・-100cm	2.6	1.5	0.4	1.2	チャート	
第141図	47	スクレイパー	P-12-1・-120cm	1.7	2.1	0.7	2.0	黒曜石	
第141図	48	スクレイパー	P-10-8・-110cm	2.0	2.0	0.6	2.1	チャート	
第141図	49	スクレイパー	P-10-12・-100cm	3.4	1.9	0.7	3.2	黒曜石	
第141図	50	スクレイパー	表採	3.3	5.8	1.1	15.4	チャート	

第7表 グリッド出土石器計測表(2)

図版	番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	備考
第141図	51	スクレイパー	P-12-17・-120cm	3.0	4.0	1.2	10.5	黒色頁岩	
第141図	52	スクレイパー	O-12-19	1.9	3.1	0.6	2.8	黒曜石	
第141図	53	スクレイパー	P-11-6・-90cm	2.6	3.1	0.6	2.8	チャート	
第141図	54	くさび形石器	P-9-23・-100cm	2.3	3.1	1.4	9.8	チャート	
第141図	55	くさび形石器	P-10-3・-110cm	2.9	2.4	1.1	9.0	チャート	
第141図	56	くさび形石器	Q-11-17・-120cm	2.3	2.0	0.8	3.3	黒曜石	
第141図	57	くさび形石器	Q-9-1	2.3	2.2	1.0	4.0	黒曜石	
第141図	58	くさび形石器	O-12-21	1.9	1.8	0.7	2.3	チャート	
第142図	59	磨製石斧	Q-10-10・-110cm	4.2	2.6	1.1	19.6	蛇紋岩	
第142図	60	磨製石斧	Q-9-20	7.3	3.7	1.6	62.9	凝灰岩	
第142図	61	磨製石斧	P-11-2・-80cm	2.5	4.1	1.8	18.2	凝灰岩	
第142図	62	磨製石斧	O-12-22	15.9	5.1	3.8	475.0	凝灰岩	
第142図	63	磨製石斧	Q-9-20	10.5	4.9	3.1	291.0	凝灰岩	
第142図	64	磨製石斧	P-9-23・-110cm	11.7	4.9	2.6	278.7	凝灰岩	
第142図	65	磨製石斧	O-11-23・-110cm	10.7	4.9	3.0	261.1	凝灰岩	
第142図	66	磨製石斧	P-9 No.2	8.0	4.5	2.4	152.5	凝灰岩	
第142図	67	磨製石斧	P-12-1・-120cm	9.7	4.7	2.6	187.4	凝灰岩	
第142図	68	磨製石斧	表採	13.3	7.0	2.0	248.2	凝灰岩	
第143図	69	磨製石斧	Q-10 No.6	19.0	5.6	4.0	650.5	凝灰岩	
第143図	70	磨製石斧	Q-11-22・-130cm	10.2	4.4	3.3	191.1	凝灰岩	
第143図	71	磨製石斧	Q-11-23・-120cm	8.4	7.1	3.1	296.2	凝灰岩	
第143図	72	磨製石斧	O-11-21・-110cm	8.9	6.1	4.2	201.5	凝灰岩	
第143図	73	磨製石斧	P-10-17・-110cm	11.8	9.3	2.0	302.0	緑泥片岩	
第143図	74	打製石斧	P-10-14 R直上	15.0	5.8	2.3	230.6	ホルンフェルス	
第143図	75	打製石斧	Q-11-8・-110cm	13.5	5.3	2.8	256.6	凝灰岩	
第143図	76	打製石斧	P-9-2・-100cm	12.8	5.3	2.2	204.7	ホルンフェルス	
第144図	77	打製石斧	P-9-1	14.5	5.1	2.7	260.7	ホルンフェルス	
第144図	78	打製石斧	P-10-18・-110cm	11.8	5.0	1.5	98.2	ホルンフェルス	
第144図	79	打製石斧	P-10-17・-120cm	7.3	4.8	2.1	81.6	ホルンフェルス	
第144図	80	打製石斧	O-12-11	10.5	5.8	1.9	135.7	砂岩	
第144図	81	打製石斧	Q-10-6	9.1	3.7	1.2	58.4	黒色安山岩	
第144図	82	打製石斧	P-10-23・-120cm	14.0	6.6	1.7	250.9	緑泥片岩	
第144図	83	打製石斧	O-12-22	12.0	6.0	2.8	199.3	ホルンフェルス	
第144図	84	打製石斧	P-10-23・-120cm	12.6	6.8	2.3	256.7	砂岩	
第144図	85	打製石斧	P-7	16.3	7.9	3.0	407.2	ホルンフェルス	
第144図	86	打製石斧	Q-10 No.11	8.8	6.7	2.5	136.8	ホルンフェルス	
第144図	87	打製石斧	Q-11-15・-120cm	9.8	7.5	1.6	114.8	頁岩	
第145図	88	打製石斧	Q-8-20	13.5	6.2	2.2	237.0	ホルンフェルス	
第145図	89	打製石斧	Q-10-3	12.7	6.4	2.6	250.8	絹雲母片岩	
第145図	90	打製石斧	P-11-14・-110cm	11.1	5.0	1.8	131.4	ホルンフェルス	
第145図	91	打製石斧	P-10-17・-100cm	18.1	10.5	3.6	744.8	ホルンフェルス	
第145図	92	打製石斧	Q-8-3	12.8	7.2	2.9	301.0	ホルンフェルス	
第145図	93	打製石斧	P-11-10・-110cm	12.7	6.5	2.1	154.0	ホルンフェルス	
第145図	94	打製石斧	P-10-16-130cm	11.4	7.5	3.3	284.3	頁岩	
第145図	95	打製石斧	Q-10 No.12	9.9	7.6	2.8	188.1	ホルンフェルス	
第145図	96	打製石斧	P-11-1・-120cm	9.8	6.8	2.6	172.0	ホルンフェルス	
第146図	97	打製石斧	Q-10-19	10.3	7.5	1.8	174.7	ホルンフェルス	
第146図	98	打製石斧	P-10-12・-100cm	10.2	7.9	2.6	248.7	結晶片岩	
第146図	99	打製石斧	P-9-1	10.2	6.6	2.0	180.8	ホルンフェルス	
第146図	100	打製石斧	Q-11-20 R直上	9.8	7.0	2.2	171.3	砂岩	

第8表 グリッド出土石器計測表(3)

図版	番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	備考
第146図	101	打製石斧	P-10-24・-110cm	7.6	5.7	2.1	97.6	緑泥片岩	
第146図	102	打製石斧	P-12-1・-120cm	8.4	6.9	2.9	197.3	ホルンフェルス	
第146図	103	打製石斧	P-10-6・-110cm	9.2	7.0	2.7	188.6	頁岩	
第146図	104	打製石斧	P-9-14 R直上	8.3	7.4	2.8	184.9	ホルンフェルス	
第146図	105	打製石斧	Q-10-14	8.4	6.6	3.3	196.1	ホルンフェルス	
第146図	106	打製石斧	O-12-12	8.3	6.3	2.7	151.3	砂岩	
第147図	107	砥石	P-7-23 R直上	5.7	5.3	1.4	45.9	砂岩	
第147図	108	砥石	P-10-8・-100cm	6.5	5.0	1.2	46.	砂岩	
第147図	109	砥石	O-11-23・-90cm	9.7	4.9	1.6	67.0	砂岩	
第147図	110	砥石	P-8-23・-110cm	6.2	3.9	1.7	61.2	緑泥片岩	
第147図	111	砥石	O-12-18	5.2	5.6	1.3	41.0	砂岩	
第147図	112	砥石	O-12-22	5.0	3.4	0.7	15.3	砂岩	
第147図	113	砥石	P-10-4・-110cm	5.2	4.8	1.2	34.0	砂岩	
第147図	114	砥石	P-11-5・-90cm	6.3	2.9	1.1	22.4	砂岩	
第147図	115	砥石	P-7-9・-130cm	8.5	5.2	1.4	78.6	砂岩	
第147図	116	砥石	P-8-23・-100cm	8.9	6.5	1.2	86.9	砂岩	
第147図	117	砥石	P-10-23・-110cm	5.0	6.1	1.7	75.2	砂岩	
第147図	118	砥石	P-10-2・-130cm	7.8	7.3	1.4	64.0	砂岩	
第147図	119	砥石	Q-11-11・-120cm	10.0	12.5	3.8	481.5	砂岩	
第147図	120	砥石	P-10-2・-110cm	9.5	6.7	1.6	90.9	砂岩	
第147図	121	砥石	Q-10-13・-120cm	7.3	7.5	3.3	167.5	砂岩	
第147図	122	砥石	P-11-3・-90cm	13.4	13.2	4.5	970.3	砂岩	
第148図	123	砥石	P-7-18・-120cm	7.5	5.7	1.3	53.4	砂岩	
第148図	124	砥石	P-10-3・-110cm	4.2	3.0	0.9	10.5	砂岩	
第148図	125	砥石	P-9-3・-100cm	5.7	3.7	1.5	28.0	砂岩	
第148図	126	砥石	P-9-9・-120cm	7.0	4.8	1.4	49.9	砂岩	
第148図	127	砥石	P-9-4・-90cm	7.4	3.1	1.3	42.2	砂岩	
第148図	128	砥石	O-12 No30	11.4	7.1	1.5	132.2	砂岩	
第148図	129	砥石	O-12-12	7.8	7.2	1.4	79.1	砂岩	
第148図	130	敲石	Q-12-6 R直上	6.0	3.0	2.1	55.5	砂岩	
第148図	131	敲石	O-10-20	6.4	2.6	1.0	23.7	砂岩	
第148図	132	敲石	P-8-23・-100cm	7.5	2.6	2.0	48.8	砂岩	
第148図	133	敲石	Q-10-9	9.7	2.3	2.1	55.2	凝灰岩	
第148図	134	敲石	P-10-14・-100cm	11.8	4.1	3.0	194.2	凝灰岩	
第148図	135	敲石	O-12-11 黒土	14.1	4.2	2.0	177.7	緑泥片岩	
第148図	136	敲石	Q-10-5・-100cm	12.3	4.0	1.9	124.0	凝灰岩	
第148図	137	敲石	P-10-12・-110cm	12.9	4.5	3.4	241.0	砂岩	
第148図	138	敲石	P-9-4・-130cm	12.7	3.9	2.9	227.4	砂岩	
第149図	139	敲石	P-9-14・-110cm	10.4	3.8	2.5	107.7	砂岩	
第149図	140	敲石	P-9-23・-100cm	12.4	4.8	3.6	386.9	凝灰岩	
第149図	141	敲石	P-12-7・-130cm	5.7	5.1	3.3	134.1	ホルンフェルス	
第149図	142	敲石	Q-10-21	9.8	5.3	4.3	262.4	安山岩	
第149図	143	敲石	O-11-16	13.0	6.0	3.6	536.4	凝灰岩	
第149図	144	敲石	O-11-14・-120cm	10.7	6.4	2.4	260.4	凝灰岩	
第149図	145	敲石	Q-10-14	9.2	6.4	3.2	288.8	安山岩	
第149図	146	敲石	O-11-15・-110cm	8.2	5.8	3.3	258.3	砂岩	
第149図	147	敲石	P-11-3・-90cm	9.1	7.3	4.2	171.6	砂岩	
第149図	148	敲石	Q-10-6	11.0	7.2	5.6	658.1	安山岩	
第149図	149	敲石	Q-8-3	8.7	5.0	1.9	126.1	砂岩	
第149図	150	敲石	P-10-8・-100cm	8.8	6.5	2.4	160.6	砂岩	

第9表 グリッド出土石器計測表(4)

図版	番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	備考
第149図	151	敲石	O-12-25 R直上	10.8	10.3	2	356	砂岩	
第150図	152	敲石	Q-10-3	5.5	5.6	3.5	146.7	砂岩	
第150図	153	敲石	P-9-5・-100cm	6	5.5	4.1	204.3	安山岩	
第150図	154	敲石	P-8-24・-100cm	6.3	6	3.2	177	安山岩	
第150図	155	敲石	O-12-23	7.3	6.6	4	293	安山岩	
第150図	156	敲石	O-12-22	7.1	6	4	243.7	安山岩	
第150図	157	敲石	O-12-22	8.4	8	5.7	585.5	安山岩	
第150図	158	敲石	P-8-18・-110cm	8.1	7.3	5.1	469.5	安山岩	
第150図	159	敲石	O-11-18・-90cm	8.5	6	3.9	304.2	安山岩	
第150図	160	敲石	P-10-2 R直上	8.4	7.3	4.9	539.6	安山岩	
第150図	161	敲石	Q-7-9	8.1	7	5.7	493.3	安山岩	
第150図	162	敲石	P-9-25・-120cm	9.7	8.1	5.4	655.2	砂岩	
第151図	163	敲石	P-9-3・-110cm	10.4	8.9	6.6	873.8	安山岩	
第151図	164	敲石	O-11-22・-130cm	10.7	7.9	5.1	640	安山岩	
第151図	165	敲石	P-10-21・-120cm	10.5	8.4	5.9	752	安山岩	
第151図	166	敲石	Q-11-19・-120cm	12.1	8.6	4.4	683.8	安山岩	
第151図	167	敲石	表採	10.5	8.5	4	471.6	砂岩	
第151図	168	敲石	P-12-8・-110cm	11.2	8.5	2.5	296.4	砂岩	
第151図	169	敲石	Q-7 No.7	12.6	11.1	7.1	1511.2	安山岩	
第152図	170	凹石	Q-11-15・-120cm	7.5	6.5	4.6	296.6	安山岩	
第152図	171	凹石	Q-9-1	9.5	6	2.8	214.6	安山岩	
第152図	172	凹石	Q-9-2	12.5	7.3	3.9	467.3	安山岩	
第152図	173	凹石	P-9-24・-150cm	10.6	6.1	2.7	232.3	緑泥片岩	
第152図	174	凹石	Q-8-10	9.6	7	3.4	327.2	安山岩	
第152図	175	凹石	Q-8-13	8.6	6.2	3.4	307.5	砂岩	
第152図	176	凹石	Q-8-4	7.5	8.8	3.4	242.4	安山岩	
第152図	177	凹石	P-9-22・-100cm	7.7	7.4	3.6	315.5	安山岩	
第152図	178	凹石	P-12-1・-110cm	8.4	5.8	3.7	294.3	安山岩	
第152図	179	凹石	P-9-7・-110cm	9.8	7.7	4.7	588.3	安山岩	
第152図	180	凹石	Q-11-24	10	7.7	4.9	711.1	閃緑岩	
第152図	181	凹石	Q-11-16・-120cm	5.9	6.1	5.4	251.9	安山岩	
第153図	182	凹石	O-12-22	10.3	6	4	373.3	安山岩	
第153図	183	凹石	P-8-21・-120cm	11.9	10.3	8.9	1285.8	安山岩	
第153図	184	磨石	Q-11-22・-120cm	13.3	4	2.7	216	安山岩	
第153図	185	磨石	Q-10 No.10	13.8	5.3	4.1	430.7	ホルンフェルス	
第153図	186	磨石	P-12-6・-110cm	2.9	1.8	1.2	1	軽石	
第153図	187	磨石	Q-8-8	4	3.6	2.2	31.5	軽石	
第153図	188	磨石	P-10-7・-120cm	6	5.4	4	37.9	軽石	
第153図	189	磨石	P-10-9・-100cm	4.8	3	3	36.7	安山岩	
第153図	190	磨石	Q-11-7・-120cm	5.4	3.5	3.4	93.4	閃緑岩	
第153図	191	磨石	P-11-18・-110cm	5.4	4.5	3.6	119.3	安山岩	
第153図	192	磨石	O-12-11 黒土	6	4	3.1	102.1	安山岩	
第153図	193	磨石	O-11-18・-90cm	6.2	4.6	3.6	139.4	砂岩	
第153図	194	磨石	P-10-25・-110cm	11.2	7.1	6.5	724.5	砂岩	
第153図	195	磨石	Q-10-9	12.9	10.4	2.8	462.6	安山岩	
第153図	196	石錐	P-10-25・-100cm	4.7	3.8	1	22.5	凝灰岩	
第153図	197	石錐	P-10-6 R直上	5.8	4.3	2	62.1	砂岩	
第154図	198	石皿	Q-7 No.6	27.8	12.7	8.8	3998.5	緑泥片岩	
第154図	199	石皿	R-9 No.1	19.7	14.7	7.7	2951	安山岩	
第154図	200	石皿	P-11-18・-110cm	20.9	17.9	4.7	2634.7	安山岩	

第10表 グリッド出土石器計測表(5)

図版	番号	器種	出土位置	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ	石材	備考
第154図	201	石皿	O-11 No6	23.4	19.4	3.6	1880.5	緑泥片岩	
第154図	202	石皿	P-10-6 R直上	15.3	10.4	7.0	979.7	安山岩	
第155図	203	石皿	Q-7	13.6	11.8	2.5	483.9	緑泥片岩	
第155図	204	石皿	Q-10-10・-110cm	9.2	8.9	5.9	498.0	安山岩	
第155図	205	石皿	P-12-8・-100cm	8.6	7.1	4.3	259.6	安山岩	
第155図	206	石皿	Q-7-3	10.7	10.4	6.3	572.5	安山岩	
第155図	207	石皿	O-12-24・-100cm	7.8	11.5	7.4	524.8	安山岩	
第155図	208	石皿	Q-11-3	10.7	13.8	3.1	572.4	安山岩	
第155図	209	石皿	Q-8-11	14.6	10.0	7.7	896.9	安山岩	
第156図	210	石棒	O-11-21・-100cm	8.3	3.9	2.6	112.5	緑泥片岩	
第156図	211	石棒	O-12 No29	6.2	3.6	3.3	77.2	頁岩	
第156図	212	石剣	R-11	2.0	3.6	2.1	115.3	緑泥片岩	
第156図	213	石剣	Q-9-15	10.3	4.1	2.8	218.0	緑泥片岩	
第156図	214	石剣	P-9-23・-130cm	8.1	4.6	1.8	81.2	緑泥片岩	
第156図	215	石棒	O-12-19	10.8	4.0	2.8	144.0	緑泥片岩	被熱
第156図	216	石剣	R-9-9 攪乱	11.7	4.1	2.8	207.6	絹雲母片岩	
第156図	217	石剣	Q-11 No1	14.5	3.5	1.8	156.3	緑泥片岩	
第156図	218	石剣	Q-11 No2	13.8	4.5	2.2	225.5	緑泥片岩	
第156図	219	石剣	P-9	10.5	7.7	2.7	260.3	緑泥片岩	被熱
第156図	220	石棒	Q-7 No2	10.9	2.3	1.9	76.3	緑泥片岩	
第156図	221	石棒	O-11-18・-80cm	6.3	2.4	1.6	29.3	緑泥片岩	
第156図	222	石棒	P-12 No2	10.5	3.8	3.7	228.4	絹雲母片岩	
第156図	223	石剣	O-12	9.5	3.5	1.9	87.4	絹雲母片岩	
第156図	224	石剣	Q-10 No7	13.8	4.5	1.9	195.2	絹雲母片岩	
第156図	225	石剣	O-11 No2	14.1	3.2	2.0	141.6	絹雲母片岩	
第157図	226	石剣	Q-7 No3	38.5	5.0	2.6	858.3	絹雲母片岩	未製品
第157図	227	石剣	Q-8-10	13.9	4.9	3.2	280.0	絹雲母片岩	未製品
第157図	228	石棒	O-12 No33	28.5	7.4	5.7	1457.4	緑泥片岩	未製品
第157図	229	独鈷石	P-8-19・-110cm	8.7	5.0	3.0	148.6	ホルンフェルス	未製品
第157図	230	独鈷石	P-11-24 R直上	11.8	6.5	3.2	268.0	砂岩	未製品
第158図	231	垂飾品	O-11-16・-80cm	1.5	0.9	4.0	0.8	滑石	
第158図	232	垂飾品	O-12 No13	1.3	1.0	1.0	2.0	滑石	
第158図	233	垂飾品	O-11-25 No1	1.4	1.4	1.1	3.3	滑石	
第158図	234	垂飾品	O-12 No13	1.2	0.6	1.3	1.2	滑石	
第158図	235	垂飾品	P-10 No10	1.1	0.7	0.6	0.6	滑石	
第158図	236	垂飾品	Q-8-4	5.0	3.1	0.6	11.6	凝灰岩	
第158図	237	垂飾品	O-12-11 黒色土	3.5	2.7	0.7	5.1	砂岩	
第159図	238	原石	P-11 No3	12.1	6.9	8.6	614.2	黒曜石	
第159図	239	原石	P-11 No4	7.0	9.0	6.3	340.3	黒曜石	
第160図	240	石核	O-12-16 黒土	2.7	2.3	2.0	12.5	黒曜石	
第160図	241	石核	P-9-1	2.2	4.1	1.8	14.3	黒曜石	
第160図	242	石核	P-11-9・-120cm	2.3	3.3	1.3	10.4	黒曜石	
第160図	243	石核	P-11-24・-120cm	3.7	4.6	1.3	21.2	チャート	
第160図	244	石核	O-12 No31	7.5	6.5	3.1	184.8	チャート	
第160図	245	石核	P-10-7・-100cm	2.0	2.6	1.7	13.9	チャート	
第160図	246	石核	O-12-25 R直上	3.9	5.5	2.7	79.9	チャート	
第160図	247	石核	P-10-8・-80cm	2.9	4.0	2.9	38.3	チャート	
第160図	248	原石	P-9-15 R直上	3.9	3.1	1.8	16.8	黒曜石	
第160図	249	原石	P-9-15 R直上	3.5	3.0	1.9	19.3	黒曜石	
第160図	250	原石	P-12-1・-100cm	4.7	2.4	2.0	22.5	黒曜石	

2 中近世の遺構と遺物

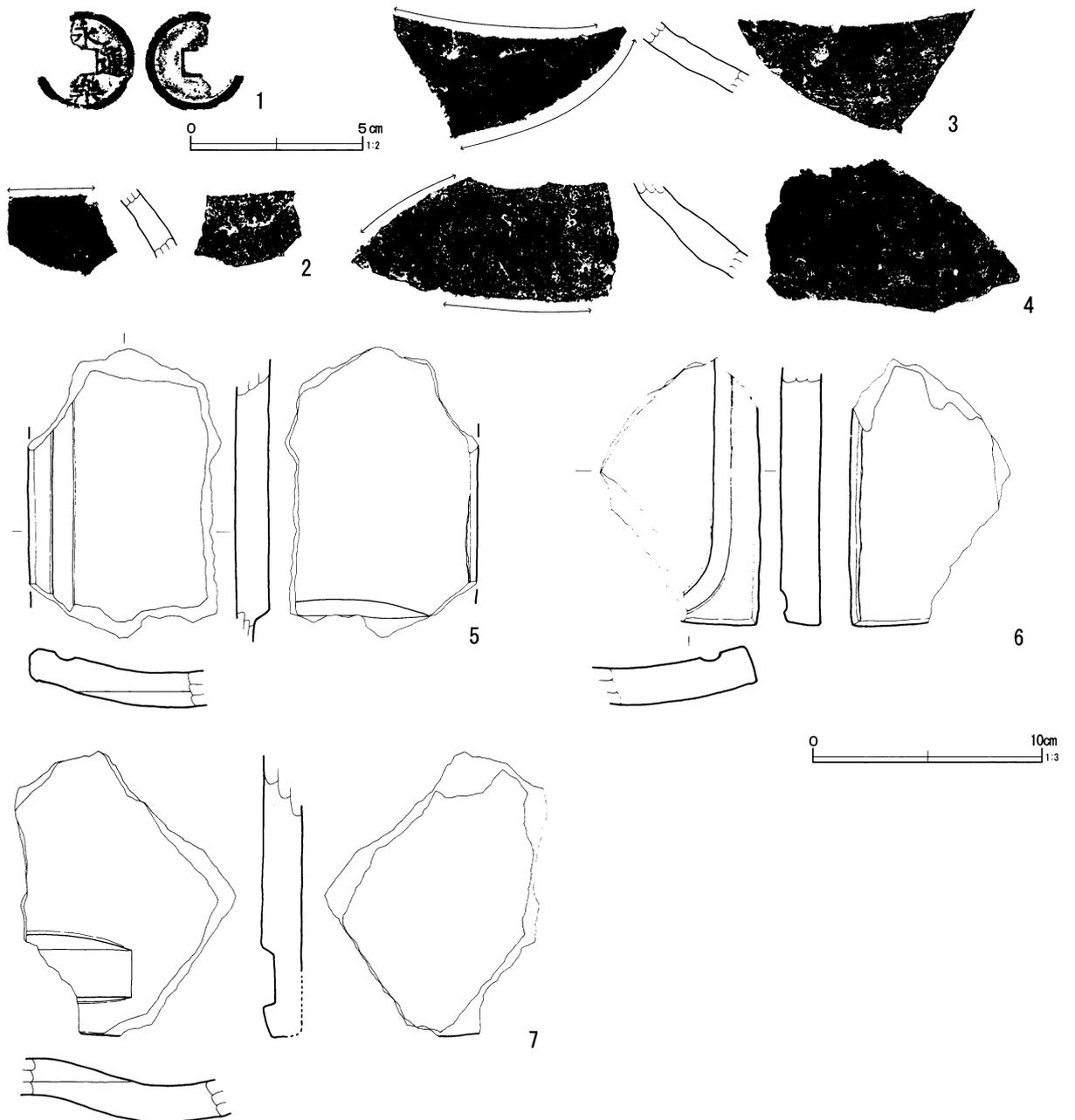
雅楽谷遺跡からは中世から近世にかけての遺物も出土している。

1は永楽通宝である。約3/4残存する。

2～4は常滑系の甕である。2は甕の胴部。灰釉が見られる。部位は不明であるが、破片を砥石として転用しており、1辺が摩耗している。3は甕肩部である。2同様に砥石に転用しており、2辺が摩耗している。4も甕肩部である。同様に砥石に転用し

ており、2辺に部分的な摩耗が見られる。

5～7は瓦である。全体的に赤味がかった色調と均質な胎土から近世のものと推察される。5・6は棧瓦であり、5は上面に縦走する溝が見られ、裏面に横走して切り込んである溝が見られる。6は上面の縁辺を隅丸形に溝が巡っている。7の形状は不明であるが、棧瓦の一種と思われる。上面に横走る切り溝が見られる。



第 161 図 中近世出土遺物

V まとめ

(1) 雅楽谷集落の変遷

雅楽谷遺跡に係る発掘調査でこれまでに検出された遺構は、以下のとおりである。

竪穴住居跡	8軒
竪穴状遺構	2基
土壇	49基
炉跡	2基
土器埋設遺構	5基

4000 m²に満たない非常に限定された範囲の調査ではあるが、これまでの発掘結果をもとに雅楽谷集落の変遷を概説してみる。

称名寺式期以前：遺構は存在せず、少量の遺物が散布する程度である。

今次調査では、調査区東端の渡り廊下部分で中期の遺物が採集された。中期後半～末を主体としており、台地奥部に集落が存在する可能性がある。

盛土中から中峠式期の大形把手2点のみが出土した。特異な出土状況であり、川里町赤城遺跡の祭祀遺物集中地点における中期の把手類の出土との関連が伺える。

堀之内式期：集落の開始期。盛土の形成が始まっているかもしれない。

堀之内1式期には、昭和50・51年度遺跡調査会発掘地点（以下、調査会地点）で土壇の造営が開始される。今次調査地点では遺物が散布するのみであった。

堀之内2式期になると調査会地点で竪穴住居跡が出現する。また、土壇の分布が今次調査地点にまで拡大する。

遺構数は竪穴住居跡1軒・土壇10基である。

加曾利B式期：竪穴住居跡を中心に、遺構数が最も増加する時期。遺構の時期は加曾利B1式が主体で、新しくもB2式の古段階に留まるものとみられる。

竪穴住居跡の分布は、調査会地点南西隅に特に集

中し、盛土の最高位から窪地への斜面にかけて密集するものとみられるが、やや南外周寄りである今次調査地点においても散漫な分布がみられる。

住居跡が切れる部分にあっても土壇・埋甕等が検出され、本来竪穴住居跡を構成したであろう炉跡が検出される等、環状盛土の範囲のほぼ全体に集落の範囲が拡大している様子が見て取れる。

この段階で盛土の構築が行われていることはほぼ確実といえる。

遺構数は、竪穴住居跡4軒・竪穴状遺構2基・炉跡1基・土壇8基・土器埋設遺構3基である。

炉跡については柱穴等の施設が確認できなかったが住居跡の可能性が高い。竪穴状遺構については大型の土壇の可能性もあり、祇園原貝塚等にみられる多遺体埋葬施設との関連も予想される。

その後、曾谷式期にかけての遺構は発見されていない。盛土中から遺物は出土するため、何らかの活動が行われている可能性は高いが、居住形態が変化するか、あるいは集落内における居住スペースの移動が想定し得る。

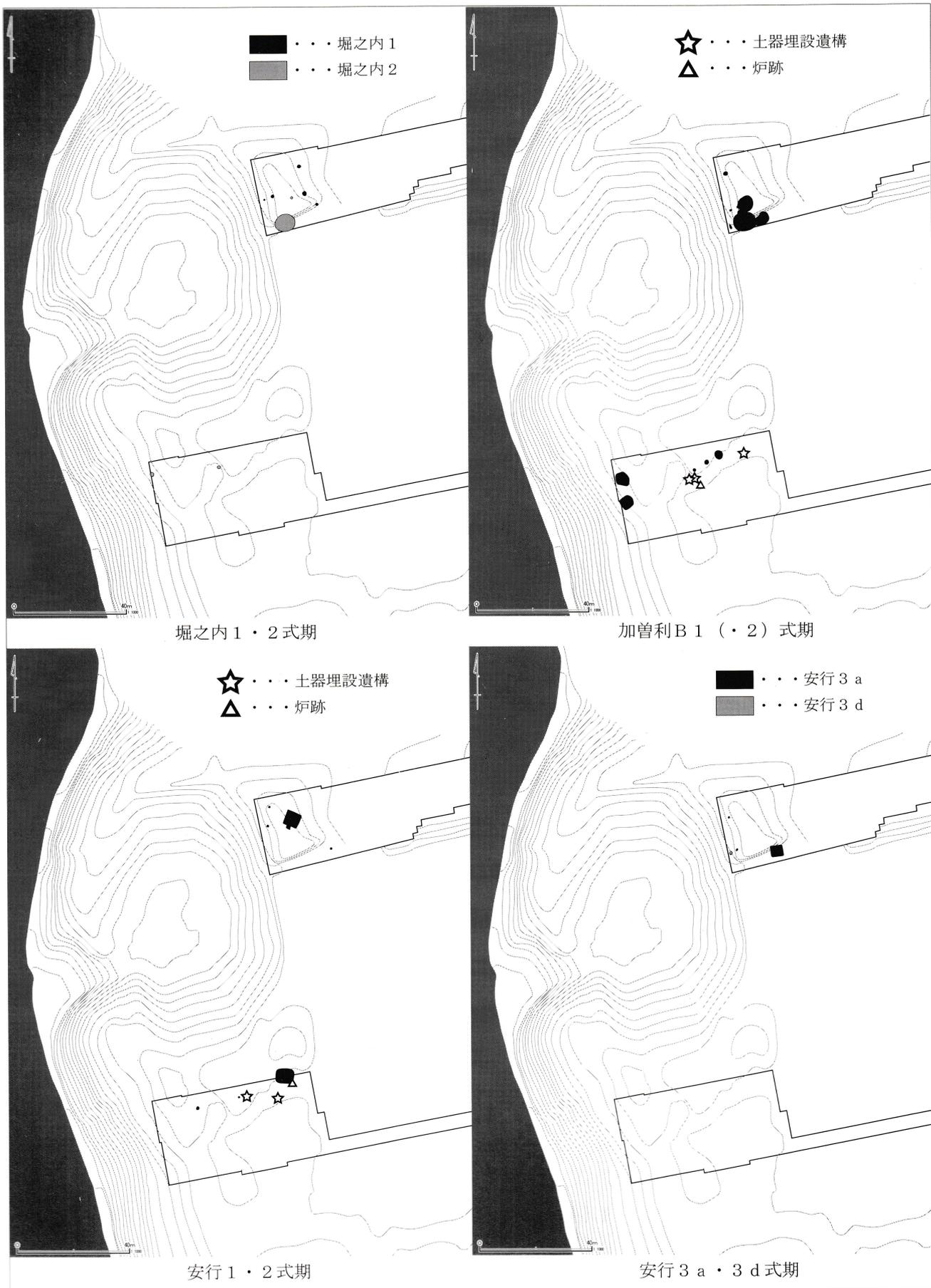
後期安行式期：再び竪穴住居跡が出現する。

住居跡の分布はふたたび馬蹄形奥部に偏るが、その他の遺構は相変わらず盛土全体に散っている。2基見つかった土器埋設遺構は、前段階とくらべ小規模な掘り方に、完形に近い土器を埋設するものである。この場合、「完形土器を出土する小型の土壇」との違いはかなり曖昧となる。

遺構数は、竪穴住居跡2軒・炉跡1基・土壇6基・土器埋設遺構2基である。

晩期安行式期：調査会地点で若干の遺構が確認されたのみで、今次調査地点から確実にこの時期に属する遺構は検出されていない。

やはり居住形態の変化ないし居住域の移動が想定



第 162 図 雅楽谷遺跡集落変遷図

されるが、盛り土中に構築された遺構を見落とした可能性も高く、各時期の遺物も安定して出土していることから、相変わらず生活の場として機能していたものと考えべきだろう。

特に今次調査では、盛土上面を覆う黄褐色土中から安行3c式以降の土器の出土が顕著であった。このことから盛土の形成そのものは晩期中葉まで続いていることが明らかである。

遺構は竪穴住居跡1軒・土壇4基が検出されたが、そのほとんどは安行3a式期のものである。

晩期後半以降については、調査会地点で変形工字文を持つ土器群が出土しているものの、その量は僅少であり、盛土の形成もほぼこの時期には終了していると考えべきだろう。

以上のように、雅楽谷遺跡の環状盛土遺構の形成は、遅くとも縄文時代後期中葉、恐らくは後期前葉から開始され、晩期中葉までで終了しているものとみられる。各時期の遺構の分布状況から、地点ごとに若干の時期差を持っていることが考えられる。

遺構数から見た集落の盛衰は、後期中葉の加曾利B1式(～B2式)期と、安行1～2式期にそれぞれピークを持つものとみられ、とくに前者の遺構数が卓越している。

出土遺物としては圧倒的多数の粗製土器を含む土器片と生活用具としての石器が中核をなし、生活の場としての性格が顕著であるようだ。

寺野東遺跡の発掘調査以降、江原英氏による環状盛土遺構の研究が精力的に進められ、これに伴って

(2) 土壇

これまでに検出された土壇のうち、時期が判明しているものを第163図に集成した。上段から順に、堀之内式期／加曾利B式期／後期安行式期／晩期安行式期である。図中「調」は、遺跡調査会調査地点を意味する。

さまざまな規模・形態の土壇が存在するが、ここでは大掴みに以下の3類型で把握してみる。

類例の調査・報告が関東一円で増加している。

こうした中で、従来環状・馬蹄形貝塚や、谷奥・窪地周囲に占地する集落とされたものの中からも環状盛土遺構とみられる類例の再発見が相次いでいる。

その一方で、阿部芳郎氏はじめ東関東貝塚地帯における後晩期遺跡研究の流れから、盛土行為を過大評価する風潮に慎重な意見も提示されているが、両者は決して相反する立場ではない。

上高津貝塚では電磁波探査の結果、中央窪地部分に埋没谷の存在が明らかになった。一方、加曾利南貝塚における地下探査の結果では谷地形等は検出されず、宙水による天然の窪地形成の前提となる不透水層も発見されなかった。

雅楽谷遺跡でも、現地表との高度差が盛土部分より窪地部分において際立っている点や、低地寄りに開口部を持つ馬蹄形の地形から、盛土造成の前提となる自然地形の存在が予想されたが、ローム層の断面観察の結果からは、埋没谷や窪地の存在を積極的に裏付ける結果は得られていない。

中央窪地部分の調査がまったく行なわれていない現状では確定的なことは言えないが、なんらかの旧地形を足掛かりに盛土の形成が開始されたにせよ、そこには積極的な人為の介在を想定せざるを得ないだろう。

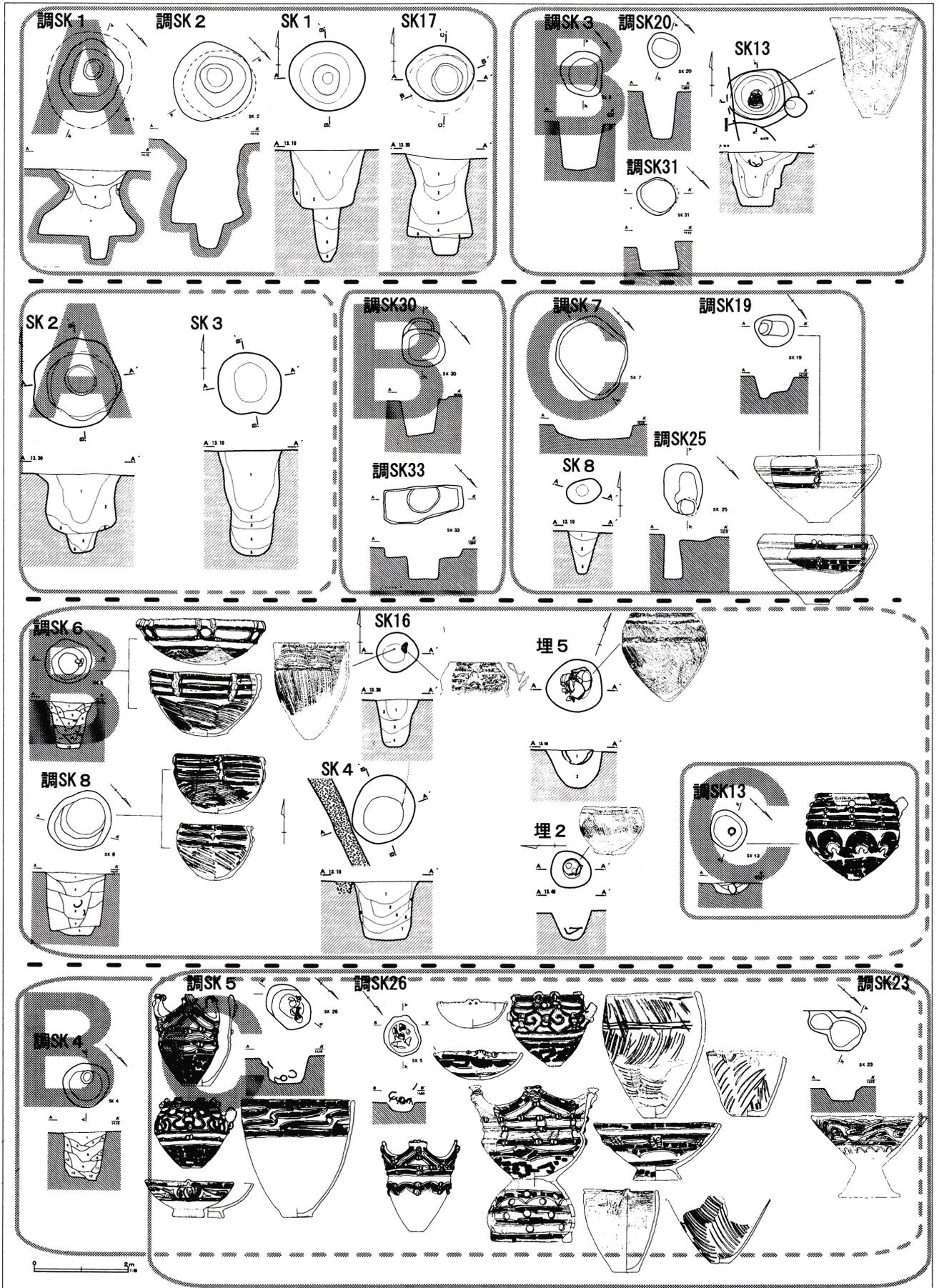
前述したように、晩期中葉段階で多量のロームの移動が観察されるため、この時期に窪地の形成が本格化している可能性が高い。

A類：袋状・フラスコ状の大形の土壇で、底面に柱穴状のピットを伴い、全体の深度が2mを超えるもの

B類：深度が2mを超えないが、底面平底で口径より深度が卓越する柱穴状の土壇

C類：A・B類に含まれない雑多な土壇

以下、もとより限られた件数ではあるが、類型と



第163図 土壤集成図

遺物の出土状況に留意しつつ、各時期ごとの傾向を見ていくことにする。

堀之内式期

調S K 2・調S K 3・調S K 31は堀之内1式、他は堀之内2式である。調S K 1は加曾利B 1・安行2式を出土しているが、「形態から堀之内期」として報告されているものだ。

A類とB類が数のうえで拮抗し、特に柱穴様ピットを伴うA類はもっとも多く存在する。

B類では完形深鉢を出土したS K 13が目を引き、検出面近いレベルからの出土である。

加曾利B式期

時期的には加曾利B 1式から、新しくもB 2初頭までの範囲に収まるものである。

確実なA類はS K 2のみであるが、段構造が不明瞭ながら大規模なS K 3についてもひとまず本類に含める。

A・B類は2例ずつ検出されているが、前段階から一転して不定形のC類が大きな比率を占めている。遺構数、とりわけ竪穴住居跡の軒数が増大する時期であり、S K 8・調S K 25などは建物跡に伴う柱穴ピットである可能性もある。

調S K 19の出土遺物は鉢の大破片で、出土状況は不明ながらも覆土中からの出土である。

後期安行式期

B類の比率が一気に増大する。盛土の形成が相当程度進んでいることが考えられ、掘込みの浅さからC類に分類した調S K 13も底面付近で検出に至ったB類と考えるべきかも知れない。

B・C類において復元個体の出土が顕著である。S K 16の出土土器のうち粗製深鉢は検出面付近での出土で、注口土器の大破片が覆土下層からの出土である。

なお、第2・5号土器埋設遺構もB類の土壌に含めるべきであるかも知れない。

晩期安行式期

調S K 23が安行3 d式期、他は全て安行3 a式

期である。

明確なB類は1例のみで、残るすべてをC類に分類した。ただし前段階と同じ理由で、大半がB類に含まれる可能性もある。調S K 26は遺物の垂直分布からみてもB類に含めるべき事例かもしれない。

平面形ではB類とC類の差は僅少で、加曾利B式段階のありかたとは明らかに異なっている。

前段階に引き続き、復元個体の一括出土の事例が目立っている。前段階を上回る量の土器が覆土下層にまとまって出土する。

集落の全時期を通じ、土壌の組成の遷移を概観すると、後期安行期を境としてA類が減少し、複数個体の土器を一括出土するB・C類が増加する傾向を指摘することができる。

そこで、調S K 5・調S K 6・調S K 26等の出土状態を副葬と仮定した場合、地点を替えつつも全体として一定数が存在し続けるB類および一部のC類（平面形がB類に近いもの）は、埋葬施設と考えられる。

では、底面ピットを持つA類をどう考えるべきか。ここで想起されるのが、東関東貝塚地帯における後期前葉の多遺体再葬土壌の存在である。

祇園原貝塚等で注目されたこの種の遺構は、大形の土壌や小竪穴に複数の遺体を二次埋葬するもので、再葬習俗の一環をなすものである。

雅楽谷遺跡における後期前葉～中葉段階の葬制を、B類＝一次埋葬→A類＝二次・集中埋葬と仮定した場合、安行期の副葬品を伴うB類は（改葬を伴わない）単独埋葬を前提としたありかたとみることができ、ここに後期後葉を境とした葬制の変化を想定することが可能となる。

むしろ、後期前・中葉段階の土壌組成を、二次・集中埋葬と単純埋葬の共存とみることも可能である。また、権現原貝塚等でA類に集中埋葬する事例が存在するのは明らかであっても、そのことがすなわち、全てのA類が二次埋葬施設として掘られたことを意味しないのは言うまでもない。むしろ、役目を終え

た貯蔵穴の廃絶形態のバリエーションとして集中埋葬施設への転用が存在した可能性も高いのである。

この場合、安行期においてA類を必要としなくなった食料貯蔵戦略の変化までを視野に入れてなんらかのストーリーを構築する必要が生じる。

赤山遺跡等の大規模な堅果処理施設に暗示される、ドングリ類の集中的な加工および供給のシステムが整ったことで、世帯（小集団）ごとに未加工のドングリ類を一次貯蔵する必要が薄まった、等といった風にある。

以上、雅楽谷遺跡における限られた事例をもとに論じてきたが、後～晩期における土壌の組成の変遷を、葬制と生業を巡るシステムの変容として再構成する試みには一定の意義があると考えられる。

(3) 加曾利B 1 式土器

今次調査で出土した土器のうち、遺構単位でもっともまとまった資料は第1号竪穴状遺構である。図化可能なものだけで9個体からなる土器群で、大半が縄文施文の粗製土器であるが、時期判定可能なもの4点を含んでいる。

また、第3・4号土器埋設遺構は個別の遺構として登録されたものであるが、ほりかたが近接し、口縁のレベルを共有していることから一連の遺構であり、時期を同じくする資料と考えることができる。

これらはいずれも後期中葉加曾利B 1 式期のものと考えられる。

* 第1号竪穴状遺構出土土器

竪状1-1および2は3単位突起の波状口縁深鉢で、胴部に加曾利B 1 式に特徴的な横帯文を有するものである。

いずれもゆるやかなカーブを描いて内湾しつつ立ち上がる紡錘形のプロポーションで、波頂部に立体的な山形突起を配している。

口唇の断面は、B 1 式古段階に特徴的な外削ぎ状ではなく、緩い角度の「く」の字形を呈し、比較的時間延びた印象を受ける。

縄文時代後・晩期は、中期的な集落形態（＝ライフスタイル）の崩壊後、新たな集落形態を模索する再構築の時期と評価することができる。

環状盛土遺構の強烈な印象によって、ともすれば単一のイメージで語られがちな後・晩期集落も、（たとえば竪穴住居と掘立柱建物跡の使い分けに顕われる居住形態の変動をみてもあきらかなように）小時期ごと・地域ごと、さらには集落ごとに戦略の違いにもとづく個性が存在するであろう。

後・晩期集落に関わる調査例の増加と新たな問題意識の発生によりデータの集積が進んだ現在、集落のライフサイクルという視点から全体を再構成していく必要があると考える。

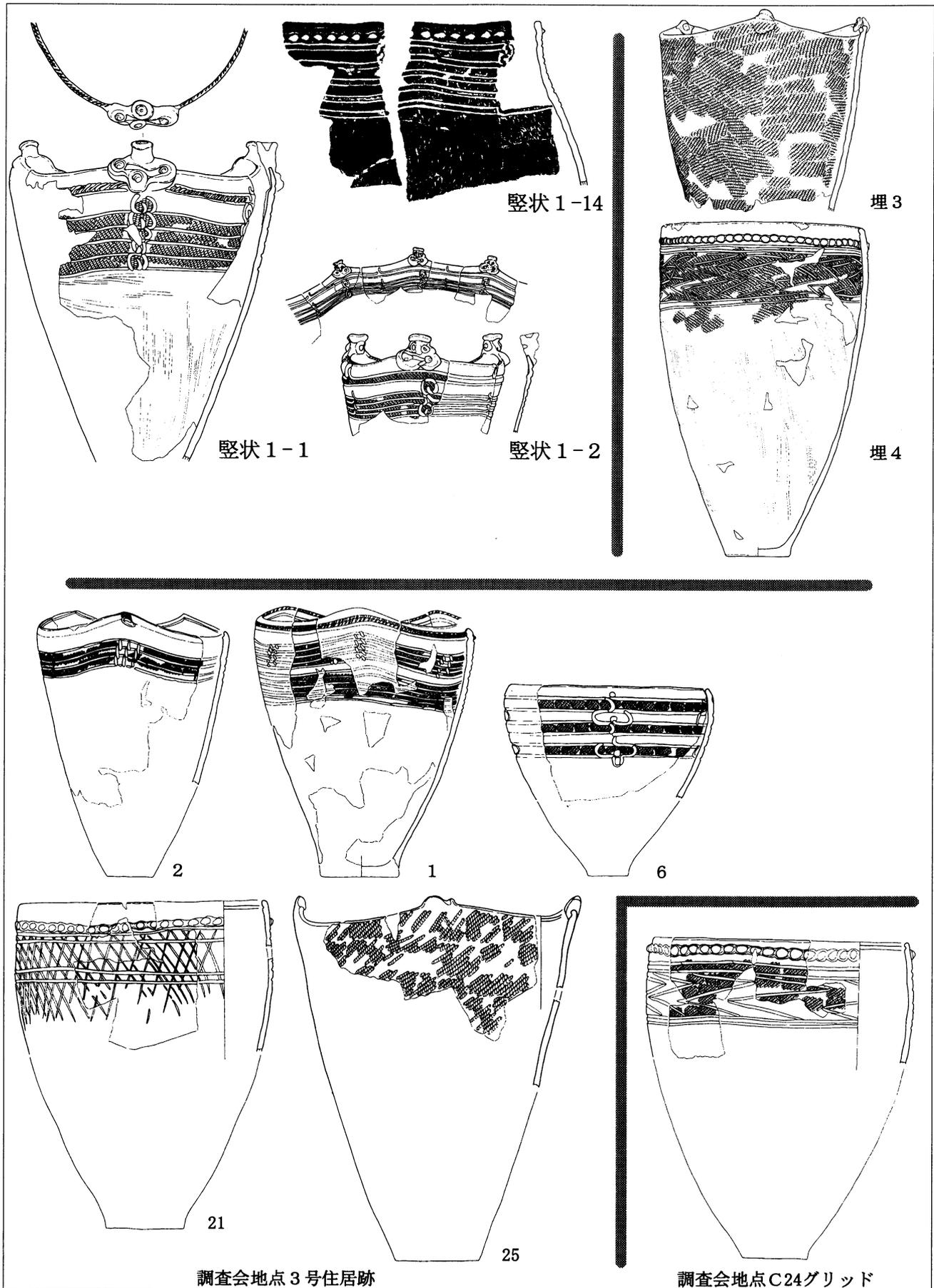
口縁下には平行沈線が巡って胴部との境を区画する。この平行沈線は、波底部で交差区切り文を構成する。平行沈線間には、1では斜位の単沈線が巡り、2では縄文が施文される。

このため、特に縄文施文の2では胴部の横位平行沈線文との親縁性が明確になっている。1についても若干印象は異なるものの、区切り文の存在等から同様の意図を読み取ることが可能である。

波頂部下の横位平行沈線間では地文縄文上に単位文（2では交差区切り文も）が重畳する。この単位文は「の」の字状の単位文に由来するものでありながら、描出方法として左右分かち描きの対弧線に近いものとなっている。

さらに、前述の（一種の横帯文と化した）口縁下の平行沈線との間を単位文によって連結することにより、あたかも二つの文様帯を対弧状の単位文によって分割したかのような構成を取っている。

14は、これらに共伴した半粗製土器である。口縁下に1条の紐線文が巡り、半截竹管による横帯文が描かれ、同一工具によるコンパス状の蛇行懸垂文が垂下する。胴張りで口縁直立する広口壺形のプロ



第 164 図 雅楽谷遺跡出土土器 (抜粋)

ポーションは東関東加曾利B2式を構成する遠部3類土器を連想させるが、頸部の屈曲が弱く、胴部から口縁にかけてなだらかなS字状のカーブを描く点が若干異なっている。

これらと同時期の資料として、雅楽谷遺跡の埼玉県遺跡調査会調査地点3号住居跡（以下、調査会地点S J 3）を挙げた。

山形突起を持たず、口唇断面は伝統的な外削ぎ台形。「の」の字崩れの単位文は6の浅鉢に見ることができるのみで、深鉢では2～3個一単位の縦切りの区切り文が主体となる等の差異はみられるが、これらは同時期内の系統差であろう。

1や6では文様帯の多帯化が生じている。また、複列化する区切り文は、左右分ち描きの単位文と同様、加曾利B2式段階の対弧文生成への流れとして評価することができる。

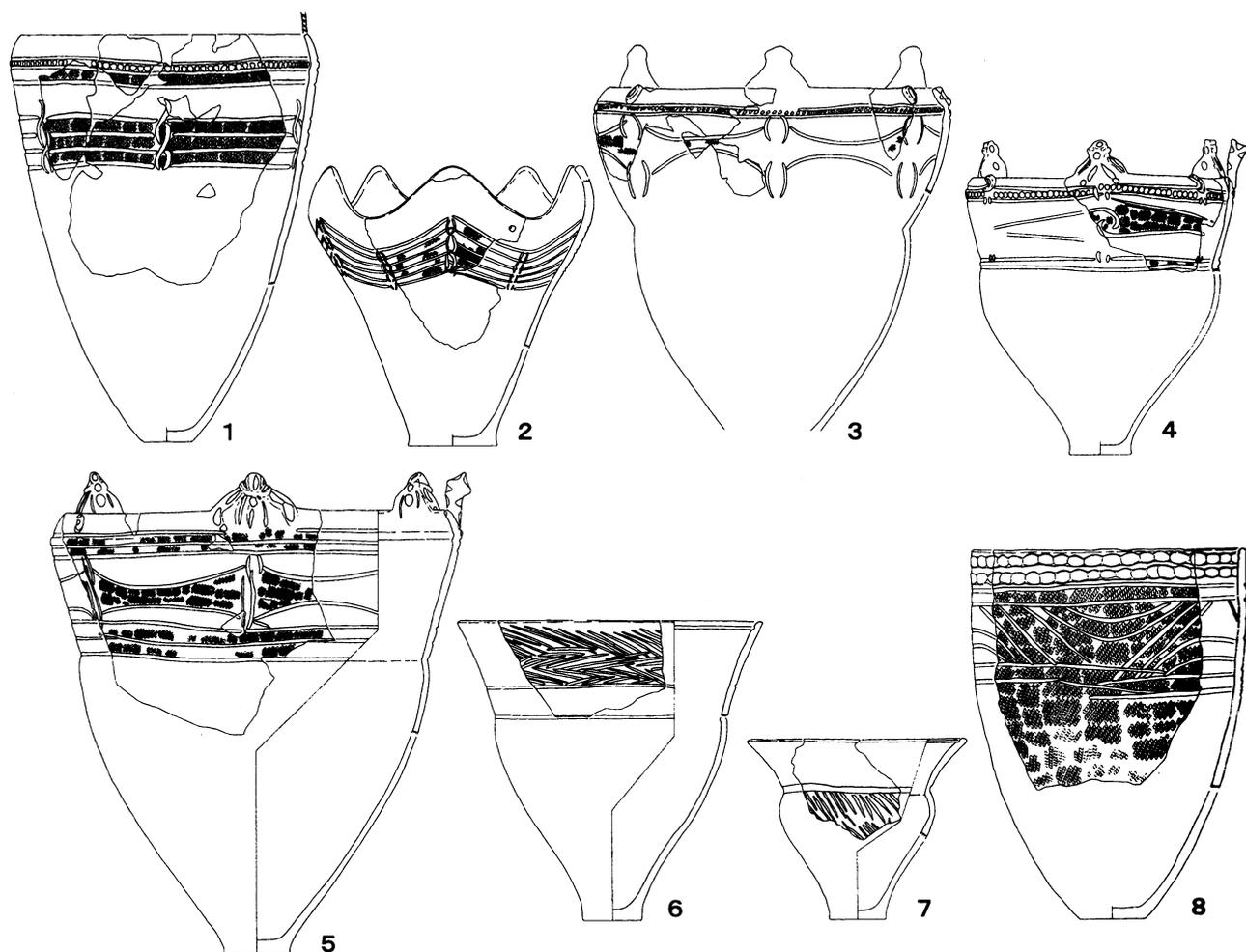
*第3・4号土器埋設遺構

埋3は3単位山形波状口縁の土器である。波頂部内面に円形の貼付文を持ち、口縁内面に沈線を巡らせる他には文様を持たないが、内面貼付文上に配される大振りの盲孔に竪状1-1の突起との類似を見ることができる。

埋4は口縁下に紐線文、胴上半部に横帯文を持つ。横帯文は上下を2条の平行沈線で区画し、内部に扁平な鋸歯状の沈線を充填している。

この鋸歯文を格子目状沈線に置き換えた土器が前述調査会地点S J 3の21であるほか、まったく同じモチーフの土器が調査会地点C 24グリッドからも出土している。

このことから、雅楽谷遺跡にあってはこの種の鋸歯文が、半粗製土器の主モチーフとして定型的に存在していたことがわかる。



第165図 石神貝塚第13次調査包含層

これら土器埋設遺構の土器についても調査会 S J 3 と同時期のものと考え。これは我孫子編年の III 期、秋田編年・新屋編年の加曾利 B 1 新段階に属するものであろう。

今回遺構単位で出土した土器群はいずれも浅鉢の資料を欠いているが、遺構外出土の第 63 図 133・134 がこれを補う可能性がある。

これに先行する資料は遺構単位の資料としては出土しなかったが、第 62 図 119・121・122、第 63 図 136・137 等を充てることのできるだろう。

これに後続して、かつ系譜的にも連続した資料として、第 165 図に石神貝塚第 12 次調査の包含層出土の土器を挙げた。

伝統的な横帯文土器 1 に、この時期あらたに組成に追加される、括れを持つ 3 単位突起深鉢 3～5 が共存し、さらに 1 と共通の横帯文を持ちながらも、東関東における次段階の 5 単位大波状口縁への萌芽をみせる 2 が存在するものと思われる。

引用・参考文献

- 秋田かな子 1996 「南関東西部の加曾利 B 式土器」
『第 9 回縄文セミナー 縄文後期中葉の諸問題』縄文セミナーの会
- 安孫子昭二 1994 「瘤付土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器 II』雄山閣
- 安孫子昭二 1998 「加曾利 B 式土器資料」『奈良国立文化財研究所史料 第 49 冊』
- 阿部芳郎他 2000 「座談会 遺跡研究の目的と方法を考える」『駿台史学 第 110 号』
- 阿部芳郎他 2004 「縄文時代後・晩期における谷奥型遺丘集落の研究」『駿台史学 第 122 号』
- 新屋雅明 1988 『赤城遺跡』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 74 集」
- 新屋雅明 1997 「蓮田市久台遺跡の調査」『埋文さいたま 第 27 号』
- 新屋雅明 2000 『石神貝塚 II』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第 254 集」
- 新屋雅明 2004 「埼玉周辺の晩期中葉の様相」
『第 17 回縄文セミナー 晩期中葉の諸問題』 縄文セミナーの会
- 池上啓介・大給 尹 1936 「千葉縣東葛飾郡鎌ヶ谷村中澤貝塚發掘報告」『史前学雑誌 8-4』
- 岩槻市教育委員会 1983 『岩槻市史』「通史編 1」
- 上野修一 1995 「大畑系列」土製耳飾小考
『みちのく発掘 - 菅原文也先生還暦記念論集 -』菅原文也先生還暦記念論集刊行会
- 江原 英 1999 「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」
『研究紀要 第 7 号』 栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

7 は遠部 2 類集合沈線文土器、6 は同類に特徴的な矢羽根状の集合沈線文を口縁部に配した深鉢で、西関東的な加曾利 B 3 式へと引き継がれる器種である。

遠部 2 類については、菅谷通保氏が加曾利 B 2 式の中では中段階以降に生じるものとされ、鈴木正博氏は B 1 式に後続する土器群から遠部成立以前とされるものを分離し、加曾利 B 1 - 2 式を設定された。また、大塚達朗氏はこの部分までを加曾利 B 1 式に含められている。

一方で、括れを持つ 3 単位突起深鉢が成立する段階ですでに共伴するという安孫子昭二氏・新屋雅明氏の指摘が存在する。

ここでは前述第 4 号土器埋設遺構出土土器における鋸歯文を遠部 2 類の祖型のひとつとする立場から、第 165 図の土器群をほぼ単一時期の一括資料として呈示した。前述堅状 1 - 14 の広口壺形土器の存在も、これを裏付けるものとする。

- 江原 英 2001 「環状貝塚・環状盛土遺構」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 大塚達朗 1983 「縄文時代後期加曾利B式土器の研究(1)」『東京大学文学部考古学研究室紀要2』
- 奥野麦生 1998 『前田遺跡』「白岡町埋蔵文化財調査報告書 第9集」
- 貝塚爽平・杉原重夫 1976 「加曾利南貝塚の地理」『加曾利南貝塚』中央公論美術出版
- 角田祥子 2000 「土製耳飾り 観察の視点」『東国史論 第15号』群馬考古学研究会
- 金成南海子・宮尾亨 1996 「土製耳飾りの直径」
『國學院大學 考古学資料館紀要 第12輯』 國學院大學考古学資料館
- 近森 正他 1983 『佐倉市吉見台遺跡発掘調査概要Ⅱ』
- 埼玉考古学会 1992 「シンポジウム 縄文時代後・晩期安行文化」『埼玉考古 別冊4』
- 設楽博己 1983 「土製耳飾」『縄文文化の研究9 縄文人の精神文化』 有山閣
- 縄文セミナーの会 1996 『後期中葉の諸様相』「第9回縄文セミナー」
- 縄文セミナーの会 2001 『後期後半の再検討』「第14回縄文セミナー」
- 白岡町教育委員会 1983 白岡町史資料2 「原始・古代Ⅰ」
- 白岡町教育委員会 1989 『白岡町史』「通史編 上巻」
- 菅谷通保 1996 「南関東東部後期中葉土器群の様相」
『第9回縄文セミナー 縄文後期中葉の諸問題』 縄文セミナーの会
- 鈴木正博他 1980 『太田区史(資料編) 考古Ⅱ』
- 鈴木徳雄 1990 「称名寺・堀之内1式研究の諸問題」
『第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 高橋龍三郎 2004 『縄文文化研究の最前線』 早稲田大学
- 谷籐保彦 1998 「土製耳飾りの研究の視点」
『列島の考古学 渡辺誠先生還暦記念論集』 渡辺誠先生還暦記念論集刊行会
- 千網谷戸遺跡発掘調査会 1978 『千網谷戸遺跡発掘調査報告』 千網谷戸遺跡発掘調査会
- 中村良幸 1979 『立石遺跡』「大迫町埋蔵文化財報告第3集」
- 中村良幸 1979 『小田遺跡発掘調査報告書』「大迫町埋蔵文化財報告第4集」
- 橋本 勉 1984 『久台』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第36集」
- 橋本 勉 1985 『ささら(Ⅱ)』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第47集」
- 橋本 勉 1990 『雅楽谷遺跡』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第93集」
- 橋本 勉 1991 「雅楽谷遺跡低地部出土の縄紋式土器」『埼玉考古 第28号』
- 蓮田市教育委員会 1999 『蓮田市史』「考古編」
- 元井 茂・新屋雅明 1997 『石神貝塚』「埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第182集」
- 山内清男 1939 『日本先史土器図譜第Ⅲ輯 加曾利B式土器(古)』 先史考古学会
- 山内清男 1939 『日本先史土器図譜第Ⅳ輯 加曾利B式土器(中)』 先史考古学会
- 渡辺清志 2004 『情報 25』「蓮田市雅楽谷遺跡の調査」